

鹿児島大学医学部二十五年史



鹿児島県立医学専門学校バッジ



帽子記章



襟章



襟章





(初代医科大学長)  
高 安 慎 一



(第二代医科大学長)  
大 平 得 三



高安慎一先生之像



(第三代医科大学長)  
町野碩夫  
(現鹿児島大学長)



繩田千郎名誉教授



佐藤幹正名誉教授



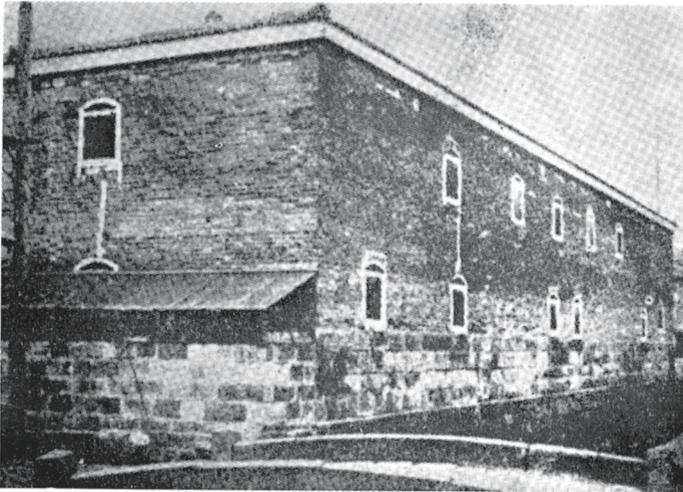
高安晃名誉教授



(現医学部長)  
佐藤八郎



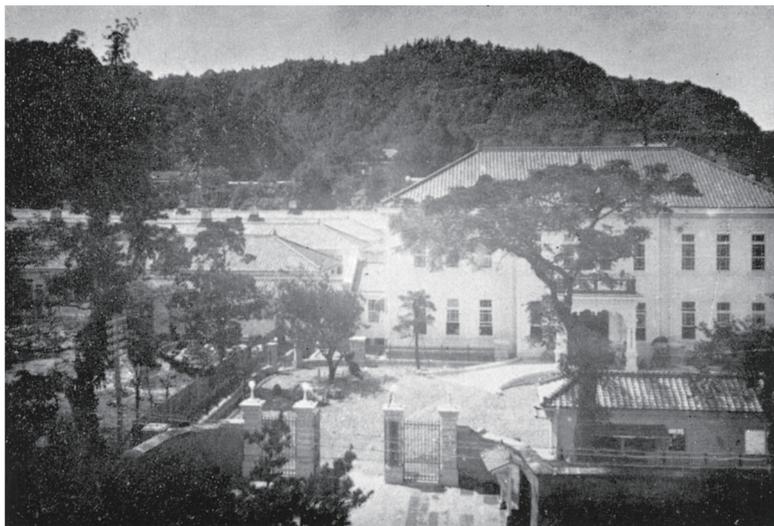
ウイリアム・ウリス



赤倉病院



医専開校当時の仮校舎



医 専 病 院



鳴池時代医専、医大正面玄関



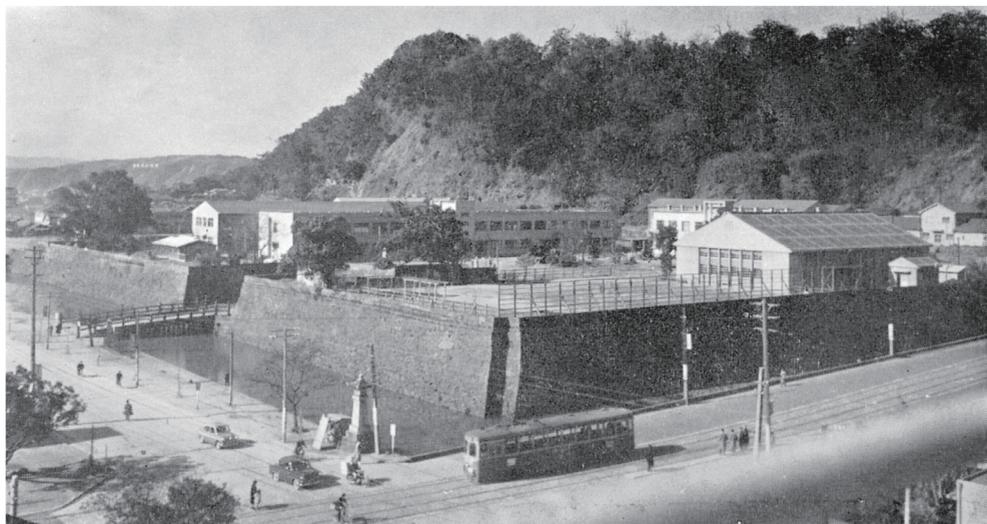
戦災後の医専病院



現在の医学部と附属病院



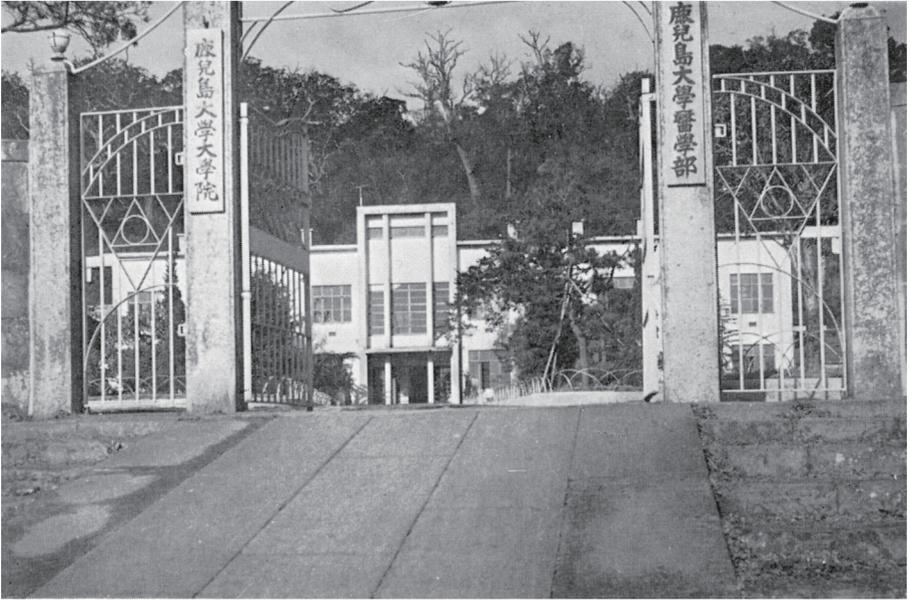
現在の医学部と附属病院



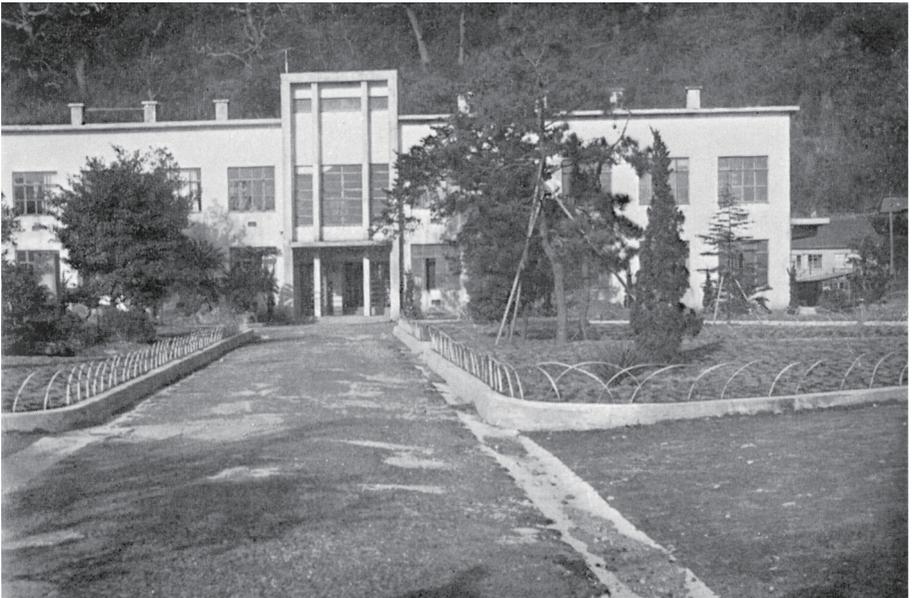
城山を背にした鶴丸城跡の現在医学部



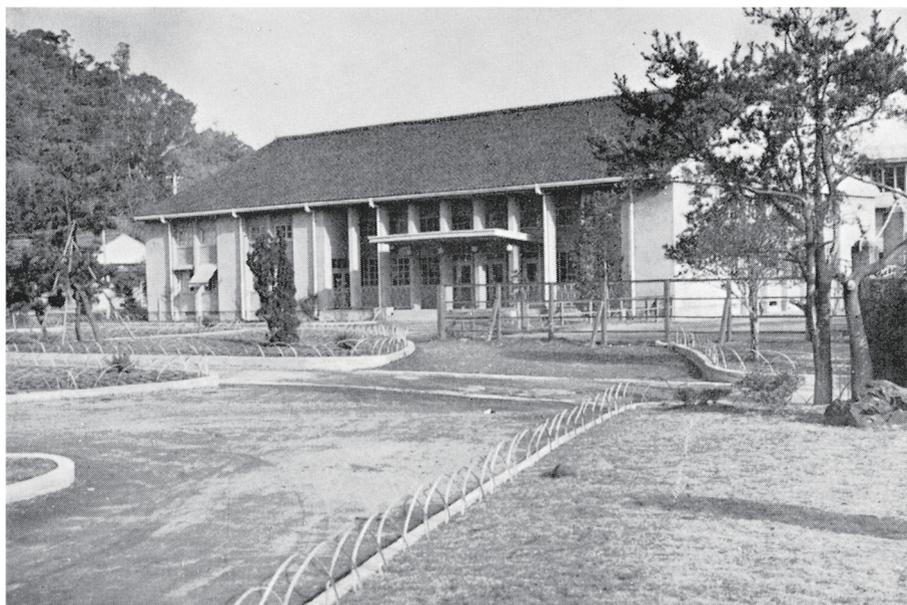
城山から望む医学部管理棟および基礎医学研究棟



医 学 部 正 門



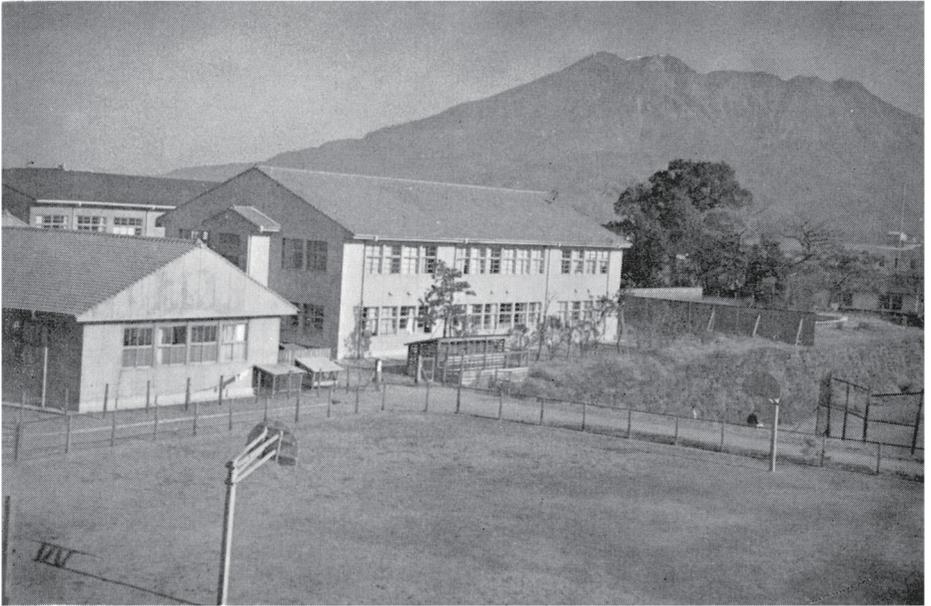
医学部事務部及び図書分館



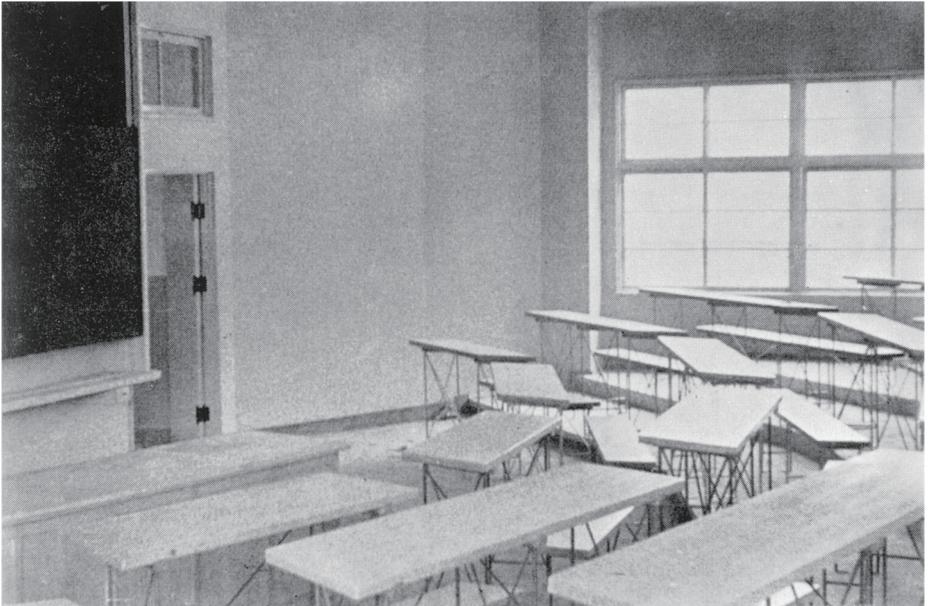
医 学 部 講 堂



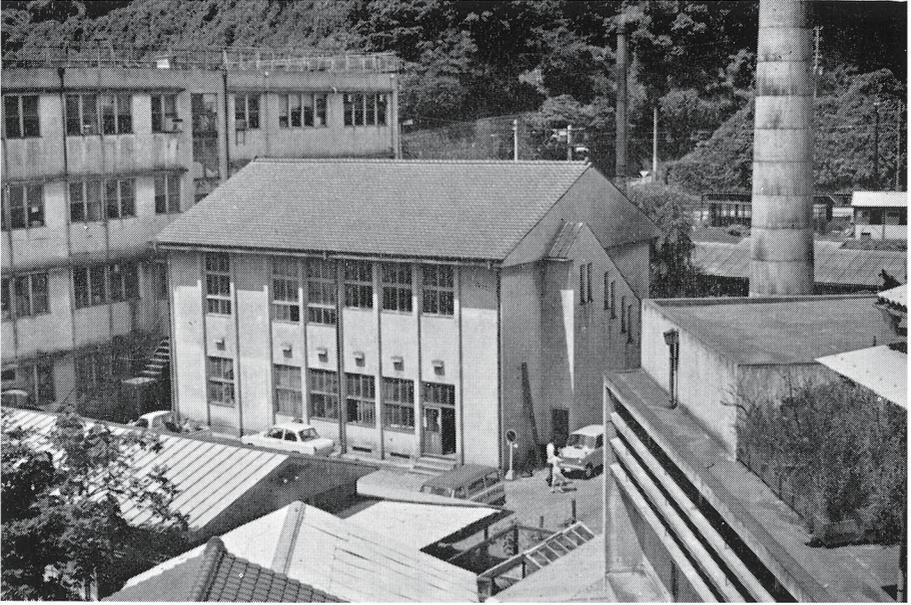
医 学 部 基 礎 医 学 第 一 研 究 棟



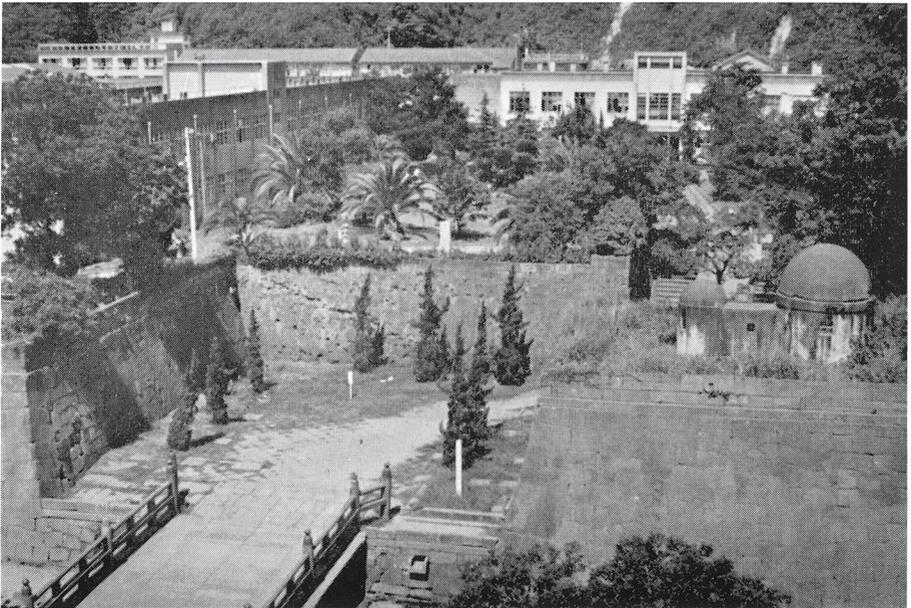
桜島を眼前にした医学部基礎医学研究棟一部



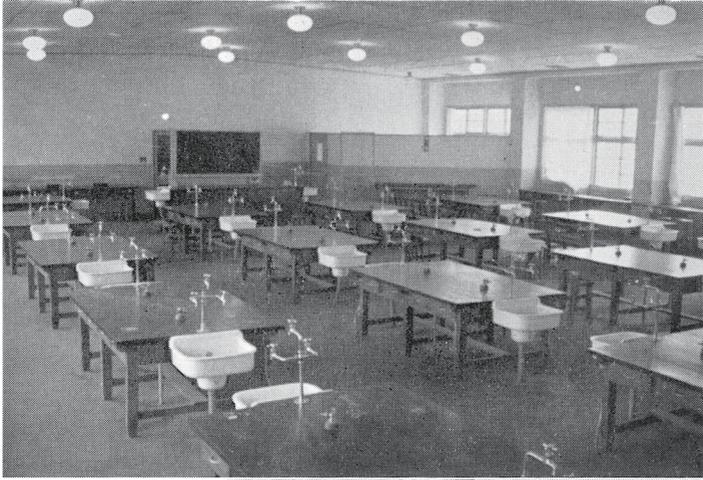
医学部学生講義室



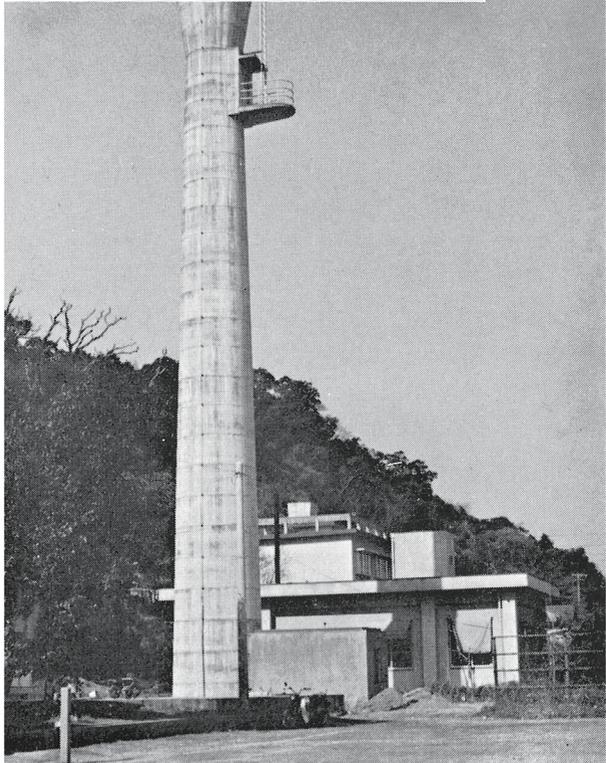
第三、第四講議室



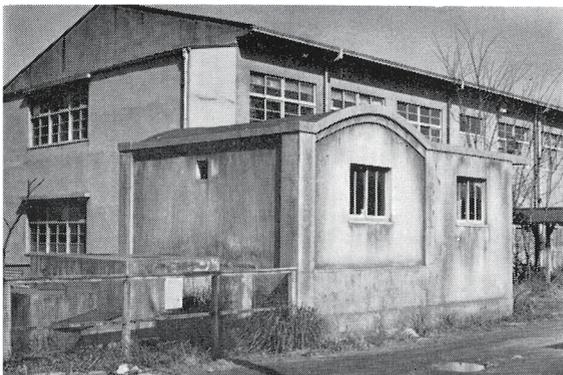
医学部正面



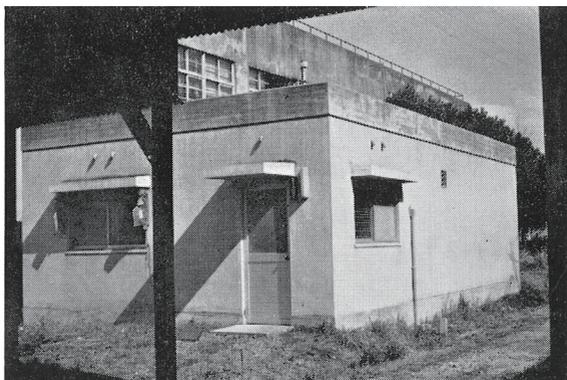
医学部  
学生実習室



放射性同位元素研究室  
及び地下水貯水塔



新設前の放射性同位元素研究室  
(旧七高時代の薬品庫)



電子顕微鏡室



純系動物飼育室

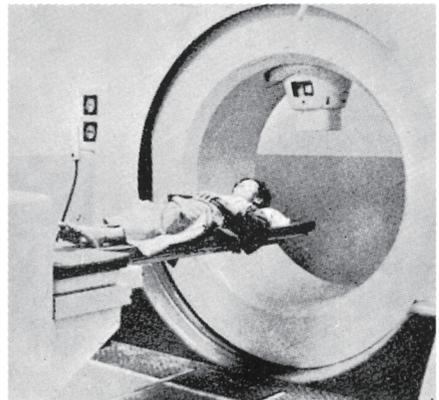


生活協同組合

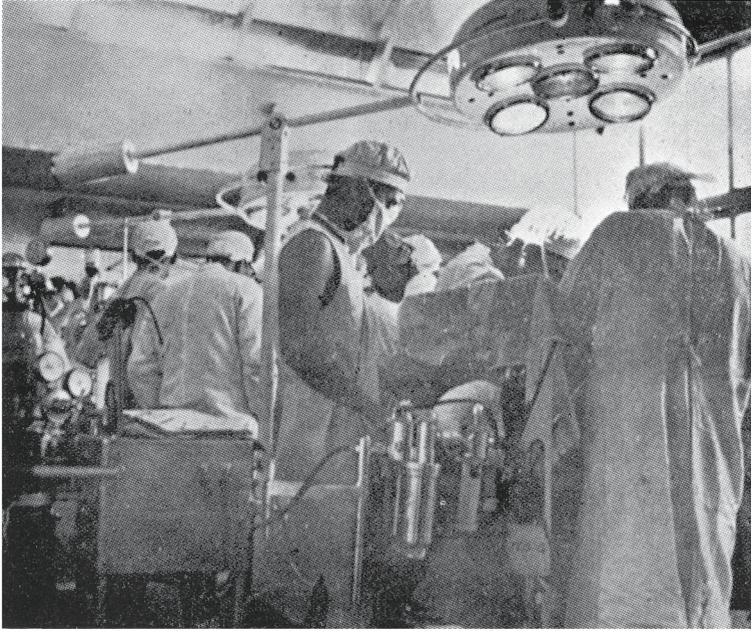
学生ホール



附属病院 外来受付



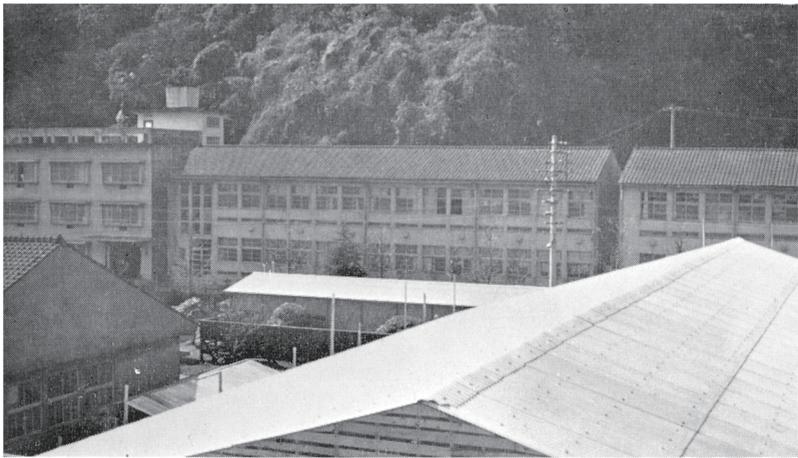
附属病院 コバルト治療室



手術室一部



附属病院研究室一部



看護婦寄宿舎



看護婦、助産婦、保健婦三校舎



動物舎の一部



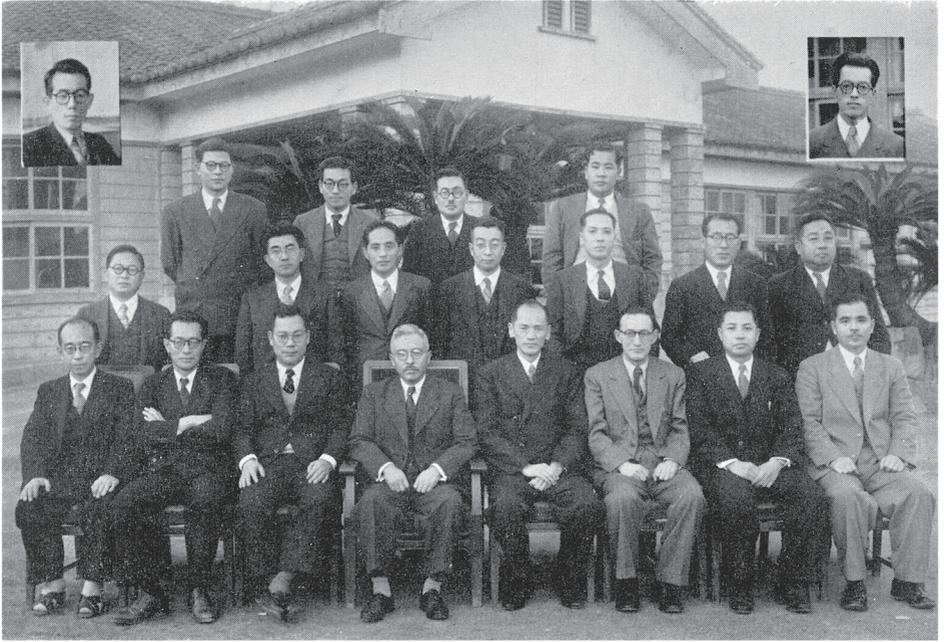
熱 研 (名 瀬)



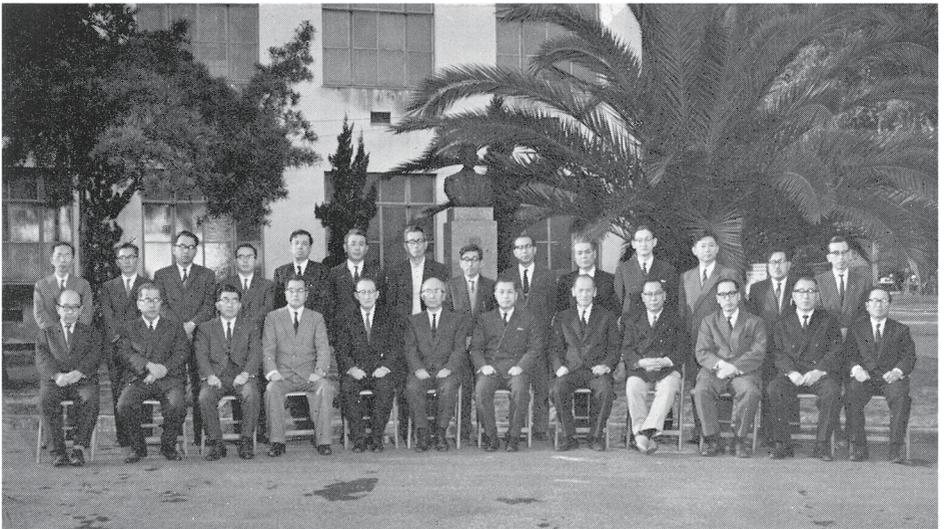
熱研古仁屋分室



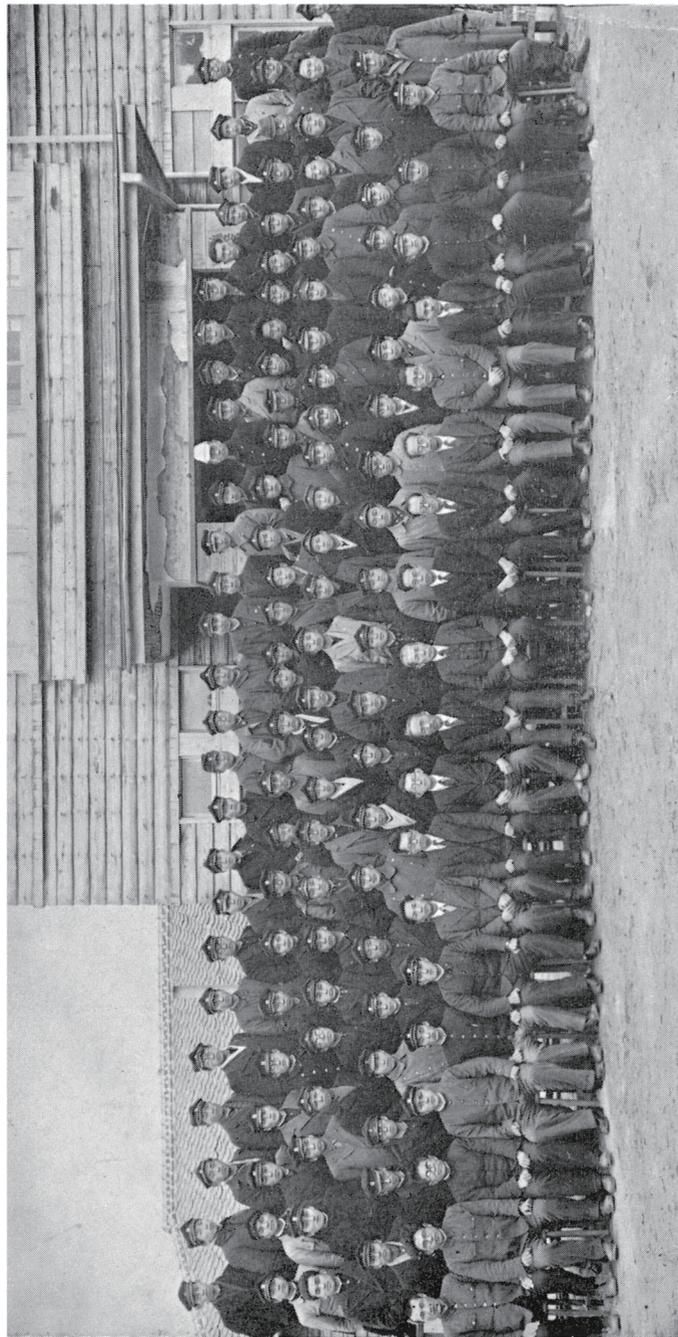
腫瘍研究施設



昭和30年12月各教授



昭和41年12月各教授



昭和22年A、B級決定前（B級廃校になった場合の事を考え送別写真）



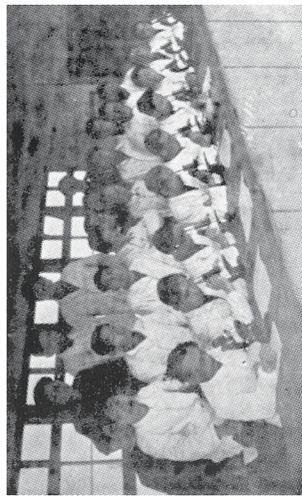
医専第一回卒業記念 昭和23年 3月



医専第二回卒業式 昭和24年3月



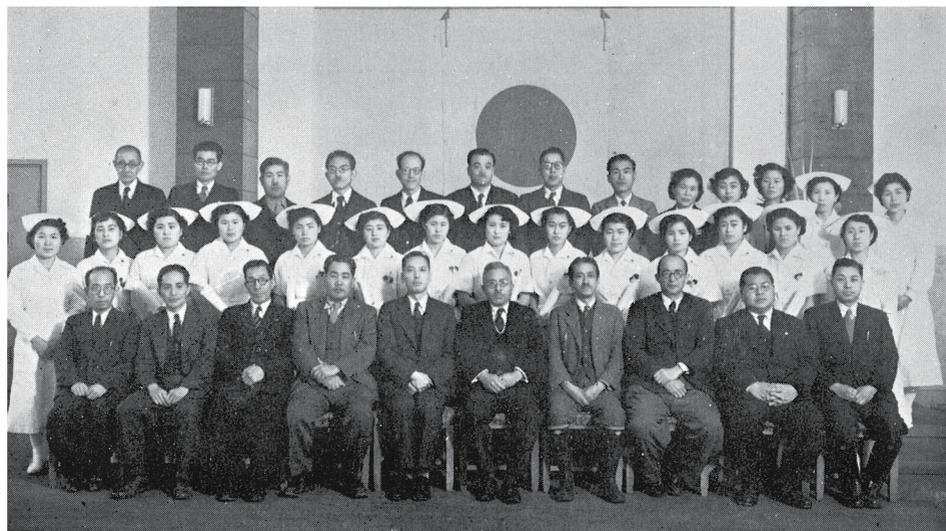
県立鹿兒島医科大学、第1回卒業生



医専2回生の組織美習生  
昭和19年6月



鹿児島県立看護学校戴帽式 昭和25年11月20日



鹿児島県立看護学校第一期生卒業記念 昭和28年3月



鹿児島大学医学部附属看護学校第13回卒業記念 昭和40年3月6日



鹿児島大学医学部附属保健婦学校第一回卒業生 昭和37年3月3日



第一回奄美大島巡回診療団（昭和29年5月）巡視船「さつま」にて



第一回種子島診療団 (昭和28年7月)



第1回沖縄学術調査診療団 (昭和40年8月)



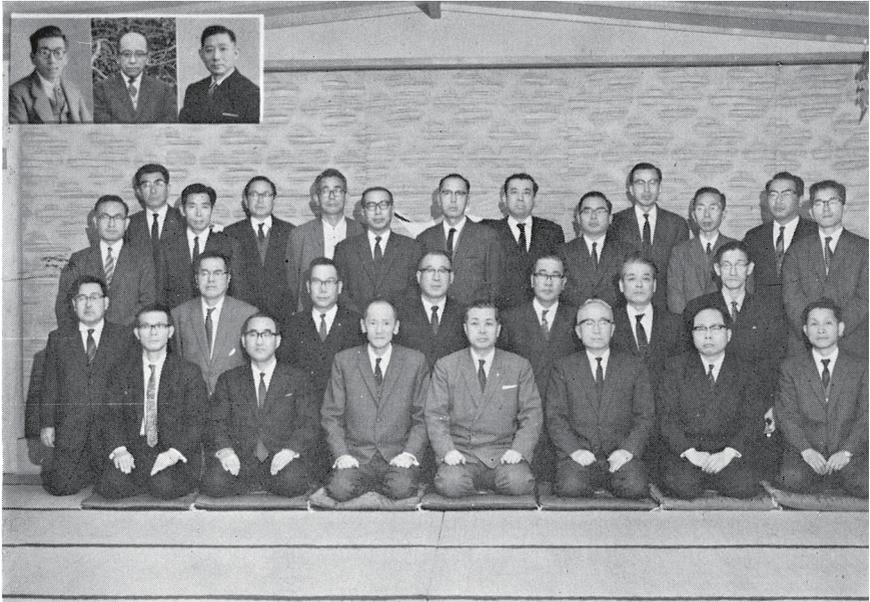
第一回台湾医学調査団  
花蓮県王里小学校ブヌン族部落 昭和42年11月9日



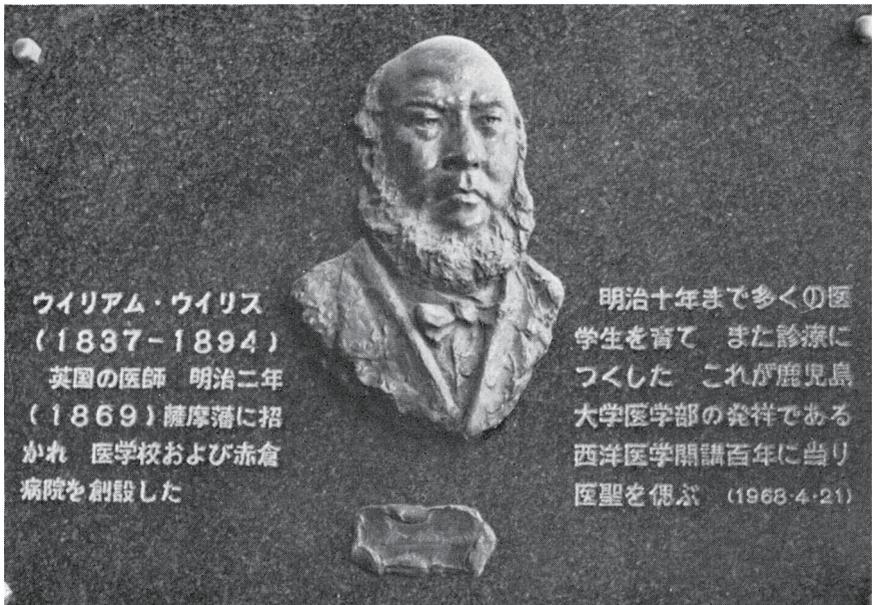
第一回台湾医学調査団台北にて 昭和42年10月26日～11月17日



地 定 予 転 移



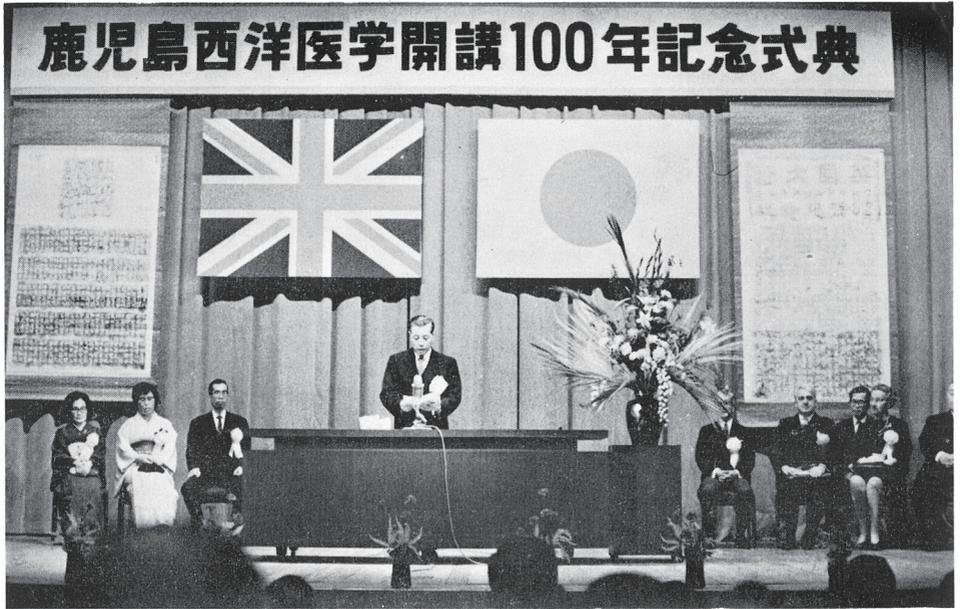
教授会後（昭和43年12月18日）



ウィリアム・ウイリス  
（1837-1894）  
英国の医師 明治二年  
（1869）薩摩藩に招  
かれ 医学校および赤倉  
病院を創設した

明治十年まで多くの医  
学生を育て また診療に  
つくした これが鹿児島  
大学医学部の発祥である  
西洋医学開講百年に当り  
医聖を偲ぶ（1968.4.21）

ウィリアム・ウイリス（レリーフ）



鹿児島西洋医学開講100年記念式典（佐藤八郎医学部長）



英国代理大使



鮫島近二先生



医学部同窓会長 鮫島耕一郎博士



宇利烝示氏 (ウイリアム・ウイリスの令孫)

## 序

現在のわが医学部は、昭和18年、県立医学専門学校として発足しこれが母体となって、爾来25年、幾多の変遷を経て県立医科大学、県立大学医学部、国立鹿児島大学医学部へと発展し、今年4月21日その記念式典を迎えたのである。

しかし、本学の礎は、いまを去ること100年、即ち明治2年12月、薩摩藩が招聘した英国人医師ウィリアム・ウイリスによっておかれたものである。藩は市内小川町に医学校及び病院を創設、英国医学による近代医学の教育機関として、多くの青年医学得を養成し、ここから、わが国近代医学の先駆者が多数輩出されたのである。その後西南戦争以来、いくたびかの変遷をみて、病院は市立病院へと発展、継続してきたが、医学校は明治22年、地方税支弁による医校禁止の文部省令によって閉鎖され、以来半世紀廃校の運命にあったのである。

その後星霜移って、ここにウイリスによる医学校以来100年、創立当初の人々の精神は脈々として後世に伝えられるに至ったのである。その足跡は、とりもなおさず、今日の鹿児島大学発展の歴史であると共に英国医学教育発祥の地となりて、新たな意義を以って医学史にとどめられるべきであると私は思うのである。

さきに、鹿児島県立大学医学部附属病院沿革史が刊行されたが、このたび、全く新たな構想のもとに、鹿児島大学医学部25周年記念誌が発刊されることになったのは、誠に意義あることで、ご同慶に堪えない。編集委員長、大保教授、関係諸兄の努力に対し、謝意を表するものである。

これによって、われわれは、本学の古い歴史を誇り、先人たちの築きあげた努力を伝統として受けつぐと共に、今後の本学発展の貴重なる資料とされることを念願するものである。

終りにのぞみ、この記念の刊行を機会にご協力ご援助を賜った各位に対し深謝すると共にわが医学部の、一層の発展を希望するものである。

昭和43年8月20日

鹿児島大学医学部開学25周年記念会会長  
鹿児島西洋医学開講100周年記念会会長  
鹿児島大学医学部部長

佐藤 八郎

# 目 次

## 序

第1章	前 史	1
1.	江戸時代薩藩の医育	1
2.	ウイルス来藩前後の医育	4
3.	ウイルス来任後の医学校、病院について	5
4.	鹿児島医学校	7
第2章	県立鹿児島医学専門学校	11
1.	沿 革	14
2.	施設状況	15
3.	教官、職員配置状況	16
4.	卒業生状況	18
	医学部主要沿革史年表	19
第3章	県立鹿児島医科大学	21
1.	沿 革	23
2.	施設状況	23
3.	教官、職員配置状況	24
4.	卒業生状況	26
5.	研究科、専修生ならびに学位審査状況	26
第4章	鹿児島県立大学医学部	27
1.	沿 革	30
2.	施設状況	31
3.	教官、職員配置状況	32
4.	卒業生数	33
第5章	国立鹿児島大学医学部	35
1.	沿 革	35
2.	施設状況	40

3.	教官、職員配置状況	41
4.	学生および卒業生の状況	47
附.	学位授与者名簿	49
	外遊者名簿	64
	県立大学医学部 諸規程	68
	国立鹿児島大学医学部 諸規程	71
	附 移転問題	78
第6章	鹿児島大学医学部附属病院	79
1.	沿革	79
2.	歴代の院長	89
3.	診療各科の沿革	91
4.	病院施設	97
	主要備品	101
5.	附属病院職員	102
第7章	附属学校、図書館、研究施設、病院各部、分院、親和会	105
1.	附属学校	105
	看護学校	105
	助産婦学校	107
	保健婦学校	108
2.	図書館	112
	雑誌(紀要)	114
3.	研究施設	117
	熱帯医学研究施設	117
	腫瘍研究施設	122
4.	病院各部	125
	中央検査部	125
	手術部	135
	中央施設—理学療法室	135
	薬剤部	138
霧島分院		141
	沿革	141
	施設長	141
	施設	142

機構と職員の配置 .....	143
診療諸統計 .....	143
歴史と展望 .....	148
主要設備 .....	152
親和会 .....	154
第8章 回顧 .....	163
1. 医学専門学校の創設 .....	山口 政男… 163
2. わが医学部の生立ちと苦難のあれこれ .....	町野 碩夫… 169
3. 県立鹿児島医学専門学校の設立の経緯について .....	縄田 千郎… 184
4. 開校当時の思い出 .....	宮崎 一郎… 206
第9章 教室史 .....	211
1. 基礎医学教室 .....	211
第一解剖学教室 .....	211
第二解剖学教室 .....	216
第一生理学教室 .....	220
第二生理学教室 .....	223
生化学教室 .....	227
薬理学教室 .....	230
第一病理学教室 .....	233
第二病理学教室 .....	239
細菌学教室 .....	240
衛生学教室 .....	242
公衆衛生学教室 .....	243
医動物学教室 .....	244
法医学教室 .....	246
2. 臨床医学教室 .....	248
第一内科学教室 .....	248
第二内科学教室 .....	251
神経精神医学教室 .....	255
小児科学教室 .....	260
第一外科学教室 .....	263
第二外科学教室 .....	268
整形外科学教室 .....	270

	皮膚科学教室	274
	泌尿器科学教室	275
	眼科学教室	279
	耳鼻咽喉科学教室	286
	放射線科学教室	288
	産婦人科学教室	300
	歯科口腔外科学教室	303
第10章	3. 父兄後援会、同窓会、自治会の歩み	309
	父兄会	309
	自治会	313
	同窓会	鮫島耕一郎 315
第11章	大島、沖縄、台湾診療記録	321
	1. 巡回診療について	321
	2. 県下巡回診療班派遣について (種子島、屋久島、獅子島、奄美大島、三島村、十島村)	329
	3. 鹿児島大学医学部沖縄学術調査診療団派遣	354
	4. 政府派遣学童検診	360
	5. 鹿児島大学医学部中華民国台湾省医学調査診療団派遣	361
第12章	集談会、熱帯医学研究会	363
	1. 集談会	363
	2. 熱帯医学研究会	381
第13章	鹿児島大学医学部25周年記念 } 記事 西洋医学100周年記念 }	385
	1. 鹿児島大学医学部開学二十五周年記念式典	385
	式次第	
	式辞 鹿児島大学医学部長	佐藤 八郎
	祝辞 鹿児島大学学長	福田 得志
	鹿児島市長	末吉利雄
	鹿児島県医師会長	花牟礼 淳二郎
	鹿児島大学医学部同窓会長	鮫島 耕一郎
	学生代表	尾崎 建

2. 鹿児島西洋医学開講百年記念式典 ..... 396

式次第

式辞 学 部 長 佐 藤 八 郎

祝辞 文 部 大 臣 灘 尾 弘 吉

英国大使（代理）C.R.S.Manders.

鹿児島県知事 金 丸 三 郎

日本医師会長 武 見 太 郎

日本医史学会長 小 川 鼎 三

3. 祝 電 ..... 415

附・関連記事

Japan-British Medical Centenary

Lewis Bush

題字 鹿児島大学長 町野碩夫

# 第一章 前史



# 第 1 章 前 史

## 1. 江戸時代の薩藩の医育

城山の麓照国神社から南に広い道を下ると 2 つめの十字路の右角に目だたない石碑がある。安永 3 年（1774 年）藩主島津重豪創建の医学院の跡である。かつてこの附近に、島津藩の医育、教育の機関があったらしい。この石碑は大正 3 年鹿児島市がそれを記念して建てたものである。

鹿児島大学医学部および附属病院は、直接には明治元年（1868 年）に設立された藩立病院およびその附属医学校に端を発している。しかし、その源はさらに遠く、藩主島津重豪の命によって建てられた上記の医学院にまでさかのぼらねばならない。

医学院が設置された安永 3 年という、鹿児島大学の母体の一つである第七高等学校の前身ともいべき造士館が鹿児島に創立された翌年にあたり、約 200 年前の江戸時代中期に位置している。世界ではアメリカの独立戦争（1775～83 年）や独立宣言（1776 年）が行なわれており、又、ワットの蒸気機関の改良（1767 年）や、アークライトの火力紡績機の発明（1768 年）にともなう、イギリスを中心にした産業革命のさ中であり、合理主義とブルジョアジーの成長してゆく時代であった。

一方、国内に於ては、徳川第 10 代将軍家治の時代であり、凶作による百姓一揆や米騒動の続出、疫病の流行が記録されている。しかし、賀茂真淵や青木昆陽等による、漢学、和学、洋学の隆盛もこの頃であり、医学の分野においても多くの進展をみた時代であった。享保 6 年（1721 年）には江戸の小石川薬園が設置されており、山脇東洋が初めて死体を解剖したのが宝暦 4 年（1754 年）であり、杉田玄白による解体新書の出版（安永 3 年、1774 年）もこの頃である。これらの変せんの中であって、医学教育の面においても、これまでの個々の師について経験を伝授されていた教育が、学校を設けて、秩序的に医学を教授する教育に変わってゆく時代にあった。宝暦 6 年（1756 年）、熊本に再春館が創立されたのに前後して、江戸の躰寿館が明和 2 年（1765 年）、鹿児島の医学院が安永 3 年（1774 年）、京都の医学院が元明 6 年（1781 年）に夫々設置されてお

り、その他福岡の采真館、萩の明倫館内の医学部、会津の日新館内の医学部が、この時代の各藩の医育診療機関であった。

わが薩摩藩における当時の藩主島津重豪（第25代、延享2年～天保4年、1745年～1833年）は、藩政を整えると共に、安永2年には藩校造士館を、翌3年には医学院、同8年には明時館を設けて、薩藩文運の興隆につとめている。又、蘭癖と称されるほど蘭学を好み、海外知識の採取、新技術の導入につとめ、そのために「成形図説」「質問本草」「鳥名便覧」「島津国史」等多くのものを編集させている。一方、この時代の医療は薬草学と共に育ってきているが、薩藩の薬草園の歴史は、更に古く、万治2年（1657年）の山川薬園、貞享4年（1687年）の佐多薬園があり、医学院の設置より少し遅れて、吉野薬園が安永8年（1799年）、同じく藩主重豪によって建てられている。なお、医学の祖神を祀る神農廟が、安永3年3月に竣功している。

設立当時の医学院の内容についての詳細は不明であるが、臨床設備をもった医育機関であって、公共の医療施設としては、日本で最も古いものの一つに属している。江戸医学館に準じて学則を設け、日を定めて、講習、討論、読会等を開き、城下士、外城士、足輕、家来、町人に至るまで、希望者の出席を許可していたようである。又、田村藍水の門に入って物産及び参製法を研究した薩藩士河野道恕が講師の一人であったとの記録もある。鹿児島県立図書館蔵「仰望節録」下巻および、鹿児島大学附属図書館蔵玉里文庫の「三国名勝図絵」巻二の中に次のような記載がある。（本府医学院、第18条）

“医学院は安永3年城外に創建し玉ひ、日講を命じ玉ふ、その学規は略江戸医学館の規則とおなじ、

江戸医学館は旧名躋寿館、多紀玉池氏の創建なりしが、今は官局なり、官医のみ教導す、素靈八十一難経をはじめ、日講あり、後世の経方の会読も日課あり、生徒各々病因療方の医案を述し、学長其甲乙を判す、其考試を選挙知事に致す、其的実の人一等を進む”

“医学院、府城の南、坂本村に属す、造士館と斜めに相對せり、安永三年大信公、これを建玉ふ、専ら民生を憐み、痾を救い、瘰を起し、疔札の患無らしむるの仁恵に出たり、日を定めて医書の講あり、医生席に到りて人を医するの事を討論す、石碑あり、右の如し”

# 医学院跡石碑文

## 本府創建医学院記

世之論<sub>レ</sub>醫術<sub>ニ</sub>者、以<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>本<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>經<sub>ニ</sub>者、不<sub>レ</sub>諧<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>俗<sub>ニ</sub>、根<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>古<sub>ニ</sub>者、不<sub>レ</sub>宜<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>今<sub>ニ</sub>、予竊以<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>規磨<sub>ニ</sub>之說、蓋特<sub>ニ</sub>因<sub>レ</sub>庸醫<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>論<sub>ニ</sub>者耳、非<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>論<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>良醫<sub>ニ</sub>之術<sub>ニ</sub>也、夫良醫<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>勉<sub>レ</sub>方<sub>ニ</sub>用<sub>レ</sub>藥<sub>ニ</sub>也、詭怪絶出、或若<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>取<sub>レ</sub>法<sub>ニ</sub>者、而卒<sub>ニ</sub>獲<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>驗<sub>ニ</sub>、及<sub>レ</sub>問<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>然<sub>ニ</sub>者、則亦未<sub>レ</sub>嘗<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>捫<sub>レ</sub>經<sub>ニ</sub>、考<sub>レ</sub>古<sub>ニ</sub>、而化<sub>ニ</sub>臭腐<sub>ニ</sub>、爲<sub>ニ</sub>神<sub>レ</sub>奇<sub>ニ</sub>也、由<sub>レ</sub>是<sub>ニ</sub>觀<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>、本<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>者、未<sub>レ</sub>必<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>諧<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>俗<sub>ニ</sub>、根<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>古<sub>ニ</sub>者、未<sub>レ</sub>必<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>宜<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>今<sub>ニ</sub>、但顧<sub>レ</sub>其所以用<sub>レ</sub>之者何如、若夫刻<sub>レ</sub>舟<sub>ニ</sub>求<sub>レ</sub>劍<sub>ニ</sub>、膠<sub>レ</sub>柱<sub>ニ</sub>鼓<sub>レ</sub>瑟<sub>ニ</sub>、而自<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>質<sub>ニ</sub>、於<sub>レ</sub>經<sub>ニ</sub>、微<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>古<sub>ニ</sub>者、則是庸醫之事、豈<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>此<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>一<sub>レ</sub>概<sub>ニ</sub>之論<sub>ニ</sub>乎哉、安永二年、歲在癸巳、本府創建<sub>ニ</sub>醫學院<sub>ニ</sub>、公命也、經<sub>ニ</sub>始<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>是<sub>ニ</sub>歲<sub>ニ</sub>、十<sub>ニ</sub>月<sub>ニ</sub>、落<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>明年<sub>ニ</sub>、二<sub>ニ</sub>月<sub>ニ</sub>、講堂寢廬凡<sub>レ</sub>若干楹、使<sub>レ</sub>直<sub>ニ</sub>衡<sub>ニ</sub>、爲<sub>レ</sub>文<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之、古人有<sub>レ</sub>言<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>、三<sub>レ</sub>折<sub>レ</sub>肱<sub>ニ</sub>、爲<sub>ニ</sub>良<sub>レ</sub>醫<sub>ニ</sub>、言<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>醫<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>易<sub>ニ</sub>也、諺<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>、學<sub>レ</sub>書<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>紙<sub>レ</sub>費<sub>ニ</sub>、學<sub>レ</sub>醫<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>人<sub>レ</sub>費<sub>ニ</sub>、言<sub>ニ</sub>學<sub>レ</sub>醫<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>害<sub>レ</sub>人<sub>ニ</sub>也、然<sub>レ</sub>、醫<sub>ニ</sub>非<sub>レ</sub>學<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>良<sub>レ</sub>醫<sub>ニ</sub>、而所謂<sub>ニ</sub>人<sub>レ</sub>費<sub>ニ</sub>者、特<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>能<sub>ニ</sub>善<sub>レ</sub>學<sub>ニ</sub>焉、爾苟<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>夫<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>醫<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>精<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>講<sub>レ</sub>業<sub>ニ</sub>、而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>急<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>售<sub>レ</sub>術<sub>ニ</sub>、真<sub>ニ</sub>積<sub>レ</sub>力<sub>ニ</sub>久<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>待<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>、則<sub>レ</sub>庶<sub>ニ</sub>乎<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>乙<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>人<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>害<sub>レ</sub>甲<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>矣、而爲<sub>ニ</sub>良<sub>レ</sub>醫<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>道<sub>ニ</sub>、亦將<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>是<sub>ニ</sub>也、嗚呼、醫學院之所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>設<sub>レ</sub>者、是<sub>レ</sub>己、竊謂<sub>ニ</sub>斯<sub>レ</sub>舉<sub>ニ</sub>固<sub>ニ</sub>宜<sub>レ</sub>書<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>也、乃推<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>設<sub>レ</sub>者<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>記<sub>ニ</sub>、因<sub>レ</sub>又畧<sub>レ</sub>論<sub>ニ</sub>醫學院之所<sub>ニ</sub>本<sub>レ</sub>附<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>、而使<sub>レ</sub>來<sub>ニ</sub>學者<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>考<sub>ニ</sub>焉、又<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>告<sub>ニ</sub>世<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>師<sub>レ</sub>古<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>者<sub>ニ</sub>、院中又<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>神<sub>レ</sub>農<sub>ニ</sub>殿<sub>ニ</sub>、蓋<sub>レ</sub>從<sub>ニ</sub>當<sub>レ</sub>時<sub>ニ</sub>、醫家之所<sub>ニ</sub>戶<sub>レ</sub>記<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>耳、此固<sub>ニ</sub>未<sub>レ</sub>必<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>深<sub>レ</sub>論<sub>ニ</sub>云、

安永三年、歲在甲午、四月二十日

本府副史兼知學事山本直衡謹撰并書

注、この石碑文の漢字は活字の都合で当用漢字を使用したものもある。

前記の医学院が、その後どのような経過をたどったかについての詳細が明らかでないのは残念でならない。一方、他領から、有名な医者を招聘したり、又、それらの医者の下へ、藩内の青年を遊学させることは、年をおって盛んに賛励されていった。医官シーボルト (Ph. Fr. Siebold) が、文政9年(1826年)4月、江戸に着いた時、重豪は曾孫にあたる斉彬と共に出迎え、彼等と対談し、医学について、シーボルトの門下生になることを求めたという。シーボルトの治療日記に、門下生の一人として薩藩士、松本家保(雲徳)の名が記載されているとのことである。下って天保13年(1842年)に、シーボルトの門下生、戸塚静梅が当時の藩主斉彬(第29代藩主)に招かれ、知遇を受けている。又、他領への遊学も、嘉永4年(1815年)10月には長州藩医青木周殉の門に有原洞運、小倉玄昌、岩崎俊音の3人が遣わされ、後、斉彬の内命により大阪の緒方供庵の門に移っている。その他八木玄悦、相良運八等が蘭学、医学遊学生として、他藩に出掛けている。

その後、元治元年(1864年)に海陸軍諸学科の教育機関として、開成所が設立されているが、その学科目中に医学が含まれている。

## 2. ウィルス来藩前後の医育

明治元年(1868年)10月8日、藩は医学院を建て、教授、助教、訓導師、教講、句読師頭取、句読師、句読師助等の職名を設けたが、同時に以下のような布告を発している。

「(1)洋漢両道を混用し、各々才能ある者より職員に任ずること、(2)従って両道に順熟し、区別なく長を採り、短を調ふべきこと、(3)本外科の区別なきよう生徒を教導すべきこと、(4)鍼科は即今用事方には不用につき、外科を稽古し、両科の西洋道を伝習すべきこと」また、西洋医学の長所をあげ、ことに外科は当時至急の科道として、西洋医生養成の方針を明示し、漢医も外科道については西洋法を伝習するよう諭告した。次いで同月、藩は生民撫育の趣旨を以て、製薬方内に病院を建て、医学院教師が出席して、一日およそ100人を診療し、特に貧窮の者には施療すべきことを医学院助教、製薬奉行に命じ、又、これを広く領内に布告した。

明治2年2月公布の藩制では、医院は病院製薬院を包括し、学頭は和漢洋および鍼科、製薬、病院を分督、院事を総判することになっている。その他、学頭助、都講、都講助等の職名が定められている。

その後、藩は従来の洋漢折衷の医学院の制度を改め、西洋医学のために西洋病院を、漢方のために医院を分立させている。しかし、医院は2年6月に廃止され、一方西洋病院は同年12月、旧浄光明寺院に移り、西洋学校と改称され、のちに医学校と改められた。

この西洋学校のもとに登場するのが、ウィリアム・ウイリス (William Willis、1837~1894) である。ウイリスは当時、現在の東京大学医学部の前身である東京医学校ならびに同病院の長であったが、学制制定にあたって日本政府の方針が、その範を英国医学からドイツ医学に求めることになったため、英人であるウイリスの身の振り方が問題になった。この時政府の苦衷を見兼ねた西郷南州は、ウイリスを薩藩に引き取ることを画策し、大久保利通と相談の上、鹿児島に招へいすることにしたのである。このへんの事情については、今回の鹿児島大学医学部25周年記念事業の一環として発行された佐藤八郎述、「英医ウィリアム・ウイリス伝」に克明に記されている。

### 3. ウイリスの来任後の医学校 病院について、鹿児島県史 (第3巻、684頁) に次のような記載がある。

ウイリスの来任を迎えて明治3年正月、大いに医学校、病院の職制を改め、その機構を整備した。即ち医学校に学頭 (三等官) 以下一等教授、二等教授、一等助教、二等助教、都講、一等授読、二等授読、三等授読、授読試補等の職員を置き、学科の分担は、学頭は眼科、産科一切の治療及び薬剤、包帯等を、一等教授は外科書、二等教授は内科書、一等助教は病理書、二等助教は生理書、都講は解剖書、一等授読は分析書、二等授読は究理書、三等授読は算学、授読試補は文法書をそれぞれ担任することとなった。病院には大療頭 (七等) 以下中療頭、小療頭、史生、薬局掛、看頭、種痘兼器械掛、製薬掛を置いた。

また職制変革と同時に医学校御用掛兼病院掛を任命した。即ち石神良策、足立慎吾、有馬意運、山下弘平は医学校兼病院掛を命ぜられ、藤田圭輔、新宮拙藏、山下淳輔、奥山玄良、永井文斎は同掛を委託されたのである。

3年5月再び医学校兼病院の職制を改め、等級を八等に分った。

医学校兼病院

第一等 本草学、産科学、眼科学、外科学、内科学、病理学、薬剤学、動物植物学、解剖学各教授 (一人宛) 医監 (二)

第二等 小学校教頭 (一) 病院執事 (二) 翻訳書取締 (二) 器械取締 (一)

薬局取締（一）

第三等 小学校教頭助（二）病院執事助（一）翻訳書取締助（二）器械取締助（二）薬局取締助（二）

第四等 生徒取締兼塾長 外診掛（二）

第五等 処方掛（八）器械預（三）

第六等 一等授読 種痘取締（一）薬局定詰（八）

第七等 二等授読 史生（二）薬局掛（二）器械掛（一二）看頭（四）

第八等 三等授読 種痘掛（一五）

これによっても医学校、病院が相当整備された大規模の組織であったことが推察される。10月更に生徒取締助兼塾長助、薬局定詰4人、器械預助4人を第五等に、史生2人を等外に新設した。なお授読は諸生20人に1人宛、生徒取締は塾生30人に1人宛の規定である。諸生には一、二、三等の等級があり、三石又は二石の俸禄を給した。

医学校用書籍購入のために、2年10月頃石神良策が上京したが購入書日は新業百品考前後編、砲疾論、侶斯達等、明百氏薬編、リートル薬性論・究理図解・瘡疾新説・扶氏経験・全体新論・内科新説・婦嬰新説・同新疾事抄・室扶斯論・博物新編・同涉解問答・博物新論・英文典・単語編等で、これらが教科書として使用されたのであろう。

なお藩内に産科の療術開けず、難産のため死に至る者も少くなかったので、ウィルス伝来の手術器械を設置し、鮫島嘯斎、渡辺昌斎の兩人を産科掛に任じ、4年3月布告して産婦の受診を勧めた。

一方漢方医学については、医院（漢方）は先に2年6月いったん廃止されたが、3年2月に至り再び旧製薬方跡に漢方医院として復興し、都講以下従前通りの官等に準じて任用し、侍医の監督の下に置かれた。併し乍ら藩としての方針は専ら西洋医学の普及発達にあり、漢方医学は漸く衰頽に傾いたのである。

以上の記載をみても、当時としてはまことにすばらしい機構と設備を持っていたことがわかる。

ウィルスは彼自身の手記（明治8年3月記）によると、明治2年12月赴任以来同8年3月、一旦帰英するまでに、外来入院あわせて15,000人の治療にあたり、往診患者も数千人におよんだという。当時の盛況のほどがしのばれる。なお、当時、ウィルスの講義を受けたものは、修業年限3カ年にして、試験に合格すると、医者の特許状を与えられたことが記録されている。なお興味深いことは、当時病院内に仮救療所を設け、貧窮者10名にかぎり、無料で施薬治療をお

こなっているが、これは特筆すべきことではなかろうか。ウイリスは明治8年、1年間の休暇をとって帰国し、翌9年帰任したが、明治10年西南の役が勃発したために、医学校および病院は閉鎖され、ウイリスは身辺の危険をさけて、長崎を経て東京へと移り、やがて帰国し、三度び鹿児島にくることはなかった。この間、医学校、病院を主宰して鹿児島に留まること前後8年におよび、この地に近代医学を普及発達させることにつとめ、多くの医学生を養成して、世に送ったのである。

#### 4. 鹿児島医学校

前記の医学校および病院が閉鎖され、ウイリスが帰国したのは西南の役のためであったが、一方戦いは薩軍の旗色が悪くなると共に、兵火は日を追って拡大し、鹿児島市は少なからぬ災害を受けた。しかし、官軍が鹿児島に入り、県令以下が新らしく着任すると間もなく、罹災民救恤の法を定めて、市内に救恤取扱所を設け、臨時病院が開設されたが、(院長、三浦義純)、戦乱中であったため、その設備は充分でなかった。従って続出する多数の傷病者を全部収容施療することは、到底不可能な事態になった。そこで同11年、真宗大谷派東本願寺主大谷光勝は、市内二本松原通り伊藤邸に施薬院を設立し、藤田圭甫を院長として、施療に従事させた。

明治13年、初回の県会に県令諮問案として、初めて医学校開設の議が提出されたが、これは当時、県下医業の先輩の多くが死んでおり、又、後進育成の機関もなく、一方において、10年来コレラ等の悪疫の流行が激しかったので、医学校および附属病院開校の急務が痛感されていたためであった。この諮問案に従って、県では同年6月、県立鹿児島医学校ならびに附属病院の開設を布告し、とりあえず加治屋町に仮舎屋をおいて開業した。翌14年4月、県は各郡役所を通して、医学志願者の募集をおこない、勉学のかたわら病者の治療をするものとし、それらの経費約4,500円を地方税より支弁することとした。

一方、大谷派本願寺大谷光勝はその別院経営の施薬院を閉じ、経費の残余を以て医学校のために舎屋を山下町旧軍馬方跡(私学校跡、現在の附属病院の場所)に新築して、県に寄附したので、鹿児島医学校と附属病院は従来の舎屋を閉じてこれに移り、明治15年1月29日渡辺県令臨席の下に開業式が挙行された。

明治15年5月、文部省は、府県に対し医学校通則を通達したが、これによる

と医学校は甲乙二種とし、甲種は尋常の医学科を教授し医師の育成を図るものとし、乙種は簡易の医学科を教授し、医師の速成を図るとき、若しくは甲種を設置することができないときに設置するものとした。又、医学校においては臨牀実験の用に供するに足る病院の設備のあることを必要とすることが規定してある。鹿児島医学校は乙種であったので、3カ年の修業年限を卒えて、医術開業の検定試験に合格しなければ、医師の免状は得られなかった。

なお設立当初の職員は、橘良全（院長）島貫修平（15年8月助教兼所属病院診察医、16年5月副校長心得）石川小作（15年8月教兼附属病院診察医、16年5月病院副院長心得）田村典瑞（16年4月附属病院薬局長）がいた。こうして16年1月鹿児島医学校本科生徒60名の募集があり、4月20日迄に学業履歴書を添えて同校へ申し出るたにしてしていたが、その試験科目を見ると、日本外史読法・18史略講義・訳書々取・算術（加減乗除、分数比例）・物理学講義及び体格検査となっている。また、17年3月の鹿児島県立医学校規則によると、同校は医術の速成を図り、邦語を以て簡易なる医学科を教授するものとし、修学年限は3カ年で、これを分って3学年とし、学年は5月1日に始まり、翌年4月30日に終る（1学期を2期に分ち、5月より、10月迄夏半学期、11月より翌年4月迄を冬半学期とす）。なお授業料は他管人に限り、1カ月50銭とする。入学生徒は満18年以上の者と定められていた。3学期に於て教授すべき学科は、物理学・化学（有機、無機）・解剖学（附組織学）・生理学・薬物学（附処方及び調剤学）・内科通論（附診断学）・外科通論（附包帯学）・内科名論・外科各論・眼科学・産科学・内科臨床講義・外科臨床講義・眼科臨床講義であった。

鹿児島医学校は、中央より遠く隔ってはいたが、人格学識ともに一流の立派な練達の若い人々を教授として招き同時に附属病院において治療に従事させたのである。

明治18年8月制定の鹿児島医学校附属病院規則によると、当時の入院料は上等は1日35銭、中等30銭、下等25銭で、県下の貧しい患者で、その病症が臨牀講義に裨益すると認められた者は入院施療が許されていた。このようにして医学校と病院は医師の養成や、医術の進歩向上に、寄与すると同時に、病める人々に対する限りない福音を与えたのであった。

ところが明治20年勅令第48号により同年限り地方税支弁の医学校の設置が禁止されることになり、本校はこの悲運に該当したので、県当局は病院だけは残して置いて、伝染病流行の際にはこれをもってその予防、治療の中心機関と

し、また各郡の巡回診療や開業医に対する指導講義なども併せ行なわせるつもりでいたが、明治20年末の通常県会は、その必要なしとしてこれを否決した。これはその経費（県費の約33%）に比して成績が上らなかったためであろう。同時に同県会は病院の設備一切を私立病院を經營しようとする者に貸与することを建議した。

そこで県はやむなく明治21年3月をもって歴史ある鹿児島医学校及び附属病院を廃した。而して当時の校長兼院長は有名な医学士小林広（後年、金沢医専校長）で、内科担当であった。副院長は外科の医学士沢辺保雄であった。その他、池盛大（生理学担当）秋山金也、田村典瑞（物理、化学、薬物学担当）等の職員がいた。



# 第二章 県立鹿児島医学専門学校



## 第2章 県立鹿児島医学専門学校

わが鹿児島県は、多数の僻遠な山村離島を有し、住民が医療の恩恵に浴しえない悲惨な状態にある無医村を多くかかえていた。また隣接県である宮崎、沖縄両県も同様な事情にあったことから、この3県を含めた広汎な南九州地区に、医師育成と住民の医療保健の向上をはかることを目的とした医学専門学校の設置の要望が早くよりあったが、昭和15年12月の鹿児島県通常県会において、専門学校令による医専設置が建議され、鹿児島県議会が満場一致の熱意をもって別記のような「県立医学専門学校設立に関する意見書」によってその設立を知事に要望し、県当局において、調査、準備をおこなうこととなった。昭和17年11月、知事より文部大臣あての設置認可の申請がおこなわれ、続いて12月文部大臣より鹿児島県あての設置認可があり、正式の発足をみたのである。

その後、第二次世界大戦後、医学校整備のためのA、B級工作が文部省によって行なわれたが、幸い職員や父兄ならびに県当局の熱意によってA級となり、同時に大学昇格が決定し、昭和22年6月に県立鹿児島医科大学予科が開設されるに至った。一方医専は学生の在学の関係上昭和27年3月まで存続した。

以下に、医学専門学校設立当時の県議会からの意見書、設置認可関係の公文書およびそれに附随した設立理由、設立要項等を記載し、あわせてその沿革、当時の施設状況、教官、職員の配置関係を記しておく。なお医専設立の経緯、逸話などについては設立当時の教授であった町野碩夫、縄田千郎両名誉教授、宮崎一郎現九大教授、当時の県衛生部長山口政男氏および当時の学生であった鮫島耕一郎博士などの手記をいただいたのでそれによって当時をしのばれたい。

---

### 県立医学専門学校設立に関する意見書

今や東亜新秩序建設に当り、時局の発展に伴い、国の内外を問わず、医事衛生施設の完備の要は今更茲に多言を要せず。

然るに内地に於てすら、三千有余の無医村を有し、我が県下に於ても、尚ほ数十の無医村部落を現存す。而して今日大陸及び南洋政策の実行に当りては、

医師の需要は殆んど無制限にして、之に対し、今日の医師不足の現状を以てしては、夫れ如何ともする能はざるものあり、仍て政府に於ても医師養成の急務を痛感し、之が応急対策として、昨年度より現在の各官立医科大学内に医専門部を併置し、以て其需用の一部を補充すべく努力しつつあり、案ずるに、我鹿児島県は、嘗て明治初年、他に卒先して医育機関を創設して、医師養成に貢献したる歴史を有す。今や支那の隣接地として、大陸政策上重要な地位を占め、又南洋進出の重要基点として重大なる使命を担任す。而して且又未だ医育機関なき鹿、宮、沖三県の中心地に位し、南方地方病研究の好適地たると共に、世界有数の温泉地帯として温泉医学研究の最好適地たるを思う時、茲に医師の養成機関を設立し、以て医術研究の道場たらしむることは、將に時局下の最大急務中の急務にして、只に県下の医事衛生に対し、画期的革新をみるのみならず、大は我が国策遂行上の重大要素たる人的資源確保の根本解決に資し得るを確信するものなり。仍て県当局に於ては、時局の重大性と、県内外の実情に鑑み、速かに茲に県立医学専門学校を設立し、以て新体制の実行に邁進されんことを要望するものなり。

右府県制第44条により、意見書及提出候也。

鹿児島県会議長 坂口壮介

鹿児島県知事 新居善太郎殿

昭和17年11月4日

鹿児島県知事 薄田美朝

文部大臣 橋田邦彦殿

県立医学専門学校設置ニ関スル認可稟請

本件ニ関シテハ曩ニ本年3月23日附及認可申請置候処其ノ後別紙ノ通一件書類ヲ整備シ更ニ申請仕候ニ付何卒速ニ御認可相成候様御詮議相煩度此段及稟請候

鹿児島県

昭和17年11月4日申請県立鹿児島医学専門学校ヲ専門学校令ニ依リ設置スルノ件認可ス

昭和17年12月11日

文部大臣 橋田邦彦

## 県立医学専門学校設立ノ理由（設立申請書から）

### 1. 当地方ニ速ニ医療ノ普及ヲ図ルノ緊要ナルコト。

本県ニ於ケル医師数ハ左表ノ如ク年次減少ノ傾向ヲ辿リ然モ其ノ減少ハ県民ノ大多数ヲ擁スル農村ニ顕著ニシテ農村民死亡ノ高率及農村保健指導ノ不徹底等洵ニ寒心スベキ状況ニアリ。

	県下医師数	同上ノ中農村ノ 開業医師数	県下医師一人ニ 対スル人口
昭和12年	884	283	1,800
“ 13年	849	255	1,862
“ 14年	812	257	1,923
“ 15年	850	203	1,903
“ 16年	739	188	2,150

尚本県ニ於ケル町村行政区画ハ他県ノ夫ニ比シ極メテ広汎ニ区画セラレ然モ部落ハ散在スルヲ以テ無医村数ハ比較的僅少ナリト雖モ開業医師ヲ距ルー里以上人口二千以上ヲ有スル無医部落ニシテ交通上開業医ノ設置ヲ必要トスルモノ100ヶ所以上ヲ算シ其ノ戸数計55,000人口計262,000ニシテ実ニ県民ノ6分ノ1ハ容易ニ医療ヲ受け得サル状態ナリ。其ノ悲惨ナル実例トシテハ生前ニ於テ医療ヲ受クルコト能ハズ死亡後ニ於テ埋葬ノ必要上始メテ医師ヲ迎ヘ死体検案書ヲ受け殊ニ甚シキハ区長ノ死亡証明書ニ依リ埋葬スルノ止ムナキ幾多ノ島嶼地スラアル状況ニシテ斯カル医療機関ノ困窮コソ真ニ聖代ニ於ケル一大恨事ト謂フベシ。

之ガ原因ノ一ハ当地方ガ避遠ノ島嶼地多キ特殊事情ニ有ルガ為ニシテ斯カル避地ノ開業ニハ大学出身者ニ期待スルコトハ全く不可能ナルノ事実ハ此等ノ地方出身者ガ大学卒業後帰郷シテ医療ニ従事スル者殆ンド無之現況ニ照シテ明ニシテ従ツテ医療普及ノ対策トシテハ郷村ノ者ガ鹿児島市ニ出デテ速成的ナル医学教育ヲ受け帰郷シテ医療ニ従事スルヨリ外ナク鹿児島市ニ医育機関ガ設置セラルレバ村費等ヲ以テ村医ノ養成ヲナスコトモ容易トナリ当地方ニ医師ノ普及ヲ見ルニ至ルベシ。

又本県ニ斯種機関設置ノ曉ハ本県ヲ中心トスル南九州地方民ノ保健向上ニ益スル有形無形ノ恩恵蓋シ計ルベカラサルモノアリ。

サレバ本件ニ関シ昭和15年本県県会ニ於テ建議ノ次第モアリテ速ニ鹿児島市

ニ県立医学専門学校ヲ設置スルハ県民等シク翹望スル所ナリ。

## II. 南九州地方ニ医学教育機関ヲ設クルノ必要アルコト。

本県ハ宮崎、沖繩両県ト合シテ地理上自然ノ一区ヲ画シテ所謂南九州地方ヲ形成シ三県ノ総面積**1,243**方里人口**300**万ヲ有シ前述ノ如キ医療窮乏ノ実情ハ県情ノ類似セル宮崎、沖繩両県下ニ於テモ亦同様ナリト察セラルルニ拘ハラズ医学教育機関ハ現在北九州地方ニ偏在シ南九州地方ニハ医学教育機関ナシ。故ニ本県ニ医学教育機関設置ノ曉ハ宮崎、沖繩両県子弟ノ医育ニ最モ便ナルノミナラズ南九州三県民ノ優秀ナル資質ハ必ズヤ南方共栄圏内ニ於ケル医療開拓ニ資スルコト多大ナルモノアラン。

然シテ鹿児島市ハ人口**20**万ヲ有シ三県下ノ中心都市ニ位シ近ク開通セントスル関門「トンネル」ノ開通ト相俟チテ南進日本ノ基地トシテ南方経済圏開発ニ重要ナル位置ヲ占メ風土気候モ亦各種教育機関ヲ設置スルニ好適ノ地ナリ。

## III. 本県ハ医学教育機関ノ設置ニ特ニ有利ナル条件ヲ有スルコト。

学校校舍ノ施設ハ他ニ利用スベキ建築物アリ之ヲ移転改築シテ利用スルニ於テハ特別ノ建築資材ヲ必要トセサルノミナラズ附属病院トシテハ県立総合病院（病床数**186**床）精神病院（**100**床、尚 **100**床分ノ増築中）及将来特ニ国民保健ノ指導上必要ナル温泉治療研究所（病床**20**床）等ノ施設ヲ有スルノミナラズ仮校舍ニ充ツベキ建物ヲモ有スルヲ以テ学校創設費ニハ敢テ多額ノ経費及資材ヲ必要トセサルナリ。

### (1) 沿 革

- 昭和**17.12.11** 県立鹿児島医学専門学校設置認可、県庁内に事務所を設置し創立事務を開始。
- 昭和**18.1.18** 県立鹿児島医学専門学校学則公布。
- 昭和**18.1.30** 鹿児島県内政部長池田長吉、校長事務取扱就任。
- 昭和**18.3.25** 九州帝国大学教授医学博士高安慎一校長就任。
- 昭和**18.4.1** 鹿児島県立鹿児島病院を附属医院に移管、又鹿児島県立鹿児島病院霧島温泉療養所を附属霧島温泉研究所に移管。
- 昭和**18.4.12** 県立鹿児島医学専門学校仮校舍を鹿児島市山下町**19**番地に定め事務所を移転。
- 昭和**18.4.20** 第**1**回入学式を仮校舍において挙行。
- 昭和**18.4.21** 授業を開始。

- 昭和18.12.12 校旗を制定し霧島神宮において入魂式を挙行。
- 昭和19.4.20 第2回入学式挙行。
- 昭和19.12.9 鹿児島市鴨池町純心女学校校舎を買収し、細菌予防医学教室、図書室及び閲覧室を移転（第2校舎）。
- 昭和19.12.17 鹿児島市鴨池町に工事中の新校舎第1期工事竣工、山下町仮校舎より解剖、生理、医化、薬理、病理、各教室移転（第1校舎）。
- 昭和20.6.17 附属病院戦災により焼失す、山下町第3校舎も焼失す（仮校舎の一部）。
- 昭和20.6.23 鹿児島市草牟田町盲啞学校校舎の一部を借受け仮附属病院を開設、又市外重富村教員養成所の一部を借受け第二附属病院を開設。
- 昭和20.7.14 第3回入学式挙行。
- 昭和21.3.25 鹿児島県庁内に附属病院復興委員会設置。
- 昭和21.5.6 第4回入学式挙行。
- 昭和21.9.26 鹿児島県庁別館を借受け附属病院外来診療所を開設。
- 昭和22.3.29 学制改制によりA級医専に決定。
- 昭和22.5.8 第5回入学式挙行。
- 昭和23.3.14 第1回卒業式挙行。
- 昭和23.7.24 九州帝国大学名誉教授医学博士大平得三校長就任。
- 昭和24.3.13 第2回卒業式挙行。
- 昭和25.3.12 第3回卒業式挙行。
- 昭和26.3.17 第4回卒業式挙行。
- 昭和26.4.1 町野碩夫教授、校長事務取扱就任。
- 昭和26.12.24 町野碩夫教授校長就任。
- 昭和27.3.14 第5回卒業式挙行。
- 昭和27.3.31 学制改革により県立鹿児島医学専門学校廃止。

## (2) 施設状況

### ○ 敷地

第1第2校地合計	21,400坪
附属病院	10,500坪
附属温泉研究所	4,038坪

- 建 物
  - 第 1 第 2 校舎合計 1,324.1坪
  - 附 属 病 院 5,700.0坪
  - 附属温泉研究所 466.8坪
- 機械器具及標本
  - 機 械 器 具 5,795点
  - 標 本 8,366点 (実習用肉眼標本5,000枚を含む。)
- 図 書
  - 和 書 1,587冊
  - 洋 書 758冊
  - 雜 誌 125種
- 実習屍体数 (昭和18.19.20年度分)
  - 系 統 解 剖 34
  - 病 理 解 剖 11

### (3) 教官、職員配置状況

教 授

科 別	職 別	略	歴	氏 名	在 職 期 間
校 長		九大医学部卒	医博	高安 慎一	S 18.3.25 ~ S 23.6.12
"		"	医博	大平 得三	S 23.7.24 ~ S 26.3.31
"		"	医博	町野 碩夫	S 26.12.24 ~ S 27.3
解 剖 学	教 授	熊本医大	昭和11年卒 医博	大森 浅吉	S 18.4 ~ S 27.3
"	教 授	熊本医大	昭和13年卒 医博	佐藤 堅	S 24.3 ~ S 27.3
生 理 学	教 授	東京慈恵医専	大正12年卒 医博	杉本 良一	S 18.9 ~ S 21.9
"	教 授	熊本医大	昭和15年卒 医博	松本 保久	S 23.3 ~ S 27.3
医 化 学	講 師	九大医学部	昭和15年卒 医博	鳥飼 明	S 18.4 ~ S 22.9
"	教 授	九大医学部	昭和13年卒 医博	大保不二夫	S 23.3 ~ S 27.3
薬 理 学	教 授	熊本医大	昭和10年卒 医博	小島喜久男	S 19.6 ~ S 27.3
病 理 学	教 授	九大医学部	昭和12年卒 医博	石原 正之	S 18.12 ~ S 23.3
"	教 授	東京慈恵医大	昭和14年卒 医博	川村 弘徳	S 23.7 ~ S 26.11

細菌学	教授	長崎医大	昭和12年卒	医博	柴原 義夫	S 19.4 ~ S 20.6
"	講師	熊本医大	昭和19年卒		徳田 三士	S 21. ~ S 23.
"	教授	満州医大	昭和 6 年卒	医博	広木 彦吉	S 24.1 ~ S 25.9
"	教授	九大医学部	昭和15年卒	医博	平野 清寿	S 25.11 ~ S 27.3
予防医学	教授	九大医学部	昭和10年卒	医博	宮崎 一郎	S 18.4 ~ S 22.12
"	教授	京成大医学部	昭和 6 年卒	医博	長花 操	S 23.4 ~ S 25.7
"	教授	九大医学部	昭和15年卒	医博	北原 経太	S 23.3 ~ S 27.3
法医学	教授	熊本医大	昭和 8 年卒	医博	三上 芳雄	S 26.7 ~ S 27.3
内科 (一)	教授	九大医学部	昭和 3 年卒	医博	桜井 之一	S 18.4 ~ S 26.2
"	教授	九大医学部	昭和10年卒	医博	榊屋 富一	S 26.2 ~ S 27.3
内科 (二)	教授	九大医学部	昭和 9 年卒	医博	佐藤 八郎	S 22.7 ~ S 27.3
外科学	教授	九大医学部	大正 7 年卒	医博	石田堅三郎	S 18.4 ~ S 20.6
"	教授	九大医学部	昭和10年卒	医博	森 良雄	S 20.10 ~ S 21.8
"	教授	九大医学部	昭和 8 年卒	医博	内山 八郎	S 22.8 ~ S 27.3
整形外科学	教授	九大医学部	昭和14年卒	医博	宮崎 淳弘	S 20.6 ~ S 27.3
産婦人科学	教授	九大医学部	大正15年卒	医博	町野 碩夫	S 18.4 ~ S 27.3
小児科学	教授	熊本医大	昭和 4 年卒	医博	長野 祐憲	S 18.4 ~ S 26.3
"	教授	九大医学部	昭和 8 年卒	医博	永山 徳郎	S 26.9 ~ S 27.3
精神科学	教授	九大医学部	昭和 3 年卒	医博	佐藤 幹正	S 24.9 ~ S 27.3
皮膚泌尿器 科	教授	九大医学部	昭和12年卒	医博	梶島 強一	S 19.8 ~ S 21.3
"	教授	九大医学部	昭和16年卒	医博	岡元健一郎	S 21.12 ~ S 27.3
眼科学	教授	熊本医大	昭和 4 年卒	医博	高野三喜雄	S 18.4 ~ S 22.12
"	教授	熊本医大	昭和 4 年卒	医博	高安 晃	S 23.3 ~ S 27.3
耳鼻咽喉 科	教授	九大医学部	昭和 6 年卒	医博	寺師 忠雄	S 18.4 ~ S 22.1
"	教授	熊本医大	昭和 8 年卒	医博	野坂 保次	S 22.1 ~ S 27.3
物療科学	教授	九大医学部	昭和 6 年卒	医博	縄田 千郎	S 18.4 ~ S 27.3
齒科学	教授	東京齒科医専	大正14年卒	医博	三宅 久夫	S 21.3 ~ S 23.11
"	教授	東京齒科医専	昭和 2 年卒	医博	副島 侃二	S 24.3 ~ S 27.3

## 医専一般課目

科 目	職 別	略 歴	氏 名	在 職 期 間
人 文	教 授	東大文学部 昭和4年卒	森田 勝	S 18.4 ～S 22.6
独 語	講 師	上智大学 大正10年卒	守屋 興雄	S 22.7 ～S 22.9
英 語	講 師	東大文学部 昭和9年卒	松村 二郎	S 21.5 ～S 22.6
体 操	助教授	日本体操 昭和3年卒	水流 国彦	S 21.3 ～S 22.6
”	講 師	日本体操 大正4年卒	難波 菊平	S 21.3 ～S 22.12

## 事 務 部

職 名	氏 名	在 職 期 間
庶 務	野口 勝利	S 18.3 ～S 23.9
庶 務	泉 顕蔵	
会 計	遠矢 泰蔵	S 18.4.10 ～S 24.7.14

## (4) 卒 業 生 状 況

昭和23年3月14日	102名
昭和24年3月13日	137名
昭和25年3月12日	143名
昭和26年3月17日	111名
昭和27年3月14日	54名 (追加4名を含む)
計	547名

昭和17年12月に医学専門学校が設置され、昭和33年5月に国立鹿児島大学医学部への移管が完了するまでの間は、医科大学、鹿児島県立大学医学部等、2つないしは3つの医育機関が併置され相互の関係は複雑である。それらの横の関係を確認にする為に、明治2年の医学校の設置から医科大学が廃止された昭和36年3月までの主な沿革を年表にまとめてみると次のようになる。

## 医学部主要沿革史年表

年 月 日	医学専門学校	医 科 大 学	県立大学医学部	国立大学医学部
明治2年3月 (1869年)	薩摩藩病院および附属医学校を設立			
2.12	英国人ウイリアム・ウイリス氏病院長兼医学校長として着任			
4. 7	廃藩置県に伴ない県病院および附属医学校へ移管			
13. 6	県立鹿児島医学校および附属病院開設布告			
21. 3	文部省令により医学校および附属病院を廃止、その後病院のみ民営、鹿児島市営、県営として存続			
昭和17.12.11 (1942年)	医専設置認可			
18. 3.25	高安校長就任			
22. 3.29	A級医専決定			
6.18		医大設置認可 (予科)		
23. 7.24	大平教授就任 (医大予科長、学長事務取扱を併任)			
24. 2.21			県立大学設置認可 (医専、医大の統合)	
3.31			大平医学部長併任	
4. 8		学部開設認可		
4.20			第1回入学式	
6.22			県立鹿児島大学を鹿児島 県立大学と改称	
26. 3.31		予科廃止		
4. 1	町野教授、医専校長、医大学長、県大医学部長、各事務取扱に就任			
12.24	町野教授、医専校長、医大学長、県大医学部長に就任			
27. 2.20			医学部開設認可	
3.31	医専廃止			
27. 4.18			医学部第1回入学式	
28.12.24		町野教授、医大学長、県大医学部長に再任		
29. 5.12		研究科開設		
30. 1.20			鹿児島県立大学工学部医学進学課程設置認可	
7. 1			国立移管開始	
12.24	縄田教授、医大学長、県大医学部長、国大医学部長に就任			
32. 4. 1			看護学校附置	
7. 4		学位審査権附与		
10. 1			助産婦学校附設	
12.24	佐藤(八)教授、医大学長、県大医学部長、国大医学部長に就任			
33. 4.30			鹿県大医学部廃止	
5. 1			国立移管完了	
34. 4. 1			大学院設置認可	
11.19			開学10周年記念式典	
12.24			佐藤(八)医学部長就任	
35. 4. 1			熱研施設設置	
36. 3.31		医科大学廃止		

以後、国立鹿児島大学医学部の沿革参照



# 第三章 県立鹿児島医科大学



### 第3章 県立鹿児島医科大学

第2次世界大戦の終了と共に、我が国は未曾有の一大変革が強行され、その一環として医育制度にも、医学教育の統一、医師の資質向上の必要性が強調され、全国医専を大学程度に昇格させ、（予科3年、本科4年）卒業後、さらに一年間インターンを終了して、国家試験を通過した者に医師の資格を与へるといふ制度となった。これに伴って、医専の存廃が問題となり、わが鹿児島医専も廃校の危機に直面するに及んだのである。しかしながら医専が設立された当初の趣旨にも明らかな如く、鹿児島を含む南九州地区に医育機関の存在が必要なことは勿論、戦争で台北大学を失ったその当時の事としては地域的にみて熱帯医学の研究上も、わが国における最重要なる医育機関であるとの自覚から、昭和21年10月25日、鹿児島県令において満場一致、昇格が決議され、直ちに、県立鹿児島医科大学設置の認可申請がなされた。かくて当時の学内外の関係者の努力が続けられる中に、翌22年6月18日、設置認可がなされ、同7月14日に予科第一回の入学式が挙行された。ここに設置認可前後の公文書等を別記し、併せて、その沿革を記載しておく。

22学第351号

昭和22年7月4日

鹿児島県知事 重成 格

県立医学専門学校長殿

県立鹿児島医科大学設立認可について  
標記の件については別紙写の通り認可されたから茲に通知する

鹿学5号

昭和22年6月18日

文部省学校教育局長 日高第四郎

鹿児島県知事殿

県立鹿児島医科大学設立認可について

昭和21年11月1日附申請の標記のことについて本日別紙の通り指令があったが右は左記事項を条件として詮議したものであるから御了相成度く命によって通達する

記

1. 大学予科開設は本年6月なるも学部開設については再審査の上おって指示すること
2. 学生生徒定員は学部40名予科40名とすること、但し昭和22年度開設に当っては予科第1学年50名第2学年45名を募集して差支えないこと

~~~~~  
鹿学5号

県立鹿児島医科大学設立者  
鹿児島県

昭和21年11月1日附申請の学校教育法98条第二項によって県立鹿児島医科大学を設立することはこれを認可する。

昭和22年6月18日

文部大臣 森戸辰男

~~~~~  
鹿学5号

県立鹿児島医科大学設立者  
鹿児島県

昭和21年11月1日附申請の教員数並に兼任教員数の割合を定めることはこれを左記の通り認可する

昭和22年6月18日

文部大臣 森戸辰男

記

大学予科	教員数	15名
	専任	7名
	兼任	8名
学 部	教員数	49名
	専任	48名
	兼任	1名

## (1) 沿革

- 昭和22. 6.18 県立鹿児島医科大学設置認可。
- 昭和22. 7.14 県立鹿児島医科大学予科開設（第1第2学年設置）  
予科第1回入学式举行。
- 昭和23. 4.15 予科第2回入学式举行。
- 昭和23. 7.24 大平得三博士医専校長医大予科長・医大学長事務取扱就任。
- 昭和23. 8.31 本館及び講堂，図書室竣工医大予科校舎在外資産のため，占領軍命令により純心女学校に返還。
- 昭和24. 1.22 予防・細菌・衛生学教室竣工。
- 昭和24. 2.21 県立鹿児島大学設置認可され医専及び医大は同大学に統合。
- 昭和24. 4. 8 県立鹿児島医科大学学部・開設認可。
- 昭和24. 4.20 第1回入学式举行。
- 昭和25. 4.19 第2回入学式举行。
- 昭和26. 3.31 学制改革により県立鹿児島医科大学予科廃止。
- 昭和26. 4. 1 町野碩夫教授医大学長事務取扱就任。
- 昭和26. 4.16 第3回入学式举行。
- 昭和26. 6.23 病理・法医・薬理学教室竣工。
- 昭和26.12.24 町野碩夫教授医大学長就任。
- 昭和27. 3.31 図書書庫竣工。
- 昭和28. 3.11 県立鹿児島医科大学第1回学士試験合格証書授与式举行。
- 昭和29. 3. 5 県立鹿児島医科大学第2回学士試験合格証書授与式举行。
- 昭和29. 5.12 県立鹿児島医科大学研究科開設。
- 昭和30. 3. 5 県立鹿児島医科大学第3回学士試験合格証書授与式举行。
- 昭和32. 7. 4 県立鹿児島医科大学に対し学位審査権附与。
- 昭和32.12.24 佐藤八郎教授医大学長就任。
- 昭和36. 3.31 県立鹿児島医科大学廃止。

## (2) 施設状況

○ 敷地	
校地	13,200.00坪
附属病院	9,527.68坪
附属研究所	4,058.00坪

- 建 物
  - 校舎その他 1,943.95坪
  - 附属病院 4,291.5坪
  - 附属研究所 408.28坪
- 機械器具及標本
  - 機 械 器 具 14,697点
  - 標 本 6,260点
- 図 書
  - 一般教育図書 1,562冊
  - 専 門 図 書 6,496冊
  - 雑 誌 そ の 他 11,341冊

### (3) 教官・職員配置状況

#### 教 授

科 目	職別	略	歴	氏 名	在 職 期 間
解剖学(一)	教 授	熊 本 医 大	昭 和 11 年 卒 医 博	大 森 浅 吉	S 24.3 ~ S 36.3
解剖学(二)	教 授	熊 本 医 大	昭 和 13 年 卒 医 博	佐 藤 堅	S 26.2 ~ S 36.3
生 理(一)	教 授	熊 本 医 大	昭 和 15 年 卒 医 博	松 本 保 久	S 26.2 ~ S 36.3
生 理(二)	教 授	九 大 医 学 部	昭 和 20 年 卒 医 博	後 藤 昌 義	S 31.4 ~ S 34.6
”	教 授	九 大 医 学 部	昭 和 23 年 卒 医 博	大 村 裕	S 34.10 ~ S 36.3
医 化 学	教 授	九 大 医 学 部	昭 和 13 年 卒 医 博	大 保 不 二 夫	S 24.3 ~ S 36.3
薬 理 学	教 授	熊 本 医 大	昭 和 10 年 卒 医 博	小 島 喜 久 男	S 24.3 ~ 36.3
病 理	教 授	阪 大 医 学 部	昭 和 11 年 卒 医 博	川 路 清 高	S 27.4 ~ S 36.3
細 菌 学	教 授	九 大 医 学 部	昭 和 15 年 卒 医 博	平 野 清 寿	S 28.5 ~ S 36.3
公衆衛生学	教 授	九 大 医 学 部	昭 和 15 年 卒 医 博	北 原 経 太	S 26.2 ~ S 36.3
衛 生 学	”	”	”	”	”
法 医 学	教 授	熊 本 医 大	昭 和 8 年 卒 医 博	三 上 芳 雄	S 26.7 ~ S 31.3
”	教 授	九 大 医 学 部	昭 和 16 年 卒 医 博	城 哲 男	S 31.4 ~ S 26.2
寄生虫学	”	東 北 大 理 学 部	昭 和 11 年 卒 医 博	阿 部 康 男	S 27.4 ~ S 36.3
内 科(一)	教 授	九 大 医 学 部	昭 和 10 年 卒 医 博	榎 屋 富 一	S 26.2 ~ S 33.6

内科学(一)	教授	九大医学部	昭和13年卒	医博	金久 卓也	S 34.4 ~ S 36.3
内科学(二)	教授	九大医学部	昭和 9 年卒	医博	佐藤 八郎	S 25.3 ~ S 36.3
外科学(一)	教授	九大医学部	昭和 5 年卒	医博	内山 八郎	S 26.2 ~ S 36.3
“ (二)	“	九大医学部	昭和16年卒	医博	秋田 八年	S 33.10 ~ S 36.3
神経精神医学	教授	九大医学部	昭和 3 年卒	医博	佐藤 幹正	S 25.3 ~ S 36.3
小児科学	教授	熊本医大	昭和 4 年卒	医博	長野 祐憲	S 25.3 ~ S 26.3
“	教授	九大医学部	昭和 8 年卒	医博	永山 徳郎	S 26.9 ~ S 36.3
放射線医学	教授	九大医学部	昭和 6 年卒	医博	縄田 千郎	S 25.3 ~ S 36.3
産婦人科学	教授	九大医学部	大正15年卒	医博	町野 碩夫	S 25.3 ~ S 36.3
整形外科学	教授	九大医学部	昭和14年卒	医博	宮崎 淳弘	S 26.4 ~ S 36.3
耳鼻咽喉科学	教授	熊本医大	昭和 8 年卒	医博	野坂 保次	S 25.3 ~ S 31.1
“	教授	九大医学部	昭和13年卒	医博	久保 隆一	S 31.3 ~ S 36.3
眼 科 学	教授	熊本医大	昭和 4 年卒	医博	高安 晃	S 25.3 ~ S 36.3
皮膚泌尿 器 科 学	教授	九大医学部	昭和16年卒	医博	岡元健一郎	S 27.3 ~ S 36.3
歯 科 学	教授	東京歯科医専	昭和 2 年卒	医博	副島 侃二	S 25.3 ~ S 36.3

### 医大予科教官

科 別	職 別	略 歴	氏 名	在 職 期 間
独 語 倫理学	教授	上智大学 大正10年卒	守屋 興雄	S 22. 9~S 26. 3
独英語	“	東大文学部 昭和 9 年卒	松村 二郎	S 22. 6~S 26. 3
化 学	“	京大理学部 昭和 9 年卒	中村 純夫	S 23. 1~S 26. 3
数 学	“	阪大理学部 昭和11年卒	南谷 知忠	S 23.11~S 26. 3
英 語	“	京大文学部 昭和 6 年卒	林 茂	S 23.12~S 26. 3
体 操	助教授	日本体操 昭和 3 年卒	水流 国彦	S 22. 6~S 26. 3
物 理	教授	京大理学部 昭和20年卒	森 耕一	S 24. 9~S 26. 3
人 文	“	京大文学部 昭和 4 年卒	森田 勝	S 22. 6~S 25. 3

事務部

大学長 大 平 得 三  
 事務長 遠 矢 泰 藏 自昭和22年 6月18日  
 至 " 27年 1月17日  
 " 有 村 一 男 自昭和27年 1月17日  
 至 " 36年 3月

(4) 卒業生状況

昭和28年 3月11日 32名  
 昭和29年 3月 5日 43名  
 昭和30年 3月 5日 54名 (追加 7名を含む)  
 計 134名 ( " )

(5) 研究科、専修生ならびに学位審査状況

従来、学位論文の審査については、他大学に依頼し、種々の不便と支障を感じていたので、学位審査権の附与方を、機会あるごとに請願していた。一方、旧制度の学位論文作成のための研究を目的としたパートタイム制の専攻制が昭和27年 4月に設置され、続いて、同様な目的を持った旧大学令に基づいた研究科が昭和29年 5月に設立され、専攻生、研修生とも多数の入学者があった。一方学位審査権の方は、昭和31年11月の文部省関係者の実態調査を受け、翌32年 7月 4日、校大第171号をもって、県立鹿児島医科大学に対し、学位審査権が附与された。本医科大学は昭和36年 3月31日まで存置し、研究科、学生および専攻生（専修生と昭和32年に改称）の教授、研究指導ならびに学位論文の審査をおこなってきた。年度制の学位審査の状況は次のとおりである。なお、学位取得者の氏名は、新制度を含めて別に記する。

年 度	審 査 件 数	学 位 記 番 号
32年度	24件	1 ~ 24
33	57	25 ~ 81
34	132	82 ~ 213
35	429	214 ~ 642
計	642	

# 第四章 鹿兒島県立大学医学部



## 第4章 鹿児島県立大学医学部

鹿児島県立大学は県立鹿児島医科大学，県立鹿児島医学専門学校ならびに鹿児島県立工業専門学校を母体として，昭和24年2月21日付をもって設立が認可され，同時に工学部の発足をみ，昭和25年3月には鹿児島県立女子専門学校を短期大学としてこれに加えた。しかし，医学部（新制）においては，前記の医科大学（旧制）と医専が併設されていた関係もあり，その増設認可は昭和27年2月になったのである。この間の事情を以下の設立当時の書類によって振り返り，あわせてその沿革を記しておきたい。

27文第89号

昭和27年4月15日

鹿児島県総務部長

鹿児島県立大学長殿

大学学部増設認可について

右について，文部省管理局長から認可指令書の送付を受けたので，別紙（写）参照の上運営及増設認可条件の履行については，遺漏のないようお取り計らい下さい。

地管第303号

昭和27年2月20日

文部省管理局長 近藤直人

鹿児島県知事殿

大学学部増設認可について

昭和26年10月10日付で申請のあった鹿児島県立大学学部増設のことは，別紙認可指令書のように認可になりましたので，その運営および増設認可条件の履行については遺漏のないようお取計らい願います。

地管第308号

鹿児島県

昭和26年10月10日付で申請のあった鹿児島県立大学学部増設のことは、大学設置審議会の答申に基いて、学校教育法第4条により下記のように認可します。

昭和27年2月20

文部大臣 天野貞祐

記

- |                   |   |
|-------------------|---|
| 1. 増設学部の名称        | 医学部医学科  |
| 2. 増設学部の位置        | 鹿児島県鹿児島市鴨池町   |
| 3. 増設学部の修業<br>年 限 | 4年  |
| 4. 増設学部の開設<br>年 次 | 第1年次  |
| 5. 増設学部の開設<br>時 期 | 昭和27年度  |
| 6. 増設学部の認可<br>条 件 | (1) 新しい図書、雑誌を備付すること。<br>(2) 講座の研究費を増額すること。<br>(3) 図書の講入方法及び整理を改善すること。<br>(4) 新に学部学科を増設し、又は既設の学部学科等を変更しようとする場合は当分の間大学設置審議会に協議すること。<br>(5) 教員組織については、これが充実にいたるまで当分の間大学設置審議会に協議すること。 |

以上、大学の目的使命を達成するため、必要な整備拡充を行ってすみやかに大学としての完成を期すること。

なほ、教員組織、学科履修方法、諸施設、設備その他につき報告を求め、又必要のある場合には大学設置審議会として審議し、変更を求めることがある。

~~~~~  
30鹿県大総発第59号の2

昭和30年2月14日

鹿児島県立大学長 福田得志

医学部長殿

医学進学課程設置について

このことについて文部事務次官から別紙写のとおり認可の通知がありましたからお知らせします

地大第11号

昭和30年 1月20日

鹿児島県知事殿

文部事務次官

田 中 義 男

進学課程設置について

昭和29年 9月30日付で申請のあった進学課程設置のことは、下記の通り設置してさしつかえないことになりました。

よって、その運営及び設置条件の履行については、遺漏のないようお取り計らい願います。

記

1. 名 称 鹿児島県立大学工学部医学進学課程（同大医学部）  
入学定員 40名
2. 位 置 鹿児島市下伊敷町666
3. 修業年限 2年
4. 開設年次 第一年次
5. 開設時期 昭和30年度
6. 設置条件
  - (1) 自然科学関係の図書を増強すること。
  - (2) 自然科学関係の標本機械器具は、なほ整備すること。
  - (3) 新たに学科（専攻を含む）を増設し又は既設の学部学科（専攻を含む）等を変更しようとする場合は、当分の間文部大臣に協議すること。
  - (4) 教員組織については、これが充実にいたるまで、当分の間文部大臣に協議すること。

以上大学の目的使命を達成するため、必要な整備拡充を行って、すみやかに大学としての完成を期すること。

なほ、教員組織、学科履修方法、施設、設備その他について報告を求め、又必要がある場合には、文部大臣として審査し、変更を求めることがある。

備考

設備の方式は、医学部の修業年限を6年とし、専門課程と進学課程をおくことが望ましい。

## (1) 沿 革

- 昭和24. 2.21 県立鹿児島大学設置認可せられ県立医専及び県立医大は同大学に統合さる。
- 昭和24. 3.31 大平得三博士県立鹿児島大学医学部長就任。
- 昭和24. 6.22 県立鹿児島大学を鹿児島県立大学と改称。
- 昭和24. 7.11 大平得三鹿児島県立大学長就任（医学部長を併任）
- 昭和26. 4. 1 町野碩夫教授医学部長事務取扱就任。
- 昭和26.10.10 鹿児島県立大学医学部設置認可申請書を文部大臣宛提出す。
- 昭和26.12.24 町野碩夫教授医学部長就任。
- 昭和27. 2.20 鹿児島県立大学医学部設置認可。
- 昭和27. 4.18 第1回入学宣誓式挙行。
- 昭和27. 4.24 附属病院隣接地民家よりの出火により類焼全焼す。
- 昭和27. 5. 2 附属病院復興期成会設置。
- 昭和27. 5.19 附属病院再建工事着手。
- 昭和28. 4.18 第2回入学宣誓式挙行。
- 昭和28.12.24 町野碩夫教授医学部長再選。
- 昭和29. 4.17 第3回入学宣誓式挙行。
- 昭和29. 5.12 第1回奄美大島巡回診療班派遣。
- 昭和30. 3. 4 附属病院新築落成式挙行。
- 昭和30. 4.16 第4回入学宣誓式挙行。
- 昭和30. 6.26 奄美大島診療班派遣。
- 昭和30. 7. 1 国立移管年次計画により職員並びに9講座移管（解剖一，解剖二，生理一，生理二，生化学，薬理学，細菌学，病理一，病理二）。
- 昭和30.12.24 縄田千郎教授県大医学部長就任。
- 昭和31. 3. 5 第1回卒業式挙行。
- 昭和31. 4. 1 国立移管年次計画により職員並びに7講座移管（衛生，法医，内科一，内科二，神経精神科，小児科，産婦人科）。
- 昭和31. 6.30 奄美大島診療班派遣。
- 昭和32. 2.16 鴨池基礎教室並びに事務室山下町（旧七高跡）新校舎へ移転（完了19日）。

- 昭和32. 3. 5 第2回卒業式挙行。
- 昭和32. 4. 1 国立移管年次計画により職員並びに4講座移管（外科一，外科二，皮膚泌尿器科，耳鼻咽喉科）。
- 昭和32. 4. 1 鹿児島県立看護学校を医学部に附置。
- 昭和32. 5.30 奄美大島診療班派遣。
- 昭和32.10. 1 鹿児島県立大学医学部附属助産婦学校開設。
- 昭和32.12.24 佐藤八郎医学部長就任。
- 昭和33. 3. 5 第3回卒業式挙行。
- 昭和33. 4.30 鹿児島県立大学医学部廃止。
- 昭和33. 7. 1 鹿児島県立大学医学部を昭和33年4月30日限り廃止認可公布

## (2) 施設状況

### ○ 敷地

#### 校地

|                   |              |
|-------------------|--------------|
| 医学部               | 13,200.00坪   |
| 附属病院              | 9,527.63坪    |
| 霧島分院              | 4,038.00坪    |
| 附属看護学校<br>〃 助産婦学校 | (873.00坪) 共用 |

### ○ 建物

|                   |           |
|-------------------|-----------|
| 医学部               | 1,677.05坪 |
| 附属病院              | 4,605.00坪 |
| 霧島分院              | 445.56坪   |
| 附属看護学校<br>〃 助産婦学校 | 637.90坪   |

### ○ 機械器具及び標本

|      |         |
|------|---------|
| 機械器具 | 13,338点 |
| 標本   | 33,048点 |

### ○ 図書

|        |        |
|--------|--------|
| 一般教育図書 | 795冊   |
| 専門図書   | 9,425冊 |
| 雑誌     | 332種   |

## (3) 教官，職員配置状況

| 科 別     | 職別    | 略           | 歴          | 氏 名   | 在職期間               |
|---------|-------|-------------|------------|-------|--------------------|
| 解剖      | (一)教授 | 熊本医大        | 昭和11年卒 医博  | 大森 浅吉 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 解剖      | (二)教授 | 熊本医大        | 昭和13年卒 医博  | 佐藤 堅  | S 28.4<br>~ S 33.4 |
| 生理      | (一)教授 | 熊本医大        | 昭和15年卒 医博  | 松本 保久 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 生理      | (二)教授 | 九大医学部       | 昭和20年卒 医博  | 後藤 昌義 | S 31.4<br>~ S 33.4 |
| 生化学     | 教授    | 九大医学部       | 昭和13年卒 医博  | 大保不二夫 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 病理学     | 教授    | 阪大医学部       | 昭和11年卒 医博  | 川路 清高 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 薬理学     | 教授    | 熊本医大        | 昭和10年卒 医博  | 小島喜久男 | S 24.3<br>~ S 33.4 |
| 細菌学     | 教授    | 九大医学部       | 昭和15年卒 医博  | 平野 清寿 | S 29.7<br>~ 33.4   |
| 寄生虫学    | 教授    | 東北帝大<br>理学部 | 昭和11年卒 医博  | 阿部 康男 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 衛生学     | 教授    | 阪大医学部       | 昭和19年卒 医博  | 西尾 一男 | S 31.4<br>~ S 33.4 |
| 公衆衛生学   | 教授    | 九大医学部       | 昭和15年卒 医博  | 北原 経太 | S 27.4<br>~ 33.4   |
| 法医学     | 教授    | 熊本医大        | 昭和 6 年卒 医博 | 三上 芳雄 | S 27.4<br>~ S 31.3 |
| 〃       | 教授    | 九大医学部       | 昭和16年卒 医博  | 城 哲男  | S 31.4<br>~ S 33.4 |
| 内科      | (一)教授 | 九大医学部       | 昭和10年卒 医博  | 榎屋 富一 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 内科      | (二)教授 | 九大医学部       | 昭和 9 年卒 医博 | 佐藤 八郎 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 神経精神医学  | 教授    | 九大医学部       | 昭和 3 年卒 医博 | 佐藤 幹正 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 小児科学    | 教授    | 九大医学部       | 昭和 8 年卒 医博 | 永山 徳郎 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 外科学     | 教授    | 九大医学部       | 昭和 5 年卒 医博 | 内山 八郎 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 整形外科学   | 教授    | 九大医学部       | 昭和14年卒 医博  | 宮崎 淳弘 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 産婦人科学   | 教授    | 九大医学部       | 大正15年卒 医博  | 町野 碩夫 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 眼科学     | 教授    | 熊本医大        | 昭和 4 年卒 医博 | 高安 晃  | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 耳鼻咽喉科学  | 教授    | 熊本医大        | 昭和 8 年卒 医博 | 野坂 保次 | S 27.4<br>~ S 31.1 |
| 〃       | 教授    | 九大医学部       | 昭和13年卒 医博  | 久保 隆一 | S 31.3<br>~ S 33.4 |
| 皮膚泌尿器科学 | 教授    | 九大医学部       | 昭和16年卒 医博  | 岡元健一郎 | S 28.4<br>~ S 33.4 |
| 放射線医学   | 教授    | 九大医学部       | 昭和 6 年卒 医博 | 縄田 千郎 | S 27.4<br>~ S 33.4 |
| 歯科口腔外科学 | 教授    | 東京歯科医専      | 昭和 2 年卒 医博 | 副島 侃二 | S 27.4<br>~ S 33.4 |

|     |      |             |
|-----|------|-------------|
| 学部長 | 大平得三 |             |
| 〃   | 町野碩夫 |             |
| 〃   | 縄田千郎 |             |
| 事務部 |      |             |
| 事務長 | 遠矢泰蔵 | S24.7～S27.1 |
|     | 有村一男 | S27.1～S33.4 |

#### (4) 卒業生数

鹿児島県立大学医学部卒業生数は次のとおりである。

|           |               |
|-----------|---------------|
| 昭和31年3月5日 | 45名（追加1名を含む）  |
| 昭和32年3月5日 | 42名（追加2名を含む）  |
| 昭和33年3月5日 | 47名（追加1名を含む）  |
| 計         | 134名（追加4名を含む） |



第五章 国立鹿児島大学医学部



## 第5章 国立鹿児島大学医学部

安永3年の医学院の設置に始まった、鹿児島の医学教育は、明治初期ウィルスによって近代西洋医学の種をまかれてから医学校、県立医専、県立医科大学など幾星霜の変せんを経ながら発展し、その間、我国最南地域の特殊研究調査にあたり、多大の業績をあげてきた。しかし、本邦最南端の最高学府として、地域の医療水準の向上に、また人材の養成に、より一層の成果をあげるためには、国立移管が久しく切望されてきた。そして、昭和30年7月待望の国立鹿児島大学への統合が決定されたのである。

### (1) 沿革

- 昭和30. 7. 1 国立移管年次計画により、職員ならびに9講座移管（解剖一、解剖二、生理一、生理二、生化学、薬理学、細菌学、病理一、病理二）。
- 昭和30.12.24 縄田千郎教授，医学部長就任。
- 昭和31. 4. 1 国立移管年次計画により、職員ならびに7講座（衛生，法医，内科一，内科二，神経精神科，小児科，産婦人科）。
- 昭和31. 4.16 鹿児島大学医学部入学式挙行。
- 昭和31. 6.30 奄美大島診療班派遣
- 昭和32. 2.16 鴨池基礎教室ならびに事務室山下町（旧七高跡）新校舎へ移転（19日完了）。
- 昭和32. 4. 1 国立移管年次計画により職員ならびに四講座移管（外科一，外科二，皮膚泌尿器科，耳鼻咽喉科）。
- 昭和32. 4.15 鹿児島大学医学部入学式。
- 5.30 奄美大島診療班派遣。
- 12.24 佐藤八郎教授，医学部長就任。
- 昭和33. 4.15 鹿児島大学医学部入学式。
5. 1 国立移管年次計画により，職員ならびに三講座外附属施設移管，移管完了（整形外科，眼科，放射線科，附属病院，同霧島分院，附属看護学校，附属助産婦学校）。

- 6.27 大島郡三島村における風土病調査研究および無料巡回診療班派遣。
- 6.29 大島郡十島村における風土病調査研究および無料巡回診療班派遣。
- 7. 1 奄美大島北部，南部における風土病調査および無料巡回診療班派遣。
- 昭和34. 3.20 鹿児島大学医学部第1回卒業式。
  - 4. 1 歯科に口腔外科学講座増設認可。
  - 4. 1 鹿児島大学大学院医学研究科設置認可。
  - 4.15 鹿児島大学医学部入学式。
  - 6.17 鹿児島大学大学院医学研究科入学宣誓式挙行。
  - 7. 5 奄美大島中南部における風土病研究調査並に無料巡回診療班派遣（10日間）。
  - 7.21 三島村十島村における風土病研究調査並びに無料巡回診療班派遣。
- 11.19 鹿児島大学開学10周年記念式典挙行。
- 12.24 佐藤八郎教授鹿大医学部長就任（再任）。
- 昭和35. 3.19 鹿児島大学卒業式挙行。
  - 4. 1 鹿児島大学医学部附属熱帯医学研究施設設置（1部門）。
  - 4. 1 阿部康男教授熱帯医学研究施設長併任。
- 昭和35. 4.13 鹿児島大学入学式挙行（中央公民館）。
  - 4.21 鹿児島大学大学院並びに各学部専攻科入学式挙行（医学部講堂）。
  - 7. 5 奄美大島巡回診療班派遣（12日まで）。
- 10. 1 名瀬市県立大島病院において熱帯医学研究所開所式挙行。
- 昭和36. 3.20 鹿児島大学卒業式挙行。
  - 4. 1 熱帯医学研究施設1部門増設。
  - 4. 1 鹿大医学部附属保健婦学校設置。
  - 4.11 鹿児島大学入学式挙行。
  - 4.27 鹿児島大学大学院並びに各学部専攻科入学式挙行。
  - 7. 5 奄美大島巡回診療班派遣（12日まで）。
  - 12.24 町野碩夫教授医学部長就任。
- 昭和37. 3.19 鹿児島大学卒業式挙行。

- 昭和37. 3.31 アイソトープ実験室完成。  
4.11 鹿児島大学入学式挙行。  
5.10 鹿児島大学大学院並びに各学部専攻科入学式挙行。  
7. 5 奄美大島巡回診療班派遣（13日まで）。  
11.15 熱帯医学研究施設，名瀬研究室および同古仁屋研究室建物完成。
- 昭和38. 3.19 鹿児島大学卒業式挙行。  
4. 1 医学部学生定員40名を60名に増員。  
4.11 鹿児島大学入学式挙行。  
4.18 鹿児島大学大学院並びに各学部専攻科入学式挙行。  
5. 8 熱帯医学研究施設（名瀬研究室）新築落成式挙行。  
5. 9 熱帯医学研究施設（古仁屋研究室）。新築落成式挙行，伝研奄美出張所開所式と併催。  
7.23 奄美大島巡回診療班出発（8月1日まで）。  
12.24 町野碩夫教授医学部長再任。
- 昭和39. 3.19 鹿児島大学卒業式挙行。  
4. 1 医動物学講座増設。  
4.11 鹿児島大学入学式挙行。
- 昭和39. 4.16 鹿児島大学大学院並びに各学部専攻科入学式挙行。  
7.13 奄美大島巡回診療班派遣（21日まで）。  
8.10 故副島侃二教授の医学部葬西本願寺鹿児島別院において執行。  
11.17 医学部（附属病院，附属学校を含む）の将来の発展を期し鹿児島市亀ヶ原団地へ移転を決定。
- 昭和40. 3.18 町野碩夫教授定年退官記念式挙行，医学部旗寄贈さる。  
3.19 鹿児島大学卒業式挙行。  
4. 1 皮膚科学講座増設。  
4. 1 佐藤八郎教授医学部長就任。  
4.21 鹿児島大学，鹿児島大学大学院，学部専攻科入学式。  
7.10 奄美大島巡回診療班派遣（7月21日帰鹿）  
7.20 新住居表示法により医学部は鹿児島市城山町7番82号となる。  
8.10 沖縄学術調査診療団派遣。
- 昭和41. 3.19 鹿児島大学卒業式。
- 昭和41. 4. 1 公衆衛生学講座増設。  
4. 1 医学部定員60名を80名に増員。

- 4. 1 新住居表示法により附属熱帯医学研究施設名瀬市研究室は名瀬市平田町 3 番 1 号となる。
  - 4.13 鹿児島大学入学式。
  - 5.24 学生ホーム落成式（医学部父兄後援会から寄贈）。
  - 7.18 沖縄学術調査診療団出発（29日帰鹿）。
  - 7.19 奄美大島巡回診療班出発（28日帰鹿）。
  - 9.11 高安慎一先生（県立鹿児島医学専門学校初代校長）胸像除幕式。同窓会（鶴陵会），医学部父兄後援会，並びに医学部教職員から寄贈。
- 昭和42. 3.18 鹿児島大学卒業式。
- 4. 1 佐藤八郎教授医学部長に再任。
  - 4.12 鹿児島大学入学式。
  - 6. 1 附属腫瘍研究施設設置。
  - 6.30 奄美大島巡回診療団出発（7月11日帰鹿）。
  - 7.14 沖縄学術調査団黒島班出発（8月4日帰鹿）
- 昭和42. 7.22 沖縄学術調査診療団本隊派遣（8月4日帰鹿）。



## (2) 施設状況

土地, 建物

|             |               |         |
|-------------|---------------|---------|
| 医 学 部       | 土地            | 58,505㎡ |
|             | 建物            | 8,993㎡  |
| 名 瀬 研 究 室   | 土地(借用地)       | 4,026㎡  |
|             | (熱帯医学研究施設) 建物 | 339㎡    |
| 古 仁 屋 研 究 室 | 土地            | 8,848㎡  |
|             | (熱帯医学研究施設) 建物 | 334㎡    |
| 附 属 病 院     | 土地            | 28,555㎡ |
|             | 建物            | 20,556㎡ |
|             | 看護宿舎建物        | 2,593㎡  |
| 霧 島 分 院     | 土地(借地)        | 7,001㎡  |
|             | 建物            | 2,617㎡  |
|             | 看護宿舎建物        | 87㎡     |
| 附 属 学 校     | 土地            | 2,886㎡  |
|             | 建物            | 1,709㎡  |

単価100万円以上の物品調

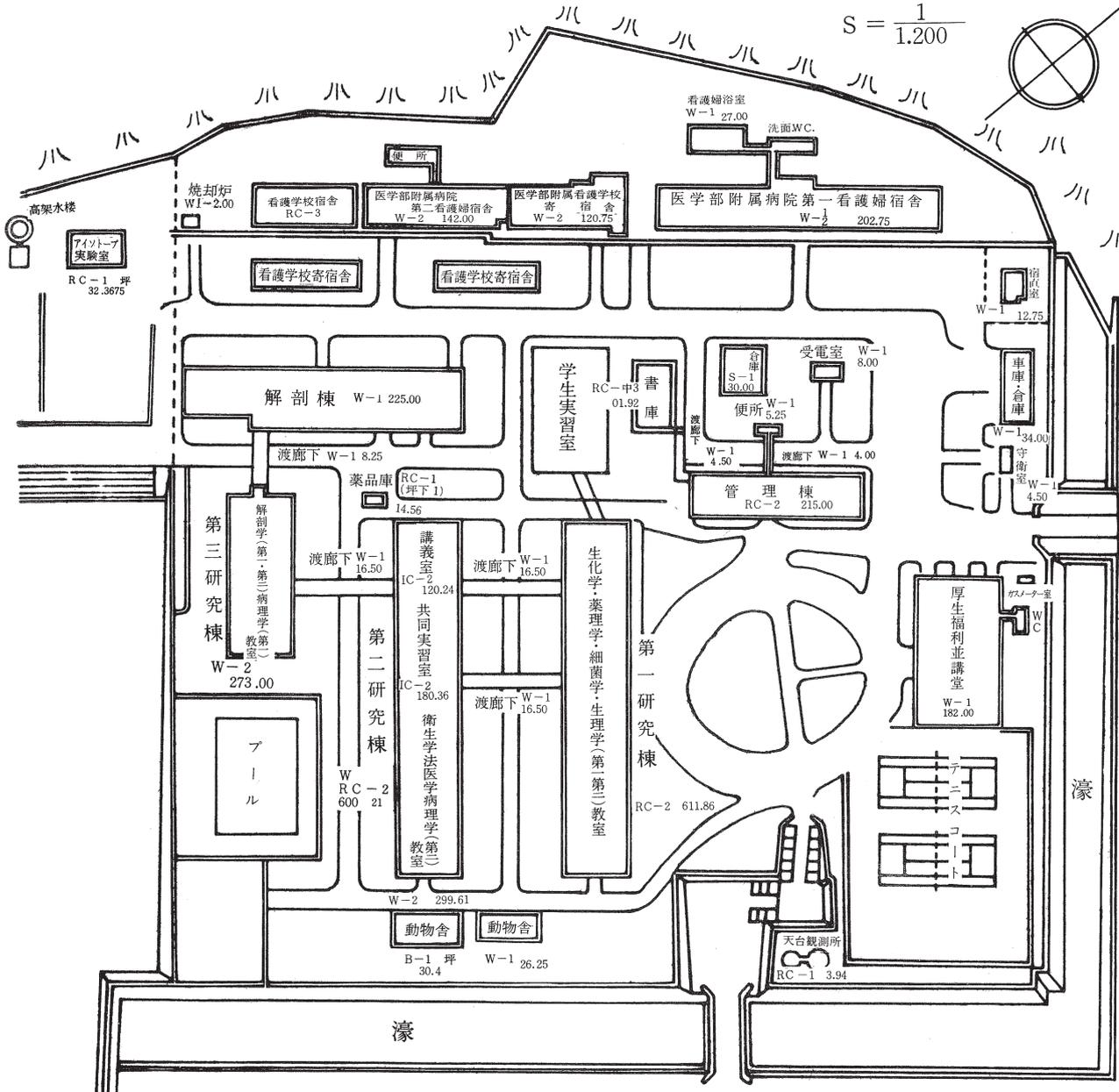
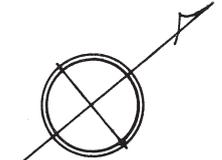
43.3.31

| 品 名            | 価 格   | 購 入        | 教 室   | 備 考                     |
|----------------|-------|------------|-------|-------------------------|
| 遠 心 機          | 2,000 | 31年 9月 1日  | 細 菌   | 超遠心機<br><br>分析用<br>超遠心機 |
| 脳 波 計          | 1,570 | 33. 5. 1   | 神 経   |                         |
| ミ ク ロ ト ー ム    | 1,004 | 36. 3. 18  | 産 婦   |                         |
| 超 遠 心 機        | 6,050 | 38. 3. 30  | 生 化   |                         |
| 分 光 光 度 計      | 3,200 | 38. 3. 30  | 一 病   |                         |
| 磁 気 相 関 計      | 1,700 | 39. 3. 18  | 二 生   |                         |
| 電 子 引 伸 機      | 1,070 | 39. 3. 23  | X 線   |                         |
| 顕 微 投 影 装 置    | 1,219 | 39. 3. 26  | 一 病   |                         |
| アミノ酸分析装置       | 2,550 | 39. 5. 28  | 二 内   |                         |
| 電 子 顕 微 鏡      | 6,900 | 39. 11. 25 | 電 顕   |                         |
| ハンドフットクローズモニター | 2,000 | 40. 3. 27  | R. I. |                         |

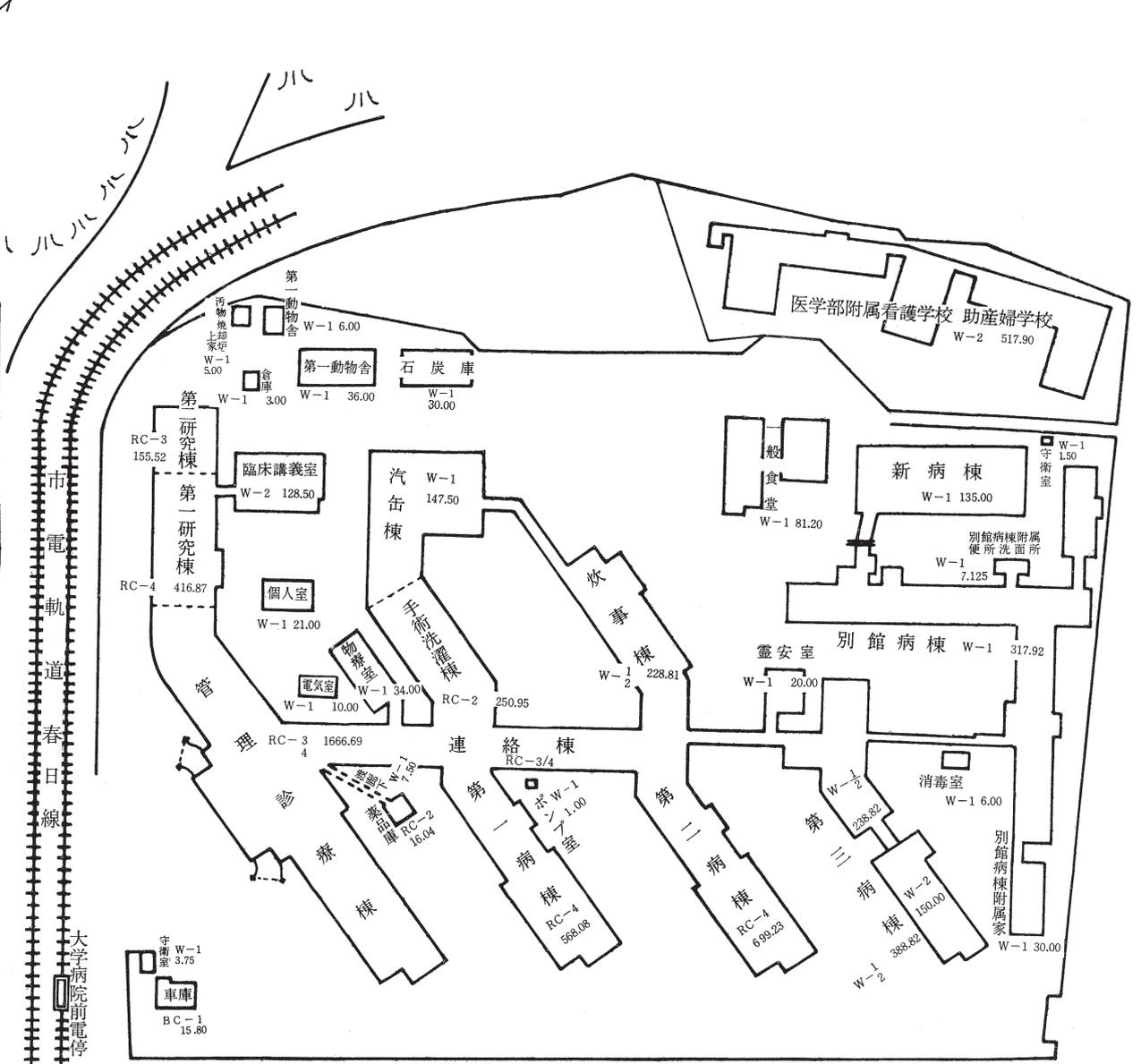
# 鹿児島大学 医学部基礎教室 現況配置図

医学部 基礎教室  
医学部 附属病院  
医学部附属看護学校助産婦学校

$S = \frac{1}{1.200}$



医学部基礎教室 { 土地坪数 18.568.00坪  
建物坪数 2.512.94坪 }  
 建物敷地 { 13.768.00坪 (職員宿舍敷地を含む)  
 運動場敷地 { 4.800.00坪 }



医学部附属病院 { 土地坪数 8.654.68坪  
建物坪数 6.353.075坪 }  
 医学部附属看護学校助産婦学校 { 土地坪数 873.00坪  
建物坪数 638.65坪 }



|           |       |            |     |       |
|-----------|-------|------------|-----|-------|
| 脳波計       | 1,410 | 40. 7. 30  | 法 医 |       |
| ガスクロマトグラフ | 3,530 | 41. 11. 29 | 熱 病 |       |
| 自記分光光度計   | 3,710 | 42. 2. 28  | 生 化 |       |
| ガスクロマトグラフ | 1,094 | 42. 2. 28  | 衛 生 | R. I. |
| 波高分析装置    | 3,079 | 42. 3. 24  | 衛 生 | R. I. |
| 電子顕微鏡     | 6,300 | 43. 1. 24  | 電 顕 |       |
| 脳波計       | 2,489 | 43. 2. 23  | 神 経 |       |
| 放射能測定装置   | 1,420 | 43.        | 衛 生 | R. I. |

### (3) 教官，職員配置状況

教授（講座別）

43.10.1

| 講座名    | 職名 | 略 歴              | 氏 名   | 在職期間                |
|--------|----|------------------|-------|---------------------|
| 解剖 (一) | 教授 | 熊本医大 昭和11年卒 医博   | 大森 浅吉 | S 30.7<br>～現在       |
| 解剖 (二) | 教授 | 熊本医大 昭和13年卒 医博   | 佐藤 堅  | "                   |
| 生理 (一) | 教授 | 熊本医大 昭和15年卒 医博   | 松本 保久 | "                   |
| 生理 (二) | 教授 | 九大医学部 昭和20年卒 医博  | 後藤 昌義 | S 31.4<br>～S 34.6   |
| "      | 教授 | 九大医学部 昭和23年卒 医博  | 大村 裕  | S 34.10<br>～S 38.10 |
| "      | 教授 | 九大医学部 昭和23年卒 医博  | 橋村 三郎 | S 39.7<br>～現在       |
| 生化学    | 教授 | 九大医学部 昭和13年卒 医博  | 大保不二夫 | S 30.7<br>～現在       |
| 薬理学    | 教授 | 熊本医大 昭和10年卒 医博   | 小島喜久男 | "                   |
| 病理 (一) | 教授 | 阪大医学部 昭和11年卒 医博  | 川路 清高 | "                   |
| 病理 (二) | 教授 | 東北大理学部 昭和11年卒 医博 | 阿部 康男 | S 30.7<br>～37.3     |
| "      | 教授 | 九大医学部 昭和26年卒 医博  | 遠城寺宗知 | S 38.3<br>～現在       |
| 細菌学    | 教授 | 九大医学部 昭和15年卒 医博  | 平野 清寿 | S 30.7<br>～現在       |
| 医動物    | 教授 | 東北大理学部 昭和11年卒 医博 | 阿部 康男 | S 39.4<br>～42.10    |
| "      | 教授 | 京都府立医大 昭和24年卒 医博 | 佐藤 淳夫 | S 43.9.1<br>～現在     |
| 衛生学    | 教授 | 九大医学部 昭和15年卒 医博  | 北原 経太 | S 31.4<br>～現在       |
| 公衆衛生   | 教授 | 東大医学部 昭和25年卒 医博  | 脇坂 一郎 | S 42.3<br>～現在       |

|         |    |          |        |    |       |                 |
|---------|----|----------|--------|----|-------|-----------------|
| 法医学     | 教授 | 九大医学部    | 昭和16年卒 | 医博 | 城 哲男  | S31.4<br>~現在    |
| 内科学 (一) | 教授 | 九大医学部    | 昭和10年卒 | 医博 | 榎屋 富一 | S31.4<br>~S33.6 |
| ”       | 教授 | 九大医学部    | 昭和13年卒 | 医博 | 金久 卓也 | S34.3<br>~現在    |
| 内科 (二)  | 教授 | 九大医学部    | 昭和9年卒  | 医博 | 佐藤 八郎 | S31.4<br>~現在    |
| 神経精神    | 教授 | 九大医学部    | 昭和3年卒  | 医博 | 佐藤 幹正 | S31.4<br>~S43.3 |
| ”       | 教授 | 九大附属医専   | 昭和25年卒 | 医博 | 松本 啓  | S43.11.1<br>~現在 |
| 小児科     | 教授 | 九大医学部    | 昭和8年卒  | 医博 | 永山 徳郎 | S31.4<br>~S37.5 |
| ”       | 教授 | 九大医学部    | 昭和20年卒 | 医博 | 寺脇 保  | S38.2<br>~現在    |
| 産科婦人科   | 教授 | 九大医学部    | 大正15年卒 | 医博 | 町野 碩夫 | S31.4<br>~S40.3 |
| ”       | 教授 | 九大医学部    | 昭和16年卒 | 医博 | 森 一郎  | S40.10<br>~現在   |
| 外科 (一)  | 教授 | 九大医学部    | 昭和5年卒  | 医博 | 内山 八郎 | S32.4<br>~現在    |
| 外科 (二)  | 教授 | 九大医学部    | 昭和16年卒 | 医博 | 秋田 八年 | S33.10<br>~現在   |
| 耳鼻咽喉科   | 教授 | 九大医学部    | 昭和13年卒 | 医博 | 久保 隆一 | S32.4<br>~現在    |
| 皮膚科     | 教授 | 九大医学部    | 昭和26年卒 | 医博 | 皆見紀久男 | S41.1<br>~現在    |
| 泌尿器科    | 教授 | 九大医学部    | 昭和16年卒 | 医博 | 岡元健一郎 | S32.4<br>~現在    |
| 整形外科    | 教授 | 九大医学部    | 昭和14年卒 | 医博 | 宮崎 淳弘 | S33.5<br>~現在    |
| 眼科学     | 教授 | 熊本医大     | 昭和4年卒  | 医博 | 高安 晃  | S33.5<br>~S43.3 |
| ”       | 教授 | 九大医学部    | 昭和21年卒 | 医博 | 谷口 慶晃 | S43.8.1<br>~現在  |
| 放射線     | 教授 | 九大医学部    | 昭和6年卒  | 医博 | 縄田 千郎 | S33.5<br>~S43.3 |
| ”       | 教授 | 九大医学部    | 昭和23年卒 | 医博 | 篠原 慎治 | S43.10.1<br>~現在 |
| 歯科口腔外科  | 教授 | 東京歯科医専   | 昭和2年卒  | 医博 | 副島 侃二 | S34.4<br>~S39.8 |
| ”       | 教授 | 東京医歯大歯学部 | 昭和30年卒 | 医博 | 塩田 重利 | S40.11<br>~現在   |

助教授，助手現在員（講座別）

(43.5.1)

| 講座名     | 職名  | 略 歴              | 氏 名     |
|---------|-----|------------------|---------|
| 解剖学 (一) | 助教授 | 県立鹿医大 昭和30年卒 医博  | 浜田良二郎   |
|         | 助手  | 東京教育大体育学部 昭和34年卒 | 末 永 政治  |
|         | ”   | 鹿大医学部 昭和43年卒     | 松 尾 陽 壮 |
| 解剖学 (二) | 助教授 | 鹿大医学部 昭和37年卒 医博  | 野 口 勉   |

|           |     |              |    |           |
|-----------|-----|--------------|----|-----------|
|           | 助 手 | 鹿大医学部 昭和37年卒 |    | 最 勝 寺 慧   |
|           | ”   | 九大医学部 昭和36年卒 |    | 米 丸 正 幸   |
|           | ”   | 鹿大農学部 昭和38年卒 |    | 亀 井 克 宣   |
| 生 理 学 (一) | 助 手 | 鹿大文理学部昭和33年卒 | 医博 | 西 村 茂 人   |
|           | ”   | 第一薬科大学昭和41年卒 |    | 大 西 瑞 男   |
|           | ”   | 鹿大農学部 昭和41年卒 |    | 前 田 浩 一 郎 |
| 生 理 学 (二) | 助教授 | 九大理学部 昭和28年卒 | 医博 | 前 野 巍     |
|           | 助 手 | 鹿大文理学部昭和41年卒 |    | 安 楽 満 男   |
|           | ”   | 九大薬学部 昭和43年卒 |    | 藤 志 水 昭 子 |
| 生 化 学     | 助 手 | 熊大薬学部 昭和34年卒 |    | 満 留 敏 弘   |
|           | ”   | 鹿大農学部 昭和37年卒 |    | 野 村 靖     |
|           | ”   | 九大医薬学科昭和37年卒 |    | 瀬 戸 口 賀 子 |
| 薬 理 学     | 助教授 | 満洲医大 昭和21年卒  | 医博 | 松 崎 吉 彦   |
|           | 助 手 | 鹿大文理学部昭和32年卒 | 医博 | 藤 崎 正     |
|           | ”   | 鹿大文理学部昭和37年卒 |    | 栄 義 文     |
| 病 理 学 (一) | 助教授 | 阪大医学部 昭和26年卒 | 医博 | 福 西 亮     |
|           | 助 手 | 鹿大医学部 昭和36年卒 | 医博 | 寺 師 慎 一   |
|           | ”   | 鹿大医学部 昭和37年卒 |    | 東 襄       |
| 病 理 学 (二) | 助教授 | 九大医学部 昭和34年卒 | 医博 | 加 藤 允 義   |
|           | 助 手 | 鹿大医学部 昭和34年卒 |    | 佐 藤 弥 吉   |
|           | ”   | 鹿大医学部 昭和37年卒 |    | 田 中 貞 夫   |
|           | ”   | 熊大医学部 昭和39年卒 |    | 川 上 修     |
| 細 菌 学     | 助教授 | 九大医学部 昭和35年卒 | 医博 | 南 嶋 洋 一   |
|           | 助 手 | 鹿大文理学部昭和33年卒 | 医博 | 今 村 禎 祐   |
|           | ”   | 鹿大農学部 昭和41年卒 |    | 平 川 浩 資   |
| 衛 生 学     | 助教授 | 九大理学部 昭和25年卒 | 医博 | 秋 山 高     |
|           | 助 手 | 九大理学部 昭和32年卒 | 医博 | 佐 藤 孝 彦   |
|           | ”   | 九大医薬学科昭和38年卒 |    | 渡 辺 紀 子   |

|         |     |                  |       |
|---------|-----|------------------|-------|
| 公衆衛生学   | 助手  | 鹿大文理学部昭和42年卒     | 南谷博子  |
|         | 助教授 | 東大医学部 昭和35年卒 医博  | 東郷正美  |
| 医動物学    | 助手  | 東大医衛生学科昭和42年卒    | 高元京子  |
|         | 助教授 | 九大医学部 昭和36年卒     | 多田功   |
| 法医学     | 助手  | 九大薬学部 昭和43年卒     | 中島禎子  |
|         | 助手  | 鹿大工学部 昭和41年卒     | 木庭紀一郎 |
| 内科学 (一) | 〃   | 第一薬科大学昭和41年卒     | 新入節子  |
|         | 助教授 | 県立鹿医大 昭和30年卒 医博  | 川明    |
| 内科学 (二) | 助手  | 久留米大学医学部昭和33年卒医博 | 小川卓爾  |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和34年卒 医博  | 田中弘允  |
| 内科学 (三) | 〃   | 鹿大医学部 昭和35年卒     | 名越敏秀  |
|         | 〃   | 鹿大文理学部昭和34年卒     | 高山巖   |
| 神経精神医学  | 助教授 | 台北帝大医学部昭和21年卒医博  | 橋本修治  |
|         | 助手  | 鹿県大医学部昭和31年卒     | 種子田哲郎 |
| 産科学婦人科学 | 〃   | 鹿大医学部 昭和34年卒 医博  | 日高実   |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和36年卒     | 宇野元博  |
| 小児科学    | 助教授 | 県立鹿医大 昭和30年卒 医博  | 朝倉哲彦  |
|         | 助手  | 鹿県大医学部昭和33年卒 医博  | 新里邦夫  |
| 産科学婦人科学 | 〃   | 久留米大学医学部昭和34年卒   | 神崎康至  |
|         | 〃   | 山口県立医大昭和39年卒     | 川池浩二  |
| 産科学婦人科学 | 助教授 | 熊本医大 昭和27年卒 医博   | 早川国男  |
|         | 助手  | 鹿県大医学部昭和33年卒 医博  | 川野通昭  |
| 産科学婦人科学 | 〃   | 鹿大医学部 昭和38年卒     | 今村正人  |
|         | 〃   | 徳島大医学部昭和38年卒     | 豊元実助  |
| 産科学婦人科学 | 助教授 | 鹿県大医学部昭和31年卒 医博  | 牧美輝   |
|         | 助手  | 鹿県大医学部昭和32年卒 医博  | 竹中静広  |
| 産科学婦人科学 | 〃   | 鹿県大医学部昭和33年卒 医博  | 西村明男  |
|         | 〃   | 鹿県大医学部昭和32年卒 医博  | 徳永博美  |

|         |     |                 |        |
|---------|-----|-----------------|--------|
| 外科学 (一) | 助手  | 鹿大医学部 昭和34年卒 医博 | 伊集院 康熙 |
|         | 助教授 | 県立鹿医大 昭和28年卒 医博 | 上山 幹夫  |
| 外科学 (二) | 助手  | 鹿大医学部 昭和32年卒    | 白尾 哲哉  |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和34年卒 医博 | 吉川 寛徳  |
|         | 助教授 | 九大医学部 昭和24年卒 医博 | 香月 武人  |
|         | 助手  | 鹿大医学部 昭和34年卒 医博 | 平 明    |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和36年卒    | 中島 泰広  |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和36年卒 医博 | 石川 誠一  |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和36年卒    | 稲益 良尚  |
| 耳鼻咽喉科学  | 助教授 | 鹿大医学部 昭和33年卒    | 松村 益美  |
| 皮膚科学    | 助手  | 鹿大医学部 昭和40年卒    | 勝田 兼司  |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和40年卒    | 大野 政一  |
|         | 助教授 | 県立鹿医専 昭和26年卒 医博 | 田代 正昭  |
|         | 助手  | 熊大薬学部 昭和40年卒    | 奥原 順子  |
|         | 〃   | 鹿純心女子短大 昭和40年卒  | 西村 比佐子 |
| 泌尿器科学   | 〃   | 鹿純心女子短大 昭和42年卒  | 吉国 芳子  |
|         | 助教授 | 県立鹿医大 昭和29年卒 医博 | 斉藤 宗吾  |
|         | 助手  | 鹿大医学部 昭和39年卒    | 陣内 謙一  |
|         | 〃   | 山口県立医大 昭和37年卒   | 牧角 格   |
| 整形外科    | 〃   | 鹿大医学部 昭和42年卒    | 中山 健   |
|         | 助教授 | 県立鹿医大 昭和28年卒 医博 | 東 成昭   |
|         | 助手  | 鹿大医学部 昭和33年卒    | 酒匂 崇   |
|         | 〃   | 長大医学部 昭和36年卒    | 児玉 国秀  |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和36年卒    | 大原 中行  |
| 眼科学     | 助教授 | 鹿大医学部 昭和31年卒 医博 | 川畑 隼夫  |
| 放射線医学   | 助手  | 久留米大学医学部 昭和41年卒 | 牧野 正興  |
|         | 〃   | 鹿大医学部 昭和42年卒    | 日高 芳則  |
| 歯科口腔外科学 | 助手  | 九州歯科大 昭和35年卒 医博 | 浜田 義彦  |

|         |    |              |       |
|---------|----|--------------|-------|
| 歯科口腔外科学 | 助手 | 日大歯学部 昭和35年卒 | 野井倉武憲 |
|         | 〃  | 九州歯科大 昭和35年卒 | 松井澄夫  |
|         | 〃  | 九州歯科大 昭和38年卒 | 副島公生  |

附属熱帯医学研究施設

|      | 職名  | 略 歴             | 氏 名  |
|------|-----|-----------------|------|
| 熱帯病部 | 教授  | 県立鹿医専 昭和23年卒 医博 | 福島英雄 |
|      | 助手  | 鹿大文理学部昭和40年卒    | 楠元節子 |
|      | 〃   | 鹿大文理学部昭和41年卒    | 内山芳彬 |
|      | 〃   | 鹿大文理学部昭和41年卒    | 若松順子 |
|      | 〃   | 熊大薬学部 昭和42年卒    | 荒神元己 |
| 疫学部  | 助教授 | 県立鹿医専 昭和27年卒 医博 | 八板宗哉 |
|      | 助手  | 鹿大文理学部昭和41年卒    | 木原大  |

附属腫瘍研究施設

|       | 職名  | 略 歴              | 氏 名  |
|-------|-----|------------------|------|
| 病態生理部 | 教授  | 京都府立医大 昭和22年卒 医博 | 袖木一雄 |
|       | 助教授 | 鹿県大医学部 昭和32年卒 医博 | 市来輝也 |
|       | 助手  | 鹿大医学部 昭和36年卒     | 松元実  |
|       | 〃   | 鹿大医学部 昭和37年卒     | 守田則一 |

学部長 縄田千郎 S 30.12.24～S 32.12.23  
 佐藤八郎 S 32.12.24～S 36.12.22  
 町野碩夫 S 36.12.23～S 40. 3.31  
 佐藤八郎 S 40.4.1～現在

事務部

事務長, 事務長補佐

事務長 有村一男 S 27. 1 ～S 38. 3.31  
 〃 笹平重雄 S 38. 4. 1～S 42. 5.31

|                  |   |   |   |   |                         |                |
|------------------|---|---|---|---|-------------------------|----------------|
| 事務長              | 鮫 | 島 | 吉 | 治 | S 42. 6. 1～現在           |                |
| “ 補佐             | 満 | 留 | 清 | 武 | S 41. 7. 1～S 43. 5. 31  |                |
| “ “              | 池 | 田 | 芳 | 男 | S 43. 6. 1～現在           |                |
| 係 長              |   |   |   |   |                         |                |
| 庶務係長             | 松 | 山 | 正 | 男 | S 31. 4. 1～S 34. 5. 5   |                |
| “                | 精 | 松 | 良 | 雄 | S 34. 5. 6～S 40. 12. 31 |                |
| “                | 溝 | 口 | 達 | 雄 | S 41. 1. 1～現在           |                |
| 会計係長             | 野 | 道 | 金 | 光 | S 31. 4. 1～S 35. 3. 31  |                |
| “                | 坂 | 元 |   | 保 | S 35. 4. 1～S 38. 3. 31  |                |
| “                | 池 | 田 | 芳 | 男 | S 38. 4. 1～S 40. 3. 31  |                |
| 経理係長             | 池 | 田 | 芳 | 男 | S 40. 4. 1～S 43. 5. 31  |                |
| “                | 瀬 | 野 | 正 | 則 | S 43. 6. 1～現在           |                |
| 用度係長             | 黒 | 木 | 里 | 良 | S 40. 4. 1～S 42. 10. 31 |                |
| “                | 益 | 満 | 三 | 千 | 雄                       | S 42. 11. 1～現在 |
| 教務係長             | 山 | 下 | 与 | 一 | S 31. 5. 1～S 36. 4. 30  |                |
| “                | 上 | 温 | 湯 | 国 | 男                       | S 36. 5. 1～現在  |
| 厚生補導係長           | 富 | 山 | 啓 | 蔵 | S 31. 5. 1～S 34. 5. 5   |                |
| “                | 松 | 山 | 正 | 男 | S 34. 5. 6～S 35. 3. 31  |                |
| “                | 亀 | 井 | 千 | 寿 | S 35. 4. 1～S 39. 3. 31  |                |
| “                | 米 | 沢 | 光 | 夫 | S 39. 4. 1～S 43. 5. 31  |                |
| “                | 本 | 野 | 宗 | 人 | S 43. 6. 1～現在           |                |
| 研究施設<br>事務係長     | 厚 | 地 | 芳 | 高 | S 43. 4. 1～現在           |                |
| 附属熱帯研究<br>施設事務主任 | 米 | 沢 | 光 | 夫 | S 35. 10. 1～S 37. 8. 15 |                |
| “                | 藤 | 田 | 実 | 志 | S 37. 9. 1～S 40. 3. 31  |                |
| “                | 渡 | 辺 | 具 | 治 | S 40. 4. 1～S 41. 2. 28  |                |
| “                | 厚 | 地 | 芳 | 高 | S 41. 4. 1～S 43. 3. 31  |                |

## 研 究 室

文部技官 石 原 光 雄 S 24. 7. 31～S 43. 3. 31

## (4) 学生および卒業生状況

本学部および大学院の入学定員および現在籍学生数は次のとおりである。

| 進<br>学<br>課<br>程 | 学 年  | 1 年                      | 2 年                      | 計                         |
|------------------|------|--------------------------|--------------------------|---------------------------|
|                  | 入学定員 |                          | 80                       | 80                        |
| 在籍数              |      | 92<br>内((留) 1)<br>女子 11) | 99<br>内((留) 1)<br>女子 11) | 191<br>内((留) 2)<br>女子 22) |

| 専<br>門<br>課<br>程 | 学 年  | 1 年                     | 2 年                     | 3 年                     | 4 年                     | 計                         |
|------------------|------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|---------------------------|
|                  | 入学定員 |                         | 60                      | 60                      | 60                      | 40                        |
| 在籍数              |      | 85<br>内((留) 3)<br>女子 7) | 84<br>内((留) 5)<br>女子 2) | 57<br>内((留) 0)<br>女子 4) | 65<br>内((留) 1)<br>女子 6) | 291<br>内((留) 9)<br>女子 19) |

在籍学生総数 482名 内((留) 11)  
女子 41) [(留)→留学生]

### 卒業生

|             |         |      |
|-------------|---------|------|
| 昭和34年 3月20日 | (第1回)   | 46名  |
| “ 35. 3.19” | (“ 2回)  | 45名  |
| “ 36. 3.20” | (“ 3回)  | 43名  |
| “ 37. 3.19” | (“ 4回)  | 50名  |
| “ 38. 3.19” | (“ 5回)  | 42名  |
| “ 39. 3.19” | (“ 6回)  | 45名  |
| “ 40. 3.19” | (“ 7回)  | 52名  |
| “ 41. 3.19” | (“ 8回)  | 44名  |
| “ 42. 3.18” | (“ 9回)  | 47名  |
| “ 43. 3.19” | (“ 10回) | 59名  |
| 計           |         | 473名 |

### 卒業生数

|             |       |
|-------------|-------|
| 県立鹿児島医学専門学校 | 547名  |
| 県立鹿児島医科大学   | 134名  |
| 県立鹿児島大学医学部  | 134名  |
| 国立鹿児島大学医学部  | 473名  |
| 合 計         | 1288名 |

|                   |      |               |                       |               |                |                       |
|-------------------|------|---------------|-----------------------|---------------|----------------|-----------------------|
| 大 医<br>学 研<br>究 科 | 学 年  | 1 年           | 2 年                   | 3 年           | 4 年            | 計                     |
|                   | 入学定員 | 48            | 48                    | 23            | 23             | 142                   |
|                   | 在籍数  | 12<br>内((留)2) | 25<br>内((留)4<br>女子 1) | 21<br>内(女子 1) | 25<br>内((留) 1) | 93<br>内((留)7<br>女子 2) |

〔(留)→留学生〕

大学院単位取得修了者

|           |         |                 |
|-----------|---------|-----------------|
| 昭和38年 3月  | (第 1 回) | 22名 (内学位取得者18名) |
| “ 39. 3 “ | (“ 2 回) | 18名 (内 “ 13名)   |
| “ 40. 3 “ | (“ 3 回) | 16名 (内 “ 8名)    |
| “ 41. 3 “ | (“ 4 回) | 19名 (内 “ 6名)    |
| “ 42. 3 “ | (“ 5 回) | 30名 (内 “ 3名)    |
| 計         |         | 105名 (内 “ 48名)  |

大学院単位取得修了者数 105名 内 (学位取得者数 48名)

ほかに専攻生の現在数 129名。

## 学位授与者名簿

| 昭和年 | 氏 名   | 学 位<br>記 番 号 | 主 査 名 | 昭和年 | 氏 名   | 学 位<br>記 番 号 | 主 査 名 |
|-----|-------|--------------|-------|-----|-------|--------------|-------|
| 32年 | 井後 吉久 | 1            | 大 森   | 32年 | 山元 信行 | 13           | 松 本   |
|     | 迫 一男  | 2            | 佐藤(堅) |     | 山根 実  | 14           | 小 島   |
|     | 倉内 省三 | 3            | 大 森   |     | 木野田 章 | 15           | 大 森   |
|     | 木下 利夫 | 4            | 小 島   |     | 酒匂 陸夫 | 16           | 副 島   |
|     | 川野 博隆 | 5            | 高 安   |     | 長野 実雄 | 17           | 大 森   |
|     | 津崎 文雄 | 6            | 榊 屋   |     | 原田 逸郎 | 18           | 佐藤(八) |
|     | 地頭蘭長生 | 7            | 大 森   |     | 小幡 好照 | 19           | 大 森   |
|     | 土岐 一文 | 8            | 大 森   |     | 福元 務  | 20           | 榊 屋   |
|     | 久留 克己 | 9            | 小 島   |     | 前田 実行 | 21           | 大 森   |
|     | 木ノ脇秀盛 | 10           | 佐藤(堅) |     | 指宿 英造 | 22           | 佐藤(八) |
|     | 小林 基  | 11           | 大 森   |     | 二渡 久良 | 23           | 小 島   |
|     | 村田 比  | 12           | “     |     | 外西 寿彦 | 24           | 大 森   |

| 昭和年   | 氏名     | 学位<br>記番号 | 主査名   | 昭和年 | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主査名   |
|-------|--------|-----------|-------|-----|-------|-----------|-------|
| 33年   | 中島 知徳  | 25        | 小 島   | 33年 | 宝田 忠  | 52        | 大 森   |
|       | 浜崎 栄郎  | 26        | 副 島   |     | 藤元 秀三 | 53        | 平 野   |
|       | 堀川 良平  | 27        | 大 森   |     | 今給黎 茂 | 54        | 〃     |
|       | 黒木 達   | 28        | 町 野   |     | 河野猪三郎 | 55        | 北 原   |
|       | 村山 貞敬  | 29        | 大 森   |     | 有満 金郎 | 56        | 平 野   |
|       | 橋口 俊照  | 30        | 川 路   |     | 池上 一彦 | 57        | 佐藤(堅) |
|       | 上山 幹夫  | 31        | 大 保   |     | 義川 英治 | 58        | 平 野   |
|       | 横小路喜代嗣 | 32        | 小 島   |     | 松山 閑  | 59        | 大 保   |
|       | 浜田 康治  | 33        | 川 路   |     | 幸泉 光爾 | 60        | 松 本   |
|       | 岩下 正晃  | 34        | 松 本   |     | 岡田 治清 | 61        | 〃     |
|       | 徳田 正敏  | 35        | 〃     |     | 牧角 龍二 | 62        | 副 島   |
|       | 今村 邦明  | 36        | 小 島   |     | 榎本 赴  | 63        | 〃     |
|       | 平川 照雄  | 37        | 〃     |     | 鮫島 一男 | 64        | 〃     |
|       | 右田 利朗  | 38        | 大 保   |     | 斉藤 宗吾 | 65        | 岡 元   |
|       | 勝目 卓朗  | 39        | 〃     |     | 貴島 信夫 | 66        | 大 森   |
|       | 田代 正昭  | 40        | 岡 元   |     | 藤林 繁  | 67        | 佐藤(八) |
|       | 泉 正夫   | 41        | 大 森   |     | 江川 盛久 | 68        | 町 野   |
|       | 川崎 兼陽  | 42        | 阿 部   |     | 内山 裕  | 69        | 佐藤(堅) |
|       | 出口 徳郎  | 43        | 大 森   |     | 竹中善次郎 | 70        | 〃     |
|       | 柳園 道夫  | 44        | 副 島   |     | 茅野 逸郎 | 71        | 佐藤(八) |
|       | 喜屋武朝章  | 45        | 佐藤(八) |     | 尾辻 義人 | 72        | 〃     |
| 林 繁幸  | 46     | 北 原       | 水落ヤスエ | 73  | 佐藤(堅) |           |       |
| 門田光二郎 | 47     | 大 保       | 児玉 鴻  | 74  | 小 島   |           |       |
| 瀬口 康朗 | 48     | 佐藤(八)     | 玉利 泰宏 | 75  | 大 森   |           |       |
| 松下 巖  | 49     | 佐藤(堅)     | 松田 広之 | 76  | 小 島   |           |       |
| 宮本 利哉 | 50     | 北 原       | 瀬尾 武次 | 77  | 佐藤(八) |           |       |
| 神田 弥栄 | 51     | 〃         | 阿世知節夫 | 78  | 岡 元   |           |       |

| 昭和年   | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主 査 名 | 昭和年   | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主 査 名 |
|-------|-------|-----------|-------|-------|-------|-----------|-------|
| 33年   | 中馬 康夫 | 79        | 佐藤(八) | 34年   | 有馬 陽一 | 106       | 北 原   |
|       | 伊東 克己 | 80        | 佐藤(幹) |       | 日高隆二郎 | 107       | 城     |
| 34年   | 山之内 融 | 81        | 佐藤(八) | 川 明   | 108   | 金 久       |       |
|       | 高橋 秀雄 | 82        | 〃     | 新門 宰  | 109   | 阿 部       |       |
|       | 保城 勉  | 83        | 町 野   | 森園 静哉 | 110   | 大 保       |       |
|       | 花城 清香 | 84        | 佐藤(八) | 八板 宗哉 | 111   | 北 原       |       |
|       | 古謝 将雄 | 85        | 町 野   | 小浜 哲郎 | 112   | 〃         |       |
|       | 村山 力  | 86        | 大 森   | 大牟田卓爾 | 113   | 松 本       |       |
|       | 山元 国彦 | 87        | 小 島   | 松本 信義 | 114   | 大 森       |       |
|       | 本田 司  | 88        | 〃     | 尾辻 省悟 | 115   | 佐藤(八)     |       |
|       | 樋渡 良伝 | 89        | 大 保   | 山田 春雄 | 116   | 佐藤(堅)     |       |
|       | 国島 義郎 | 90        | 大 森   | 宮蘭 栄治 | 117   | 町 野       |       |
|       | 内宮礼一郎 | 91        | 岡 元   | 伊地知季治 | 118   | 佐藤(八)     |       |
|       | 下温湯靖夫 | 92        | 〃     | 原田 望成 | 119   | 大 森       |       |
|       | 前田 正美 | 93        | 小 島   | 永井 忍  | 120   | 町 野       |       |
|       | 有川 貞清 | 94        | 〃     | 川内 香苗 | 121   | 〃         |       |
|       | 宮田 利通 | 95        | 副 島   | 松野 肇  | 122   | 佐藤(堅)     |       |
|       | 猿渡 篤義 | 96        | 佐藤(堅) | 武石 邦夫 | 123   | 〃         |       |
|       | 田之上虎雄 | 97        | 高 安   | 白石 幸弘 | 124   | 平 野       |       |
|       | 鈴木 康德 | 98        | 松 本   | 池口 五郎 | 125   | 〃         |       |
|       | 石塚 正人 | 99        | 大 森   | 大保 哲男 | 126   | 町 野       |       |
|       | 山下 忠裕 | 100       | 佐藤(八) | 岡元 正隆 | 127   | 大 森       |       |
|       | 片平 可也 | 101       | 佐藤(堅) | 山下 兼達 | 128   | 松 本       |       |
|       | 松山 昌  | 102       | 岡 元   | 鳥越 賚夫 | 129   | 内 山       |       |
|       | 山下 大蔵 | 103       | 町 野   | 桑木野 明 | 130   | 縄 田       |       |
| 肝付 保  | 104   | 小 島       | 川畑 サダ | 131   | 松 本   |           |       |
| 植村 芳郎 | 105   | 佐藤(八)     | 駒柵 影義 | 132   | 〃     |           |       |

| 昭和年 | 氏 名   | 学 位<br>記 番 号 | 主 査 名 | 昭和年 | 氏 名   | 学 位<br>記 番 号 | 主 査 名 |
|-----|-------|--------------|-------|-----|-------|--------------|-------|
| 34年 | 宮元 久男 | 133          | 佐藤(幹) | 34年 | 竹内 護  | 160          | 大 森   |
|     | 喜多 哲城 | 134          | 大 森   |     | 脇丸 孝志 | 161          | ”     |
|     | 長谷川浩明 | 135          | ”     |     | 飯田 高明 | 162          | 平 野   |
|     | 末広 俊雄 | 136          | 大 保   |     | 木村 忠重 | 163          | 副 島   |
|     | 浜田良二郎 | 137          | 川 路   |     | 高木 茂男 | 164          | 佐藤(八) |
|     | 長田 文男 | 138          | 大 森   |     | 上村 光男 | 165          | ”     |
|     | 梅田 均  | 139          | ”     |     | 淵脇 次男 | 166          | 大 森   |
|     | 津曲 久之 | 140          | 岡 元   |     | 高田 昌英 | 167          | ”     |
|     | 牧田 健二 | 141          | 小 島   |     | 矢野 佑  | 168          | ”     |
|     | 松木 好迪 | 142          | ”     |     | 桑畑 紀也 | 169          | ”     |
|     | 前田 利麿 | 143          | ”     |     | 早田 隆一 | 170          | 佐藤(八) |
|     | 高橋 欽一 | 144          | 佐藤(八) |     | 久木原忠満 | 171          | 佐藤(堅) |
|     | 垣迫 憲一 | 145          | ”     |     | 溝口 続  | 172          | 松 本   |
|     | 黒江 健  | 146          | 大 森   |     | 田尻 大策 | 173          | ”     |
|     | 園田 繁  | 147          | 高 安   |     | 松野下 登 | 174          | 大 森   |
|     | 川畑 利夫 | 148          | 大 村   |     | 高森 治生 | 175          | ”     |
|     | 石守 金良 | 149          | 平 野   |     | 大山 満  | 176          | 川 路   |
|     | 松崎 統  | 150          | 岡 元   |     | 市来 一彦 | 177          | 佐藤(八) |
|     | 岩井 成功 | 151          | 大 森   |     | 三宅 壮  | 178          | 金 久   |
|     | 岩井 勇作 | 152          | ”     |     | 原田 公夫 | 179          | ”     |
|     | 宮崎 良助 | 153          | ”     |     | 平林 信隆 | 180          | 大 森   |
|     | 能見 孝男 | 154          | ”     |     | 松本 彰夫 | 181          | 大 保   |
|     | 亀甲 大  | 155          | 岡 元   |     | 喜入 直治 | 182          | 金 久   |
|     | 山本 十一 | 156          | 佐藤(堅) |     | 春田 豊作 | 183          | ”     |
|     | 藤原 康功 | 157          | 副 島   |     | 橋口 満視 | 184          | 大 森   |
|     | 松永 武  | 158          | 金 久   |     | 小山 国治 | 185          | ”     |
|     | 肥後 武寅 | 159          | 平 野   |     | 永嶺 陽一 | 186          | ”     |

| 昭和年 | 氏 名   | 学位<br>記番号 | 主 査 名 | 昭和年 | 氏 名   | 学位<br>記番号 | 主 査 名 |
|-----|-------|-----------|-------|-----|-------|-----------|-------|
| 34年 | 楯林 義晴 | 187       | 大 保   | 35年 | 江夏 利弘 | 214       | 佐藤(堅) |
|     | 牧野 圭吾 | 188       | 佐藤(堅) |     | 猪野 高明 | 215       | 大 森   |
|     | 清長美濃輔 | 189       | 北 原   |     | 阿南壬午郎 | 216       | 副 島   |
|     | 高柳 克樹 | 190       | 〃     |     | 井芹 三男 | 217       | 松 本   |
|     | 村上 徹  | 191       | 町 野   |     | 長友 睦男 | 218       | 副 島   |
|     | 坂口 文士 | 192       | 金 久   |     | 春別府 稔 | 219       | 北 原   |
|     | 朝倉 哲彦 | 193       | 佐藤(堅) |     | 愛甲 健  | 220       | 大 村   |
|     | 森 春樹  | 194       | 大 森   |     | 有馬 純郎 | 221       | 宮 崎   |
|     | 池田 千秋 | 195       | 町 野   |     | 谷山 哲彦 | 222       | 松 本   |
|     | 前田正一郎 | 196       | 〃     |     | 西牟田 融 | 223       | 〃     |
|     | 永田 行雄 | 197       | 佐藤(幹) |     | 柿 明敏  | 224       | 岡 元   |
|     | 奥野 馨  | 198       | 佐藤(八) |     | 徳田 博重 | 225       | 松 本   |
|     | 貴島 亨  | 199       | 〃     |     | 山上 巖  | 226       | 佐藤(八) |
|     | 鮫島 達郎 | 200       | 宮 崎   |     | 湊 俊夫  | 227       | 佐藤(堅) |
|     | 佐藤 山人 | 201       | 松 本   |     | 要 真一朗 | 228       | 〃     |
|     | 野口 平  | 202       | 〃     |     | 牧野 一虎 | 229       | 小 島   |
|     | 西郷 成誠 | 203       | 平 野   |     | 樋口 良多 | 230       | 大 保   |
|     | 坂元 明雄 | 204       | 内 山   |     | 唐仁原 誠 | 231       | 大 森   |
|     | 浜田 真二 | 205       | 縄 田   |     | 田中 和雄 | 232       | 〃     |
|     | 桶谷 巖  | 206       | 金 久   |     | 寺門 正己 | 233       | 副 島   |
|     | 鍋倉 正義 | 207       | 〃     |     | 北村久寿久 | 234       | 北 原   |
|     | 谷 信男  | 208       | 小 島   |     | 蔡 江山  | 235       | 平 野   |
|     | 山下 佳郎 | 209       | 〃     |     | 相沢 幸一 | 236       | 副 島   |
|     | 牧 美須磨 | 210       | 町 野   |     | 南 真二  | 237       | 平 野   |
|     | 西原サツキ | 211       | 平 野   |     | 河合 稔  | 238       | 大 森   |
|     | 沖 和貴  | 212       | 北 原   |     | 重藤 脩  | 239       | 金 久   |
|     | 南部 安信 | 213       | 〃     |     | 竹之下克己 | 240       | 大 森   |

| 昭和年 | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主 査 名 | 昭和年 | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主 査 名 |
|-----|-------|-----------|-------|-----|-------|-----------|-------|
| 35年 | 富宿 丈  | 241       | 佐藤(堅) | 35年 | 四元 盛隆 | 268       | 町 野   |
|     | 荒金邦次郎 | 242       | 副 島   |     | 二木 秀人 | 269       | 佐藤(堅) |
|     | 柳園 幸夫 | 243       | 大 森   |     | 川原 弘  | 270       | 〃     |
|     | 津島 孝臣 | 244       | 副 島   |     | 四位 恒夫 | 271       | 大 村   |
|     | 中山 光義 | 245       | 大 保   |     | 堀之内正夫 | 272       | 佐藤(堅) |
|     | 申 載諭  | 246       | 佐藤(堅) |     | 園田 定己 | 273       | 金 久   |
|     | 荒谷 竜  | 247       | 大 森   |     | 飯山伊三郎 | 274       | 佐藤(八) |
|     | 柏木 昭二 | 248       | 〃     |     | 甲原 筑磨 | 275       | 大 森   |
|     | 東郷 実行 | 249       | 大 村   |     | 相良 寅次 | 276       | 〃     |
|     | 高江 正純 | 250       | 大 森   |     | 大村 茂  | 277       | 大 保   |
|     | 久保田 隆 | 251       | 副 島   |     | 藤本 義則 | 278       | 副 島   |
|     | 安部 昭二 | 252       | 佐藤(幹) |     | 里 一郎  | 279       | 大 森   |
|     | 阿木根 猛 | 253       | 宮 崎   |     | 豊成 改平 | 280       | 久 保   |
|     | 山村 尚  | 254       | 大 森   |     | 池田 正雄 | 281       | 佐藤(八) |
|     | 淵野 耕三 | 255       | 〃     |     | 本重 尚雄 | 282       | 松 本   |
|     | 宮崎 武人 | 256       | 北 原   |     | 池田 学  | 283       | 内 山   |
|     | 永山 正治 | 257       | 金 久   |     | 北村 徳衛 | 284       | 北 原   |
|     | 末永 治  | 258       | 阿 部   |     | 田島大三郎 | 285       | 大 保   |
|     | 中嶋 正  | 259       | 〃     |     | 合津 三郎 | 286       | 大 森   |
|     | 上野 百喜 | 260       | 松 本   |     | 小牧 秀夫 | 287       | 〃     |
|     | 斉藤 光昭 | 261       | 町 野   |     | 保津 豊彦 | 288       | 佐藤(八) |
|     | 隅 清敏  | 262       | 〃     |     | 政 直哉  | 289       | 〃     |
|     | 河野 通彬 | 263       | 大 森   |     | 竹田 正通 | 290       | 町 野   |
|     | 羽牟 幸男 | 264       | 大 村   |     | 原田 微典 | 291       | 北 原   |
|     | 上村 成彦 | 265       | 町 野   |     | 北原慶之助 | 292       | 〃     |
|     | 新川 休哉 | 266       | 〃     |     | 上橋 大作 | 293       | 松 本   |
|     | 中村 静可 | 267       | 〃     |     | 宮川久邇子 | 294       | 大 保   |

| 昭和年   | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主査名   | 昭和年 | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主査名   |
|-------|-------|-----------|-------|-----|-------|-----------|-------|
| 35年   | 清野 昌一 | 295       | 佐藤(幹) | 35年 | 海江田信男 | 322       | 小 島   |
|       | 川口球麿男 | 296       | 副 島   |     | 宮田 富良 | 323       | 副 島   |
|       | 作間 博正 | 297       | 〃     |     | 西岡 勝利 | 324       | 大 村   |
|       | 浦 弘   | 298       | 〃     |     | 藤崎主次郎 | 325       | 北 原   |
|       | 中村 千城 | 299       | 北 原   |     | 上野 守雄 | 326       | 〃     |
|       | 榎本 明義 | 300       | 副 島   |     | 浦沼 富子 | 327       | 〃     |
|       | 張 定楯  | 301       | 高 安   |     | 黒田 健  | 328       | 〃     |
|       | 石西 猛  | 302       | 城     |     | 福泉伊津子 | 329       | 永 山   |
|       | 下山 公  | 303       | 大 森   |     | 古賀 猛  | 330       | 城     |
|       | 井上 真  | 304       | 〃     |     | 安武 敬昭 | 331       | 大 森   |
|       | 岸原 喜八 | 305       | 〃     |     | 富田 忠雄 | 332       | 大 村   |
|       | 鄭 聡明  | 306       | 〃     |     | 塚原 昭二 | 333       | 佐藤(幹) |
|       | 佐藤 礼也 | 307       | 佐藤(堅) |     | 浅利 茂  | 334       | 北 原   |
|       | 石田 元男 | 308       | 佐藤(幹) |     | 高森 通夫 | 335       | 岡 元   |
|       | 大塚 徳平 | 309       | 高 安   |     | 相良 央  | 336       | 内 山   |
|       | 宮之原照人 | 310       | 小 島   |     | 入来 典  | 337       | 佐藤(堅) |
|       | 榑崎 榑信 | 311       | 〃     |     | 尾辻 清彦 | 338       | 岡 元   |
|       | 竹内 昭雄 | 312       | 町 野   |     | 平田 宗治 | 339       | 久 保   |
|       | 徳永 定祥 | 313       | 内 山   |     | 丸田 正治 | 340       | 佐藤(八) |
|       | 谷口 昭二 | 314       | 副 島   |     | 相良 吉郎 | 341       | 内 山   |
| 高岡 寛  | 315   | 松 本       | 稲津 舜介 | 342 | 平 野   |           |       |
| 徳田 久吉 | 316   | 佐藤(八)     | 前田 耕志 | 343 | 小 島   |           |       |
| 久保田俊真 | 317   | 小 島       | 作井 憲一 | 344 | 〃     |           |       |
| 米良富士弥 | 318   | 副 島       | 真田 三郎 | 345 | 〃     |           |       |
| 田中 三男 | 319   | 小 島       | 奥田 俊夫 | 346 | 〃     |           |       |
| 木佐木正友 | 320   | 〃         | 竹下 隆  | 347 | 〃     |           |       |
| 仲 盛行  | 321   | 大 森       | 斉藤 忍  | 348 | 〃     |           |       |

| 昭和年 | 氏 名   | 学位<br>記番号 | 主 査 名 | 昭和年 | 氏 名   | 学位<br>記番号 | 主 査 名 |
|-----|-------|-----------|-------|-----|-------|-----------|-------|
| 35年 | 佐藤 重国 | 349       | 松 本   | 35年 | 上原 景行 | 376       | 佐藤(堅) |
|     | 吉田 三郎 | 350       | 小 島   |     | 山之内 実 | 377       | 副 島   |
|     | 外山 千春 | 351       | 〃     |     | 山下 秀男 | 378       | 平 野   |
|     | 桜井景太郎 | 352       | 〃     |     | 桐田 豊一 | 379       | 〃     |
|     | 今給黎守一 | 353       | 大 森   |     | 大徳 哲夫 | 380       | 小 島   |
|     | 田島 稔弘 | 354       | 大 村   |     | 加藤 豊  | 381       | 北 原   |
|     | 荒武 五夫 | 355       | 〃     |     | 柚木 健爾 | 382       | 大 森   |
|     | 畑 卓次  | 356       | 大 保   |     | 藤浦 芳郎 | 383       | 〃     |
|     | 山県 英士 | 357       | 佐藤(八) |     | 早川潤太郎 | 384       | 岡 元   |
|     | 板井 大典 | 358       | 大 森   |     | 曾葉 瓊玉 | 385       | 小 島   |
|     | 増田 孝夫 | 359       | 〃     |     | 能登原 保 | 386       | 副 島   |
|     | 小室 尚武 | 360       | 〃     |     | 野村 紅式 | 387       | 金 久   |
|     | 有馬 純広 | 361       | 佐藤(幹) |     | 池野谷達雄 | 388       | 大 森   |
|     | 阮 徳茂  | 362       | 大 森   |     | 羅 錦郷  | 389       | 松 本   |
|     | 謝 猷臣  | 363       | 阿 部   |     | 林 治茂  | 390       | 大 森   |
|     | 周 聊彬  | 364       | 〃     |     | 久木田民三 | 391       | 久 保   |
|     | 米良 卓朗 | 365       | 副 島   |     | 馬場 藤樹 | 392       | 町 野   |
|     | 大重 益子 | 366       | 永 山   |     | 岩元 三郎 | 393       | 佐藤(八) |
|     | 山内 保男 | 367       | 副 島   |     | 田中 信夫 | 394       | 久 保   |
|     | 志和池二郎 | 368       | 秋 田   |     | 中村 行允 | 395       | 町 野   |
|     | 村田 哲男 | 369       | 副 島   |     | 松元 四郎 | 396       | 宮 崎   |
|     | 林 栄光  | 370       | 〃     |     | 野間口 齊 | 397       | 副 島   |
|     | 田中 昭彦 | 371       | 町 野   |     | 伊地知藤雄 | 398       | 松 本   |
|     | 松下 四郎 | 372       | 北 原   |     | 園田 浩  | 399       | 城     |
|     | 西郷 公臣 | 373       | 平 野   |     | 末野 勝男 | 400       | 副 島   |
|     | 児玉 一幸 | 374       | 〃     |     | 島本 司  | 401       | 佐藤(堅) |
|     | 塚 安弘  | 375       | 佐藤(堅) |     | 陳 炯明  | 402       | 佐藤(八) |

| 昭和年 | 氏 名   | 学位<br>記番号 | 主 査 名 | 昭和年 | 氏 名   | 学位<br>記番号 | 主 査 名 |
|-----|-------|-----------|-------|-----|-------|-----------|-------|
| 35年 | 呉 徳禄  | 403       | 佐藤(八) | 35年 | 田島喜二郎 | 430       | 佐藤(幹) |
|     | 李 悌愷  | 404       | 〃     |     | 森田 仟祐 | 431       | 副 島   |
|     | 余 瑞雲  | 405       | 〃     |     | 中富貞次郎 | 432       | 川 路   |
|     | 保坂 政光 | 406       | 町 野   |     | 山口 明  | 433       | 大 森   |
|     | 椎名 統治 | 407       | 大 村   |     | 今泉 康  | 434       | 宮 崎   |
|     | 諸岡 洋一 | 408       | 佐藤(八) |     | 辛島 清澄 | 435       | 大 村   |
|     | 並木 勇次 | 409       | 副 島   |     | 前田 恒  | 436       | 佐藤(幹) |
|     | 芦沢 義郎 | 410       | 北 原   |     | 仙波 輝彦 | 437       | 大 森   |
|     | 鬼塚 正憲 | 411       | 〃     |     | 野川 孝男 | 438       | 〃     |
|     | 川又 三郎 | 412       | 佐藤(八) |     | 倉繁準之助 | 439       | 副 島   |
|     | 堀 栄太郎 | 413       | 阿 部   |     | 江藤 正信 | 440       | 平 野   |
|     | 佐多 正己 | 414       | 小 島   |     | 窪田 一隆 | 441       | 町 野   |
|     | 門松佐夫郎 | 415       | 佐藤(八) |     | 福崎 三彦 | 442       | 岡 元   |
|     | 池田 計  | 416       | 佐藤(堅) |     | 塩川 明  | 443       | 町 野   |
|     | 桑迫 博哉 | 417       | 小 島   |     | 柿木 成也 | 444       | 〃     |
|     | 相良 徹  | 418       | 金 久   |     | 片平 勝郎 | 445       | 佐藤(八) |
|     | 藤善 史朗 | 419       | 小 島   |     | 平林 義郎 | 446       | 内 山   |
|     | 鷓狩 淳一 | 420       | 松 本   |     | 松下 兼昭 | 447       | 久 保   |
|     | 上高原勝美 | 421       | 内 山   |     | 平山 宗正 | 448       | 町 野   |
|     | 中留 邦彦 | 422       | 大 森   |     | 久米康一郎 | 449       | 〃     |
|     | 砂川 恵徹 | 423       | 〃     |     | 中摩 昭二 | 450       | 佐藤(幹) |
|     | 児玉 一雄 | 424       | 〃     |     | 久保田仁志 | 451       | 宮 崎   |
|     | 堂園 光義 | 425       | 〃     |     | 検見崎 喬 | 452       | 平 野   |
|     | 鈴木 嘉一 | 426       | 佐藤(堅) |     | 有馬 行治 | 453       | 大 森   |
|     | 小川 潜  | 427       | 宮 崎   |     | 松本 弘  | 454       | 〃     |
|     | 小住 啓一 | 428       | 副 島   |     | 田川 稔  | 455       | 阿 部   |
|     | 下平 了一 | 429       | 川 路   |     | 山路鉄三郎 | 456       | 〃     |

| 昭和年   | 氏 名   | 学位<br>記番号 | 主 査 名 | 昭和年 | 氏 名   | 学位<br>記番号 | 主 査 名 |
|-------|-------|-----------|-------|-----|-------|-----------|-------|
| 35年   | 有川 芳治 | 457       | 阿 部   | 35年 | 永谷 義治 | 484       | 副 島   |
|       | 宮上 淳  | 458       | 〃     |     | 金 思達  | 485       | 北 原   |
|       | 前原 東作 | 459       | 大 森   |     | 熊谷 勝行 | 486       | 町 野   |
|       | 東 成昭  | 460       | 宮 崎   |     | 松本 哲  | 487       | 小 島   |
|       | 重富 茂治 | 461       | 城     |     | 村田 四郎 | 488       | 北 原   |
|       | 浜崎 昭二 | 462       | 平 野   |     | 池田 敏行 | 489       | 小 島   |
|       | 平山 洋介 | 463       | 大 森   |     | 三辺 義久 | 490       | 佐藤(幹) |
|       | 大石 都子 | 464       | 〃     |     | 小林陽一郎 | 491       | 〃     |
|       | 砂川 玄辰 | 465       | 〃     |     | 亀嶋 保  | 492       | 大 森   |
|       | 林 信男  | 466       | 〃     |     | 入江 正信 | 493       | 〃     |
|       | 青山定二郎 | 467       | 大 村   |     | 佐々木三雄 | 494       | 平 野   |
|       | 佐々木佳夫 | 468       | 大 保   |     | 赤沢 大  | 495       | 岡 元   |
|       | 椿 茂和  | 469       | 佐藤(幹) |     | 藤原 俊男 | 496       | 〃     |
|       | 金 石子  | 470       | 町 野   |     | 大内 千鶴 | 497       | 〃     |
|       | 朴 貞姫  | 471       | 〃     |     | 川南 璋三 | 498       | 副 島   |
|       | 末次 和郎 | 472       | 金 久   |     | 古江 増蔵 | 499       | 佐藤(八) |
|       | 桜井 朝生 | 473       | 〃     |     | 河野 隆  | 500       | 金 久   |
|       | 藤田礼一郎 | 474       | 〃     |     | 千嶋 寛二 | 501       | 佐藤(幹) |
|       | 竹田絃一郎 | 475       | 〃     |     | 宮田 誠  | 502       | 佐藤(八) |
|       | 石神 大成 | 476       | 町 野   |     | 寺島 正憲 | 503       | 宮 崎   |
|       | 内村 利男 | 477       | 〃     |     | 末吉 昌俊 | 504       | 佐藤(八) |
|       | 竹元 兼範 | 478       | 佐藤(堅) |     | 大川 吉春 | 505       | 〃     |
|       | 平田 宗光 | 479       | 〃     |     | 鮫島 康宏 | 506       | 〃     |
|       | 前田 高尚 | 480       | 小 島   |     | 三原 良文 | 507       | 〃     |
| 古賀 弘人 | 481   | 副 島       | 竹田 隆治 | 508 | 松 本   |           |       |
| 吉元 直吉 | 482   | 〃         | 加治 育男 | 509 | 佐藤(八) |           |       |
| 秋山 清  | 483   | 〃         | 有馬 辰二 | 510 | 佐藤(堅) |           |       |

| 昭和年   | 氏 名   | 学 位<br>記 番号 | 主 査 名 | 昭和年 | 氏 名   | 学 位<br>記 番号 | 主 査 名 |
|-------|-------|-------------|-------|-----|-------|-------------|-------|
| 35年   | 青山不二男 | 511         | 金 久   | 35年 | 稲森 正愛 | 538         | 川 路   |
|       | 西 清文  | 512         | 大 森   |     | 本木下敦駒 | 539         | 佐藤(堅) |
|       | 平田 正竹 | 513         | 〃     |     | 前田 実光 | 540         | 佐藤(幹) |
|       | 今村 清純 | 514         | 北 原   |     | 林 督   | 541         | 〃     |
|       | 貴島テル子 | 515         | 〃     |     | 田代 哲之 | 542         | 阿 部   |
|       | 椎葉 輝夫 | 516         | 〃     |     | 黒肱 敏郎 | 543         | 佐藤(八) |
|       | 通山 厚  | 517         | 〃     |     | 上川路陸博 | 544         | 縄 田   |
|       | 高橋 甫  | 518         | 町 野   |     | 青山 恵真 | 545         | 松 本   |
|       | 鶴田 隆徳 | 519         | 松 本   |     | 鴨川喜久男 | 546         | 大 森   |
|       | 古川 正次 | 520         | 内 山   |     | 永田 逸雄 | 547         | 副 島   |
|       | 草野 了  | 521         | 城     |     | 今村 節子 | 548         | 大 村   |
|       | 岡本千恵喜 | 522         | 松 本   |     | 村田 敏郎 | 549         | 大 保   |
|       | 朝隈 貞光 | 523         | 〃     |     | 安 道烈  | 550         | 平 野   |
|       | 竹下 政光 | 524         | 大 森   |     | 朴 弘烈  | 551         | 永 山   |
|       | 今奈良盛文 | 525         | 〃     |     | 黄 俊植  | 552         | 川 路   |
|       | 小島 浩  | 526         | 〃     |     | 川元 達徳 | 553         | 阿 部   |
|       | 町田 定美 | 527         | 金 久   |     | 淵脇 啓至 | 554         | 城     |
|       | 吉田 左近 | 528         | 大 森   |     | 中岡 健治 | 555         | 〃     |
|       | 金城 和夫 | 529         | 〃     |     | 緒方 惟治 | 556         | 松 本   |
|       | 松元 誠一 | 530         | 〃     |     | 西岡 徳典 | 557         | 小 島   |
| 呉 耀津  | 531   | 阿 部         | 松崎 貞行 | 558 | 佐藤(堅) |             |       |
| 大窪 利男 | 532   | 川 路         | 中野 一  | 559 | 金 久   |             |       |
| 池田 徹  | 533   | 〃           | 石塚賢太郎 | 560 | 佐藤(八) |             |       |
| 内藪 洋三 | 534   | 金 久         | 新牧 一馬 | 561 | 町 野   |             |       |
| 小野 主生 | 535   | 松 本         | 中村 昭典 | 562 | 内 山   |             |       |
| 森 鉄太郎 | 536   | 川 路         | 大永 政人 | 563 | 松 本   |             |       |
| 家村 邦重 | 537   | 町 野         | 上村 行照 | 564 | 平 野   |             |       |

| 昭和年 | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主査名   | 昭和年 | 氏名    | 学位<br>記番号 | 主査名   |
|-----|-------|-----------|-------|-----|-------|-----------|-------|
| 35年 | 宇宿不二夫 | 565       | 阿部    | 35年 | 村岡久敏  | 592       | 佐藤(八) |
|     | 田原徹夫  | 566       | 小島    |     | 大園勝美  | 593       | 小島    |
|     | 道野宏太郎 | 567       | 〃     |     | 肥後正典  | 594       | 金久    |
|     | 堀切正冬  | 568       | 城     |     | 猪俣賢三  | 595       | 佐藤(八) |
|     | 寺崎健   | 569       | 岡元    |     | 矢住涼子  | 596       | 小島    |
|     | 竹崎善吉  | 570       | 平野    |     | 中尾博   | 597       | 〃     |
|     | 中村精吉  | 571       | 佐藤(八) |     | 長篤文   | 598       | 〃     |
|     | 橋野源義  | 572       | 〃     |     | 中村博見  | 599       | 大保    |
|     | 向井彬   | 573       | 平野    |     | 有川実芳  | 600       | 阿部    |
|     | 永浜幸甫  | 574       | 佐藤(堅) |     | 有蘭秀夫  | 601       | 川路    |
|     | 有川富康  | 575       | 町野    |     | 池田時也  | 602       | 佐藤(八) |
|     | 前田治人  | 576       | 〃     |     | 有馬純義  | 603       | 川路    |
|     | 中木原重憲 | 577       | 〃     |     | 西田豊作  | 604       | 佐藤(八) |
|     | 潤田登   | 578       | 〃     |     | 大重源治  | 605       | 高安    |
|     | 松元弘己  | 579       | 城     |     | 西谷通昭  | 606       | 大村    |
|     | 岩城直   | 580       | 〃     |     | 山口秀雄  | 607       | 高安    |
|     | 桜田重夫  | 581       | 〃     |     | 八反丸哲夫 | 608       | 川路    |
|     | 内村繁年  | 582       | 〃     |     | 肱岡豊次  | 609       | 〃     |
|     | 東栄一   | 583       | 大森    |     | 丸田実行  | 610       | 大森    |
|     | 川崎禎蔵  | 584       | 〃     |     | 河野元彦  | 611       | 〃     |
|     | 児玉英夫  | 585       | 城     |     | 今奈良律  | 612       | 〃     |
|     | 川原正雄  | 586       | 〃     |     | 山下宗秀  | 613       | 〃     |
|     | 山下昇   | 587       | 大森    |     | 白坂健一郎 | 614       | 宮崎    |
|     | 山本博武  | 588       | 〃     |     | 川原節男  | 615       | 〃     |
|     | 中目郁蔵  | 589       | 〃     |     | 相沢就道  | 616       | 〃     |
|     | 松山静雄  | 590       | 〃     |     | 矢野良雄  | 617       | 〃     |
|     | 鮫島耕一郎 | 591       | 内山    |     | 戸越和典  | 618       | 町野    |

| 昭和年 | 氏名    | 学位記番号 | 主査名   | 昭和年 | 氏名    | 学位記番号 | 主査名   |
|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|
| 35年 | 神園 望  | 619   | 佐藤(堅) | 35年 | 河野 親之 | 631   | 大 森   |
|     | 井畔 一心 | 620   | 川 路   |     | 外藺惠一郎 | 632   | 〃     |
|     | 林 昭男  | 621   | 佐藤(堅) |     | 押川 三男 | 633   | 〃     |
|     | 鯉坂 眺  | 622   | 〃     |     | 佐保 威彦 | 634   | 佐藤(幹) |
|     | 森 大三  | 623   | 阿 部   |     | 梅村 享信 | 635   | 小 島   |
|     | 坂元 長男 | 624   | 佐藤(八) |     | 岩倉 正矩 | 636   | 城     |
|     | 福島 克己 | 625   | 小 島   |     | 向井 武重 | 637   | 阿 部   |
|     | 岩尾 美義 | 626   | 〃     |     | 大野 家俊 | 638   | 〃     |
|     | 鳥山 隆行 | 627   | 〃     |     | 竹内 侑  | 639   | 〃     |
|     | 横道 弘之 | 628   | 〃     |     | 川俣 国義 | 640   | 〃     |
|     | 石川 増男 | 629   | 久 保   |     | 林 俊鎬  | 641   | 川 路   |
|     | 松田 禎純 | 630   | 大 森   |     | 金 銀式  | 642   | 〃     |

| 昭和年 | 氏名    | 学位記番号 |    | 主査名   | 昭和年 | 氏名    | 学位記番号 |    | 主査名   |
|-----|-------|-------|----|-------|-----|-------|-------|----|-------|
|     |       | 医研    | 医論 |       |     |       | 医研    | 医論 |       |
| 38年 | 緒方 貞夫 | 1     |    | 大 村   | 39年 | 新山 孝二 | 8     |    | 岡 元   |
|     | 河野 康  | 2     |    | 寺 脇   |     | 恒成 彰一 | 6     |    | 町 野   |
|     | 平山 清武 | 3     |    | 〃     |     | 都富 典夫 | 7     |    | 大 森   |
|     | 牛飼 俊博 | 1     |    | 平 野   |     | 恒成 政生 | 9     |    | 佐藤(八) |
|     | 小松 戈二 | 2     |    | 寺 脇   |     | 国東 孝  | 10    |    | 〃     |
|     | 永山 三夫 | 3     |    | 内 山   |     | 平田健次郎 | 8     |    | 大 森   |
|     | 高森 笛美 | 4     |    | 町 野   |     | 徳満 豊  | 9     |    | 松 本   |
|     | 栄 兼重  | 5     |    | 佐藤(幹) |     | 浜田 己則 | 10    |    | 佐藤(八) |
|     | 猪鹿倉 武 | 6     |    | 〃     |     | 与那嶺和男 | 11    |    | 〃     |
|     | 愛甲 矩義 | 4     |    | 岡 元   |     | 迫田 晃郎 | 12    |    | 秋 田   |
|     | 芳井 秀明 | 5     |    | 佐藤(堅) |     | 有馬 栄徳 | 11    |    | 〃     |
|     | 西村 明男 | 7     |    | 町 野   |     | 梶岐又三郎 | 12    |    | 〃     |

| 昭和<br>年 | 氏 名   | 学位記番号 |     | 主 査 名 | 昭和<br>年 | 氏 名   | 学位記番号 |    | 主 査 名 |       |       |
|---------|-------|-------|-----|-------|---------|-------|-------|----|-------|-------|-------|
|         |       | 医研    | 医論  |       |         |       | 医研    | 医論 |       |       |       |
| 39年     | 末野 保男 |       | 13  | 内 山   | 40年     | 原田 達也 | 27    |    | 大 森   |       |       |
|         | 前田 俊二 | 13    |     | 佐藤(八) |         | 満尾 定彦 |       | 28 |       | 秋 田   |       |
|         | 松本 清志 | 14    |     | 大 森   |         | 尾崎 幸男 | 29    |    |       | 橋 村   |       |
|         | 川畑 量平 | 15    |     | 内 山   |         | 大井 好忠 | 26    |    |       | 岡 元   |       |
|         | 今村 一英 | 16    |     | 佐藤(幹) |         | 大久保直義 | 27    |    |       | 金 久   |       |
|         | 小田代正之 |       | 14  | 佐藤(八) |         | 小川 卓爾 | 28    |    |       | 〃     |       |
|         | 森山 正武 |       | 15  | 〃     |         | 竹田 精士 | 29    |    |       | 〃     |       |
|         | 竹中 静広 |       | 16  | 町 野   |         | 吉川 寛徳 | 30    |    |       | 内 山   |       |
|         | 徳永 博美 |       | 17  | 〃     |         | 海江田 統 |       | 30 |       | 遠 城 寺 |       |
|         | 市岡 崇弘 |       | 18  | 〃     |         | 福田 明恒 |       | 31 |       | 秋 田   |       |
|         | 40年   | 山本喜三郎 |     | 19    |         | 金 久   | 川畑 益也 |    | 32    |       | 寺 脇   |
|         |       | 大山美智子 |     | 20    |         | 高 安   | 川上 明之 | 31 |       |       | 森     |
|         |       | 鷓木 春海 | 17  |       |         | 川 路   | 迫田 欽一 | 32 |       |       | 佐藤(堅) |
| 富永 功一   |       | 18    |     | 〃     | 鎌田 博行   |       | 33    |    | 森     |       |       |
| 久保 恵一   |       | 19    |     | 大 保   | 田中 弘允   | 33    |       |    | 金 久   |       |       |
| 河野 泰子   |       | 20    |     | 〃     | 林 茂文    | 34    |       |    | 〃     |       |       |
| 中村哲三郎   |       |       | 21  | 佐藤(堅) | 国吉 真    | 35    |       |    | 秋 田   |       |       |
| 桑波田景一郎  |       |       | 22  | 金 久   | 41年     | 高山 義則 | 36    |    | 大 保   |       |       |
| 藤瀬 隆幸   |       |       | 21  | 川 路   |         | 土持 博茂 |       | 34 |       | 森     |       |
| 今村 真敏   |       |       | 22  | 秋 田   |         | 稲森 幸治 | 37    |    |       | 金 久   |       |
| 木佐貫 禎   |       |       | 23  | 大 森   |         | 柘木 正志 |       | 35 |       | 〃     |       |
| 藤崎 正    |       |       | 24  | 小 島   |         | 伊集院賑処 |       | 36 |       | 〃     |       |
| 鳥野 兼光   |       | 23    |     | 佐藤(幹) |         | 今村 禎祐 | 37    |    |       | 平 野   |       |
| 平 明     | 24    |       | 秋 田 | 内山 一雄 |         | 38    |       |    | 〃     |       |       |
| 新村 健    | 25    |       | 金 久 | 内倉 力男 |         | 39    |       |    | 大 森   |       |       |
| 牧 美輝    |       | 25    | 寺 脇 | 叶 隆吉  |         | 40    |       |    | 金 久   |       |       |
| 倉内 睦雄   |       | 26    | 秋 田 | 相良 司  |         | 38    |       |    | 大 森   |       |       |

| 昭和<br>年 | 氏 名   | 学位記番号<br>医研医論 | 主 査 名 | 昭和<br>年 | 氏 名   | 学位記番号<br>医研医論 | 主 査 名 |  |
|---------|-------|---------------|-------|---------|-------|---------------|-------|--|
| 41年     | 白浜 朝海 | 39            | 大 森   | 43年     | 田中 英世 | 58            | 大 保   |  |
|         | 寺師 慎一 | 40            | 川 路   |         | 野上洋一郎 | 59            | 秋 田   |  |
|         | 江川 俊治 | 41            | 久 保   |         | 伊集院康熙 | 60            | 森     |  |
|         | 鮫島 哲也 | 41            | 佐藤(八) |         | 宮園 政治 | 49            | 松 本   |  |
|         | 市来 輝也 | 42            | 〃     |         | 芝野 庸一 | 61            | 秋 田   |  |
|         | 広瀬 徳蔵 | 43            | 佐藤(堅) |         | 田中 忠道 | 62            | 遠 城 寺 |  |
|         | 吉元 真澄 | 42            | 塩 田   |         | 新里 邦夫 | 63            | 佐藤(幹) |  |
|         | 呉 俊重  | 44            | 佐藤(八) |         | 楠元 正輝 | 50            | 小 島   |  |
|         | 山下 佐英 | 45            | 塩 田   |         | 児浦 純生 | 51            | 皆 見   |  |
|         | 浜田 義彦 | 43            | 〃     |         | 土持 昭男 | 52            | 秋 田   |  |
|         | 四元 貢  | 44            | 〃     |         | 尼子 春樹 | 53            | 〃     |  |
|         | 倉内 末男 | 46            | 縄 田   |         | 石川 誠一 | 54            | 〃     |  |
|         | 佐藤 孝彦 | 47            | 北 原   |         | 中島 巖  | 64            | 〃     |  |
|         | 富重 栄一 | 48            | 岡 元   |         | 田中 稻生 | 55            | 小 島   |  |
|         | 加嶋 芳郎 | 49            | 〃     |         | 林 八千夫 | 56            | 金 久   |  |
|         | 山内卯三郎 | 50            | 〃     |         | 段 亮一  | 65            | 宮 崎   |  |
|         | 永田 耕一 | 51            | 〃     |         | 竹野 文明 | 66            | 大 森   |  |
|         | 厚地 政幸 | 45            | 佐藤(幹) |         | 野口 勉  | 57            | 佐藤(堅) |  |
|         | 海江田 健 | 46            | 大 森   |         |       |               |       |  |
|         | 川野 通昭 | 52            | 寺 脇   |         |       |               |       |  |
| 上前 琢麿   | 53    | 〃             |       |         |       |               |       |  |
| 42年     | 鮫島 信一 | 54            | 〃     |         |       |               |       |  |
|         | 日高 実  | 55            | 佐藤(八) |         |       |               |       |  |
|         | 内田 康治 | 47            | 高 安   |         |       |               |       |  |
|         | 古江マチ子 | 56            | 佐藤(八) |         |       |               |       |  |
|         | 善平 朝友 | 48            | 大 保   |         |       |               |       |  |
| 窪田 健麿   | 57    | 松 本           |       |         |       |               |       |  |

## 外 遊 者 名 簿

| 職 氏 名       | 渡 航 先 国 | 目 的                                                                         | 期 間                            | 備 考                                                      |
|-------------|---------|-----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------|----------------------------------------------------------|
| 昭 和 33 年 度  |         |                                                                             |                                |                                                          |
| 教授          | 佐藤 八郎   | 米国, カナダ                                                                     | 世界消化器病学会講演<br>ならびに医学教育制度<br>視察 | 自33.5.20<br>至33.7.12                                     |
| (講師)<br>病院長 | 柚木 一雄   | アメリカ合衆国 (テキサス大学MDアンダーソン病院癌研究所)                                              |                                | 自34.1.1<br>至35.8.8                                       |
| 教授          | 城 哲男    | デンマーク, スウェーデン, ドイツ連邦共和国, オーストリア, イタリア, スイス, ベルギー, フランス, オランダ, イギリス, アメリカ合衆国 |                                | 自34.3.10<br>至34.6.6<br>文部省短期在外研究員                        |
| 昭 和 35 年 度  |         |                                                                             |                                |                                                          |
| 助教授         | 栗山 照    | イギリス                                                                        | 筋肉生理学研究                        | 自35.6.1<br>至36.2.24<br>昭34.2.25から昭35.5.31までを延期, 米国に英国を追加 |
| 助手          | 尾辻 省悟   | アメリカ合衆国 (テキサス大学MDアンダーソン病院癌研究所)                                              | 癌の生化学的研究                       | 自35.8.20<br>至36.9.10                                     |
| 昭 和 36 年 度  |         |                                                                             |                                |                                                          |
| 助手          | 尾辻 省悟   | アメリカ合衆国 (テキサス大学MDアンダーソン病院癌研究所)                                              | 癌の生化学的研究                       | 自36.9.11<br>至37.8.19<br>昭35.8.20から昭36.9.10までを延期          |
| 助教授         | 福西 亮    | アメリカ合衆国 (シカゴ大学ベンメイ癌研究所)                                                     | 癌の形態学的研究                       | 自36.12.20<br>至38.1.10                                    |
| 昭 和 37 年 度  |         |                                                                             |                                |                                                          |
| 教授          | 内山 八郎   | アメリカ合衆国                                                                     | アメリカの外科学視察<br>および学会講演          | 自37.7.15<br>至37.11.8                                     |
| 助教授         | 大友 信也   | アメリカ合衆国 (エール大学)                                                             | 微生物学の研究                        | 自37.8.25<br>至38.9.20                                     |
| 助教授         | 福西 亮    | アメリカ合衆国 (シカゴ大学ベンメイ癌研究所)                                                     | 癌の形態学的研究所                      | 自38.1.11<br>至38.12.19<br>昭36.12.20から昭38.1.10までを延期        |

| 職        | 氏名    | 渡航先国                                                                      | 目的                                                        | 期間                     | 備考                                              |
|----------|-------|---------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|------------------------|-------------------------------------------------|
| 助手       | 尾辻 省悟 | アメリカ合衆国(テキサス大学MDアンダーソン病院癌研究所)                                             | 癌の生化学的研究                                                  | 自37.9.20<br>至38.3.31   | 休職                                              |
| 昭和 38 年度 |       |                                                                           |                                                           |                        |                                                 |
| 助教授      | 森 一郎  | アメリカ合衆国, フランス, イタリア, オーストリア, スイス, ドイツ連邦共和国, スウェーデン, オランダ, ベルギー, イギリス, カナダ | 国際対癌協会からエリノア・ルーズベルト奨学金をうけ, 婦人性器癌の発育に及ぼすステロイドホルモンの影響に関する研究 | 自38.6.1<br>至39.8.31    |                                                 |
| 教授       | 北原 経太 | アメリカ合衆国, ブラジル, アルゼンチン, スペイン, フランス, イギリス, ドイツ連邦共和国, イタリア                   | 原水爆による放射能の影響に関すること<br>衛生学教育研究事情に関すること                     | 自38.8.20<br>至38.12.5   | 在外研究員<br>(短期)                                   |
| 助教授      | 大友 信也 | アメリカ合衆国(エール大学)                                                            | 微生物学の研究                                                   | 自38.9.21<br>至39.8.19   | 37.8.20から<br>38.9.20まで<br>を延期                   |
| 助教授      | 前野 巍  | アメリカ合衆国(ミネソタ大学)                                                           | 神経生理学研究                                                   | 自38.10.28<br>至39.10.31 |                                                 |
| 助教授      | 福西 亮  | アメリカ合衆国(シカゴ大学ベンメイ癌研究所)                                                    | 癌の形態学的研究                                                  | 自38.12.20<br>至39.6.30  | 36.12.20~<br>38.1.10 休職<br>38.1.11~<br>38.12.19 |
| 助手       | 尾辻 省悟 | アメリカ合衆国(テキサス大学MDアンダーソン病院癌研究所)                                             | 癌の生化学的研究                                                  | 自38.4.1<br>至38.8.31    | 休職                                              |
| 助手       | 尾辻 省悟 | アメリカ合衆国(テキサス大学MDアンダーソン病院癌研究所)                                             | 癌の生化学的研究                                                  | 自38.9.1<br>至39.8.31    | 休職                                              |
| 昭和 39 年度 |       |                                                                           |                                                           |                        |                                                 |
| 助手       | 斉藤 宗吾 | アメリカ合衆国                                                                   | 男性生殖器系の生理および泌尿生殖器系腫瘍に関する実験的研究                             | 自39.8.8<br>至40.8.14    |                                                 |
| 教授       | 松本 保久 | イギリス<br>アメリカ合衆国                                                           | 組織呼吸に関する研究<br>ならびに欧米における生理学教育事情の研究                        | 自40.3.21<br>至40.6.23   | 在外研究員<br>(短期)                                   |
| 助教授      | 前野 巍  | アメリカ合衆国(ミネソタ大学)                                                           | 神経生理研究                                                    | 自39.11.1<br>至40.10.29  | 昭38.10.28から<br>昭39.10.31<br>までを延期               |

| 職        | 氏名    | 渡航先国                                                     | 目的                                                 | 期間                    | 備考                                   |
|----------|-------|----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|-----------------------|--------------------------------------|
| 昭和 40 年度 |       |                                                          |                                                    |                       |                                      |
| 教授       | 佐藤 堅  | フランス, イギリス, ドイツ連邦共和国, オーストリア, アメリカ合衆国, アルゼンチン            | 1. 胸腺の微細構造, 2. 電子顕微鏡レベルのオートラジオグラフィー<br>3. 肺吸虫の精子発生 | 自40.7.16<br>至40.10.21 | 文部省短期在外研究員                           |
| 助教授      | 朝倉 哲彦 | カナダ, アメリカ合衆国, イギリス, ドイツ連邦共和国, フランス, イタリア, オーストリア, スウェーデン | ブリチィシュ・コロンビア大学における行動の神経機序の研究と欧米における医学教育の視察         | 自40.7.4<br>至42.6.30   | カナダのブリチィシュ・コロンビア大学客員研究員として(年3,600ドル) |
| 教授       | 佐藤 幹正 | ノルウエー, イギリス, フランス, ドイツ連邦共和国, スイス, イタリア, スペイン, アメリカ合衆国    | 神経精神医学研究ならびに同施設視察のため                               | 自40.7.29<br>至40.12.28 |                                      |
| 助手       | 斉藤 宗吾 | アメリカ合衆国                                                  | 男性生殖器系の生理および泌尿生殖器系腫瘍に関する実験的研究                      | 自40.8.15<br>至40.11.24 |                                      |
| 昭和 41 年度 |       |                                                          |                                                    |                       |                                      |
| 助手       | 河野 康  | ドイツ連邦共和国                                                 | 小児期リウマチ熱に関する研究                                     | 自41.5.8<br>至42.5.7    | 文部省在外研究員(長期乙種)                       |
| 教授       | 久保 隆一 | ドイツ連邦共和国, イギリス, フランス, オーストリア, イタリア, アメリカ合衆国              | 上気道の悪性腫瘍に関する研究                                     | 自41.8.8<br>至41.11.7   | 同上(短期)                               |
| 助教授      | 橋本 修治 | アメリカ合衆国                                                  | 肝疾患(殊に脂肪肝及び肝性昏睡)の発生機序の研究                           | 自41.9.20<br>至43.2.29  | 42.10.5までを変更                         |
| 助教授      | 朝倉 哲彦 | カナダ                                                      | 40年度参考                                             | 自41.7.1<br>至42.6.29   |                                      |
| 助手       | 白尾 哲哉 | アメリカ合衆国                                                  | 医学研究(特に脳神経外科学)                                     | 自42.1.28<br>至43.12.31 | 滞在費アルバート・アインシュタイン医大, 42.12.31までを延期   |
| 昭和 42 年度 |       |                                                          |                                                    |                       |                                      |
| 助教授      | 南嶋 洋一 | アメリカ合衆国                                                  | ベイラー大学における腫瘍ウイルスによる発癌機序の研究                         | 自42.8.16<br>至43.8.15  | 在外研究員<br>出張                          |
| 助手       | 迫田 晃郎 | アメリカ合衆国                                                  | 1. 重症肝障害時のショックに関する研究<br>2. 肝移植の研究<br>3. 門脈亢進症の研究   | 自42.8.20<br>至43.8.19  | 出張                                   |
| 助手       | 平 明   | アメリカ合衆国                                                  | 心臓移植の外科的研究                                         | 自42.8.20<br>至43.8.30  | 出張                                   |

| 職         | 氏 名   | 渡 航 先 国                                | 目 的                                                    | 期 間                    | 備 考           |
|-----------|-------|----------------------------------------|--------------------------------------------------------|------------------------|---------------|
| 助教授       | 秋山 高  | アメリカ合衆国                                | 水質汚濁及廃水処理に関する研究                                        | 自42.9.10<br>至43.9.9    | 在外研究員<br>出張   |
| 助教授       | 松崎 吉彦 | アメリカ合衆国                                | 研究費生としてミシガン大学医学部薬理学教室において、電気生理学的方法により細胞の薬理学を研究         | 自42.8.20<br>至43.6.14   | 在外研究員<br>出張   |
| 教授        | 大森 浅吉 | アメリカ合衆国、カナダ、スウェーデン、イギリス、ドイツ連邦共和国       | 1. 関筋の神経支配 2. リンパ路閉塞とリンパ路再生 3. 臨床解剖学教育法                | 自42.10<br>至43.1        | 在外研究員         |
| 助教授       | 前野 巍  | アメリカ合衆国                                | 医学研究（神経筋接部の研究）                                         | 自42.12.18<br>至43.4.4   |               |
| 昭和 41 年 度 |       |                                        |                                                        |                        |               |
| 教授        | 宮崎 淳弘 | スウェーデン、ドイツ連邦共和国、フランス、イタリア、イギリス、アメリカ合衆国 | 世界各国における整形外科を中心とした医学教育の現況、骨病理、生理と整形外科一般、病院建築と運営        | 自43.7.30<br>至43.10.29  | 在外研究員         |
| 助教授       | 上山 幹夫 | ドイツ連邦共和国                               | 消化器外科及び血管外科の研究のため                                      | 自43.9.21<br>至44.7.20   | 〃（甲種）         |
| 教授        | 佐藤 八郎 | オーストラリア、ニュージーランド                       | 第3回アジア太平洋消化器病学会出席並びに消化病学研究上の諸問題に関する文献収集のため             | 自43.9.28<br>至43.10.12  |               |
| 教授        | 柚木 一雄 | 同上                                     | 同上                                                     | 同 上                    |               |
| 助手        | 種子田哲郎 | オーストラリア、ニュージーランド、マニラ、香港                | 同上                                                     | 自43.9.28<br>至43.10     |               |
| 教授        | 森 一郎  | シンガポール、マレーシア、カンボジア、香港、中華民国、タイ          | 第4回アジア産婦人科学会出席、並びに東南アジア諸国における産科婦人科学の研究上の諸問題について連絡協議のため | 自43.11.12<br>至43.11.28 |               |
| 助手        | 竹中 静広 | アメリカ合衆国                                | 女性におけるステロイドホルモンの生化学的研究殊にテストステロンの代謝について                 | 自43.7.1<br>至44.6.30    | 在外研究員<br>（乙種） |

# 県立大学医学部

## 諸 規 程

(この稿は縄田名誉教授  
の御好意による)

鹿児島県立大学医学部規程

昭和28年 月 日制定

県立鹿児島医科大学教授会規程

第一条より第六条までによりなる

昭和28年 月 日制定

試験施行に関する内規

昭和28年7月9日教授会にて決定

鹿児島県立大学処務規程

昭和26年3月9日訓令甲第5号  
昭和26年7月訓令甲第16号にて改正  
昭和26年1月1日より適用  
昭和29年 月 日一部改正

鹿児島県立大学医学部附属病院処務細則

昭和28年 月 日より適用

部長会議会則

昭和 年 月 日制定  
昭和28年12月3日より改正施行

医局長会議会則

昭和28年11月13日医局長会議決定施行  
" 12月3日部長会議承認  
" 12月 日教授会承認

病院勤務者被服類貸与規則

昭和28年12月3日 部長会議決定

鹿児島県立大学医学部附属病院長候補者選定内規

昭和26年12月24日施行  
昭和28年11月6日改正

副院長選定規則

昭和27年6月20日施行  
昭和29年2月11日改正施行

|                                    |                                                     |
|------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| 副医員，インターン，看護婦生徒の診療費内規              | 昭和 年 月 日施行                                          |
| 院内職員クラブ（仮称）結成趣意書<br>（財団法人親和クラブの前身） | 昭和26年7月9日                                           |
| 大学病院親和倶楽部規約                        | 昭和28年12月8日改正                                        |
| 鹿児島県立大学医学部教職員組合規約                  | 昭和25年6月17日施行<br>昭和27年7月12日一部改正                      |
| 組合費貸出内規                            | 昭和28年3月 日 施行                                        |
| 全国大学教授連合規則                         |                                                     |
| 全 施行細則                             |                                                     |
| 全 経理規程                             | 昭和26年6月23日施行                                        |
| 県大医学部 附属病院 防火措置要綱                  | 昭和28年3月17日制定施行                                      |
| 学内防火措置要綱                           | 昭和28年2月20日制定施行                                      |
| 大学病院救護班の編成                         |                                                     |
| 鹿児島医科大学及び医学部科学部部則                  | 昭和28年10月1日施行                                        |
| 病院勤務者並びに職員家族診療内規                   | 昭和27年12月24日部長会議決定                                   |
| 入院患者規則                             | 昭和28年3月17日部長会議決定<br>昭和29年1月22日改訂<br>昭和33年5月1日改正（国立） |
| 鹿児島県立大学評議会規程                       | 昭和28年4月1日施行                                         |
| 鹿児島県立大学医学部規程に関し教授会諒解事項             | 昭和28年7月9日                                           |

|                                           |                                     |
|-------------------------------------------|-------------------------------------|
| 鹿児島県立大学附属図書館規程                            | 昭和27年12月 8 日施行                      |
| 文部省大学病院研究会制定<br>大学病院施設計画要綱                | 昭和28年 3 月 3 日制定                     |
| 鹿児島県立大学医学部医師会定款                           | 昭和 年 月 日                            |
| 鹿児島県立大学副手規程                               | 昭和28年 4 月 1 日施行                     |
| 鹿児島県立大学教員選考基準                             | 昭和29年 4 月24日制定施行                    |
| 附属霧島温泉研究所長候補者選定規則                         | 昭和29年 9 月24日施行                      |
| 同上 内規                                     | 昭和29年10月20日施行                       |
| 鹿児島県立大学医学部附属病院看護婦宿舍規則                     | 昭和 年 月 日施行                          |
| 鹿児島県立大学医学部長候補者選考規程                        | 昭和30年 9 月30日施行                      |
| (この前に医学部長候補者選定内規昭和26年 1 月20日施行ありこの時廃止された) |                                     |
| 同上 細則                                     | 昭和30年10月19日施行                       |
| 物品会計事務処理要領                                | 昭和31年 3 月14日施行                      |
| 鹿児島県立大学長候補者選考規則                           | 昭和26年 8 月18日施行<br>昭和27年 4 月16日より適用  |
| 同上 事務細目                                   |                                     |
| (国) 鹿児島大学医学部研究員規程                         | 昭和31年 5 月22日施行<br>昭和30年 7 月 1 日より適用 |
| 県立鹿児島医科大学学位規程                             | 昭和32年 月 日施行                         |

同上 学位審査規程実施要項

昭和32年 月 日実施

県立鹿児島医科大学専修生規定（内規）

昭和32年4月1日施行

## 国立鹿児島大学医学部

### 諸 規 程

（この稿は縄田名誉教授  
の御好意による）

鹿児島大学学則

昭和24・6・1制定

改正 昭25・4・1

昭26・4・1

昭28・3・1

昭28・4・1

昭29・4・1

医学部・工学部移管開始

昭30・7・1

昭31・4・1

昭34・10・5

医学部国立移管は昭30・7・1に始まり，昭33・5・1で完了した。但歯科口腔外科はこのとき単に診療科として残った。

○医学・歯学教育制度の改正

昭和29・6・30 文部省大学学術局

学則案が示されている。

○学校教育法施行規則の一部改正（文部省令）

昭和29・6・25 文部大臣

進学課程の教育課程

○医学・歯学進学課程設置審査基準要項

昭和29・7・19

（同上 解説）

○医学・歯学関係大学院設置審査基準要項

○鹿児島大学評議会規程

昭和28・5・20制定

昭和30・6・30現行

(この前に昭和24・6月制定の鹿児島大学評議会内規はこれを廃止する)

|                       |                       |                                             |
|-----------------------|-----------------------|---------------------------------------------|
| 鹿児島大学<br>鹿児島県立大学      | 医学部教授会規則              | 昭和30・9・20(案)                                |
| 鹿児島県立大学医学部同窓会         | 基金管理規定                | 昭和30・7(案)                                   |
| 南方産業科学研究所             | 規約                    | 昭和30(案)                                     |
| 鹿児島大学                 | 学長選考規程                | 昭和28・5・20施行                                 |
| 鹿児島大学                 | 学長選考規程細則              | 昭和28・7・2施行                                  |
| 鹿児島大学                 | 名誉教授の称号授与規程           | 昭和30・2・3制定                                  |
| 鹿児島大学                 | 風致委員会規程               | 昭和31・9・21(案)<br>昭和31・10・5施行                 |
| 鹿児島大学                 | 教員停年規程                | 昭和30・3・17制定<br>昭和30・4・1施行<br>昭和31・11・29一部改正 |
| 鹿児島大学                 | 附属図書館規程               | 制定 昭和<br>昭和31・9・1改正                         |
| 教授候補者選考内規(附, 県立時代の内規) | 制定 昭和<br>改正 昭和33・7・24 | (県立時代より)                                    |
| 鹿児島大学                 | 学生部長選考内規              | 昭和32・3・19施行                                 |
| 財団法人                  | 親和会寄附行為               |                                             |
| 鹿児島大学                 | 医学部雑誌編集委員会規程          | 昭和32・4・1施行                                  |
| 鹿児島大学                 | 総合整備企画委員会規程           | 昭和26・6・1施行                                  |

|                                          |                                                                  |
|------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| 鹿児島大学医学部学友会会則                            | 昭和37・4・1施行（改正）                                                   |
| 県立鹿児島医科大学学位規程                            | 昭和32年 月 日施行                                                      |
| 南方産業科学研究所規約                              | 昭和30・3・8施行<br>昭和32・3・20改正                                        |
| 鹿児島大学医学部電子顕微鏡使用内規                        | 昭和32・7・11施行                                                      |
| 学位論文審査要領（県立鹿児島医科大学）                      | 昭和32・7・4 文部大臣認可<br>昭和32・8・5 施行                                   |
| 新制大学卒業者の旧学位審査<br>（昭和31・3・24日本医事新報第1665号） |                                                                  |
| 職員の併任及び兼業について                            | 文部省大臣官房人事参事官<br>昭和32・7・22文人任第100号                                |
| 鹿児島大学医学部処務規程                             | 昭和32・4・18施行<br>文書処理規程 昭和32・4・18施行                                |
| 鹿児島大学医学部当直規程                             | 昭和32・4・18施行                                                      |
| 鹿児島大学医学部防火措置規程                           | 昭和32・4・18施行                                                      |
| 鹿児島大学医学部付属病院長選考規程                        | 昭和33・4・1 施行                                                      |
| 鹿児島大学医学部付属病院長候補者選定内規                     | （昭和33・3・13教授会決定）<br>昭和4・4・1 施行<br>昭和35・4 廃止，別に施行細則が定め<br>られた（後述） |
| 鹿児島大学医学部付属助産婦学校長選考規程                     | 昭和33・4・1 施行                                                      |

鹿児島大学医学部付属看護学校長選考規程

昭和33・4・1施行

鹿児島大学医学部付属病院霧島分院長選考規程

昭和33・4・1施行

放射線取扱主任者

(放射性同位元素等による放射線障害防止に関する法律)

大学院および学位について

文部省大学々術局長通牒(昭33・2・19)

旧制大学院に新制大学卒業者を入れないこと。

鹿児島大学医学部附属病院業務連絡協議会会則

昭和28・12・3制定

昭和33・4・1改正

昭和37・4・18改正

鹿児島大学医学部附属病院部長会議会則

昭和28・12・3制定

昭和33・4・1改正

鹿児島大学熱帯医学研究室規程

制定昭和 年 月 日

改正昭和33・8・1

全上

内規

昭和33・8・1施行

鹿児島大学医学部専攻生規程

昭和33・7・24施行

鹿児島大学医学部附属病院学用患者取扱規程

制定昭和33年5月1日

昭和36・4・1改訂・施行

鹿児島大学医学部実験動物管理内規

昭和33・9・1施行

鹿児島大学医学部規定

昭和33・5・1施行

昭和30・7・1より適用

鹿児島大学大学院医学研究科規程

昭和34・10・5施行

昭和34・4・1より適用

|                                                  |                                          |
|--------------------------------------------------|------------------------------------------|
| 鹿児島大学教育専攻科保健体育科に関する規定                            |                                          |
| “ 水産専攻科に関する規定                                    |                                          |
| “ 工学専攻科に関する規定                                    |                                          |
| 鹿児島大学入学検定料，入学料，授業料，受講料，寄宿料<br>入園料および保育料徴収規程の一部改正 | 昭和34年 月 日実施                              |
| 物品供用官の任命について                                     |                                          |
| 辞職願の様式統一について                                     | 昭和33・12・15                               |
| 鹿児島大学附属図書館医学部分館規定                                | 昭和34・1・16                                |
| 学外よりの学位請求論文取扱要項                                  | 昭和34・1・16施行                              |
| 鹿児島医学会々則                                         |                                          |
| 鹿児島大学医学部附属病院給食運営委員会規程                            | 昭和31・3・14制定<br>昭和33・5・1改正<br>昭和35・7・13改正 |
| 鹿児島大学大学院委員会規則                                    | 昭和34・10・5施行<br>昭和34・4・1より適用              |
| 鹿児島大学大学院医学研究科委員会規則                               | 昭和34・4・1施行                               |
| 鹿児島大学教員資格選考規程                                    | 昭和34年月日改正，施行                             |
| 熱帯医学会々則                                          | 昭和33年 月 日施行                              |
| 図書購入手続                                           | 昭和34・5・2                                 |
| 鹿児島大学医学部病理組織検査規則                                 | 昭和34年 月 日施行<br>昭和34・11・1から適用             |

|                                   |                                                               |
|-----------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 新制大学院における論文提出による医学関係の博士の学位の取扱について | 昭和33・5・1 文部省大学学術局長                                            |
| 鹿児島大学医学部医師会定款                     |                                                               |
| 鹿児島大学医学部学友会会則                     | 昭和35年 月 日<br>昭和37年4月1日改正                                      |
| 鹿児島大学学位規程                         |                                                               |
| 鹿児島大学大学院医学研究科教官資格基準               | 昭和34・5・1より適用                                                  |
| 鹿児島大学医学部附属病院総看護婦長候補者選定基準          | 昭和35・5・19施行                                                   |
| 同 副総看護婦長 ”                        | 昭和35・5・19施行                                                   |
| 総（副総）看護婦長 ” 細則                    | 昭和35・5・19施行                                                   |
| 鹿児島大学医学部附属病院看護婦長候補者選定基準           | 昭和35・5・19施行                                                   |
| 同上 看護婦主任                          | 昭和35・5・19施行                                                   |
| 鹿児島大学医学部附属病院長選考規程細則               | 昭和35・4・21施行<br>(従来の同候補者選定内規は廃止)<br>昭和39・4・23改正<br>昭和41・4・18改正 |
| 診療及公衆衛生に関する実施修練基準                 | 昭和35年3月改訂<br>昭和43年5月廃止                                        |
| 鹿児島大学医学部放射線障害予防規程                 |                                                               |
| 鹿児島大学医学部附属病院事務分掌規程                | 制定昭和33・5・1<br>改正昭和35・4・1施行<br>” 昭和37・4・1<br>” ” 38・4・1        |

|                       |                                          |
|-----------------------|------------------------------------------|
| 鹿児島大学医学部付属保健婦学校長選考規程  | 昭和36年4月1日施行                              |
| 看護制度運営委員会規則           | 昭和33・8・1施行<br>昭和35・9・19改正                |
| 鹿児島大学医学部付属病院講師候補者選定内規 | 昭和35・9・22施行                              |
| 附属病院諸料金規定及同細則         | 昭和37年7月26日施行                             |
| 財団法人親和会役員並評議員に関する資料   |                                          |
| 同 同 役員選任規則            | 昭和36・9・18実施                              |
| 同 同 評議員選出規則           | 昭和36・9・18施行                              |
| 国有財産監守者設定の根拠法等        |                                          |
| 鹿児島大学医学部放射線障害予防委員会規程  |                                          |
| 鹿児島大学医学部専修生規程         | 昭和38・4・1施行                               |
| 学位論文についての申合せ事項        | 昭和38・5・2                                 |
| 鹿児島大学医学部研修員規程         | 昭和38 4・1施行                               |
| 鹿児島大学慶弔会規約            | 昭和38・8・8施行<br>昭和38・5・1から適用               |
| 入院患者規則                | 昭和28・3・17制定<br>昭和29・1・22改正<br>昭和33・5・1改正 |
| 守衛服務内規（附属病院）          | 昭和33・5・1施行                               |

## 移 転 問 題

昭和38年5月14日臨時教授会において現在の医学部の敷地に地下1階地上6階の基礎を，グラウンドに病院を7階建とする構想で文部省に接衝することに決定。

昭和38年9月26日定例教授会において，将来講座数は基礎14～17臨床18とし，ベッド数は1,000床等とすることを確認。

同年12月19日定例教授会において現在地に高層建築するのは，城山の文化財保護および敷地不足で不適格である。

昭和39年6月22日臨時教授会において，亀ヶ原地区に限定せず移転することに一応決定。

同年7月9日定例教授会において，移転することに全会一致で決定した。同年9月3日臨時教授会において，本学，県および市等で促進委員会（仮称）を結成することに決定。

同年11月17日臨時教授会において亀ヶ原地区以外に移転適地なく，亀ヶ原地区を移転地とし，敷地は12.3万坪とすることに決定した。

# 第六章 鹿児島大学医学部附属病院



## 第6章 鹿児島大学医学部附属病院

当医学部附属病院は、旧鶴丸城趾にある学部と、濠を挟んで西郷翁とゆかりも深い私学校跡に、翠緑滴る風致と史実にとむ城山を背景として、紺碧の錦江湾をへだてて、正面に桜丘を望みつつ輪奐の美も鮮かに、その偉容を誇っている。

憶えば明治4年7月、廃藩置県により鹿児島藩医学校は鹿児島県立医学校となり、同病院は鹿児島県病院として発足した。当時は英医ウイリアム・ウイリスが、医学校長兼病院長として採配を振り、西日本の医学の中心地であった。しかし明治10年西南の役の勃発によって学校、病院とも閉鎖されるの止むなきに至った。其の後明治13年鹿児島初回の県会において、鹿児島医学校及び附属病院の開設が議決され、同年早くも附属病院開設の運びとなり、それ以来診療と医師の養成に貢献してきたが、明治20年地方税による医学校設立禁止のため学校、病院とも同21年3月廃止された。そして病院は私立鹿児島病院として開設、その後市立鹿児島病院となり、3転して明治40年県立鹿児島病院として再発足し、昭和18年鹿児島医学専門学校開設まで県民の診療に当たった。

昭和18年県立鹿児島医学専門学校の設立に伴い、県病院は附属病院となった。学制改革により医学専門学校は医科大学に昇格し、更に県立大学医学部より国立鹿児島大学医学部となった。そして附属病院は診療機関であると共に、研究機関として設備内容の充実が図られてきた。その間不幸にして戦災に遭遇、更に昭和27年再度の火災によって新築したばかりの病院が、全焼するという災厄にあったのである。然るに県民の総意と県当局の理解絶大な援助、計画で鉄筋コンクリート4階建の新病院が完成したのである。

以下附属病院の沿革、歴代の院長、診療各科の沿革、施設(霧島分院を含む)、特殊な機械器具、現職員等について記述すれば次のようである。

### (1) 沿革

明治期

明治 2. 3 小川町に藩病院を、浄光明寺内に附属医学校を設立、同年12月ウイリアム・ウイリス病院長兼医学校長に就任。

- 4. 7 廃藩置県により県病院となる。
- 5. 医学校を小川町都城屋敷内に移転。
- 10. 丁丑役後、ウ氏退職、臨時病院を仮設（院長三浦義純）。
- 11. 9 東本願寺法主大谷氏二本松通伊藤氏邸に施薬院を設置（院長藤田圭甫）。
- 13. 県立病院設立の議成立。
- 13. 6 県立鹿児島医学校及び附属病院開設布告、加治屋町仮舎屋において開業。
- 14. 4 鹿児島医学校の医学志願者募集、橘良全院長となる。
- 15. 1.29 山下町旧軍馬方跡に移転開業式挙行。
- 15.10 橘良全退職、後任浜野昇。
- 17. 浜野院長退職、小林広院長となる。
- 18. 8 鹿児島医学校附属病院規則制定。
- 21. 3 県立医学校及び附属病院廃止、高木反枝氏同病院を借用し私立病院を経営。
- 26. 契約満期に依り私立高木病院閉鎖。
- 26. 9. 1 市立病院となる。院長野田忠広。
- 29. 9 野田院長退職、院長欠員。
- 31. 日高昂病院長となる。
- 32. 4 日高院長退職。
- 33. 5 村田豊作病院長となる。
- 34. 9 婦人科設置（医長秋元隆次郎）。
- 37. 2 村田豊作応召・外科医長大村久賀太郎病院長を兼務。
- 39. 4 大村病院長死亡・田中苗太郎病院長に就任。  
市立病院県移管を議決（通常県会）。
- 40. 4. 1 市より県への引継を終り、県立鹿児島病院設立、病院長田中苗太郎、薬剤部設置（部長田中武治）。
- 40. 5 耳鼻咽喉科設置（部長羽根喜一）。
- 40. この年病院改築計画。
- 41. 4 小児科設置（部長永山在徳）。
- 42. 1 眼科部長野崎常典退職、眼科一時休止。
- 42. 9 田中院長病氣退職、後任浅原慎次郎。
- 42.12 欠員中の庶務部長に樗木記秀就任。

- 43. 3. 9 午後2時本館より出火，同館及び小使室全焼（損害約6,000円）。
- 44. 4 休止中の眼科開始（部長河本軍次郎）。
- 44. 6 患者賄直営から請負となる。
- 44. 8 副院長を置く（副院長村田豊作）。

#### 大正期

- 大正 2. 6 看護婦宿舎を最後に病院改築事業完了。
- 2. 8 院長浅原慎治郎退職，後任汲田元之丞。
- 3. 1.12 桜島爆発，病院多少の被害を受け，一時伊敷村の陸軍衛戍病院を借用して患者を避難させ，17日帰院させた。
- 11. 3.25 病院敷地の中その官有地であったものを払下購入の件許可。
- 11. 4 歯科新設（部長柴田実）および皮膚泌尿科新設（部長深井東天）。
- 12. 5 大沢宏精神科部長拝命。
- 12. 5.14 鹿児島郡中郡宇宿村郡元に精神科分院創設。
- 13.10 汲田院長退職，後任宇野規矩治。
- 15. 2 宇野院長退職，土井留之助院長昇任。

#### 昭和期

- 昭和 2. 6 歯科部長柴田実退職，三宅久夫歯科部長就任。
- 3. 3. 5 院長土井留之助死亡退職。
- 3. 4. 2 警察部長永野清院長事務取扱となる。
- 3. 5. 6 平安山長義院長に昇任。
- 3. 5 石田堅三郎外科部長就任。
- 5. 3 瓦斯引込工事竣工。
- 5. 5 院内蒸気鉄管及び水道鉄管修理工事竣工。
- 5. 9 防火栓設備工事施工。
- 5.10 レントゲン室増築。
- 5.12 看護婦宿舎その他増築工事竣工，汚物焼却炉新設工事竣工，レントゲン部元試験室跡に移転，歯科部レントゲン部跡に移転。
- 6.11.30 精神科分院本院より分離して，県立鹿児島保養院と改称。
- 6. 4.30 平安山院長退職，後任石田堅三郎。
- 7. 5. 4 レントゲン部を物理療法科と改称，部長斉藤正雄。
- 7. 5.24 物理療法科部長斉藤正雄退職。
- 7. 5.25 縄田千郎物理療法科部長に就任。

- 9. 1 私設電話交換器設置工事竣工。
- 9. 2 この月から3月31日までに物理療法科，内科，皮膚泌尿器科，寄宿舍廊下等増築工事竣工。
- 9.11. 6 第10回全国官公立病院事務協議会開催。
- 11. 5 齒科増築。
- 11. 6 自動車の払下げを受けた。
- 12. 1 院達1号をもって当院非常事変心得を改正，全員に対し非常線出入之証を交付。
- 12. 4 産婦人科部長柳井昌憲退職，九大助教授町野碩夫部長就任。
- 12.10 物理療法科を放射線科と改称。
- 12.12 霧島温泉治療研究所設立事業開始，部長帆足作次郎。
- 16. レントゲン治療室を増設，深部治療器及び写真撮影器を購入。
- 18. 1.30 県立鹿児島医学専門学校設立許可，内政部長池田長吉校長事務取扱を被命。
- 18. 2 高安慎一医専校長を命ぜられ，開校準備に着手，照国神社前に仮校舎を定め，四月開校。
- 18. 4. 1 医専附属医院となる。
- 19. 4. 1 霧島温泉療科本院より分離して医専附属霧島温泉研究所となる。
- 19.12. 医専鴨池新校舎に移転。
- 20. 4.20 整形外科新設（部長宮崎淳弘）。
- 20. 6. 石田院長退職，後任に町野碩夫昇任（文部省発令11月21日）。
- 20. 4. この年始めころから本土空襲始まり，各都市漸次戦災を被った。  
4月8日市内爆弾攻撃を受け戦傷者の治療を行った。
- 20. 6.17 焼夷弾攻撃に依り病院焼失，看護婦1名軽傷，石田前院長，江口庶務部長，赤崎医員爆死，収容中の患者は草牟田県立盲啞学校に移し，治療を行った。
- 20. 8.15 終戦。
- 20.10.23 進駐軍々政官バーナー大尉，岩切市長と共に本院（盲啞学校）来訪，今後の経営に関し状況聴取。
- 20.11. 5 外地引揚傷病者収容病院に指定され，特に重篤患者多数を収容。
- 21. 1. 4 進駐軍医務官パーキンス中尉来訪。
- 21. 1.22 厚生省鹿児島引揚援護局指定病院となる。洲崎国民学校に第1

- 収容所を開設。
- 21. 3. 8 進駐軍の好意に依りペニシリンの無償支給を受けた。
  - 21. 3. 13 30日まで恩賜戦災者診療所開設。
  - 21. 3. 15 病院復興委員会発足す。
  - 21. 4. 25 元18部隊酒保の1棟を借り受け主として内科患者を収容。
  - 21. 6. 10 県庁仮庁舎（1高女）において医専復興委員会開催。
  - 21. 8. 27 加治屋町1高女階下6教室の焼跡を修理して外来診療所を開設。
  - 21. 9. 18 外来診療所を山下町県庁別館に移転。
  - 21.10.13 県議会に於いて医専を大学に昇格することに決議。
  - 21.11. 4 文部省より大学昇格に関する現地視察員として阪大病院長吉松信室、岡山医大教授遠藤仲節来訪。
  - 22. 3. 3 山下町武徳殿跡に平家瓦葺一棟を建築し外来診療所を移転。
  - 22. 5. 1 病院使用料条例改正，健康保険料金と同額徴収することとなる。
  - 22. 5. 3 本年度より元県立病院跡に遂次病棟その他の設備を復旧することとなった。本年度中に竣工した建築物。
    - 一病棟，平家木造（183.5坪）
    - 二病棟，平家木造（172.75坪）
    - 三病棟，平家木造（220坪）
    - 薬局，平家木造（46坪）
    - 歯科診療室，平家木造（118.25坪）
    - 本館二階建木造（463.5坪）以上建築費4,559,790円。  
佐藤八郎第二内科開設部長に就任。
  - 23. 1. 1 元県病院跡に建設されていた厚生省引揚援護局付属検疫病院が廃止され，その払下げを受け，盲啞学校収容中の患者の一部を移動。
  - 23. 本年度中に竣工した建築物。
    - 5病棟，二階建木造（394坪）
    - 放射線科，二階建木造（318.5坪）
    - 外科，二階建木造（252.5坪）
    - 整形外科，二階建木造（230.5坪）
    - 一内科，二階建木造（315坪）以上建築費24,135,000円。

- 23.12.30 盲啞学校収容中の患者全部新築病舎に収容。
24. 4. 1 大学に昇格、鹿児島県立大学医学部となり、これに伴い同医学部附属病院となる。
24. 9.30 精神神経科再開（部長佐藤幹正）
24. 本年度中に竣工した建築物。  
産婦人科，二階建木造（279.25坪）  
炊事室，二階建木造（177.5坪）  
汽罐室，平家木造（64坪）  
洗濯室，平家木造（36坪）  
看護学校，二階建木造（196坪）  
以上建築費10,728,000円。
26. 9. 8 事務機構改正に依り事務部長に片平幾雄就任。
- 26.12.24 町野碩夫医学部長，医科大学長，医専校長就任。附属病院長候補者選定規程制定。
26. 本年度中に竣工した建築物。  
小児科，二階建木造（212.52坪）  
眼科，二階建木造（273.75坪）  
耳鼻咽喉科，二階建木造（227.5坪）  
以上建築費14,453,000円。
27. 1.17 縄田千郎病院長就任。
27. 3.31 附属病院及び附属霧島温泉研究所使用料等徴集条例制定。
27. 4.24 午前0時15分病院東側民家より出火，病院は洗濯室と仮看護婦宿舎を除き全部類焼々失（建物 4,274坪）午前三時半鎮火，入院患者は無事市立病院，鉄道病院，国立病院に収容。
27. 4.28 仮看護婦宿舎において外来診療開始。
27. 4.29 看護学校講堂外6室を仮病室として使用106名収容。
27. 5.15 県立衛生研究所の一部を借用し，試験室を開設。  
仮設応急建物竣工。  
薬局，平家木造（9坪）  
患者待合，平家木造（5.25坪）  
患者受付，平家木造（14.5坪）  
倉庫，平家木造（24坪）便所，平家木造（37.5坪）  
汚物処理場，平家木造（1.5坪）。

27. 5.25 知事専決処分により災害応建費(16,628,900円支出決定)。
27. 6. 5 鴨池分院(医学部内)仮設応急建物。  
食器消毒室, 平家木造(3坪)  
渡廊下, 平家木造(5.5坪)  
洗面洗濯室, 平家木造(3坪)  
便所, 平家木造(15坪)  
浴室, 平家木造(5.5坪)。
27. 6.10 鴨池分院設置, 医学部講堂外3室に72名収容。
27. 7.26 応急手術室木造平家(8坪)および看護婦寄宿舎木造平家新築(152坪)。
27. 8. 1 病院事務分掌について院長通牒発行。
27. 9. 3 仮設建物  
事務室, 平家木造(42坪)  
屍室, 平家木造(5坪)  
便所, 平家木造(1.5坪)  
ギブス室, 平家木造(3.75坪)  
浴室, 平家木造(3.75坪)。
27. 9 大学病院年次別復旧計画決定。
- 27.12.22 応急建物  
別館病棟(1), 平家木造(42.75坪)  
炊事場増築, 平家木造(2.25坪)。
28. 1. 7 応急建物 別館病棟(2), 平家木造(91坪)。
28. 1.30 応急建物 別館病棟(3), 平家木造(157.75坪)。
28. 3. 6 仮設建物  
職員浴室, 平家木造(3.5坪)  
汚物焼却場, 平家木造(1.5坪)。
28. 3.26 車庫, 平家木造(9坪)  
洗濯場, 平家木造(4.5坪)。
28. 3.17 防火措置要綱制定, 入院患者規則制定。
28. 3.31 仮設建物 患者浴室, 平家木造(7坪)。
28. 5.15 病院本建築起工式。
28. 5.31 炊事棟木造モルタル一部二階建新築(212.25坪)。  
(以下建築については別項にかかげる)

- 28.11.13 医局長会議規程制定。
- 28.11.18 附属病院長候補者選定内規改正。
- 28.12. 3 部長会議規程制定。
- 29. 1.17 縄田千郎病院長に再選任命。
- 29. 3.18 試験室，衛生研究所より応急手術室跡に復歸。
- 29. 3.27 大学副手規程制定。
- 29. 4.17 仮設外来診療所，手術棟と別館の一部に仮移転。
- 29. 7.31 鴨池分院閉鎖。
- 29.12.15 病院非常警備規程制定。
- 30. 2 病院建築工事竣工。
- 30. 3. 4 病院落成挙行。
- 30. 5.10 第一動物舎新築，木造平家建（36坪）。
- 30. 5.31 用務員室新築，木造平家建（21坪）。
- 30. 6.10 元洗濯場(36坪)，元事務室(42)坪を用途変更及び 3.2坪増築，計81.2坪を一般食堂として使用。
- 30. 6.15 第一守衛室新築，木造平家建(3.75坪)  
第二守衛室新築，木造平家建（1.5坪）。
- 30. 7. 1 国立移管が年次計画に従い開始された。
- 30. 7.30 別館病棟増築，木造平家建（3.75坪）。
- 30. 8.13 薬品庫新築，鉄筋 2 階建（16.04坪）。
- 30.12.24 縄田千郎県立大学医学部長，県立鹿児島医科大学長に就任，鹿児島大学医学部長併任。
- 31. 1.17 高安晃附属病院長就任。
- 31. 3.14 附属病院給食運営委員会規程制定。
- 31. 4. 1 内科学第一，第二，神経精神医学，小児科，産婦人科学講座国立移管。
- 31. 5.10 霊安室新築，木造平家建（20坪）。
- 31. 7. 7 第二看護婦宿舍新築，木造 2 階建一部平家建（142坪），看護婦宿舍浴室新築，木造平家建（27坪）。
- 31.11.26 第一研究棟新築，鉄筋四階建(405.55坪)  
臨床講義室新築，木造二階建（128.5坪）  
車庫新築，ブロック及びコンクリート造平家建(15.8坪)。
- 32. 3.20 薬品庫渡廊下新築，木造平家建（7.5坪）。

32. 3.30 仮設の中央試験室(97.75坪) 仮設倉庫(24坪)車庫(9坪), 並びに仮設患者浴室(7坪)をそれぞれ解体。
32. 4. 1 外科学第一, 外科学第二, 皮膚泌尿器科, 耳鼻咽喉科学講座国立移管。
32. 4. 1 第2外科開設(九州大学助教授秋田八年部長就任33.10.1)
- 32.12.24 佐藤八郎県立大学医学部長, 県立鹿児島医科大学長就任。鹿児島大学医学部長併任。
- 32.12.26 第2動物舎新築, 木造平家建(6坪)。
33. 1.17 内山八郎附属病院長就任。
33. 2. 3 附属病院看護婦寄宿舎規則制定。
33. 2.11 第5病棟新築, 木造平家建(135坪)  
物療室新築, 木造平家建(34.06坪)  
消毒室新築, 木造平家建(6坪)  
別館病棟附属便所, 木造平家建(7.125坪)。
33. 3.13 附属病院長選考規程制定。  
附属病院霧島分院長選考規程制定。
- 33.3.3.31 第2研究棟新築3階建(155.52坪)  
石炭庫新築, 木造平家建(30坪)  
第3動物舎改築木造平家建(3坪)。
33. 4. 1 鹿児島大学医学部附属病院長選考規程制定。
33. 5. 1 鹿児島大学医学部附属病院となる(院長内山八郎)国立移管完了。整形外科学, 眼科学, 放射線医学講座国立移管。  
霧島温泉研究所は附属病院霧島分院となる(分院長宮崎淳弘)。  
附属病院庶務規程制定, 学用取扱規程制定。
33. 8. 1 附属病院看護制度運営委員会規程制定。
- 33.10. 1 附属病院諸料金規程制定。
34. 4. 1 大学院医学研究科設置。
34. 5.21 附属病院将来計画建築委員会設置。
34. 7.31 コバルト60治療棟新築, 鉄筋平家建(40.17坪)。
34. 8. 1 鹿児島大学医学部附属病院当直規程制定。
35. 2.27 財団薬局開局。
35. 4.21 鹿児島大学医学部附属病院長選考規程細則制定。
35. 5.19 鹿児島大学医学部附属病院総看護婦長候補者選定基準制定。

- 35. 5.19 鹿児島大学医学部附属病院看護婦長候補者選定基準制定。
- 35. 5.19 鹿児島大学医学部附属病院看護主任候補者選定基準制定。
- 35. 6. 1 縄田千郎附属病院長就任。
- 35. 8. 1 鹿児島大学医学部附属病院看護制度運営委員会規則制定。
- 36. 4. 1 鹿児島大学医学部保健婦学校長選考規程制定。
- 37. 6. 1 縄田千郎附属病院長再任。
- 38. 4. 1 中央検査部新設（部長助教授尾辻省悟）。
- 39. 6. 1 岡元健一郎附属病院長就任。
- 40. 4. 1 中央手術室が中央手術部として認可された（部長助教授吉武潤一）。
- 40. 4. 1 皮膚，泌尿器科が皮膚科と泌尿器科に分離が承認された。  
（泌尿器科部長，岡本健一郎，皮膚科部長，皆見紀久男）。
- 40. 3.25 霧島分院新営工事竣工（1,666㎡）。
- 40. 3.31 矢野総婦長退職。
- 40.11.20 第二研究棟四階増築工事竣工（177.675㎡）。
- 40.12.15 精神科，保護室新営工事竣工（79.84㎡）。
- 41. 6. 1 宮崎淳弘附属病院長に就任。
- 42. 1.28 皮膚科病棟新営及模様替工事竣工（121㎡）。
- 42. 3. 4 手術棟増築工事（組立式）竣工（180㎡）。
- 42. 3.20 看護学校寄宿舎（組立式）竣工（198.74㎡）。
- 42. 3.25 霧島分院機能訓練室新営工事竣工（265.68㎡）。
- 42. 6. 1 霧島分院50床に増床。
- 42. 6. 1 中央材料室が中部材料部として認可された。
- 42. 6.16 国立大学附属病院の診療科を定める訓令（文部省訓令第二十三号第二十四号）により鹿児島大学医学部附属病院に置く診療科及び臨床検査等に関する部が定められ科長制が実施された。

## (2) 歴代の院長

### 創設時代

| 氏名             | 就任年月 | 退任年月  | 備考         |
|----------------|------|-------|------------|
| ウィリアム・<br>ウィリス | 明治2年 | 明治10年 | 藩病院<br>県病院 |

### 西南の役前後

|      |         |       |      |
|------|---------|-------|------|
| 三浦義純 | 明治10年   | 明治11年 | 臨時病院 |
| 藤田圭甫 | 明治11年9月 | 明治13年 | 施薬院  |

### 鹿児島医学校時代

|     |         |          |  |
|-----|---------|----------|--|
| 橋良全 | 明治14年4月 | 明治15年10月 |  |
| 浜野昇 | 明治15年   | 明治17年    |  |
| 小林広 | 明治17年   | 明治21年    |  |

### 市立病院時代

|        |         |         |  |
|--------|---------|---------|--|
| 野田忠広   | 明治26年9月 | 明治28年9月 |  |
| 日高昂    | 明治31年   | 明治32年4月 |  |
| 村田豊作   | 明治33年5月 | 明治37年2月 |  |
| 大村久賀太郎 | 明治37年2月 | 明治39年4月 |  |
| 田中苗太郎  | 明治39年   | 明治40年3月 |  |

### 県立鹿児島病院時代

|       |          |          |  |
|-------|----------|----------|--|
| 田中苗太郎 | 明治40年4月  | 明治42年9月  |  |
| 浅原慎次郎 | 明治42年9月  | 大正2年8月   |  |
| 汲田元之丞 | 大正2年8月   | 大正13年10月 |  |
| 宇野規矩治 | 大正13年10月 | 大正15年2月  |  |
| 土井留之助 | 大正15年2月  | 昭和3年3月   |  |

|         |        |         |  |
|---------|--------|---------|--|
| 平安山 長 義 | 昭和3年5月 | 昭和7年4月  |  |
| 石 田 堅三郎 | 昭和7年4月 | 昭和18年1月 |  |

医専附属医院時代

|         |         |         |  |
|---------|---------|---------|--|
| 石 田 堅三郎 | 昭和18年1月 | 昭和20年6月 |  |
| 町 野 碩 夫 | 昭和20年6月 | 昭和24年4月 |  |

県立医大附属病院時代

|         |         |         |  |
|---------|---------|---------|--|
| 町 野 碩 夫 | 昭和24年4月 | 昭和27年1月 |  |
| 縄 田 千 郎 | 昭和27年1月 | 昭和27年3月 |  |

県立大学医学部附属病院時代

|         |         |         |  |
|---------|---------|---------|--|
| 縄 田 千 郎 | 昭和27年4月 | 昭和31年1月 |  |
| 高 安 晃   | 昭和31年1月 | 昭和33年1月 |  |
| 内 山 八 郎 | 昭和33年1月 | 昭和33年4月 |  |

国立移管後の院長（鹿大医学部附属病院）

| 氏 名     | 就 任 年 月 | 退 任 年 月 | 備 考 |
|---------|---------|---------|-----|
| 内 山 八 郎 | 昭和33年5月 | 昭和35年5月 |     |
| 縄 田 千 郎 | 昭和35年6月 | 昭和37年5月 |     |
| 縄 田 千 郎 | 昭和37年6月 | 昭和39年5月 |     |
| 岡 元 健一郎 | 昭和39年6月 | 昭和41年5月 |     |
| 宮 崎 淳 弘 | 昭和41年6月 |         |     |

分 院 長

| 氏 名     | 就 任 年 月   | 退 任 年 月 | 備 考   |
|---------|-----------|---------|-------|
| 宮 崎 淳 弘 | 昭和33年5月1日 | 昭和41年4月 |       |
| 浜 田 康 治 | 昭和41年5月   |         | 鹿大助教授 |

### (3) 診療各科の沿革

| 科名                                                                | 部<br>科<br>長<br><small>(国立学校設置法施行規則の一部改正により科長となる昭和42年6月16日付)</small> | 就任        | 退任年月     | 備考                       |
|-------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|-----------|----------|--------------------------|
| 内科                                                                | 小林 宏                                                                | 明治17年     | 明治21年    | 鹿児島医学校時代                 |
|                                                                   | 野田 忠広                                                               | 明治26. 9.1 | 明治29年 9月 | 市立病院時代                   |
|                                                                   | 小林 亀太郎                                                              | 明治29年 9月  | 明治30年 6月 |                          |
|                                                                   | 加藤 好照                                                               | 明治30年 9月  | 明治32年 8月 |                          |
|                                                                   | 村田 豊作                                                               | 明治33年 5月  | 明治37年 2月 | (召集)                     |
|                                                                   | 紀井 研太郎                                                              | 明治37年 2月  | 明治38年12月 |                          |
|                                                                   | 村田 豊作                                                               | 明治39年 1月  | 大正 2年 2月 | 県立病院時代                   |
|                                                                   | 辻 寛治                                                                | 大正 2年 2月  | 大正 3年 2月 |                          |
|                                                                   | 宇野 規矩治                                                              | 大正 3年 2月  | 大正15年 2月 | 大正 5年11月より大正 7年 6月迄京大に留学 |
|                                                                   | 石割 仁三郎                                                              | 大正 5年 1月  | 大正 7年 6月 |                          |
|                                                                   | 松尾 武幸                                                               | 大正15年 2月  | 昭和 3年 1月 |                          |
|                                                                   | 平安山 長義                                                              | 昭和 3年 2月  | 昭和11年 4月 |                          |
|                                                                   | 藤田 卯二六                                                              | 昭和11年 4月  | 昭和14年12月 |                          |
| 桜井 之一                                                             | 昭和15年 1月                                                            | 昭和22年 7月  | 医専教授     |                          |
| 第一内科<br>昭和22年新設<br>第二内科<br>昭和22年新設<br>が新設されたので<br>桜井部長は第一内科部長となる。 | 桜井 之一                                                               | 昭和22年 7月  | 昭和26年 2月 | 医専教授, 医大教授               |
|                                                                   | 榎屋 富一                                                               | 昭和26年 2月  | 昭和33年 7月 | 医大, 県大, 鹿大教授             |
|                                                                   | 金久 卓也                                                               | 昭和34年 3月  |          | 鹿大教授                     |
| 第二内科<br>昭和22年7月新設                                                 | 佐藤 八郎                                                               | 昭和22年 7月  |          | 医専, 医大, 県大, 鹿大教授         |
| 外科                                                                | 沢部 保雄                                                               | 明治17年     | 不明       |                          |
|                                                                   | 熊野 周治                                                               | 明治26年 9月  | 明治34年 4月 | 市立病院                     |
|                                                                   | 大村 久賀太郎                                                             | 明治34年 7月  | 明治39年 4月 | 逝去                       |
|                                                                   | 田中 苗太郎                                                              | 明治39年 4月  | 明治42年 9月 | 県立病院                     |
|                                                                   | 浅原 慎次郎                                                              | 明治42年 9月  | 大正 2年 8月 |                          |

| 科 名                         | 部 (科 長)                                                                                                              | 就 任                                                                                                                              | 退 任 年 月                                                                                                              | 備 考                                                                           |
|-----------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|
|                             | 汲 田 元之丞<br>土 井 溜之助<br>石 田 堅三郎<br>森 良 雄<br>内 山 八 郎                                                                    | 大正 2年 8月<br>大正13年10月<br>昭和 3年 5月<br>昭和20年10月<br>昭和21年10月                                                                         | 大正13年10月<br>昭和 3年 3月<br>昭和20年 6月<br>昭和21年 8月<br>昭和32年 3月                                                             | 死 亡<br><br><br><br>医専,医大,県大,鹿大教授                                              |
| 第一外科                        | 内 山 八 郎                                                                                                              | 昭和32年 4月                                                                                                                         |                                                                                                                      | 国立移管, 鹿大教授                                                                    |
| 第二外科                        | 秋 田 八 年                                                                                                              | 昭和33年10月                                                                                                                         |                                                                                                                      | 鹿大教授                                                                          |
| 昭和32年 4 月講座設置 昭和33年10月治療科開設 |                                                                                                                      |                                                                                                                                  |                                                                                                                      |                                                                               |
| 整形外科<br>昭和20年<br>4 月新設      | 宮 崎 淳 弘                                                                                                              | 昭和20年 4 月                                                                                                                        |                                                                                                                      | 医専, 医大, 県大, 鹿大教授                                                              |
| 産婦人科<br>明治34年<br>9月新設       | 秋 元 隆次郎<br>緒 方 十右衛門<br>佐 藤 良 彦<br>井 岡 忠 雄<br>渡 辺 辰 雄<br>若 原 貞 一<br>中 島 藤 蔵<br>緒 方 英 俊<br>柳 井 昌 憲<br>町 野 碩 夫<br>森 一 郎 | 明治34年 9月<br>明治36年 6月<br>明治38年 6月<br>明治40年 6月<br>明治42年 3月<br>大正 2年 8月<br>大正 7年 9月<br>大正13年 3月<br>昭和 5年 3月<br>昭和12年 4月<br>昭和40年10月 | 明治36年 4月<br>明治38年 6月<br>明治40年 6月<br>明治42年 3月<br>大正 2年 8月<br>大正13年 3月<br>大正 9年11月<br>昭和 5年 2月<br>昭和12年 4月<br>昭和40年 3月 | 市立病院<br><br><br>県立病院<br><br>大正 8年 5月より 9年11月<br>迄京大留学<br><br>医専, 医大, 県大, 鹿大教授 |
| 眼 科                         | 日 高 昂<br>桑 原 丘 為<br>森 路 定 範<br>野 崎 常 典                                                                               | 明治31年<br>明治32年 4月<br>明治39年<br>明治41年 4月                                                                                           | 明治32年 4月<br>明治32年 8月<br>明治41年 1月<br>明治42年 1月                                                                         | 市立病院<br><br>県立病院<br>以後眼科一時閉鎖                                                  |

|                              |                                                                                         |                                                                                                                      |                                                                                                          |                                                                                                                 |
|------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                              | 河本 軍次郎<br>樋渡 一夫<br>山本 清一<br>緒方 清躬<br>広石 甫<br>楠元 康雄<br>渡辺 伊勢雄<br>高野 三喜雄<br>高安 晃<br>谷口 慶晃 | 明治44年 4月<br>大正 8年 1月<br>大正11年 4月<br>大正14年12月<br>昭和 2年 9月<br>昭和 6年 7月<br>昭和12年 7月<br>昭和15年 8月<br>昭和23年 3月<br>昭和43年 8月 | 大正 8年 1月<br>大正11年 4月<br>大正14年12月<br>昭和11年 8月<br>昭和 6年 7月<br>昭和12年 7月<br>昭和15年 8月<br>昭和23年 2月<br>昭和43年 3月 | 医専教授<br>医専,医大,県大,鹿大教授                                                                                           |
| 小児科<br>明治41年<br>4月新設         | 永山 在徳<br>望月 章<br>近藤 炯二<br>森田 幸門<br>鈴木 靖<br>有馬 純<br>長野 祐憲<br>永山 徳郎<br>永山 徳郎<br>寺脇 保      | 明治41年 4月<br>大正元年 9月<br>大正10年 8月<br>大正12年 4月<br>大正15年 6月<br>昭和 4年 6月<br>昭和13年 6月<br>昭和26年 9月<br>昭和26年 9月<br>昭和38年 2月  | 大正元年 9月<br>大正10年 8月<br>大正12年 3月<br>大正15年 6月<br>昭和 4年 5月<br>昭和13年 5月<br>昭和26年 3月<br>昭和37年 6月              | 県立病院<br><br><br><br><br><br>医専, 医大教授<br>医大, 県大, 鹿大教授<br>昭和37年 6月 1日<br>九大へ出向<br>鹿大教授                            |
| 皮膚科<br>泌尿器科<br>大正11年<br>4月新設 | 深井 東天<br>田島 外雄<br>中牟田 厚<br>福田 正彦<br>長谷川 栄之助<br>青島 盛<br>伊藤 衛門<br>樺島 強一<br>浜田 長徳          | 大正11年 4月<br>大正14年 9月<br>昭和 4年 2月<br>昭和 6年 7月<br>昭和13年 8月<br>昭和17年 6月<br>昭和18年 4月<br>昭和18年 7月<br>昭和19年 5月             | 昭和 2年 8月<br>不明<br>昭和 6年 7月<br>昭和17年 6月<br>昭和19年 3月<br>昭和18年 6月<br>昭和21年 3月<br>昭和21年 8月                   | 県立病院<br>大正14年9月より昭和2年<br>8月迄京大留学死亡退職<br>死亡退職<br>昭和13年8年より九大留学<br><br>昭和17年10月迄昭和19<br>年3月戦死<br>部長代理<br><br>部長代理 |

| 科 名                                                                                                                                | 部 (科 長)                                                                                                    | 就 任                                                                                                                  | 退 任 年 月                                                                                      | 備 考                                                                               |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
|                                                                                                                                    | 岡 元 健一郎                                                                                                    | 昭和21年 5月                                                                                                             |                                                                                              | 医専, 医大, 県大, 鹿大教授                                                                  |
| 泌尿器科<br>昭和40年<br>4月1日<br>皮膚科<br>が新設<br>された<br>ので元<br>岡は泌<br>尿器と<br>科部長<br>となる。                                                     | 岡 元 健一郎                                                                                                    | 昭和32年 4月                                                                                                             |                                                                                              | 鹿大教授                                                                              |
| 皮 膚 科<br>昭和40年<br>4月新設                                                                                                             | 皆 見 紀久男                                                                                                    | 昭和41年 1月                                                                                                             |                                                                                              | 鹿大教授                                                                              |
| 耳 鼻 科<br>咽 喉 科<br>明治40年<br>5月新設                                                                                                    | 羽 根 喜 一<br>十 倉 頼 介<br>武 田 元一郎<br>度 藤 雄 平<br>緒 方 周 一<br>宮 城 洸 山<br>原 田 雄 吉<br>寺 師 忠 雄<br>野 坂 保 次<br>久 保 隆 一 | 明治40年 5月<br>大正 7年 3月<br>大正 9年12月<br>大正12年10月<br>大正13年 4月<br>昭和 2年 8月<br>昭和 7年 6月<br>昭和14年11月<br>昭和21年 4月<br>昭和31年 3月 | 大正 7年 3月<br>大正 9年 1月<br>昭和 2年 8月<br>大正13年 4月<br>大正14年 5月<br>昭和 7年 6月<br>昭和14年11月<br>昭和31年 1月 | 県立病院<br><br>昭和12年10月より14年5<br>月迄京大留学<br><br><br>昭和16年6月応召<br>医専, 医大, 県大教授<br>鹿大教授 |
| 神 經 科<br>大正12年<br>5月と<br>新設し<br>て元<br>新設<br>3月<br>開始<br>6年<br>精神<br>院は<br>改称<br>され<br>た<br>昭和<br>24年<br>9月<br>精神<br>科と<br>され<br>た。 | 大 沢 宏<br>新 名 常 造<br>佐 藤 幹 正<br>同<br>松 本 啓                                                                  | 大正12年 5月<br>昭和 2年 8月<br>昭和 6年 3月<br>昭和24年 9月<br>昭和43年11月                                                             | 昭和 2年 7月<br>昭和 6年 3月<br>昭和 6年11月<br>昭和43年 3月                                                 | 県立病院, 死亡退職<br><br><br>医専, 医大, 県大, 鹿大教授                                            |
| 放射線科<br>昭和 7年                                                                                                                      | 斉 藤 正 雄                                                                                                    | 昭和 6年                                                                                                                | 昭和 7年 5月                                                                                     | 月県立病院                                                                             |

|                                                                                                                                                            |                                                                |                                                                                  |                                                                    |                                                                         |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 5月物理<br>療法科と<br>して新設                                                                                                                                       | 縄田千郎<br>曾根重夫<br>縄田千郎<br>篠原慎治                                   | 昭和7年5月<br>昭和15年3月<br>昭和17年3月<br>昭和43年10月                                         | 昭和15年3月<br>昭和17年3月<br>昭和43年3月                                      | 昭和15年3月より17年3月<br>迄九大留学<br>留守部長<br>医専, 医大, 県大, 鹿大教授                     |
| 歯科<br>大正11年<br>4月新設                                                                                                                                        | 柴田実<br>三宅久夫<br>内山有三<br>林善三郎<br>副島侃二                            | 大正11年4月<br>昭和2年6月<br>昭和11年4月<br>昭和12年12月<br>昭和23年11月                             | 昭和11年6月<br>昭和23年10月<br>昭和12年11月<br>昭和13年8月                         | 県立病院<br>昭和11年4月より12年8月<br>迄九大留学医専教授<br>留守部長<br>留守部長<br>医専, 医大, 県大, 鹿大教授 |
| 昭和34年<br>4月歯科<br>口腔外科<br>講座とな<br>る                                                                                                                         | 副島侃二<br>塩田重利                                                   | 昭和24年3月<br>昭和40年11月                                                              | 昭和39年8月                                                            | 死亡退職昭和39年8月2日<br>鹿大教授                                                   |
| 温泉療法<br>科<br>昭和11年<br>12月霧島<br>温泉治療<br>研究所設<br>立<br>昭和19年<br>4月医専<br>附属霧島<br>温泉研究<br>所として<br>本院から<br>分離<br>昭和33年<br>5月1日<br>国立移管<br>と同時<br>に霧島<br>院とな<br>る | 帆走作次郎<br>下河辺舜一<br>岡藤儀作<br>下河辺舜一<br>森繁俊<br>佐藤八郎<br>宮崎淳弘<br>浜田康治 | 昭和12年10月<br>昭和17年4月<br>昭和18年<br>昭和20年<br>昭和21年<br>昭和24年6月<br>昭和30年10月<br>昭和41年5月 | 昭和7年4月<br>昭和18年<br>昭和20年<br>昭和21年<br>昭和24年6月<br>昭和30年9月<br>昭和41年4月 | 県立病院<br>温研所長死亡退職                                                        |
| 薬剤部                                                                                                                                                        | 田村典瑞<br>牧野多太士<br>宮内善次郎<br>田中武治<br>岩切清<br>浜島寅夫<br>清水龍夫          | 明治16年4月<br>明治11年1月<br>明治28年12月<br>明治40年4月<br>大正11年7月<br>昭和21年4月<br>昭和40年4月       | 不明<br>明治28年<br>大正11年7月<br>昭和21年8月<br>昭和40年3月                       | 市立病院(薬局長)<br>県立病院(薬局部長)<br>薬局長(昭和20年2月より)<br>停年退職                       |

## 中央診療施設の部長

| 施設                                                                          | 部長    | 就任年月     | 退任年月     | 備考                        |
|-----------------------------------------------------------------------------|-------|----------|----------|---------------------------|
| 中央<br>検査部<br>(昭和42<br>年6月16<br>日付国立<br>学校設置<br>法一部改<br>正により<br>検査部と<br>なる。) | 金久卓也  | 昭和38年 4月 | 昭和39年 8月 | 鹿大教授<br>鹿大助教授             |
|                                                                             | 尾辻省悟  | 昭和39年 9月 |          |                           |
| 中央<br>手術部<br>(昭和42<br>年6月16<br>日付国立<br>学校設置<br>法一部改<br>正により<br>手術部と<br>なる。) | 内山八郎  | 昭和40年 4月 | 昭和40年12月 | 鹿大教授<br>鹿大助教授             |
|                                                                             | 吉武潤一  | 昭和41年 1月 |          |                           |
| 事務部                                                                         | 樗木記秀  | 明治42年12月 | 大正11年 5月 | 庶務部長                      |
|                                                                             | 大山綱仕  | 大正 8年 9月 | 大正12年 2月 | 〃                         |
|                                                                             | 宇都清之進 | 大正12年 2月 | 大正12年 9月 | 〃                         |
|                                                                             | 八木与之助 | 大正12年10月 | 昭和 3年 5月 | 〃                         |
|                                                                             | 山元正一  | 昭和 3年 5月 | 昭和 6年 3月 | 〃                         |
|                                                                             | 佐藤英助  | 昭和 6年 3月 | 昭和11年 9月 | 〃                         |
|                                                                             | 吉田詮則  | 昭和11年 9月 | 昭和13年 4月 | 〃                         |
|                                                                             | 新堂啓蔵  | 昭和13年 4月 | 昭和19年 8月 | 〃                         |
|                                                                             | 江口好照  | 昭和19年 9月 | 昭和20年 6月 | 戦災死(昭和20年6月17日)           |
|                                                                             | 磯辺盛吉  | 昭和20年 8月 | 昭和26年 9月 | 庶務部長                      |
|                                                                             | 片平幾雄  | 昭和26年 9月 | 昭和36年 3月 | 事務部長(県)事務長                |
|                                                                             | 小鷹正人  | 昭和36年 4月 | 昭和38年 3月 | 事務長                       |
|                                                                             | 松山清   | 昭和38年 4月 | 昭和39年 3月 | 〃(病院事務部制設置に<br>より管理課長となる) |
|                                                                             | 田代滋穂  | 昭和39年 4月 |          | S 39.4~S 41.3<br>事務部長     |

## 総看護婦長

|  |      |          |          |           |
|--|------|----------|----------|-----------|
|  | 矢野シマ | 昭和21年12月 | 昭和40年 3月 | 総看護婦長事務取扱 |
|  | 瑞穂 梅 | 昭和40年 4月 | 昭和40年 4月 |           |
|  | 内山政江 | 昭和40年 5月 |          |           |

## (4) 病院施設

| 施設名      | 構造               | 坪数       | 備考           |
|----------|------------------|----------|--------------|
| 管理診療棟    | 鉄筋コンクリート四階建塔屋付   | 1,666.69 | 昭和30. 2.20完工 |
| 第一研究棟    | 〃 四階建            | 405.55   | 31.11.26     |
| 第二研究棟    | 〃 三階建            | 155.52   | 33. 3.31     |
| 臨床講義室    | 木造セメントモルタル塗二階建   | 128.5    | 31.11.26     |
| 第一病棟     | 鉄筋コンクリート四階建      | 568.08   | 29. 1.31     |
| 第二病棟     | 〃 〃 塔屋付          | 699.23   | 28.10.31     |
| 連絡棟(病棟)  | 〃 三階建一部四階塔屋付     | 305.96   | 29. 3. 3     |
| 手術洗濯棟    | 〃 二階一部三階建        | 250.95   | 29. 3. 3     |
| 物療室      | 木造セメントモルタル塗平家建   | 34.06    | 33. 2.11     |
| 汽罐棟      | 〃 〃              | 147.5    | 28.10.31     |
| 炊事棟      | 〃 二階建            | 228.81   | 28. 7.15     |
| 霊安室      | 〃 平家建            | 20       | 31. 5.10     |
| 別館病棟     | 木造下見板張平家建        | 317.92   | 28. 1.30     |
| 別館病棟附属便所 | 〃 〃              | 7.125    | 増築30. 7.30   |
| 別館病棟附属家  | 〃 〃              | 30       | 33. 2.11     |
| 第五病棟     | 〃 〃              | 135.     | 31. 3.31     |
| 消毒室      | 〃 〃              | 6.       | 33. 2.11     |
| 第一守衛室    | 木造セメントモルタル塗平家建   | 3.75     | 30. 6.15     |
| 第二守衛室    | 〃 〃              | 1.5      | 30. 6.15     |
| 車庫       | 鉄筋コンクリートブロック造平家建 | 15.8     | 31.11.26     |
| 薬品庫      | 鉄筋コンクリート二階建      | 16.04    | 30. 8.13     |

| 施設名              | 構造                    | 坪数        | 備考                                                                           |
|------------------|-----------------------|-----------|------------------------------------------------------------------------------|
| 薬品庫渡廊下           | 木造 平家建                | 7.5       | 32. 3.20                                                                     |
| 電気室              | 木造セメントモルタル塗平家建        | 10.       | 30. 2.20                                                                     |
| 用務員室             | ” ”                   | 21.       | 30. 5.31                                                                     |
| 第一動物舎            | 木造堅羽目板張平家建            | 36.       | 30. 5.10                                                                     |
| 第二動物舎            | ” ”                   | 6.        | 32.12.26                                                                     |
| 一般食堂             | 木造セメントモルタル塗並びに下見板張平家建 | 81.2      | 炊事場36坪<br>(元炊事場)25.10.26<br>食堂42坪27.9.3<br>(元事務室)<br>42坪移改築<br>3.2坪増築30.6.10 |
| 第三動物舎            | 木造下見板張平家建             | 3.0       | 33.3.31完工                                                                    |
| 石炭庫              | 木造腰壁石造腰上下見板張平家建       | 30.       | 昭和33. 3.31完工                                                                 |
| ポンプ室             | 木造下見板張平家建             | 1.        | 29. 3. 3                                                                     |
| 焼却炉上家            | 木造 平家建                | 5.        |                                                                              |
| 第一看護婦宿舍          | 木造下見張二階建一部平家建         | 202.75    | 152.5坪新築<br>152.5坪移改築<br>昭和27.7.26完工<br>50.25坪増築<br>昭和29. 5. 1完工             |
| 第二看護婦宿舍          | 木造セメントモルタル塗二階建一部平家建   | 142.      | 31. 7. 7                                                                     |
| 看護婦宿舍浴室          | 木造セメントモルタル塗平家建        | 27.       | 31. 7. 7                                                                     |
| 小計               |                       | 5,716.435 |                                                                              |
| 第三病棟(県共済組合結核病棟)  | 木造セメントモルタル塗二階建一部平家建   | 238.82    | 30. 4.23                                                                     |
| 第三病棟(政府職員共済結核病棟) | 木造セメントモルタル塗二階建一部平家建   | 150.      | 29. 7.21                                                                     |
| 小計               |                       | 388.82    |                                                                              |
| 計                |                       | 6,105.255 |                                                                              |
| 食器消毒室            | 木造平家スレート葺             | 16.5      | 39. 1.13完工                                                                   |
| 新生児室             | ” セメント瓦葺              | 10.       | 38. 2.19                                                                     |
| 精神科保護室           | ブロック建平家               | 24.3      | 40.12.15                                                                     |
| 用度倉庫             | 木造平家スレート葺             | 12.3      | 38. 9.28                                                                     |
| コバルト治療室          | コンクリート平家建             | 25.1      | 34. 8. 7                                                                     |

|                          |                |      |                   |
|--------------------------|----------------|------|-------------------|
| 渡廊下                      | 木造平家瓦葺         | 15   | 〃                 |
| 温室                       | 〃 ガラス張         | 2.25 | 36. 3.27          |
| 自転車置場                    | 鉄筋コンクリート       | 16.9 | 37. 3.30          |
| 別館棟付属<br>渡廊下             | 木造平家セメント瓦葺     | 11.6 | 30. 7.30          |
| ポンプ室                     | ブロック           | 3    | 38. 3.25          |
| 第一外科動物舎                  | 木造平家瓦葺         | 8    | 38.10. 8          |
| 加圧水槽ポンプ室                 | ブロック造          | 2.65 | 39. 3.21          |
| 調理係事務室                   | 木造平家           | 28.0 | 41.12.30          |
| お産室                      | 〃              | 34.0 | 39. 3.14          |
| 薬品庫                      | 〃              | 19.0 | 40.12.15          |
| アイソトープ室<br>渡廊下及看護<br>事務室 | 〃              | 54.0 | 40.12.28          |
| 小児科動物舎(猿)                | 〃              | 45.0 | 41. 9. 1          |
| 用度倉庫                     | 組立式プレハブ        | 49.  | 41.10.15          |
| 電話交換手仮眠室                 | 木造スレート葺<br>(減) | 4    | 42. 2.21          |
| ポンプ室                     | 木造平家           | 1    | 39.10.29<br>取りこわし |

## 霧島分院

### ○ 病院施設

| 施設名   | 構 造            | 坪 数   | 備 考                   |
|-------|----------------|-------|-----------------------|
| 管理診療棟 | 木造セメントモルタル塗平家建 | 88.77 | 昭和12. 完工              |
| 手術棟   | 木造下見板張平家建      | 11.50 | 33. 3.30              |
| 第一渡廊下 | 〃              | 15.85 | 12.                   |
| 第一病棟  | 〃              | 79.0  | 12.                   |
| 第三病棟  | 〃              | 38.   | 12.                   |
| 浴 棟   | 〃              | 52.82 | 12.<br>31.12.15       |
| 第二渡廊下 | 〃              | 10.55 | 17.82坪解体改築<br>昭和12年完工 |

| 第二病棟    | 〃         | 81.25 | 12                                                         |
|---------|-----------|-------|------------------------------------------------------------|
| 炊事棟並洗濯場 | 〃         | 34.01 | 31.12.15<br>5.14坪増築                                        |
| 看護婦宿舎   | 〃         | 26.25 | 昭和33.3.30<br>2.62坪増築<br>昭和12年完工                            |
| ラジューム浴棟 | 〃         | 9.22  | 昭和31.12.15<br>10.5坪増築<br>昭和12年完工<br>昭和30.2.24<br>5.75坪解体改築 |
| 職員住宅    | 木造下見板張平家建 | 22.10 | 昭和12年完工                                                    |
| 動物舎     | 〃         | 3.    | 昭和12年完工<br>昭和30.12.17<br>元第一倉庫用途及び<br>名称変更                 |
| 倉庫      | 〃         | 3.    | 昭和12年完工<br>昭和30.12.17元第二<br>倉庫名称変更                         |
| (分院)    |           |       |                                                            |
| 施設名     | 構 造       | 坪 数   | 備 考                                                        |
| 浴 場     | 木造平家      | 13    | 39.8.6竣工                                                   |
| 本 館     | 鉄筋コンクリート  | 503   | 40.3.25                                                    |
| 渡 廊 下   | 木造スレート葺   | 16.   | 40.8.12<br>(減)取りこわし                                        |
| 管理診療棟   | 木造平家      | 88.77 | 40.8.4取りこわし                                                |
| 第一渡廊下   | 〃         | 15.85 | 〃                                                          |
| 第一病棟    | 〃         | 79.   | 〃                                                          |
| 浴 棟     | 〃         | 52.8  | 〃                                                          |
| 動物舎     | 〃         | 3     | 〃                                                          |
| 倉 庫     | 〃         | 3     | 〃                                                          |

附属病院関係主要備品

43.3現在

| 品名              | 価格        | 教室  | 品名                   | 価格        | 教室     |
|-----------------|-----------|-----|----------------------|-----------|--------|
| X線装置            | 万円<br>383 | 中 X | 診断用 X線               | 万円<br>105 | 〃      |
| 〃               | 286       | 〃   | 治療用 X線               | 110       | 〃      |
| 〃               | 370       | 〃   | 脳波計                  | 244       | 中 検    |
| 〃               | 564       | 〃   | 人工心肺                 | 108       | 二 外    |
| シンチレーション        | 108       | 中 検 | ユニバーサルドージメーター        | 115       | 中 X    |
| アストラップ          | 166       | 中 手 | 自動現像機                | 609       | 〃      |
| バスプロ            | 166       | 中 検 | 鉄の肺                  | 130       | 急 伝    |
| 〃               | 194       | 〃   | X線                   | 260       | 中 X    |
| 多用途監視装置         | 179       | 2の1 | 〃                    | 274       | 〃      |
| 〃               | 〃         | 中 手 | 光刺激装置                | 161       | 中 検    |
| オートアナライザー       | 400       | 中 検 | N <sub>2</sub> ガス分析器 | 133       | 〃      |
| 心蘇生器            | 215       | 中 手 | フィルムチェンジヤー           | 259       | 中 X    |
| シンチレーションカウンター   | 100       | アイソ | I, Lメーター             | 146       | 中 検    |
| ハイポハイパー加熱冷却自存装置 | 130       | 中 手 | 多用途監視記録装置            | 125       | 中 検    |
| デルモパン           | 225       | 皮膚  | ファイバースコープ            | 108       | 〃      |
| イメージインテンシファイヤー  | 440       | 中 手 | ハーバートタンク             | 133       | 中 物    |
| ハーバートタンク        | 233       | 分院  | イメージインテンシファイヤー       | 390       | 中 X    |
| カールツァイス光凝固装置    | 600       | 眼科  | 心音心電記録再生装置           | 150       | 中 検    |
| 万能呼吸装置          | 227       | 中 手 | X線                   | 270       | 中 X    |
| 万能写真顕微鏡装置       | 346       | 中 検 | 〃                    | 215       | 〃      |
| 人工心肺装置          | 108       | 二 外 | 間歇索引治療機              | 196       | 中 物    |
| 〃               | 109       | 〃   | コバルト60治療装置           | 131       | コバルト   |
| 脳波分析装置          | 108       | 中 検 | ターボビットクランオートーム       | 114       | 中 手    |
| 閉鎖循環麻酔機         | 120       | 中 手 | R I 走査診断装置           | 280       | アイソトープ |
| 診断用 X線          | 102       | 中 X | ディフュージョンテスト          | 272       | 中 検    |
| 〃               | 124       | 〃   | 電顕                   | 300       | 電 顕    |

## (5) 附属病院(職員)

昭和43年10月1日現在

| 部門別        | 職名            | 氏名    | 部門別  | 職名            | 氏名    |
|------------|---------------|-------|------|---------------|-------|
| 院長         | 文部教官<br>教授 医博 | 宮崎 淳弘 | 第一外科 | 文部教官<br>講師 医博 | 坂元 明雄 |
| 第一内科       | 文部教官<br>講師 医博 | 藤田礼一郎 |      | 助手            | 市来 齐  |
|            | “ “           | 新村 健  |      | “ 医博          | 川畑 量平 |
|            | 助手 “          | 河野 泰子 |      | “             | 長野幸五郎 |
|            | “ “           | 林 茂文  |      | “             | 加治佐 隆 |
| “ “        | 稲森 幸浩         | “     | “    | 是枝誠一郎         |       |
| 第二内科       | 文部教官<br>講師 医博 | 中馬 康男 | 第二外科 | 文部教官<br>講師 医博 | 西村 基  |
|            | “ “           | 尾辻 義人 |      | “ “           | 迫田 晃郎 |
|            | 助手 “          | 与那嶺和男 |      | 助手 “          | 有馬 栄徳 |
|            | “ “           | 大山 治史 |      | “ “           | 今村 貞敏 |
|            | “ 医博          | 恒成 政生 | “ “  | 土持 昭男         |       |
|            | “ “           | 美坂 幸治 | “ “  | 尼子 春樹         |       |
|            | “ “           | 有馬 桂  | 整形外科 | 文部教官<br>講師 医博 | 鮫島 教彦 |
| “ “        | 高原 篤重         | “ 医博  |      | 段 亮一          |       |
| “ “        | “ “           | 助手    |      | 樺山 資臣         |       |
| 神経科<br>精神科 | 文部教官<br>講師 医博 | 今村 一英 | “    | “             | 長野 芳幸 |
|            | 助手            | 筑波 貞男 | 皮膚科  | 文部教官<br>講師 医博 | 児浦 純生 |
|            | “ “           | 畠中 裕幸 |      | 助手            | 桑原 淑子 |
| “ “        | 三原 忠紘         | “     |      | 森下 玲子         |       |
| 小児科        | 文部教官<br>講師 医博 | 平山 清武 | 泌尿器科 | 文部教官<br>講師 医博 | 大井 好忠 |
|            | 助手            | 大堂 庄三 |      | 助手            | 富山 哲郎 |
|            | “ “           | 宮田晃一郎 |      | “             | 角田 和之 |
| “ “        | 鎌之原 昌         | “     |      | “             | 泊 忍   |
| 第一外科       | 文部教官<br>講師 医博 | 大山 満  |      |               |       |

| 部門別            | 職 名               | 氏 名   | 部門別     | 職 名                          | 氏 名   |
|----------------|-------------------|-------|---------|------------------------------|-------|
| 眼 科            | 文部教官<br>助 手       | 内田 洋人 |         | 文 部 技 官<br>技 術 員 主 任         | 中尾 林  |
|                | 〃                 | 原田 一道 |         | 〃                            | 山下 沢夫 |
|                | 〃                 | 勝目 紀一 |         |                              |       |
| 耳 鼻<br>咽 喉 科   | 文部教官<br>講 師       | 曲田 公光 | 手 術 部   | 文 部 教 官<br>助 教 授 医 博         | 吉武 潤一 |
|                | 助 手               | 鹿島 直子 |         | 助 手                          | 児玉 公彦 |
|                | 〃                 | 上村 良彦 |         | 〃                            | 野辺 貞典 |
|                | 〃                 | 高木 茂  |         | 〃 医博                         | 吉村 望  |
| 産 婦 人 科        | 文部教官<br>講 師 医 博   | 家村 邦重 | X 線 室   | 文 部 技 官<br>レントゲン<br>コバルト室主 任 | 税所 篤正 |
|                | 助 手               | 池田富士雄 | 物 療 室   | 文 部 技 官<br>主 任               | 酒元 一雄 |
|                | 〃                 | 竹田 芽生 | 歯 工 科 室 | 文 部 技 官<br>主 任               | 楠本 章  |
|                | 〃                 | 池田 友信 | 事 務 部   | 文 部 事 務 官<br>事 務 部 長         | 田代 滋穂 |
|                | 〃                 | 前田 宣久 |         | 〃                            | 管理課長  |
| 放 射 線 科        | 文部教官<br>講 師       | 後藤 有人 | 〃       | 業務課長                         | 斉藤 勝郎 |
|                | 助 手               | 赤崎 郁郎 | 〃       | 管理課長補佐                       | 山元 則夫 |
|                | 〃                 | 有川 憲蔵 | 〃       | 業務課長補佐                       | 野田 哲徳 |
|                | 〃                 | 伊東 祐治 | 〃       | 庶務係長                         | 村岡 道哉 |
|                | 〃                 | 倉岡 東一 | 〃       | 人事係長                         | 中俣 了  |
| 歯 科<br>口 腔 外 科 | 文部教官<br>講 師       | 篠原 寿宏 | 〃       | 経理係長                         | 水元 辰一 |
|                | 助 手               | 増田 敏雄 | 〃       | 用度係長                         | 稲葉 政雄 |
|                | 〃                 | 川平 淳  | 〃       | 照査係長                         | 福丸 砂雄 |
|                | 〃                 | 肝付 正  | 〃       | 附属学校事務主任                     | 盛田 直義 |
|                |                   |       | 〃       | 入院係長                         | 世古宗正憲 |
| 検 査 部          | 文部教官<br>助 教 授 医 博 | 尾辻 省悟 | 〃       | 外来係長                         | 吉留 正雄 |
|                | 助 手               | 園田 順一 | 〃       | 収入係長                         | 堀脇 徳二 |
|                | 〃                 | 品川 俊一 | 〃       | 調理係長                         | 細山 覚  |
|                |                   |       |         |                              |       |

| 部門別     | 職 名                                                                                                                                                 | 氏 名                                                                                                                                                                                | 部門別   | 職 名                           | 氏 名                                                                                                                               |
|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|-------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|         | 文部事務官<br>整備係長<br>" "<br>営繕係長                                                                                                                        | 中島 実<br>雪元 正章                                                                                                                                                                      | 看護部   | "<br>"<br>文部技官<br>看護主任        | 山内 寿美<br>松元イソ子<br>井野 幸子<br>谷山ちどり<br>榎本美以子<br>岩満アサエ<br>牧角 靖子<br>熊副マサ子<br>向江 時子<br>坂元喜代子<br>塩川 睦子<br>桂 博子<br>森 慶子<br>宮野 哲子<br>奥江 珪子 |
| 薬 剤 部   | 文部技官<br>薬劑部<br>調劑主任<br>製劑主任<br>麻薬主任                                                                                                                 | 清水 龍夫<br>永吉 義雄<br>上山 直樹<br>藤本 豊次                                                                                                                                                   |       |                               |                                                                                                                                   |
| 看 護 部   | 文部技官<br>総看護婦<br>文部看護婦<br>" "<br>" " | 内山 政江<br>野間 静子<br>今村シヅエ<br>大窪マサエ<br>上原ヨシ子<br>前田 ヌリ<br>下小野田イチ子<br>橋口 藤子<br>柳田 俊子<br>坂口トシ子<br>有田伊津子<br>川俣 静子<br>菱島 祥子<br>外蘭 聡子<br>東郷甫佐子<br>酒匂 寛子<br>橋本 綾子<br>鮎川ヨシ子<br>小鷹芙美子<br>新原美津子 |       |                               |                                                                                                                                   |
| 霧 島 分 院 |                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                    |       |                               |                                                                                                                                   |
|         |                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                    | 部門別   | 職 名                           | 氏 名                                                                                                                               |
|         |                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                    | 分 院 長 | 文部技官<br>助教授 医博                | 浜田 康治                                                                                                                             |
|         |                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                    | 内 科   | 助 手                           | 坂元 藤雄                                                                                                                             |
|         |                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                    | " "   | " "                           | 鹿島 友義                                                                                                                             |
|         |                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                    | 事 務 室 | 文部事務官<br>事務主任<br>文部技官<br>看護主任 | 原口 正一                                                                                                                             |
|         |                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                    | 看 護 部 | 文部技官<br>看護主任                  | 竹丸ユキミ                                                                                                                             |

## 第七章

附属学校、図書館、研究施設、

病院各部、分院、親和会



## 第 7 章 附属学校, 図書館, 研究施設, 病院各部, 分院, 親和会

### (1) 附属学校

#### 鹿児島大学医学部附属看護学校

- 昭和25. 4. 25. 鹿児島県立看護学校（臨床看護学科）として現在地に新設。  
初代校長として県立医学専門学校附属病院長町野碩夫就任。
- 昭和26. 8. 31. 甲種看護婦養成所として厚生大臣の指定を受く。
- 昭和27. 4. 1. 県立興健女子学院と県立看護学校を合併し、更めて県立看護学校として発足。
1. 興健女子学院は県立看護学校公衆衛生看護学科（同年2月保健婦養成機関として厚生大臣の指定を受く）となり、
  2. 従来の県立看護学校は新機構による臨床看護学科となる。
- 昭和28. 3. 28. 第1回卒業式挙行（12名）
- 昭和31. 2. 20. 第2代校長として県立大学医学部附属病院長高安晃就任。
- 昭和32. 4. 1. 再び分離し、
1. 県立看護学校公衆衛生看護学科は県立公衆衛生看護学院と、
  2. 県立看護学校臨床看護科は鹿児島県立大学医学部附属看護学校となる。
- 昭和32. 4. 1. 鹿児島県立大学医学部附属看護学校として文部大臣の指定を受く。
- 昭和33. 3. 31. 第3代校長として県立大学医学部附属病院長内山八郎就任。
- 昭和33. 5. 1. 国立移管に伴い鹿児島大学医学部附属看護学校と改称。
- 昭和35. 4. 1. 第4代校長 鹿児島大学教授 縄田千郎。
- 昭和39. 6. 1. 第5代校長 鹿児島大学教授 岡元健一郎。
- 昭和41. 6. 1. 第6代校長 鹿児島大学教授 佐藤幹正。
- 昭和43. 4. 1. 第7代校長 鹿児島大学教授 岡元健一郎。

職 員

| 年 月 日      | 専 任 教 員   |            |         |
|------------|-----------|------------|---------|
| 昭和25. 4    | 宮 内 節 子   | 水 迫 ナツエ    | 片 牧 静 江 |
| 〃 27. 7.10 | 〃         | 桜 井 マリ子    |         |
| 〃 29. 5. 1 | 〃         | 〃          | 大 窪 マサエ |
| 〃 29.11. 1 | 瑞 穂 梅     | 〃          | 〃       |
| 〃 31. 4. 1 | 〃         | 〃          | 佐 多 敏 子 |
| 〃 32. 4. 1 | 〃         | 〃          | 村 永 啓 子 |
| 〃 34. 4. 1 | 〃         | 〃          | 下小野田イチ子 |
| 〃 35. 8.15 | 〃         | 〃          | 牧之瀬 紀美子 |
| 〃 36. 4. 1 | 〃         | 山 中 カヲイ    | 〃       |
| 〃 37. 4. 1 | 〃         | 〃          | 永 井 啓 子 |
| 〃 38. 4. 1 | (宮内) 今村節子 | 〃          | 霧 田 フサエ |
| 〃 41. 4. 1 | 霧 田 フサエ   | (山中) 若松カヲイ | 坂 元 喜代子 |
| 〃 42. 4. 1 | 〃         | 〃          | 永 井 啓 子 |

卒業生人員

| 回生 | 卒 業 年 月 日   | 人 員  |
|----|-------------|------|
| 1  | 昭和 28. 3.28 | 12 名 |
| 2  | 昭和 29. 3.23 | 20 名 |
| 3  | 〃 30. 3.19  | 10 名 |
| 4  | 〃 31. 3.20  | 23 名 |
| 5  | 〃 32. 3.16  | 23 名 |
| 6  | 〃 33. 3.15  | 29 名 |
| 7  | 〃 34. 3.18  | 23 名 |
| 8  | 〃 35. 3.21  | 19 名 |
| 9  | 〃 36. 3.11  | 20 名 |
| 10 | 〃 37. 3. 3  | 30 名 |
| 11 | 〃 38. 3. 9  | 23 名 |
| 12 | 〃 39. 3.16  | 28 名 |
| 13 | 〃 40. 3. 6  | 30 名 |
| 14 | 〃 41. 3. 8  | 26 名 |
| 15 | 〃 42. 3.11  | 28 名 |
| 16 | 〃 43. 3. 9  | 46 名 |

## 鹿児島大学医学部附属助産婦学校

昭和26年いらい旧制度の助産婦学校が中断されており、本県が離島や無医部落の多いという特殊事情から、有能な助産婦を多数育成して母子衛生の向上や福祉の増進、並びに家族計画による受胎調節の指導者として一層高い専門的の知識や技術を習得し、而も人間性に富んだ婦人を育成して社会へ送るべく開設されたものである。

昭和32.10. 1. 鹿児島県立大学医学部附属助産婦学校として鹿児島市山下町72番地に新設。

初代校長として県立大学医学部教授町野碩夫就任。

職員（専任教員）

鹿児島県公立各種学校教員 田 中 エ タ

同 宮 内 京 子

昭和33.11.20. 文部大臣の指定を受く。

鹿児島大学医学部附属助産婦学校

昭和35. 5. 1. 国立移管に伴い鹿児島大学医学部附属助産学校と改称。

昭和35. 5. 1. 専任教員

文部教官 田 中 エ タ

同 山 下 聰 子

昭和40. 3.31. 学校長 町 野 碩 夫 停年退職

昭和40. 4. 1. 学校長 鹿児島大学教授 岡 元 健一郎 就任。

昭和40.10. 1. 鹿児島大学教授 森 一 郎 学校長に就任。

昭和41. 4. 1. 専任教員

文部教官 田 中 エ タ

同 糸 岡 幹 子

入学資格 新制度看護学校卒業生及び旧卒業生、助産婦看護婦免許有資格者。

卒業生

第 1 回 10 名

第 2 回 8 名

第 3 回 9 名 昭和35. 3.21. 卒業

第 4 回 4 名 " 36. 3.16. "

第 5 回 3 名 " 37. 3. 3. "

|        |      |   |           |   |
|--------|------|---|-----------|---|
| 第 6 回  | 12 名 | 〃 | 38. 3. 9. | 〃 |
| 第 7 回  | 9 名  | 〃 | 39. 3.16. | 〃 |
| 第 8 回  | 12 名 | 〃 | 40. 3. 6. | 〃 |
| 第 9 回  | 9 名  | 〃 | 41. 3. 8. | 〃 |
| 第 10 回 | 9 名  | 〃 | 42. 3.11. | 〃 |
| 第 11 回 | 15 名 | 〃 | 43. 3. 9. | 〃 |

### 鹿児島大学医学部附属保健婦学校

昭和15.11. 財団法人鹿児島県社会事業協会と鹿児島県社会課の共催による社会保健婦の養成が行われた。

職 員

永 野 貞

内 田 靖 子

昭和17. 4. 1. 財団法人鹿児島県社会事業協会保健婦養成所として鹿児島市加治屋町 101番地 県立第一高等女学校内に新設校長県立第一高等女学校長藤吉喜一就任。

職員 藤田イチ子, 今井百代, 木村そめよ, 田中ミチ。

昭和17.11.27. 第一種保健婦養成所に厚生大臣指定。

昭和18. 4. 1. 県に移管し鹿児島県立保健婦養成所となる。

所長 三 浦 光

昭和20 .7.20. 大東亜戦争末期空襲により 県立第一高等女学校と共に 校舎を焼失した。

昭和20.10.22. 薩摩郡入来町副田の国民修練所跡にて授業開始。

昭和21. 4. 1. 鹿児島県立興健女子学院（3年課程）と改称。

昭和24. 4.30. 鹿児島市山下町 1 番地県衛生試験所内に移転した。

昭和24. 9.12. 3年課程学生の募集を中止し5ヶ月講習所を開設した（旧保健婦規則第8条に基く講習）。

昭和24.11.11. 現在地に新築中の校舎が竣工し, 移転した(着工昭和24.4.25.)。総建坪（2階延面積）323.9坪

昭和24.11.21. 新校舎に接続して看護学校校舎新築工事が着工された。

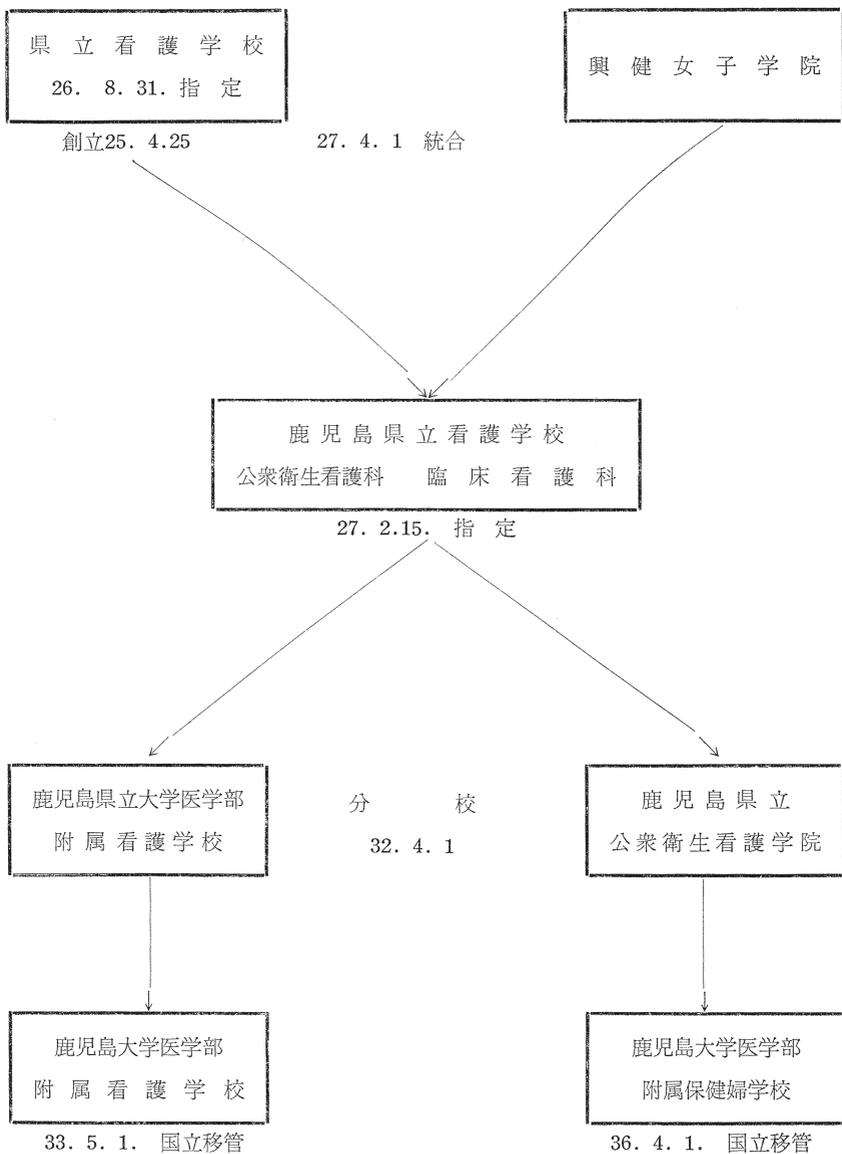
昭和26. 3.14. 3年課程最終の第7期生卒業。

昭和27. 2.15. 興健女子学院を 鹿児島県立看護学校公衆衛生看護学科と改め保健婦養成所として厚生大臣の指定を受けた。

- 昭和27. 3.31. 興健女子学院廃止。
- 昭和27. 4. 1. 臨床看護学科（看護婦養成）と公衆衛生看護学科（保健婦養成）とを併合する 鹿児島県立看護学校発足。  
校長に県立大学医学部教授町野碩夫就任。
- 昭和31 .2. 校長に県立大学教授高安晃就任。
- 昭和32. 4. 1. 臨床看護学科は鹿児島県立大学医学部附属となり、 公衆衛生看護学科は鹿児島県立公衆衛生看護学院となる。  
学院長に鹿児島県衛生部長嶋崎祐三就任。
- 昭和33. 4. 1. 養護教諭養成機関に指定された。
- 昭和34. 7.15. 学院長に村上新太郎就任。
- 昭和36. 4. 1. 国立移管により鹿児島大学医学部附属保健婦学校となる。  
校長に鹿児島大学教授縄田千郎就任。
- 〃 保健婦， 助産婦， 看護婦法第19条第1項の保健婦養成機関として文部大臣の指定を受けた。
- 〃 教育職員免許法第5条第1号に定める 養護教諭養成機関として文部大臣の指定を受けた。
- 専任職員  
文部教官 郡 山 のぶえ  
(平)  
同 今 井 洋 子
- 昭和38. 4. 1. 学校長として鹿児島大学教授北原経太就任。  
専任職員 文部教官 山 元 郁 子  
同 今 井 洋 子

卒業生人員

| 回 生   | 卒 業 年 月 日  | 卒 業 人 員                |
|-------|------------|------------------------|
| 第 1 回 | 昭和 19. 3.  | 53名 鹿児島県立保健婦養成所卒       |
| 2 "   | " 20. 3.   | 15 " "                 |
| 3 "   | " 20. 7.31 | 32 " "                 |
| 4 "   | " 21. 2.20 | 26 " "                 |
| 5 "   | " 24. 3. 9 | 13 " 県立興健女子学院卒         |
| 6 "   | " 25. 3.13 | 7 " "                  |
| 7 "   | " 26. 3.14 | 3 " "                  |
| 第 1 回 | " 27.12.15 | 12 " 鹿児島県立看護学校公衆衛生看護学科 |
| 2 "   | " 28.12. 5 | 17 " "                 |
| 3 "   | " 29.12. 4 | 15 " "                 |
| 4 "   | " 30.12. 3 | 10 " "                 |
| 5 "   | " 31.12. 4 | 14 " "                 |
| 第 1 " | " 33. 3.22 | 9 " 県立公衆衛生看護学院         |
| 2 "   | " 34. 3.20 | 11 " "                 |
| 3 "   | " 35. 3.18 | 7 " "                  |
| 4 "   | " 36. 3. 6 | 20 " "                 |
| 第 1 回 | " 37. 3. 3 | 17名 鹿児島大学医学部附属保健婦学校    |
| 2 "   | " 38. 3. 9 | 21 " "                 |
| 3 "   | " 39. 3.16 | 22 " "                 |
| 4 "   | " 40. 3. 6 | 22 " "                 |
| 5 "   | " 41. 3. 8 | 20 " "                 |
| 6 "   | " 42. 3.11 | 16 " "                 |
| 7 "   | " 43. 3. 9 | 20 " "                 |



## 2. 図 書 館 (鹿児島大学附属図書館医学部分館)

### ○蔵 書

県立鹿児島医学専門学校 時代 自 昭和18年4月1日  
至 " 27年3月31日現在

和 書 1,587冊  
洋 書 758冊  
雑 誌 125種

県立鹿児島医科大学 時代 自 昭和22年6月18日  
至 " 30年3月5日現在

一般教育図書 1,562冊  
専 門 図 書 6,496冊  
雑誌 その他 11,341冊

鹿児島県立大学医学部 時代 自 昭和24年2月21日  
至 " 33年7月1日現在

一般教育図書 795冊  
専 門 図 書 9,425冊  
雑 誌 332種

鹿児島大学医学部 自 昭和30年7月1日  
至 " 34年11月 末 現在

| 区 分     | 内 国 書  | 外 国 書  | 計                  |
|---------|--------|--------|--------------------|
| 一般教育図書  | 1,425  | 925    | 2,350 <sup>冊</sup> |
| 専 門 図 書 | 19,668 | 10,614 | 30,282             |
| 学 術 雑 誌 | 283種   | 221種   | 504種               |

S.43. 3.31. 現在

|         | 内 国 書  | 外 国 書  | 計                  |
|---------|--------|--------|--------------------|
| 一 般 図 書 | 2,195  | 1,284  | 3,479 <sup>冊</sup> |
| 専 門 図 書 | 26,551 | 20,038 | 46,589             |
| 計       | 28,746 | 21,322 | 50,068             |
| 学 術 雑 誌 | 535種   | 586種   | 1,121種             |

## ○利用状況

| 利用者別   | 入館者    | 館内閲覧   | 館外帯出  | 利用冊数計<br>合 計 |
|--------|--------|--------|-------|--------------|
| 教 官    | 4,200人 | 18,100 | 5,125 | 23,225冊      |
| 学 生    | 13,600 | 16,650 | 2,945 | 19,595       |
| 職 員    | 500    | 870    | 265   | 1,135        |
| そ の 他  | 180    | 110    | 30    | 140          |
| 学 外    | 60     | 70     | 15    | 85           |
| 計 (年間) | 18,540 | 35,800 | 8,380 | 44,180       |
| 一日平均   | 62     | 119    | 28    | 147          |

## ○建 物

- 昭和18年4月12日 県立鹿児島医学専門学校仮校舎（鹿児島市山下町19番地）内に図書室を置く。
- 昭和19年12月9日 県立鹿児島医学専門学校が買収した純心女学校校舎（鹿児島市鴨池町第2校舎）内に図書室及び閲覧室を移転す。
- 昭和23年8月31日 本館及び講堂，図書室竣工（鹿児島市鴨池町第1校舎内）
- 昭和27年3月31日 図書館書庫竣工（同上地）
- 昭和32年2月16日 新校舎旧七高跡に移転開始33年5月国立移管完了。
- 昭和43年5月 現在の図書館施設は次の通り。  
書庫 354㎡（底面約36坪但し3層式6万冊収容可能）  
事務室60㎡（18坪）  
閲覧室 109㎡（33坪）

## ○機 構

- 昭和40年4月1日 鹿児島大学附属図書館は図書館機構を中央図書館制に改め全学図書館を統合し，医学部分館は従来通り分館として存置することになったが，系列としては改めて鹿児島大学附属図書館医学部分館として発足した。

## ○分館委員会

医学部分館の現在の運営委員は次の通りである。

委員長 教授 川路清高  
委員 “ 城哲男

“ “ 塩 田 重 利  
 “ “ 皆 見 紀久男  
 “ “ 遠城寺 宗 知  
 “ 助教授 田 代 正 昭  
 “ “ 浜 田 良二郎

### ○館 長

| 官 職                             | 職 別 | 氏 名   | 在 職 期 間                   |
|---------------------------------|-----|-------|---------------------------|
| 鹿児島県立医科大学図書課長                   | 教 授 | 森 耕一  | S.23.5.<br>～S.25.3.       |
| “                               | 教 授 | 大保不二夫 | S.25.3.<br>～S.26.3.       |
| 鹿児島県立大学医学部図書課長                  | 教 授 | 松本 保久 | S.26.4.<br>～S.28.3.       |
| 鹿児島県立大学附属図書館 <sup>医学部</sup> 分館長 | 教 授 | 三上 芳雄 | S.28.4.<br>～S.31.3.16.    |
| “                               | 教 授 | 佐藤 堅  | S.31.3.16.<br>～S.33.3.16. |
| “                               | 教 授 | 平野 清寿 | S.33.3.16.<br>～S.33.4.30. |
| 鹿児島大学附属図書館 <sup>医学部</sup> 分館長   | 教 授 | 平野 清寿 | S.33.5.<br>～S.39.4.       |
| “                               | 教 授 | 久保 隆一 | S.39.5.<br>～S.43.4.       |
| “                               | 教 授 | 川路 清高 | S.43.5.<br>～              |

事務室

|                                  |            |       |                          |
|----------------------------------|------------|-------|--------------------------|
| 鹿児島大学附属図書館 <sup>医学部分館</sup> 図書係長 | 文 部<br>事務官 | 富山 啓藏 | S.34.5.6.<br>～S.42.3.31. |
| “                                | “          | 福永 辰雄 | S.42.4.1.<br>～           |

### 鹿児島大学医学雑誌

昭和18年に県立鹿児島医学専門学校の組織がととのい、各分野における研究が開始され、学校独自の学術雑誌の発行が教職員一同の大きな願いとなったが、太平洋戦争もたけなわ時代の事、諸事情はそれを許さなかった。しかしながら宮崎教授の努力により、昭和20年8月にいたり、鹿児島医学専門学校学術報告書第一号が謄写版印刷にて発行され、以来、不完全ながらも歩みを続けてきた。その後、昭和30年の国立移管に伴う誌名の変更を機に、内容の充実を目的として定期的な発刊が続けられており、学内を中心とした多くの研究者に研究発表の場を与えている。一方、欧文誌も昭和33年に第一号が発刊されて以来、定期的に発刊されており、諸外国との交換を通しての国際的な研究交流の役目を

はたしている。

和文誌

○鹿児島医学専門学校学術報告。

第1巻 1号, 2号, 3号, 4号, 5号。

昭和20年

○鹿児島医科大学紀要。

第2巻 1号, 2号。 昭和25年

第3巻 1号, 2号, 2号補1, 2号補2。

昭和25～26年

第4巻 1号, 2号。

○鹿児島県立大学医学部紀要。

第5巻 1号, 2号, 3号, 4号。昭和28年

第6巻 1号, 2号, 3号, 3号補,

4号, 4号補。昭和29～30年

○鹿児島大学医学雑誌。

第7巻 1号, 2号, 2号補, 3号, 4号,  
5号, 昭和30年

第8巻 1号, 2号, 3号, 4号, 5号,  
5号補, 6号。昭和31～32年

第9巻 1号, 2号, 3号, 4号, 5号, 6号。  
昭和32～33年

第10巻 1号, 1号補, 2号, 3号, 4号, 5号, 5号補, 6号,  
昭和33～34年

第11巻 1, 2, 3, 4, 5, 5補, 6。昭和34～35年

第12巻 1, 2, 2補, 3, 3補1, 3補2, 4, 4補, 5, 5補1,  
5補2, 6, 6補1, 6補2, 6補3, 昭和35～36年

第13巻 1, 2, 3, 昭和36～37年

第14巻 1, 2, 3, 昭和37～38年

第15巻 1, 2, 3, 4, 4補, 昭和38～39年

第16巻 1, 1補, 2, 3, 4, 昭和39～40年

第17巻 1, 1補, 2, 3, 4, 昭和40年～41年

第18巻 1, 1補, 2, 2補, 3, 昭和41～42年 4, 4補,

第19卷 1, 1補, 2, 3, 4, 昭和42~43年

第20卷 1, 2, 3, 3補, 昭和43~

欧文誌

MEDICAL BULLETIN OF THE KAGOSHIMA UNIVERSITY

昭和28年 8月

ACTA MEDICA UNIVERSITATIS KAGOSHIMAENSIS

|         |       |          |
|---------|-------|----------|
| vol.1.  | NO.1. | 昭和33年 3月 |
|         | NO.2. | 34. 1.   |
| vol.2.  | NO.1. | 34. 7.   |
|         | NO.2. | 35, 7.   |
| vol.3.  | NO.1. | 35. 9.   |
|         | NO.2. | 36. 7.   |
| vol.4.  | NO.1. | 37. 1.   |
|         | NO.2. | 37. 9.   |
| vol.5.  | NO.1. | 38. 3.   |
|         | NO.2. | 38. 10.  |
| vol.6.  | NO.1. | 39. 3.   |
|         | NO.2. | 39. 8.   |
| vol.7.  | NO.1. | 40. 2.   |
|         | NO.2. | 40. 8.   |
| vol.8.  | NO.1. | 41. 3.   |
|         | NO.2. | 41. 8.   |
| vol.9.  | NO.1. | 42. 2.   |
|         | NO.2. | 42. 8.   |
| vol.10. | NO.1. | 43. 3.   |
|         | NO.2. | 43. 9.   |

編集委員

教授 川路 清高

“ 遠城寺 宗知

“ 塩田 重利

“ 城 哲男

“ 皆見 紀久男

### (3) 研究施設

#### 熱帯医学研究施設

福 島 英 雄

熱帯医学研究所創立の由来、ならびにこれに関連を有すると思われる大学の熱帯医学研究の一端についても一言ふれようと思います。

熱帯医学研究所は昭和35年に設立されましたが、これは突然できたものではなく、その沿革をたづねますと幾多先輩の方々～大学の先生方のみでなく、本県の官民あげて～の努力、支援がそこにみられます。

鹿児島県は地理的には日本の南端に位置し、気象学的にも亜熱帯環境下に属する奄美群島をふくんでおり、また、大学の前身である県立鹿児島医学専門学校の創立趣意書～県立医学専門学校設立に関する意見書に…「我が鹿児島県は……南方地方病研究の好適地たると共に……ここに県立医学専門学校を設立し……昭和15年12月18日鹿児島県会議長、坂口壮介、鹿児島県知事、新井善太郎殿」～にも明らかなようにはっきりと南方医学の研究がその目的の一つとしてうたわれています。これから考えましても、創立当時よりその使命をおびていたわけではありますが、今次大戦後、それまで熱帯医学研究の中心となっていた台北帝国大学が中国に接収されると同時に、本邦最南端に位置する大学として、熱帯医学研究に対する大学の責務は当然重大となってきたわけでありませう。ところが、つとに大学においては、熱帯医学の研究には創立当初より全教室をあげて、力をそそいできましたが、町野、佐藤教授らにより、鹿児島県風土病研究会がおこされ、昭和25年3月、第1回の研究発表が行なわれました。これは画期的なことで、日本熱帯医学会創立当初（昭和33年頃）の本邦の医学会の雰囲気よりしても終戦後の混沌とした時代に他に先鞭をつけて熱帯医学の研究にとりくんだということは特筆大書すべきだと思っております。その後、各教室においてひろく南九州の風土病の調査、研究が行なわれ、その業績も学界の注目するところとなってきました。

他方、医学部内に附置研究所としての熱帯医学研究所を作ろうという機運がおこり、まず昭和33年4月、鹿児島大学熱帯医学研究室が医学部内に設置され、大島にある県立大島病院が研究の場を提供され、33坪の研究室を貸与され、縄田教授ら出席のもとに昭和33年7月10現地において開所式が行なわれました。

県の厚意により研究に必要な設備費として33年度200万円、34年度50万円が県から予算にくまれ、研究に必要な器材を新規購入の上、提供して貰った（但し、これらの備品はその後、県立大島病院へ返納しました）。熱帯医学研究室には室長（医学部長兼任）のもとに疫学研究部、熱帯病研究部、病理研究部、熱帯環境医学研究部の各部長をおき、医学部の第2内科、第2病理学教室から教職員が大島に赴き、県立大島病院、奄美和光園（大西園長の御厚意により研究室を提供されました。ここに大西園長に深甚の謝意を表します。）などを根拠地として研究を行い、当所の土台が作られました。その後、昭和34年10月医学部内に熱帯医学研究所建設委員会が発足し、建設予定地の選定、建築計画などがすすめられ、他方、34年3月鹿児島県議会は議長名をもって熱帯医学研究所の設置について、要路に請願ならびに陳情などを行い、他方、ますます研究業績をあげていたところ、漸く文部省がその努力をみとめ、永年の念願がかない、昭和35年4月、国立学校設立法に基づいて附属熱帯医学研究施設の設置が告示され、まず熱帯病研究部の設置がみとめられた。同年4月1日施設長として第2病理学教室の阿部教授が併任され、第2内科講師の福島が助教授に（6月1日付）、第2病理助手の堀（6月1日付）、および名瀬保健所勤務の三島（9月1日付）、がそれぞれ助手として発令され、研究助手として森、愛甲（10月1日付）の2名が採用され、その他、事務は米沢事務官、山下事務員の2名で発足することとなり、研究場所としては名瀬市が選ばれ、県立大島病院の4部屋27坪、および名瀬保健所附属ハブ研究所30坪を無償借用し、同年10月1日福田学長、佐藤医学部長、川路、北原教授、伝研佐々教授ら、その他奄美の官民の代表者の方々の臨席のもとに、開所式を行い、本格的な研究活動を開始いたしました。発足当初は福島がフィラリア症に関する研究を、堀は蚊の生態、三島はハブの生態に関する研究を行いました。

さらに翌36年4月疫学研究部の増設がみとめられ、教授としては第2病理学教室の阿部教授が専任教授となり（37年3月1日付）、衛生学教室より八坂助教授が助教授として赴任し（36年7月1日付）、助手2名、研究助手2名、雇員1名の増となり、三島は疫学部（7月1日付）に移り、九大理学部卒の竹之熊が助手として赴任しました（7月1日付）。熱帯病部の堀助手は同年7月第2病理学教室に帰り、第2内科より助手として与那嶺が赴任（同年8月1日付）してきました。このようにして、漸く研究も軌道にのってきました。その後、かねて懸案となっていた建築物の建設も本決りとなり、名瀬市平田町およ

び瀬戸内町手安須手にそれぞれ 102坪の研究室も完成し、37年11月県立大島病院より移転しまして、翌38年5月、盛大な落成式を名瀬研究室および古仁屋研究室において、鹿大福田学長、町野医学部長、佐藤、北原、川路、大保、岡元教授ら、東大伝研所長、阪大森下名誉教授ら、その他、大島の官民の代表者の臨席のもとに行い、研究も軌道にのってまいりました。建物は床の高いモダンな建物で、敷地は名瀬研究室は 1120.42坪、古仁屋研究室は 2676.58坪でありまして、いずれも閑静な場所で研究には最適の場所です。なお堀もそれぞれ43年3月完成し、漸く外観がととのったところところです。

他方、かねてから熱帯医学研究を推進しておられた川路（病理学）北原（衛生学）岡元（皮膚泌尿器科学）教授が当研究施設発足と同時に併任教授になられ、その後、平野（細菌学）、松本（生理学）、寺脇（小児科学）教授も追加発令され、阿部（医動物学）教授も医動物学教室に御移りになられてからも併任教授として当所の運営に力をかしていただいております。

研究室完成直後は古仁屋の研究室には 1 名常駐し、随時出張して研究しておりましたが、39年6月に疫学研究部は古仁屋研究室に研究の場を移すこととなり、それ以来、古仁屋を本拠地として研究に従事しております。また当研究所は東大医科研に研究室の一部を提供して、共同研究にも従事しております。

その後、医学部に医動物学教室の新設に伴い、阿部教授が教授として転任され（39年5月）、福島が39年11月1日づけで教授に昇任し、現在にいたっております。当所の現在の定員は教授 1 名、助教授 2 名、助手 4 名、技能員 4 名、技能補佐員 2 名、事務員 4 名となっております。教授福島、助教授八坂、助手楠元、内山、若松、荒神、平田でありまして、技能員および技能補佐員として、橋口、荒田、渡がいます。その他、厚地、黒木、有村、武原らが事務を担当しております。

当研究所の研究目的は熱帯ならびに亜熱帯の医学的諸問題に関する基礎的研究ならびにその応用に関する研究を行なうとなっており、南九州とくに奄美群島、琉球列島、中華民国台湾などを対象地域として現在は研究していますが、将来は鹿児島大学附置研究所として、さらに環境医学部、病理部、抗蛇毒血清部、臨床部、生化学部を増設し、東南アジアのみでなく、広く熱帯地域を研究領域に入れ、南方医学研究センターとする計画であります。

研究活動の方向としては熱帯、亜熱帯地域における風土病の病態生理、その対策などに関する研究、住民ならびに移住者の生活などに関する研究、諸疾

患の病理に関する研究，ハブその他有害動物の抗毒血清，これら有害動物の生態さらに治療に関する研究，またこれら諸疾患の生化学的研究などでありませぬ。

研究業績としては，現在までに学会発表約100題，うち，特別講演，シンポジウム，14題，原著50編で，主にフィラリア症の疫学，病態生理，免疫反応，治療とくに集団治療に関する研究，肺吸虫症に関する研究，糞線虫症に関する研究，腸管寄生虫に関する研究，亜熱帯環境下の貧血，循環機能，低蛋白に関する研究，学童の発育，体力ならびに栄養に関する研究，ハブおよびその他の奄美産の蛇の生態に関する研究，ハブ毒及びハプトキソイドに関する研究，蚊に関する研究，飲料水に関する研究などであります。

当研究所は何分離島奄美大島のため研究にもっとも大事なスタッフの確保に頭をいためておりますが，漸く陣容もとのい，これから大いにその研究成果も飛躍的にのびようとしております。亜熱帯，熱帯は医学者にとっては解明されていない問題が山積みされておられ，これらを一つ一つ解明していくのには多くの研究者を必要としておられまして，当所ならびに鹿児島大学に課せられた使命は大きいと考えております。

職 員  
所 長

阿 部 康 男 昭和35年4月1日～昭和39年3月31日  
町 野 碩 夫 昭和39年4月1日～昭和40年3月31日  
佐 藤 八 郎 昭和40年4月1日～現在

熱帯病研究部

教 授 福 島 英 雄 昭和39年11月1日～現在  
助 教 授 福 島 英 雄 昭和35年6月1日～昭和39年10月31日  
助 手 堀 栄 太 郎 昭和35年6月1日～昭和36年6月30日  
三 島 章 義 昭和35年9月1日～昭和36年6月30日  
与那嶺 和 男 昭和36年8月1日～昭和38年4月30日  
平 川 嘉 久 昭和38年1月1日～昭和38年3月31日  
永 田 耕 一 昭和38年5月1日～昭和39年3月31日  
国 吉 至 昭和38年5月16日～昭和38年10月31日  
浜 田 巳 則 昭和40年2月1日～昭和40年4月30日  
楠 元 節 子 昭和40年4月1日～現在

|        |       |                        |
|--------|-------|------------------------|
|        | 森田忠義  | 昭和40年6月1日～昭和42年3月31日   |
|        | 若松順子  | 昭和41年4月1日～現在           |
|        | 内山芳彬  | 昭和41年4月1日～現在           |
|        | 荒神元巳  | 昭和42年4月1日～現在           |
|        | 平田涼子  | 昭和43年1月1日～現在           |
| 技能員および | 森美代子  | 昭和35年10月1日～昭和38年12月31日 |
| 技能補佐員  | 愛甲啓子  | 昭和35年10月1日～昭和38年9月30日  |
|        | 太月香織  | 昭和38年10月16日～昭和39年2月29日 |
|        | 間洋子   | 昭和33年10月17日～昭和39年2月29日 |
|        | 橋口すゝ代 | 昭和39年3月1日～現在           |
|        | 西信子   | 昭和39年3月1日～昭和41年2月28日   |
|        | 長井福江  | 昭和40年3月1日～昭和41年5月31日   |
|        | 平田涼子  | 昭和41年4月1日～昭和42年12月31日  |
|        | 福田公子  | 昭和41年6月1日～昭和41年8月31日   |
|        | 和田克子  | 昭和41年10月1日～昭和42年3月20日  |
|        | 荒田多恵子 | 昭和42年4月1日～現在           |

疫学研究部

|     |       |                        |
|-----|-------|------------------------|
| 教授  | 阿部康男  | 昭和37年3月1日～昭和39年4月30日   |
| 助教授 | 八板宗哉  | 昭和36年7月1日～現在           |
| 助手  | 三島章義  | 昭和36年7月1日～昭和40年5月31日   |
|     | 竹之熊国八 | 昭和36年7月1日～昭和37年12月31日  |
|     | 萩原直子  | 昭和40年4月1日～昭和42年3月31日   |
| 技能員 | 松下涼子  | 昭和36年7月20日～昭和39年5月31日  |
|     | 昇     | 昭和36年7月20日～昭和36年8月31日  |
|     | 西義重   | 昭和36年12月1日～昭和41年12月31日 |
|     | 渡照代   | 昭和39年7月1日～現在           |

併任教授

北原経太（衛生学）教授， 川路清高（第1病理学）教授， 平野清寿（細菌学）教授， 松本保久（第1生理学）教授， 岡元健一郎（泌尿器科学）教授， 寺脇保（小児科学）教授。

事務

米沢光夫 昭和35年9月1日～昭和37年8月31日

|      |                       |
|------|-----------------------|
| 山下秀利 | 昭和35年9月1日～昭和40年10月31日 |
| 藤田実志 | 昭和37年9月1日～昭和40年3月31日  |
| 有川清子 | 昭和37年12月1日～昭和39年6月30日 |
| 鳥入佳輝 | 昭和39年8月1日～昭和41年2月28日  |
| 渡辺県治 | 昭和40年4月1日～昭和41年2月28日  |
| 有村正男 | 昭和41年3月1日～現在          |
| 厚地芳高 | 昭和41年4月1日～昭和43年3月31日  |
| 武原清満 | 昭和41年4月1日～現在          |
| 黒木里良 | 昭和42年11月1日～現在         |

### 腫瘍研究施設

腫瘍研究所の併設は数年来の懸案であったが、昭和42年、正式の認可があり、研究施設として、まず、病態生理の一部門をもって発足することになった。九州では、九州大学医学部につぐ2番目の癌研究施設で、全国でも比較的早く設置をみたものである。設立に至った経過については、大学当局の努力によることは勿論であるが、鹿大医学部の地域的特性に基いた時代の要望と、これに応えうる豊富な研究業績の累積があったからに他ならない。腫瘍研設立に当たっての功績は、癌研究に従事した幾多の研究者の努力に帰するところが大きいといわねばならない。後輩に立派な研究の殿堂を残された諸先輩の努力に感謝するとともに、これを更に大成させることへの責務を痛感するものである。

昭和42年12月16日、教授を拝命し、43年1月スタッフに市来輝也、松元実、守田則一の諸君をむかえ、4月中旬には、移転を数年後に控えた仮設建築ながらも、約40坪の立派な研究室も提供されて、ここに実質的な発足をみるに至ったものである。発足後、日未だ浅く、腫瘍研自体のあゆみを記することはできないが、現在のスタッフはすべて、第二内科から移籍されたものであり、従って、第二内科癌研究グループのあゆみにまで遡る必要がある。未だ診療科の併設が認められていないので、診療面においては二内科と兼務させて貰い、二内科癌研究グループとの共同研究体勢を保っている現状である。私個人として、数年来、米国NIH Grant、厚生省癌研究費等の補助を貰い、これによって購入した研究機械も多数あったので、新設の附属施設としては、内容も余程充実し得たものと考えている。今後の研究方針としても、基礎、臨床の中間的な立場をとり、基礎的研究によって得られた成果を臨床に応用し、臨床上の疑問を基礎研究によって解決してゆくよう努力するつもりでいるが、そのためには

大学当局の絶大の援助が切望される。このような研究体制こそ大学研究施設の使命であると信じている。

二内科時代からの研究経過を回顧してみると、**Tumor and Host Relation**の生物化学的追究が中心となり、これから発展して発癌、診断、治療の面にも及んできたが、今後とも、この研究方向には著変のないものと考えている。われわれの癌研究は、癌腫毒 (**Cancer toxin**) の発見に始まったともいえるようで、第10回日本癌学会 (1951) に佐藤、柚木の連名で発表した。これは期せずして、中原氏らの **Toxohormone** の報告に僅かにおくれるものであった。**Cancer toxin** の研究は、筆者の **The University of Texas, M.D. Anderson Hospital & Tumor Institute** 留学中 (1959~60) の研究題目ともなり、また、**N I H** グラントの対象ともなった。**Toxohormone** 乃至 **Cancer toxin** の概念は発見当初とはやや変わってはきたが、癌におけるその存在は動かし難いものに成長しつつあり、今後もこのような特殊体液性因子の追究に努力するつもりである。担癌体の最も特徴的な変化としてカタラーゼを中心とする一連のヘム蛋白の減少があげられ、癌腫毒にもこのような生物作用のあるところから、癌における **Porphyrin** 代謝の研究に入ったが、この問題は数年間の研究により一応の解決をみるに至った。

腫瘍発育と栄養の問題を追究中であるが、その一環として担癌体に **Phenylalanine** 代謝異常のあることを発見し、また、**Phenylalanine imbalance diet** が腫瘍発育を著名に抑制することがわかった。臨床的にも **Phenylalanine imbalance** 療法として白血病の治療に応用し、既に30余例の症例においてその効果を確認しつつある。本療法は、学会においても最近ようやく注目をあびるようになり、外国においても同様な研究がみられるようになった。本療法は、基礎的研究から始まって臨床的応用にまで発展した一つの例であり、癌の特殊療法として研究発展の期待される分野でもある。現在、松元助手の主要研究題目として、細胞レベルのアミノ酸代謝の面から検討がすすめられつつある。

癌のヘム蛋白代謝の問題に関連して、生体内微量元素である鉄、銅の代謝を検討してきたが、生体内微量元素は酵素活性その他に重要な役割を果しているにもかかわらず、研究面の困難さから未開拓の分野に属する。最近、原子吸光測定装置を入手し、微量元素を広く検討しうる段階に達したので、市来助教授の主要研究課題として検討が進められつつある。更に、金属キレート剤に制癌作用を期待しうるような結果が得られつつあり、本学工学部応用化学科との研究提携もでき、新しい観点にたった癌化学療法剤の開発も進めつつある。また、

癌腫毒の生物学的活性に Guanidyl 基の関与を認めたことから、Diamidine 化合物の研究に入り、既に数種の制癌性 Diamidine 化合物を得ているが、本問題も応用化学科との提携により新物質の合成、生物作用の検討が進められている。

癌の化学療法に関して最も重要なことは、その副作用を少なくし、制癌性を増強せしめることである。この問題に関連しても、解糖系を中心に制癌剤の副作用を検討しており、Coccarboxylase, ATP, Cytochrome-C 等の併用が副作用軽減、制癌性増強的に働くことを認め、臨床的にも応用しつつあるが、この問題は今後とも広く検討してゆくつもりである。

発癌の問題で特筆すべきは、奄美大島産ソテツ *Cycas revoluta* による発癌の成功である。ソテツの毒成分は、本学農学部西田、小林博士らにより Cycasin として単離、構造決定がなされ、これに発癌性のあることは米国 NIH, Laqueur らに先鞭をつけられたが、本邦における報告はわれわれが最初である。Cycasin は Methylazoxymethanol (MAM) を Aglycon とする配糖体で、経口投与により、Nephroblastoma を始め多種多様の悪性腫瘍を発生してくる。MAM-acetate は、新生児に一回注射するだけで、強力な発癌性を発揮することも判明した。更に、その発癌過程の臓器抗原の消長を免疫化学的に追究しているが、臓器蛋白の構成に変化の起ることもわかってきた。守田助手は、Cycasin の発癌機構を核酸代謝面より追究しつつあるが、最近、Cycasin 投与動物の臓器 RNA から 7-Methyl-guanine の単離に成功し、Cycasin の発癌機構はそのアルキル化作用に依存する可能性の大きいことを立証した。核酸塩基組成の変化を通じての発癌機構の究明ということも今後の大きな研究課題となってくる。

胃疾患、殊に胃癌診断への新しい approach として、胃液の生化学的な解析を試みつつある。胃癌ではムチンを始めとする高分子性物質の動態、或は、胃液内諸種酵素活性に特徴的な変化の起ることを認めており、最近では更に、新しい観点から胃液分泌能の解析を試みつつある。

以上、研究途上の諸事項を記述して腫瘍研のあゆみにかえることにするが、研究課題によっては第二内科のものと重複することは、腫瘍研成立の経過からしてやむを得ないことである。

腫瘍研究施設の発足にあたり、将来、基礎、臨床の各部門をそなえた癌センターにまで発展するよう、大方の理解と援助を切望するものである。

(腫瘍研究施設 教授 柚木一雄 記)

## 4. 病院各部

### 検 査 部

— は じ め に —

昭和28年頃の鹿大病院は火災の直後でもあり、検査室は鹿児島県衛生研究所に間借りして共同で検査業務を行っていた。焼跡に建てられた手術室（現在の神経科病棟）に移転して来たのがその翌年である。

その頃の検査室には細菌室，血清室，生化学室，生理室（心電図，写真……後に分室），病理組織室等があったが，各室の責任はどこかの教室になっていて，それぞれの教室の医師が主任となりその下に技術員が1名ずつ配置されて検査業務が行なわれていた。又その業務内容も乏しく施設の復旧も不十分で，ごく限られた数種類の検査しかできない状態であった。（昭和23年頃の構成を第1表に示す）

さて戦後の臨床医学の進歩はめざましく，医学の推進者として臨床検査が重要な役割を担当することになり，その重要性が急速にクローズアップされ，臨床検査の中央化ということがしきりに叫ばれ，検査室が病院の一つの重要な部門として独立するようになってきた。

我が国では昭和30年頃から聖ルカ病院を初めとして東京第一病院，東大その他の大学病院に次々と新しい検査部ができたが，鹿大病院でも金久教授が検査部長を兼任され，既設大学の検査部資料を参考に検討と内容の充実が加えられ，正式に文部省の認可を得て昭和38年度より検査部の助教授1，助手2，技術員13計16名の定員をもらい，その他の人を加えると29名の大世帯となった。

昭和39年には発足以来空席であった専任の検査部長に尾辻省悟助教授が約4年間のアメリカ留学から帰国就任され，臨床検査担当の責任者として，文字通り検査部が独立することになった。

現在では日常検査の発展向上はもとより研究，学会発表等も検査部一体となって積極的に推進されている。

#### 1. 生化学検査室

生化学検査が中央的な性格をもつようになったのは，昭和32年頃であるが，以前は技術員1名の配置で，極く限られた数種類（第1表）の検査のみ行なわ

れていた。昭和35年には技術員の教育もとりあげられ、新採用者には、医学部生化学教室の大保教授、勝目助教授の御指導のもとに、生化学教室で数ヶ月の基礎教育を受けて、病院に配置される仕組みとなった。昭和35年には検査項目も15種に増加したが、比色計や遠心沈澱器等は不足し、施設面は極めて不十分であった。6名の技術員がそれぞれの検査担当の測定時間を打合せて、時間をずらしながら比色計を利用する等、又試験管洗滌等にも手間どる始末で、午後8時過ぎまでの勤務時間の延長は、止むを得ない状態であった。当時は、依頼書記載の検査項目には全部○印がつけられているのもかなりあり、又各科の研究的な動物の資料も多量に依頼される等、大学の検査室という機関のあり方に疑問を感じた程であった。しかし、お互いに助け合って気持ちよく勤務がなされたのは、今では楽しい思い出である。学問上及び運営上のあらゆる面での献身的な御指導と御努力を下された大保教授始め、諸先生方に深謝している次第である。

昭和39年尾辻部長の就任によって、正しい検査への根本的な改革がなされた。部長就任以来約3年間で想像もつかない程の整備が進められ、比色計も1人約1台の割合で又自動分析機器等の最新機器が整備され、現在では臨床検査の精度の確保と迅速化に努力している。又尾辻部長が指導者となって、臨床検査技術員のための臨床生化学検査研究会が毎月開かれ、会員も約80名の盛況である。又臨床生化学検査講座（医師、臨床検査技術者対象）も尾辻部長が世話人となって、有名講師による講座を毎月開催されている。

## 2. 細菌検査室

昭和28年以前は小児科永山教授主任のもとに、一外科若松講師が指導者となって、女性技術員が日常検査を行っていた。当時は結核菌の検査が主体となっていたが、昭和30年頃から暫次一般細菌の検査が増加し、今日においてはむしろ一般細菌検査の上昇を示している。この現象は抗結核剤の出現による結核患者の減少によるものと推察するが、他方一般細菌検査の増加は、医者の方の臨床検査に対する認識が深まったこと、検査室の充実によって取扱い内容が容易となったもの等が考えられる。最近では培地類も進歩し、合成培地の市販等により、各種病原細菌の取扱いは容易なものとなった。又医療面での化学療法剤の普及は目覚ましく、検出菌に対する薬剤感受性検査は日常検査の常識となった。しかし、これら薬剤に対する耐性菌や交代菌現象の問題等、今日では追いつ追

われつの細菌戦を展開しているような現状である。

平野教授を始め、細菌学教室の御指導、御援助に深く感謝申し上げる次等である。

### 3. 血清検査室（梅毒及び一般）

梅毒血清の検査は、皮膚科松山講師主任のもとに、昭和30年頃までガラス板法、梅毒凝集法、村田氏法の三法を行っていたが、翌年には村田氏法に代って緒方法の補体結合反応を実施するようになった。当時は補体結合反応に用いる補体、溶血素、羊血球等はすべて自製しなければならなかったが、今日ではこれらは市販されるに至り、日常検査は容易なものとなった。

さて梅毒反応の三法即ちカルジオライピン抗原を用いた従来の検査法では、偽陽性反応が現われる為に今日ではライター株の蛋白抗原を用いた補体結合反応（RPCF）で偽陽性の鑑別を行っているが、完全に偽陽性を見分けることは困難である。最近ではヒツジ血球に *Treponema. Pallidum* (Nichols 株) の菌体成分を吸着させた梅毒 HA 抗原が出現したが現在検討中である。

梅毒血清反応の陽性率は、昭和32～33年頃は22%位であったが、それからだんだん下って5～6%になって最近では又12%位に上昇を示している。全国々立大学検査部では、昭和40年度から梅毒血清反応の精度管理を行なっているが、第2回目の昭和41年度には当室の若松衛生検査技師が全校25校中第一位の成績を収めたことは、当大学検査部の誇りである。

一般血清検査はリウマチ関係の検査が導入されて以来、急速にクローズアップされてきたが年々増加の傾向を示している。

### 4. 血液検査室

血液検査室の設置は昭和40年5月でまだ日は浅い。現在、末梢血液像及び骨髓像検査を主体としているが、補助的検査として白血球数、赤血球数、血色素量、ヘマトクリット、網状赤血球、血小板、出血時間、凝固時間測定等を行なっている。現在技術員が1名で入院患者を対象としているが、外来患者でも特に血液疾患の疑いものは検査を行なっている。今後は凝固関係やあらゆる検査を導入し、検査室の充実を図りたいと思っている。

### 5. 病理組織検査室

病理室は昭和28年当時は医学部病理学教室で行なっていた。検査部設立時は川

路教授主任のもとに、田中技術員一名が検査に従事していた。

病理組織検査は専門医の診断を必要とする極めて重要な分野であるために、当室では組織標本の作成を行ない、診断は現在も第1病理学、第2病理学の各教授に依頼している。両教授の御指導と御援助に感謝申し上げます。

以前は標本作成に、1検体を約1週間程の日数をかけていたが、現在では検査機器の自動化によって検体処理は容易になった。オートテクニコンによれば約24時間で脱水から包埋まで出来る。検査件数も増加し、現在は器械に追われる状態である。

## 6. 心電図心音図検査室

心電図室が現検査室に移転したのは昭和32年である。当時の主任は第一内科内菌助教授から福田助教授（心電図室）と小児科早川助教授（心音図室）に代り、両助教授の指導で検査を行っていた。

当時の心電計は現像式で仕上げまで5～6時間を要していたが、熱ペン式に代り、1名を20分程度で出来るようになった。年々患者も増加しているが、心電計も進歩し、術後患者等は心電計に直結したモニターにより長時間監視することもできるようになった。

## 7. 心臓カテーテル検査室

昭和38年頃の心カテ室は設備不十分で、その上技術員も決っておらず、検査室はレントゲン室を借り又医師も現在とは異なり4～5人は必ずついた。検査の都度心電図の技術員が外向いていた。血液の分析も依頼していた。ガス分析もバンスライク検圧装置で分析していたので一日1例が通例であった。その翌年には日本光電製の多用途記録装置が購入され、20㎝平方のブラウン管を通して心電図心内圧も心ゆくまで監視ができ十分に検査を行なっている。又ILメーターも購入され、迅速に分析できるようになった。現在は医師2名技術員1名で行なっている。検査内容も心カテ、肝カテ、肺動脈閉塞試験、逆行性動脈造影、心血管造影に区分され、件数も年々増加し、現在は3倍にも増えている現状である。

## 8. 筋電図検査室

筋電図検査は昭和39年頃までは整形外科と神経科の医師によって行なわれて

いたが、現在は整形外科と一内科の医師によって行なわれている。検査方法は以前と変りはないが、以前よりも印画紙等に記録することが多くなり、仕上げに時間がかかるようになった。現在では筋電計も2年前に、以前の2チャンネルに代り、4チャンネルを購入し、検査件数も年々増加している。

## 9. 脳波検査室

脳波検査室では近年の交通事故の増加に伴い、脳波検査がクローズアップされてきたが当大学に脳波記録装置が購入されたのは昭和32年である。当時はEPが主であった。主任は福田助教教授であったが、昭和35年には神経科の朝倉助教教授となった。最近ではEPだけでなく脳疾患患者や外傷等が増加し、一台の脳波記録装置では患者を処理しきれない状態となり昭和38年には更に一台が設置され、技術員も2名となった。脳波検査も年々増加の傾向にある。

## 10. 肺機能検査室

肺機能室は技術員1名と一外科教室の医師によって検査を行なっているが、主な検査内容は基礎代謝率測定、スパイログラフィー、残気及びガス分布の測定（主にNo.2法）、拡散機能検査、血液ガス分析（Vanslyke及びILメータ一値）、運動負荷試験（Master）による換気血液ガスの追求、左右別肺機能検査、心カテ法併用による心肺機能検査、気管支鏡検査である。毎日基礎代謝率の測定に午前中、多くは午後までを費されるために、他の検査は午後若しくは延日し、或いは休日に行なうこともある。

前記諸問題は検査室の狭小を主因とするが基礎代謝率測定依頼件数の増加する現況では技術員の増加も必要である。検査内容に関して、現状では換気力学面が零で、早急の整備が望まれる。

## 11. 内視鏡検査室（胃カメラ）

従来胃カメラ検査は第二内科で運営されていたが、検査部発足と同時に組織上検査部に移管された。しかしこの検査は医師が行なう為に、組織上は検査部にあっても検査は従来通り第二内科に委嘱している現状である。

## 12. 臨床心理検査室

心理室の設置は昭和38年である。知能検査と性格検査を行なっており、時に

カウンセリング、心理療法も併用している。業務対象は全科に亘っているが、その疾病に心理的面が関与している場合が多い。知能検査は知的遅滞者（精神薄弱）、痴呆、頭部外傷等がその対象となり、性格検査は精神病、精神神経症等の患者である。しかし特定の疾病でなくとも、その疾病に心理的面が関与していると予想された時は、よく心理室へまわされる。最近いわゆる社会不適応者が心理室に紹介され、職場、学校適応障害者の心理療法も行なわれている。

### 13. フォトセンター

写真室は昭和30年に生理室より分室され、翌年の国立移管を控え、歯科下原助教授が室長となり、専任技術員を1名置き、スライドを主にした写真業務を始めた。検査棟移転に伴い現写真室に移るも設備関係は悪く、技術員も又不足し、昭和35年には人員補充のために財団運営として独立運営を行なった。その間室長は初代下原助教授より第一内科福元講師を経て整形外科久保田助教授に代った。昭和38年検査部へと代り、専任技術員も3名となり、室長も泌尿器科斉藤助教授となった。業務内容は顕微鏡撮影、記録撮影（生死体、切除組織、検査物、器物その他記録的なもの）X線写真縮小拡大、スライド関係、暗室関係、尚写真室のみならず依頼に応じて、各科外来病棟、手術、解剖、研究室などへ出張撮影も行なっている。

これらの写真は教材として、あるいは研究資料としてのみならず、臨床診断の観察記録として役立っている。

（昭和43年1月現在の検査部構成を第2表、検査項目を第3表及び月平均検査件数を第4表に夫々示す。）

### — お わ り に —

質的に高い臨床検査が如何に重要であるかはすでに論を俟たぬところであり、診療、教育、研究上の使命をもった中央的機関として認識され、今後益々発展しなければならない。

我が国の衛生検査技師の養成機関は急速に整備され、昭和42年4月1日現在で、52施設この中には4年制大学が1施設、その他短大、各種学校等である。又、日本臨床病理学会や日本衛生検査技師会では、検査部の整備拡充、検査の質的向上など検査部の諸問題の解決に多角的に真剣に取り組んでいる。

大学の検査部は、この面での一つの推進力として積極的にリードすべき立場

にあると考えると共に、学問的な背景と努力によって大きく前進しなければならないと思う。

おわりに、検査部の発展の為に御尽力いただいた歴代院長、並びに各教授、各教室の諸先生方及び事務部の方々に深く感謝申し上げますと共に、今後の益々の御指導と御援助をお願い申し上げます。

検査部一同

院長 縄田千郎 教授

(第一表) 昭和二十八年頃の構成

| 生理室           | 病理組織室      | 生化学室                                             | 血清室         | 細菌室                                              | 検査室  |
|---------------|------------|--------------------------------------------------|-------------|--------------------------------------------------|------|
| 第一内科<br>内菌助教授 | 基礎<br>病理教室 | 第二内科<br>橋本助教授                                    | 皮膚科<br>松山講師 | 小児科<br>永山教授                                      | 主任   |
| 佐々木           | 田中         | 土元                                               | 佐伯          | 中尾                                               | 技術員  |
| 写真<br>心電図     | 組織標本作成     | 血清蛋白A/G比並びに分画<br>血清比重測定<br>血清クロール測定<br>血清カルシウム測定 | 梅毒血清反応      | 結核菌塗抹、培養<br>一般細菌塗抹、培養<br>ウィダール反応<br>ワイル、フェリックス反応 | 検査項目 |

第二表

部長 尾辻 省悟

昭和四十三年一月現在

| 検査室   | 主 任                                      | 技 術 員                                                                           | 検 査 項 目                                            |
|-------|------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| 生化学室  | (生化学)<br>満留 助手<br><br>(助手)(検査部)<br>鋤本 峻司 | 繩田 陽子<br>前千賀子<br>吉留田鶴子<br>奥田優子<br>浜正子<br>藤崎紀子<br>二見玲子<br>喜多富貴子<br>肥後恵子<br>長山美美代 | 総蛋白量<br>等<br>二十九項目<br><br>(血液センター配属)<br>(血液センター配属) |
| 細菌室   | (細菌)<br>南島助教授                            | 中尾 林<br>大重 晃子                                                                   | 細菌学的検査全般<br>寄生虫、原虫検査の一部                            |
| 血清室   | (皮フ)<br>田代助教授                            | 若松 美智<br>道添みち子                                                                  | 梅毒血清反応四法(定性定量)<br>一般血清七項目                          |
| 血液室   | (一内)<br>柘木 講師                            | 中村 勝広                                                                           | 血液像その他                                             |
| 病理組織室 | (第一病理)<br>川路 教授<br>(第二病理)<br>遠城寺教授       | 西尾 米子                                                                           | 組織標本作成                                             |
| 心理室   | (一内)<br>心電・福田助教授<br>(小児)<br>心音・早川助教授     | 福盛 辰哉<br>今村 和子<br>染川 甫彦                                                         | 心電図<br>心音図                                         |
|       | (整外)<br>酒匂 講師                            | 安永 敬子                                                                           | 筋電図                                                |
|       | (二外)<br>犬童 弘子                            | 渡辺 菊子                                                                           | 心肺機能外八項目                                           |
|       | 肺機能代謝室<br>心臓カテーテル室<br>西村 講師              | 田嶋 一彦<br>戸森 洋子                                                                  | 心臓・肝臓カテーテル                                         |
|       | (神経)<br>朝倉助教授                            |                                                                                 | 脳波                                                 |
|       | (二内)<br>中馬 講師                            |                                                                                 | 胃カメラ                                               |
| 心理室   | (助手)(検査部)<br>園田 順一                       | 鮫島 和子                                                                           | 心理(知性・性格)テスト                                       |
| 写真室   | (泌尿)<br>斉藤助教授                            | 山下 沢夫<br>前田 寿則<br>増田 雅代                                                         | 患者、標本、解剖、手術撮影<br>文献、複写、スライド作成、顕撮等                  |
| 事務室   |                                          | 海江田正子                                                                           | 検査部事務                                              |

第3表 鹿大病院検査部検査項目 (昭和43年1月現在)

| 細菌学的検査 |            | 血清検査         |              | 生化学検査        |         | 血液学的検査 |        | 病理組織検査 |        | 生理検査   |        | 心理検査   |      |
|--------|------------|--------------|--------------|--------------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|------|
| 一般細菌   | 塗抹検査       | 梅毒検査         | 蛋白質          | L A P        | 末梢血液像   | 標本作製   | 心音図    | 心理検査   | 知能検査   | 心電図    | 心電図    | 人格検査   | 知能検査 |
|        | 培養検査       | 梅毒血清反応       | A/G, 分画      | ルゴール反応       | 骨髓像     | 氷結切片   | 心電図    | 人格検査   | 知能検査   | 筋電図    | 筋電図    | 人格検査   | 知能検査 |
|        | 同定検査       | 梅毒凝集反応       | 血清比重         | ビリルビン        | 白血球数    | パパニコロー | 筋電図    | 特殊性能   | 知能検査   | 脳波     | 筋電図    | 特殊性能   | 知能検査 |
|        | 感受性検査      | 心カラス板法       | 糖            | T T T        | 赤血球数    |        |        | (適性)検査 | 知能検査   | 基礎代謝   | 脳波     | (適性)検査 | 知能検査 |
| 結核菌    | 塗抹検査       | ウィダーール反応     | B S P        | クンケル氏反応      | 血色素     |        | 両側肺機能  | その他    | 基礎代謝   | 基礎代謝   | 両側肺機能  | その他    | 基礎代謝 |
|        | 培養検査       | ワイル・フエリックス反応 | 血清鉄          | 尿酸           | 血小板数    |        | 心肺機能   |        | 基礎代謝   | 心肺機能   | 心肺機能   |        | 基礎代謝 |
|        | 耐性検査       | C R P 試験     | クレアチニン       | コレステロール      | 出血時間測定  |        |        |        | 基礎代謝   | 心肺機能   | 心肺機能   |        | 基礎代謝 |
| 嫌気性菌検査 | ASLO 価測定   | クレアチン        | 黄疸指数         | 凝固時間測定       | 凝固時間測定  |        | 左右別肺機能 |        | 基礎代謝   | 左右別肺機能 | 左右別肺機能 |        | 基礎代謝 |
| 真菌学的検査 | RA テスト     | ナトリウム        | コリンエステラーゼ    | 尿酸           | ヘマトクリット |        | 気管支鏡   |        | 基礎代謝   | 気管支鏡   | 気管支鏡   |        | 基礎代謝 |
|        | 寒冷却集反応     | カリウム         | アミラーゼ        | アミラーゼ        | 網状赤血球   |        | 血液ガス分析 |        | 基礎代謝   | 血液ガス分析 | 血液ガス分析 |        | 基礎代謝 |
| 動物試験   | ポールヴァンネル反応 | カルシウム        | 尿素窒素         | 尿素窒素         |         |        | 呼吸気量   |        | 基礎代謝   | 呼吸気量   | 呼吸気量   |        | 基礎代謝 |
|        |            | クロール         | アルカリフォスファターゼ | アルカリフォスファターゼ |         |        | 肺拡散能力  |        | 基礎代謝   | 肺拡散能力  | 肺拡散能力  |        | 基礎代謝 |
|        |            | G O T        | 酸フォスファターゼ    | 酸フォスファターゼ    |         |        | 胃カメラ   |        | 基礎代謝   | 胃カメラ   | 胃カメラ   |        | 基礎代謝 |
|        | G P T      | 無機燐          | 無機燐          |              |         | 心臓カテテル |        | 基礎代謝   | 心臓カテテル | 心臓カテテル |        | 基礎代謝   |      |
|        |            |              | L D H        | L D H        |         | 肝臓カテテル |        | 基礎代謝   | 肝臓カテテル | 肝臓カテテル |        | 基礎代謝   |      |

第4表

鹿大病院検査部取扱件数 (S.42年1~12月 月平均)

|                            | 技術員数    | 月平均<br>取扱件数 | 月平均<br>点数 | 月平均<br>金額 | 備 考     |  |
|----------------------------|---------|-------------|-----------|-----------|---------|--|
| 細菌学的検査                     | 2       | 908         | 34,915    | 349,150   |         |  |
| 血清学的検査                     | 2       | 757         | 31,898    | 318,980   |         |  |
| 生化学的検査                     | 11      | 8,355       | 251,068   | 2,510,680 |         |  |
| 病理学的検査                     | 1       | 155         | 12,245    | 122,450   |         |  |
| 血液学的検査                     | 1       | 185         | 2,971     | 29,710    |         |  |
| 生<br>理<br>学<br>的<br>検<br>査 | 心音図     | 3           | 32        | 3,547     | 35,470  |  |
|                            | 心電図     |             | 816       | 89,760    | 897,600 |  |
|                            | 筋電図     | 1           | 38        | 6,688     | 66,880  |  |
|                            | 脳波      | 2           | 258       | 59,770    | 597,700 |  |
|                            | 基礎代謝    | 1           | 182       | 20,020    | 200,200 |  |
|                            | 心肺機能系   |             | 45        | 8,907     | 89,070  |  |
|                            | 気管支鏡    |             | 1         | 190       | 1,900   |  |
|                            | 血液ガス分析  |             | 56        | 1,512     | 15,120  |  |
|                            | 肺拡散能力   |             | 6         | 6,480     | 64,800  |  |
|                            | 心肝臓カテテル | 1           | 17        | 19,771    | 197,710 |  |
| 胃カメラ                       |         | 82          | 21,074    | 210,740   |         |  |
| 心理学的検査                     | 2       | 58          | 1,566     | 15,660    |         |  |
| 合 計                        | 27      | 11,951      | 572,382   | 5,723,820 |         |  |
| 中央写真室                      | 3       | 5,232       |           |           |         |  |

## 手術部

最近殆どの大学で麻酔科の設置が行なわれておりますが、本大学でも麻酔科の前身である手術部が九大麻酔科吉武助教授を部長に迎えて昭和41年1月1日より発足しました。現在スタッフは部長以下吉村講師（九大昭和34年卒），児玉（鹿大昭和36年卒），野辺（鹿大昭和41年卒）の両助手の四人で，他に有川（熊大薬学部昭和42年卒）が研究補手として加わっております。本病院では永らく各科の責任で共同使用の形で手術部が運営されて来たため，手術部全体の有機的運営や整備が行い難い状況にあり，しかも病院規模拡大に見合う手術部の拡張，看護要員の増員等が行われておらず，運営上幾多の難問を抱えておりました。幸い手術部発足を期に病院首脳の強力なバックアップと，各科の理解，協力を得る事が出来，段々と施設の充実を見ております。

昭和42年中は材料部の運営や術後病棟の整備にも関係するようになり，中央診療部としての性格を一段と強めて来ております。研究面では人が少なく十分な事は出来ませんが「scc 不整脈に影響する因子について（第1報）」（第4回日本麻酔学会九州地方会，熊本，昭41.10）「同（第2報）」第14回日本麻酔学会総会，名古屋，昭42.4）「全身麻酔中に見られる血漿インスリン活性の変動について」「各種薬剤の赤血球膜抵抗に及ぼす影響について」（第5回日本麻酔学会九州地方会，鹿児島，昭42.10）「五炭糖，五炭糖アルコールの代謝，生理及び臨床的応用」（国際シンポジウム，箱根，昭42.8同，国際麻酔学会，ドイツ，マインツ，昭42.10）等があり，昭43年第15回日本麻酔学会総会では「代謝より見たショック」の教育講演を担当しております。去る昭42年10月には当部担当で第5回日本麻酔学会九州地方会を鹿児島で主催しましたが，南九州地区での医学のセンターとしての使命の重要さを痛感させられました。今後共診療面でも研究面でも一層の努力を続けて行きたいと考えております。

## 中央施設

### 理学療法室

整形外科にマッサージ室が附設され業務を始めたのが昭和26年1月5日で早18年目を迎える事になる。酒元が就任するまでは医局の先生方が先天股脱の後療法や内反足，斜頸などのマッサージをしておられた。マッサージ室を設け専従者を置いた事で患者も遂に一に増え開設3ヶ月足らずで1人の技術員では処理出来ない程に増えた。そこで鹿児島鍼灸学校の生徒に応援して貰う事になり研

研修生2人を入局させる事になった。その1人が霧島労災病院の野口である。当時の記録によれば外来40名入院20名位の患者数で他に専門的医療器械がないので90%がマッサージ、残りが超短波や感伝電気の患者であった。開設はされたもののマッサージ師のポストのないまま酒元は整形外科医局費で雇われていた。4月になり定員が設けられた。応援の研修生2人は無給であったが実によく協力してくれた。その翌年になり更に定数が1つ増員された。この時はからずもいまだ忘れる事の出来ないあの病院大火を受けた。病院側では一早く復興を計られ特に整形外科では焼跡に仮設を建てて更生医療業務を始められる事になった。マッサージ室はこの大火で大切に使用していた医療器具を持ち出す暇もなく殆んど焼失した。唯一つ超短波治療器だけを持ち出す事が出来たがこの器械は旧陸軍病院よりの払い下げ品と聞いていた。物療ではなくてはならない器械で本器はつい数年前まで働き続けた実によい器械であった。廃品にはなったものの今でも愛着は忘れられない。27年には更に研修生3人が入局して来た。これらは永い間無給であったが整形外科の更生医療によく協力してくれた。現在当室の福留、県立整肢園の斉藤、都城倉内整形の大山である。更生医療は殆んどが戦傷病者で四肢機能の障害者が大多数であった。乏しい医療設備で私共の物療も多忙をきわめた。28年から毎年1～2名の研修生が入局し29年に整形外科物療室と改称した。31年には霧島分院拡張に伴って物療の専従者を置く事となり定員として斉藤が赴任する事となった。この頃は九州各地の病院とも密接に連携し本院分院共に器械器具を整備し内容の充実につとめた。分院では当時分院長宮崎教授の御指導で温泉を利用した運動浴に主眼がおかれ着々と実績をあげて2年後には本院より更に技術員を1人派遣する程になった。これが現在本院の大平である。30～33年頃は本県にも各地にポリオが大量に流行し後遺症の麻痺患者が1日50名を超える日も少なくなかった。外来受付では整理札まで渡して混雑を防ぐ盛況であったこの時受付係に入って来たのが森永である。33年には大学に分院を含めて有給者と研修生合せて8名になったので学、技の向上と親睦を計る意図で鹿児島県物療師会を結成し酒元が先づその任に当る事になった。これを契機として九州病院医療マッサージ師会の第5回目の学会を当地で開催し宮崎教授に筋性斜頸、当時小児科の永山教授にポリオ、第2生理学的の前野先生に電気生理についての特別講演をして頂いた。あの時の感激は忘れる事の出来ない思い出である。九州では其の間名称を九州理学療法協会と改めたが昨年は当県支部の担当で会員300名が参集し第12回目の意義深い学会を

開催した。宮崎教授を始め、一内金久教授、九州労災病院原先生、精神科今村講師、霧島分院長浜田助教授、県立整肢園長前田先生各先生方の御支援を得てP・T受験のための特別学会を開いた。医学部の国立移管に伴い物療室は33年に中央化されて移管する事になった。現在まで当室で研修を受け病院診療所に勤務する理学療法士及びマッサージ師は60数名を数え当県支部は九州で最も多い会員数となっている。斯様に大学病院で研修を受けた物療技術員が県内、外の専門病院にそれぞれ活躍している事は欣快にたえない。数ある全国、九州の学会に於ては相当数の研究発表を行い一応面目を維持している。40年はリハビリテーション医療（社会復帰）の一環から当局に於ては画期的制度を設けられ従来のマッサージ師から理学療法士（P・T）作業療法士（O・T）法が制定せられた。P・T、O・Tの資格を得る為に病院に於て理学療法業務に従事する者に特例が与えられた。義務として厚生大臣指定の講習会を受講する事になり当県では全国に先がけて会員結集し宮崎教授を中心とした20数名の権威者からなる講習会を開催した。本講習会は240時間で基礎と臨床の各教科広範に亘る内容のもので医学部各教室の権威者をもって構成された利益者負担の講習会ではあったが各自郡部の僻地からも参集した。土、日曜日を利用しての4ヶ月に近い期間中1人の落伍者もなく順調に受講を終えた。講習会長宮崎教授には公私を離れた温情をもって終始御教導を賜った。会員一同感謝の念を禁じ得ない。吾々病院診療所に勤務する者達の受験資格特例は45年までであるが熱心に受講を終えた甲斐があり41年の第1回は3名、42年の第2回は7名のP・T合格者を出す事が出来た。今年第3回はすでに終わり未発表であるが今年も大量の合格者が出るものと思っている。当院には2名のP・Tが誕生した事から更に名称を中央理学療法室と改める事になり技術員もP・T2名を含めて本院5名技術補助1名、分院には技術員2名の世帯である。新しい医療の導入に忙しい診療の余暇に強力な学技の研修や集談会を行っている、吾が理学療法室では現在1日外来60~100名、入院20~50名の患者件数を扱っているが整形外科部門が大半で60%以上をしめている。残りが内科、外科、精神科、小児科其の他の患者である。理学療法室も現在の場所に落ちつく迄は手術室の横を壁で支えて室を設けたり又今の二外科の室においたりしたが現在40坪余りの木造家屋の中に四肢麻痺や筋力低下に対し筋力増強を行なう各種運動器具を始め変形矯正器を備える訓練室と水治療法室では脊損やリウマチ、関節拘縮や各種疼痛疾患に応用するハーバートタンクと部分浴器など、麻痺や疼痛、鞭打ち症などの治療を行

なう超短波，低周波，極超短波治療器を備えた電気治療室，又マッサージ室がある。他の大学やリハビリテーション施設のある理学療法室に比べるといささか室も狭く貧弱の様であるが日常の患者件数や診療実績は隔差のない事を自慢してもよいと思っている。理学療法室で扱っている患者群は整形外科的先天性疾患では先天股脱，内反足，斜頸を始め交通，産業災害等の脊損や四肢麻痺，疼痛鞭打ち症など脊髄麻痺や神経痛，リウマチの運動器系疾患等多種多様である。最近では内科疾患として脳卒中の後遺症，糖尿病，膠原病といわれる慢性疾患など所謂成人病がリハビリテーション医療の中に入って来た。これから交通災害，産業災害，成人病など益々リハビリテーション医療が要求される事と思われるが吾々は社会の要求におくれる事のない様新しい医療の導入に勉強し最もつき進んだ理学療法の充実に総力を結集したいと思っている。理学療法室開設18年に至る間今日に及ぶ事は宮崎教授の温情あふるる御指導の賜である事は勿論整形外科歴代の助教授医局の先生方各教室の温かい御指導の賜である。改めて感謝の意を表し当室の沿革について筆をおく。

S 4 3 年 3 月

理学療法室

R. P · T 酒 元 一 雄

## 薬 劑 部

### ○薬剤部の規模

明治41年から5ヶ年継続事業にて改築された県立鹿児島病院の本館玄関正面に装飾も美しい広々としたホールの上に墨痕鮮かな薬剤部の表札があった。医専からは薬剤部は薬局というようになり部長は薬局長と呼ばれていた。入口は右側にあり，調剤室が尠狭いまでに良く利用されていた。調剤室は99㎡（30坪）で散剤の装置柵，分包台，水剤の装置柵，外用の装置柵や毒薬柵があり中央に水洗台が直径2 mにて毎日金色に磨かれて美しかった。

調剤室に続いて製煉室29㎡（9坪）試験室14.5㎡（4坪半）があった。製煉室では単シロップ，軟膏製剤，蒸気消毒，滅菌等しており，試験室には化学天秤が備えてあり，隣りには濾過装置が整然と並び，蒸溜水，生理食塩水，5%ブドウ糖リンゲル等製剤して居た。此等の製剤は看護婦さんが三角コルベンに移して病室に持って行ったものだ。全く無菌室の様に清潔な部屋だった事を覚えている。麻薬の製剤も塩酸モルヒネだとか阿片アルカロイドの注射液作り現今の様に厳しい取締も受けず，麻薬中毒もなしに良く利用されていた。薬剤部全

体が病院講堂の一階だったので、裏の講堂の下が薬剤部長室で昼の食事の場でもあった。階段の上に寒々とした宿直用のベッドがあった。

倉庫が石倉作りの二階で頑丈に出来ていた。戦争が激しくなり数回の攻撃受けたので6月16日土曜の午後から倉庫の二階の散薬、注射薬の半分を院内の横穴に保管し、月曜日に一階の軟膏、水剤類を疎開させる予定にしていたのが20年6月17日夜の焼夷弾攻撃にて全焼して仕舞った。翌日からの火傷患者に使う薬品が何もなくして四苦八苦しした。病院も守衛室だけ残して全焼し、横穴の薬品も守衛室の倉庫に移した。盗難に逢ったが大部分は盲啞学校に移し得たのは幸だった。

6月21日草牟田の盲啞学校に病院が移転したので薬局も玄関横の16.52㎡（5坪）に移り調剤と火傷患者への軟膏作りに忙しい毎日だった。移転後も空襲の度に近くの横穴に退避して難をのがれた。火傷の治療に亜鉛華も植物油もなく、町野院長と知事に頼んで植物油を配給して貰って消毒して何とか治療出来た。

21年4月25日には旧18部隊の酒保のあった処に引揚者の患者と同宿して治療に当り、天秤もなく旧陸軍病院から借用して調剤させた。21年8月には現中央高校に9月には追われて県庁別館に移動し、高い窓から手差し伸べて患者さんに薬を渡して居た。今時考えられない珍風景であった。22年3月には現在の簡易裁判所の処に平家でコ字形の診療棟が出来たので薬局も玄関口に陣取った。此所も13㎡（4坪）で購入、調剤、製剤等総ての業務を行っていた。ベニヤ板の壁で隣りで患者が急死して泣声や憾言が手に取る様に聞えて来た。23年5月から現位置に建築が始まり病棟、事務、薬局が先に出来た。薬局は調剤室108㎡（33坪）事務室16.5㎡（5坪）同じ坪数の部屋4部屋で試験室は特に広く46㎡（14坪）で旧い県立病院の薬剤部の倍位の面積を確保して今後の薬局の研究熱をもやして27年4月へ向った。其の年の4月23日の11時頃高野山の前の民家から火を出して風速15mの強風の中で建築途中の整形外科の処から燃え出してみるみる焼け落ちてしまった。薬局の貴重な資料も書籍も全部焼いてしまった。それから又薬剤部は外来と入院に別れて苦難の数年を過して唯仕事に追われる日々だった。現在の建物に移ったのが30年2月27日で、3月4日の落成式には薬局は新薬展示や鹿児島県の薬草分布図等展示して好評を博した。新しい鉄筋に移って10年患者数は国立移管と共に増加し、薬品も平和時代を迎え新薬や輸入薬品は年と共に新しい物へと移り変わり、購入予算も月300万から2,000万

へと増加し、倉庫も調剤室も狭くなる一方になって来た。今亀ヶ岡移転問題に取り組んで薬剤部の理想像を画きつつ、現在の4倍位の面積と資料室や薬学部の設置等の構想に一同腐心している次第です。

#### ○薬剤部員

県立医専病院時代から終戦の時まで薬局長岩切清、次席浜島寅夫、部員永吉義雄の3名と事務1名、看護婦さん2名で薬局業務を行って来た。当時は皆満洲で高給で迎えてくれた時代にて薬剤師は2名欠員のままだった。

20年5月浜島先生に召集が来て7月見習士官で伊敷にあった衛生材料支所に配属された。

終戦と同時に衛生材料や薬品を放出して貰って大八車で原良の看護婦宿舍まで運んだり、自転車で薬品を盲啞学校まで運んだ。空襲多くなり岩切薬局長は病気で倒れてしまわれた。永吉と渡辺優子看護婦とで最後まで薬局守り薬品の確保、調剤等一番思出に残る時代だった。終戦後岩切薬局長辞任され、浜島寅夫薬局長になられ薬剤員に日立製作所の中央研究所から馬場徹君を呼び其後黒木一夫、平島一義君迎え陣容を整えた。迫田安義君来られ、女の薬剤師の尾辻昭子君も異色として入局したが長続きしなかった。

迫田、尾辻辞任後上山直樹、藤本豊次君を熊本まで依頼に行き人手の不足時代だった。

看護婦の山元照子君が薬局の最後の看護婦さんとなられたのもこの時代。アメリカ看護婦養成に変わり薬局実習は不必要になった。以前は看護婦さんが4.5名実習に来て分包や掃除してくれたが急に中止したので人員不足し非常に苦労した。其後2.3名の増員はみたが人員増停止で現在に至っている。男の薬剤師の減少に加え、女子薬剤師の白根加代子。雨田睦、坂上節子さん等迎えたが、1～2年で皆幸福な結婚された。其後榎木田芳子、植松チエ子さんが後任薬剤師として現在に至っている。

41年3月浜島薬剤部長が停年退職され4月から大分県立病院の薬剤部長の清水竜夫先生迎え希望と期待もっている。

#### ○約束処方の問題

終戦まで60種位の約束処方にて簡単に調剤していたが戦後約束処方の問題が起り議論百出で決論出なかったが、薬局にて作って医局長会に提出となり作製してしまったら案外皆が承知してくれた。内服剤29種、外用剤10種作り当時の町野院長に決裁して貰って作ったが、現在でも MM<sub>1</sub>、MM<sub>2</sub>、U.M.、S.R.E、

等良く処方されている。その後20年新しい約束処方と考え出されていい年代に来ているようだ。

思い出すまま薬剤部の25年誌書きましたが、余裕のある人員と豊かな薬品費で研究と治療に専念する事が、今後の薬剤部の進むべき方向ではなかろうかと確信する次第である。  
(永吉義雄記)

## 霧 島 分 院

### 位置と名称

霧島分院は鹿児島から国道3号線を北東に車で約60km霧島国立公園の門戸丸尾温泉地区にある。

名 称 鹿児島大学医学部附属病院霧島分院。

所在地 鹿児島県始良郡牧園町高千穂3930番地7号。

### 沿 革

- 昭和12年12月 県立鹿児島病院霧島温泉療養所設立。
- 昭和18年4月 県立鹿児島医学専門学校創立と共に附属霧島温泉研究所となる。
- 昭和24年4月 県立鹿児島医科大学附属霧島温泉研究所と改称。
- 昭和27年4月 鹿児島県立大学医学部附属霧島温泉研究所と改称。
- 昭和33年5月 国立移管と同時に鹿児島大学医学部附属病院霧島分院となる。
- 昭和40年3月 新館の増改築竣工。
- 昭和40年6月 新館に移転診療開始。
- 昭和42年3月 機能訓練室竣工。
- 昭和42年6月 増床認可(50床)及び直営基準給食認可さる。

### 歴代の施設長

| 氏 名   | 就 任      | 退 職     | 備 考  |
|-------|----------|---------|------|
| 帆足作次郎 | 昭和12年10月 | 昭和17年4月 | 県立病院 |
| 下河辺舜一 | 昭和17年4月  | 昭和18年   |      |

| 氏名    | 就任       | 退職       | 備考                                         |
|-------|----------|----------|--------------------------------------------|
| 岡藤 儀作 | 昭和18年    | 昭和20年    | 昭和18年4月医専附属温泉研究所長 死亡退職                     |
| 下河辺舜一 | 昭和20年    | 昭和21年    |                                            |
| 森 繁俊  | 昭和21年    | 昭和24年 6月 |                                            |
| 佐藤 八郎 | 昭和24年 6月 | 昭和30年 9月 | 昭和24年6月～27.3.医大温研所長<br>" 27.4.～30.9.県大温研所長 |
| 宮崎 淳弘 | 昭和30年10月 | 昭和41年 5月 | 昭和30年10月～33.4.県大温研所長<br>" 33.5.～41.5.分院長   |
| 浜田 康治 | 昭和41年 6月 |          | 分院長                                        |

## 施設

### 敷地と建物

敷地 21,109㎡ (6,396坪)

借り上げ 7,535㎡ (2,283坪)

### 建物

建坪 2,509㎡ (799坪) 延坪 2,704㎡ (894坪)

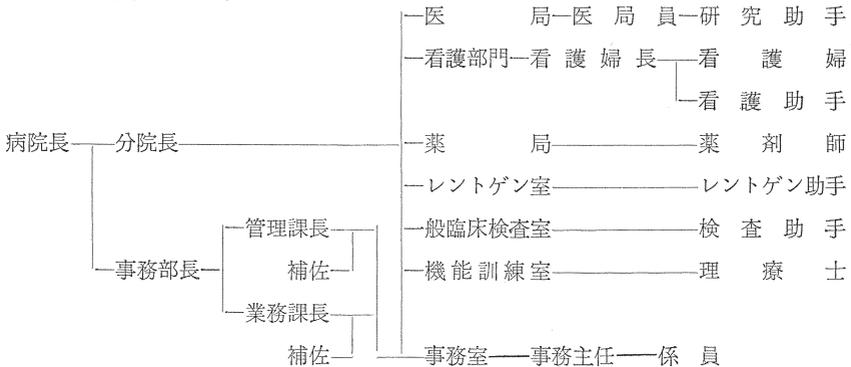
### 内訳

耐火 建坪 1,737㎡ (574坪) 延坪 1,932㎡ (639坪)

非耐火 " 772㎡ (255坪) " 772㎡ (255坪)

病床数 50床

## 機構と職員の配置



## 機構と職員の配置

### 主要職員名

|       |           |         |
|-------|-----------|---------|
| 分院長   | 助 教 授     | 浜 田 康 治 |
|       | 助 手       | 森 園 隆 一 |
|       | ”         | 坂 元 藤 雄 |
|       | 大学院学生     | 大 勝 洋 祐 |
|       | 研 究 員     | 橋 口 伸 夫 |
| 看護婦長  | 文 部 技 官   | 竹 丸 ユキミ |
| 薬 剂 師 | 文 部 技 官   | 萩 原 純 雄 |
| 理 療 士 | 文 部 技 官   | 伊 藤 定 夫 |
| 事務主任  | 文 部 事 務 官 | 原 口 正 一 |

## 診療諸統計

表 1 入院外来患者数

| 区 分                   | 外 来   |       |       |       | 入 院    |     |       |        |
|-----------------------|-------|-------|-------|-------|--------|-----|-------|--------|
|                       | 内 科   | 外 科   | 整形外科  | 計     | 内 科    | 外 科 | 整形外科  | 計      |
| 昭和<br>37年度            | 4,327 | 2,170 | 2,495 | 8,992 | 2,443  | 0   | 7,139 | 9,582  |
| 昭和<br>38年度            | 3,743 | 0     | 1,850 | 5,593 | 6,448  | 0   | 5,013 | 11,461 |
| 昭和<br>39年度            | 6,403 | 2,521 | 0     | 8,924 | 8,836  | 906 | 0     | 9,742  |
| 昭和<br>40年度            | 6,317 | 351   | 0     | 6,668 | 12,171 | 0   | 0     | 12,171 |
| 昭和<br>41年度            | 6,605 | 445   | 0     | 7,050 | 11,664 | 0   | 0     | 11,664 |
| 昭和42年<br>12月末日<br>現 在 | 5,329 | 282   | 0     | 5,611 | 11,093 | 0   | 0     | 11,093 |

表2 入院患者の疾患別分類

|                       |           | 昭和40年      | 41年        | 42年        |
|-----------------------|-----------|------------|------------|------------|
| 神<br>経<br>筋<br>疾<br>患 | 脳血管性障害    | 21 (32.8%) | 44 (45.8%) | 51 (43.9%) |
|                       | 脳腫瘍       | 0          | 1          | 3          |
|                       | 系統的脳脊髄疾患  | 7          | 8          | 16         |
|                       | 非系統的脳脊髄疾患 | 7          | 0          | 4          |
|                       | 脱髄性疾患     | 0          | 1          | 2          |
|                       | 炎症性疾患     | 4          | 2          | 5          |
|                       | 筋疾患       | 2          | 8          | 11         |
| 骨関節疾患                 |           | 7          | 6          | 8          |
| その他                   |           | 16         | 26         | 16         |
| 計                     |           | 64         | 96         | 116        |

表3 歳入

| 区分            | 基本診療料     | 投薬料       | 注射料       | 検査料     | レントゲン診断料 | 処置及手術料  | 諸収      | 計          |
|---------------|-----------|-----------|-----------|---------|----------|---------|---------|------------|
| 昭和37年度        | 5,361,034 | 1,556,683 | 413,547   | 206,931 | 238,042  | 285,921 | 46,195  | 8,108,353  |
| 昭和38年度        | 6,284,368 | 3,601,883 | 1,034,755 | 382,442 | 517,452  | 397,123 | 47,342  | 12,265,365 |
| 昭和39年度        | 7,320,649 | 4,233,568 | 2,174,841 | 741,956 | 593,203  | 473,517 | 34,917  | 15,572,651 |
| 昭和40年度        | 8,592,656 | 3,651,484 | 1,354,566 | 553,545 | 492,376  | 941,981 | 52,613  | 15,639,221 |
| 昭和41年度        | 8,492,376 | 4,422,402 | 997,390   | 648,341 | 585,266  | 812,512 | 92,222  | 16,050,509 |
| 昭和42年度12月末日現在 | 7,238,729 | 4,854,419 | 1,853,594 | 779,436 | 540,810  | 655,183 | 103,335 | 16,025,506 |

表 4 臨床検査件数

| 区 分       | 昭和40年度 |       |       | 昭和41年度 |       |       | 昭和42年4月～12月 |       |       |
|-----------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|-------------|-------|-------|
|           | 入院     | 外来    | 計     | 入院     | 外来    | 計     | 入院          | 外来    | 計     |
| 一般検査 尿 検査 | 685    | 666   | 1,351 | 709    | 520   | 1,229 | 1,050       | 684   | 1,734 |
| 糞便検査      | 228    | 113   | 341   | 245    | 70    | 315   | 240         | 67    | 307   |
| 穿刺液採取検査   | 134    | 62    | 196   | 447    | 329   | 776   | 303         | 50    | 353   |
| 血液学的検査    | 917    | 155   | 1,072 | 838    | 257   | 1,095 | 709         | 292   | 1,001 |
| 細菌学的検査    | 16     | 10    | 26    | 14     | 6     | 20    | 10          | 6     | 16    |
| 血清学的検査    | 126    | 102   | 228   | 34     | 24    | 58    | 116         | 51    | 167   |
| 臨床化学検査    | 159    | 82    | 241   | 232    | 43    | 275   | 451         | 79    | 530   |
| 病理学的検査    |        |       |       |        |       |       |             |       |       |
| 生理機能検査    | 61     | 40    | 101   | 73     | 41    | 114   | 34          | 27    | 61    |
| 計         | 2,326  | 1,230 | 3,556 | 2,592  | 1,290 | 3,882 | 2,913       | 1,256 | 4,169 |

表 5 X線撮影及透視件数

| 区 分 | 患 者 数 |      |      |      |             |
|-----|-------|------|------|------|-------------|
|     | 38年度  | 39年度 | 40年度 | 41年度 | 42年<br>4～12 |
| 入 院 | 238   | 210  | 192  | 160  | 156         |
| 外 来 | 308   | 193  | 152  | 183  | 174         |
| 計   | 546   | 403  | 344  | 343  | 330         |

| X 線 撮 影 件 数 |      |      |      |             | X 線 透 視 件 数 |      |      |      |             |
|-------------|------|------|------|-------------|-------------|------|------|------|-------------|
| 38年度        | 39年度 | 40年度 | 41年度 | 42年<br>4～12 | 38年度        | 39年度 | 40年度 | 41年度 | 42年<br>4～12 |
| 454         | 375  | 438  | 465  | 559         | 25          | 29   | 6    | 9    | 14          |
| 439         | 320  | 288  | 286  | 311         | 23          | 12   | 15   | 15   | 16          |
| 893         | 695  | 726  | 751  | 870         | 48          | 41   | 21   | 24   | 30          |

表 6 理 学 療 法 治 療 件 数

| 年 度            | 昭和 38 年度 |       | 昭和 39 年度 |       | 昭和 40 年度 |                   | 昭和 41 年度 |                  | 昭和42年度 4月～12月 |                  |
|----------------|----------|-------|----------|-------|----------|-------------------|----------|------------------|---------------|------------------|
|                | 外 来      | 入 院   | 外 来      | 入 院   | 外 来      | 入 院               | 外 来      | 入 院              | 外 来           | 入 院              |
| 員 数 及 び<br>件 数 | 47名      | 91名   | 42名      | 75名   | 23名      | 80名               | 25名      | 90名              | 27名           | 86名              |
| 手技名            |          |       |          |       |          |                   |          |                  |               |                  |
| 整形外科機能訓練       | 76       | 3,837 | 93       | 4,376 |          | 6,802             |          | 5,427            | 41            | 4,547            |
| 変形機械矯正術        |          | 135   | 50       | 204   | 28       | 4,309             | 197      | 3,075            | 221           | 3,115            |
| 牽 引            |          | 24    | 1        | 101   |          | 126               | 1        | 23               |               | 60               |
| 筋力テスト          | 1        |       |          |       |          |                   |          | 95               | 3             | 75               |
| A・D・L検査        | 1        | 5     |          | 169   |          | 98                | 13       | 87               | 2             | 59               |
| 計              | 78       | 4,005 | 144      | 4,850 | 28       | 11,335<br>(7,026) | 211      | 8,707<br>(5,632) | 267           | 7,856<br>(4,741) |
| 低 周 波          | 9        | 247   |          | 58    |          | 53                |          | 272              |               | 561              |
| 極 超 短 波        | 156      | 1,565 | 203      | 1,238 | 61       | 1,113             | 165      | 847              | 152           | 1,585            |
| 超 短 波          | 79       | 960   |          | 58    | 29       | 309               |          | 8                |               |                  |
| 超 音 波          | 9        | 265   |          |       |          |                   |          |                  |               |                  |
| 計              | 253      | 3,037 | 203      | 1,354 | 90       | 1,457             | 165      | 1,127            | 152           | 2,146            |
| 水 治 療 法        |          |       |          |       |          | 30                |          | 95               |               | 126              |
| 泥              |          | 337   | 114      | 652   |          | 377               |          | 21               |               |                  |
| 光              |          |       |          |       | 21       | 24                |          | 3                |               |                  |
| 徒手マッサージ        | 150      | 898   | 217      | 320   |          | 217               | 11       | 106              | 5             | 32               |
| 変形徒手矯正術        |          |       |          |       |          |                   |          |                  |               |                  |

表7 年度別（月平均）処方箋枚・件・剤数表

| 年度<br>34-41 |    | 枚数    | (月平均) | 件数     | (月平均) | 剤数     | (月平均) |
|-------------|----|-------|-------|--------|-------|--------|-------|
| 34年         | 入院 | 2,987 | 249   | 4,263  | 355   | 15,875 | 1,323 |
|             | 外来 | 3,051 | 254   | 4,032  | 336   | 20,056 | 1,671 |
|             | 計  | 6,038 | 503   | 8,295  | 691   | 35,931 | 2,994 |
| 35年         | 入院 | 2,373 | 198   | 2,998  | 250   | 10,606 | 884   |
|             | 外来 | 2,386 | 199   | 3,364  | 280   | 17,724 | 1,477 |
|             | 計  | 4,759 | 397   | 6,362  | 530   | 28,330 | 2,361 |
| 36年         | 入院 | 2,561 | 214   | 5,973  | 498   | 21,658 | 1,805 |
|             | 外来 | 5,003 | 417   | 5,894  | 491   | 16,850 | 1,404 |
|             | 計  | 7,564 | 630   | 11,867 | 989   | 38,508 | 3,209 |
| 37年         | 入院 | 2,660 | 222   | 4,228  | 352   | 20,744 | 1,729 |
|             | 外来 | 4,505 | 375   | 8,210  | 684   | 24,319 | 2,027 |
|             | 計  | 7,165 | 597   | 12,438 | 1,037 | 45,063 | 3,755 |
| 38年         | 入院 | 3,169 | 264   | 5,217  | 435   | 33,168 | 2,764 |
|             | 外来 | 3,274 | 273   | 4,565  | 380   | 20,721 | 1,727 |
|             | 計  | 6,443 | 537   | 9,782  | 815   | 53,889 | 4,491 |
| 39年         | 入院 | 2,039 | 170   | 5,243  | 437   | 32,394 | 2,700 |
|             | 外来 | 3,549 | 296   | 5,883  | 490   | 28,782 | 2,399 |
|             | 計  | 5,588 | 466   | 11,126 | 927   | 61,176 | 5,098 |
| 40年         | 入院 | 2,413 | 201   | 5,773  | 481   | 38,549 | 3,212 |
|             | 外来 | 2,641 | 220   | 4,783  | 399   | 29,577 | 2,465 |
|             | 計  | 5,054 | 421   | 10,556 | 880   | 68,126 | 5,677 |
| 41年         | 入院 | 1,943 | 162   | 4,544  | 379   | 32,097 | 2,675 |
|             | 外来 | 2,234 | 187   | 3,315  | 276   | 18,238 | 1,520 |
|             | 計  | 4,177 | 349   | 7,859  | 655   | 50,335 | 4,195 |

表8 給食延人員（治療食別）（昭和39年度～42年度迄）

| 年度別<br>延人員(人)      | 病名 | 潰瘍食   | 肝臓食 | 腎臓食<br>(高血圧、食含心) | 糖尿食 | 注入食   | その他 | 常食    | 軟食    | 流動食   | 計      |
|--------------------|----|-------|-----|------------------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|--------|
|                    |    | 昭和39年 |     | 67               | 579 | 3,037 | 169 | 57    | 19    | 4,800 |        |
| 昭和40年              |    | 128   | 64  | 3,419            | 472 | /     | 108 | 6,249 | 1,180 | 14    | 11,634 |
| 昭和41年              |    | /     | 93  | 3,712            | 141 | /     | 248 | 5,849 | 1,295 | 88    | 11,426 |
| 昭和42年<br>(1月31日現在) |    | 32    | 271 | 2,101            | 361 | /     | 132 | 7,298 | 1,515 | 319   | 12,029 |

## 分院発展の歴史と将来への展望

分院長 浜田 康治

わが霧島分院が、はじめて記録の上にはあらはれたのは昭和7年のことである。その前年（昭和6年）別府に九大温泉治療学研究所が全国にさきがけて設立されているが、鹿児島県においても天恵ゆたかな温泉活用の機運がたかまり、その年県立鹿児島病院の分院として附属温泉治療所設立の計画がたてられ、これに関する予算が計上されたとするされている。その後、九大高安慎一教授の指導のもとに、山口県衛生課長、石川県立病院長らの尽力によって昭和11年に現在の霧島山麓丸尾の地を選定し、工事に着手、翌12年12月に県立鹿児島病院附属温泉治療所として発足したのである。初代の所長として帆足作次郎博士が就任した。

かくして諸種の浴設備とマッサージ、運動器械等の理学療法をも併せそなえた南九州における唯一の、且ユニークな治療機関の誕生をみたのである。当時、患者は近県はもとよりのこと、九州一円、遠く中国、阪神方面よりも訪れ、リウマチ、神経痛、外科後療法その他の治療にその独得の治療効果をあげ昭和17年頃まではベットは常に超満員であったという。その頃すでに今日いう脳卒中のリハビリテーションも行はれていたという。しかしながら病院創生期のことであれば、敷地の陥没や導管の破損などいろいろ苦勞もたえなかったというが、今日ふりかえてみても、まことにさうもあらうと思われる。

その後、昭和18年に県立鹿児島病院を母体として鹿児島医学専門学校が設立開校されるや、19年4月に同校の附属霧島温泉研究所となりここにはじめて温泉治療学の学術的研究の第一歩をふみ出したのである。しかしながら時すでに第2次世界大戦の末期にあたり、職員の多くは戦場におもむき、食糧、物資は極度に窮乏して、患者も激減するにいたった。かわって軍の要請により当研究所は霧島に疎開してきた海軍傷夷軍人の療養に供されるようになり、やがて終戦を迎えた。戦後は人手もなく、軍の使用のままに放置され、その上戦災にあった本校と附属病院の復興に主力がそそがれたため、当研究所は荒廃するに委され、機械器具は破損したまま、ついには導管破損のため温泉もとまり、温泉研究所とは名ばかりとなり、わずかに附近の住民を診療する一小診療所の状態のまま細々と生きのびていたのである。当時の記録によれば昭和22年度入院患者数延5名であったという。如何に衰微を極めたか想像出来よう。

昭和24年、医学専門学校が医科大学に昇格したのを機会に、県立鹿児島医科大学附属霧島温泉研究所と改称されたが、同年7月本学第2内科佐藤八郎教授を所長（兼任）に迎えて、ようやくここに設備、職員の充実と運営の復旧がはじまったのである。たまたま同年8月附近の旅館に災害が発生し、その被災者を収容治療したのを機会に復旧は急速にすすみ、12月には温泉も開通し、病舎の補修もされ、25年7月にいたってようやく戦前の状態にまで復してきた。このように診療の体勢の復旧がすすめられる一方、佐藤所長は第2内科より講師、助手を派遣し、ここに温泉医学の本格的研究が開始されるに至った。はじめてとりあげられた研究は飲泉の生体に及ぼす影響であり、その利尿作用（徳重敏夫）肝解毒機能（徳重敏夫、中村文重）などが発表され、ついで噴気浴泉浴の作用が、血液学的、酵素学的方法を用いて、肝、脾機能、副腎機能などの各方面から広範囲に研究がすすめられてきた。（徳重、柚木一雄、中村、福元金二）これら一連の研究は昭和30年、鹿児島市において第8回日本温泉科学会（会長、佐藤八郎教授）が開催されたとき、佐藤教授、徳重助教授によって特別講演「温泉浴と生体反応」としてまとめられた。

昭和27年、県立鹿児島医科大学が新制度の鹿児島県立大学医学部に改組されたとき、当研究所も医学部附属霧島温泉研究所と改称され、また医学部に温泉治療学の講座が開講されるに至った。その後、温泉作用の研究には新しく網内系機能の研究が加えられ（安部康三郎）ついで昭和31年頃より、その研究テーマも高血圧、動脈硬化、脳卒中へと次第に展開されてきた。（安部）

一方、昭和30年より本学整形外科も医師を派遣し、同年10月、第2代所長として整形外科宮崎淳弘教授をむかえ、運動麻痺、リウマチ性疾患、腰痛症、骨折後遺症などの整形外科の臨床と研究がはじめられるようになった。さらに昭和32年には九大温研との協同研究によって、霧島温泉の人体に及ぼす広範囲な生理学的研究が行なわれたが本研究所よりも、安部、中村、阿久根猛の三氏がこれに参加した。

昭和33年、鹿児島県立大学医学部は国立鹿児島大学に移管統合されて、その医学部となり、これに伴って本研究所は昭和19年以来なじんできていた温泉研究所の名称をあらためて、新しく医学部附属病院霧島分院として発足し研究所長宮崎淳弘教授が引続き初代の分院長に就任した。しかしながら、その運営、研究体勢はこれまでの温泉研究所と変りなく進められ、高血圧、動脈硬化、脳卒中などに関する研究が引続いてすすめられてきた。（安部、古江増蔵）これらの研究の成果は昭和30年、第20回温泉気候物理医学会において安部康三郎助

教授によって脳卒中のリハビリテーションのシンポジウムに要約されて発表されている。

昭和37年、安部助教授退職、その後任として本学第1内科より菅正明が助教授に就任した。一方医学部教授会においては分院の将来の在り方について討議がなされていたが、昭和36年、第1内科金久卓也教授は、その鹿児島大学医学部将来計画案の中で「教育、研究、モデル的医療機関という大学病院の三つの使命を果すためには、分院を単なる診療の場、温泉治療の場としてではなく、これらをつくめたいより次元の高いリハビリテーション医学研究の場として発展させるべきである」と述べ、教授会もこれを了承し、ここに分院の新しくすすむべき道がしめされた。ついで分院の敷地拡張と建物の増改築が計画され、昭和39年に敷地約7000㎡の拡張と総工費8,000万円による建物約1700㎡の増改築がみとめられ、翌40年6月にその竣工をみた。ついで41年には新たに機能訓練棟264㎡の増築が認められ、42年3月に完成してここに面目を一新したりハビリテーション施設の誕生をみた。

一方研究面においては、金久教授指導のもとに、あらたに脳卒中と神経疾患がリハビリテーション医学の面よりとりあげられた。とくに脳卒中については、これまで殆んど放置されていた麻痺側上肢について、その正しい機能評価と訓練が行なわれ（菅、森園隆一）心理的側面についても種々の心理的検査を行ない、モチベーションとの関連について検討がすすめられた。（菅、川野通夫、園田順一）また県下各地の離島、僻地について脳卒中や種々の興味ある神経疾患の疫学的、遺伝学的研究が行なわれた。（菅、浜田康治、叶隆吉、坂元藤雄、吉牟田直、大勝洋祐ほか）ついで昭和40年には新たに酵素化学的研究が導入され、その成果は41年の第31回日本温泉気候物理医学会のシンポジウム「理学療法」において菅助教授が高周波療法を担当したさい、その生理学的方面（叶）と酵素化学的方面（坂元）として報告された。

昭和41年菅助教授が退職しその後任として本学第1内科より浜田康治が助教授に就任し、同年6月宮崎分院長が本院院長に選出されたあとをうけて、第二代の分院長に任命されはじめて専任助教授による分院長がうまれた。

今日、われわれの行なっている研究は従来の脳卒中の機能評価、心理学的研究に加えて脳卒中後麻痺肢の循環動態が加えられたが（浜田、相良司）さらに酵素化学的方法を用いて、脳血管性障害と関連して脳の代謝機構へのアダックが試みられ、実験的脳実質損傷、実験的脳硬塞よりさらに臨床面への展開を行ない、遂次一連の研究として発表してきている。（浜田、坂元、大勝、相良は

か) また引続き行なわれている各種神経疾患の臨床的研究, 疫学的, 遺伝的研究に酵素化学的, 筋電図学的, 組織化学的研究を加え, さらに電子顕微鏡学的, 免疫血清学的研究へと展開してきている。(坂元, 大勝, 浜田ほか)

奄美大島にみられた特異な筋疾患については新潟大学神経内科との共同研究がすすめられているが, また脳性麻痺についても遺伝学的研究がすすめられている。(坂元, 大勝) 一方, 脳卒中や神経筋疾患における物理療法や運動療法についても, その作用機序を生化学的方面より検討をつづけている。(浜田, 坂元, 大勝, 森園, ほか) なお, その他に萩原純雄は生化学大保教授の指導のもとにコレステロール代謝の基礎的研究を行なっている。

昭和12年に現在の霧島分院の母体が誕生してからすでに30年の年月がながれた。その間地理的, 人的, 経済的悪条件にもかかわらず多くの先輩がつみかさねてきた研鑽, 努力の成果は, 今日この様な形で実をむすびつつある。

思うにわれわれ霧島分院に与えられた使命は, 大学病院の一部門として, 単なる患者診療の場のみではなく, リハビリテーション医学の基礎的研究を推進せしめていくところにある。ともすればリハビリテーション医学は実践の医学として, その実際的な面のみが強調されているが, そこには自ら正統的な内科学, 整形外科的考案がなされねばならない。またさらには, その基礎として広く, 運動機能に関する生理学的, 生化学的視野が求められるであろう。

今日, われわれはこの様な考えのもとに, より深く, より広く研究をすすめていき, リハビリテーション医学推進のため, また霧島分院の将来の発展のため, 微力をつくしている。ねがわくば各位のより一層のご理解ご支援をたまわらんことを。

主要設備

診療及び研究部門

| 品名            | 数量 |      |
|---------------|----|------|
| 4素子心電計        | 1  |      |
| 熱ペン直記式心電計     | 1  |      |
| 2チャンネルテレメータ装置 | 1  |      |
| 筋電計           | 1  |      |
| 同連続撮影装置       | 1  |      |
| 診断用レントゲン装置    | 1  |      |
| 光電比色計         | 1  |      |
| 茲大式懸垂3紙電気泳動装置 | 1  |      |
| ガラス電極PH計      | 1  |      |
| ガラスホモジナイザー    | 1  |      |
| 東大式再生蒸溜装置     | 1  |      |
| 遠心分離器         | 2  |      |
| 高速遠心沈澱器       | 1  |      |
| 電気恒温水槽        | 3  |      |
| 電気恒温槽         | 1  |      |
| 直示天秤          | 2  | 内1局用 |
| 製氷機           | 1  |      |
| ストッカー         | 1  |      |
| サミスタ温度計       | 1  |      |
| 皮膚抵抗測診計       | 1  |      |
| 双眼顕微鏡         | 1  |      |
| 顕微鏡           | 2  |      |
| 眼底用直像鏡        | 1  |      |
| 高圧包帯材料消毒機     | 1  |      |
| 高圧滅菌器         | 1  |      |
| 乾熱滅菌器         | 1  |      |
| 冷蔵庫           | 2  |      |

リハビリテーション部門

| 品名                | 数量 |
|-------------------|----|
| ハーバートタンク装置        | 1  |
| 昇降練習用階段           | 1  |
| オーバーヘッドフレーム       | 1  |
| 固定式歩行補助平行棒        | 1  |
| 移動式歩行補助平行棒        | 1  |
| 天井懸垂式歩行訓練吊具       | 1  |
| 起立訓練用傾斜ベット        | 1  |
| 壁面用助木懸垂           | 1  |
| 姿勢矯正用鏡            | 2  |
| 斜面台               | 1  |
| 足関節掌背屈運動器         | 1  |
| 手首掌背屈運動器          | 1  |
| 上肢内外施運動器          | 1  |
| 肩関節輪転運動器          | 1  |
| 卓球台               | 1  |
| 平均台               | 1  |
| 片腕挙上運動梯子          | 1  |
| 歩行板               | 1  |
| 手関節前腕運動誘導器        | 1  |
| 自転車運動訓練器          | 1  |
| 内外及足矯正用歩行訓練器      | 1  |
| 手指訓練用衣料セット        | 1  |
| 手指訓練用引出及スイッチセット   | 1  |
| 手指屈伸運動器           | 1  |
| 手指握曲練習台           | 1  |
| ゴム式手指前腕筋増強器       | 1  |
| 漕艇運動練習器           | 1  |
| マット               | 1  |
| 手指運動能力測定器         | 1  |
| バルローゼ型訓練用ベット      | 1  |
| バックアンドロインチエストウエイト | 1  |
| 治療用赤外線灯           | 1  |
| 治療用紫外線灯           | 1  |
| 超短波治療装置           | 1  |
| 低周波治療装置           | 1  |

## 財団法人親和会

(鹿児島大学医学部附属病院内)

### 1. 設立年月日

昭和32年12月24日（民法第34条に基き文部大臣より設立許可）

### 2. 設立者，寄附金

- (1) 鹿児島県立大学医学部附属病院親和倶楽部
- (2) 基本財産                    500,000円
- 運用財産                2,252,315円

### 3. 設立の目的

- (1) 医学部における医学の研究を奨励助成する。
- (2) 附属病院の患者に救恤を行なう。
- (3) 職員の学事研修等に便宜を与える。

以上により，医学の振興と文化の向上に寄与することを目的とする。

### 4. 事業

右の目的を達成するために次の事業を行なう。

- (1) 医学の研究に対する奨励および助成
- (2) 患者の慰籍および救恤
- (3) 患者に対する栄養の研究および医師の処方による食事の供給
- (4) 療養に必要とする諸施設の便宜の供与
- (5) 職員に対する学事研修の奨励および福利厚生
- (6) その他目的を達成するため必要な事業

### 5. 現在の役職員等

会長 宮崎淳弘，理事長田代滋穂，常務理事松山清(専任)理事宮崎淳弘(兼)  
縄田千郎，岡元健一郎，森一郎，中馬康男，税所篤正，上国料忍，内山政江，  
野間静子，監事 斉藤勝郎，今村シヅエ  
評議員 内山八郎，久保隆一，秋田八年，金久卓也，田代正昭，香月武人，  
大山満，中島実，原口正一，細山覚，上原ヨシ子，大窪マサエ，下小野田イ  
チ子

財団職員 庶務部主任塩満康裕，会計部主任北口真吉

### 6. 目的達成のため行なう事業（現在）

直営事業

- (1) 事務部                    従業員 6名

- (2) 本院入院患者基準給食（病院に代行）  
620床 従業員29名
- (3) 看護学校，助産婦学校，保健婦学校  
生徒給食 180名 従業員 5名
- (4) 本院，霧島分院入院患者基準寝具（病院に代行）  
本院 620床，分院50床，従業員 8名
- (5) 付添寝具貸付
- (6) 本院および分院売店（入院患者生活必需品，雑貨，繊維類，牛乳軽飲食料品，煙草切手類等）  
1日売上高本院約10万円従業員 8名
- (7) 公衆電話，市外電話電報取扱い
- (8) 職員食堂  
1日売上 約300食 従業員 8名
- (9) 喫茶軽食堂  
1日売上 約300食 従業員 8名
- (10) 薬局院外処方箋 1日約40枚（1,000剤）  
従業員 6名

#### 委託事業

- (1) 書籍部  
1ヶ月売上 約 400,000円
- (2) 果実販売
- (3) 入院患者病衣，新生児肌着類貸付および被服洗濯
- (4) 職員被服洗濯
- (5) 時計修理
- (6) タクシー取次
- (7) 靴修理

#### 年間収支予算額

昭和43年度

公益事業部 84,385,600円

収益事業部 73,716,200円

計 158,101,800円

## 7. 沿革

昭和26年7月9日（結成趣意書日附）鹿児島県立大学医学部附属病院親和俱

## 楽部結成

- (イ) 組織 鹿児島県立大学医学部附属病院に勤務する教職員並びに病院勤務者および副医員
- (ロ) 目的 附属病院内の職員の親和を図り病院の健全なる発展と国民医療の万全を期する
- (ハ) 会計 所要経費は会費（有給者月30円）経営事業剰余金および寄附金をもって充てる
- (ニ) 発起人伊集院健，前田末男，永吉義雄，賛助者森一郎，看護婦代表

### 27.4.24

鹿児島県立大学医学部附属病院の類焼により病院施設と共に親和倶楽部施設および記録全焼

### 27.5.11

売店再開・病院施設の応急復旧に呼応し仮設建物（附属看護学校庭）において入院患者日用雑貨煙草牛乳郵便切手その他を販売すると共に洗濯物取次幹旋を行ない患者および職員の利便を図る

### 27.10.1

理髪室を仮設し委託経営を開始

### 28.12.8

28年度総会において「親和倶楽部を法人組織として基礎の確立と将来の発展を図る」ことを病院長に建議することを決議

当時の役員と事業内容

- (イ) 会長縄田千郎，副会長宮崎淳弘，片平幾雄，総務部委員森一郎，今村健二郎，松山清，面高満，矢野シマ，今村シヅエ，厚生部委員永吉義雄，若松大，磯辺盛吉，恒見清一郎，内山政江，福島喜代子，体育部委員西健一郎，久留克己，伊勢国男，内之倉一男，大窪マサエ，奥江瑛子，文化部委員 下原朝充，伊佐敷康政，渡辺一，隆勇夫，市坪米子，南伸子
- (ロ) 事業内容
  - (1) 病院職員に対する生活資金の貸付，運動会等レクリエーション経費補助，文化部図書の備付その他福利厚生のため経費支出
  - (2) 売店経営（従業員2名）
  - (3) 理髪委託経営（従業員1名）
  - (4) 給食残飯を飼料として養豚の委託 (5)洗濯取次
  - (6) 火災保険取次

昭和28年度決算額

|             |          |
|-------------|----------|
| (イ) 会費会計収入額 | 61,530円  |
| 支出額         | 10,250円  |
| 差引剰余        | 51,280円  |
| 前期繰越        | 3,700円   |
| 繰越合計        | 54,980円  |
| (ロ) 営業会計収入額 | 320,237円 |
| 支出額         | 179,007円 |
| 差引剰余        | 141,280円 |
| 前期繰越        | 140,857円 |
| 繰越合計        | 282,137円 |

29.4.5

売店移転（新装なった復旧病棟中央部の定位置炊事棟1階）  
洗濯取次廃止

29.4.19

理髪室，売店前の定位置に移転

29.9.1

院内保清と騒音防止に協力するため外来下足預り事業を開始

29.9.10

結核病棟（第3および別館）患者理髪を委託事業とする  
日本生命保険相互会社と団体契約する

30.7.1

患者および職員の利便を図るためタクシー取次（常駐）を開始

30.9.19

靴修理所（委託）開設

30.10.1

売店分店を病院玄関に開設  
一般食堂開設

31.8.9

親和倶楽部定期総会において民法第34条に規定する財団法人設立を決議しその準備に着手

32.3.12

財団法人親和会設立許可申請書を設立代表者高安晃親和倶楽部会長より文部

大臣に提出

設立発起人高安晃，榎屋富一，片平幾雄，森一郎，今村健二郎，松山清，渡辺一，矢野シマ，内山政江

### 32.7.1

清掃部（病院全便所）開設

### 32.12.24

文部省委大第 131号をもって文部大臣より財団法人親和会設立許可指令

(イ) 設立当時の役員等

会長 高安晃，理事長片平幾雄，常務理事松山清，理事今村健二郎，森一郎，渡辺一，矢野シマ，内山政江，監事高尾健嗣，面高満，山下初枝，評議員永山徳郎，福田正臣，伊佐敷康政，鳥居重光，永吉義雄，片平幾雄（兼）松山清（兼）村岡道哉，内之倉一男，福島喜代子，山下多嚙子，西山ヤス，今村ヒデヨ

(ロ) 設立当時の事業内容

直営 売店（本店病棟中央部，分店外来棟玄関），食堂，入院患者牛乳配達，下足預り所，委託 理髪室，果実販売，養豚（残飯処理），タクシー常駐，自転車預り所，入院患者被服洗濯

(ハ) 設立当時の決算額

昭和33年度

|          |             |
|----------|-------------|
| 公益事業部収入額 | 32,556,305円 |
| 支出額      | 32,386,611円 |
| 剰余金      | 169,694円    |
| 収益事業部収入額 | 11,960,280円 |
| 支出額      | 10,055,811円 |
| 剰余金      | 1,904,469円  |

### 33.1.8

県教育庁より設立許可書交付受理

### 33.1.17

会長内山八郎就任（院長就任）

### 33.1.22

旧親和倶楽部全財産寄附受理手続完了

### 33.1.23

財団法人親和会設立登記完了

### 33.5.1

入院患者基準給食を病院に代り実施

本院 600床 分院35床 全床

学部附属看護学校、助産婦学校生徒給食請負実施

### 34.2.1

食堂をカフェテリア厨房に改造，セルフサービス営業を開始，設備費（厨房408万円、建物改造費50万円）

### 34.12.22

売店および理髪室 元一般食堂（構内北隅）に移転

### 34.12.25

薬局開設登録

### 35.2.1

保険薬局指定

### 35.2.27

保険薬局院外処方箋調剤開始

### 35.7.29

任期満了により役員等改任

理事長 片平幾雄 常務理事 松山清 理事 宮崎淳弘，金久卓也，森一郎，永吉義雄，内山政江，川東一恵 監事 町野碩夫，飯田高明，宮内逸子，渡辺一 評議員 内山八郎，岡元健一郎，高安晃，久保隆一，福田正臣，荒木崇文，三宅洋三，野間静子，実吉睦子，上原ヨシ子，田上国祐，山下敬蔵，浜田兼春

### 35.12.1

従業員に対する退職金制度として中小企業退職金共済制度に加入

### 35.12.13

理事長に縄田会長就任（兼）

### 36.2.27

霧島分院住宅 1棟（12坪）を加治木営林署より払下を受け国へ寄附

### 36.8.1

病院中央写真室に財団職員を配置しかつ経済的援助を行ない医学研究に資すると共に中央写真室の基礎づくりに努力した

入院患者基準寝具を病院に代り実施（設備費約1,300万円，本院600床，分院35床）

### 36.9.18

役員（理事および監事）選任規則制定評議員選出規則制定

### 37.12.4

任期満了により役員等改任

会長 縄田千郎，理事長 縄田千郎，常務理事 松山清，理事 町野碩夫，  
金久卓也，森一郎，永吉義雄，恒見清一郎，矢野シマ，野間静子，

監事 田上国祐，今村シヅエ，評議員 高安晃，久保隆一，佐藤八郎，

岡元健一郎，福田正臣，香月武人，吉留正雄，黒木里良，瀬野正則，上原ヨ  
シ子，湯野易子

### 38.4.1

時計修理委託営業開始

### 33.4.30

清掃部（病院便所掃除）廃止

### 33.5.31

中央写真室の運営病院に切替のため閉鎖

### 33.12.15

新生児肌着類の貸付開始（委託事業）

### 39.1.13

患者給食食器洗浄消毒室（新営16坪工事費839,360円）を国へ寄附

### 39.4.1

新生児調乳業務開始

### 39.6.1

会長 岡元健一郎就任（院長改選）

### 39.11.6

医学部，附属病院，附属学校合同運動会および院内対抗野球大会，バレーボ  
ール大会優勝旗を贈る

### 40.2.1

霧島分院職員用浴室1棟（新営14坪工事費 687,000円）を職員厚生施設とし  
て国へ寄附引渡

### 40.2.15

任期満了により役員等改任 理事長 縄田千郎，常務理事 松山清，理事  
宮崎淳弘，森一郎，永吉義雄，田代滋穂，野間静子，下小野田イチ子，監事  
浜田康治，須藤久敏，内山政江，評議員 内山八郎，久保隆一，秋田八年，

金久卓也，橋本修治，久保田仁志，田代正昭，大窪マサエ，藤園マリ子，福田ミチ子，中島実，山下敬蔵，黒木里良

#### 40.2.25

理事長に宮崎理事就任（改選）

#### 40.9.15

付添寝具貸付開始

#### 41.4.1

財団専任常務理事に松山清を任命

#### 41.5.18

役員選任規則の一部改正

評議員選出規則の一部改正

#### 41.6.1

会長に宮崎理事就任（院長改選）

理事定員 2 名増員による補充並びに監事等の欠員補充選任

理事岡元健一郎，中馬康男，上国料忍，監事松村益美，評議員細山覚，原口正一，新原美津子

#### 41.6.1

理事長に岡元理事就任（改選）

#### 41.9.9

財団法人親和会職員退職金規程制定

財団法人親和会貸付規程制定

#### 41.11.8

寄附行為の一部変更の認可を受く

売店内に書籍部設置

#### 41.12.23

患者給食部事務室 1 棟 8 坪75（新営工事費 445,000円）を国へ寄附し旧事務室を従業員休憩室に改造

#### 41.12.4

任期満了により役員等改任

理事長岡元健一郎，常務理事松山清，理事縄田千郎，宮崎淳弘，森一郎，中馬康男，税所篤正，田代滋穂，上国料忍，内山政江，野間静子，監事須藤久敏，今村シヅエ，評議員内山八郎，久保隆一，秋田八年，金久卓也，田代正昭，久保田仁志，細山覚，中島実，原口正一，大窪マサエ，上原ヨシ子，下

小野田イチ子

**42.1.4**

売店 病院薬剤部前に新築移転

**42.1.20**

理事長に田代理事就任（改選）

**42.3.31**

下足預り部廃止

**42.4.1**

リカバリー室患者病衣貸付開始

**42.4.28**

実験用動物運搬用財団トヨペット廃車

**42.5.29**

売店内に写真部設置

**42.5.31**

霧島分院患者給食国直営のため廃止

**42.6.20**

霧島分院売店開設

**42.11.10**

職員被服洗濯開始（委託事業）

**42.12.23**

財団設立10周年記念事業として永年勤続者表彰式および喫茶軽食堂（病院中央部に新築）開店披露を行ない10周年記念品を配布

**43.1.5**

喫茶軽食堂営業開始（直営事業）

# 第八章 回

顧  
(隨想)



# 1. 医学専門学校の創設

山 口 政 男

昭和十七年春全国衛生課長会議の際、健兵健民政策の遂行上その一環として医療の普及を意図して文部省は医学専門学校を設置して不足に悩む開業医を急速に補給することについて審議中であることを聞いた。

当時は大東亜戦争勃発間もない頃でもあり医師は相ついで応召し医療に窮する地方は益々多く、全国五千以上の無医村を算するという状況であった。

これより先、昭和十年頃厚生省に設置せられた医制調査会では国内の医育機関は大学課程の一元化に方針を措かれた関係があつて、医専校は漸次整理せられる機運であつたのに戦争遂行には是非とも速成医育機関、つまり医専校の設置が必要となつて、再び元にかえして医大、医専校の二本立の問題が文部省専門学務委員会に台頭したものである。当時鹿児島県下でも開業医を必要とする部落は百二十余ヶ所あつて、これらの無医部落を解消するには県民の子弟を対象とする医育機関を設ける以外に途がないのと、又これを設置することによって間接に県下の公衆衛生の向上に寄与することにもなり得るので、この問題についてはかねてから極めて関心をもつていた。昭和4、5年頃であつたか某医家出身県会議員が医専校設立の希望を県会で述べたことがあつたが、一片の希望に終つたばかりでなく却つて開業医師から批難もあつたようである。

その後昭和12、3年には医家出身の県議員間でその必要を認識するようになつて県会として関心をもつことになり13年の通常県会では県議案として満場一致可決したのであるが、中央における方針もあるので決議は唯将来好機に繞り合つた場合という程度であつた。

このような経緯のある問題であるから早速文部省に知人を訪ねて医専設置の方針を打診した。その話ではまさしく委員会の議題になつておるとの事を耳にしたので帰庁後直ちにこれを簿田知事に服命した。知事も思いの外乗り気になつて直に文部省要路の知人に事の由を照会し、また幸にも県出身の在阪佐多愛彦氏が専門委員の職に在ることを知つて佐多氏とも連絡し設置促進の方法を講ずることとなつた。当初の方針は男子医専の設置を目論んで県立医専設置

可に関する申請書を調製したのであったが、内々佐多氏の進言もあって女子医専に切りかえてその計画を変更することに調書を改めて申請した。するとその後委員会の方針が再び男子医専の方針に傾いたとの情報を得たので、この上は上京して直接文部省の意途に副う申請を早急に申達することがよいと庁議がきまって加藤学務部長と同行して藤野専門学校局長を訪問して懇切な指導を受けたので滞京中一切の書類を調製し11月提出して帰鹿児した。藤野局長には本県知事に在任中医専設置の必要を進言したこともあるので充分理解しておられたことは、全国に魁けての審議を受け又書類照復の煩もなく認可を得られたことに見ても思い当る処で、同局長の内助に対しては佐多氏の斡旋と共にまことに感謝せざるを得ないのである。文部省からの設置認可の内報は12月16日知事の手許にとどいた。17日早朝知事から直接電話で文部省から内報があったから早々登庁せよとのことである。直ちに登庁して知事と感激の握手を交わした。永年の宿志を達したのである。忘れることのできない歓喜の極みであった。

大凡そ個人が事業を起すにしても着想を凝らし工夫を練って家運を培けて当るのであるが、公共団体での企業も創意工夫と然もその創案が容易に公共の福祉に直結する立案でない限り庁議や議会に首肯を得ることは不可能であり、そこに苦心も伴ない努力も必要とせられるのであるが、裏面には言外の興味と又事の成った場合の愉悦と優越感が湧くものである。医専校の設立は県民の渴仰する所であって鹿児島県としては大事業である。この事業が直接間接県民に至大の福祉を携らすものであることを思うとき県民の幸福すべてを一身に集めた想いであった。

そこで開校は昭和十八年四月と定め二月に臨時県会が召集せられ医専校設置の議決を経たので早速校舎、設備その他生徒募集の計画など万般にわたって遺漏なき整備を急ぐため庁内各課を挙げて之に当ることとなり事務を分担して係員を定めた。主管課は勿論衛生課におかれた。

### 校長の人選

当時県立病院の各科医長は大かた九大出身者であったが医長の異動の都度長崎、熊本大学の割込運動がなかなか激しかった関係から九大地盤を固める意味においてか九大からは直接病院の人事を左右する態度に出て恰も九大の附属病院でもあるような好ましからぬ仕儀を受けていたので、まことに飽きたらぬ感じがあった。何日の日にかはこの弊害を矯めして県の監督を強化する時期を窺っていた際でもあったから校長には九大関係以外の学識卓見ある人物を招聘しようと思った。そして知事の意見により白紙で文部省に人選がたを依頼し

た。その後文部省からは九大に人選かたを照会してあるとの事であったので、石田病院長と熟議してこの上は比較的九大色彩の淡い高安慎一氏を招聘するにしかずとし知事から文部省を介して九大に高安氏推挙のを通じてもらうことになった。これは九大から推薦せられる顔振れとしては停年又はそれに近い〇〇、〇〇、〇〇、〇〇教授の中を出ない見通しであるが〇〇、〇〇教授はそれぞれ就任先きも決まっているらしかったので、その他の中から同氏に白羽の矢を立てたのである。

高安氏は温泉治療界の権威でもあり指宿温泉や霧島温研の調査も依頼した関係もあり、ほぼその人品も承知していたし、又熊本医専の大学昇格に当られた経験もあるとの事で知事も心よく承認してくれたのである。

## 校 舎

初め校舎は山下町専売局倉庫敷地を充て、将来拡張の余地としては県病院との間に介在する民有地を買収し、又柳町電車線以東の民有地を買収して病院の拡張に備え校舎と共に一画内に納める腹案であったが、偶々下荒田町武の橋際元授産社敷地二町余歩と建物二、三棟を県に移譲する内諾があったので、附属病院とは相当の距離ではあるが、経費の関係から一応この地を校舎に充てることに計画して文部省の承認を得たのであったが買収価格その他の点で交渉が頓挫したため他に校舎敷地を物色することとなった。建築係の選定した候補地は二ヶ所で、一は伊敷村の甲突川の対岸の水田、一は鴨池町高等農林学校南側の水田であるが、前者は水道、ガスの引込みに困難である関係から後者を選んだ。これが現在の敷地である。附属病院とは約二キロの距離があり、交通関係からみても決定には聳か躊躇せざるを得なかったが、市の南方発展を目差す将来として不便は他の方法で補うこととし、将来国立移管を見込んでこの地を選ぶことに決し取り敢えず三町歩を買収して文部省には敷地変更の手續を了した。また校舎の設計は岡山医大、熊本医大の様式に倣うこととし、年度割計画で建築することに決定した。よって当面の校舎として一応山下町県立物産館を改造して仮校舎に充て予定通り昭和十八年三月生徒募集、四月仮校舎で開校の盛儀を挙げた。

## 設 備

当時医科用機械器具類は鋼鉄類などの強度な統制下におかれていた関係で、その蒐集には少なからず困難を嘗めた。幸にも大阪市の機械商大矢氏の厚意によって基礎医学用の機械類一切の納入を請け負って貰うことができた。顕微鏡の入手には苦慮した。オリンパスは国産品として当時優秀品であったが製品は

すべて軍部に納入する契約ができていたため民間では全く跡を断っていた関係もあるので池田内政部長が上京の途次独断で大阪府警察部長坂信弥氏に八重洲号四十台の買い集めかたを依頼した。その事は池田氏の不在中に坂氏から辛うじて入手の見込みがついたとの電報で始めて知ったのであるが、一方池田氏の上京不在中に既に福岡市の安宅取扱店との間にオリンパス号四十台（学生用）他八台（教授用）を期限内に納入することの契約ができていたから魁の功妙を銜うような池田氏の態度には腹の虫が納まらなかった。兎も角池田氏のメンツに拘わることは思ったが責任をもって池田氏の諒解を得て坂氏には電報で断った。その後大阪出張の機会に坂氏を訪問して計画の齟齬したことについて陳謝したのであるが氏は池田氏の疎忽と背信をいたく憤慨して既に所要の台数を市内の各店から漸く買い取る所まで刑事を使って内約していたとの話であった。このようないきさつで気に懸かったから大阪からの帰途福岡の安宅商会を訪れて納入期日を確約して帰った。この頃新たに医専設置の認可を受けた県は数県に及んだと思われるが、幸にも本県は最初に認可を得たので顕微鏡も予定の開校期日までに発注台数全部を確保し得たことを心強く感じた。他の県では何れも学務課で主管した関係から顕微鏡始め機械類の購入が手遅れとなり開校を延期した所もあった。

### 帽子と徽章

徽章は県立工業試験所の専門技師に図案を依頼した。帽子の制定については学校の目的が健民健兵の国策に沿った医育機関であって、特殊な校風を育成し戦時に相応しい医師の養成を目的として出発したのであるからその精神を形に織り込んで従来角帽式を改めて戦闘帽の様式に制定して貰った。制服も第二国民服を選んだ。しかし制帽については開校式が終って早々父兄側から角帽式に変更かたを高安校長に懇請した。それは子弟の意を取り次いだからであるが既に県公報で告示済みであったので校長も当惑して烏耶無耶に見送ったそうである。服装もいつとはなく詰襟の学生服にかわった。

これより曩に知事不在中、開校準備の上で池田内政部長と意見を異にすることが屢々あって何かと圧迫感にも堪えず医専の仕事にも気が進まなかった。また一面創業のことも漸く目鼻がついた機会でもあったから潔く主管課を学務課に譲ることに辞退を申し出し衛生課としては側面的に援助することに約してその旨電報で上京中の知事の承認を得た。過去一年間、課を挙げて創設事業の遂行に奉仕したのであったが何等課僚に酬ゆる所なきまま感情問題から独自の行動をとったことは課員同僚に対し不徳であったことを悔ゆるのである。

## 霧島温泉研究所

これは昭和十三年に辛うじて県会の議決を経て建設費五万円を投じた施設であった。設置の理由として、一、恵まれた県下の温泉の利用開発を目的に模範施設として温泉業者の施設改善に資する。二、温泉の利用方法について一般を啓蒙する。三、直接保健増進の施設とする。四、附近に医療施設がないので高山治療を加味した国立公園の厚生施設の一環とするなどの目的であったが愈々その年の県会の間際になってこの施設が結核療養所であるというデマが流れたため県会協議会では地元始良郡の選出議員が反対し出したので議案は既に本会議で否決する運命に内定していたそうである。由来議員協議会で決定した事案はこれを翻して再議にかけないのが恒例であった。しかしこのような福祉施設を内容も質さず葬り去るという早計の協議に少なからず驚いて、直ちに地元議員を宿舎に歴訪して再議のことを要請した。また幸にも中馬議員の斡旋で議決の諒解も得られ漸く本会議で異議なく可決せられたという経過であった。

位置の選定については少なからず悩まされて三年越しに現在の位置に落ち着いた。一時は建築費の年度繰り越しにも理由が薄弱であるというので財務当局でも困っていた。山麓の温泉地は一度ならず二度三度踏査して廻った。市村知事は林田温泉旅館の一隅を候補地に勧めた。それは林田氏との内談で温泉旅館まで県道を開さくすることを条件として敷地も温泉も提供するというのである。早速土木課に調査してもらったが、自動車道の敷設には約十万を要するという。しかし道路費はさておきこの県営施設が同旅館へのサービス化する嫌いも多分があるので将来を慮って断念して貰った。丸尾の現地は所々に噴気孔があって土質が脆弱であるため土工費に予想以上の経費とそして日時を要した。建築請負者は都城の者で資材の購入運搬に頗る苦心を払った関係もあって建築は長引き竣工には契約期限を遙かに超過したため違約金を納めるなど一万余円の赤字を出したそうである。建物は建坪の割合に思い切って廊下の幅員と窓の面積を上げたので規模こそ小さいが当時の建物としては珍らしく感じのよい会心の建築であった。また、同敷地は国立公園の敷地内にあるので事後ながら内務省の承認を受けることになったのであるが、これがまた早速認可にならない。本省の見解としては病院、分院という名称を嫌ってのことで、結局霧島温泉研究所として認可を得た。実に足かけ四年目に開院を見たのである。

初代所長は帆足作次郎氏であって鋭意経営に努力せられた。経営上切に後継者の反省を希う所である。

以上は鹿児島医専設立前並びに設立における秘話を、当時の衛生課長山口政

男氏が病床において、小生宛執筆されたもので、当時の複雑な事情と氏の努力、苦心の跡が手に執るように判る。昭和三十八年六月二十四日（町野記）

## 2. わが医学部の生立ちと苦難のあれこれ

鹿児島大学名誉教授 町野碩夫

〔まえがき〕 わが鹿大医学部の前身、鹿医専の誕生は、いわゆる軍国時代すなわち日支事変を契機としてその陣痛が切迫化し、大東亜戦のさなかに——軍関係の要請もさることながら——初代校長に高安慎一博士を九大から迎え、照国神社の社頭で戦闘帽に巻ゲートルのいで立ちで、男々しくも呱呱の声（第1回入学式）をあげた。なにぶん、ときが時だけに、その後の発達はじつに波乱にとみ、すごく苦難の連続であった。その沿革の梗概は、すでに鹿大付属病院沿革史や鹿大十年史ならびに鹿大医報Ⅳの4に記載済みであるから、わたしは主として、これらに洩れている事柄をなるべく取りあげ、とにかく当時、「蔭の人」として活躍した人々を顕彰したいと思う。しかし、いかんせん、鹿医専→鹿医大→県大医学部→鹿大医学部の設立と発展に寄与したものは、きわめて広範囲にわたっていて、独り学内や関係官庁ならびに衆・参議員のほか、広く全県民に及んでいることを茲に改めて銘記してもらいたい。いずれにしても、わが医学部は、県民全ての待望の結晶であって、長い長い難産・苦労のすえ誕生した「慈し子」であることには間違いない。

さて、当地における西欧医学校の濫觴は、前月の「西欧医学百年祭」で明らかにされたように、かなり遠い昔（明治4年）のことであって、多数の英才を社会に輩出しながらも、明治22年を境としてブツリと跡絶えたが、病院だけは県立→私立→市立→県立と、その形態を変えながらも存続し、それを中核として鹿医専が設立したわけである。そこで、この医専創設の念願は、きわめて根づよいものがあつたに拘らず、一部の県民にはなお反対の声も聞かれたので、この方面の理解に向って薄田美朝知事のもと、山口政男衛生課長や石田堅三郎院長のほか、県会方面では中馬猪之吉副議長を初め新名新蔵、野村政尚、平瀬実武らの諸公が、いろいろと苦労を重ねたのである。これらの努力がようやく実をむすび、昭.15.12.1.には坂口壮介議長の名をもって、新居善太郎知事に医専設立の要望書を提出する運びとなつて、最上宏議員がその提案理由を説明

した。

**A. 第2次世界大戦時代の苦難** これより先き、わが国の国際状況は、日独防共協定の締結につぐ日支事変（昭.12.7.）によって次第に険悪化し、ドイツのいわゆる電撃作戦の開始と共にイタリアも参戦し、欧州いな世界の天地が震動してきた。わが国も、いわゆるABCDの包囲網の突破をめざして真珠湾を奇襲した。これは、実に医専開校後わずか8カ月のことである。その間、県病院および医専関係の若き医師たちは、次ぎから次ぎへと戦場にかりたてられ、初代県病院長の田中苗太郎博士の胸像や低い鉄柵までも回収されていった。神田正人・萩原平八郎両助手もすでに南支とビルマで散華していた。なにぶん、戦場が遠い海の彼方のことであるから、内地では士気はなほだ旺盛で、桜島上空では飛行機の体当りがみられ、市民は挙って防火訓練や竹槍の稽古に夢中であった。ところが、昭、20年になってからは、南方海上からの敵機の本土空襲が急に活発となり、関東や中部地方さては近畿や北九州方面の被害状況が漸く全国的にとり沙汰されるようになって、さきの元気はどこえやら、ブーのサイレンで待避壕内へと一目散、農事や漁撈にもこと欠くこととなった。縄田千郎教授もこの年の5月に応召し、わたし（防空隊長）は驚いて久留米の司令部を訪ね、帰休を乞うたが駄目だった。この年の4月の初めごろ、台湾につぐ沖縄の陥落で日本は殆んど祖国の制空権を失ない、とりわけ当地方では、毎日どこかの町や村が空襲されて「内地決戦」の様相が濃厚となった。

頃しも4月6日、鴨池の予科練習学校がグラマン機の波状爆撃をうけた。病院の職員と生徒の1部は、恐怖に怯えながらも、そこは「何事も後学のために（?）」と、城山に登って戦況を審さに見学したが、とき折り、グァーと頭上をかすめる一大轟音に、胆をつぶして思わず地上に俯せこんだ。

**婦人科医の四肢切断術** その翌朝には、騎射場（兵器小工場）と天保山（無線局存在）が爆撃された。昭.20.4.8.の9時半ごろ、米沢警務課長（左胸被爆盲貫創）の輸送をかわ切りに、来るわ来るわ、100名を超える負傷者が数台のトラックで、ドッと押しかけてきた。外科担当の石田院長は、玄関先きに仁王立ちで専ら手術（止血）適応の弁別にあたり、助手のいない外科に代って婦人科医のわたしが、ま夜中まで田口正門助教授や学生を相手に、四肢を切断して人命救助に当たった。なにしろ、エスマルヒの駆血帯のみで麻酔なしの手術で、「ギァー」の悲鳴に驚いた田口君は、「こんな手術はしたことがない」といって逃げだしかけた。「未経験の僕だってやっているのだ、君だってやれぬことはない」といって叱咤激励した。今や付属病院は完全に1個の野戦病院と化

し、輸血さえし難い状態の下で学生は思わぬ『戦陣医学』を身につける破目となった。わたしは今でも夜中ふと、爆弾で大腿を切断されながらも虫の声で、『早く手術してくれ』とせがんだ若い女性の白蠟顔と、手術時『人殺し』と叫んでわたしを睨めつけた幼児のままざしなどが、目に浮んでくることさえある。ああ、これこそ現実の地獄図絵でなくて何であろう。負傷者の眼には、きっとわたしたちが鬼か悪魔にみえたに違いない。

当日病室が満床だったので、やむなくこれらの患者をさしあたり、本館2階の講堂にゴザを敷いて収容・治療することにした。しかし2～3日後には、万一（爆撃）のことを考えて県側とも相談し、足の立たないもの7～80名を重富の教員療養所に移した。何分とも医者不足で、主として数名（后述）の看護婦が学生数名と共に、かれらの治療に当たってくれた。それから2～3日間、騎射場の跡かたづけに駆り出され、内心ホッとしたのも束の間、「よもや病院までは」と思っていたのに、4.16.の朝まだき、敵機はわたし達の病院を襲撃したのである。全病室は数発の直撃弾であたら完全に崩壊した。しかし、看護婦その他のお蔭で、患者に一人の怪我人も出なかった。ところが、お羞かしいことながら、わたし達は、『時限爆弾』というものを誰も知らなかった。そこで、その朝の9時半ごろ、見舞に来訪した山口課長や羽根喜一県医師会長と樋渡吉治同理事長らに石田院長は、手術室内にある上下各2箇の爆弾孔をそれとは知らずに指し示していた。ところが驚いたことには、11時過ぎになると、『ズドン』と城山に笥する一大炸裂音につき、『ザー』と音たてて手術室の大天井が落ちてきた。われわれは、冷汗をかきながらただ、あれよあれよと叫んで傍観するのみであった。かくして鹿児島県下、町という町、港という港、そして谷間——たとえば岩崎谷荘までも爆撃され、そして機銃でも掃射された。街には昼間といえども人影は殆んどなく、僅かに警防隊員が三々伍々ただ右往左往するのみであった。

そこを、わたしはすばやく自転車でツツ走り、帰れば夕方、隣組の班長として配給品くばりに余念がなかった。天神馬場で登院中約11.5間の間隔で被爆し、3.5時間ぐらい鼓膜が痛んだのもその頃のことであった。しかし病院は、幸いにも本館と外来棟がむきずだったので、1日も休むことなく診療が続けられた。4.23.宮崎淳弘教授が突如単身で着任。まさしく『地獄に仏』で、「さあいつでも空襲ござんなれ」とばかり、院内の意気まさに天をつかんばかりであった。まずさし当って、重富収容所の指揮を依頼したが、彼はそれから終戦後まで、看護婦飯山百合子、坂口トシ子、深見イト、埼向レイ子、福島喜代子、

取違ソミ，外園トシエ，竹下スミ子，松元ヒナ，松元エミの諸嬢ならびに学生白坂健一郎，宮本利哉，円哲郎，岩井勇作，前田治人その他と起居を共にしながら診療を続けると共に，殆んど毎日のように，危険を冒して本院を訪れてわれわれの相談に応じてくれた。5月半ばごろ，新堂啓蔵庶務部長が懇望されて鹿，造船会社長に就任し，替って江口義照君を迎えた。しかし，これが後者にとって人生明暗の岐路だったかも知れない。すなわち，2カ月後の焼夷大爆撃で，ご自慢(?)の自宅待避壕内で直撃をうけて即死し，石田院長も加治木療養所長に赴任の前夜，そして赤崎女医までその運命を共にしたのである。これより先き，本土における敵機の来襲は日々に激烈さを加え，至るところ耳にするのは，ただ悲報ばかり。そんな或る日，敵機撃墜！とみんな思わず拍手をしたら，あにはからんや，それは味方機であった。そして，鴨池から味方機が慌しく低空で飛び立つと，きまってそのあとに空襲サイレンが高くなり渡った一実(？)に心細い極みである。それでも，或る晴れ渡った空(わたしたちは曇天ことに雨天を祈っていた)の日，珍らしく武岡の高射砲陣地が威勢よく唸りだした。みると，敵の1機が火を吹き，マッカになって落ちてきた一憲兵が1米兵を連れて病院に来たのはそれからまもないことであった。米兵は疲労しながらもスゴク興奮していて，頻りにアイスウォーターと連呼したので，水道水を飲ませて強心剤やリングル液を注射したら，間もなく元気をとり戻した。2～3日後，かれは憲兵にどこともなく連れ去られた(終戦直後，むこうのMPがやってきて，当時の状況をいろいろ尋ねた—これが占領軍との最初の接触である。)

さて，医専も7.14.には第3回生の入学式をどうやら終え，基礎医学の講義が純心校跡で，空襲の合間を縫って行なわれたが，2～3年生は，あい変らず病院に来てポリクリの名の下に，診療を実習するかたわら高野三喜雄・三宅久人両教授他の指揮で，爆撃の跡かたづけや各科の壕づくりに余念がなかった。

機銃掃射下の開腹術，焼け残った婦人科外来で，巨大卵巣嚢腫の手術を敢行したことがある。ところが，開腹直後グラマン4機が波状攻撃をしかけてきた。かん髪を入れず，わたしと田口助教授と看護婦は，いそぎ壕内にとび込んだ。敵機が去るのを待って再び手術にとり掛った。みれば腸管の全てが腫瘍と共に脱出しているので，急ぎ復納中にまたもや来襲，「ヒューヒュー」と13ミリは間断なく飛んでくる。逃げる暇なく手術台下にひれ伏し，田口君をみたら顔面蒼白，もう，これが今生の別れかと思ひ悲愴な決意をした—「わたしをどうして呉れるのか」と叫ぶ患者の断末間様の絶叫を，すまぬと合掌しつつ。2本の大木のお蔭でみんな助かって手術も無事(?)に終了したが，隣室には数十

発の弾痕がみられ、県庁は数百発のタマ痕で蜂の巣状。なお待避横穴壕では、  
「婦人科全滅」と噂していたそう。

**全市火焰の海、病院全滅** 昭.20.6.17.の真夜なか、「キーン」という金属音にかわって、百雷一時に轟く「グァー」という大爆音に、人々は飛びだした。B52の大編隊は、天地も炸裂せんばかりの爆音をたててわが物顔にわたし達の頭上を乱舞し、全市は阿鼻叫喚の焦熱地獄と化して真赤な火焰は天をこがした。—それは僅々2～3時間の出来事で、当市はその92%を焼失した。県立鹿児島病院！曾ては「九州一」と、その輪奐の美を誇った故田中院長苦心の跡も今やなし！医者という医者は全て焼けだされ、医療機関は完全にその機能をストップした。だが、わたし達には公医としての責務がある。なんとかして災民を救助しなければならない。そこで、強制疎開地の壕中に夜通し煙と戦ったわたしは、東の空がシラムのを待って上荒田→田上→原良→上之平と、余燼と時限そして倒れた電柱をさけながら、迂回して病院にたどりついた。ただ一つ、ポツンと焼け残った門柱の下に、雨のなかを全身ズブ濡れで呆然とたたずむモンペ姿の看護婦たちをみた瞬間、ただむじょうに涙が出てしようがなかった。急ぎ駆けつけた高安校長や学生たちを前にして、「1週間後にはここで再び会いましょう—きっとそれまでにわたしは診療場所を見付けます」と、言い残して早速自転車に焼けた市中をあちこちとかけずり廻った一途中に敵機がやって来たら、ピカピカ光る新調車を、焼けただれた石垣にかくしながら。幸いにも無傷の盲啞学校を見つけだした。でも軍の使用中だったので、大雨をついて新上橋の鉄橋をくぐること8回、ようやく関係各方面の了解をえた。「もう、いくら患者が来ても大丈夫！だがそれにしても、果して病院関係者は来てくれるだろうか」と、半信半疑で6.24.病院跡を尋ねたら、ああ嬉し！いたいた、みんな来ていてくれた—疑った自分が羞かしい。みんな揃って意気陽々(?)と盲啞学校にのり込んだ。

**空襲下の盲啞学校病院**、さっそく前記2教授や長野祐憲教授その他とあい回り、かねて永吉義雄薬剤士が常盤町の壕内に保管してくれていた薬を運び、森高夫助手他の医師と看護婦、そして生徒たちで、最小単位の病院は成り立った。そこで、生き残りの蛆だらけの火傷患者約10名を直ちに収容、ただし3名（2名は全身が焼けただれ、1名は6才位の男の子で黒ずんだ腸を転々と曳きずり廻って苦悶中）は、開店当日に死亡した。これらの屍体は、校庭に仮埋葬（市長の内諾済）して「正信謁」を唱えてやった。病院収容とはいうものの、実は穴壕の前に筵をしいて日光浴をさせながらの治療であり、空襲警報と共に

壕内に運び入れ、夜は校舎内に担送する程度のものであった。こんな毎日を繰り返しているうち、意外な障害に出くわした。それは、盲啞学校の先生方と看護婦や学生とのいざかいであり、とうとう数名の先生は原良の寓居に押しかけて、わたしをばりあげた。むりと思われる陳情も、そこは借家人のてまえ、黙って聞いていたそのつらさ。もしも甘い返答でもしようものなら、今度は病院側から苦情がでるといふ始末、全くその処置に悩んだのである。

幸い宮崎教授のいる重富分院は、わりに安泰のようにみえた。そして給与日には、きまって有村次郎・久永綱雄君らの小使連中は、吉野に病臥している牧新之助会計主任を戸板に乗せ、「今様新納武蔵守」として迎えたひとコマのみが、ユーモラスを醸しだしていた。

**入学式と授業停止** 以上と前後して学校側では、7.14.に純心校跡の講堂で、高安校長以下宮崎一郎、大森浅吉、鳥飼明らの諸教授と森田勝生徒監、黒田彦二大佐や遠矢泰蔵事務長らが、列席して第3回の入学式を行ったが、空襲がいよいよ苛酷さを増して病院側との連絡もと絶がえちで、学生の生命も脅かされる状態となったので7.20.ごろ、講義の中止を申しでて、採択されて学校は事実上無期閉鎖の形となった。

**機銃掃射下の会談と鹿駅の爆撃** 学校側も授業が停止され、病院側も一時小康をえたので、次の被爆にそなえ若干の手術器具を入手するため福岡への出張と、留守中の病院監理の依頼を兼ねて鴨池の学校に校長を訪れた。その際、応召中の縄田教授もい合わせて3者で会談中またしても、あのしつこいグラマン機の波状掃射をうけた。「ヒュー・ヒュー」、*「プス・プス」*、なんと小気味の悪かったことか（鹿大医報IV.3.参照）。出張が許されたので翌7.26.9時ごろ、わたしはなんなく乗車したが途中、川内と出水で火災の煙を吸い荒尾駅で車をおろされた。照りつける夏の炎天下、多数の爆弾穴をさけながら重い疎開荷物をもって田圃道を通りぬけ、まだ炎焼中の大牟田市役所を右にみて、線路伝いに銀水へと辿りついた。夕暮れをまち、無蓋貨車の荷物の上にしゃがみつき、トンネルを気にしながらようやく鳥飼駅に到着した。プラットホームで一夜をあかしたのち、やっとの思いで福岡に着いてみたら、いづこも同じ焼野が原、めざす器械屋もいまいずこ？やむなく津屋崎に一泊。帰心矢の如きも切符は入手難、駅長にすがりついて帰路につく。またしても上川内駅で降されて限の城駅までの徒歩連絡。その夜、わたしを蚊帳に寝せ、弁当まで作ってくれた薩摩びとの温情は、つよくわたしの心に刻みついた。さて、帰院してみてもズツとした。それは、わたしの出発した翌日しかも同時刻に起った鹿駅を中心にし

た大惨事（1屯爆弾4～5個投下）！一挙に2～3000人がこっぴ微塵にふっ飛んでいたのである。早速、滑川付近をみ廻ったら、なお臭気ふんぷんであった。げに生死は紙一重で、わからないものである。いずれにしても、病院に事務長の居ないことは総てに不便であった。そこで、その人選を県に申しでたが、ときが時だけに引き受けてがない。幸い推薦者があって7月も末のころ、両三度、磯部盛吉君を市役所に訪ねて岩切市長や米山恒治助役とも相談し、彼の就任に同意をえた。またしても、そこでグラマン機の掃射をうけ、市役所地下の大プールに飛びこんだーグラマン機とはよくよくの縁があるものだ。

**婦人科医の内科往診** 8月も近づくと、京都を除く各都市や港湾、とくに軍需工業地の殆んど全てが壊滅し尽され、もはや日本は「本土決戦」以外に施すべを知らないような状態となって、敵の上陸地点までがとり沙汰されだした。そこで、柘植文雄知事はそのために、まず吹上浜ついで志布志を視察してそのつど発熱した。そこで水間兼夫秘書は、おりからの雨をついてわたしを迎えにやってきた。あま漏りのするトタン葺のおんぼろ車で、官舎を10数回も往診したら解熱した。そのお蔭で、おいしい鶏肉にもありつけた。さて余談はさしおき、

**原子爆弾の投下と終戦の詔勅** 8月になって戦争もいよいよ大詰にきたようである。毎日みたり聞いたりするのは何れも祖国の惨害ばかり、とうとう「人類破滅の兵器」に見舞われたー8.6.広島は、ただ一発の „ピカドン” で壊滅し、何十万という人命が奪われた。その状報を臆気ながら知ったわれわれは、次の番はどこか？「死なばもろ共」と悲愴な決心を新たにしたが、できたら犠牲を最小限に止めたいと思った。そこで、離島出身者を除き、近郷の者をば帰省させ、各人に米3升を分ち与えて万一にそなえ、18名を次ぎの10名一森高夫助手と永吉薬剤員のほか、看護婦（生徒を含む）の小浜イエ、野間静子、神田トシ子、牧イセ、森ハツエ、小倉シズ子、松尾ケサミ、前田（浜田）ミサ子の諸嬢と山元次郎小使一に減らして「診療戦線」の縮小をはかった。ところが、8.9.の長崎原爆の被害状況が、広島のとときよりも一層迅速かつ正確にキャッチできたので、待避の横穴がより広くて深い原良町ーそこにはわたしたち3名の野郎もいる一に移住することにした。そこで、わたしは、手許にある食料や燃料その他の全てを投げだして、起居を共にしつつ毎日20名内外の患者を、昼夜の別なく襲いかかる敵機の下で診療した。原良移駐後4日の8.15.ついに戦争放棄の「詔勅」は下った！わたしたちは、両眼にいっぱいの涙をたたえ、お互いに腕を組合って輪をつくり、遙かに東方をふし拝み、齒をくいしばって玉音

に喰い入った。わたし達は助かった。／ “もう死ぬことはないんだ” と思ったとたん、なんとなく気抜けして、しばし呆然と立ちすくんだ。ところが夕闇がたちこめて夜も深まるにつれ、意外な恐怖がまたしてもわれわれに襲いかかった。それはいったい何なのか？

**流言蜚語と民衆の動揺** 占領軍はいつやってくるか？ それはどこの国の兵隊なのか？

そして、それにはつきものの畧奪や暴行がきつと起るに違いないと、疑心暗鬼は時間のたつにつれて高まってきた。そこでわたしは、折角これまで辛棒してくれたお嬢さん方に、 “もしも万一のことがあっては” と心配しだした。そこでわたしは、またしても病院（診療所）の移動を思いたち、一夜、ひと先ず虎頭までの偵察をと、米5升を自転車に縛りつけて出かけることにした。いるはいるわ。／ 国道筋は人と車の行列で、歩み疲れて路傍や車上に伏せた老幼男女の数は幾百千、淋しいどころか賑か過ぎるぐらいである。温泉場では、白衣の曾ての勇士たちが、 “今度はこちらの番だ” といって戦々競々の態たらく、まさしくここが流言飛語の家元と思えた。もはや道筋は安全と判ったので、知事に直接あって、われわれの「避難許可」を申しでた。ところが返答は意外にも、伊敷奥の仁風寮あたりにしてくれとのこと—それでは移りばえがしないと考えて—そのまま原良に止まることにした。間もなく連合軍は当地に進駐し、二中跡には翩翩と星条旗がひるがえり、軍政が敷かれだした。こうなると、さすがの「流言飛語」もどこえやらその姿を消し、民心は安定を取り戻しはじめた。疎開者や避難民たちがドシドシ復帰してきて、市内の随処にようやく再建の槌音が聞かれだした。しかしその反面、食糧難は日一日とその深刻さを増すばかり、 占領国からの援護物資も “焼石に水” のありさまで、 いわゆる「ヤミ」なるものが横行しはじめた。一方、診療所を訪れる患者は次第に増すばかりとなってきた。魚取りに盗んだダイナマイトを使って、腕のフツ飛んだ男がきて、縁側で上膊切断術をやったこともあった。

このような原良滞在は、終戦前後（8.11.～9.13.）の32日間だったが、上述のように、終戦を境に病院の職員は急に増し、それに、軍関係の医療器具と薬品がトラック2、3台で運ばれてくるし、消毒用アルコールもドラム罐20個（10個は基礎側）が手に入り志気も高揚(?)したので、親しくなった原良町民から名残りを惜まれつつ、再び盲啞学校へと帰っていった。

**B. 終戦後の苦難** 大戦後の苦難は、むしろ戦時中のそれを凌ぐものがあった。すなわち、生命の危険こそなかったが、敗戦によるもろもろの苦難たとえ

ば進駐軍関係や再度の病院全焼（戦災と類焼）の復興，ひいては学校自体の存亡の危機に直面したのである。そこで，一般的に戦後は，学校存続の悩みに終始したともいえよう。

**帰還後の盲啞学校時代** 輸送力がなかった（県にトラック貸与不能）ので残念であったが，応召中の浜島寅夫薬局員の斡旋もあって，小野にあった軍需衛生材料の相当量が配分されたので，当時流行した赤痢の流行にも甚だ役立った。とくに高野・三宅両教授は，井後吉久君らの学生と共に坂元町に診療所をおき，広く吉野方面にまでも診療の手を延べて，乏しい財源を補給してくれた。本院（盲啞学校）では教官も揃い，9.16.の枕崎大風の際にも殆んど欠勤者をみない程のハリキリをみせ，いち早く桜井之一・森良雄の両教授や前田道明・永田豊作の両助教授らの内・外科の合同講義が開始され，小児科・婦人科その他の授業も初まり，手術室では，全麻や局麻の下に開腹術が行なわれ，外地帰還婦人の人工妊娠中絶術も指令された。ところが10.23.突如，軍政官パーカー大尉が岩切市長を伴って来院し，医療状況を聴取した。本院は，医療要員にこそ欠かれないが，経済上の関係から，いま直ちに移転し難いことを伝えたが，これが市立病院開設の動機となった。これと前後して，二世のMPがやって来て，だしぬけに“森は居らぬか？”と尋問されてビックリした一森教授は谷山の往診先から直ちに巢鴨に収容された。そして，11.5.には正式に，外地引揚者の収容病院に指定され，越えて翌年の昭.21.1.4.には進駐軍医務官パーキンス中尉がやって来て，二中校舎となった元18部隊跡に「速刻移転」せよと命令した。そこには，ホンの3・5カ月前，母校から蟻のように運ばれた机や椅子が並べてある。いくら何でも，主のいない冬休みにこれらのものを撤去するに忍びえず，教育上の支障を説いて強く移転を拒んだ。このとき，白髪の老教育者（池田俊彦校長）の目には光るものがあり，“Mさん、よかった，よかった”と言ってわたしの手を握られた。そこで，命ぜられるままに高嶋屋デパート跡や公会堂跡，さては沖の村などを視て廻り，いずれも不適當な理由を縷々述べたのち，与えられたのが前記部隊の酒保跡（2階建1棟）であった。そこでここに内科系患者をば収容し，主として前田助教授が治療に当って努力を続けてくれた。

それには，津田義輝氏の好意で変圧器が手に入って電燈がつき，レ撮影も可能となったほか，永井龜彦先生のお蔭で山羊や豚も飼育できて，酒精パーティで大いに浩然の気(?)を發揮できた。さらに1.22.には，厚生省鹿児島引揚援護局の指定病院となり，洲崎小学校に第一収容所を開設した。その詳細は他の

人に割愛する。そして3.8.には、進駐軍より全国に魁けてペニシリン数百筒の無償支給をうけ、県医師会の協力をえて、いち早くその成績を全国医学会に発表できた。

**医専と付属病院の復興委員会** このようにして、医専の存在価値が実質的に認識され初め、3.15.には付属病院復興委員会が発足したので、わたしと磯部事務長は野村・平瀬両県議について上京し、上林山栄吉代議士の協力の下に関係各省を歴訪して病院の再建方を懇請した。その際、両県議は毎夜雷鳴（磯部君の軒）で睡眠を妨げられ、お気の毒にも恩が仇となった。これを皮切りに、父兄会を含む学校内はもちろん、県・民一致の一大猛運動が展開された。ところが、5.1.に改正した病院使用料の新規定は、専ら健保規定に準拠して収入増を狙ったに拘らず、健保料金の両3年間の据置きで、物価の暴騰に耐えずその結果は全く裏目にでた。そこで、院長であるわたしの責任問題にまで発展しようとした（詳細畧）。そして5.6.には、第4回入学式が戦後初めてわが家の講堂で行なわれ、そして運動会には、永野福岡商工局長のお蔭や妻の協力で白衣の天使の地上ダンスがみられた。さらに6.10.には、県の仮庁舎（一高女内）で医専復興委員会が開催され、中馬県会議長兼農業会長の発意もあって、原案（鴨池案）を斥けて旧病院跡に病院を急ぎ再建することに決まった。そこで県は8.27.に、一高女階下6教室の焼跡を修理して外来診療所を設けた。桜井・長野両教授以下内菌洋三・田中尚義両助教授その他がそこで診療したが、一高女父兄会の猛烈な反対に会って、僅か3週間でこの診療所は山下町の県庁別館（焼残りの鉄筋造）に移転するの止むなきに至った。因みに、外科系は病院本拠と共にいぜん盲啞学校に止まって、前記の教官員のほか中恒力助教授や竹内三郎、鳥丸真孝、益田寿君らが住込みで頑張ってくれた。かくして、学校も漸く整備の形態を整えたので、いよいよ大々的な寄附金募集へと乗り出した。

**第一回の寄附金募集** 教授会で検討した結果、各教授は地区別運動の責任者となり、助教授以下学生がその実行に当ることになった。

わたしは、当市と全域を随時応援することになり、市内ではとくに中馬議長の出馬を再三要請した。当時、高学年の学生とくに西山幹男、鮫島耕一郎、村山力君らが中心的推進者となり、辰元浩・宮本利哉の両君は、わたしのジープに同乗して県内および宮崎県内を飛び廻ってくれた。この際、県当局や県会方面は言わずもがな、広く医師会や各郡市町村のお世話になったが、とくに個人では中川喜次郎、楠元慶蔵、牧角最二、柿木珍穂、森節義、花牟礼美照、同武夫、鳥越巍、伊達珍香、前原則知、今村源一郎、土橋英夫、丸田美登、黒木

透，勝目等らの諸氏にはとくに物・心両面において多大の援助をうけた。お蔭で3百万円を超す新田が集まって，大いに病院の再建に役立った。

**医専の存亡と大学昇格** 終戦後いち早く文部省では，教育機関の整理・統合が企画され，わが医専もその一環としてA級（存続→大学）・B級（廃止）の何れかに決定される破目になった。まさに危急存亡の危機に際会したわけである。なにぶん，付属病院のない現況では，当然，後者に属すべき可能性が極めて濃厚であった。スワー大事！と学校の内外は正にテンヤ・ワンヤ。かん髪を入れず県会は，昭.21.10.3.に満場一致で医専の大学昇格を決議し，国立霧島病院を付属病院に当てるという想定の下に学内はもちろん，県の内外が一丸となって関係諸方面への一大猛運動を展開した。その結果，文部省は11.4.，大学の昇格に関する現地視察員として吉松信宝（阪大）・遠藤中節（岡大）の両教授を当地に派遣した。両教授は幸い知人でもあったし，審さに現地の実態を視察・調査して理解を深め，とくに重成格知事以下県民一致の熱意に感銘して帰京したようである。わたしは，これらの点からある程度の決論を占い，高安校長と共にひそかに『ハッピー・ニュース』を期待していた。しかし，父兄と学生たちは，なお必死で獅子奮迅の活動を続けてひたすら学校の助命に奔走し，多くの者は上京して各方面に懇願する傍ら，万一に備えて転校を計った者すらいたくらいである。

その甲斐あってか，昭.22.3.29.にはわが医専はA級に決定した。そこでわたし達は，狂喜して万歳，万歳をくり返した。そして5.6.の医専入学式に引きつぎ7.14.には，医大予科の第1回入学式が前途を祝福して厳粛ムードで行なわれ，そこがそのまま予科の教室に使われた。しかし，そこは僅か2年で占領軍の命により元の純心女学校に返還された。その間，病院側では，新憲法の施行された5.3.には，本年度より逐次教室や病棟その他を復旧することに決まり，起工式も挙げられたし，外地より帰還した佐藤八郎・内山八郎の両教授も来任し，仮屋住いとはいうものの，診療と教育に一段と活気を帯びてきた。わたしも一層忙しくなると，診療や講義のほか，建築・起債の手伝いや医療機具の購入などに東奔西走して遂に胆石症をひき起した。

**看護婦・保健婦・助産婦学校の誕生** わたしにとっては，進館軍相手がいぜんとして最も苦手であった。鯛生国一県衛生部長も余程これには悩まされていたらしく，上記起工式のあった夕方遅く，色目を変えてわたしを訪ね，ミス・バーカー大尉の命令—看護学校の設立—に協力してくれという。そこでその翌朝，相携えて彼女を市役所に訪ねたがご機嫌はなはだ斜め。依って，文教担当

官に助けを求めたが自分で当れという。ご婦人は商売相手の筈だが何分ともそこは異国の淑女、しかも軍人とあってはどうも勝手が違がう。だが、止むをでない「当って砕けろ」と勇を鼓して面会したが、彼女は窓に向ったままこちらを向かない。しかし、あらん限りの方法で誠意を披瀝して機嫌をとりなおし、看護学校の創設も約して辞去した。そこで、病院設計の一部を変更して敷地を割愛したのみか、将来を考慮して病院側の起債中より 320万を捻出して県側との計800万円で、臨床教授の了解の下に 3部を統合した彼女の所謂「ビッグ・スクール」なるものが生まれ、昭.25.5.に宮内（今村）節子（看護）、柿内愛子（保健）、田中エダ（助産）その他の教官が新制学校の教育にあたってくれ、その第1回入学式を昭.25.5.23.に挙行了た。のち昭.26.に、厚生省の補助金160万円をえて、学生寄宿舎を隣接の丘に建てたが、不幸にも昭.30.1.10.に炎上した。

**学校長（学長）の交替** 高安校長は、ここ約1カ年（昭.23.～24.）間、校内人事（院長兼務や教授任命）の上に多少の不手際はあったにしても、それをカバーするには余りにも大きい功績を残して本校を去った。すなわち、医療第4回の卒業式（昭.23.3.）につぐ予科の第2回入学式（昭.24.7.）も無事終わって「漸く学校の基礎もかたまり、適当な後任者もいることとて、ここらあたりが退職の潮時」といって、昭.24.3.31.に6年1カ月にわたる校長の職を去ることにした。そこには博士の面目の躍如さが窺える。すなわち、頭の回転の良さや現実的な政治性の一端が認められる。彼の盟友大平得三博士（元九大教授・新京大学長）がその推薦によって同年7.24.に第2代の校長兼学長となった。大平博士は、庄内藩ご殿医の家系で資性きわめて謹厳かつ正直で、責任感の強いクリスチャンであり禁酒会長でもある。そこで、高安博士とは極めて対蹠的であり、比較的政治性にかた煩雑な予算や人事—いわゆる事務的折衝を余り好まない学究肌の人であったようである。そこで、昭.24.4.1.学制改革によって県大学長兼医学部長に就任してからは、色々な面で誤解され蹉跌をみたようである。そこで、わたしの勧告を容れることもなく、在職わずか2年8カ月で、県大学長を梶島次郎工学部長に譲った。このようにその在任期間は、余り長くはなかったが、予防・細菌・衛生学の3教室の新設に努力した。一方、病院の建築は、予定通りに進歩して婦人科を除く各科教室と病棟ができあがり、順次入居していった。そして昭.27.には、最後の婦人科教室とその病棟もでき、治療を開始した2～3カ月後には、またしても、不慮の災害がわたし達を訪れた。

**病院の類焼と第2回募金運動** 院長交替後ほぼ4カ月、昭.27.4.24のま夜なか（午前0時15分）病院裏の民家より出火して、病院は約3時間で洗濯室と看護婦宿舎を除く全部を焼失した。乏しい県の財政の中から、その戦災復興に多額の財を注ぎ込んだにも拘らず何らそれには答ええず、たとえ類焼で保険金はあったにしても、むなしく県民多数の努力を水泡に帰せしめ、それにえ難い多くの図書や最新のレ装置などの総てを焼失したのである一実に残念至極である。わたしが通報で馳せつけた時は、もはや手の施すすべもなく、ただ啞然として火焰をみつめるばかり。そしてまたたく間に、火は七高のバラックに燃え移り城山の樟の大木にも火がついた。わたしは、見舞客の受けを前田瑞穂事務局長に依頼して県庁に、寺園勝志副知事を訪うた。そのとき彼から、『Mさん、残念でしょう』といわれ、また議場前で山中貞則県議から、『これからは、わたし達が復興してやるから安心しなさい』と慰められて、わたしは、『鹿児島に来てよかった、鹿児島の人はみなわたしの気持ちをよく汲みとってしてくれる』と、ただ感涙にむせぶのみであった。その翌日、早速帰庁した重成知事を焼跡に案内したが、むしように涙が出て説明するのに困った。「断腸の思い」とは、恐らくこの時の気持ちをいうのであろう。それから4日後に、仮看護婦宿舎を外来診療所にあてるために看護婦たちを、廃墟と化した鹿鉄官舎に移そうとして、縄田院長はわたしにその説得方を依頼した。わたしがその旨を伝えると、『先生までそんなことをいうのか？』とあって、泣く泣く承知してくれた。わたしは戦時中ことに戦災時のことを思い合わせて、蔭で一番苦勞する看護婦たちのいじらしさが、しみじみと身に沁み込んだ。そこで、何でも夫婦で彼女らを見舞ってやった。その他の詳細は省略するが、さし当って、知事の専決処分によって災害費 1,663万円の支出が決定し、鴨池分院を設置したほか、昭.27.9.には大学病院の年次復旧計画が決定し、鉄筋コンクリート4階建の建築が初められることになった。しかし、図書その他の研究器具を急ぎ整備するために、またまた寄附金募集を行なうことになり、学内の総力を結集してこれに当った。そのため、先回と全く同じことを繰り返して、諸教授をはじめ多くの人たちが県下をかけずり廻った一中村行充君の如きは3度も卒倒してまでも。わたしもそれに励まされて、谷山宗一・外西寿彦両君らと共に鹿・宮両県を巡回行脚した。かくして予定額にほぼ近い480万円余を集めて、県当局をいたく感動させた。

**学位審査権の獲得** われわれは、学位審査権の付与方を機会あるごとに請願してきたが、いよいよ昭.31.11.30.文部省視学委員の小池敬事（千葉大）・宇

山安夫（阪大・親戚）両教授の実態調査をうけ、昭.32.7.4.をもって、当医大（旧制）に対して学位審査権が付与され、本医大は 昭.35.3.31.まで存置して審査を行なうことになった。われらが待ち焦れていたものが遂にえられ、これで本学も名実共に大学の仲間には入れた—これからは他の大学の世話にならなくとも学位を与えられることになった。そして、昭.27.2.には、医科大学（旧制）とは別個に、医学部（新制）が県大に増設を認可された。これで、研究方面は一応完成された形になった。

**医学部の移転と国立移管** 敗戦によって、わが国の社会・経済は貧困のどん底に追いこまれ、国民の一人一人は殆んど餓死寸前の状態となった上に、占領政策の関係もあってか学制改革に依って一層それに拍車をかけられた。だが、それを打開するために新制大学での整備・統合の線が敷かれた。そこで当地方でも、県支援のもとに国大側では、既に旧高農を中心にして統合が行なわれていた。そこで、わが医学部も思い切って鴨池の校地を国大側に割譲して旧七高跡に医学部を移し、一挙に国立移管を達成して学部将来の発展を期し、併せて県民の負担軽減を図ることにした。ただしこの際、県は工学部の同時移管を希望していた。そこで、県大側はもちろん県当局は、再び総力を結集してその実現に邁進することになった。因みに、国立移管は何も本県だけに限らず、全国的なものであるから、文部省ことに大蔵省は強い難色を示してきた。そこで、先ずさしあたって、移管調査費の予算計上を目標に、昭.29.12.県当局ならびに県会と県大当事者が打揃って上京し、県選出代議士を督励して強く本省方面に当ると共に、政党方面に強くこれを要望した。とくに山中代議士（前県議）と、中払豊住・羽牟応輔両県議の大奮闘により翌年（昭.31.）度の予算に計上されて議会を通過した。われわれは「結納金」をえた気持ちで国立移管の決定を喜んだが、やがて国立移管調査費はあくまで調査費であって、何も移管決定を意味づけるものでないから別個の取扱いを要し、その有効期間は1年限りとの情報が入った。そこで翌 昭.30.12., この目的を完遂するために重成知事を先頭に、三ツ井卯三男総務部長、山口秀次担当課長らのほか、県大側から福田得志学長、それに医・工両学部長と前田事務局長、国大側からは中野豊事務局長が上京して「死物狂いの猛運動」を4日間も続けたが、本省側は「医学部だけならともかく、2学部の同時移管は前例なし」とのご託宣、そこでわたしは、咄嗟のばあいでは止むをえず、独断で「一蓮託生」を唱えて、枕を並べて討死にという不退転の覚悟をきめ、重成知事に一つの注文をつけた。ところが、知事はもうこうなつてはと思ったのか、快くこれを承諾してそれを実行してく

れた。それがよかったかどうか、その翌日に『快報』をえて2学部の国立移管が実現した一松村賢三文部大臣の絶対反対をも押し切って。めでたし、めでたしである。

かくしてわが医学部は、鹿児島大学の一翼として発展につぐ発展を続けている。そしてわたしの定年退職に先立って、(昭.33.11.)教授会は亀ヶ原に「全面移転」を決定し、未来の飛躍が約束されることになった。

〔むすび〕 以上は、わが医学部の生立ちから、国立移管までに起った種々雑多な苦難物語をかけ足で書き綴ったものであるが、要は、それにまつわる『蔭の人』たちの功績の片鱗を、のちの世代の人々に貽しておきたいという老姿心からでたものであるから、ここに洩れた幾千万人の方々には誠にあい濟まないと思う。いずれにしてもわが医学部は県民の「愛の結晶」であり、「和衷協力の賜物」であることには変わりはない。幸いわたし以外に多くの方がそれぞれの立場において執筆されることだから、これらに多くのことを割愛してペンを擱くことにする。

### 3. 県立鹿児島医学専門学校

#### 設立の経緯について

縄 田 千 郎

ウィリスによる鹿児島医学校から県立鹿児島医学専門学校の胎動期まで

明治2年ウイリアム・ウィリスが鹿児島医学校を創めてから、県立鹿児島病院に至る40余年間の、鹿児島の医学校乃至は市・県立病院の歴史は、波瀾に富んだものであった。この間の事情は鹿児島県史第4巻（昭和18年）および鹿児島県立大学医学部附属病院沿革史（昭和30年）等に明らかにされている。

この迂余曲折を経た歴史の中に、医師の養成と県下医療界の指導的中心となるべき医学校が必要であるという認識が、県民の世論となって脈々として流れ続けていることを読みとることができる。

明治21年3月地方税支弁による医学校の制度が廃止せられたため、県立鹿児島医学校も廃校となったが、なお、その後も医術開業試験の制度は大正の初め頃まで残されて続いたので、私塾教育により医学を修め、医術開業試験を受けて医師になる道が開かれていた。

註 医術開業試験の制度は明治9年1月12日内務省乙第5号をもって各府県に通達され、実施されたもので、明治維新開国後の西洋医学の普及に大きな貢献をなした制度であった。

そこで、折田静は山崎孝五郎らと謀って、医学講習所の設置を計画し、元鹿児島市立病院内科長を勤め当時は結核療養所海浜院の院長であった加藤好照、同じく市立病院の産婦人科部長秋元隆次郎らを説き、さらに市立病院長村田豊作、あるいは赤星弥藤次、前田甚一郎、中江佐八郎等の先輩医師の賛同協力を得て、明治35年4月現在の照国神社前の博物館のところにあった開成館において、医学講習所の開校式を挙げる事ができた。これが鹿児島医学協会である。

鹿児島医学協会は開校時生徒が60余名集り、それから明治43年頃までに、80余名の医師を社会に送り出した。これらの出身者の中には、次の者らがある。

鵜木信吉 鹿児島市西田町開業、昭和37年死亡。当学昭和25年卒業の鵜木信夫君の厳父に当る。

平川与七 加世田市万世にて開業，昭和38年頃死亡。嗣子松岡隆樹氏，加世田市小湊345 平川医院同業。

岩切 実 宮崎県えびの町水流362  
昭和43年5月現在83才病臥中。

折田 静 川内市向田町に開業，昭和35年死亡。  
鹿児島医学協会は大正初期医術開業試験の制度が終末を告げるに及び，閉鎖された。

（文献永徳緑峯，薩摩医学史，上巻79および165頁（昭和40年9月））

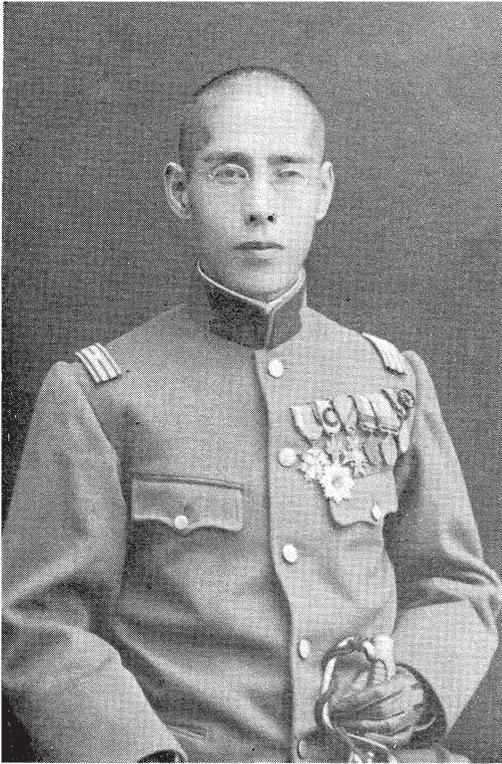
昭和17年12月11日文部省告示によって県立鹿児島医学専門学校の設立が認められたが，翌々日の13日の鹿児島日報紙上には，県医師会長羽根喜一の談として次のように報ぜられている。

「鹿児島医専設置の歴史は相当に古い，県立病院初代の田中苗太郎院長が，その設立当時（明治40年）なぜあのような壮大な建築をしたか，そこに深い意義が蔵されていた。それは鹿児島が南方医学の上に重要な地位にあったからだ。その時代から是非医専を設置する方針であった。」

鹿児島日報 昭和18年6月26日記事

征げよ 田中博士

県民医療の総元締，県立鹿児島病院入口に同病院再興の恩人，元院長医学博士田中苗太郎氏の銅像が医界有志の先人に依り建立されたのは大正5年4月であった。田中博士は京都の人，明治24年11月東京帝国大学医科大学を卒業し，陸軍三等軍医となり，大学院に入り，大学助手として専ら外科治療に当り，僅か32才で医学博士となった。その後，清国，独乙に，次いで南阿戦争見学に従ひ，英国を経て帰朝し，軍医学校教官となる。博士は当時未だ完成の域に進まなかった，我国医界のため，幾多の功績を重ね，明治39年4月勲4等功4級を授けられ，鹿児島市病院長となり，外科部を担任，同42年9月病気のため辞任するまで，僅か3年有余であったが，本県医界の進歩発達に貢献した処は枚挙に暇がない。加へて博士が学識，技術共に秀で，徳望があったことは，後人齊しくこれを認める処で，僅かの間に，よく県営再興に尽力し，今日では全国有数の県立病院となり，その基礎を築いている。我鹿児島にも県立医専の創立あり，同病院が早速医専の附属病院として役立つのも，一に40年前の博士の焔眼に負う処頗る多大なるを思う時，茲に我等は博士に対し絶対なる感謝の念を禁



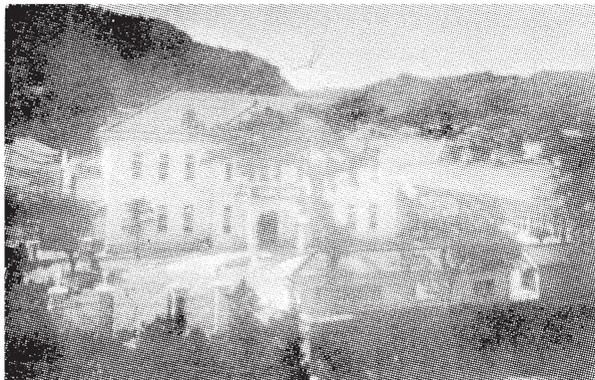
写真上  
県立鹿児島病院 初代病院長  
医学博士 田中苗太郎

ずる能はざるものである。決戦の年、博士の銅像も応召す。県下に医界の新体制陣容も成った。我等は田中医学博士の「壮」を膽に銘じて、飽くまで米英撃滅に突進するの一途あるのみを痛感する次第である。

この記事には田中博士の銅像の写真が入っている。

なお6月30日には鹿児島市庁に市内の供出される銅像を集め、壮行式が行われ、これらの銅像は、弾丸となり兵器となるため、〇〇へ向ったと記されている。

事実当時県立鹿児島病院の建築規模は地方都市の総合病



県立鹿児島病院 正面本館

院としては、稀れにみる宏壮なものであった。

註 羽根県医師会長は明治40年5月田中院長の下に、初代の県立鹿児島病院耳鼻咽喉科部長として赴任し来り、大正7年3月市内に開業、戦時中は県医師会長として重責を負って活躍中、不幸にして昭和20年6月敵の爆撃により全身火傷の後逝去した。

永年医学部父兄後援会長を勤めた高岡義は「鹿児島大学医学部父兄後援会の歩み」と題する論文の中に、県立鹿児島病院建設後「爾来40年間、鹿児島に医育機関はなかったのであるが、その再興の声は、すでに大正時代民間に起っていた。」と述べている。（鹿大医報1，138，1962.）

註 高岡博士は大正8年より鹿児島市山下町西病院（院長西盛之進博士）に勤務し、戦後照国町7番17号に高岡病院を開き、25年5月より医学部父兄後援会長に選ばれ、昭和42年5月8日病没まで勤め、本学医学部のため多大の功績を遺した。嗣子医学博士高岡真氏。

また、鮫島宗雅も次のように記述している。ウイリスの鹿児島医学校設立後「その影響を受けてか、医学を志して他郷に遊学する子弟が非常に多かった。鹿児島に医育機関を設けたいと云う希望は、大正時代から話題にのって居たのである。」（鹿大医報1，210，1963）

註 鮫島宗雅は大正10年長崎医専卒業後、本県衛生課に勤務、昭和8年西千石町11番17号に開業、後本学医学部父兄後援会の創設に参画し、多くの功績を遺した。嗣子本学23年卒業医学博士鮫島潤君。

以上述べたように、鹿児島医学協会の事情および羽根、高岡、鮫島らの説くところからみても、明治21年県立鹿児島医学校が廃止せられて後、鹿児島に医育機関を持ちたいという願望は、県民の心の中に脈々として、流れ続いたといえることができる。

このような切なる宿願も大正の末に至って、大きな障壁にぶつかった。それは、世の進展と共に、医学教育は大学程度の教育でなければならないとする政府の方針が定められ、各地の官立医学専門学校は医科大学に昇格されたことである。このことによって、鹿児島県民の医育機関設置の願望は、さらに一段と高い、手の届かないところに棚上げされた状況となった。

### 県会と県立鹿児島病院

現在の県議会は戦前は県会といわれていた。県会は毎年11月から12月にかけて、年1回だけ開かれるのが定めであった。その代り県会議員の中から選ばれた、参事会というのがあって、県政の年間のその時々具体的な細かい事項は、

この参事会に諮って執行された。県立鹿児島病院の経済は特別会計であって参事会の承認でことがすんだ。

昭和6年9月18日の柳条溝事件が発端となって、満洲事変が勃発した。昭和7年3月1日には五族協和の旗印の下に満洲国の建国宣言が行われた。軍隊の駐屯、満蒙開拓団等多くの青年が大陸に渡った。

昭和12年7月7日夜、蘆溝橋における日支両軍の衝突は支那事変に発展した。

日本内地では大陸の事態に対応して、挙国一致の体制が敷かれた。軍備増強、食糧増産、国民体位向上、人口増殖、保健管理、結核対策、無医村無医部落対策が叫ばれた。昭和13年4月1日国家総動員法が公布され、15年10月には大政翼賛会の結成があった。

このような時勢において、年々に医師の不足が切実な問題となってきた。保健婦の制度が創設せられ、産婆（今の助産婦）看護婦の増員が大きな問題となった。

昭和13年の鹿児島県通常県会は11月24日より約1カ月に亘って開会された。その議事録をみると、県民の医事衛生問題に関連した議事においては、国民の体位向上、教員の結核対策、看護婦補充等の問題には触れているけれども、この時は未だ県立鹿児島病院あるいは医学専門学校の設立については、一言の発言もない。

のみならず、12月22日の県会においては、「鹿児島県ニ文部省直轄高等工業学校ヲ設立セラレムコトヲ要望ス」という意見書を決議し、これを坂口県会議長の名において文部大臣荒木貞夫、大蔵大臣池田成彬に提出している。

このことは文部省において15年度に数個の高等工業学校（後には工業専門学校といった）を設置する計画があるという情報の聞き込みがあったことに基いたものである。

昭和14年鹿児島県臨時通常県会議事録において、はじめて医学専門学校設置の論議がみえている。

これは、この年昭和14年5月1日より、各国立医科大学に附属医学専門学校が附設されたことが、動機となったものであることは、否定できない。

通常県会は11月22日より開かれた。県立病院に対する県会の批判攻撃は毎度のことであった。

上林山栄吉議員は、「今日鹿児島県では医師は行きわたり、名医はたくさんいる。したがって、県立病院は創立当時の使命は失われてきたので、今後はむしろ、戦時社会政策に即応して、これを実費診療所とし、中産階級以下の県民

を診療の対称とすべきである」と主張した。(議事録200~201頁)

註 上林山の名医はたくさんいる………という意は、当時市内には西盛之進(内科)東条経治(外科)若原貞一(産婦人科)樋渡一夫(眼科)永山在徳(小児科)羽根喜一(耳鼻咽喉科)平野俊佐久(皮泌科)その他多数の開業名医があり、それらの名声と実力は当時の県立病院に優るとも劣るものではなかったことを指しているものである。

この時代は、ようやく社会保障、医療保障といった問題が論ぜられるようになっていた。しかも健康保険制度は極めて不備であった。大都市では低所得者のために、軽費診療のいわゆる実費診療所と称するものが、所々にできつつあった。

上林山のこの質問が契機となって、相良弘が質問に立ちあがった。相良の質問は実に正鵠を射たものであった。

相良議員は県病院については「上林山議員の意見は当を得ていない、むしろ県病院はその内容的に見たときに、本来の使命を果していない。内容が極めて貧弱で、その設備はなっていない。」と極めて鋭くその弱点を突いた。

これに対する山口政男衛生課長の場逃れの答弁を排して、相良議員はさらに質問を続けた。

「他ニ遅レヌダケノ設備ヲシテオルトイワレマシタガ、ムシロ私ハ不思議ニ思ヒマス、ソシテ又希望者ガアレバ(設備機械を)十分使ツテ頂キタイト仰イマシタガ、使ウトシテモ設備ガナイ、研究ノ場所ガナイ、使ヒタクテモ使ヘナイノデアリマス。シカシナガラ、コレハ特別会計ヲ預ツテオラレルトコロノ衛生課長サンデハ御尤モナ答弁デアリマス。私ハ知事サンニオ伺ヒシタイト思ヒマスガ、是非トモ一般ノ設備ニ……ソレゾレ設備ニ十分経費ヲカケラレマシタナラバ、コレガ実地場トカ(註：医師の実地修練の場の意か)或ハ鹿児島ノ私立又ハ県立医学校ノ端緒ヲ開クモノデハナイカト、コウ思ヒマス、ソシテ、モシ、ソコニ十人乃至三十人デモ一ツノ学校ガデキタナラバ、四・五年スル内ニハ国営……官立ノ医科大学ニ、コレヲ移管スルヤウナコトモアリ得ルノデハナイカト思ヒマス。コウシテ十年先、十五年先ニハ鹿児島県ニ医科大学ヲ誘致スルトイフ基礎トナルベク、県立病院、研究室、設備トイフモノヲ十分ニセラレル意志ハナイカドウカト云フコトヲ伺ヒタイノデアリマス。」

これに対して藤野恵知事は次のように答えている。

「現在(県立病院の)機能ノ發揮ノ上ニ甚ダモノ足ラヌモノガアルト云フ御意見ニ対シテハ私モイササカ、サヨウナ感じガナイデモゴザイマセン、(中

略) タダ将来コレヲ官立ノ医学校ニ導ク考ヘハナイカトノオ尋ネデゴザイマスガ、私ト致シマシテハ只今ハ、マダ左様ナ考ヘ方ハ持ツテオリマセン、……」と県当局の意中を明確に表明している。

この時医師であり県会議員であった者には、最上宏、野村政尚、緒方英吾、伊地知栄二、柳村雅亮らだったが、彼らはこの県会の会期中においては、この問題に関しては、誰も一言も発言していない。

(昭和14年<sup>臨時</sup>通常<sup>県</sup>会議事録209～213頁)

相良弘としては、心の奥底には医育機関を誘致したいという考へがあったにしても、以上の発言の内容からみると、自ら期するところがあったのではなく、むしろ上林山の発言を契機として、県立病院の内容に対する平素の不满を表明したに過ぎなかったものとみることができる。この時医家議員である者らは、突然のことで、背後の県医師会その他の世論を聞かないことには、うっかりした発言はできなかったのも尤もなことであろう。

しかしながら、この時の相良議員の発言はひとつの刺戟となった。医系議員らにとっては、医育機関誘致の問題に対する態度の決定を迫られることになった。

そして1年経って、翌15年の通常県会では、彼らは世論の結集に成功した結果、ここで、ひとつの大きな烽火を打ち上げている。

### 県会の医専設立建議案

昭和15年の通常県会は11月27日に開会された。

12月2日県会 最上宏議員は突然次のような爆弾的質問を發した。

「…………ソレカラ問題が大キイノデアリマスケレドモ、考ヘテオク必要ガアルカラ申上ゲマス。本県ニ医学専門学校或ハ医科大学ヲ設立スルト云フコトデアリマス。御承知ノ通り九州地方ニ於テ福岡ニ大学アリ又長崎ニ大学アリ、熊本ニモ医大ガアリ、久留米ニモ医学専門学校ガアリナガラ、コノ三州及ビ沖繩ニカケテ、コノ方面ニソノ教育機関ガナイノデアリマス。シカモ殊ニ藩政時代ヨリ明治維新ニカケテ、外人マデモ招聘致シテ、コノ医術ニ努メ、今日ソノ効果ノ大ナルモノガ非常ニ多イノデアリマス。殊ニ今日南方發展ノ日本ハ南進国策ノ上カラ云ツテモ、(註この時は未だ大東亞戦争は始っていない)南方ノ熱帯或ハ温帯ノ地方病ニ付テノ研究ガ、本県ト致シマシテ非常ニ都合好キ位置ニ在ルト思イマス。今日支那方面ヘ發展スル医師ノ不足ハ申上ゲル必要モアリマセヌガ、コウ云フ状態ニ在リマスルカラ、コレヲ県立トイタシマシテモ相当経

費ヲ要スルコトト思イマスケレドモ、久留米アタリノ私立医專ガ自給自足デヤツテ居ルコトヲ考ヘマスレバ、サホド困難デハナイト思ヒマス。又毎年本県会デ論議サレル県立病院利用ノ問題デアリマシテ、コレ又重大ノ意義ヲ持ツモノデアリマスガ、(中略)トニカク、コレハーツヤツテミヤウ、研究シテ見ヤウト云フオ考ヘハナイカ、オ尋ネシマス。」

阪野定一学務部長が答弁に立った。

「(前略)次ニ医学専門学校招致ニ関スル件、遺憾ナガラ問題ガ少々大キイノデアリマス。御意見御尤モト考ヘマスガ、コレニ対シテ、只今御答申上ゲル具体的方策ヲ持ツテオリマセヌ。御意見ハ十分承ツテオキタイト思ヒマス。」と答えた。

(昭和15年鹿児島県通常県会議事録249～250頁および253頁)

これから3日において、12月6日の県会においては、上林山議員は昨年同様県立病院を、公益性の立場から一般会計に移し、実費診療所にせよと論じ、医師柳村雅亮議員は、乳児死亡と結核療養所とについて、医師野村政尚議員は結核問題、フィラリヤ問題、県民の体位向上、人的資源拡充強化の問題を強調しているけれども、しかしながらこの日は誰れひとりとして、県立医学専門学校の設立を説いた者はなかった。

ところが、舞台裏でどのような折衝があったか、わからないが、前記の最上議員の発言から、僅か16日を経た12月18日の県会において、医師議員4名が提出者となって、医專設立の建議案を上提し、一気に全員賛成をもって採決に至っている。

### 建 議 案

#### 県立医学専門学校設立ニ関スル件

今ヤ東亜新秩序建設ニ当リ時局ノ進展ニ伴ヒ国ノ内外ヲ問ハズ医事衛生施設ノ完備充実ノ要ハ今更茲ニ多言ヲ要セズ然ルニ内地ニ於テスラ三千有余ノ無医村ヲ有シ我県下ニ於テモ尚數十ノ無医村部落ヲ現存ス而シテ今日大陸及南洋政策ノ実行ニ当リテハ医師ノ需用ハ殆ンド無制限ニシテ之ニ対シ今日ノ医師不足ハ現状ヲ以テシテハ夫レ如何トモスル能ハザルモノアリ仍チ政府ニ於テモ医師養成ノ急務ヲ痛感シ之ガ応急対策トシテ昨年度ヨリ現在ノ各官立医科大学内ニ医学専門部ヲ併設シ以テ其ノ需用ノ一部ヲ補充スベク努力シツツアリ案ズルニ我鹿児島県ハ嘗テ明治初年他ニ卒先シテ医育機関ヲ創設シテ医師養成ニ貢献シタル歴史ヲ有ス今ヤ支那ノ隣接地トシテ大陸政策上重要ナル地位ヲ占メ又南洋進出ノ重要基点トシテ重大ナル使命ヲ担任ス而シテ且又未ダ医育機関ナキ鹿、

宮、沖三県ノ中心地ニ位シ南方地方病研究ノ好適地タルト共ニ世界有数ノ温泉地帯トシテ温泉医学研究ノ最好適地タルヲ思フ時茲ニ医師ノ養成機関ヲ設立シ以テ医術研究ノ道場タラシムルコトハ当ニ時局下ノ最大急務中ノ急務ニシテ只ニ県下ノ医事衛生ニ対シ劃期的革新ヲ与フルノミナラズ大ハ、我国策遂行上ノ重大要素タル人的資源確保ノ根本解決ニ資シ得ルヲ確信スルモノナリ  
仍テ県当局ニ於テハ時局ノ重大性ト県内外ノ実情ニ鑑ミ速カニ茲ニ県立医学専門学校ヲ設立シ以テ新体制ノ実行ニ邁進サレンコトヲ要望スルモノナリ  
右建議ス

昭和十五年十二月十八日

提出者 最 上 宏  
柳 村 雅 亮  
伊地知 栄 二  
野 村 政 尚  
賛成者 中 馬 猪之吉  
外 三 十 七 名  
(議事録519~521頁)

最上宏が立って、提案理由の説明を行なっている。

その要旨は、目下重大なる時局に臨み、医専設立の最も好機会である。問題は経営上の困難にあるとの心配もあるが、私立の医専においても 150名くらいの生徒採用によって、自給自足の経営を円滑にやっているものがある。設立の経費についても相当の額を要すると思われるが、隣の宮崎県では、紀元2600年の記念事業として、80万円の大金を投じて八幡台の建設をやるくらいであるから、将来大いなる意義を有する医専設置について、本県として 100万円くらいの金を支出するのは難事ではない、というのである。(議事録521頁)

中馬副議長は賛成演説をしている。彼はこれについて県の財政面を心配しているようであるが、

「現在の県立病院の施設を附属病院に充当し、その他に大体設立費 100万円を要するであろう。これを4カ年継続事業として、その財源は県債に仰ぐことになる。その償還が問題であるが、生徒の入学料、授業料、実習費、試験料の徴収、それに附属病院からの剰余金があるから、経常費を支弁し、県債の償還をして、なお毎年10万円くらいは剰余金が出るであろう。」

と説明している。(議事録522頁)

県会においては、このような建議案を採決したけれども、当時の世論はどうであつたらうか。

県立鹿児島病院（院長石田堅三郎，副院長町野碩夫）および県衛生課（当時衛生課は警察部に従属し，課長は山口政男）に対しては，県会よりの折衝はあったであろうと思われるが，しかしながら，県立病院の内部一般においては，このようなことは，話題にもならなかった。

県医師会においては，医専設立には，むしろ反対意見が優勢であった。医師会の識者の間では，医学の研究教育の深遠広汎性を認識しているだけに，本県のような貧乏県が，よくその経済的負担に耐え得るであろうか，無理につくれば粗製乱造の医者ができるという意味において，強い反対態度をとっていた。当時東条経治，平安山長義らは指導的存在であった。

（鹿大医報4 .211, -213, 1966）

### 医専設立の世論の喚起

翌年の昭和16年3月2日には恒例により第38回県医学会および県医師聯盟大会が，第七高等学校造士館の講堂で開催された。このころ，県医学会は毎年1回開かれるものであり，毎回多数の会員の出題講演があった。この時の医師聯盟は，後に昭和27年8月に創設され，また39年8月に改組された鹿児島県医師連盟とは別個のものである。

このころ大政翼賛会の活動は，ようやく盛んになっていた。

学会は午前8時開会，先ず皇居遙拜，戦没将兵慰霊，傷病兵快癒，皇軍武運長久祈願の黙祷が行われ，その後佐々木武夫会長の開会の辞，内田実理事の庶務報告，永田利之理事の会計報告があつて，学会講演に入った。会員の講演は25題，特別講演は九大操担道教授の「異型肋膜炎に就いて」というのであった。参加者は350名。このような学会において，医師聯盟大会は学会講演の中間に挿入されて，午後1時より行われた。これは大政翼賛医界新体制の具体的な姿であった。

この医師聯盟大会において，医師であり県会議員である野村政尚が「県立医学専門学校設置について」と題して講演を行っている。講演内容については，記録がないので明かにすることはできないが，前年末の県会における建議案の採択のことがあり，医界新体制の時局色を織り込んでの，医師会内部の機運の醸成と，世論の盛り上りを目途したものであったことは十分に推定できる。

### 県当局の態度

昭和16年の1年間においては，県当局は県会の建議のことがあるので，医専設立について，政府に向つて種々と折衝したようである。このことは，この年の県会の記録に明らかである。

昭和16年11月18日通常県会が開会された。この県会において、緒方議員は「医学専門学校新設は昨年県会の要望であったが、如何になっているか」と質問した。これに対して、阪野定一学務部長は

「医学専門学校設置は文部省にも交渉したが、県で経営することは好まないということであった。」

と答弁している。

次いで11月25日の県会（第5日目）において、野村政尚議員は阪野学務部長に対して、

「県立医学専門学校の設置は、県で熱意が足りない。将来は単科大学に移管する我々の希望だから、県側と県医師会側および県会側から委員を出して、積極的に乗り出す意志はないか。」

と重ねて質問を發した。阪野学務部長は、これに答えて、

「県立医専の設置は、文部省の方針ではなく、医師の養成は大学でやるということだから、運動してもだめであると思う。」

と明確に答弁している。

さらに、12月4日、県会第13日目においては、最上宏議員は

「医学専門学校設置は文部省で許さぬ方針であるというが、許されている県もある。（註、公立としては無かった）本県は努力すれば実現すると思う。県当局に熱意が足りない。厚生省にも当県医学専門学校設置を強要して欲しい。」

これに対して、猪俣敬次郎警察部長は、「厚生省にはお願いしてある」と答えている。

（昭和16年12月5日鹿児島新聞）

以上のように、昭和16年県会では医家議員を中心にして、前後3回にわたり、医専設立について県執行部に激しく詰め寄っている。これに対して、県当局としては、昭和16年末の時点においては、文部省厚生省の意向によって、これを明確に拒否している。

### 医専設立の潜行運動

明けて昭和17年1月31日には、県学務部長阪野定一の後任として、加藤精三が着任した。

全年2月11日を期して地元紙、鹿児島新聞と鹿児島朝日新聞は合併し、鹿児島日報創刊号が発行された。これは挙国一致の体制の具体的事例のひとつである。支那事変は大東亜戦争に進展し、戦線は東アジア全域に拡大された。2月16日シンガポール陥落、3月6日バタビヤ占領。7月1日には日本医療団が発足し、対結核問題、大東亜共栄圏の医療新体制確立に取り組んだ。日本は軍官

民を挙げて総力戦に入り、満蒙、北支、中南支、印度支那、フィリッピン、ジャワ、ボルネオと、東亜全域に日本人は進出して行った。国民の保健衛生思想の普及徹底、人口政策、医療施設の拡充の必要が、国策の重要事項となり、政府も従来の医育方針を変更せざるを得なくなってきた。17年2月頃には、県立の医専設立も認めたらどうかという意見が、政府部内に動いてきた。

このような情勢の変化を鹿児島県当局は、いち早く察知することができた。ここ数年来の県会での医専誘致の論議があったことが県の立ち上りを早くしたことに役立っていることは明らかである。この活動は他県との関連があるので、全く隠密のうちに展開された。したがって、昭和17年の新聞紙上には、医専の問題は11月末までは、一行も書かれていない。

この間、実際事に当たったのは、県側では学務部長加藤精三であった。中央にあっては、後に終戦時内閣書記官長を勤めた現参議院議員迫水久常が当時企画院第一部第一課長の地位にあって、加藤に協力した。郷土の先輩であり医学界の有力者である大阪医科大学の佐多愛彦および大阪で開業の中山幹の両博士もしばしば上京して、この運動を援けた。また、元本県知事、当時文部省総局長藤野恵および同じく元本県知事、当時内務省国土局長新居新太郎が陰にあって斡旋の労を惜しまなかった。永井文部省専門学務局長が好意ある指導をなした。

この運動が成功して、県立鹿児島医学専門学校は、後に認可第一号となって、昭和18年にいよいよ開校することができるようになるのである。これらの人々の功績は本学史上特筆しなければならない。

昭和17年には、政府の行政簡素化の方針に沿って、県庁機構は大改革が行われた。すなわち、総務部、学務部等は廃止せられ、内政部一本にまとめられ、11月1日付をもって、県総務部長池田長吉は本県初代内政部長に任ぜられ、学務部長加藤精三は青森県経済部長に転出した。従来の加藤の所管事項は池田新内政部長に引継がれた。しかしながら、この時すでに加藤学務部長の手で医専設置問題は大体のお膳立てができあがっていたことが、その後の進展で明らかである。

註 加藤精三は、終戦後その郷里の山形県鶴岡市に帰り、鶴岡市長を勤め、昭和21年には衆議院議員に初当選し、その後連続当選、自治省政務次官を勤め、衆議院法務委員長として在職中昭和40年5月3日鶴岡市において心脳麻痺のため死亡した。享年64才。遺族は鶴岡市新土町甲の一、加藤精一郎氏。（鹿大医報4，213，1966）

昭和17年11月初め、大阪の佐多愛彦と中山幹は2人揃って展墓という触込みで鹿児島に帰ってきた。11月10日午後5時30分より鶴鳴館において、両氏の夫

歓迎会が催された。主催者は薄田知事を始め、坂口県会議長、久米市長、池畑商工会議所会頭、羽根県医師会長、児玉鹿児島日報社長など鹿児島市の名士を網羅している。

後から考えるとこの会は両氏の歓迎会という名目ではあるが、その顔ぶれからみても、医専設置工作の成功の、秘密の祝賀会であったことは明らかである。

(鹿児島日報昭和17年11月8日)

### 医専設立認可

12月11日夜、文部省永井専門学務局長より、知事宛に「貴県立医専本日認可相成リタリ」との電報が入った。(昭和17年12月11日文部省告示第643号)

12月13日の諸新聞は薄田知事の談話として、このニュースを大きく取扱っている。その要旨は、

時局の進展に伴ない強兵健民の国民医療、衛生保健指導の充実を期するため、医師の充足は当面の最も緊急な問題とされている。昭和15年県会に最上、柳村、伊地知、野村の4医師議員によって、医専設立の建議案が提出され採択されていたが、当時は政府の方針として官立医専の外は医専の設置は許可せぬとの方針により、この問題は一時立ち消えとなっていた。

昨年末より政府としても、医師充実に対する方策として、新たに官立医専設置の必要を認めた。本年2月になると官立のほか、県立医専も認めたらどうかという政府の内部的意向が動いてきた。県では当初女子医専を申請したが、次いで政府の方針の進展に即して、県はこれを男子医専に変更して申請し、文部厚生両省に諒解運動を進めた。

その後政府では南方の医師充足のため、官立医専を全国に何校かを設置する意向を進めてきたので、県は直ちに官立医専設置要望の申請を出した。

しかし、政府では官立医専は資財その他の事情から全国に1～2校に止めるということになったので、県は改めて県立男子医専として申請をしておいたのである。

このような経緯を経て、裏面運動をした結果、本県は他県に先駆して、第一号の医専設置に成功したのである。

(西日本新聞および鹿児島日報 昭和17年12月13日)

文部省では官立医専を青森、群馬、徳島の3県に設置を考えていたが、この年は結局群馬(前橋市)の1校に止まった。

翌19年には青森(弘前)徳島の官立のほか、各地に多数の公立医専が設立されたけれど、時すでに遅く、軍需生産、占領地経営のため国内の物資不足が深

刻となり、すべての物資の需給は統制下におかれ、教育研究設備の新規購入が非常に困難となっていた。当鹿児島は一年早く発足したために、学生実習用の顕微鏡だけでも120台も設置することができた。このようなことが、後に終戦後の医専のA級B級の区分による存廃の重大問題に繋つていったのである。

(鹿児島日報 昭和17年12月12,16, 17日)

12月11日文部省告示第643号をもって、県立鹿児島医学専門学校の設置の認可があったので、県においては翌18年4月より開校のため、着々と準備を進めて行った。

(鹿児島日報 昭17.12.17., 昭18.1.7., 同10.同16.)

鹿児島日報は昭和18年1月12日「日本の医学と鹿児島」と題する社説を掲げ、過去の鹿児島の医学教育を説き、今回の医専の設立を祝福し、将来大学への発展を望んでいる。

1月22日県立医専入学試験要項発表

1月26日全学則の発表があった。その要旨は

第一章 総 則

第一条 本校は専門学校令に依り国民医療に須要なる医育を施し兼て国民精神を涵養し人格の陶冶をなすを以て目的とす。

とあり、また第二章には修業年限4年、生徒定員480名とあり、また学科目及び教授時数の中には修身という科目が入っている。第七章には授業料1学年金120円、実習料一学年金50円とある。これは3学期に等分分納することになっている。

註 修業年限はその後5カ年と改められ第1期生から5カ年の修学であった。

1月27日の新聞では、26日付で池田県内政部長が校長事務取扱の内閣辞令が出たと報じている。

1月29日の新聞では、池田校長事務取扱の上京帰来談として、「内務省が公共用団体用資材を取扱っているが、医専の建築用資材、顕微鏡その他内部設備品は希望通り配給する。顕微鏡は教授用20台生徒用120台合計140台を内務省から製造元オリンパス会社と折衝の上発注して貰うことになった。また財源関係の寄附に対しては法人税免除の許可をとることができた。校長の人選は文部省で考えている。教授は校長と文部省とで初年度基礎医学教授5～6名を決定する」と報じている。

2月21日の新聞は医専初代校長として、文部省推薦により九大教授同別府温泉療養所長高安慎一博士が内定したと報じている。

(3月25日発令、文部省辞令)

### 医専設立の臨時県会

県は臨時県会を招集し、正式の手続を履んだ。

昭和18年2月22日午前10時臨時県会（県立医専新設とその予算および諸案件審議のため）

開会に先立ち議員および参与一同（参与は蓮田知事、池田内政、渡辺経済、上村警察三部長、八島官房長、片岡学務、山口衛生、後藤土木3課長および山口庶務主任属）10時10分照国神社に参集、同神社に参拝して大東亜戦必勝の祈願祭を執行した。

県会は最初坂口議長の挨拶があって、知事の予算説明に入った。

### 医専建設費

総 額 2,401,500円  
内訳 敷地購入費 412,800円 13,800坪  
(昭和17年度追加予算)  
建設費 1,988,700円

建設費の1,988,700円は昭和18年度より20年度までの3カ年継続事業として、これを執行する。

建設費財源としては、1,700,000円は地元ならびに篤志者の寄付に求め、残額の701,500円を県費負担とし、県債は起さないこととした。

特別会計設定：医専経費には特別会計を設け、従来の県立病院は医専の附属病院として経理する。

昭和18年度追加予算として学校費予算（初年度予算総額）

才出之部 1,528,781円  
内訳 臨時部 1,082,036円  
(内 建設費 1,058,825円)  
經常部 446,745円  
内 校 費 166,058円  
病院費 261,839円

才入之部 1,528,781円

内訳 經常部 395,956円  
内 学校収入 32,100円  
病院収入 358,300円 { 従来ノ収入予算額より  
13,000円増  
入院料並に診察料引上げ  
臨時部 1,132,825円

内 寄 附 金 1,048,825円

県費繰入 84,000円

校舎の敷地は県立農事試験場付近に13,800坪を選定している。（現在の教育学部付属中学校附近に相当）校舎建築は9月頃までに本館，解剖病理，医化学室を竣工せしめる予定。それまでの仮校舎としては照国神社前の県立産業奨励館をあて、この設備費6,845円（昭和17年度追加予算）とし、県立図書館の講堂を利用する。

また知事は「医専運営は特色あるものとしたい、人格の錬成、臨床医学および予防医学に重点を置き、実際の治療医たるとともに、疾病の予防指導者たらしめ、真に時局の要請する医師を養成し、県民の保健に資せんとするものである。」と説明している。

2月23日 臨時県会 第2日目

中馬猪之吉議員が賛成演説をしている。まず、これまでの苦勞について、知事以下関係当局に県民とともに感謝の意を表すると述べ、「その規模も将来の官立移管乃至大学昇格を見越して、当初の計画より拡大されたことはまことに当を得たことで、将来有終の美を済すよう努力されんことを希望する」と結んだ。

最上宏議員も立つて、「医専は西郷南州翁の敬天愛人の思想に立脚するものでなければならない。将来は官立移管乃至大学昇格の実現を希望する。」と述べた。

かくて満場一致で議案を可決し、10時32分閉会した。以上によって同年4月の新年度から県立鹿児島医学専門学校の開校の手続きが全部完了したのであった。  
(鹿児島日報、昭和18.2.21,22,23,24)

当初建設費財源の中で、170万円を地元ならびに篤志者の寄附に求めるとなっているが、昭和18年度の寄附金募集予定額は104万8千余円でその内訳の詳細は明らかでないが、大口の寄付者としては社団法人授産社（社長平島彦熊）がある。同社は昭和18年3月31日をもって解散し、その精算費の中から50万円を県に寄附したのであった。

また、昭和19年度の予算書を見ると、この中で、県の土地売払代金315,400余円が、医専建設費に充当されている。

(昭和18年鹿児島県通常県会議事録45頁20頁)

当時の県の財政は甚しく困難であり、県債を起すこともできなかったため、このようなやり繰りをしなければ、医専の設立はできなかったわけであった。

前橋市に新設せられた官立の群馬医学専門学校（群馬大学医学部の前身）は

同じく昭和18年4月開設、生徒収容人員480名、修業年限4カ年、設備費1,000,000円、経常費500,000円、病院費210,000円、敷地および校舎の一部資財は地元負担となっている。これは初年度の予算であったと思われるが、鹿児島医専の計画と大同小異であったといえる。（鹿児島日報、昭和17年12月16日）

### 鹿児島県授産社と医専

ここで社団法人鹿児島県授産社と県立鹿児島医学専門学校との関係について触れておかなければならない。

明治維新後、政府は殖産興業をもって国内政策の中心問題とした。一方離禄士族の失業対策事業に力を入れ、各種の勸業資金乃至士族授産金の交付貸付の制度をつくった。

鹿児島県では、織物授産場外20の事業所ができた。この中で4事業所が県庁直営であり、その中のひとつが鹿児島授産場であった。

時の岩村県令は内務、大蔵の両卿に稟議して、非常に有利な金を借りている。明治12年12月に金10万円の貸下げがあり、この資金によって、翌13年4月、山下町旧米蔵跡に鹿児島授産場を設立した。

この貸付金は、12年7月より15カ年据置き、27年5月末において一時に返納する。利息は最初の5カ年間は無利子とするが、6年目から満期まで年利3分とし、毎年5月末納付するという条件であった。

この授産場はその後下荒田町に移転された。鹿児島から武之橋を渡って、旧谷山街道を行くと、まもなく左手に民家の屋並みの跡切れたところがあって、その奥まったところに授産場があった。後に述べるように、この名称は幾度びか変更されたが、最初の「授産場」という名称と、下荒田のこの場所とが、人々の口にいい伝えられ、親しまれた。

県は最初この事業事務を鹿児島郡長に一任した。事業としては、筆、紙、傘、燐寸、櫛、竹細工、素緬、糸挽、織物、足袋の10品目の製作で、これによって757名の士族が仕事を得た。翌14年度は、織物、裁縫、製紙、製菓の4種目に縮小した。この年は就業者は311名であった。

明治17年ころには事業不振となり、同年6月には県庁直轄となり、鹿児島県授産場と改称された。

明治23年には会社組織に改められ、大島郡を除く県下の士族戸主全部をもって、鹿児島県共同授産会社を設けた。

さらに明治26年には私立鹿児島授産学校となり、同35年10月よりは社団法人鹿児島授産社となった。

昭和16年1月25日には、授産社は創立50周年の記念式典を盛大に祝ったが、

大東亜戦争の戦局はいよいよ苛烈となっていた。国家総動員法の下、国家統制は国民生活のあらゆる面に及び、勅令によって国民徴用令、価格等統制令、生活必需物資統制令等が次々に公布され、すべての資源は軍需に向けられ、国家予算の70%以上は軍事費となった。授産社は、このころ藍大島紬、軍手、軍足の製造をしていたが、人手不足となり、かつ、その実は授産社創立の趣旨である離縁士族の失業対策実業教育とは、およそ関連の薄いものとなっていた。

そこで、昭和18年1月20日社団法人鹿児島授産社は、社員総代および常議員の合同協議会を開き、社長平島彦熊から同社の解散を提議し、満場異議なくこれを可決した。

平島社長は社団法人鹿児島授産社解散の趣旨を次のように語っている。

「我社が授産事業の使命を受けて、ここに53年、7代の社長を経て、一意使命達成に努めてきたが、今日に至り一応その目的を遂げ得たる感がある。依って機構を改め何れかの方向へ発展的転換を期していたが、大東亜戦争下、種々困難な問題があるので、この際当社を解散することとし、その資産の処分については、創立の趣旨に従って、県の実業教育を援助する方面に投ずることが適切であるとの結論に到達した。恰も本県で医学専門学校設立の議が起っているので、その建設費の一部として、県に対し寄附をしたい。また国家非常時に際して、当社の今までの国恩に報ずるため、飛行機報国号を陸海軍にそれぞれ一機あて（一機につき金8万円也）を献納し、その他社会的方面に相応の奉仕をなし、従業員に対しては生活に支障のない程度の待遇を与えて、もって首尾よく解散をしたい。こうして国家社会に対して全福の御奉公を申し上げることが、四万六千社員の魂を永遠に生かす所以であると信じ、私を去って公に奉ずる建前から解散を執行し、一同の同意を得た次第である」と。

同社解散については社長を含む五名の実行委員を設けて実施した。この結果として、前記の通り、県立医専建設費として金50万円の寄附となった。

県の寄附募金予算額は1,048千余円であったから、この50万円は大金であった。これによって、県立医専は同年4月発足のときに、最も有利な出発をなすことができ、国内の物資欠乏の時に、基礎医学部門の必要資材を、いち早く入手することができたわけである。

このことがまた、戦後に起った、全国各地の医専のA級B級区分による存廃の危期に当って、鹿児島医専を有利な立場に展開させることのできた、ひとつの遠因ともなっているのである。さきの平島彦熊の理解ある措置は、この時もまた、鹿児島医専にとって、起死回生の力となったといえることができる。

註 平島彦熊は昭和22年9月19日死亡。その嗣子は鹿児島市稲荷町161番地、歯科医師、平島清雅氏。本学昭和28年卒業平島康博君は清雅氏の弟。

鹿児島県史 第4巻 283頁(昭和18年3月)

鹿児島のおいたち468および552頁(昭和30年5月)

鮫島宗雅, 鹿大医報 1, 211, (1963)

高岡義, 鹿大医報 1, 139, (1962)

昭和十八年鹿児島県通常県会議事録45～46頁

鹿児島日報, 昭和16年1月26日および昭和18年1月21日。

### 県立鹿児島医学専門学校の門出

昭和18年3月9日 鹿児島日報

鹿児島医専志願者 3,273名を突破, 2月28日締切, 他に61名の無試験入学を受付けている。募集定員の27.25倍に当る。

無試験入学志願者の採用決定は10日次の通り決定された。

大園 幸男(福山中)

坂本 信明(長崎県立五島中)

今吉 重孝(広島県立三中)

田代 仁男(熊本県立鹿本中)

片川 純慶(奈良県立五条中)

阿世知節夫(鹿児島県立種子島中)

昭18.3.12 県立産業奨励館は11日より山形屋百貨店内に移転開始。そのあとは新設の県立医専の仮校舎となる。

昭和18年3月18日には、「医専創立協議会」なるものが開かれている。その主催者、会の性格、出席者等は明らかでないが、この席で次のようなことが力説強調されたと伝えられている。

1. 県立医専の経営方針として、本県の地方事情に相応しい特色ある医学校たらしむべく計画している。

2. 校風の確立には、当初の1～2年が大切であるから、十分注意して独特の校風を醸成したい。

3. 真に時局と医道に徹したる医人たるの心情を確立せしむべく、師弟一体の家庭塾の建設を考え、人格本位の養成に重点を置きたい。その服装も国民服戦闘帽を制服とする。

4. 家庭塾や寮では、南洲翁遺訓、日本名医伝、聖賢遺訓その他の講義、輪読をなさしめて、しっかりした医人の人格陶冶に努めたい。

5. 医学の研鑽においては、本県の気候および特種病に対し、予防医学に力点をおいて行きたい。

その時代の世相を反映しておもしろく、また県民市民の熱意が伺われ、新しく誕生せんとする県立鹿児島医学専門学校が、いかに多くの期待をもって迎えられたかがよくわかる。(鹿児島日報昭和18年3月18日)

昭.18.3.26鹿児島日報

高 安 慎 一

補県立鹿児島医学専門学校長(勅任待遇) 25日付文部省辞令

高安校長語る。私の非常に感服しているのは医専をつくるということに就いて、県の方々が非常に御熱心であり、立派な医者をつくるという御気持であることである。私としても是非出色ある学校を作って国家の要請に答えたい。

昭18.4.10 九大助手宮崎一郎、熊医大助手大森浅吉 県立医専講師嘱託(県) 昭和18年4月21日 鹿児島日報

4月20日午前10時 県立鹿児島医学専門学校入学式

この日午前9時高安校長引卒のもとに、職員生徒一同照国神社に至り勸学祭を執行し、ついで護国神社に参拝し、神前に医療報国の決意を誓った。

定刻に来賓として薄田知事、池田内政部長、八島官房長、片岡学務課長、坂口県会議長、伊地知協会議長(註 前記の医専創立協議会長ではなからうか?)、指宿少将、岩月、平瀬両県会議員、池畑商工会議所会頭(註 商工会議所会頭を招待する意味は創立財源を大半寄附金に依存した関係であろうか?) 羽根県医師会長、小牧薬剤師会長等出席。

庵跡主事の司会で国民儀礼の後、野口書記長(註 医専事務官?) 開会式を宣す。

国歌斉唱、校長勅語奉読、大東亜戦争完遂の祈念をなし、入学生徒の氏名点呼を終り。校長厳かに入学許可を宣告す。高安校長は次いで、医学専門学校設立の趣旨と本校の特色とを述べ、今日の感激を忘れず修学に勉励せよと告辞す。

次に知事の訓辞があり、生徒総代坂本信明君宣誓、坂口県会議長祝辞があり、野口書記長閉会を宣す、時に午前11時。

午後1時より、全職員、生徒 および 父兄 と懇談会を開き、午後3時散会した。

昭和18年4月22日付 薄田知事は警視総監へ転出

23日付 柴山博 本県知事発令

昭18. 5. 14 関門海底鉄道第2トンネル工事開始(複線化)(19年始より開通)

昭18. 5. 21 山本五十六聯合艦隊司令長官戦死(6月6日国葬)

昭18. 8. 22 島崎藤村逝く、脳溢血、72才大磯にて。

昭18. 9. 20 七高繰上げ卒業(第41回卒業式)

昭18.10.27 午前0時中野正剛氏自殺(福岡県第一区選出衆議院議員)

昭18.11.22 県会始、県明年度予算総額26,682,800余円(18年度より6,127,88余円増)

昭18.11.23 鹿児島日報

19年度分県立医専予算(前年よりの継続事業)

才出部 1,093,803円

内訳 経常部 528,042円

臨時部 565,761円

その他特別会計補充費 476,100余円は主として医専設置に伴ふ経常費並に臨時費の学校建設費に対する支出額である。

なお、県立病院附属温泉治療研究所を独立させた。

才入の部

医専建設費充当のため土地売払代315,100余円を計上(臨時部の中)

{なお 昭19年度県の全体の予算は  
26,682,847円 内経常部 17,832,672円  
臨時部 8,851,715円}

12月1日県会6日目の上林山議員の質問に対し池田内政部長の答:医専病院の拡充、部長副部長の陣容を強化する。

医療資材の入手が困難であるが、十分に努力する。

病院は2階建に増改築し、なお将来は第2病院をも計画する。

註 病院外来の2階建の増改築は縄田が原案を設計し、県建築課で設計が出来上がったが結局は手を付けることができなかった。

12月2日県会最終日

第一部委員会(内政部関係及特別会計担当)の要聖事項

1. 県は万難を排して、医学専門学校の定員の増加を計られたし。

(註 これは職員、ことに助教授、助手の定員を指すものか?)

2.~4.略

5. 県内において必要量の医薬品は、これを県において、確保されんことを望む。

註 以上のことを以ってしても、わかるように昭和18年後半よりは、医学校の研究、教育、診療の資材が極度に入手困難になってきたことがわかる。

昭和18年12月11日鹿児島日報（夕刊）

医専設立認可満1周年校旗奉戴式及記念学術講演

11日創立一周年記念式典が挙行された。この日午前7時霧島神宮に於て高安校長、森田生徒主事、野口書記及び生徒旗手参列の下に、厳かなる新制定の校旗入魂祭を執行した。終って直ちに帰校。

午前10時半から同校講堂に於て（註 現存する石造り博物館と思われる）創立一周年記念式を挙行した。来賓、七高造土館長代理川出麻須美教授、高農校長代理西力造教授、師範学校長代理田辺長助女子部長（註同年4月1日より県立男女両師範学校は学制改革により官立に昇格、統合された。校長結城権兵衛。男子部長有馬純次、女子部長田辺長助。開校式典は6月6日に行われた）県より池田内政部長、片岡学務課長、山口衛生課長、其他羽根県医師会長、佐々木武夫県医師会鹿児島市支部長等出席、職員生徒一同着席の後。

式は先ず、国民儀礼の後、国歌奉唱、勅語奉読、高安校長式辞、知事告辞（内政部長代読）、生徒総代の宣誓があつて、一同記念撮影をなし、正午、同校講堂にて、来賓職員生徒一緒になごやかな会食を行ひ、同校の発展を祝福した。

尚午後2時から県立図書館講堂に於て一周年記念学術講演会を公開したが、講演は次の通り。

1. 支那におけるマラリヤ浸淫状況 生徒坂本信明
2. 満洲地方病特に克山病とカシンベック氏病に就て 生徒宮本利哉
3. 南方の結核に就て 生徒小島敏郎
4. 今秋当内科にて経験せる腸チフスの臨床的研究 桜井教授
5. 骨格筋の収縮機構 杉本教授
6. 深部療法の基本的概念 町野教授
7. 薩摩近世医学の祖。英医ウイルスについて 高安校長

尚同校は開校日尚浅きも高安校長を中心として、特色ある教育方針の下に厳正なる学風を樹立しつつあり、又校舎も本年度内には第一期工事を竣成し、明春新学期から新校舎に移転の予定である。

昭和18年12月1日 学徒出陣

徴兵猶予停止 学徒兵入営、入団

昭和20年4月、第3回生の入学を迎えたときは戦争は破局に向っていた。

（終）

## 開校当時の思い出

九州大学医学部教授 宮崎一郎

2年と3カ月にわたる同仁会蕪湖診療防疫班の仕事から解放され、九大に帰ってきたのが昭和17年の秋。わたしは、中支で得た材料を整理していた。ある日のこと、下田医学部長によばれ、「青島の同仁会から、君に来てほしい、とやってきたが、どうするかね」との御質問。「やっとなり帰国したばかりですから」とおことわりして、一安心していると、今度は、板垣先生がこられて、「来年の四月から鹿児島医学専門学校を開くことになったが、君も一しょに来てくれませんか」とのおさそいである。鹿児島は小学校時代、女子師範の付属に通った、なつかしい土地、わたしの研究にも好適な所と考えたので、これは、かんたんに、お引きうけしてしまった。しばらくたってから、また板垣先生がこられ、「僕は急にジャカルタの大学にゆかねばならなくなったが、君もきてくれないだろうか」と、重ねてのおさそい。こんどはお断りして、わたしは鹿児島行を改めて決意した。

いよいよ、18年3月、わたしは、はりきって、鹿児島県の土をふんだ。このとき、初代校長高安光生のもとに集まった基礎医学の教授連は、九大から石原（病理）、鳥飼（生化学）、宮崎（予防医学）、熊大から大森（解剖）、小島（薬理）、長大から柴原（細菌）、慈大から杉本（生理）の諸兄。兼任の杉本教授を除けば、他はみんな30代の血気さかんな連中である。わたしが最年長で、36才になろうとしていた。いずれも若くはあり、いい学校を作ろうと、はりきっていたので、なかなかハナイキも荒い。よく、高安先生から「君、おこっちゃあ、損だよ」と、たしなめられたものである。最初の入学試験も無事おわり、優秀な諸君が、全国から集まってきた。第一回生という使命感にあふれ、皆、はりきっていた。

照国神社と県立図書館にはさまれた一画で、前途の発展を祈りつつ開校されたが、その入学式当日から、一もんちゃくが起った。それは角帽問題である。わが校の制服は、カーキ色に戦闘帽、ときめられていたのであるが、角帽にあこがれてきた若人には、それが不服であつたらしい。結局、反対意見が通ら

ず、この問題は、その後も、しばらく尾をひいていた。

わたしの担当は「予防医学講座」。他にあまりない名前である。範囲は広く、はじめての講義ではあり、毎日毎日準備におわれていた。中支みやげのハナヒゲを生やし、何でも自分で研究したような顔をして講義していたが、今から思えば、汗顔の至りである。しかし、中支で得た貴重な体験が、わたしに、かなりの自信を与えていた。教室員は、助手一人（新山君）と研究補助員二人（村岡、郡山両嬢）、それに、鮫島、前田、木村、西野など、研究のすきな生徒諸君が、いつも来ていたので、結構にぎやかで、毎日が楽しかった。

昭和17年頃から、日本にもデング熱が侵入し、九州から本州にも飛火して、大きな話題になっていたが、鹿児島市もその例にもれず、やがて患者が多発しはじめた。そこで、わたしは最初の仕事として、蚊の研究を始めた。昼はボーフラ採集、夜は蚊とり。さすが鹿児島は熱帯に近く、種類も豊富で、非常に楽しかったが、どこかで、有毒のヒトスジシマカにやられたらしく、遂に、わたし自身がデング熱にかかってしまった。定型的に発症して、かなり苦しかったが、鹿児島にきたおかげで、得がたい体験をした。その後、今日まで、たびたび熱帯に出かけ、蚊にもさされているが、一度も、かからない。

その頃、黄熱の有名な伝播者であるネッタ イ シ マカが天草の牛深でみつかり、新しい問題を提起した。文部省に特別研究班ができ、わたしも、その一員として、鹿児島県内をさがしまわった。場所がら、てっきり、おるものと思っていたが、ついにみつからず、結局、牛深以外には存在しないことが明らかにされて、一同安心はしたものの、わたし自身は、いささか、がっかりした記憶がある。

医用動物として重要なネズミも、当時、絶好の研究材料であった。まず、市内に黒色のドブネズミ、すなわちクロドブネズミが多いのに驚き、ついで、ベスト伝播上、ケオプスネズミノミについて重要なヨーロッパネズミノミが、市内に圧倒的に多いことをみつけ、昔から、市内に2週間熱（発疹熱）の多い事実と結びつけた。ネズミの内部寄生虫も、日本一の豊富さで、ことに熱帯種が、かなり侵入していることを知り、さすがは鹿児島と感心したものである。熱帯に広く分布し、人体にもしばしば感染する。マダガスカル条虫を、日本で初めてみつけたのも、この頃であった。

各教室とも、それぞれに研究が進むと、おたがいに発表する場をもちたくなる。そして、第一回の鹿医専集談会を開いたのが、一年後の昭和19年5月29日であった。ひきつづき、第二回を6月27日、第三回を7月27日、第四回を9月

28日、第五回を12月11日に開いて、臨床家の出席も次第にふえてきた。こうして、一同はりきって研究と教育に精進したことは、もちろんであるが、また機械、器具、書籍の整備にも、大変な苦勞をした。昼食後、一同つれだって町をぶらつき、店を一軒一軒のぞいて、少しでも研究に利用できそうなものは、金魚鉢でも、菓子入れでも、手当たり次第に買い集めたものである。専門の洋書は、主として福岡の古本屋を利用したが、金子先生の蔵書を沢山ほりあてて、得意になっていた。家具類も手頃なのがないので、いささか旧式ではあったが、がっちりした応接室用のテーブルと椅子、それに寝台まで、親戚からもらいうけ、わたしの在任中、たえず愛用していた。それらは、なお健在で、25周年を迎えた今日、相かわらず、鹿大のお役に立っているときいて、非常にうれしい。

とにかく、開校後の2年位は平和な毎日であったが、昭和20年にはいと、鹿児島のも、さわがしくなってきた。そして、3月の半ば頃、グラマン機によって、初めての空襲をうけたのであるが、それ以後、鹿児島市は急速に破壊されていった。初空襲から2、3日して、こんどは、わたしに赤紙がきた。開始された空襲を気にしながら、万才に送られて中之平の我が家を出発したが、行先は熊本である。そして、3月20日、小雨ふる中を、西部第16部隊に、上等兵として入隊した。25日の間、シラミとナンキンムシ、その上、二つ星の古兵に悩まされながら軍医予備員の教育をうけ、散りはじめた藤崎台のサクラを惜しみつつ、4月14日の朝、衛生軍曹になって除隊した。大いそぎで鹿児島に戻ってみると、中之平は焼野が原。わたしの家は、生徒諸君の献身的な応援をえて、上之平に移されていた。初空襲は鴨池の飛行場だけですが、二回目は市街地がおそわれ、シンカン橋付近の防空壕が爆撃されて、大勢の人が生き埋めになったそうである。わたしの家内も、この日、外出中に空襲をうけ、一度は、この防空壕に入ってはみたものの、中之平に残しておいた子供らが心配でたまらず、かけ出したおかげで、あやうく、命拾いをしたのであった。

上之平の家を修理し、やっと住めるようにした途端、4月21日、朝から大空襲をうけた。この日ののは、大型爆弾に時限爆弾をまぜた、ジュウタン爆撃である。わが家は至近弾をうけて、無残な姿に変わってしまった。これで、上之平一帯は完全にやられ、住む所もない。やむなく、身廻り品だけ両手にさげ、家内は子供を背おって、トボトボと薬師町に向った。途中は見渡すかぎり焼野原、あちらこちらで時限爆弾が破裂する。いつ、足元で爆発するかも知れず、いつ、また敵機におそわれるかも知れず、薬師町につくまでは、全く、生きた

心地はしなかった。これ以上、家族がいては危険なので、翌22日、熊本に疎開させ、わたし一人、山の中腹にある校舎（旧純心高女）で自炊生活を始めた。そして、昭和23年2月5日、鹿児島を去るまで、この山腹で、仙人に近い生活をつづけたのである。

空襲の間をぬって、講義が行なわれていたが、それも警報発令で、しばしば中断された。ついに、全面的に中止となり、それだけ、研究の時間はふえたが、これも、思うようにはできない。敵機はほとんど毎日のように来襲する。如何にして空襲をさけるか、どうやって生命を保つか、これだけに専念していたようなものである。それでも、せっせと原稿をかいて東京に送っていたが、ほとんど、空襲で焼かれてしまった。これでは、研究しても、結果を後世に残すことができない。わたしたちも、何時やられるかわからない。ぜひ、学校の業績集として残そうではないか、ということに決まり、わたしが、この大役を仰せつかった。ところが、市内の印刷所は全滅である。そこで、熊本市まで出かけたが、印刷能力は、ここにもなかった。やむなく、トウ写版でがまんすることになり、やっと、でき上がったのが「鹿児島医学専門学校学術報告、第1号」であった。わたしの編輯後記が昭和20年7月16日、発行が20年8月1日と記されている。でき上がったのはいいが、今度は輸送が思うようにゆかない。

8月15日、わたしは、努力の結晶をうけとるべく、熊本へ向った。長かった戦争の終結を知ったのは、その車中である。夕方、熊本についてみると、電燈が、かがやき、久しぶりに、あかるい。晴れやかな気分になって親戚についてみると、付近は大きすぎである。中国兵が上陸してくるから、女子供は山に逃げるよう、指令がでたという。馬鹿なデマにのるな、といって、わたしの関係者だけは家におらせたのであるが、まことに、ナンセンスな幕切れであった。翌日、わたしは大切な報告書をリュックに一杯つめて、熊本駅についた。ところが、鹿児島に帰る切符が、どうしても入手できない。ままよ、と線路に沿って歩きだしたのが、午後4時すぎ。裸の肩にいくいこむリュックに苦労しながら、10里の道を夜通し歩きつづけ、翌朝6時、ヘトヘトになって、八代の家にたどりついた。そこからは切符が手に入り、無事、鹿児島にもちかえたのであるが、大任を果した喜びで、気分はきわめて爽快であった。こうして、第1号は、新しい日本の発足と同時に生まれたが、つづいて、第2号を21年8月に、第3号を22年12月に発行することができた。第2号からは本印刷となり、3号には英文抄録もつけて、ようやく、学術誌としての形をととのえた。しかし、鹿児島では、まだ印刷能力不充分なため、二つとも、熊本でせざるをえな

かった。これら貴重な報告書は、一部ずつ、わたしの手元にも残っている。久しぶりに読んでみると、当時、労苦をともにした人々の顔が、つぎつぎに浮んでくる。25年という年月の間に、物故された方も少なくない。同僚では、最近亡くなった杉本教授、戦争中、わたしと一緒に戦禍をうけつづけた石原教授、爆弾のぎせいになられた柴原教授、第1回生では、秀才のほまれ高かった今吉君、柔道とダンスのうまかった荒武君、貴公子然としていた是枝君……。これらの諸兄とは、もはや当時を語り合えないと思うと、まことに残念である。物故者に対し、心から御冥福を祈るとともに、わたしの愛する鹿大医学部が、ますます発展されんことを祈念して、筆をおくことにしよう。

(昭.43. 3.19記)

# 第九章 教室 史



# 基礎医学教室

## 第一解剖学教室

### 1. 教室の変遷

昭和18年3月31日鹿児島医学専門学校校長高安慎一博士より熊本医科大学助手講師大森浅吉は山下町の同校仮校舎に呼出しを受け、教授予定者であることを知らされ、開校準備に協力するよう申し渡された。同年4月8日付で県立鹿児島医学専門学校講師を嘱託され、解剖学教室開設準備にあたったが、4月20日第一回の入学式が挙行され、同日付で教授に任命された。なお、同日付で熊本医大小児科学教室副手宮村博臣が助手に任命された。翌21日ただちに授業が開始されたが、この鹿児島医専の初講義は大森教授の解剖学の講義であった。この日より解剖学教室は実質的な発足をみたわけである。

なお、当時の教室員は宮村助手と古閑臻研究補助員の二人であった。また同時に開設された基礎医学教室は予防医学教室（宮崎一郎教授）と医化学教室（鳥飼明講師，村橋善高助教授）ならびに生理学教室（下川辺舜一助教授）の三教室のみであった。

かくして教室もひとまず発足したが、5月にはいと宮村助手は応召、早々に教官の欠員がでることになった。そこで鹿児島通信診療所田中尚義所長に非常勤講師を依嘱して欠を補い、ともかく講義の他、第一学期には骨学実習、第二学期には組織学実習を、熊本医大から貸与を受けた標本をもとに実施することができた、しかし第三学期の系統解剖実習は設備不足の為実施できなかった。

昭和18年10月には宮村助手の後任として熊本医専卒業の実吉堯が来任し、あけて昭和19年3月下旬にはかねてから物色中の助教授として熊本医大解剖学教室研究員小林常男が来任し、ひとまず教室の陣容も整ったが、小林助教授は1ヶ月後の5月、また実吉助手は9月に、いずれも召集を受け、教官の不足を再びかこつこととなった。

このように、この時期に於いては教官の整備は困難であったが、施設の整備もまた困難であった。

即ち、開校より19年6月までの一年余は新校舎の建設が進まず、したがって

屍室，解剖学実習室の設備はまったくなかった。そのため生徒の系統解剖実習は実施できなかったが，19年6月に新築中の鴨池本校舎の第一期工事として解剖学教室関係の建物がようやくできあがったので，ただちに熊本医大佐々木宗一教授の好意により，25体の成人屍の移管を受け，鉄道輸送によって新校舎屍室に収め，夏休みに入って第一回生（当時二年生）に，明けて20年1月には第二回生（一年生）に系統解剖の実習を行うことができた。しかし屍体蒐集の見通しがまだつかない状態のため，少数屍を提供して行なうより術はなく，10人に1体の実習であった。

昭和20年3月になると敵機の鴨池航空隊爆撃があり，まもなく市街地が爆撃されるにいたり，実習，講義はもちろん研究も落着いてできない状態であった。このような情勢と受験者の多くが学徒動員中であったことから，昭和20年度の入学試験は著しく遅れ，そのため入学式は新学期に入っても施行できなかった。この様な情勢のうちに，6月17日夜となり，鹿児島市は広範に亘って焼夷弾爆撃を受け，灰燼に帰した。職員，学生の住居を損失する者が多く，この爆弾によって教室の入部（せき）補助員は不幸にも若くして故人となった。このため医専校舎は焼失をまぬがれたものの，学校は自然休校の状態にならざるを得なくなった。職員，生徒の今後の住居の問題が最も心配され，高安校長は寄宿舎の開設を発案し，唐湊温泉を借りて特に新入生のための寄宿舎とし，小島教授を舎監として入寮希望者が受入れられた。このような措置によりともかく7月14日になって，ようやく入学式が挙行され，その翌日より授業が開始されたものの，連日，数回にわたる警戒警報，空襲警報の発令で，授業の継続は極めて困難で，危険なものがあつた。まもなく7月27日には鹿児島駅一帯の被爆により，多数の死傷者があつた。これがきっかけとなって，この様な状態では授業の継続は危険であるとの見通しから，校長はかねての予定を繰上げ，8月1日より休暇にすると決断し，生徒は稲荷町の仮駅から，又の再会が期しがたい悲愴な思いで帰国していった。しかし，思いがけなく8月15日には戦争が終結したので民心の動揺はおさまらないまま，9月から授業が再開されることになった。しかし学生の帰学は母国の将来への不安，食糧難および住宅難のため，はかばかしくなかつた。このような苦難に対処して，学校菜園を未建築地の田圃につくり，又適宜一定期間食糧休暇を与えること等の校長の発案があり，生徒，職員の食糧難の緩和と勉学への便がはかられた。

ともかくこの様な校長の措置で授業はなんとか継続されたが，この頃は研究どころではなかつた。しかもこの様な状態であるにもかかわらず，生徒数のみ

は引揚学生の受入等で、漸次増加していく一方であるので、系統解剖実習屍体の蒐集をおこたる訳にはいかず、教授は市役所、刑務所、方面委員会等の協力方申し入れに奔走していたが、幸い刑務所の小倉医官や市役所の野元事務官等の深い理解と協力を得ることができ、漸次蒐集ができるようになった。このため21年度入学の生徒には何とか完全な実習を行うことができています。なおこの当時の屍体蒐集は今なき高田武部教室員が大八車を引いて距離の遠近にかかわらず、引取に行ったもので、彼の苦勞の程は今考えるとはかり知れないものがある。教室創設のかくれた協力者としていつまでも記憶にとどめたいものである。

昭和22年に入るとまもなく終戦によって鹿児島へ復員した石田弘、元大邱医専助教授伊東五二三がそれぞれ助手、非常勤講師に任命され、教官陣もようやく整ってきた。さらにこの年にはA級医専の判定をうけ、6月には県立鹿児島医科大学の設置が認可され、7月には予科が開設されて、将来の発展がいよいよ確約されたので、第二解剖学教室のための教授候補者を物色する様との校長命で、選考の結果、翌23年12月に元熊本医大助手佐藤堅が助教授として赴任した。そして翌24年3月の医大本科開設にともない、第二解剖学教室が新設され、佐藤助教授がこの主任となった。もちろん従来よりの解剖学教室はこれから後、第一解剖学教室と呼称することになった。その後県立医科大学は鹿児島県立大学医学部、さらに国立移管によって鹿児島大学医学部となったが、第一解剖学教室主任は開設以来現在まで大森教授である。しかし助教授、助手、その他の教職員には多くの変遷がみられ、又教室の所在地もその間、鴨池町より現城山町へ移動している（表1参照）

終戦後は国の復興に伴い、医学部も漸次充実し、教室の設備もなんとかととのい、多くの好学の士を迎えることができ、後述するように研究活動も活発に展開され、講義、実習も充実して行なえるようになったが、37年には学生の知識の向上、研究意欲の高揚をねらい、他大学の教授による特別講義が企画され、まず熊本大学の忽那教授に専門分野であるリンパ管系についての講義が依頼され、ついで41年より同様の主旨から九州大学の和佐野教授に中枢神経の神経経路の講義が依頼されている。

なお昭和42年6月には昭和28年以来高田武部教室員のあとをつぎ、教室の蔭の力となって尽力した有村喜久男事務官が不慮の疾病により死去したが、彼の解剖学教室に対する誠意は教室員一同の敬服するところである。

（附表1 教室の変遷参照）

する情勢となり、かねてよりの教室の研究テーマのみならず、さらに広範囲に

## 2. 研究活動

開校当時は大森教授の研究テーマであった関節の機能構築とこれをおし広げた結合組織の機能構築の究明、さらに南九州日本人の身体形質の究明が教室の研究テーマとして計画されたが、終戦後1・2年は研究資材の入手が困難であったことから、自然南九州人の形質解明に主力がそそがれ、昭和18年の夏には坊之津、佐多、屋久島の3地域についての学童の生体計測がなされ、又研究生森田（指宿療養所医官）は結核患者の皮下脂肪についての検索、研究生厚地正澄（鹿児島済生会院長）は通信関係従事者について身体形質の職業による変移の究明を手がけていた。さらに昭和19年春には校長の希望で、生徒の研究実習の意図をかね、西桜島学童の生体計測、疾病調査が、病理学の石原誠教授と共同でなされ、また夏には教授と実吉助手とにより温泉利用の身体発育あるいは受胎に及ぼす影響の調査が人吉市でなされている。

しかしその後、終戦までは空襲等のため、調査旅行はおこない得ない状態となった。なお戦争末期に至っては、悲運にも前記の森田研究生は郷里広島にて原爆死し、又厚地研究生は南方へ出征、戦死し、教室も一入淋しさをかこつのみであった。

昭和21年も後半に入ると、いくらか諦観の気持と共に、生きねばならぬ気概が生れた。したがって再び研究志望の同志もあらわれ、先ず指宿療養所の長医官（鹿医専専修生第1号）、ついで22年には満州より復員した草牟田開業の山下喜六医師が専修生として入室し、それぞれ前者は森田医官の遺志をついで結核患者の皮下脂肪の問題、後者は喉頭の結合組織の機能構築の究明に、又同じ頃助手として入室した石田弘が膝関節の機能構築についての研究に専念することになり、少人数ながら教室の研究テーマの究明への前進が開始された。

昭和23年になると感激裏に第一回卒業生が巣立ち、翌24年にはこれらの卒業生がインターンを終了し、医師として入室してきた。教室にも西山幹男、竹内護、柳園道夫の3名が入室し、竹内護は助手に任官した。

また25年には第二回生の永山武章、松元誠一の兩名、26年には橋口満視、土岐一文、27年には大森勲、高田昌英、小林基が入室し、以後本教室には新しい本学卒業生の入室がみられ、いよいよ本学卒業生が中核となって研究活動が行なわれるようになった。

しかもこれに加うるに、昭和30年頃より学位制度の変換が決定し、旧制度の学位取得を目ざして、多くの卒業生のみならず、他学出身者も研究のため入室

附表 1. 教室の変遷

| 事項<br>年度 | 教室変革                          | 教室構成       |                          |                  |                             |                                      |                   | 備考                                |
|----------|-------------------------------|------------|--------------------------|------------------|-----------------------------|--------------------------------------|-------------------|-----------------------------------|
|          |                               | 教授         | 助教授                      | 講師               | 非常勤講師                       | 助手                                   | 事務官               |                                   |
| S18      | 県立鹿児島医学専門学校(4月20日)<br>(解剖学教室) | 大森浅吉(18.4) |                          |                  | 田中尚義 (18.9)                 | 宮村博臣 (18.4) (18.5応召)                 |                   | 山下町19番地仮校舎にて発足 (18.4)             |
| 19       |                               |            | 小林 常男 (19.3)<br>(19.5応召) |                  | ↓<br>(19.10応召)              | 実吉 堯 (18.10) (19.9応召)                | 高田 武部 (19.9)      | 鴨池町へ一部移転 (19.7), 鴨池町へ全部移転 (19.12) |
| 20       |                               |            | ↓<br>(20.11)             |                  |                             | ↓<br>(20.10)                         | 緒方 幸子 (20.9)      | 鹿児島市焼夷弾空襲 (20.6)                  |
| 21       |                               |            |                          |                  |                             |                                      | 内木場房男(21.10)      |                                   |
| 22       |                               |            |                          |                  | 伊東五二三 (22.1)                | 石田 弘 (22.4)                          |                   | 県立鹿児島医科大学設置 予科開設                  |
| 23       |                               |            |                          |                  |                             | ↓<br>(24.4)                          |                   | 同上 本科開設                           |
| 24       | 県立鹿児島医科大学(3月31日)<br>(第一解剖学教室) | 大森浅吉(24.3) | 佐藤 堅 (23.12)             | 佐藤 堅(23.9—23.12) |                             | 竹内 護 (24.4)                          |                   |                                   |
| 25       |                               |            | ↓<br>(第二解剖学教室新設)(24.3)   | 石田 弘 (24.5)      |                             | 永山武章 (25.4)                          |                   |                                   |
| 26       |                               |            |                          | ↓<br>(27.3)      |                             | ↓<br>(27.12)                         |                   |                                   |
| 27       | 鹿児島県立大学医学部(4月1日)<br>(第一解剖学教室) | 大森浅吉(27.4) | 石田 弘 (27.4)              |                  |                             | 西山幹男 (27.6)                          |                   | 県立鹿児島大学医学部設置                      |
| 28       |                               |            |                          |                  |                             | 土岐一文 (28.1)                          |                   |                                   |
| 29       |                               |            | ↓<br>(29.11)             | 西山幹男 (29.1—29.6) |                             | ↓<br>(28.12)                         | 有村喜久夫 (28.4)      |                                   |
| 30       | 鹿児島大学医学部(7月1日)<br>(第一解剖学教室)   | 大森浅吉(30.7) |                          | 永山武章 (30.3)      |                             | 大森 勲 (29.7) ↓ (30.1)<br>小林 基 (30.2)  |                   | 国立鹿児島大学へ移管                        |
| 31       |                               |            | 永山 武章 (31.4)             | ↓<br>(31.3)      |                             | 貴島信夫 (31.8) ↓ (31.2)<br>前田実行 (31.3)  |                   |                                   |
| 32       |                               |            | ↓<br>(32.6)              | 大森 勲 (32.7)      |                             | 堀川良平 (32.7)                          |                   | 現在地へ移転(32.2)学位審査権 (32.7)          |
| 33       |                               |            |                          | ↓<br>(33.5)      |                             | 高森治生 (33.6) ↓ (33.3)<br>唐二原誠 (33.4)  |                   |                                   |
| 34       |                               |            | 松野 茂 (34.2)              |                  |                             | 中留邦彦 (34.7) ↓ (34.8)<br>桑畑紀也(34.12)  |                   |                                   |
| 35       |                               |            |                          |                  |                             | 松元誠一 (35.10) ↓ (35.3)<br>木佐貫禎 (35.5) |                   |                                   |
| 36       |                               |            |                          |                  |                             | 原田達也 (36.6)                          | 田 中 陽 一 (35.4)    | 大学院医学研究科発足 (36)                   |
| 37       |                               |            |                          |                  |                             |                                      | ↓<br>(39.4)       |                                   |
| 38       |                               |            |                          |                  | (熊大教授)<br>忽那 将愛 (37.4)      | 米城由高(37.10)                          | 中村庸子 (35.12)      |                                   |
| 39       |                               |            |                          |                  |                             |                                      | ↓<br>(40.1)       |                                   |
| 40       |                               |            | (40.2)<br>浜田良二郎 (40.4)   |                  |                             |                                      | 田中征人 (38.4)       |                                   |
| 41       |                               |            |                          |                  |                             |                                      | ↓<br>(39.5)       |                                   |
| 42       |                               |            |                          |                  | (九大教授)<br>和佐野武雄(41.4)(41.3) |                                      | 緒方幸子(39.5) 39.3   |                                   |
| 43       |                               |            |                          |                  |                             |                                      | 西 春子 (40.1)       |                                   |
|          |                               |            |                          |                  |                             |                                      | ↓<br>(41.5)       |                                   |
|          |                               |            |                          |                  |                             |                                      | 死去<br>(42.6)      |                                   |
|          |                               |            |                          |                  |                             |                                      | 外村直英 (43.1)       |                                   |
|          |                               |            |                          |                  |                             |                                      | 西村和裕(43.1) (43.3) |                                   |



附表 2. 研究活動

| 事項<br>年度 | 主要研究テーマ                           | 業績集発行  | 研究・調査出張                 |        |                      | 学会主催                                                  | 学位取得者数          |
|----------|-----------------------------------|--------|-------------------------|--------|----------------------|-------------------------------------------------------|-----------------|
|          |                                   |        | 県内                      | 県外     | 海外                   | (特別講演◎)                                               |                 |
| 18       | ① 関節機構                            |        | 坊, 佐多, 屋久               | 熊本, 人吉 |                      |                                                       |                 |
| 19       | ② 結合組織の機能構築                       |        | 桜島                      |        |                      |                                                       |                 |
| 20       | ③ 南九州人の形質人類学                      |        | 指宿                      |        |                      |                                                       |                 |
| 21       |                                   |        |                         |        |                      |                                                       |                 |
| 22       |                                   |        |                         |        |                      |                                                       |                 |
| 23       |                                   |        | 鹿児島市                    |        |                      | 第2回日本解剖学会<br>九州地方会 (23.1)                             |                 |
| 24       |                                   |        | 内之浦, 大崎, 末吉             | 宮崎県目井津 |                      |                                                       |                 |
| 25       | ① 運動器の解剖学的研究                      |        | 知覧, 枕崎, 額娃, 大村,         | 熊本県五家荘 |                      |                                                       |                 |
| 26       | ① a 関節の機構とその脈管神経分布                |        | 種子, 屋久, 佐多, 大根占         |        |                      |                                                       | 1               |
| 27       | ① b 筋, 腱鞘, 滑液のう, 骨膜の機構とその脈管, 神経分布 |        | 大口, 牧園, 三島              |        |                      | 第8回日本解剖学会<br>九州地方会 (27.10)                            | 3               |
| 28       |                                   | 1-7輯   | 長島                      |        |                      |                                                       | 1               |
| 29       | ② 南九州人の体質に関する研究                   |        | 徳之島, 奄美本島, 出水<br>(貝塚発掘) |        |                      |                                                       | 2               |
| 30       | ② a 形質の完成過程と特徴に関する生体学的検索          | 8輯     | 出水, 沖永良部, 種子<br>(貝塚発掘)  |        |                      |                                                       | 2               |
| 31       | ② b 骨格, 軟部の人種解剖学的検索               | 9-10輯  |                         | 宮崎県南郷  |                      |                                                       | 4               |
| 32       | ② c 局所解剖学的検索                      | 11輯    | 福山, 高山                  |        |                      |                                                       | 5               |
| 33       |                                   | 12-14輯 |                         |        | 沖縄本島                 | 第13回九州地方会 (32.10)<br>第14回日本解剖学会<br>九州地方会 (宮崎) (33.10) | 学位審査権(7月)<br>16 |
| 34       |                                   | 15-16輯 |                         |        | 久米島                  |                                                       | 12              |
| 35       |                                   | 17-18輯 | 種子                      |        |                      |                                                       | 34              |
| 36       |                                   | 19-24輯 |                         |        |                      |                                                       | 31              |
| 37       |                                   |        |                         |        | 宮古島                  |                                                       |                 |
| 38       |                                   |        | 種子                      |        |                      | 第18回日本人類学会<br>民族協会連合大会 (38.10) ◎                      |                 |
| 39       | ① 関節の神経支配の実験的研究                   |        | 屋久                      |        | フィリッピン群島             | 第20回日本解剖学会<br>九州地方会 (39.11)                           | 1               |
| 40       | ② リンパ管への吸収に関する実験的研究               |        |                         |        | 石垣島                  | 第21回日本解剖学会<br>九州地方会 (於宮崎) (40.11)                     | 4               |
| 41       | ③ リンパ路再生に関する実験的研究                 |        | 沖永良部, 徳之島               |        |                      |                                                       | 3               |
| 42       | ④ 南九州人の体質に関する研究                   |        |                         |        | アメリカ合衆国<br>外ヨーロッパ5ヶ国 |                                                       | 2               |
| 43       |                                   | 25-26輯 |                         |        |                      | 第73回日本解剖学会総会(43.4)◎                                   | 1               |



わたる研究が展開され、各人の真摯な努力によってその実が上り、膨大な業績を挙げることができた（表2参照）。その研究報告は300有余篇1,000冊にもおよび、昭和28年以来年々教室業績集として各大学解剖学教室へ配送され、第26輯にいたっている。

しかして、旧制学位制度が終了した後も、研修期間は長期化したものの、長期もいとわぬ熱心な研究協力者が漸次参加し、現在は関節のリンパ管、神経、さらにリンパ路再生の問題、また形質人類学的研究として南西諸島、沖縄等のかつて調査できなかった地域の研究がそれぞれに展開されていて、結実をみる日も近いと思う。

なおこの様な研究活動によって、医学博士の学位を取得した者も現在125名に及んでいるが、各年の取得者数は表2に示したとおりで、そのうち、本学が学位審査権をもつまでの取得者は主として九大、熊大、長大の審査によって学位を取得した者で、16名が数えられ、また新制度になって学位を取得したものは今のところ11名である。いずれもこれらの人々は現在鹿児島市内はもちろん、県内各地のみならず、遠くは阪神、関東地方まで進出し、活躍している。

なおまたこの間、教室では数次にわたり、学会を主催してきたが、主たるものは数回におよぶ日本解剖学会九州地方会と昭和38年に主催した第18回日本人類学会・民族学協会連合大会である。しかもあとの連合大会では大森教授が特別講演者に学会より指名されて、多年にわたる南九州日本人の形質人類学的研究の成果をもとに「種子島島民の生体学的研究」の特別講演を行なった。又、教授は昭和39年には県教育委員会の依頼によって、鹿児島県児童生徒体力向上対策委員会の委員として、地域社会へ寄与すべく「鹿児島県民の身体発育について」（県発行：体力向上対策資料、第1集）、ついで「鹿児島市内学童の体位とその外的諸要因による影響」（県発行：体力向上対策研究資料、第2集）の2報告書を提出している。

さらに教授は昭和43年4月2—3日、長崎大学で開催された第73回日本解剖学会総会において、特別講演者に指名され、主として昭和36年以降に手がけたリンパ管系についての検索をもとに、「リンパ路閉塞に関する解剖学的検索」の演題で、特別講演を行なった。（附表2参照）

## 第二解剖学教室

### 1. 沿革

昭和24年鹿児島県立大学に組織学講座が新設され、すでに担任予定者として予科教授をしていた佐藤堅が、同年3月31日付助教授として発令された。当時講座新設費もなく、またたとえあったとしても器械器具の入手が困難であったので、解剖学教室から2部屋を借用し、マイクロームや定温器も借りて、どうか組織標本が作れる程度で授業や研究を始めた。教室員としては中学校長を定年退職していた黒木良一郎が医専講師として標本作製などを手伝い、また助手補として家村仁子が勤務した。研究生としては河村正之、牧田汎耕、米沢藤蔵ら数名が入室し、細々と研究が始められた。

いろいろな事情で教室の部屋も鴨池時代に数回転々と変えられた。

昭和26年石川和郎、次いで昭和30年片平可也が助手としてはいり、ようやく教室らしい形態が整って来た。研究テーマとしては温泉の皮下組織に及ぼす影響や組織染色の理論といったようなことから始められたが間もなく、胸腺の研究が主テーマとなった。河村が組織内球状体の数と大きさの測定法を発表してから、胸腺のハツサル小体、卵胞、腎小体などの計測の仕事が進められ、胸腺の構造についての研究もようやく軌道に乗った。

昭和26年12月から翌年3月まで佐藤堅が東大脳研に国内留学し、また昭和27年9月京都大学で行なわれた第2回超薄切片技術講習会に出席してから、胸腺の主として上皮性細胞の電顕的研究が、当時文理学部にあった顕微鏡を利用して始められた。

昭和31年5月、山下町の新校舎に移転、はじめは細菌学と薬理学の教室を借りていたが、32年2月現教室に移転完了した。

昭和32年7月、医学部に電子顕微鏡（日本電子研5L型）が購入され、電子顕微鏡室が発足し、佐藤堅がその室長となり、同時に山田久大教授、藤原大阪市大助教授および四元日本電子課長を講師として講習会が開かれ、その後徐々に電顕による仕事が増加していった。初代技術員として藤崎義広が運転に当たったが、最初のうちは正焦点の写真を撮るのもなかなか困難な状態であったが、その技術も上達し、数名の学位論文もそれによって完成した。藤崎が35年日本電子に就職したので、後任に上原二郎が採用され現在に至っている。なお39年10月には2台目の日本電子7型が購入され、42年12月には3台目の日立11D型が設置されようとしている。

昭和36年3月の旧制学位令廃止を目前にして、32年頃から研究生が急増し、研究補助員も10数名を数えるようになり、教室は相当賑やかになった。その間に片平可也が講師を経て助教授となり、36年まで勤務した。

当教室における研究で旧制の学位を取得した者は47名である。

旧制の学位廃止とともに研究生がほとんどなくなり急にさびしくなったが、その後大学院学生や専攻生が次第に増加し、臨床教室からも電顕の仕事をする人が出入りしているので教室は再び賑やかさを取りもどしている。片平が退職したあとに竹中善治郎が約1年助教授として勤務、次いで黄基雄が熊大から招かれて助教授となり、現在に至っている。

昭和38年1月当教室を中心として、電顕関係者全員からなる電顕懇話会が発足し、毎月例会を開いて、情報交換を行ない、医学部全体としての電顕技術の向上を目ざし、相当の成果を挙げつつある。

学生の教育面では、当教室は主として組織学、内臓学、感覚器学、発生学、および組織学実習を担当しており、組織学においては、年々進歩しつつある電子顕微鏡所見を少しずつ取り入れて来たが、現状では細胞形態学の体系がほぼ整って来たので、これに相応した教育ができるようになった。当教室で比較的弱い分野に関しては、藤本十四秋熊大教授（発生学）、山田英智九大教授（感覚器学）らを非常勤講師として依頼し、効果を挙げている。

教室職員（助手以上）の人事略歴は次表のとおりである。

|          |                |       |
|----------|----------------|-------|
| 佐藤 堅     | 大2.3.8生        | 熊本医大卒 |
| 24. 3.31 | 鹿島大助教授         |       |
| 26. 2. 1 | 県立鹿医大教授        |       |
| 28. 4. 1 | 鹿島大教授          |       |
| 30. 7. 1 | 鹿大教授           | 現在に至る |
| 40. 7.   | 在外研究員（3カ月）     |       |
| 43. 4. 1 | 日本電顕学会九州支部長に就任 |       |
| 黒木良一郎    | 明21. 9. 1生     |       |
| 24. 4. 8 | 県立鹿医専講師        |       |
| 27. 4. 1 | 鹿島大助手補         |       |
| 31. 3.19 | 退職             |       |
| 石川 和郎    | 大15. 1. 5生     | 鹿医専卒  |
| 26.10. 1 | 鹿医専助手          |       |
| 27. 4. 1 | 鹿島大助手          |       |

30. 7. 1 鹿大助手  
 31. 4. 1 鹿大講師  
 32. 5. 1 鹿大助教授  
 32. 5.31 退職
- 片平 可也 昭 4. 1.23生 鹿医大卒  
 30.10. 1 鹿大助手  
 33. 4. 1 鹿大講師  
 34. 7.16 鹿大助教授  
 36. 5. 1 鹿児島検疫所に出向
- 竹中善次郎 昭 3.12.10生 鹿医大卒  
 30. 5. 1 医学部副手  
 30. 7. 1 鹿大助手  
 30.10. 1 医学部研究員  
 31. 5. 1 鹿大助手  
 33.11. 1 医学部研究員  
 36. 5. 1 鹿大助教授  
 37. 8.31 退職
- 要 真一郎 昭 3.12.17生 鹿医大卒  
 32. 7. 1 鹿大助手  
 35. 4. 1 医学部研究員  
 35. 6.30 退職
- 湊 俊夫 昭 5. 1.11生 鹿医大卒  
 32.12. 1 鹿大助手  
 33. 4. 1 医学部研究員  
 33.11.16 鹿大助手  
 35. 9.15 退職
- 芳井 秀明 昭 6. 6.15生 鹿県大医卒  
 35. 4. 1 鹿大助手  
 38. 4. 1 医学部研究員  
 40. 7.31 退職
- 広瀬 徳蔵 昭 8. 1.16生 鹿県大医卒  
 36. 8. 1 鹿大助手  
 39. 6.15 退職

- 黄 基雄 昭 2. 2. 4生 熊大医卒  
 37. 9. 1 鹿大助教授 現在に至る
- 増村圭子 (山口と改姓) 昭15. 7. 2生  
 38. 4. 1 鹿大助手  
 40. 3. 31 退職
- 迫田 欽一 昭 4.12.25生 鹿県大医卒  
 35. 4. 大学院学生  
 39. 5.16 鹿大助手  
 40.12.31 退職
- 亀井 克宜 昭14. 1. 5生 鹿大農卒  
 40. 5.16 鹿大助手 現在に至る
- 最勝寺 慧 昭12. 2.15 鹿大医卒  
 41. 1. 1 鹿大助手 現在に至る
- 野口 勉 昭10.11.28生 鹿大医卒  
 38. 4. 大学院学生  
 42. 4. 1 鹿大助手 現在に至る

#### 電顕室関係

- 藤崎 義広 昭11. 2. 2生 鹿工高卒  
 32. 6.17 臨時補手  
 35. 4.16 退職
- 上原 二郎 大15. 1.13生 海兵卒  
 35. 3. 1 技術補佐員  
 35.10. 1 技術員  
 36.10. 1 文部技官 現在に至る

## 2. 主な研究業績

### 胸腺の研究

ハツサル小体の大きさと数を測定して、諸種脊椎動物の比較(石川)、年令的消長(松野)、ホルモンやビタミンの影響(猿渡)などをしらべた。細網線維分布の動物差(松下)や年令差(武石)、血管分布(山田)、神経分布(久木原)、なども検索された。鳥の胸腺に発達している上皮性細胞群の光顕的観察(池上)、電顕的観察(江夏、佐藤ら)によって、上皮性細胞に分泌顆粒ら

しいものが見出され、現在その顆粒を追求している（佐藤、亀井）。

腎小体や卵胞の計測

河村が開発した計測法を利用して、腎小体の数や大きさの動物差（前田，片平，竹中ら），ヒトの卵胞の発生学的消長（河村）などがしらべられた。

内分泌腺その他 2, 3 器官の電顕的観察

甲状腺（塚），松果体（湊），味蕾（入来），汗腺（要），胎盤（川原），膀胱（上原），リンパ節（島本），気管支（池田），小腸（有馬），精囊（竹元）副腎（平田，神園），卵胞（林），肺吸虫の精子発生（佐藤ら）および卵巣（中塩）などの研究がなされた。また D A B 投与ラットの副腎（迫田），耳下腺の吸収能（野口），リンパ節の食作用（黄）などの報告もある。

### 3. 主催した学会

日本解剖学会第14回九州地方会

昭和33年10月26日 鹿大医学部

日本電子顕微鏡学会第2回九州支部総会

昭和35年12月10日 鹿大医学部

第21回日本電子顕微鏡学会総会および学術講演会

昭和40年5月14～16日 山形屋ホール

日本解剖学会第21回九州地方会

昭和40年11月14日 宮崎市堺薬品ホール

（佐藤堅記）

## 第一生理学教室

鹿児島大学医学部第一生理学教室は、昭和18年4月に開校された県立鹿児島医学専門学校の生理学教室として発足したものである。初代の校長であった高安慎一先生は、かつて熊本医科大学並びに九州帝国大学の生理学の教授であったので、開校当時の生理学の講義は、校長としての激務のかたわら、高安校長によって行なわれていた。高安校長を助けて専任講師として、下河辺舜一博士が学生の講義や学習の指導に当たっていた。そして昭和18年の9月に、慈恵会医科大学生理学助教授であった杉本良一博士が、慈大助教授兼任のまま、初代の生理学教授として赴任されている。杉本教授は兼任教授であったので、当時、熊本医科大学の生理学教授であった小玉作治先生が出張講師として、学生の講義を分担しておられた。（註・小玉先生は現在熊本大学名誉教授としてご活躍

中である)。昭和21年3月に杉本良一教授が慈恵会医科大学の専任教授として退任せられたので、当時の九州大学生理学助教授であった問田直幹博士が講師として赴任して、学生の講義に当たられた。しかし、間もなく問田直幹先生が、九州大学生理学教授として、退任されたので、その後に、前熊本医科大学助教授松本保久が専任教授として赴任することになった。時に昭和22年5月1日であった。すなわち、松本保久が二代目の教授として県立鹿児島医学専門学校生理学教室を主宰して今日に到っているのである。(当時は、生理学講座は一つであったので、単に生理学教室といった)。

終戦直後の困難な時代に、我が県立鹿児島医学専門学校は、高安校長以下全職員、全学生が一丸となって、多大の犠牲を払って、先ずA級医専としての存続に力のかたむけている。幸いにも、二代教授として松本保久が赴任した後にも、つぎには医学専門から医科大学への昇格の問題が起り、(周知のように医科大学として昇格の資格のない医学専門学校は廃校になることになっていた)、松本保久も、同僚や学生と一緒に手弁当で県下の有志や開業医の先生方の御宅を訪れてはご援助を願ったものだつた。生理学教室には田中藤一郎助教授を迎えて、学生の講義並びに実習を援助して貰った。(田中助教授は後に講師となる)。

幸に、県立鹿児島医学専門学校は県立鹿児島医科大学として存置が決定し、予科も開設された。つぎには、工学部と合併して鹿児島県立大学医学部となるため、当時の全職員は苦労したが、これも幸いに目的を達した。これも、県当局は申すに及ばず、全県民のご理解があったことを忘れてはならないと思う。我が生理学教室も次第に充実して来て、第2回卒業生である肝付兼顕博士が講師として力をつくした。

鹿児島県立大学を鹿児島大学に統合する問題が起こって、再三にわたる中央からの視察、調査の後、これも遂に目的を達することができた。これに伴ない、我が生理学は第二講座が開講されたため、生理学第一教室(第一生理学教室)として、現在に至っている。そして、生理学第二教室(第二生理学教室)の主任教授として九州大学の生理学助教授であった後藤昌義博士が赴任された。

尚、第一生理学助教授として、昭和29年4月から当時の熊本大学医学部第一生理学講師河田真雄博士を迎えて、現在に至っている。又、県立鹿児島医科大学第一回卒業生の溝口続博士も講師として教室に力を添えており、現在は徳満豊博士が兼任講師として学生の講義や実習に力をつくしている。

旧教室関係者(講師以上)

高安 慎一（校長，講師）  
杉本 良一（教授）  
下河辺舜一（講師）  
小玉 作治（講師）  
問田 直幹（講師）  
田中藤一郎（講師，助教授）  
溝口 統（講師）

現在関係者。

松本 保久（教授）  
河田 真雄（助教授）  
徳満 豊（講師）  
西村 茂人（助手）  
溝口 統（非常勤講師）  
井芹 三男（非常勤講師）  
伊瀬知栖子（文部事務官）  
小野田順子（技能補佐員）  
西 治子（技能補佐員）

研究関係者（現在）

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 岩重 和夫 | 上野 誠三 | 上野 博紹 |
| 大永 政人 | 川崎 寛  | 斉藤 七子 |
| 関 志比子 | 深水 主  | 藤井 富男 |
| 和田 翼  | 相良 吉勝 | 長野 稔一 |
| 牧 光弦  | 前田 宣久 |       |

研究関係者（旧）

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 青山 恵真 | 朝隈 貞光 | 伊地知藤雄 |
| 岩下 正晃 | 上野 百喜 | 鷓狩 淳一 |
| 岡本千恵喜 | 緒方 惟治 | 小野 主生 |
| 肝付 兼顕 | 窪田 健磨 | 幸泉 光爾 |
| 榊 真彌  | 佐藤 重国 | 佐藤 山人 |
| 鮫島 達郎 | 鈴木 康徳 | 高岡 寛  |
| 竹田 隆治 | 竹田 正道 | 田尻 大策 |
| 田中藤一郎 | 谷山 哲彦 | 鶴田 隆徳 |
| 通山 厚  | 徳田 博重 | 徳田 正敏 |

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 西牟田 融 | 野口 平  | 橋元 祐四 |
| 宮藺 政治 | 本重 尚雄 | 山元 信行 |
| 和田 圓  |       |       |

縁故者（旧）

|                |                |                |
|----------------|----------------|----------------|
| 石川 順子          | 石塚 順子          | 及川 洋子          |
| 小野 和子<br>(旧吉井) | 木元美保子          | 久保 律子          |
| 倉谷伊恵子<br>(旧山口) | 榊 園生<br>(旧柏木)  | 佐藤 節子          |
| 重野 照子          | 竹下 和子          | 徳満 弘子<br>(旧久永) |
| 中間 和子          | 中村真理子          | 半田 憲子          |
| 平井 育子<br>(旧小松) | 松山 陸子          | 美坂 澄子<br>(旧田淵) |
| 矢野 幸子<br>(旧原口) | 山下 明子<br>(旧作田) | 山田 ミキ<br>(旧今村) |
| 米森 葉子          |                |                |

## 第 二 生 理 学 教 室

県立医大時代は一講座であった生理学は国立移管を契機に講座が増え、1956年4月1日から生理学第二講座が発足した。

昭和31年4月初代教授に九大助教授後藤昌義博士が発令され、教授着任と共に管理棟一階南隅（現図書分館閲覧室）の仮住居でその歩みが始まった。

人手不足、物資不足の戦時中に創立され、戦後の混乱期を貧乏県の県立医大として歩んできた大学での講座発足は校舎、設備、人員全ての面で苦労があったわけであるが、学長、学部長ほか各位の援助で順当に発展してきた。

後藤教授は教室員の充足、研究設備の充実を始め、研究活動を開始した。本学部で要望された電気生理学の活動が始まったわけである。校舎は国立移管を予定して県で建てた現校舎内に割当てが決った。教室員には栗山愨助教授（昭31.10発令。九大付属医専卒。現九大助教授）、安部良治助手（昭31.5発令。鹿大物理卒。現九大講師）、尾崎幸男助手（昭32.9発令。鹿大生物卒。現塩野義研究所員）が就任し、教育及び研究のスタッフが揃った。当時は所謂「学位ブーム」の時代であり、戦中、戦後の混乱期に十分な勉強のできなかつた開業医が大学でパートタイムの研究をし、勉強のやり直しをする時代であったので、それらの人々を専攻生として受入れ、研究人員を増すことも行われた。従って発足後かなり早くから教室は賑やかになっていた。

電気生理学の研究には各種の電気機械が必要であるが、電気生理学の処女地での設備充実には苦労が多かった。必要な装置の部品購入による自家製作、専攻生の好意的寄付、他からの借用などでどうにか教育研究ができるようになった。限られた予算内で効率よく成果をあげる研究テーマの選択もしなければならなかった。

当時の研究テーマは平滑筋、心筋の研究が主で、肺臓電位、皮膚電気抵抗、網膜活動電位なども取上げられた。研究は活発を極め、その成果は後藤昌義編「鹿児島大学第二生理学教室論文集第一巻（1956—1959）」の18編の論文となり、10名以上の新医学博士を誕生させた。

平滑筋は微小電極による細胞内電位法で研究され、子宮平滑筋が主な対象とされた。ホルモンにより形態と機能が著しく影響される子宮平滑筋で、細胞間の機能的連絡、温度やホルモンの影響などが研究された。心筋の研究にも微小電極法が使用され、心筋細胞膜に対する表面活性剤、SH基阻害剤、代謝毒の影響の研究のほか、哺乳小動物、淡水魚、イモリなどで心筋の比較生理学的研究も行なわれた。その他に肺臓電位、カエルの網膜電気図、皮膚抵抗の研究などにも業績を上げた。

教室の基礎ができ、着実な歩みをはじめたのを見定めてから後藤教授はワシントン州立大学及びロックフェラー研究所へ留学の途に上った。昭和32年4月、赴任1年後のことである。留学中の研究は平滑筋に関するもので、その成果は数編の論文として外国誌を飾った。留学中に前野巍博士（昭43.4 発令。九大生物学科大学院卒。現助教授）を講師として研究、教育スタッフに加え、留守中の万全を期した。後藤教授は帰朝（昭33年4月）の翌34年6月には九大教授として転出した。在職期間は3年余にすぎなかった。

第二代教授には九大助教授大村裕博士が着任した（昭34年10月）。大村教授の興味は神経膜、終板、神経細胞（イソアワモチ巨大ネウロン）の一般生理学的研究から、心筋微細構造の電子顕微鏡的研究、水分代謝及び食欲の中枢過程の研究と広範囲で、中枢過程の電子計算機による解析も手がけた。大村教授は渉外活動も活発で、国内の科学研究費類は勿論、国外のロックフェラー研究費、筋ジストロフィ研究費などを積極的に受入れ、講座経常費を上回る学外資金で設備の最新式化を行なった。ブラウン管オシロスコープ、刺激装置など通常設備のほかにデータ解析用相関計、その他高価高級機械を買入れ、欧米の一流研究室に比肩し得る設備とした。大村教授は研究体制の強化にも積極的で、大山浩博士（昭37.6 発令、九大物理卒、現金沢大助教授）を中検講師に招い

て生物物理を、中島淑子助手（昭35.5 発令。九大薬学卒）を任用して化学面を強化した。また熊本大学丸橋寿郎助教授（現熊大教授）、九州大学富田忠雄助手（現オクスフォード大研究員）など他大学の研究者を招いて活発な協同研究を行なった。大村教授時代の研究成果には大村裕編「生理学研究集（1960—1963）」の23 篇の論文がある。その約半数は英文で *Nature* その他国際的雑誌に発表されたものが多い。研究は多方面に亘ったが、重点が置かれたのは緩筋の終板電位、イソアワモチ巨大神経細胞の興奮性及び視床下部食欲中枢の統計的処理による研究である。これらの研究には統計的処理への数学者の協力、多要素同時観察法のためのカラーテレビの利用に電子工業者の協力などがあったわけで、大村教授の研究体制作りの才能が生かされた。

これより先、昭和34年3月から栗山助教授は米国及び英国に留学していたが、留学が長期に亘ったために退職し（昭37.9）、後任助教授に前野講師が昇任した（38.4月）。研究陣には昭和34年から発足した大学院の学生も加わった。

昭和38年11月大村教授は金沢大学教授として転出し、大山講師も同助教授として共に転出した。教授転出の頃前野助教授は以前から予定していた米国留学の途についたので（昭38.11月）、第三代教授着任までの教室は尾崎講師以下数人の淋しい状態が続くことになる。大村教授の作った優秀な設備は研究費を受けた教授個人が占用すべき性質のものであったので、かなりのものが金沢大学へ移管され、設備の面でも淋しい教室になった。

大村教授の在職は4年余りで、講座発足10年にならないのに教授は二人転出したわけで教授交替期の空白期間が研究、教育面に若干のマイナスを残したのには止むを得ないことであった。

昭和39年7月第三代教授として九大助教授橋村三郎博士が着任した。橋村教授も電気生理学を専門にしているが、研究の興味は神経膜と脊髄とにあった。しかし先ず取組まなければならない問題は研究者及び研究設備の充実であった。研究者の充足は森陽子（昭39.9月発令、熊大薬学科卒）、安楽満男（昭41.3月発令、鹿大物理卒）両助手の任用で行ない、別に将来計画として生理学教育の徹底化により生理学専攻志望者を養成する方針が立てられた。教育重視により生理学への興味の開眼を期待するわけである。設備充実は講座経費の計画的使用で行ない、教官及び大学院学生数名の他に特に興味を持つ学生若干名が自由な雰囲気ですべてに十分に研究できる設備を最終目標とした。

教授交替期までにやられていた心筋及び緩筋終板の研究は徐々に単一有髄神

経線維の研究と脊髄におけるシナプス前抑制の研究とに切換えられた。脊髄機能の研究は求心経路の研究をも必要とするので、受容器や神経線維の組織学的設備と研究も始められた。他方、鹿児島大学の地域的特殊性を生かした南西諸島及び沖縄の毒ガニ、毒魚など生物毒の研究が生化学、医動物学その他と協同して行なわれ始め、成果を上げ始めた。この他に前野助教授の終板電位発生メカニズムの研究が独立した自由な雰囲気の中で大きな成果を上げつつある。これらの成果の若干は主に英文論文として数編発表された。

生理学第二講座は歴史は新しいが、本学における電気生理学のメッカとしての役割を果し続けてきた。その役割は今後はもっと大きくなると期待され、医学を純粋科学に高揚させる源泉となることが期待されている。

終りに講座発足以来の主な人事は次の如くなる。

#### 教 授

後藤 昌義 昭31. 4~34. 6 (九大教授に転出)

大村 裕 昭34.10~38.10 (金沢大教授に転出)

橋村 三郎 昭39. 7~現在

#### 助 教 授

栗山 愨 昭31.10~37. 9 (退職, 現九大教授)

前野 巍 昭38. 4~現在

#### 講 師

前野 巍 昭33. 5~38. 3 (助教授昇任)

大山 浩 昭37. 6~38.10 (金沢大助教授に転出)

尾崎 幸男 昭38. ~40.12 (塩野義研究所員)

#### 助 手

安部 良治 昭31. 5~34. 6 (九大助手に転出)

尾崎 幸男 昭32. 9~40.12 (退職)

中島 淑子 昭35. 5~38. 5 (退職)

前野 巍 昭33. 4~33. 5 (講師昇任)

森 陽子 昭39. 9~現在

安楽 満男 昭41. 3~現在

(橋村記)

## 生 化 学 教 室

### 教室開設当時の状況

鹿大医学部生化学教室は、昭和18年4月鹿児島県立医学専門学校設立と同時に医化学講座が開設され、鳥飼明教授と村橋善高助教授が就任したのに始まる。村橋助教授によりその当時の状況の一端をしるべば次の様である。

忘れもせぬ昭和18年4月18日希望に胸ふくらませ、その頃として汽車で11時間も別府からゆられ学校に着いたが、照国神社横に小さい木造二階建入口に鹿児島医学専門学校と書かれているのを見た途端、仮校舎とはいえ、あまり貧弱なのにいささかがっかりした。しかし、高安校長の人事に、運営に、県との接衝に、意気正に天をつくお姿に接し、勇気百倍した。昼食時は校長室に集まって、いつもなごやかな雰囲気に入れられ何とかして学校を盛り立てねばと、宮崎、大森、森田、鳥飼、各先生が真剣に鳩首協議しておられた。高安先生のご立派な人格を皆お慕いしつつ、この先生のためなら喜んで苦楽を共にする事が出来た。教室といっても、鳥飼先生と小生の二人だけでまず機械、器具、薬品、書籍を集めねばならないのだが、戦争たけなわ、物資不足とて容易でない。しかもガスの設備もなければ、いわんや電気装置は皆無なので、ごく簡単な実験さえも困難な状態であった。比色計がどうしても手に入らず、各大学を遍歴してやっと借りてどうにか間に合わせた事もあった。それでも生徒は不平一つこぼさず、また鳥飼先生の講義がうまかったので皆よろこんだ。「ご飯に梅干一コの日の丸弁当には、旗竿の意味でメザシを一本そなえなさい。それが低蛋白を防ぐ一番よく効果があるんだ」などユーモアをはさみ生徒を退屈させなかった。

昭和22年9月、鳥飼教授の後を受け継いで医専の医化学講座の専任講師として大保不二夫が就任し、昭和23年3月教授となり現在にいたっている。その当時の模様は次文でしのばれよう。

当時の医専の基礎教室は唐湊にあった。今の鹿大の運動場のあたりである。ガラス張りの広い専用の実習室があり、冬でも暖かかった。研究費は年間数千円で、ガス無く、水道もなかった。七輪の炭火で蒸留水を作り、井戸水でクーラーを冷すような状態だった。金もかからず、物もいらぬ様な実験を考えなければならなかった。血液凝固のこと、溶血のこと、リーゼンゲ現象のことなどをやった。また当時の衛生状態の悪化に伴い、寄生虫の問題がよく論議に上った。駆虫薬として、小麦わらや海人草の成分の分離を試みたりした事

が、回虫や糸状虫セタリヤの生化学的研究を行なう発端となった。

### 教室員の移動

#### 教授

鳥飼 明 S 18. 4～S 22.

大保不二夫 S 23. 3～現在

#### 助教授

村橋 善高 S 18. 4～

友広 喜久 S 23. 4～S 30. 3

溝越 将城 S 30. 8～S 33. 10

勝目 卓朗 S 33. 11～S 38. 7

木村 茂 S 40. 10～S 41. 1

森沢 成司 S 41. 9～S 42. 3

#### 助手

大保 春江 S 23. 1～S 25. 4

勝目 卓朗 S 24. 5～S 25. 11

S 31. 10～S 33. 10

坂本 春成 S 25. 5～S 27. 6

若松 親憲 S 25. 11～S 31. 10

樋渡 良博 S 27. 6～S 30. 7

鳥居 重光 S 30. 7～S 31. 1

右田 利朗 S 31. 1～S 33. 10

松本 彰夫 S 33. 11～S 35. 2

斎藤 光昭 S 33. 11～S 35. 4

溝留 敏弘 S 35. 3～現在

木村 茂 S 35. 5～S 40. 9

野村 靖 S 38. 10～現在

瀬戸口賀子 S 42. 6～現在

### 教室研究の概要

#### 1. キノン化合物に関する研究

$\beta$ -ナフトキノンスルホン酸とアミノ酸の反応機構について解明する一方、同試薬を用いるアミノ酸のヨード法による微量定量について検討を加えた。また、キノン化合物であるビタミン K<sub>3</sub> 注射による家兎の陰嚢水腫の発生

について検討すると共に、血糖やグルタチオンに対する影響を検べている。なおキノン化合物の関連からビタミンEの研究に進んでいる。

## 2. 寄生虫に関する研究

小麦わら中に存在する駆虫成分の研究から始まり、原虫、カンジダ、糸状虫、回虫などの生化学的研究が行なわれた。この分野における研究は当教室の主流をなし、今日に至っている。昭和39年4月回虫の生化学的研究に対し日本寄生虫学会より大保教授に小泉賞が授賞された。これら一連の研究によって、回虫のエネルギー代謝が主に嫌氣的なものであり、その電子伝達系は非常に制限されたものであり、フマル酸のコハク酸への還元が、回虫筋におけるエネルギー代謝に大切なもので、サントニンなどの作用点もここにあることを明にした。

## 3. 放射能に関する研究

昭和29年5月16日から17日にかけて世界最初の水爆実験の影響による放射能雨が鹿児島地方を襲った。飲料水および市販食品などが汚染の最初10日間にどのような影響を受けるかについて調査を始めたのが、我が教室における放射能関係についての研究のはじまりである。その後販売停止を受けた南海産の魚の灰分を分析して、それらの放射能魚灰分の生物学的影響について調査を行なった。また、クエン酸の投与が体内汚染の除去や診断に役立ち得ることを発表した。その他、放射性カルシウムや燐を用いて胎児骨の代謝についての研究も行なった。

## 4. 実験糖尿病に関する研究

アロキサンをはじめ多くのキノン物質による家兎の実験的糖尿病の発生を研究する一方、クロールプロマジン等の薬物の投与によるアロキサン糖尿の阻止状況を観察している。又、糖尿病発症と各種臓器グルタシオン含量の関係をしらべた。又、各種臓器中のアロキサンの検出定量法にも検討を加えた。又、アロキサンと亜鉛溶液混液中の残存アロキサンの定量およびアロキサンからのプルプル酸生成が生理的条件下では起らない事などから、従来のアロキサン糖尿発症に対する亜鉛説を疑問とした。

## 5. 脳代謝に関する研究

マウスの新生児脳中遊離アミノ酸の検出にはじまるこの分野における研究は、その後脳組織のブドウ糖や各種TCA基質の酸化、燐酸化に対する、ハブ毒や各種薬物、ホルモンの影響調査へと発展していった。又、電気衝撃に伴な

う脳組織中の各種物質の変動や、甲状腺ホルモンの脳内生成についての研究が進められた。

## 6. 蛇毒に関する研究

奄美大島産ハブ毒の構成蛋白質やアミノ酸の研究によって当教室における蛇毒関係の研究は始められた。その後ハブ毒 $\ell$ -アミノ酸酸化酵素の結晶化に成功し、ハブ毒中の各種酵素活性や、チトクローム酸化酵素阻害因子の分離などを行ない、それらとハブ毒の致死作用との関係を引き続いて研究している。一方、ハブ毒の蛋白分解酵素活性に対する各種薬物の阻害作用を調べる事により、その酵素作用の解明に努めている。また、同じ奄美大島産のえらぼうなぎの毒中の酵素活性および結晶化についての研究が行なわれている。

## 7. ホルモンに関する研究

各種薬物毒物や癌抽出液の抗甲状腺作用、脳、卵巣、副腎等におけるヨード代謝やそれらに対する、去勢やホルモンの影響を研究している。又、脳、卵巣、副腎等の酸化代謝に対する去勢やホルモンの影響も検討している。特に去勢動物における炭水化物、蛋白質代謝、血中無機塩類、コレステロール代謝、各種臓器中のSH基の変動、コリンエステラーゼの変動、血液凝固能の変動、肝機能検査等の報告を行なっている。その他、動脈壁の呼吸代謝に対する薬物やホルモンの影響等についての研究がある。

## 8. その他

溶血や血液凝固に対する薬品の影響、重クロム酸カリを用いた果糖とブドウ糖の鑑別法、血漿ゲルにおけるリーゼガング氏現象の法則性、ヨード代謝、クレアチン代謝、アセトイン代謝等に対する薬物の影響、ビタミンC、B<sub>1</sub>についての研究が行なわれている。またクロルアンフェニコール近縁物質についてその抗菌性、拮抗性等も研究されている。その他臨床検査関係の研究として肝機能検査の正常人の偽陽性結果の問題、血清電解測定に対する採血後の処置の問題に対して検討が加えられている。

## 薬 理 学 教 室

昭和19年4月  
(入局)〃4月3日

薬理学教室発足  
県立鹿児島医学専門学校薬理学教室開設  
薬理学講師発令

|      |               |                                     |
|------|---------------|-------------------------------------|
|      | 昭和20年 6 月30日  | 県立鹿児島医学専門学校<br>教授発令 小島喜久男           |
| (入局) | “ 20年12月20日   | 県立鹿児島医学専門学校<br>助教授発令 肥後 勇           |
| (退局) | 昭和30年 6 月30日  |                                     |
| (入局) | “ 22年12月 5 日  | 県立鹿児島医学専門学校<br>助手 松崎 吉彦<br>(講師・助教授) |
| (入局) | “ 25年 5 月15日  | 県立鹿児島医学専門学校<br>助手 山下 利博             |
| (退局) | 昭和29年 3 月 1 日 | “ “ 講師                              |
| (入局) | “ 29年 3 月 2 日 | 県立大学医学部<br>助手 中島 知徳                 |
| (退局) | 昭和33年 3 月31日  | “ “ 講師                              |
| (入局) | 昭和31年 3 月 1 日 | 鹿児島大学医学部<br>助手 山根 実                 |
| (退局) | 昭和32年 6 年30日  |                                     |
| (入局) | 昭和32年 7 月 1 日 | 鹿児島大学医学部<br>助手 藤崎 正<br>助手講師         |
| (入局) | 昭和33年 4 月     | 鹿児島大学医学部<br>助手 斉藤 忍                 |
| (退局) | 昭和35年 3 月31日  |                                     |
| (入局) | 昭和36年 4 月 1 日 | 鹿児島大学医学部                            |
| (退局) | 昭和39年 9 月30日  | 助手 金田 信                             |
| (入局) | 昭和40年 7 月16日  | 鹿児島大学医学部<br>助手 栄 義文                 |

#### 薬理学教室研究項目

1. ハブ毒に関する研究，特にハブ毒  
トキシソイドによる免疫について。
2. ショックに関する研究。

3. 漢方医学に関する研究，特に漢薬の薬理学的研究。
4. 心臓に関する薬理学的研究。
5. アレルギーに関する研究。

## 学 会

- 第4回 日本薬理学会西南部会  
昭和27年10月10日（金）  
小島喜久男会長として霧島国立公園林田温泉を会場として開催。
- 第15回 日本薬理学会西南部会  
昭和37年10月20日（土）  
小島喜久男会長として鹿児島大学医学部講堂において開催。

## 鹿児島漢方研究会

鹿大医学部薬理学教室を中心として鹿児島漢方研究会を昭和38年2月24日に結成し，毎月例会を開き，現在迄に50回を越える研究会を開催した。

（小島喜久男初代会長に就任，引続き現在に至る）

## 奄美大島無医村診療 昭和37年度（第9回）

小島喜久男団長となり，昭和37年度（第9回）奄美大島無医村診療班は昭和37年7月7日出発，加計呂麻島，与路島に於て診療し，7月16日鹿児島に帰着，その間松崎助教授はハブ咬傷患者の血清を採取し，ハブ毒に対する免疫の有無について実験した。

昭和42年8月

## 松崎吉彦助教授渡米

松崎吉彦助教授は Michigan 大学の Fellow として Seevers 教授の招により昭和42年8月渡米，米国 Ann Arbor の Michigan 大学にて一年間研究し，昭和43年9月帰国。

## 第一 病理学教室

本学の前身県立医専の創立には、初代教授として石原正之氏（九大，昭12）が九大から着任した。間もなく空襲下となり、学校は転々と移動し、当時の模様はほとんど知られていない。終戦後の混乱期に石原氏は健康を害して昭和23年結核症で死去された。従って創生期の病理学教室は模糊として霞の向うにある。

石原氏の後には川村弘徳氏（慈大，昭14）が来任し、すでに鴨池に居を構えた当時の県立医専の病理教室と解剖室等を設計，建築を完成した。しかし，川路教授来任当時の建物は本造平屋，壁も柱も節コブだらけの白木材で研究室は4室，顕微鏡2台，木製フラン器，ミクロトーム各1台と瓶類少々という粗末なものであった。川村氏は医専が医大に昇格するに際して昭和26年11月辞任した（現在，東京都監察院）。記録によると当時の教室員は島田彊氏（昭和医専，昭20）が22年9月助手となり，次いで橋口俊照氏（鹿医専，昭23）が昭和24年11月助手として入室し，現在の研究技術員内田明造氏（昭23）と共に教授合せて4人がオールスターメンバーであった。島田氏昭和26年退職，代って福永昇氏（慈大，昭19）が同年9月助教授として来任し，教授，助教授，助手と格好はついたが前記の如く川村氏は26年11月辞任している。

昭和26年県立医専は県立大学医学部と昇格し，欠員の病理学教授には，川路清高教授（阪大，昭11）（本稿の筆者）が昭和27年4月1日発令，5月1日着任している。川路教授が来任する直前，4月24日夜，大学附属病院は類焼によって全焼，同時に鶴丸城跡の旧七高後身の文理学部も全焼したため，病院の復興，再建とともに基礎医学教室の移転建築という大事業が数年続き，病理学教室，病理解剖室等は川路教授の設計によって現在のものが完成し，昭和32年晩秋，新研究室への移転を達成した。（しかし，現在地への移転設計が再び川路教授によって立てられている。）それより以前，昭和30年3月福永昇助教授が東邦医大へ転出し，後任助教授に北村旦氏（阪大，昭23）が来任（昭30.9）した。また，当時の寄生虫学教室が国立移管問題で第2病理学教室と看板替えし（昭和31年），橋口俊照講師はその年，第2病理の助教授と名目上配置換えされ，新たに浜田良二郎（現1解剖助教授），大山 満（内山外科講師）（これも鹿医大，昭30）の2氏が卒業と同時に助手として入室した。その当時はすでに専攻生に八反丸哲夫（慈大，昭13），有馬純義（鹿医専，昭24），井畔一心（台北医専，昭19），森鉄太郎（京城医専，昭9），稻森正愛（京城医専，

昭10) 池田 徹 (京城医専, 昭13), 大窪利男 (鹿医専, 昭23) 氏等があり, また, 昭和27年病気休養した技術員中園喜八郎氏の後任には, 川路教授の徳島大学からの赴任の後を追うようにして来任した三谷秀夫技官, その他, 田中紀子, 井手野憲子, 石井直子の諸嬢があり, 教室は活気を呈する一方, 多方面への研究発表も数多く, いよいよ多彩な光芒を放ち始めた時期である。

そのころの研究テーマはほとんど風土病を目標としていた。そもそも, 川路教授来任当初から本学は, 台北帝大を失った日本として南方の熱帯医学研究を主命とするにありとし, 医学部を挙げてその方向に研究を行ない, ひいては熱帯医学研究所を設立するのが願望であった。従って教室の研究テーマも, フィラリア (症), ハブ毒, その咬傷害, その他熱帯性疾患の研究を主体とした。

国立に比し, 県立大学の乏しい予算, 新設学校としての設備, 材料, 機械, 人材等あらゆる分野における貧弱さを克服して認むべき成果は徐々に挙っていた。かくて, 昭和33年4月13日, 天皇, 皇后両陛下の御臨学に際して, 川路教授は親しく「フィラリアに関する病理学的研究」を図表, スライド, 顕微鏡等で天覧に供した。

これより先, 昭和32年には待望の建築が落成し, 第1病理学教室は移転教室の殿りをつとめて城山の紅葉初める頃, 新研究室に収まった。昭和33年11月には北村旦助教授が奈良医大教授に昇任して転出, その後に福西 亮氏 (阪大, 昭28) が来任, また, 昭和34年4月には本学第1回大学院学生として西村明男氏 (県鹿大, 昭33) が入室している。その後は後述のように大学院学生, 専攻生が次々と入室し, 研究に, 学会発表に, あるいはレクリエーションにと活況を示し, いづれも皆学位を得ている。即ち, 教室の研究主題フィラリア研究は一応組織化学的の面では究明し尽くされ, その後は, 折りから活用化し始めた電子顕微鏡によるハブ蛇毒の人体障害の解明に没入し, 大山 満助手, 藤瀬隆幸 (日吉病院長), 富永功一 (日吉病院), 鶴木春海 (開業) の大学院生等によるハブ毒障害の電顕的研究, 或は顕微分光的研究は電顕自体の研究の初期のものとして優れたもので, その後は寺師慎一, 東 襄, 本田 寛, 渡辺研之氏等による美事な電顕写真によって「超微細研究」はますます進展し, さらにウミヘビ (エラブウナギ) 毒障害をも研究対象としている。昭和36年12月福西助教授はシカゴ大学ハギンス博士 (癌と内分泌の研究でノーベル賞受賞昭41) の研究室に留学し, (その留守中には後出の如く河合博正, 赤松保之, 永井清和の3氏が順次非常勤講師として来学した。) DMBA による発癌実験を研究し

て昭和39年7月帰学した。留学中の研究を帰学後も教室員の共同研究として遂行し着々と業績をあげている。また、奄美産ソテツ実「サイカシン」による発癌実験は最も斬新なもので、奄美大島を抱える本学としては重要な研究題目となるべきで、この問題は本年（昭42）から積極的に教室を挙げて取り組み、渡辺研之、有馬義孝大学院生等が中心となっている。その他、亜熱帯に多い真菌（カビ）の病原性に関する研究は大窪利男氏（鹿医専，昭23）（昭40死去）によって始まり、現在中原 節氏（麻布獣専，昭25）が中心になっている。特殊な研究では浜田良二郎氏が電顕の初期時代、肺の超微細構造の観察を行ない、現在は第1解剖学教室助教授におさまっている。また移転後の専攻生では有園秀夫，脇岡豊次，政 真哉，指宿英造の諸氏が学位を得ている。

以上が創立期から現在の第1病理学教室に至る概略で、現在の教室の研究テーマは大きく三つに分けられる。

1. ハブ毒，ウミヘビ（エラブウナギ）等による障害の研究（特にその電子顕微鏡的研究，網内皮系の研究）
2. DMBA，フレンドウィルス等の発癌実験
3. 奄美産蘇鉄（サイカシン）による発癌実験と病理学的験究（川路記）

#### 教室出身者

| 姓名    | 職名   | 出身校 | 在職期間        | 現職       |
|-------|------|-----|-------------|----------|
| 川村 弘徳 | 教授   | 慈医大 | 昭23.7～26.11 | 東京都監察医   |
| 福永 昇  | 助教授  | 慈医大 | 昭26.9～30.3  | 東邦医大教授   |
| 北村 且  | 助教授  | 阪大  | 昭30.9～33.11 | 奈良医大教授   |
| 河合 博正 | 講師，非 | 東大  | 昭37.1～37.8  | 信州大教授    |
| 赤松 保之 | 講師，非 | 阪大  | 昭37.8～38.3  | 阪大癌研助教授  |
| 永井 清和 | 講師，非 | 阪大  | 昭38.4～39.3  | 和歌山医大教授  |
| 橋口 俊照 | 助教授  | 鹿医専 | 昭33.8～40.5  | 鹿県衛生研究所長 |

#### 教室現在員

教授 川路 清高（阪大，昭11）  
 助教授 福西 亮（阪大，昭28）  
 助手 東 襄（鹿大，昭37）  
 助手 寺師 慎一（鹿大，昭36）  
 大学院学生，安東六石（鹿大，昭36） 本田 寛（鹿大，昭38） 増田好治（鹿大，昭38） 貞方洋子（東京女医大，昭37） 渡辺研之（鹿大，昭40） 有馬義孝（鹿大，昭40）

専攻生 前田守孝（県鹿大，昭32） 中原 節（麻布獣専，昭25） 岩下英熙  
（京城医専，昭16） 牟田光一郎（鹿大，昭38） 松浦俊介（阪大，昭24） 浜田  
康彦（九齒，昭27） 浜田邦彦（九齒，昭33） 新坂真一（日大齒，昭18） 佐藤  
正人（福岡齒，昭19） 森 弘明（大阪齒，昭33）  
技術員 三谷秀夫，内田明造，門口マリ子，柚木和子，園山妙子，門口由起江

#### 各年度における主要研究業績

川路清高： *Filaria* 症並びに象皮症の血管系の病理学的研究， 学術月報別  
刷，資料41号，322頁，1953， 文部省科学研究課題，7042，

川路清高，橋口俊照：珍奇な脾肝萎縮の一例， 日病会誌，42巻総会号，432  
頁，鹿医誌，26巻，294頁，1953

川路清高：糸状虫症における乳糜尿成立機転に関する一考察， 文部省総合研  
究報告集録，医学及び薬学編，445頁，1953

川路清高，岡元健一郎：糸状虫に於ける乳糜尿管の組織学的研究， 文部省総  
合研究報告集録，医学及び薬学篇，445頁，1953

川路清高，橋口俊照： *Histoplasmosis?* 或いは *Blastomycosis* の3例， 日病  
会誌，43巻，459頁，1954

川路清高，橋口俊照：鹿児島県下に発見された稀有なる真菌症の研究， 鹿大  
医誌，7巻2号補，1955

川路清高，橋口俊照，八反丸哲夫：*Filaria* 症の研究(2)血管系の変化につい  
て， 日病会誌，44巻1号，188頁，1955

川路清高，橋口俊照，指宿英造：*Filaria* 症の研究(3)， 淋巴腺について， 鹿  
医誌，29巻1，2号，39頁，1956

K. Kawaji, A. Kitamura, T. Hashiguchi, M. Oyama: An Autopsy Case  
of Strongyloidiasis. Acta Path; Jap. Vol. 1, No.6, Supp. 1958

北村旦，橋口俊照，浜田良二郎，大山満：ハブ毒の病理学的研究(1)， 鹿大医  
誌，8巻5号補，1957

川路清高，北村旦，橋口俊照，浜田良二郎，大山満，大窪利男：真菌症に  
関する研究(2)， 日病会誌，46巻3号，411頁，1957

橋口俊照：バンクロフト糸状虫仔虫の組織化学的研究， 鹿大医誌，9巻6号  
補，1552頁，1958

Kiyotaka, Kawaji: Studies on the Endemic Diseases in South Kyushu.  
Acta Path. Jap. Vol. 8, Supp. 681, 1958

K. Kawaji, T. Hashiguchi, R. Hamada, T. Hattanmaru, T. Mori.

K. Iguro And S. Arima: Pathological Studies on Filariasis; Acta Path. Jap. Vol. 8, 450, 1958

川路清高, 北村 旦, 橋口俊照, 浜田良二郎, 大山 満: ハブ蛇毒の病理学的研究(1~3), 鹿児島大学ハブ研究報告書, 第一輯, 1959

大山満: ハブ蛇毒による腎(家兎)障害の電子顕微鏡的研究, 鹿大医誌, 11巻4号補, 1734頁, 1959

Kiyotaka, Kawaji, Mitsuru, Oyama: Electronmicroscopic Study on Renal Lesion of Rabbit Caused by "Habu" Venom; Acta. Med. Univ. Kagoshima. Vol. 3, 133, 1960

川路清高, 大山 満, 鶴木春海: ハブ毒症の病理学的研究, 日病会誌, 51巻2号, 1962

富永功一: 正常並びにハブ蛇毒障害家兎甲状腺の電子顕微鏡的研究, 鹿大医誌, 16巻4号, 605頁, 1965

鶴木春海: 正常家兎並びにハブ蛇毒障害家兎の副腎皮質の電子顕微鏡的研究, 鹿大医誌, 16巻4号, 742頁, 1965

藤瀬隆幸: ハブ毒障害マウスの肝細胞核 DNA 量の変動に関する研究, 鹿大医誌, 16巻4号, 727頁, 1965

川路清高, 福西 亮, 東 襄, 寺師慎一, 前田守孝, 本田 寛: ハブ毒の病理学的研究, 白鼠に対する障害(1), 日病会誌, 54巻, 77頁, 1965

福西 亮: 7,12-DMBA 頻回投与による白鼠腫瘍の発生, 24回日本癌学会総会記事, 1965

K. Kawaji, and T. Hashiguchi: Pathological Studies of "Habu" Venom: Electron Microscopic Study on the Pancreas Caused by "Habu" Venom; Journal of Electron Microscopy, 14, 152, 1965

K. Kawaji, T. Hashiguchi, H. Unoki And K. Tominaga: Electron Microscopic Observations on Endocrine System Caused By "Habu" Venom; Journal of Electron Microscopy, 14, 153, 1965

Kiyotaka Kawaji, Ryo Hukunishi, Shin-ichi Terashi, Jyo Higashi, Moritaka Maeda and Kenshi Watanabe: Ultrastructural Changes of Reticuloendothelial Cells Caused by "Habu" Venom, The Sixth International Congress; International Academy of Pathology, 270, 1966

RYo Hukunishi, and Kiyotaka Kawaji: Promotive and Inhibitory Effects of 7,12-Dimethylbenz(a)anthracene on Murine Leukemia; Ninth International Cancer Congress, 1966

福西 亮, 寺師慎一, 東 襄, 川路清高: 7,12-DMBA 投与によるラット

肝，腎の形態学的変化，日病会誌，55巻，149頁，1966

川路清高，福西 亮，東 襄，寺師慎一，本田 寛，岩下英熙，奥 浩二，前田守孝：7,12—DMBA 投与によるラット 耳道腺腫瘍の発生と電子顕微鏡的考察，日病会誌，55巻，149頁，1966

川路清高，福西 亮，寺師慎一，東 襄，渡辺研之，前田守孝，岩下英熙：白鼠乳癌の形態学的研究，第二報 腫瘍細胞の超微細構造と 7,12—DMBA による影響：第26回日本癌学会総会記事，139頁，1967

川路清高，福西 亮，寺師慎一，東 襄，本田 寛，渡辺研之，牟田光一郎，浜田康彦，浜田邦彦：Cycasin 投与による白鼠肝の超微細構造の変化，第26回日本癌学会総会記事，142頁，1966

### 病理解剖記録

昭和22年12月1日，65才，男子，心衰弱，出所，佐藤内科，執刀，川村が病理解第1号となっている。

解剖体数の多寡は医科大学の研究熱のバロメーターといわれるが，病解数は別表のように逐年増加している。表中太線(1)までは川路教授着任以前，太線(2)以後は第2病理が創立され解剖を切半してからのもの。表によって各科における解剖数等興味深いものがある。第1病理学教室の昭和42年12月末までの解剖体数は1104体に達する。

### 第1病理 病理解剖出所別分類

| 科     | 年度 |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |    |    |    |    | 計   |      |
|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|-----|------|
|       | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37  | 38 | 39 | 40 | 41 |     | 42   |
| 1 内科  |    |    |    | 2  | 2  | 3  | 4  | 6  | 7  | 2  | 6  | 15 | 16 | 19 | 31 | 29  | 15 | 8  | 16 | 6  | 10  | 197  |
| 2 内科  | 1  | 2  | 4  | 7  | 8  | 6  | 10 | 10 | 11 | 13 | 20 | 20 | 22 | 24 | 13 | 23  | 20 | 12 | 16 | 8  | 17  | 267  |
| 小 児 科 |    | 1  |    |    |    | 1  | 3  | 1  | 2  |    | 1  | 2  | 6  | 2  | 2  | 7   | 4  |    | 4  | 7  | 8   | 52   |
| 1 外科  |    | 1  |    | 1  | 1  |    |    | 3  |    |    |    | 3  | 6  | 9  | 7  | 9   | 10 | 4  | 13 | 5  | 6   | 77   |
| 2 外科  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    | 5  | 7  | 10 | 13  | 11 | 8  | 8  | 7  | 17  | 86   |
| 産婦人科  |    |    |    | 1  |    |    |    | 1  | 6  | 1  | 2  | 3  | 3  | 3  | 6  | 3   | 4  |    | 5  | 6  | 11  | 55   |
| 整形外科  |    |    |    |    |    |    |    |    | 3  | 2  |    | 2  |    | 4  | 1  | 3   | 1  | 2  | 2  | 1  | 2   | 23   |
| 皮膚泌尿科 |    |    | 1  |    |    |    |    |    |    | 1  | 1  | 1  | 3  | 2  |    | 1   |    |    | 2  | 2  |     | 14   |
| 齒 科   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     | 6  | 1  | 1  |    | 1   | 10   |
| 精 神 科 |    |    |    |    |    |    |    |    | 1  |    |    |    | 1  |    | 1  | 4   | 2  |    | 1  | 2  |     | 12   |
| 耳 鼻 科 |    |    |    |    |    | 1  | 2  | 1  | 1  | 2  | 1  |    |    |    |    |     |    |    |    |    | 3   | 11   |
| 眼 科   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    | 1  |    |     |    |    |    |    | 1   | 2    |
| 放射線科  |    |    |    | 1  | 1  | 1  |    | 1  |    |    | 4  | 3  | 1  | 4  | 5  | 1   | 6  | 2  | 2  | 2  | 3   | 36   |
| 学 外   |    | 1  | 5  | 4  | 7  | 17 | 18 | 12 | 13 | 6  | 10 | 7  | 17 | 17 | 11 | 15  | 19 | 9  | 21 | 19 | 26  | 254  |
| 計     | 1  | 5  | 10 | 16 | 19 | 29 | 37 | 35 | 44 | 27 | 45 | 56 | 81 | 91 | 87 | 114 | 93 | 46 | 90 | 66 | 105 | 1906 |

(1)

(2)

## 第 二 病 理 学 教 室

### 1. 沿 革

病理学第二講座は昭和30年7月本学部が国立に移管されたときに始る。当初は諸般の事情から寄生虫学の阿部康男教授が講座を担当され、内容も寄生虫学の講座として発足した。その後病理学の橋口俊照が昭和31年4月より講師、昭和33年8月より助教授として病理学の面を分担したが、この状態は昭和37年4月阿部教授が熱帯医学研究施設教授（のちに講座新設に伴い医動物学教授）として転出されるまで続いた。

昭和38年3月九州大学助教授遠城寺宗知が鹿児島大学教授に任ぜられ、講座を担当するに至り、本来の病理学講座としての内容がととのった。橋口助教授は昭和40年5月鹿児島県衛生研究所長へ転出した。昭和43年4月加藤允義が九州大学より助教授として着任した。現教室員は教授、助教授のほか、助手3名、大学院学生7名、研究員4名（外科より出向）、専攻生5名である。

### 2. 現 況

教室は国立移管時より、医学部第二研究棟（木造二階建）の二階東側の一隅にあり、現在は教授室、助教授室、図書室兼資料室と4つの研究室があり、病理組織学標本作製のための諸設備器械と卓越した写真撮影装置を有する。このほか解剖棟には第一病理と共用する病理解剖室、同準備室並びに材料保存室がある。補助員として秘書1、技術員5が諸務に当たっている。

病理学講座には教育、研究のほか、病理解剖及び外科的材料の病理組織診断という日常業務が課せられる。病理解剖は第一病理と一月交代で、付属病院患者を主とし、時に学外病院患者の死体解剖を行なっているが、当教室での年度別剖検数は別表の通りである。

外科的の試験切除材料、手術摘出材料の組織検査は昭和38年遠城寺教授着任以来、とくに意欲的に行なわれ、各科臨床、実地医家に直接貢献している。付属病院各科のほか、学外諸病院、診療所からの申込みが多く、しかも逐年増加しているが、年度別の検査件数は別表の通りである。

| 年 度  | 昭 38  | 昭 39  | 昭 40  | 昭 41  | 昭 42  | 合 計    |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 病理解剖 | 70    | 90    | 86    | 90    | 92    | 428    |
| 組織診断 | 1,118 | 1,674 | 2,638 | 3,170 | 3,546 | 12,146 |

### 3. 研究内容・業績

阿部教授時代の業績は医動物学教室にて記載されるのでここでは省略する。

昭和38年以降病理学講座としての研究は人癌の発生及び発育に関する病理形態学を主軸とし、各種人体腫瘍に関して内容は多岐にわたっている。また各種疾患の臨床組織病理学の方面でも精力的研究が行なわれている。現在までの主要業績は次の通りである。

胃癌の発育に関する病理組織学的研究、早期胃癌の臨床病理学的研究、肺癌の疫学的並びに病理形態学的研究、軟部組織腫瘍の構築に関する組織学的研究、乳腺疾患の外科病理学的研究、甲状腺疾患の臨床組織病理学的研究、その他

### 細菌学教室

細菌学教室は鹿医専設立の翌年、昭和19年4月、柴原義夫教授によって開講され、その後広木彦吉教授、平野教授と引継がれた。現在の平野教授は昭和25年11月赴任以来、鹿医専から現今の国立鹿児島大学医学部に至る学制の変革と共に歩んできた訳である。

現在までの主要研究者（講師以上）は

|     |       |            |
|-----|-------|------------|
| 教授  | 柴原 義夫 | 昭18.7～20.6 |
| 教授  | 広木 彦吉 | 昭24.3～25.9 |
| 教授  | 平野 清寿 | 昭25.11～現在  |
| 講師  | 土井 彰  | 昭29.4～31.6 |
| 助教授 | 大友 信也 | 昭31.4～41.6 |
| 助教授 | 南嶋 洋一 | 昭41.7～現在   |

現在の教室員は次の通り

米倉康雄、平川浩資、今村禎祐、  
中園喜八郎、吉富由紀子、渡辺比佐子

#### 業績

〔1〕 細菌（特に嫌気性菌）の生理に関する研究

平野教授が赴任以来、かなりの重点をおいた研究分野で多数の協同研究者がこれに参画した。現在までにこれに関連した論文は60有余編に達する。これに関する題目を挙げると、 i) 細菌の物質代謝に及ぼす各種酵素毒 (Arsenite, sodium azide, cyanide, dipyriddy, streptomycin etc) の影響について ii) ガス代謝に関する研究 iii) 細菌の呼吸および糖代謝の面での嫌気性菌、好気

性菌の比較研究等であり、これらを基にして平野教授の考察が綜説“嫌気性菌の病原性と菌生理について”に収められている。その一部を挙げると、嫌気性菌の菌生理に関する重要な一つのテーマとして、その **vitality** が酸素の存在で障害される機転について考察されている。

嫌気性菌といえども  $O_2$  吸収を伴った物質酸化を行ない、好氣的条件下で **glucose** の酸化を行なわせると **pyruvate** が蓄積される。この際の酸化吸収は **cytochrome** 系でなく、**flavin** 酵素系であることが考えられた。**cytochrome** 系をもたない嫌気性菌では一般に **flavin** 含有量が多く、一部の嫌気性菌では **flavin** 酵素系による  $O_2$  吸収が直接証明されている。嫌気性菌は **glucose** 代謝において  $H_2$  代謝が本質的な分解過程であるが、好氣的条件下においては  $O_2$  によって **hydrogenase** 合成が阻害され、ひいては **vitality** の障害となつてあらわれるのであろう。この事は通性嫌気性菌である大腸菌を好氣的或いは嫌氣的に発育させて、糖代謝を行なわしめ両者を比較し、更に嫌気性菌とも比較するという観点からも検討されている。

代謝における 2 価の鉄イオンの役割を  $\alpha, \alpha'$  **dipyridyl** の **glucose** 分解に対する影響でみると、通性の大腸菌と偏性嫌気性菌である **Cl. welchii** について比較すると後者ではその抑制が強く、大腸菌の好気培養と嫌氣的培養とを比較すると後者で抑制が著しい。従つて  $O_2$  の存在による  $Fe^{2+}$  の  $Fe^{3+}$  への **spontaneous** な酸化が行なわれるとその影響は嫌気性菌で著しい。この面からも嫌気性菌の  $O_2$  障害の機転を求めうる。

## 〔2〕 X線の殺菌機序に関する研究

放射線の生物学的作用に関しては菌体の重要な一定部分“**target**”が **hit** されるためであるという直接的な作用による説と、放射線照射の結果水のイオン化により産生される **toxic substance** による間接的な障害による説とがある。当教室においては細菌の **intact cell** に対する X線の影響として X線照射時の菌濃度や酸素の存在或いは菌が **rest** の状態にあるか“**metabolizing**”ないしは“**growing**”の状態にあるか、或いは更に発育のいかなる時期にあるかによる菌の死滅率の差異等を検討している。またその基本として細胞の **vitality** を荷う各種の成分に対する X線の影響についても検討せられなければならないが、その重要なものの一つとして酵素蛋白がある。大腸菌や結核菌の抽出 **catalase** について、或いは他の呼吸酵素の活性や合成能についての X線の影響がそれである。その他、X線の **mutagenic** な作用面についても **strep**

tomycin 耐性菌について検討がなされている。

### 〔3〕 バクテリオファージに関する研究

比較的最近取組んだテーマである。好気性菌のファージとして大腸菌及び赤痢菌ファージ，嫌気性菌のそれとしてウェルシュ菌ファージをとりあげている。人腸管内容物，人尿，土壌，污水处理槽，尿尿処理槽等における前記ファージの量的分布，及びそれらの性状（形態，宿主域，血清学的性状等）とくにこれらの過程における菌との相関関係についての検討を試みている。

またその一環としてその溶原性についても尿，下水処理槽等から菌を多数分離し，標準菌株と共に検討を行なっている。

ファージは溶原化能の有無により *virulent* と *temperate phage* とに分けられるが，ウェルシュ菌ファージでは（今まで数十の分離ファージについて電子顕微鏡撮影を行なっている範囲）両者間で形態的差異の著しいことが判明している。

また溶原ファージの検索の際に同種菌株を阻害するバクテリオシンが検出され，特にウェルシュ菌のそれについて研究されており，種々な *genetic* な示唆を与えるものとして興味深い。

その他，鹿児島県下で発生したクロチョウ病員の菌検索についての論文も数編あり，現在までの総論文数は約130編に及ぶ。

## 衛 生 学 教 室

昭和18年，鹿児島県立医学専門学校が設立されて予防医学教室が出来，宮崎一郎教授が主任となり，衛生学の講義は同教授が行なって来たが，未だ衛生学教室は独立していなかった。然るに昭和23年4月から衛生学教室が開講されることになり，初代教授として北原経太が昭和23年3月31日附を以て発令され，国立移管された現在までに及んでいる。

昭和24年4月8日，県立鹿児島医科大学が開設され予科生が入学した。同教授は昭和25年4月より昭和26年3月まで東京大学医学部公衆衛生学教室に内地留学を命ぜられ，その間に昭和26年2月1日附を以て県立鹿児島医科大学教授となり，衛生学講座と公衆衛生学講座とを兼担した。昭和27年2月20日鹿児島県立大学医学部教授となり同じく衛生学と公衆衛生学講座とを兼担し，県立鹿児島医科大学教授に併任された。更に昭和30年7月1日国立移管となったが，

昭和31年4月1日衛生学講座のみ認められ、公衆衛生学講座は昭和41年4月1日初めて開設された。その間県立大学時代、公衆衛生学講座主任として西尾一男教授が昭和30年12月より昭和32年4月まで在任したが県立鹿児島医科大学が昭和33年3月31日廃止となり更に鹿児島県立大学医学部は同年4月30日廃止となり消滅した。

衛生学教室の職員は医専時代、初め補助員中尾洋子、有馬遙子の2名、昭和24年から約1年間日高律郎助手が勤務した。その後、八板宗哉、林繁幸助手が入室した。又西尾一男助教授を迎え、その後秋山高助教授を迎え、更に宮本利哉助手、有馬陽一助手の入室を見て、現在の職員は米国留学中の秋山高助教授、佐藤孝彦助手、渡辺紀子助手、南谷博子助手、吉見委楚子補助員、永野マリ子補助員を合せて総員7名である。

研究業績は医専時代は蚊の研究から恙虫の研究に進み、現在も南九州産恙虫の研究を続行し、専攻生と共に採集した数は約5万匹に達している。現在その形態学的研究を再検討中である。ビキニ水爆実験以来、即ち1954年5月から今日に至るまで放射性降下物の測定を続け Sr—90, Cs—137濃度の変化を研究している。昭和42年度からマルチチャンネル波高分析器を入れ更に低バックグラウンドのβ線測定器も近く入る事になり着々と成果をあげている。

秋山助教授の着任以来、佐藤、渡辺両助手の協力を得て生物学的汚水処理の問題と取組み、その成果は学会の注目する所となっている。近年隔離集団の人類遺伝学的研究が学会の注目する所となり有馬助手の入室以来、文部省総合研究班とし宮崎県椎葉村を対象としてその研究を続けている。

## 公 衆 衛 生 学 教 室

公衆衛生学教室は、戦後、医科大学の新しい講座として開設されたものであるが、その動機としては、当時の占領軍による強力な衛生行政遂行上の要請があったことも否めず、従来からあった衛生学講座の姉妹講座として、多くはその分身のような形で出来上がったものであるから、内容的には殆んど共通したものを持っている。已に発足以来、20年を経た今日、保健所を第一線とする衛生行政の曲り角と、医師法の改正という新時代の流れの中で、医学部の一講座としてどのような方向にすすむべきか大きな転機に立たされているといわねばならない。

このような時代にあって、本学の公衆衛生学講座は、42年度に新設される運びとなり、現在、発足後漸く1年を経たにすぎない。その間、講座要員の充足

と研究室の整備に費さざるを得なかったが、現時点で、教授 1、助教授 1、非常勤講師 1、補助員 1、専攻生 2、研究員 1 の計 8 名を以て、その運営に当たっている。研究室は、基礎医学系研究棟の中の、旧学生実習室を改造し、これが昨年11月に新しく完成したので、一講座としては十分なフロアがあたえられたことは、大学移転をひかえてのこの時期としては、誠に幸運なことであり感謝している。爾来数カ月間、実験器材の充足を主とする諸設備の整備にあたったが、研究活動をつづけながらの準備は思いの外苦勞の多いものであった。

教室として、これからの仕事は、やはり地域社会に根を下したものにしたいと考えており、研究室完成を機会に、地域の社会医学的要望の実態を把握するため、昨年暮から県下僻地住民の健康水準の評価を主眼とした疫学的調査を行ってきたが、今後広く地域社会を対象とした疫学的研究は、教室のルーチンワークとしてつづけてゆくことになるだろう。又、本学が日本の南端にあるという地理的条件から、他の大学とも相携えて資料を文換し、広くこの地域の医学的特性を紹介することも、医学の社会的適用という観点から重要な仕事であると考えている。実験時には、特に暑熱生活条件に対する適応の問題などとりあげることにして、日本人の耐熱性の研究をすすめてゆきたい。

昨年度は、県内林野労働者のレイノー症状の疫学調査を行なうにあたり、特に離島方面に足をのばす機会を持ったことは、当地方になじみ少い講座要員として非常に得るところがあった。ともあれ、発足間もない教室として、現在がその歴史の一ページにあたり、教室員も殆んど東京その他からの混成であるが、これから、本学出身の若い人達によって育成されてゆくことを期待しつつ、教室沿革の紹介を終わる。

## 医 動 物 学 教 室

(Department of Medical Zoology)

### 1. 沿 革

医動物学教室は昭和39年4月1日付で本学に新設され、教授としては従来医学部附属熱帯医学研究施設長であった阿部康男教授が任命され講座を担当した。従来、本学では寄生虫学ならびに衛生動物学の教育と研究は予防医学講座を担当しておられた宮崎一郎教授（現九大医学部教授）以来、長花操教授（現京都府立医大教授）から阿部康男教授へと受けつがれて来た。その間、教室名は予防医学、寄生虫学、第二病理学、熱帯医学研究施設、医動物学と転々変わったのであるが歴代の教授は実質的には、寄生虫学ならびに衛生動物学を担当し

て来たものである。

こうして医動物学を正式に担当する講座ができたため同年、昭和39年8月1日、田中寛助教授（現、東大医科研助教授）が任命、同じく昭和40年4月1日には真喜屋清助手が任用され、講座の体制が整って来た。しかし昭和41年5月1日には田中寛助教授が東京医科歯科大学に出向、同じく真喜屋清助手が昭和41年10月16日、新設の名大医学部医動物学教室に出向した。このため田中寛助教授の後任として九大医学部寄生虫学教室から多田功助手を昭和41年11月1日付けで助教授として任用した。その後、阿部康男教授は病氣療養中であったが昭和42年10月27日に逝去された。昭和43年9月1日信州大学医学部より佐藤淳夫助教授が教授として着任され、同年10月1日、中島禎子助手、昭和44年4月1日、高岡宏行助手が夫々任用された。昭和44年4月現在教授1、助教授1、助手2、技官（長野耕二）1、専攻生（服部行麗）1、研究生（上園善隆）1、補助員（国料ケイ子、池田達子）2、の構成である。

## 2. 現 況

教室は第一研究棟に教授室、図書室、ならびに研究室3を、第二研究棟に助教授室ならびに研究室2を有する。当教室には視聴覚教育用の諸器具（16mm及8mmトーキー映写機など）を始め、研究用には、凍結乾燥装置、各種新鋭顕微鏡、電気泳動装置、冷凍遠心器、高温恒温装置等を有し現在免疫学的な仕事を中心に活動する態勢にある。

## 3. 研究内容、業績

阿部教授は最初、マラリア伝播蚊の生態、分類など基礎的な研究を行っていたが、鹿児島赴任以来、南日本に殊に蔓延している各種の蠕虫性疾患の研究に手を染められた。即ち、フィラリアの疫学的あるいは生物学的研究、鉤虫の疫学的研究、糞線虫の臨床、生物学的な研究、あるいは“はぶ”の疫学および生態学的研究、などが主なテーマであった。鹿児島は寄生蠕虫の浸淫がたつよく、地域住民の健康にも大きな影響を与えているが、学童保健の面からも研究が進められて来た。医動物学講座が新設されてからは、田中助教授を中心に糞線虫の生活史、あるいは治療、体内移行経路の検討、といった面にも研究の焦点が向けられる一方、“はぶ”の生態と機能との関連などについても基礎的な研究が進められた。その後、田中助教授のテーマである糞線虫は多田助教授によって、その免疫学的な検討の方向に進展されている。その他、現在では、従来取り扱われていなかった肺吸虫も取り扱うようになり、その免疫学的、あるいは、生物学的な研究が行なわれている。この他、フィールド・サーベイにも

重点がおかれ県内各地，あるいは，沖縄八重山群島などにおいて各種の寄生蠕虫の疫学的研究が継続的に行なわれている。

現在までの主要な業績は，次のようなものである：鉤虫の形態学的ならびにその臨床・疫学的研究，糞線虫に関する臨床・治療・生物学的研究，はぶに関する疫学的ならびに生物学的研究，フィラリアに関する形態学的，伝播蚊，および疫学的研究，各種肺吸虫の分布調査，肺吸虫感染における宿主一寄生体関係などについて研究を行なってきた。

## 法 医 学 教 室

### I) 教室の沿革

昭和18年(1943) 県立鹿児島医学専門学校が設置された。而して昭和20年(1945) より5カ年間熊本大学より世良完介教授が講師として法医学の講義を担当された。

昭和26年(1951) 7月久留米大学より三上芳雄教授が初代教授として着任，茲に当教室の創立を見た。

昭和31年(1956) 3月三上芳雄教授は岡山大学に転出され，同年4月九州大学より城哲男助教授が二代目教授として着任，現在に至っている。

### II) 歴代の教授，助教授，講師

#### 1) 講師：世良 完介(熊本医専，大正8年卒)

昭和20年4月 講師嘱託

昭和25年4月 同上解嘱

#### 2) 教授：

三上 芳雄(熊本医大，昭和8年卒)

昭和26年7月 鹿児島県立大学教授

昭和31年3月 岡山大学教授に転出

講師：

間世田秀之助(九高医専，昭和20年卒)

昭和26年7月 助手

昭和29年4月 講師

昭和30年3月 解嘱

池平 博(鹿医専，昭和24年卒)

昭和27年10月 助手

昭和30年12月 講師

昭和31年3月 解嘱

3) 教授：

城 哲男（九大，昭和16年卒）

昭和16年3月 九州大学医学部卒

昭和16年4月 同上副手（精神科）

昭和18年1月 同上助手（精神科）

昭和23年5月 同上法医学教室研究生

昭和25年4月 同上助教授

昭和31年4月 鹿児島大学教授

講師：徳田 昭二（熊本医専，昭和25年卒）

昭和29年12月 助手

昭和33年2月 講師

昭和34年5月 解嘱

：植松 正雄（鹿大医，昭和33年卒）

昭和34年9月 助手

昭和38年2月 講師

昭和38年10月 解嘱

：川畑 真吾（九大，昭和32年卒）

昭和37年4月 助手，九大法医より転任

昭和38年2月 講師

昭和39年10月 解嘱

Ⅲ) 教室の施設

昭和26年（1951）6月鹿児島市鳴池町51番地に新築落成，総建坪数は44坪であった。既に昭和31年4月法医学講座は国立移管をしていたが，昭和32年（1957）7月現在地に新築移転した。総建坪は66坪であり，病理学第2講座，衛生学教室と同棟である。即ち教授室1，講師室1，助手室及び図書室各1にして研究室は計4室，他に写真暗室を附す。解剖室及び同準備室は病理学教室と共用である。

Ⅳ) 現在の研究課題

- 1) 交通災害防止に関連する研究，特に法医学領域に於けるアルコール中毒，或は精神安定剤等，交通事故に関連すると思われる薬物の研究。
- 2) 法医学的精神医学の研究，特に精神鑑定法の客観化に関する研究。
- 3) 酩酊責任の法医学的並びに刑法学的研究。

4) 歯科法医学に関する研究，特に個人識別を中心とする研究。

V) 鑑定件数

1) 法医解剖体数

昭和23年(1951) 7月より昭和42年(1967) 末まで総計472体

2) 精神鑑定件数

昭和31年(1956) 4月より昭和42年(1967) 末まで総計51件

3) 親子鑑定件数

同上期間，9件

4) 記録鑑定，その他件数

同上期間，60件

VI) 学会の開催

昭和27年(1952) 10月，第2回日本法医学会九州地方会(会長 三上教授)

昭和33年(1958) 10月，第8回日本法医学会九州地方会(会長 城教授)

昭和39年(1964) 11月 第14回日本法医学会九州地方会(会長 城教授)

昭和40年(1965) 5月，第49次日本法医学会総会(会長 城教授)

教室関係物故者 なし

## 2. 臨床医学教室

### 第一内科学教室

第1内科の歴史は，鹿児島県立病院が県立鹿児島医学専門学校附属病院となった昭和18年4月に遡る。初代教授は桜井之一博士である。桜井教授は昭和3年九州大学医学部を卒業後，母校の第1内科にて金子廉次郎教授のもとに学び，同教室篠崎哲四郎博士(大正4年九大卒)が内科教授として京城大学に転出したときいっしょに城大に赴任した。京城大時代の間脳下垂体系の機能についての研究によって，篠崎教授らとともに日本内科学会恩賜金記念賞を授与されている。その後日赤岩手支部病院内科医長を経て，鹿児島県立病院内科部長として当地に着任したのが昭和15年1月のことである。

桜井教授の時代は、医専の創設、次いで病院の戦災、つづいて敗戦後の医学教育制度の改革に伴い医専を廃止するか大学に昇格して存続させるかの問題の処理などといった、わが医学部の苦難の時代であった。昭和22年6月には県立鹿児島医科大学の設置が認可され、同年7月に第2内科が新設された。当時の第1内科医局長は前田道明助教授（九大昭和18年卒、前国立瀕研究所 研究部長）以下数名であった。敗戦後の欠乏のなかでも患者の診療と学生の教育は休みなくつづけられた。今ではあたりまえになった心電図診断が導入されたのもこの時期のことである。前田助教授が国立予防衛生研究所に転出後は、内菌洋三博士（九大昭和17年卒、現国立加治木病院長）が助教授となった。内菌博士はその後県立大島病院長として転出した。県立大島病院を現在のような大きな近代病院に育てあげたのは内菌博士の功績である。

桜井教授はわが医学部前身の県立医専の創設、戦災の復興と県立医科大学への昇格、第2内科の新設などのために、当時の同僚の方々とともに大きな努力を払われ、昭和26年2月に退官した。現在は鹿児島市の南風病院長として活躍中である。

桜井教授退官のあとを受けて、第1内科の第2代教授となったのが榊屋富一博士である。榊屋教授は昭和10年九大卒、直ちに母校の第3内科に入局し、小野寺直助教授、沢田藤一郎教授のもとに学び、昭和26年2月に当内科教授として来任された。

榊屋教授赴任の翌年4月、病院は東側民家の火事の波及で殆んど全焼、病院が現在の形で復興するまでの3年間は苦勞の多い時代であった。

榊屋教授は原爆被爆者の血液学的研究、フィラリア症、鉤虫症の病態生理学的研究などにおいて大きな業績をあげ、昭和33年7月沢田藤一郎教授退官のあとをついで九州大学第3内科教授として転任された。九大においては当大学における研究の延長として、鉄代謝、ポルフィリン代謝等についての研究において独自の研究を展開して活躍中である。榊屋教授時代の助教授としては、鍋倉正義博士（昭和20年日医大卒、現宮崎県小林市開業）、次いで福田正臣博士（昭和20年九大卒）がある。福田助教授は循環器学専攻で、鹿児島の近代循環器学は同助教授によって導入され、推進されたといつてよい。

榊屋教授九大転出のあとを受けて、昭和34年4月金久卓也博士が第3代教授として来任した。金久博士は昭和13年九大卒、直ちに九大の第1内科に入局、金子廉次郎教授、操坦道教授に学んだ。専攻は内科精神身体医学。

現在第1内科の臨床で重点をおいているのは、循環器学、内分泌学特に糖尿

病学，血液学，心身症学特に気管支喘息と臓器神経症などである。研究面ではこれらの領域の臨床的研究とともに，情動はいかにして身体機能の障害をひき起すか，さらにまた情動が器質疾患の誘因あるいは再燃因子となるのはどのようなメカニズムによるかといったことについて，条件反射学を中心とした精神生理学的研究，さらに交感神経副腎髄質系及び下垂体副腎皮質系の2つの軸を中心とした神経内分泌学的研究が行なわれている。

一方，霧島分院内科を第1内科で担当するようになったのが，昭和37年からである。助教授として派遣されたのは菅正明博士（昭和24年九大卒，現北九州市小倉開業）であり，それ以後分院はリハビリテーション施設として，脳卒中後麻痺，慢性神経疾患を主として収容している。昭和41年3月菅助教授退職後は当科浜田康治講師が助教授となり，医師スタッフは従来のように一内科から派遣している。研究面では脳卒中を対象としたリハビリテーション医学の研究とともに，第1内科と共同で神経筋疾患の神経学的，生化学的研究が行なわれている。菅正明助教授を初めとする当科派遣スタッフの努力が認められて，昭和41年度には分院の全面改築が完成し，次いで42年度の浜田助教授時代になってから機能訓練室の新築，ベッドの35床より50床への増床が実現し，分院のリハビリテーション施設としての物的整備が完成し，あとはただ内容の向上，充実をまつのみとなった。交通不便な牧園町に住み，あるいは当市より通勤しながら今日の分院をつくり上げた人々は，菅正明，森園隆一，武田元彦，川野通夫，坂元藤雄，浜田康治，大勝洋祐の諸氏である。

金久教授時代の助教授としては福田正臣助教授が，昭和42年12月まで勤務した。上記のように，福田助教授は鹿児島地区の近代循環器内科学の開拓者であるが，その主催する循環器懇話会は数年前より約2カ月に1回のわりで開かれて現在35回に達しており，その間にはポール・ホワイト，沖中重雄，前川孫次郎，その他この方面の最高権威の人々が招待講師として参会された。

教室の現スタッフは，川明（助教授，精神生理学研究のため米国インディアナ州パーデュー大学留学中），藤田礼一郎（講師，糖尿病研究班主任），新村健（講師，循環器研究班主任），林茂文（助手講師，気管支喘息研究班主任），小川卓爾，田中弘允，河野泰子，楠元正輝，稻森幸浩（以上助手講師），名越敏秀（助手）のほか無給副手，大学院学生，院外医局員，専攻生を含めて総計54名である。

## 第二内科学教室

### 第二内科20年のあゆみ

佐藤八郎教授を迎え、第二内科学講座が開講されたのは昭和22年4月、鹿児島医学専門学校が開設されてから丁度5年目の春のことである。当時は終戦後の混沌たる状況の下で研究費とて乏しく、設備器械は全く考えられない時代で、バラックの部屋に実験動物と同居する有様であった。当初は佐藤教授以下7名（野元淳孝、押領寺源一、丸野利正、橋本修治、米沢藤士、植村芳郎、有馬俊典の諸先生）のスタッフで発足された。研究面では先ず簡易な肝機能検査法としての昇汞反応、焦性ブドウ酸反応について瀬分、橋本の両先生が着手された。これが現在橋本助教授らによって推進されている肝臓研究のスタートである。一方22年夏、南薩地方に三日熱マラリアが大流行し、教室をあげてその調査に当たった。この頃からフィラリア症の調査も開始され、29年奄美大島の祖国復帰と共に米沢、福島、尾辻、高木講師を中心として、フィラリア症及びハブ毒の調査研究も進められるようになった。これらの成果が実り、佐藤教授は28年南日本文化賞を、38年には桂田賞を受賞された。23年柚木先生が入局され、胃癌患者の外科的切除標本を材料として癌腫毒の研究も開始された。これが腫瘍研柚木教授をはじめとする癌研究の始まりである。23年には戦争中から荒れ放題の霧島温研に教授自から乗込み、これを再建し、教室から徳重助教授、引続いて安部康三郎助教授をおくり、温泉治療の研究が始められた。27年4月新しく出来た病院は類焼に遭い、大切な研究資料は全部灰燼に帰してしまった。当時教授以下約30名の医局員は戦後同様の虚脱感に襲われる中で再び立ち上がらねばならなかった。幸い3年後には現在の鉄筋の病院が完成し、33年には国立に移管され、診療及び教育面も充実し、落着いて研究出来るようになった。32年にⅡ型胃カメラを入手し、当時九州内では我教室が先鞭をつけ、34年から中馬講師を中心に集団検診にもとりかかり、多くの症例が検討され、今日の国内における指導的地位が確立されるに至った。尚33年4月佐藤教授はワシントンにおける世界消化器病学会で講演し、同時に広くアメリカ医学教育の現状を視察された。又同年12月M.Dアンダーソン癌研究所のGriffin教授の招きで、同研究所に柚木先生が留学し、癌腫毒の研究を推進し、アメリカ癌学会でその成果を発表し、1年半後帰朝された。引続き尾辻省悟博士も同研究所に留学し癌のポルフィリン代謝の研究を行ない、39年帰朝され、同時に鹿大病院中央検査部長に就任された。

35年には佐藤教授の尽力により熱帯医学研究施設が開設され、教室から福島博士が助教授として就任され、39年教授に就任され現在に至っている。41年10月橋本助教授は Recknagel 教授の招きにより Western Reserve 大学に留学され、アルコール性肝障害の発生機序の解明に当り、その成果はアメリカ肝臓学会で発表され、更にこの問題を推進し来春帰朝の予定である。43年1月には念願の腫瘍研が発足することになり、初代教授として(病態生理) 柚木博士の就任が決定したことは喜ばしいかぎりである。

### 癌研究の沿革並びに業績

教室の癌研究は、Tumor and Host Relation の問題を生物学的に追求することから始まり、さらに発展して、発癌、診断、治療面の研究に向いつつある現状である。26年初めて日本癌学会に癌腫毒に関する研究を発表してから丁度5年目、日本内科学会に宿題報告、「癌の生物学的診断」を発表し、諸種の癌反応の基礎、臨床にわたる成績を報告した。また佐藤教授は1958年 Washington における第一回世界消化器病学会に “The Biologic Diagnosis of Gastric Cancer” の演題で、(日本消化器病学会の代表として) 講演した。36年には第20回日本癌学会において特別講演「生化学的変化よりみたいわゆる前癌状態」を発表し、同年第2回日本老年医学会シンポジウム「消化器の前癌状態」でその後の知見を発表した。更に第56回日本内科学会(37年)ではシンポジウム「癌の診断」を司会し、教室からは「特殊毒性物質検索による癌診断」(佐藤、柚木)を報告し、癌腫毒の診断面への応用について述べた。癌腫毒の化学的本態は Lipo-polypeptide で、生物作用発現に Guanidino 基が関与することを認め、その成果は、第一回日本臨床代謝学会(39年)のシンポジウムで「癌腫毒とその作用機序」(柚木)、The Ninth International Cancer Congress(Tokyo)に Purification of Toxohormone and Its Biologic Action (Sato et al.)として発表された。また24回日本癌学会総会(1965)ではシンポジウム「担癌体の栄養と腫瘍発育の問題」を担当した。腫瘍発育は、必須アミノ酸インバランスによって著明に抑制されることを認め、臨床的に低 Phenylalanine-低 Tyrosine 食を白血病患者の食餌療法に応用し、その効果を確認している。

化学療法に関しては日本癌治療学会総会(1965)日本癌学会総会、第4回日本癌治療学会(1966)の再度にわたり、シンポジウム「癌化学療法の効果判定基準」として発表した。

発癌問題では奄美大島産ソテツ配糖体 Cycasin に強力な発癌作用のあることを第25回日本癌学会総会(1966)に発表し、この報告は本邦では最初であ

り、にわかに諸家の注目するところとなった。

一方胃疾患診断の新しい Approach として胃液の生化学的な解析を試み、胃液内諸成分の分泌動態を追求し、その成果は日本消化器病学会第5回秋期大会(39年)のシンポジウム「胃癌の診断」(柚木), The Second Asian Congress of Gastroenterology, Chandigarh in India (1964) に Biochemical Changes peculiar to the Gastic Juice of Gastric Cancer. (Sato and Yunoki) 日本消化器病学会第5回秋期大会(1964)のシンポジウム「胃疾患と胃内酵素」(柚木), The Third World Congress of Gastroenterology, Tokyo (1966) に Significance of High Molecular Substances in Gastric Juice for Diagnosis of the Gastic Diseases, especially Gastric Carcinoma. (Sato, et al.). 第17回日本医学会総会(1967)シンポジウムで「胃液分泌動態よりみた早期胃癌」(柚木)として逐次発表して来た。更に胃液内諸成分の分泌動態を総合的に表現する方法として pH 連続滴定法を考案し、早期胃癌の新しい検査法として検討している。

### 肝臓研究

戦後導入された肝機能検査法を教室でも逸早く臨床的に用い、新しい肝機能検査法として尿焦性ブドウ酸反応を開発し、実に昇尿反応やチモール濁濁反応の臨床的価値や化学的本態を究明し高く評価されることとなった。代謝面で橋本助教授らはは先ず佐藤教授の研究を引継ぎ、ビタミン代謝を追求し多くの知見を得た。又、蛋白質、脂質、核酸、糖質等の各代謝や肝性昏睡の病態生理、各種薬剤の効果など色々の角度から検索が進められてきた。

37年国際肝臓研究会日本支部総会においてシンポジウム「慢性肝障害に対する核酸関連物質」(橋本)を発表した。38年には熱帯医学会総会シンポジウムで「高熱環境と肝疾患」(佐藤)を発表し、同年日本消化器病学会秋期大会では脂肪肝の問題がシンポジウムとしてとり上げられ「アミノ酸インバランスによる脂肪肝」(橋本)を発表し、Cystine 添加しアミノ酸インバランスを強化すると高度の脂肪肝が起ることをみいだした。更に脂肪肝から線維化に発展する過程を各種代謝面から追求し、その発生機序の解析を試みた。その成果は40年日本消化器病学会秋期大会のシンポジウムにおいて「脂肪肝から肝線維化への過程の解析」(橋本)として発表した。一方肝性昏睡の原因究明も進められ、39年医科学シンポジウムにおいて、アンモニアの毒性について肝性脳症との関連を中心に発表し、更に、同年日本消化器病学会秋期大会のシンポジウムでアンモニア停滞による肝性脳症発生機序及びその対策について新知見を発表

した。

又、42年日本肝臓学会総会のパネルで「慢性肝炎と代謝動態」（恒成）を発表した。現在米国留学中の橋本助教授はアルコール脂肪肝研究に没頭し、その成果の一部は現にアメリカ肝臓学会で発表して、実に脂質過酸化に関する基礎的研究を推進して在り、その成果が期待される。

## 胃疾患

胃疾患診断法の進歩は目覚ましいものがあり、最近では1 cm以下の微細病変の質的診断も可能となって来た。教室でも、昭和34年以来、胃集団検診の方法論について研究をすすめ、生化学的スクリーニング法、レ線間接法、集検用胃カメラ単独、又は間接同時併用法等についてその各々の方法の検討を進め、全国に先がけ一応胃集検方式の一般化に成功し、これらの成績は日本胃集検学会、日本内視鏡学会、日本消化器病学会において、前後九回シンポジウムを担当し、報告した。（佐藤、中馬、種子田、大山、渋谷）

X線検査の進歩、胃カメラの種々の改良、Fiberscopeの改良進歩に伴って、このFiberscopeを利用しての直視下生検法、直視下洗滌細胞診等が早期胃癌発見の補助手段として画期的な診断法が開発され、教室でもこれらの方法の臨床的応用を検討、多大の成果をあげこの成績は、内視鏡学会、九州癌研究会、日本細胞診学会のシンポジウムで夫々発表し、第一回世界内視鏡学会でその総合成績にふれた（佐藤、中馬、種子田、大山、渋谷、松原）。

早期胃癌発見の努力とともに、教室の早期胃癌症例も73例に増え、佐藤教授は第3回世界消化器病学会のパネル“Early Diagnosis of Stomach Cancer”のモデレーターや、消化器、内視鏡、胃集検学会の日本医学会（名古屋）シンポジウムで前後2回、“早期胃癌”というテーマで司会し、日本人の胃癌は日本人の手でその病理、病態生理を追究したいと努力している。教室でもこのパネルに参加、主に胃癌胃液の面からの成績にふれた（柚木）。胃X線検査法に二重造影法が導入され、早期胃癌の発見も容易になってきた。更に小さい早期胃癌及び潰瘍瘢痕の診断の足がかりとして、二重造影法における辺縁の微細病変を検討し、昭和41年度、内視鏡秋期大会で、「潰瘍性病変の微細診断と限界」と題するシンポジウムで報告した（政）。

## 寄生虫病、熱帯病研究の沿革と業績

### 1. フィラリア症

教室開講当初の頃、県下の辺地、離島に巡回診療に出かけた際、糸状虫症の高度の浸淫に気付いたのが、本症の調査、診療に従事するきっかけとなった。

研究は疫学的調査と治療法の確立を中心に推進された。現在迄鹿児島県において50万名以上の検血が実施され、2万名以上のMf陽性者が発見された。これらの成果は、第15回日本医学会総会、第16回日本医学会総会において、夫々、佐藤教授、福島教授により発表された。又38年、39年の熱帯医学会総会において、佐藤教授はシンポジウム「フィラリア症対策の実際」、「化学薬品による熱帯病の予防と治療」を担当した。40年日本寄生虫学会総会では、尾辻講師がシンポジウム「寄生虫症の比較疫学」を担当した。41年には、日本伝染病学会総会にて佐藤教授は「フィラリア症」の特別講演を行ない、同年夏には、太平洋学術会議、日米医学協力会議において、佐藤教授は「フィラリア症の治療」について発表した。現在は、電子顕微鏡を用い、糸状虫の微細構造、抗糸状虫剤の作用機序の形態学的追究を行なっている。

## 2. 肺吸虫症，その他

肺吸虫症については、県下の浸淫状況を明らかにし、ピチオノール製剤による治療法を追求している。又、電顕的研究でも多くの知見をえている。

熱帯性下痢症，糞線虫症，鉤虫症，蛔虫症についても種々の面より追求している。

## 3. ハブ毒

ハブ毒については、電気泳動法，免疫電気泳動法などによりハブ毒蛋白の分離を行ない、次いで急性中毒症における毒の臓器親和性及び組織局在性をIsotopeで追跡し、その特異性を明らかにした。これらの成果は、1954年東大伝研，予研との合同研究会で特別講演を行ない、又、日本熱帯医学会総会のシンポジウム，昭和41年の太平洋学術会議にて報告した。

# 神 經 精 神 医 学 教 室

わが神経精神医学教室は、昭和20年6月県立鹿児島医学専門学校における神経病学および精神医学の講義の開始が発端となり、爾来23年間に、県立鹿児島医科大学，県立鹿児島大学医学部を経て、鹿児島大学医学部へと、学制機構の変容するなかで、それぞれ、その神経精神医学教室として、逐次発展を続けて来た。

これより先、県立鹿児島医専の母体となった県立鹿児島病院は、大正13年3月、医育機関以外の総合病院としては、わが国で始めて、精神科外来を開設し、同時に鹿児島郡中郡宇村字牛掛（現鹿児島市宇宿町）通称二軒茶屋の地に定員31の精神科分院を設置し、精神病患者を収容して、その治療に当たったこと

は、わが国臨床精神医学史上高く評価されているところである。

初代の精神科部長には、当時京大助教授であった大沢宏が就任した。同氏病死の後、九大講師新名常造がこれを継ぐ。現当教室主任佐藤幹正は、前任者転出の後を受けて、第三代の部長となる。

昭和6年12月、前記の鹿児島病院分院は、精神病院法により国の指定を受けて、分離独立し、県立鹿児島保養院と改称、神経精神科を標榜して診療を継承した。その後2回の増築によって定床150となる。大東亜戦争の風雲が急を告げるにおよび、同病院の敷地は、近接して設置された海軍航空隊に接收されることになり、昭和18年2月始良郡重富村平松に移転した。

鹿児島医専においては、昭和20年度から、第1期生に対して精神医学の講義が行なわれることになったが、当時付属病院に精神科がなかったため、前記保養院長佐藤幹正がその講師を嘱託された。当時内科も未だ人容整わず、神経病学の講義も兼担した。同年6月17日講義開始の予定であったが、偶然にもその前夜、鹿児島市はB29機群の大空襲を受け、市街の大部分が焼失し、歴史ある付属病院の建物も同時に全焼するに至った。そのため、臨床講義は、当時戦況の激化によって閉校中の県立盲啞学校（草牟田町）の講堂を借りて行なわれることになった。その頃、外科の患者は県立教員保養所の建物に収容されており、隣接した保養院の手術場を利用していた。

終戦による盲啞学校の開校により、臨床講義は一時鴨池町の基礎部門の講堂で行なわれていたが、昭和22年新付属病院の落成とともに山下町に復帰した。

昭和24年10月30日、大学昇格に備えて、新たに神経精神医学教室が設けられ、教授、助教授、助手各1名の定員が配当された。しかし建物のほうは制度に伴わず、教授室のほかは教室専属のものなく、外来診療は、倉庫を改造した4坪あまりの粗末な室で行なっており、この室はまた医局を兼ねていた。病室は、現在の臨床講堂横の通路付近の台地上にあった当時の第5病棟中に5床が配分された。これも、戦後急造の粗末な仮設バラックで、神経病患者だけしか収容できなかった。これより先、昭和24年3月県立鹿児島医科大学の開設にあたり、大平学長は、県立保養院（250床）を代用付属病院として文部省に申請し、同院を学生の実地修練の場にあてることを条件とした。

このようにして再建された付属病院も、昭和27年4月、付近の民家からの出火によって類焼し、一夜のうちに再び廃虚と化した。その後、外来診療は、現在の鹿児島家庭裁判所の敷地内に終戦当時建設されていた県有の仮小屋を借用して、続行されたが、神経科に配当されたのは、2坪半の小室1個で、入院室

は皆無となった。

昭和30年4月、現付属病院の建物の落成により、神経科にも始めて、狭いながら専属の外來診療室が配分された。病室は、第1病棟の3、4階および、その連絡棟などに分散して、約20床が割当てられた。助手も1名増員されたが、なお不完全講座で、精神病棟もなく、精神科臨床の主力は県立保養院に頼らざるをえない状態であった。

昭和31年4月鹿児島大学移管とともにようやく完全講座となり、教授1、助教授1、講師1、助手5の定員を与えられた。その後さらに助手定員1を加えられて今日に及んでいる。

昭和33年2月現第5病棟（定員43）が新築されるに及び、神経科の患者をここに1括収容することになった。昭和41年2月精神病棟（定員6）を付設して、不十分ながら、一応神経精神科としての形体が整備された。しかし、精神病患者の示説には、なお臨時に県立保養院の病棟（現定員375）の利用を余儀なくされている実情である。従って次期の移転新築にかける期待は特に大である。

当教室においては、その間、南九州地区における精神病の地方色（人類学的特徴を含む）並びに南西諸島および東南アジアにおける精神病の病像に影響を及ぼす迷信・習慣などの調査、神経症、躁うつ病、てんかん、易感性関係妄想などの臨床、精神病の病前性格、精神病患者の責任能力に関連ある諸問題、覚醒アミンおよびエフェドリンによる中毒症、接種マラリアの特性、重症筋萎縮症の遺伝型式などの諸題目を含む臨床神経精神医学的研究；中枢神経系における、実験的ハロゲン塩中毒症、腸閉塞症、火傷ならびにコバルト・アイソトープによる傷害（神経細胞の特異な病変）、ハブ蛇咬傷症（脱髄現象）、トキソプラズマ症（感染系路による病像の差異）などに関する組織病理学的研究；てんかん、精神薄弱症、盲人の脳波、びまん性低電位速波の臨床的意義づけ、睡眠賦活法（OBA および OBL による）などを含む臨床脳波学的研究；ならびに、生化学教室との連繫によって行なわれた、脳代謝などに関連ある2、3の生化学的研究などを行ない、幾多の興味ある新知見をあげた。

#### 教室在籍者名簿

教授

佐藤 幹正（昭和）24.11～43.3

助教授

高尾 健嗣 25.5～33.9

野田 弘毅 34. 3 ~34.12  
 森蘭 静哉 35. 4 ~36. 2  
 朝倉 哲彦 36. 3 ~

講 師

佐藤 幹正 (兼任) 20. 6 ~24.10  
 森蘭 静哉 33. 5 ~35. 3  
 朝倉 哲彦 (兼任) 35. 1 ~36. 2  
 千島 寛二 35. 5 ~37. 5  
 中摩 昭二 (兼任) 37. 8 ~37. 9  
 中村 精吉 (兼任) 37.10~41. 3  
 栄 兼重 38.10~40. 2  
 今村 一英 40. 4 ~  
 新里 邦夫 (兼任) 42. 6 ~

教室に在籍した者 (入局者順)

佐藤 幹正 20. 6 ~  
 上村 忠道 25. 5 ~30. 1  
 高尾 健嗣 25. 5 ~33. 9  
 今村 保介 25.10~26. 4  
 佐保 威彦 25. 3 ~35. 3 (1時不詳)  
 41. 4 ~  
 森蘭 静哉 25. 5 ~36. 2  
 伊東 克己 26. 7 ~27. 5  
 31. 3 ~34. 3  
 前田 実光 29. 1 ~35. 1  
 永田 行雄 30. 3 ~35. 3  
 林 督 30. 3 ~35. 3  
 中村 精吉 30. 8 ~41. 3  
 千嶋 寛二 31. 2 ~37. 5  
 楯林 義晴 31. 3 ~34. 2  
 落合 正直 31. 4 ~34. 9  
 中摩 昭二 31. 4 ~37. 9  
 市坪 秀美 31.12~35.11  
 藤後惣兵衛 31.12~36.12  
 田中 英世 32. 4 ~38. 3

|                 |               |
|-----------------|---------------|
| 猪鹿倉 武           | 33. 4 ~38. 4  |
| 神田 弥栄           | 33. 4 ~34. 3  |
|                 | 41. 4 ~       |
| 今村 一英           | 33. 4 ~       |
| 渊脇 工            | 34. 1 ~39. 3  |
| 野田 弘毅           | 34. 3 ~34. 12 |
| 栄 兼重            | 34. 4 ~40. 2  |
| 烏野 兼光           | 34. 4 ~40. 3  |
| 新里 邦夫           | 34. 5 ~       |
| 高森 治生           | 34. 7 ~38. 11 |
| 朝倉 哲彦           | 34. 12~       |
| 宮蘭 栄治           | 35. 1 ~39. 1  |
| 米盛 学            | 35. 4 ~35. 11 |
| 前田 恒            | 35. 4 ~42. 3  |
| 門松 経三           | 36. 4 ~37. 3  |
| 黒松正一郎           | 36. 6 ~39. 5  |
| 小城 三夫           | 36. 7 ~39. 8  |
| 横峰 利夫           | 36. 7 ~39. 8  |
| 田辺 健夫           | 37. 4 ~41. 3  |
| 福島 忠            | 37. 4 ~41. 6  |
| 厚地 政幸           | 37. 4 ~42. 3  |
| 末広 俊雄           | 38. 4 ~39. 3  |
| 横山 陽二           | 38. 4 ~42. 3  |
| 田口 勇            | 38. 6 ~42. 3  |
| 神崎 康至           | 39. 4 ~       |
| 尾辻 達意           | 40. 4 ~42. 3  |
| 平野 隼南雄          | 40. 4 ~41. 3  |
|                 | 41. 4 ~       |
| 迫 一男            | 41. 4 ~42. 3  |
| 川池 浩二           | 40. 4 ~       |
| 畠中 祐幸           | 40. 4 ~       |
| 滝川 守国<br>(旧姓飯村) | 40. 4 ~       |

|                |         |
|----------------|---------|
| 向田 道生          | 40. 4 ～ |
| 八木 和一          | 40. 4 ～ |
| 鶴 紀子<br>(旧姓皆川) | 41. 4 ～ |
| 吉田 修三          | 41. 4 ～ |
| 竹元 隆洋          | 41. 4 ～ |
| 筑波 貞男          | 41. 4 ～ |
| 矢野 正敏          | 42. 4 ～ |
| 三原 忠紘          | 42. 4 ～ |
| 佐藤 望           | 42. 4 ～ |

## 小 児 科 学 教 室

### 1. 教室の沿革

昭和18年4月県立鹿児島病院を母体として、県立鹿児島医学専門学校が創設されると同時に、県立病院小児科部長、長野祐憲博士が初代教授に任命され、小児科学教室が開設された。その後昭和25年3月県立鹿児島医科大学に昇格したため、医科大学小児科学教室となり、更に昭和27年4月県立鹿児島大学医学部として統合され、昭和33年4月国立移管と共に、鹿児島大学医学部小児科学教室が誕生した。この間、昭和26年3月長野祐憲教授が熊本大学医学部教授として転出され、二代教授として昭和26年9月永山徳郎博士が就任された。10年後の昭和37年4月永山教授も九州大学教授として転出され、三代教授として寺脇保博士が任命され、現在に至っている。

### 2. 建築物

県立鹿児島病院時代に鹿児島市山下町70番地（現在城山町8の3）建立された木造建築の附属病院は、昭和20年の米軍の大空襲により完全焼失した。そのため市内草牟田町の県立盲啞学校の仮病院に移転、その後昭和21年8月県立第一高等女学校で仮診療、又昭和21年9月さらに県庁別館で仮診療、昭和22年3月山下町武徳殿跡に急造された外来診療所時代を経て、昭和24年2月旧病院跡に再建された附属病院に復帰した。

昭和27年4月再び類焼にあい、新築されたばかりの病院も完全焼失、再び旧武徳殿仮診療所に戻り、昭和29年3月鉄筋四階建の病院が現在の地（城山町8の3）に復帰することができた。

### 3. 教室研究室及附属病棟

昭和29年以後、現在の鉄筋病院に移転したが、現在では我教室のみならず、病院全体として狭隘の甚しきをかこっている。今や新築移転の問題が軌道に乗りつつあり、楽しみに待っているところである。

研究室としては、教授室、助教授室、医局兼図書室（兼食堂）、生化学研究室、染色体研究室の二室である。従って、診療終了後は診療室を、又中央検査室や基礎の生理学や生化学の教室を借用あるいは協同研究させていただいている。また昭和41年度にはリウマチ熱研究のためモダンな実験動物室5室を新築した。

診療に関しては、新来診察室、再来診察室、外来伝染病室、外来検査室、外来計測室、治療室、学生予診室がある。

病室は一般病棟（1等1床、2等4床、3等28床、調乳室、浴室、面会室、家族付添室）未熟児室、結核病棟3床、伝染病棟4床よりなっているが患者激増のため狭隘を感じている。

## 人 事

### I 教授

長野祐憲教授は昭和18年4月小児科学講座創設以来、熊本大学へ転出までの8年間在職された。先生は剛毅朴訥度量の大きい方であり、第二次大戦中から終戦後の混乱期という難局の際に終始一貫学生の教育陶冶、医局員の指導に当られ、今日の小児科学教室の基礎をきづかれた。その功績は偉大なものがある。

また一方地方会の開設、医師会の講演などに尽力され、研究費、設備費皆無に等しい中で主として細菌学の研究を続けられた。

永山徳郎教授は昭和26年9月から九州大学へ転出までの11年間在職された。先生の時代も、病院が類焼にあたり、県立から国立への移管などと多事多難であった。しかし先生は天性の外柔内剛の精神でこれらをのり切られ、よく長野教授のつくられた伝統を発展させて行かれた。

すなわち教育診療の面では精鋭の教室員を育成され、学生の教育に熱情を示され、又患児及びその母親の敬愛を一身に受けておられた。

研究の面では県立時代の研究費の乏しい中から臨床ウイルス学の研究に先ずはいられた。（特に突発性発疹症のウイルス学的研究）一方、恐らく日本の小児科学会では最も早くエレクトロニクスを導入され、当時市販のなかった心音、呼吸音、超音波等の記録器の試作に骨身をけづる苦心をされ小児の循環動

態の研究に打ちこまれた。その成果（永山教授十周年誌に詳述）は学会で高く評価された。

寺脇保教授は昭和38年2月に就任され、現在満5周年を迎えられたわけである。

先生は、初代二代の草創の苦しみから、発展期に入った時代に就任されたことに責任を感じ、鹿大愛に燃えて頑張っておられる。

教育では「学生と共に、医局と共に」をモットーとされ、治療では「病人をなおすことこそ臨床医家の本分である。患児と悪戦苦斗せよ」といって陣頭に立っておられる。

研究の面では、「体質と遺伝」を旗印として臨床遺伝学の研究、年来の御仕事である循環動態からみた体質学の研究、リウマチ熱の病態生理の研究に教室の総力を結集しておられる。

又、医師会その他の啓蒙講演にも寸暇をさいて出かけ、大学と地域社会との交流にも力を致しておられる。

## II 助教授

|       |                  |
|-------|------------------|
| 田中 尚義 | 昭和19年5月～昭和25年7月  |
| 淵上 勝男 | 昭和26年10月～昭和31年5月 |
| 西 健一郎 | 昭和31年7月～昭和32年7月  |
| 早川 国男 | 昭和33年1月～現職       |

## III 講 師

|       |                  |
|-------|------------------|
| 淵上 勝男 |                  |
| 西 健一郎 | 昭和28年5月～昭和31年6月  |
| 早川 国男 | 昭和31年7月～昭和32年12月 |
| 橋本 久  | 昭和33年5月～昭和34年9月  |
| 川崎球磨夫 | 昭和34年11月～昭和35年6月 |
| 小松 才二 | 昭和37年1月～昭和38年4月  |
| 沖 浩   | 昭和38年5月～昭和38年9月  |
| 平山 清武 | 昭和39年1月～現在       |

## IV 医局長

|       |
|-------|
| 淵上 勝男 |
| 西 健一郎 |
| 早川 国男 |
| 川畑 益也 |

平山 清武  
河野 康  
川野 通昭  
鮫島 信一

## V 学位受領者

教室開講以来長野、永山、寺脇三教授の指導のもとに、学位を受領したものは19名に達している。

## VI 歴代看護婦長

現在の看護体制が確立してからの看護婦長は、藤本(橋口)スミ、新秋枝、菱嶋祥子(現)である。

# 第一 外 科 学 教 室

教室の歴史といっても、昨日があり、今日があり、入局する者やがて1人立ち去り行く者、その人達の織なす日々の積み重ねに過ぎない。長い或は短いと言っても、それは「時」のたわむれでしかないではないか。歴史の峠に立って振り返れば、昨日より今日につづく一筋の道……わが教室史の概要を記す。

昭和18年4月、県立鹿児島医学専門学校開校と同時に、外科学講座は石田堅三郎教授(九大医学部、大正7年卒、医博、前県立鹿児島病院外科部長、同病院長)が担当されている。同教授は昭和20年6月17日、第2次大戦終期の鹿児島市焼夷弾攻撃の際、惜しくも爆死された。同教授の在任中は、第1回医専生徒(昭和18年4月20日入学式)も3年生になったばかりであり、医局も県立病院外科時代そのままの状態であったと思われる。

石田教授の後任として、昭和20年10月着任された新教授は森良雄教授(九大医学部、昭和10年卒)である。当時、医専附属病院は戦災(昭和20年6月17日)により焼失し、鹿児島市草牟田町の盲啞学校校舎の一部を借受け、仮附属病院を開設中であつた。同教授は事情あつて、昭和21年8月退職されたのであるが、この時期までには本校卒業生は出ていない。

昭和21年10月、県立鹿児島医学専門学校講師嘱託、昭和22年8月教授となられた現在の内山八郎教授(九大医学部・昭和5年卒・元九大第1外科助教授、陸軍軍政地教授……ジャカルタ大学付)の着任を迎え、ここに教室の眞の誕生が訪れることとなる。当時とて、外来診察所は鹿児島県庁別館を借受けていた時代であつた。学生講義は市内外の開業医2～3名が非常勤講師として一部を

担当していた。第2次世界大戦の終了と共に、我国は未曾有の一大変革が強行され、その一環として医育制度にも医育の統一、医師の資質向上の必要性が強調され、全国医専を大学程度に昇格させ、更にインターン1年を終了し、国家試験を通過した者に医師の資格を与えるという制度となり、これに伴い医専の存廃が問題となり、我が鹿児島医専も廃校の危機に直面するに及んだのである。しかしながら医専が設立された当初の趣旨にも明かな如く、我が鹿児島をふくむ南九州地区に、医育機関の存在が必要なることは勿論、台北大学を失った今日、地域的にみて熱帯医学の研究上我国における最重要なる医育機関であるとの自覚から、昭和21年10月25日、鹿児島県議会において万場一致、昇格が決議され、直ちに県立鹿児島医科大学設置の認可申請がなされたのである。かくて翌22年6月18日、県立鹿児島医科大学設置が認可された。医専と大学予科が併存する形となったわけである。

昭和23年3月、医専第1回生の卒業、昭和24年、始めて母校出身の外科入局者が生れた。教室の歴史はその担当教授の歴史である。病院とは名ばかりの誠にお粗末な施設で、苦斗が始まるのである。当時教室構成メンバーは永田豊作助教授（九大医学部・昭和20年卒・昭和24年～昭和26年）と実動教室員10名前後であった。

教室の形体が一応整った矢先き、昭和27年4月24、隣接民家よりの出火により、戦災で復興したばかりの附属病院は類焼全焼したのである。教室も病院の運命と別である筈がなく、ふりだしにもどったのである。

これより先、昭和25年3月、今村健二郎助教授（九大医学部・昭和17年卒・医博）の着任をみ、罹災当時在局者15名前後であった。

かかる惨憺たる環境と乏しい器材をものともせず、内山教授は全国に先きかけて胸部外科の研究を開始され、昭和23年頃から、肺臓手術を手掛けられたことは、地域社会にとって又全国的視野からも注目される劃期的教室の業績であった。当時胸部外科は高位脊推麻酔をもって行われ、これを良く駆使して昭和29年頃までに1200例に及ぶ胸部手術が施行されている。高位脊麻に関する研究がなされたのもこの頃である。以後胸部外科は教室の伝統的業績として続けられて行くのである。

その他に、副腎の神経支配に関する研究、胆管の再建術への努力、ハブ毒に関する研究などが活潑に展開されていた。

昭和28年頃から気管内挿管麻酔の導入により、胸部外科は愈々盛んとなり、現在まで約4,000例に及ぶ手術症例を誇っている。

昭和30年3月4日、現在の鉄筋四階の附属病院の新築落成をみ、教室もその体制をとみに整えてきた。

昭和32年9月14日(土) 15日(日)の両日、第9回日本結核病学会九州地方会総会が、内山八郎教授会長の下に当地鹿児島市中央公民館で開催され、一般演題144題、特別講演2題が盛会裡に行われている。

他方、内山教授は食道疾患に対する手術々式の工夫改良に熱意をそそがれ、昭和33年10月頃から本格的に“胃管形成による食道再建の研究”を今村助教授を始め、教室スタッフの努力で開始している。

昭和33年1月、内山教授、附属病院長就任。かくして教室の研究体制も大いに整い、年毎の入局者も増し、教室は年を追って膨れて行くのである。

教室の研究テーマとしては、

(1)脳神経外科領域：

てんかんの手術的療法及び硬脳膜の神経分布に関する研究、脳外科における病態生理に関する研究。

(2)胸部外科領域：

肺結核の手術的療法、切除結核肺の病理学的細菌学的研究、肺切除後気管支瘻防止に関する研究、心肺機能に関する研究、肺血管造影に関する研究。

(3)自律神経外科領域：

高血圧症及び特発性脱疽に対する手術的療法、副腎髓質、皮質の自律神経支配に関する研究。

(4)胆道外科領域：

胆管形成に関する研究

(5)消化管外科領域：

胃管形成による食道再建に関する研究。

胃切除術式の改良に関する研究。

(6)ハブ毒に関する研究：

各臓器に対する病理組織学的研究、ハブ毒の酵素活性に関する研究。

(7)血管領域：

血栓症の病態生理学的研究、小血管吻合に関する研究、末梢循環障害のレ線臨床的研究。

(8)麻酔関係：

高位脊麻法に関する研究、低体温法に関する研究。

など多方面の研究活動が成果をあげ又続けられていった。特に教授の食道外科

の研究は、斯界の注目を浴びるところとなったことは、自他共に認めるところである。

昭和37年8月4日、内山教授は羽田発米国外遊の旅に出発された。同年8月Portlandで開催されるAmerican Academy of Osteopathic Surgeonsの第10回年次総会、9月New Yorkで開催される第13回国際外科学会、10月Miamiで開催されるAmerican College of Surgeonsの第35回年次総会に講演されるためであった。肺臓外科、上中部食道癌の外科、上腹部の外科、交感神経外科などについて、講演並びに映画を供覧されたのである。教授のこのたびの渡米は22年ぶりのことであり、恩師故Dr. Evarts Ambrose Grahamの墓前にぬかづき、同門のDr. Brian Bladesと旧交を温められ、且つ米国外科学の現況を視察されて、同年11月帰国された。

それより先、今村健二郎助教授は開業のため昭和36年2月退職、昭和37年6月1日付で現在の上山幹夫助教授（鹿医大・昭和28年卒・医博）がその任についている。

教授の外遊と前後して、米国より内山教授を慕い留学する者が続き、1年～2年の滞在予定で10名の米人医師留学研究生を迎えたことは、教室として一段と海外交流を深めることとなったのである。

昭和39年5月4日、内山教授は再び第14回国際外科学会出席のため、オーストリア・ウィーンに旅立たれたのである。気管支断端閉鎖法（講演）、胃・食道外科における胃管形成術（映画）及び結核外科関係の座長を務められた。ドイツ、フランス、スイス、イタリアを経て米国に渡り、同年6月末帰国された。昭和40年、内山教授 日本学術会議候補選挙、教室の研究成果は年を追う毎に着実に延びて行った。

昭和41年8月、教授は再三の外遊をなされ、メキシコ市で開催された第15回国際外科学会に、愈々内熟せる胃管形成後縦隔食道再建術及び胃手術改良法を講演されている。同年10月25日帰鹿現。同門の4～5名の随伴は話題を生んだ。

昭和41年は丁度内山外科開講20周年にあたり、11月26日（土）・27日（日）の両日、同門合集い、意義深い記念の会を施行した。昭和42年5月、第4回九州外科学会、小児外科学会が内山八郎教授会長の下に当地で開催、東大木本・東北大桂・徳大田北・広大上村の諸教授の特別講演は偉観であった。

昭和42年11月現在で内山外科同門77名（内外人10名）、在局者54名であり、鹿大医学部内の大教室の貫禄を示している。

講師を列举すれば次の如くである。（ ）在局期間。河井時義（昭26.4—

昭28. 4), 前用和博(昭26.10—昭33.11), 持松文彦(昭23. 2—昭27.12), 若松大(昭21. 7—昭29. 6), 本田修(昭28. 7—昭29.12), 窪田勇(昭30.12—昭32.12), 大迫英彦(昭23.12—昭30.10), 鮫島耕一郎(昭24. 5—昭35. 6), 若松道範(昭26. 4—昭35. 6), 橋口俊幸(昭29. 4—昭和40. 3) 坂元明雄(昭30. 4—現在)。

最後に教室各研究グループの現況を記述してまとめとする。

#### 食道外科研究班：

現在、教授の研究の集点は食道外科の研究に向けられ、ここ数年来の研究成果は高い評価をうけ、南九州唯一の食道外科センターの観を呈し、教授のたゆまざるアイディアから生れる術式の検討は、遂に胃管形成後縦隔經由食道再建の方法を確立し、極めて優秀な成績を上げている。食道にとどまらず、胃手術・胆道手術の術式に関しても、常に新しい検討が加えられつつある。内山式食道吻合固定鉗子、彎曲胃管縫合器の考案がある。

#### 心肺研究班：

外科療法に伴う術前後の心肺機能の研究、肺高血圧症の問題・拡散能の測定に関する研究が進められている。肺移植の電顕的研究も成果をあげている。心関係では、米国の Dr. C. P. Bailey, Dr. T. Hirose のところへ定期的に留学生を送り、冠動脈疾患の外科的療法に関する研究が鋭意続けられている。

#### 血管外科研究班：

往年、内山教授の交感神経節前線維切除術式から引き継がれた末梢血管外科領域の研究は、教室の伝統的研究テーマとして営々と続けられている。Buerger 氏病とコレステロール代謝の研究、血栓症と酸性多糖類との関連性に関する研究、脾腎動脈吻合による血管外科的実験的研究から、ヘモメタキネジア、血管内凝血の問題・血流量・自製血管の研究と門広い進展をみせている。

#### 癌研究班：

癌細胞の転移に対する制癌剤の影響に関する研究が主力であり、臨床的実験的研究が続けられている。

#### 消化機能研究班：

従来の消化管手術術式と考える各種の術式を酵素学的・生化学的方面から最適の手術に式を確立すべく努力されている。胃管形成術式の消化吸收能からみた検討、小腸移植乃至利用の生化学的検討、小腸の大腸化の問題などその成果発表の日も近い。

#### 麻酔研究班：

吸気低体温法の検討，表面冷却超低体温時における各主要臓器の組織呼吸並びに腎機能に関する実験的研究，表面冷却低体温時の上部消化管出血に関する研究，超低体温時の心筋代謝などが独自の立場で努力研究されている。

#### 脳外科研究班：

脳外科領域における病態生理，実験腫瘍の研究が若い研究生の間で続けられている。

以上教室20年の歩みを概略記し，内山教授の御健斗を祈り更に教室の発展を念じつつ筆をおく。（文責：上山）昭和43年4月記

## 第 二 外 科 学 教 室

鹿児島大学医学部外科学第2講座は昭和33年に，その歴史が始った。当初は教室員も少なく，診療・研究の設備も貧弱であった。当時の模様を医局日誌から引用して偲ぶことにする。

『昭和33年10月1日附で初代教授として秋田八年教授九州大学助教授より就任。ここに正式に鹿児島大学医学部外科第2講座発足。

当初の教室員の構成は前田和博助教授（鹿大1外科より転任），山口清章講師，尾辻三郎，三宅洋三，各助手（九州大学1外科より転任）を数えるのみで，今村しずえ婦長これを助けて教育，研究，診療の体制の樹立を期して寝食を忘れて教室創りに奔走する。12月1日外来診療開始，12月4日ようやく，教室の開講記念祝賀会開催の運びとなり，開設に尽力いただいた各方面に感謝の意を表わすと共に，関係者一同その喜びを領ち合ふ云々』それから10年，教室員も年々増え現在の教室員の構成は，

|         |               |
|---------|---------------|
| 教 授     | 秋田 八年（九大16年卒） |
| 助 授     | 香月 武人（九大25年卒） |
| 専 任 講 師 | 西村 基（九大29年卒）  |
| ” ”     | 福田 明恒（鹿大32年卒） |
| 兼 任 講 師 | 迫田 晃郎（鹿大32年卒） |
| ” ”     | 有馬 栄徳（鹿大33年卒） |
| ” ”     | 今村 真敏（鹿大33年卒） |
| ” ”     | 平 明（鹿大34年卒）   |
| 以 下     | 助 手 5名        |
|         | 研 究 員 17名     |

大学院学生 17名

専攻生 2名

計 48名である。

秋田教授によって播かれた一粒の種子は、今や薩摩の風土に培われ、鹿児島の大地に根をはって、2外科という大木に生長し、次の世代の種子を实らせようとしている。その間、教室で育ち、現在、地域社会の外科の第一線で活躍中の者25名を教える。

以下2,3の教室の臨床、研究活動を紹介する。ベット数 50。一般外科は勿論であるが、特に心臓外科、血管特に門脈圧亢進症の外科、胆道系外科、消化器系外科、又最近は小児外科の患者が増加している。

心臓外科の分野は、沖縄を含めて、南九州ではじめて教室において開拓されたものであり、過去425例の心臓手術を行い、南九州における唯一のセンターとしての役割を果たしている。診断から治療までの一貫した管理が出来るのが特徴といえる。

最近では地域社会の要望に答えるべく2台の人工心肺装置を使用し、同時に2例の開心術が行われるまでになった。しかし現在尚800名以上の患者が登録されて、手術を待っている現状である。

一方、この部門の研究活動としては、体外循環に於ける代用血漿の応用、低体温時の心筋の電気生理学的研究、人工弁材質の研究、外科的心臓疾患の眼底像の研究、心臓移植の研究、等多彩な研究が行われている。

門脈圧亢進症の外科は、教授の鹿児島大学着任前より興味を持ち、鹿児島大学にも引継がれた分野であり、腹水に関する病態生理の解明、腹水の外科治療の開拓に尽力、1958年には、肝肺固着術なる新術式を創案した。

本法はその後、臨床面でも効果をあげている。さらに1962年門脈圧亢進症の中で従来外科治療が困難視されて来た、Budd-chiari 症候群型の病感に対して有効なる、脾、肺固着術を提唱し、臨床にも応用して、きわめて有効なる術式であることを実証して来た。研究面でもこれら新しく開拓された門脈系→肺静脈→左心房の血管短絡をめぐり、数多くの研究が発表されている。最近ではこの新しく開拓された門脈系→肺静脈→左心房の短絡路を予め準備することにより、門脈の永久遮断を可能ならしめた。この実験法の樹立により今後この方面の研究の進展が大いに期待されている。

胆道系外科は、主として香月助教授を中心に臨床、研究が進められている。多数の胆石症、悪性黄疸症例を持つ。一方、胆石の生成並びに形成論の面で独

自の研究を推進している。すなわち、胆汁蛋白質の研究、肝及び胆嚢の電子顕微鏡による微細構造の研究、胆石症と膵病変の関連の研究などが進められている。

以下開講以来9年間の教室業績を概観すると、学位論文16編、関連研究論文70数編、綜説90数編、症例報告その他70数編があり、この間、日本外科学会、日本消化器病学会、日本胸部外科学会等の中央医学会発表50数編、地方学会発表170数編を数える。

開講以来未だ10才に満たない教室であるが、一同これまでに培われた基盤の上に、今後一層の診療成績の向上、教育の充実、研究内容の飛躍を期している。(土持記)

## 整 形 外 科 学 教 室

宮崎教授は戦争末期の疎開と空襲に明け暮れる昭和20年4月、鹿児島医専教授として単身赴任、整形外科教室を開講されたのであるが、当時の世相はますます苛酷の度を加えつつあり、不安と憔悴の中に第一歩を踏み出したのである。終戦につづいて世の中が激しい変動を示した時代、当時物的資源は勿論のこと教授をお助けする教室員さえ皆無に等しい状態にあり、学生と看護婦を相手とする生活がすべてであったとか。研究生生活どころか診察するにも病院の治療場所がないと云う時代が、数年つづいたと聞く。かく教室員のいない時代が過ぎ、助教授に日高保志をお迎えし、若松、豊嶋、岩倉の時代から、川原、石田、堀川の時期を経て、昭和24年待望の、教え子である医専第1回卒、白坂、村山、松尾が入局され、教室も次第に活気づき、次いで第2回卒、久保田、寺島、永井(九医専)、第3回卒、松元、阿久根、奥田(旧姓、我謝)、今奈良、第4回卒、倉内、守屋、第5回卒、本田とつづき、教室は終始着実な歩みをつづけて来た。その間、戦災につぐ再度の火災(27年4月)による研究資料の喪失と云う思わぬ災禍に遭いながらも、苦勞して家兎を集め、教室の研究テーマである骨改変現象の実験が始まり、又毎週秒読会、読影会、症例研究会を開き、只黙々と絶えず教室が一つとなって基礎作りに努力が払われて来た。この頃までが教室の創生期とも云うべき時代であろう。それまで教室の発展に尽力されて来られた日高、堀川両助教授につづいて、昭和29年4月、九大より荒木崇文が助教授として着任された。名称も変り鹿児島県立医科大学としての第1回卒業生(23年)東、前田、幸泉、29年卒、鮫島(達郎)、平田(長大)、30年卒、田島、有馬(純郎)らの入局されるに及んで、教室は厚みを益し前進

して来たのである。再度、鹿児島県立大学医学部と改名され、31年卒（第1回）、前原、32年卒、鮫島（教彦）、段、33年卒、酒匂、長野、樺山、鹿大医、34年卒、今村、米盛、森口、35年卒、木山、植松、36年、大原、児玉、37年、池之上、38年、小牧、39年、谷口、40年、長嶺、宝亀、原山、今林、今給黎、41年、牧野、森本、森永、里村、楊、松田等、年毎に入局数も増し、充実と発展の一途をたどっている。その間に、8年の長期に互り教育、研究、医局員の育成につくされた荒木助教授は、37年6月、霧島温泉労災病院の開設により院長に栄転され、後任に久保田助教授（37年6月～42年3月）、42年4月、第2代労災病院長となられた。42年4月、東助教授誕生す。40年12月、開講20周年を迎え、宮崎教授のもと、同門、教室員で盛大な御祝いを行なうと共に、教室の今後の一層の奮起発展を誓ったものである。今年ではや、23年経つ。この期間、多くの紆余曲折にもめげず、教室の初期に苦勞され築かれた基盤の上に数々の業績が残されている。

研究グループとしては、大略、骨改変現象を究明するグループ、骨腫瘍グループ、リウマチ、組織呼吸、腰痛（筋電図）グループよりなる。宮崎教授の **life work** であり、教室の一大テーマである“骨改変現象。に関する研究が、先づ白坂先生により始められ、次いで久保田助教授を中心に、木山、植松、小牧、今給黎に依って引き継がれ、十数年に至り一連の研究がなされ、毎年その成果が日本整形外科学会総会で発表されている。その成果に対し、42年春、同総会にて、久保田助教授が招待特別講演を行なった。骨腫瘍グループは、先づ荒木助教授、東に依って始められた。その後、東を中心に段、樺山、児玉、池之上、原山、牧野らによって続けられ、35年、日本整形外科学会総会に於て、“骨の陰極線ルミノグラム”に関する研究、36年、共同研究“骨腫瘍に於ける微量元素の態度”について研究発表し、大いなる脚光をあび、之により日本整形外科学会賞を万来の拍手のもとに授与された。36年より“実験的骨腫瘍に関する研究”を毎年発表しているが、之は日本整形外科学会に於ける実験骨腫瘍の草分けである。発癌実験は、特に4ニトロキノリンNオキサイドに依る実験的骨腫瘍の生成は、可移植性腫瘍として、日本病理学会に、宮崎、東の名のもとに、4NQ 骨膜性線維肉腫（4NQ periosteal fibrosarcoma）として登録されている。現在も東助教授を中心に、池之上、原山、牧野らが活発に研究し続けている。

筋電図研究グループは、29年、東大整形及び生理に留学した阿久根、及び鮫島（教彦）により始められたものである。筋電図学的検査は、神経、筋疾患の鑑別、部位診断の手段として重要なものの一つである。最近凡ゆる分野で盛ん

に研究され、日本筋電図学会もすでに、20回を迎えている。当研究グループに於けるテーマは、脊椎カリエスに関するものより始まり（鮫島教彦）、36年、田島がアメリカ留学5年余の間に神経伝導速度測定の研究を果して帰国されてより、さらに活気を加え、米盛と共に腰痛症に関する検索が進められ、疼痛の客観的表示法としての、A—Pテストを考案し、腰痛症の筋電図学的検討には広く一般にA—Pテストが使用されるようになった。腰痛性疾患は、整形外科外来の中でも、最も多い疾患であり、更に詳細な研究が要求されているが、従来 of 成果をもって、42年10月の筋電図学会では、酒匂が“腰痛と姿勢”のシンポジウムに参加し、西日本整形外科学会では、宮崎教授が“腰痛の体操療法”の特別講演を行った。又近年、交通事故の増加と共に所謂、鞭打ち症が社会問題となっているが、昨年より酒匂、谷口によって、その研究が進められ、誘発筋電図に依る病状診断と臨床的検査を総合し、本年4月行われる日本整形外科学会にて発表することになっている。

組織呼吸に関する研究は、教授の脊椎カリエスの手術に関する研究の一環として、30年、鮫島達郎により始められた。即ち“骨関節結核患者血清の組織呼吸に及ぼす影響”。第1報及び第2報を31年並びに32年日本整形外科学会にて報告し、同血清の組織呼吸を抑制することを明かにした。その後、長野により引き継がれ、骨折骨髓の研究に発展、更に骨折治療過程を糖代謝の面より検討を加え、呼吸及び Embden-meyerhof 系以外の過程からもエネルギーを得ている可能性を推測したが、未だ研究は未完成であり、今後之を組織化学的に検索していく必要がある。

医学史に於けるリウマチ治療並びに研究は、既に其の源をB、Cに発し今日に至る。吾が教室に於ても、幾多の先輩諸氏がその仕事にたずさわって来たが、中でも前原（38年リウマチ学会の **Electrophoretic Studies of the Serum Protein and Glycoprotein Pattern in Rheumatoid Arthritis**）は、リウマチ協会推薦による海外紹介論文となった。前原が退局後、教授の斬新な意向により、39年春より、外来にリウマチクリニックを設け、大学病院に於ける特殊クリニックの先端を切った。先ず教室員の大原がその任に当たったが、当時、クリニック来訪者が日に60~80名に及び、夕方遅き日は、6時を過ぎ会計窓口からの苦情も度々であった。其の後、鹿屋県立病院にも整形外科が新設された際、当地にもリウマチクリニックを設けた。当時既にステロイド剤がリウマチ治療に於ける **first choice** ではなくなり、その反省期に入っていたが、未だ可成りのステロイド剤の乱用が残存していた。その意味に於ては、所謂リウマチ治

療の啓蒙に当たった意義は，“真に大なり。”と云っても過言ではなからう。爾來，特殊クリニックによる系統的な治療，並びに患者の把握，研究面に於けるシステムが段々と整い，その成果は，期して待つべきであろう。

教室は古い人が去り新しい人が入り絶えず新陳代謝をくり返しているわけであるが，今日迄の医局出身者は，それぞれの病院で整形外科の新設や発展に人知れず努力を重ねてこられた。吾々の前途には 洋々たる教室 発展の未来があり，宮崎教授のもと“何事によらずコッコッと真面目に”をモットーに私達若く，美しく，仲の良い教室を作る様努めたい。

### 関連病院出張先

- 大島県立病院 昭和35年11月開設，初代部長 松元四郎（—39. 3）
  - 2代 田島稔弘（39. 4～40. 3）
  - 3代 樺山資臣（40. 4～41. 3）
  - 4代 長野芳幸（41. 4～42. 3）
  - 5代 児玉国秀（42. 4～43. 3）
- 伊敷国立病院 { 鮫島 達郎（32. 7～34. 3）  
前原 誠（34. 4～35. 10）  
白坂健一郎 初代部長（35. 7～37. 2）  
平田健次郎 2代部長（37. 3～現在）
- 伊敷整形外科 36. 5 開設 園長 前田実行
- 鹿屋県立病院 40. 4 開設 初代部長 松元四郎（—41. 1）  
2代 鮫島達郎（41. 2～）
- 霧島温泉労災病院 { 初代院長 荒木 崇文（37. 6～42. 3）  
2代院長 久保田仁志（42. 4～42. 8）
- “ { 初代部長 鮫島 達郎（37. 4～41. 1）  
2代 松元 四郎（41. 2～41. 4）  
3代 米盛 学（41. 4～現在）
- 川内済生会病院 初代部長 今村農夫男（41. 6～現在）

### 整形外科開業

川原（川内），日高（市内），永井（贈嗟郡），倉内（都城）  
白坂（市内），阿久根（市内），有馬純郎（市内），松元（大口）  
荒木（熊本），久保田（市内）（開業順）

## 皮膚科学教室

昭和19年に梶島強一教授が皮膚泌尿器科学として開講され、ついで岡元健一郎教授が昭和21年から皮膚泌尿器科を担当されて、昭和40年に皮膚科、泌尿器科の講座が完全に分離され、昭和41年1月皆見紀久男教授が皮膚科教授、岡元健一郎教授が泌尿器科教授として、講座を主宰され、講座も医局長も独立した。

昭和41年度は教授皆見紀久男、助教授田代正昭、講師医局長永田耕一、助手島田勝彦、桑原淑子、大学院学生児浦純生のわずか6名で出発した。この最少の人員で、年間外来患者総数3,500名の診療に従事し、最多忙時は1日新患30名、再来120名にも達し、教授以下教室員全員が一致協力してこれに当たると同時に、入院患者数もベッド数20に対し、常時22~24名の入院患者を収容し、その間エリテマトーデス、天疱瘡などの自己免疫疾患、梅毒殊にその臨床及び血清学的研究、皮膚科領域における線溶現象、皮膚真菌症、さらに免疫電気泳動、リンパ球培養を利用した免疫現象の研究など、多彩な研究に日夜を過している。以上の常勤6名の他非常勤講師に県立宮崎病院皮膚科医長師井庸夫、国立鹿児島病院片平可也を加え、いささか余裕のできたのもつかのま、7月永田講師は市立病院に転勤となり、あとを島田勝彦医局長となった。

昭和41年度学会行事

2月2日 第1回 Dermatologic Pathological Conference (DPC)

4月16日 第2回 DPC

5月7日 第65回 日本皮膚科学会総会

京都で田代助教授が線溶系の研究を話す。

5月22日 岡元教授20周年記念第32回日本皮泌科学会鹿児島地方会

6月25日 第3回 DPC

7月9日 九州アレルギー研究会

7月19日より10日間 奄美大島巡回診療団 皆見教授団長

10月19日 第10回日本医真菌学会 東京

10月22日 第18回西日本連合地方会 山口

11月23日 九大皮膚科61周年講演会。

12月11日 第33回日本皮膚科学会鹿児島地方会および第4回DPC

昭和42年度は皆見教授、田代助教授、島田医局長、桑原助手、児浦助手（大学院卒業）、さらに山口真吾（大学院学生）を迎え、6名となったが、9月に島田医局長の辞任で、最低の5名となり、当直、外来ともフルに働かねばなら

なくなった。そのため臨床はとも角研究体制の整備のため、迫田、西村、吉国、奥原の諸氏をラボランチンとして迎え、研究内容の充実を期した。また児浦は講師に就任した。

昭和42年学会行事

4月3日 第7回日本医学会総会

自己免疫疾患（シンポジウム）

皮膚科領域 皆見

4月6日 第56回日本皮膚科学会総会

スライド供覧 皆見

5月24日 第5回DPC

6月11日 第34回日本皮膚科学会鹿児島地方会

7月9日 九州アレルギー研究会 霧島

11月4日 第14回日本臨床病理学会 東京

梅毒血清検査法（シンポジウム） 皆見

11月19日 第19回西日本皮膚科連合地方会 別府

真菌症の数例 田代

梅毒（シンポジウム） 皆見

12月17日、第35回日本皮膚科学会鹿児島地方会および第6回DPC

以上2年間の研究業績は原著として権威ある専門誌に掲載されているが、特筆すべきは児浦は皮膚科領域にかける線溶系の研究、島田は靴下布地における白癬菌の研究と題し、学位論文を完成した。

## 泌 尿 器 科 学 教 室

泌尿器科学教室の沿革にかえて

（昭和41年5月22日開講20周年記念の第32回日本皮膚科学会泌尿器科学会鹿児島地方会懇親会の挨拶） 岡本健一郎

鹿児島大学医学部の前身である鹿児島医専に赴任してからこの5月で満20年になる。初代教授は梶島強一博士で昭和19年8月に就任され昭和21年3月に辞任された。現在は福岡市箱崎で医院を開業しておられる。私にとって赴任以来の20年は人生の年月としては長い、一面短い期間のような気もする。たえず追いかける生活をしてきたからであろう。若く未熟な身で赴任してはじめての10年間は一生懸命に専門医学のレベルに追いつこうという努力をしてきた。昭和33年に機会があって「泌尿器科実地診療」という小著を金原出版から刊行

して一応の整理をした。脱稿したときから不備な内容で冷汗3斗の思いであったが、一応の区切りとして自分なりに次の段階に進もうとしたが、医学の発展の速度ははやく、それにテンポを合わせながら自分なりの仕事をするのに今日まで息をつく暇もなかったというのが現実である。仕事を追いかける生活をしてみたいというのがすべての人の願いであろうが、現代のような複雑な社会機構と自然科学の目まぐるしい進歩の時代でそのような恵まれた生活をおくつている人はおそらく数える程しかいないであろうと想像して自らなぐさめている次第である。

鹿児島県の20年を顧みるときに最も印象的なのは40才以上の人の誰でもがそうであるように終戦直後の時代である。私が鹿児島医専に赴任したのは昭和21年5月である。国は敗れても城山の楠はもうもうと若葉をふいていたが、焼夷弾で焼け枯れた骸骨のような大木の姿もその間に多かった。市街は全く瓦礫の巷である。附属病院は草牟田町の県立盲啞学校内に仮住いしていた。私自身は市内に住いをみつけることができず都城の近くから列車で通勤である。鹿児島まで2時間以上かかっていたと思う。ご存知の窓ガラスさえない列車であるので霧島峠のトンネルの煙攻めには悩まされた。下りはともかく上りでは機関車に力がないのでトンネルの途中で息を切らし、また入口まで逆もどりをして加速をつけて突進するという状態であるから煙は容赦なく進入して内も外も区別がつかない有様である。帰途、霧島トンネルを上りきると夕暮れになるが、線路ぞいの月見草の群落がみずみずしく宵暗みに息づいているのが満身の汗をひかせてくれた。暗いうちに家を出て、帰りも暗くなってから帰るのだが別に疲れも残らなかった。若さというものであろう。

半年間トンネル通いをしてから隼人町の農家の離れを世話してもらって移転した。真竹の林の蔭の草屋で囲炉裏をたいて炊事をした。窓にはガラスはなく土間には藪戸しとみで明りをとる構えは今から思うとなつかしい。春には真竹の筍の味噌汁を存分に味えたのはその後は経験しない楽しみであった。真竹の筍は下駄でポンとけると根本からポッキリ折れて孟宗筍のように鉋で掘り出す手間がはぶけて便利である。隼人駅までの20分を初夏は青麦、夏は稲田の畦道を通うのも爽快であった。冬は子供をつれて日当山の温泉まで野道づたいに入浴に行つて畦川の野芹をつんだ。

ピロードのとんがり帽子かむらせて  
子と妻とわれと帰る野の道

楽しい思い出ばかりがあつてつらかったことのないのも若さのせいであろうか。4年間の汽車通勤生活ののちに鹿児島市内に移住した。便利にはなったがそれ以後は自然とは離れた都市生活になって一応、私の戦後は終わったわけである。

昭和21年、盲啞学校の附属病院に赴任したとき教室にはいまは故人になられた浜田長徳助教授、黒木重徳助手の二人がおられ、小生の着任をまって永吉浩博士が入局された。前教授の梶島強一博士はその時はすでに博多に引揚げておられた。性病大流行の時期で梅毒血清反応を実施するために屠殺場において牛心をもらい、病院の裏の土手に山羊を飼って自給自足した。その後一年して病院は現在の位置に落着き臨床教室はその内におかれた。基礎教室は鴨池にあったため幸いに戦災を免かれたが、臨床教室は戦災後の無一物の状態から出発して少しずつ設備をととのえていった。途中、昭和27年4月の類焼によって附属院は再び焼失してその後現在のような鉄筋の病院が再建したわけだが、いまだはこの病院が年頃の青年に小学生の着物を着せたように手狭になったことは今昔の感にたえない。

教室の関係者も皮膚科泌尿器科あわせてだが段々と増えて、現在では小教室ながら同門会員53名、地方会員36名になっている。教室の研究は昭和21年の終戦直後は、研究設備、資材というべきものはもちろん全くなく本格的なことができるはずはない。幸い基礎教室が戦災を免かれたために顕微鏡だけは何とか間に合ったのが唯一の戦力であった。はじめのころのことを少しのべると、性病時代であったので性病に関する仕事をまずはじめた。進駐軍からもらったペニシリンの治験から始めて、サルファ剤の治淋効果の再検討、淋疾の抗サ性獲得の問題、集団梅毒血清反応の経験から村田反応の定量法、業態婦の社会的環境および性病に関する検討などを行って、これらの研究は性病が全国的に減少する昭和32年頃まで続いた。

また無手勝流の道具なしでできる研究は何かと考えた結果、風土病であるフィラリヤ症の調査研究をはじめたのが昭和21年の夏ごろからで、翌22年に「鹿児島県におけるフィラリヤ症分布の概況と佐多地方における調査成績」を永吉博士とともに発表した。もつぱら足を使った調査研究で、その後も含めて佐多町東海岸、三島村、種子島、屋久島、奄美大島などは私自身あるいは教室員が歩き廻ったことである。フィラリヤ症の研究は現在では専ら乳び尿症の検討の面で教室の研究テーマの一つになって続けているが、無手勝流の所産である。

その後、研究態勢がだんだん整ってからの研究テーマは、泌尿器科関係では

尿路結核，男性性腺および性機能などと続いている。昭和35年まで皮フ科といっしょであったので，皮フ科関係では下稲葉耕作博士が昭和27年，当時まだ関心のうすかった血清蛋白分画の研究を行った後，白癬症の研究に重点をおき，その後は皆見教授の指導をうけて新しい発展があるものと期待されている。最近は線溶系に関する研究も加わった。

昭和40年末までに発表した原著は皮フ科関係89編，泌尿器科関係93編，男性性腺および性機能28編，性病13編，フィラリヤ症34編，計257編。学会報告論文は712編である。

昭和40年度からは国立大学医学部としては最後の順番で待望の皮フ科，泌尿器科の分離，皮フ科学講座の新設が行われて，皆見紀久男教授が昭和41年1月1日から就任された。皮フ科学と泌尿器科学は元来，別々の学問であり対象とする器官，疾病は全く無縁のものであるが，本邦におけるこの方面の医学の発展が性病に関する関心から始まった関係で両者が一講座にまとめられていたのは世界の趨勢からすると全く異常であった。戦後になってからは続々と両講座の分離独立が行われたが国立大学では国家予算の関係もあって全部同時に実施するわけにもいかないのか，毎年1～2大学ずつが分離するため，国立に移管された鹿大は鳥取大学とともに最後になったわけである。私は就任以来両科の講義を昭和38年まで続けてきた。最後の2年間は皮フ科学の講義は田代助教にゆだねたが，外来，入院患者の診療は皆見教授着任まで続けてきた。今からは肩の荷が半分下りたように全くホッとした。就任20年の最大の賜物を頂いたと思っている。

ただ日本の医療界の実状は皮フ科，泌尿器科のどちらの専門医もまだ十分に普及していない状況で，鹿児島県においてもそうである。大学という学問を追う場所では専門分科は勿論必要であるが，国内の医療状況も忘れてはならないので実地医家の皮泌尿科分離は可成り後になることであろう。

就任以来の20年を顧みると，始めにのべたように追いまくられるだけの生活だったようであったが，思いをひそめるとさまざまなこともあったものである。（本学部がその前身の鹿児島医専が創立されてから満25年になるその記念誌に教室の歴史を顧みる小稿を求められて，その文章のかわりにこの草稿を掲載して頂くことにした。私ごとが多いくらいがあって恐縮であるが，学部の歴史については別に原稿もあるであろうから，自分の思い出の文章で代りにさせて頂くことにする）

# 眼 科 学 教 室

## 眼科学教室のあゆみ

高 安 晃

この度本学医学部が創立25週年を迎へるに至った事は誠にご同慶にたえません。この記念すべきときに当り吾眼科教室のあゆみについてかくことが出来る事は私にとって誠に光栄に思うのであります。実は私の教室では古い人はどんどん社会に出て活躍され結局私が最も古参ということになります。そこでこの歴史をかく前にこの大学病院の眼科（教室）の誕生の頃からの事を昔にさか昇ってみたいと思います。

鹿児島県立病院（俗に県病院、今でも県病院という人も居ます）に眼科が発足したのは明治31年当時市立病院時代で明、32年4月まで日高昂氏が第1代の眼科部長でした。第2代が桑原丘為氏で明32.4～明32.8までであった。県立病院に再び変わったのが明治40年であって、明39～明41.1月までは第3代森路定範氏、第4代野崎定範氏、明41.4～明42.1で何れも在職年限が極めて短いことが示されている。その後眼科はどんな理由か不明だが一時閉鎖された。ところが第5代からは長期間在職された。第5代は河本軍次郎氏が明治44年から大正8年まで、第6代樋渡一夫氏は大正8年から大正11年まで、第7代山本清一氏は大正11年から大正14年まで、第8代緒方清躬氏は大正14年から昭和2年まで勤務されていました。第9代広石井甫氏は昭和2年から昭和6年まで勤務されこの方は熊本医科大学で、学位を得られた第1号で当時の学長は学位をひろいし（広石）はじめ（甫）なりと言はれた事を記憶しています。第10代は楠元康雄氏で昭和6年から昭和12年まで勤務され鹿児島市内で楠元眼科医院を開業されていたが、現在は令息にゆずられました。前鹿児島県眼科医会々長で前鹿児島県医師会長です（昨年8月28日御逝去されました）。第11代目は渡辺伊勢雄氏で昭和12年から15年まで勤務され、現在熊本県松橋町で開業中です。第12代目は高野三喜雄氏で昭和15年8月から昭和18年3月までは眼科部長であったが昭和18年4月に鹿児島医学専門学校が創立されたので眼科教授に就任され眼科教室の初代の主任教授で松元俊雄氏が同時に助教授に就任した。高野教授は昭和22年12月退職され現在鹿児島市内で開業中である。時恰も終戦前の最も空襲の激しかった時で病院も昭和20年6月17日焼夷弾攻撃により病院焼失、石田前院長、江口庶務部長、赤崎医員爆死、看護婦1名軽傷、収容中の患者は草牟

田町県立盲啞学校に移し、治療を行った。その時は眼科も焼失し当時は県庁の焼残った片隅で診療に学生の指導に又、救護に大変な苦勞をされた事と思います。昭和21年8月27日には加治屋町一高女階下6教室の焼跡を修理して外来診療所を開設した。その後同年9.18には外来診療所を山下町県庁別館に移転し、22.3.3には山下町武徳殿跡に平家瓦葺一棟が出来て終戦後4回目の外来診療所移転となって一応そこに落ついた。その頃県議会において医専を大学に昇格することに既に決議されたので22.5.3.元県立病院跡に逐次病棟その他の設備を復旧することとなった。そして私が着任したのが昭22.12.23で眼科は現在の家庭裁判所の処にあったバラック建の一隅にあって診療室の片隅に医局があり極めてせまく一台のけんび鏡で検便していると人が歩くたびにけんび鏡がガタガタゆれて全く検鏡が不可能と云った状態、診療はなんとか患者にめいわくをかけずにすんだ。病棟は元県病院跡にあり手術も出来た。しかし図書も研究室もないのでせまい医局で自分の本（眼科雑誌）をもって来て診療が終わってからユックリみた。当時は松元助教の外に井後吉久、大塚徳平、仲吉朝真の三君が医局員で川畑、田中、小里の三看護婦、川畑看護婦が主任看護婦であった。これが着任時代の医局の状態で23年から次第に医局員が増して来た。23年から27年にかけて木造二階建ての病院が新築された。その間眼科は整形外科の一部に同居していた。26年度中には最後に小児科、二階建木造（212.52坪）眼科、二階建木造（273.75坪）、耳鼻咽喉科、二階建木造（227.5坪）が完成した。昭27.4.23.いよいよ眼科も新築の病院に入ることになったので下検分をした。その翌日4.24.午前零時15分病院東側民家より出火、折からの北風にあおられて病院は洗濯室と仮看護婦宿舎を除き全部類焼した。幸い患者は全部無事市立病院、鉄道病院、国立病院に収容された。教室として最も困ったのは私が父（高安右人元金沢医科大学長、眼科教授）からゆづり受けた眼科の雑誌（日眼、中眼、実眼、眼臨等）約100冊が灰燼に帰した事であった。その間医局には伊佐敷助教の外に井後吉久、松田禎純、大牟田卓爾、谷口幸次郎、榊真弥、鷗狩淳一の諸君や福沢英子、萩原正子（横山）の両女医さんがいた。眼科の外来は再び元のバラックに立戻り、こんどは医局と診療室とは別で2室であったが人がふへたので全く狭くなった。昭24.4.1には医科大学に昇格したが附属病院が焼失したので県会では財政上医科大学を廃止しようとするけはいが濃厚となり学長、教授会一同と共に私も県会にのり込み復興の必要性を強力に主張した功あって昭27.9.大学病院年次別復旧計画が決定し、昭30.3.4.現在の附属病院が落成した。眼科教室もどうやら落ついた。

そして眼科，放射線科，整形外科と病院とが昭33.5.1.に国立移管されこれ  
で国立移管が完了した。県立時代は年間の研究費が僅かに13万円であったが，  
国立になってから120万円から現在230万円に増額され，設備及図書充実に，そ  
れと共に研究や講義や診療にと今日までの辛棒がかいあって教室員の入れ変り  
も盛んになり，学位論文も次ぎ次ぎに出来て，又，日本眼科学会や臨床学会，  
九州医学会，九州眼科集談会等に教室あげて毎年出演，出席し，私が鹿児島に  
来て早々先輩の方々と相談した結果，鹿児島眼科集談会の誕生をみた。最初は  
戦災で焼けた県医師会館の後に出来たバラックの建物で第1回が当時の高野教  
授が司会で，楠元康雄先生，大牟田弘先生（大牟田卓爾君の父），宮原武熊先  
生，野添辰二先生，内田実先生，松元重雄先生（元松元助教授の父），等先輩  
の先生方がお集りになり，私は当時45才でした。第2回から教室の方で司会し  
現在43.2.25には第100回鹿児島眼科集談会が開催された。教室では九州眼科集  
談会は第20回，25回，30回，35回の4回で5年目ごとに本学で行なうことにな  
る。鹿大→長大→九大→久大→熊大→鹿大の順で行なわれている。第35回は40  
5.29~30. 城山観光ホテルで行なわれ特別講演は庄司義治先生にお願いして盛会  
裡に行なわれた。九州眼科集談会の第1日の午前は標本交換会，午後は懇親野  
球大会となっているが35回の時は鹿大が6：5で熊大を破って優勝した。この  
大会で優勝したのはこれが初めてであった。私はいつも一塁を守っている。も  
う停年でやめるから野球もやめ様かと思っている。

教室関係の研究業績について

## I. 学位論文

松元 俊雄：南九州人眼底像に関する人種解剖学的研究（昭26）

伊佐敷康政：眼瞼の生態学的研究第1.2.3.4.5.6.7篇（昭26）

榊 真弥：生体角膜の水素イオン濃度に関する実験的研究第1.2.3.4報（昭30）

井後 吉久：胎生後半期における視器組織発生に関する研究第1.2.3報（昭31）

川野 博隆：角膜病変に関する実験的研究第1.2.3報（昭32）

田之上虎雄：眼窩腫瘍の診断に関する実験的研究第1.2篇（昭33）

岩下 正晃：フェノチアジン系薬物の眼球組織呼吸に及ぼす影響に関する研究  
第1.2.3報（昭33）

今村 邦明：薬物の共同作用に関する実験的研究特に Mg に対する各種無機イ  
オンの共同作用について（昭33）

園田 繁：網膜組織の病態に関する実験的研究（昭34）

長田 文男：眼窩内神経に関する解剖学的研究補遺 第1.2.3篇（昭34）

- 大牟田卓爾：角膜の組織呼吸に関する実験的研究第1.2.3.4報（昭34）
- 川畑 サダ：網膜のブレースカレント並にその網膜活動電位に及ぼす影響（昭34）
- 大塚 徳平：トラコーマの診断に関する実験的研究（昭35）
- 西 清文：眼窩内動脈とその分布に関する研究 第1.2.3篇（昭35）
- 鵜狩 淳：組織の代謝に関する研究（昭35）
- 松田 禎純：眼球の脈管系に関する解剖学的研究補遺 第1.2.3報（36）
- 大重 源治：網状織内皮細胞系封鎖と網膜病変に関する実験的研究（昭36）
- 山口 秀雄：網膜中心動脈血管圧に関する研究 第1.2.3篇（昭36）
- 緒方 惟治：眼球組織の酸素の自律神経系に作用する薬物及 2.3の代謝阻害剤との関係について（昭36）
- 川畑 隼夫：網膜血圧に関する研究 第1.2.3報（昭37）
- 大山美智子：移植癌に関する実験的研究（昭38）
- 園田 康治：眼腫瘍の電子顕微鏡的研究 第1.2報（昭40）
- 田代 正盛：白血病理の著明な出血傾向の解明に関する研究（昭41）

## II. 眼腫瘍に関する論文、業績

高安 晃

1. 眼球突出度に関する 2—3 の統計
2. 眼腫瘍発育に関する臨床病理組織学的並に実験的研究（主論文）
  - 前篇 眼腫瘍発育に関する臨床病理組織学的研究，種々なる網膜膠腫の眼変状に就て
  - 後篇 眼腫瘍発育に関する実験的研究（第1.2.3.4.5.6.7.8篇）
2. 眼瞼に発生せる線維腫の 1 例に就て 共著 南熊太
4. 網膜膠腫の予後に就て
5. 眼腫瘍に対する一新補助診断法とその応用成績
6. 視神経乳頭の原因性グリオーム 共著 松元俊雄
7. 網膜膠腫の組織学的所見補遺
8. 網膜膠腫の発生年齢的關係
9. ナイトロミン注射が眼窩腫瘍組織に及ぼす影響に就て。共著田之上虎雄
10. 眼部悪性腫瘍特に眼窩腫瘍の臨床（臨床講義）
11. 眼瞼にらみれた前癌状態に就て 共著 松田，田代
12. 涙腺部腫瘍に就いて 共著 伊佐敷，田之上，松田
13. 下眼瞼に原発せる紡錘形細胞肉腫の治療 共著 田之上虎雄，松田禎純
14. 眼科領域における癌治療の実際

15. 角膜輪部腫瘍の電子顕微鏡的所見 共著 田之上虎雄
16. 電位差測定による眼腫瘍の診断について。
17. Wegener 症候群の症例 共著 貴島, 内田, 園田, 富重
18. 改良した電位差測定器の臨床応用 共著 川畑, 大山, 貴嶋, 内田, 園田, 萩原
19. 眼窩混合腫瘍とその手術について 共著 萩原, 園田
20. 眼窩偽腫瘍
21. 眼腫瘍の病理と臨床, 特に眼窩腫瘍について (特別講演)
22. Diagnosis of Eye Tumors by the Measurement of Potential Difference
23. 著書「日本眼科全書」13巻眼窩腫瘍
24. 著書「今日の治療指針」1967年版
25. 著書「現代小児科学大系」15巻眼科, 腫瘍
26. 田之上虎雄: 眼窩下壁を破壊し眼窩内に侵入せる眼窩肉腫の1例
27. 伊佐敷, 山口: 眼窩眼瞼囊腫を伴った先天性無眼球症例について
28. 田之上虎雄: 緑色腫の統計的観察
29. 田之上, 松田: 転移性眼窩腫瘍
30. 田之上虎雄: 稀有なる眼窩混合腫瘍の1例
31. 田之上虎雄: 眼窩腫瘍の診断に関する実験的研究
32. 園田 (繁), 大塚: 眼窩リンフォマトーゼ異型
33. 井後吉久: 眼球突出について
34. 園田輝雄: 眼窩内に原発した小円形細胞肉腫
35. 園田輝雄: 涙腺部混合腫瘍
36. 園田康治: X線照明後の Retinoblastoma
37. 川畑隼夫: 眼窩圧に関する研究
38. 川畑隼夫: 新しい眼窩圧計について
39. 川畑, 内田: 眼科領域における超音波診断法

特別講演は「眼腫瘍の病理と臨床, 特に眼窩腫瘍について」と題して高安が昭和42年3月31日名古屋市南山高校において, 日本医学会総会眼科分科会の席上で1時間にわたり講演した。高安教授退官記念講演会, 開講20周年記念講演会, 第100回鹿児島眼科集談会は昭和43年2月25日, 日生ビル10階で盛会裡に終わった。高安の最終講義は昭和43年3月1日附属病院第4講義室で「小児の眼腫瘍, 特に悪性腫瘍」と題して1時間10分の講義を終え, 昭和41年8月にミュンヘン市で行なわれた第20回国際眼科学会に出席した折に撮影した8ミリ映画

の一片を供覧した。

歴代の助教授

第1代 松元 俊雄 昭18.4→26

第2代 伊佐敷康政 27→34.4

第3代 井後 吉久 34.5→38.7

第4代 川畑 隼夫 38.8→現在

講師 1. 田之上虎雄 34.5→37.

2. 大山美智子 38.8→42.10

非常勤講師 川畑平一郎 36.1→現在

学位論文「瞳孔反射に関する研究」「昭30)

教室員は教授，助教授，講師の外に助手，大学院学生，専攻生，研修員からなる。古い順（多少不確実）であげる。

井後 吉久 大山美智子 西 清文

大塚 徳平 大重 源治 長田 文雄

松田 禎純 田代 正盛 佐多 正巳

仲吉 朝直 貴島 陸博 園田 繁

谷口幸次郎 園田 輝雄 緒方 維治

鷓狩 淳一 土屋 利紀 柗山 緑

横山 正子 中村 章 宮崎 俊子

福沢 英子 園田 康治 田之上貞子

福島 浩 内田 洋人 富重 栄一

大牟田卓爾 萩原 隆子 今村 邦明

田之上虎雄 原田 一道

岩下 正晃 針貝 正純

川野 博隆

榊 真弥

山口 秀雄

物故者 福島 浩 31.9.16

大牟田卓爾 37.8.4

山口 秀雄 42.7.30

謹んで御冥福を祈る

眼科の看護婦

川畑 幸子，

看護補助員，研究補助員

森山 常子

|                   |           |
|-------------------|-----------|
| 小里 ミリ,            | 黒木せつ子     |
| 園田 京子,            | 脇田百合子     |
| 中俣 美苗,            | 川畑 京子(鳩宿) |
| 田中 ムツ,            | 井上よし子(北富) |
| 前田 ヌリ,            | 折田 和子     |
| 稲留とめ子,            | 有島 幸江     |
| 松元イソ子,            | 万年 洋子     |
| 向江 時子,            | 四ツ永真知子    |
| 前田 良子(田之上), 池山れい子 |           |
| 遠藤 順子             |           |
| 堂兎 時子             |           |

備品：眼科教室も次第に備品が増加し、狭い研究室や外来は尚更狭隘となった。従って研究に、診療に益々進歩した成績をあげ得ることが出来る様になって来た。

主なるものだけを次にあげる。

1. 中心動脈血圧測定装置
2. E・R・G測定器
3. アノマルスコープ（ナーゲル1型）
4. ツァイス、スリット、ランプ、外5台
5. 眼底カメラ、ツァイス外3与
6. ゴールドマン視野測定器
7. 腫瘍診断用電位差測定器
8. 超音波測定器
9. 眼窩内圧測定器
10. メタルロケーター検査器
11. 電気眼圧計
12. キーラー倒像検眼鏡
13. 西ドイツ、ツァイス製光凝固装置（600万円）

次に鹿大眼科臨床20年を述べる。この20年間前記した教室員、看護婦、看護補助員、研究補助員一同が一丸となって診療に従事した。その間教授、助教授、講師は学生の講義、ポリクリニックをも行って来た。臨床20年間に外来患者約7万人、昭33年から昭42年までの10年間に40,256人を診療した。入院患者は約2,500人、延75,000人昭33—昭42年は1,568人延47,040人となる。

前半の患者は機質的疾患が機能的疾患より多かったが後半はその逆に機能的疾患が機質的疾患より次第に多くなって来た。白内障や網膜剝離や眼腫瘍等の治療法も次第に改良されて来て患者に益々福音をもたらしつつあることは誠に喜ばしい事である。

最後に眼科学教室の発展を心から祈ります。

## 耳 鼻 咽 喉 科 学 教 室

耳鼻咽喉科学教室25年間の沿革の概要について述べてみたい。

教室の歴史は昭和18年鹿児島医学専門学校が設立された時に始まるわけであるが、初代教授の寺師忠雄博士は既に昭和16年応召されており、遂に教鞭をとられることなく昭和20年に硫黄島において戦死された。その後講義および診療は米良立身助教授により行なわれていた。

教室の形態が整ったのは、昭和21年野坂保次教授が着任されてからである。当時は終戦後の最も混乱した時期であって、教室建設に費された教授のご苦労はいかばかりのものであったろうか。野坂教授は「耳鼻咽喉科領域の形態学的研究」を主題に研究を進められ、乏しい研究費、不満足な環境の中で教室の基礎が着実に出来上りつつあった時、昭和27年の大火で教室の有形、無形の全財産が焼失したことは誠に惜しみてあまりあることである。

野坂教授には日本耳鼻咽喉科学会鹿児島地方会を設立され、昭和31年1月まで教室を主宰されたのち、熊本大学に転任され、現在熊本大学医学部附属病院長としてご活躍中である。

野坂教授の後任として、昭和31年3月久保隆一教授が着任された。本年3月で久保臨床としては開講12周年を迎えたわけである。久保教授は、昭和37年第63回日本耳鼻咽喉科学会総会においてシンポジウム「局所麻酔薬による偶発症の発生並びにその対策について」。同年第14回日本気管食道科学会総会においてシンポジウム「頸部廓清術における胸管損傷の問題」。昭和39年第16回日本気管食道科学会総会においてシンポジウム「喉頭外傷の動物実験による病理学的観察」と次々に担当され、他方喉頭癌を主とした上気道悪性腫瘍の治療、航空中耳炎など所謂気圧外傷の問題、耳管通過性に関する問題などを中心にエネルギーにご活躍になっている。特に喉頭癌の早期発見を目的として始められた「声の検診」は学会の注目するところとなり、現在では全国的な学会としての行事になっている。

又、久保教授は昭和41年8月、文部省在外研究員として3カ月にわたり西ド

イツを中心に欧米の大学を視察された。さらに同じ年の秋、久保臨床開講10周年記念講演会が門下生を中心に地方会員参加のもとに盛大に挙行された。

現在は、教室員のご指導の他に鹿児島大学評議員、鹿児島大学附属図書館医学部分館長など併任されご活躍になっている。

職員録 (昭和43年4月1日現在)

| 氏名          | 職別   | 在任期間               |
|-------------|------|--------------------|
| 寺 師 忠 雄     | 教授   | 昭和18年4月 ~ 昭和21年3月  |
| 野 坂 保 次     | 教授   | 昭和21年4月 ~ 昭和31年1月  |
| 久 保 隆 一     | 教授   | 昭和31年3月 ~ 現在に至る    |
| 米 良 立 身     | 助 教授 | 昭和18年9月 ~ 昭和20年12月 |
| 宮 里 和 生     | 助 手  | 昭和19年 ~ 昭和22年      |
| 藤 崎 春 男     | 助 手  | 昭和21年4月 ~ 昭和21年9月  |
| 浜 崎 直 哉     | 助 手  | 昭和22年3月 ~ 昭和23年8月  |
| 堀 之 内 正 男   | 助 手  | 昭和22年4月 ~ 昭和22年5月  |
| 橋 元 祐 四     | 助 手  | 昭和22年7月 ~ 昭和25年8月  |
| 花 牟 礼 八 十 一 | 助 教授 | 昭和23年9月 ~ 昭和28年2月  |
| 伊 集 院 健     | 助 教授 | 昭和22年8月 ~ 昭和32年12月 |
| 田 之 上 政 豊   | 助 教授 | 昭和25年7月 ~ 昭和28年5月  |
| 吉 田 重 弘     | 助 手  | 昭和25年1月 ~ 昭和30年6月  |
| 荒 田 久 男     | 助 手  | 昭和25年8月 ~ 昭和27年9月  |
| 桂 弘 道       | 助 手  | 昭和25年10月 ~ 昭和27年3月 |
| 金 子 里 春     | 助 手  | 昭和26年9月 ~ 昭和31年8月  |
| 中 山 展 男     | 助 手  | 昭和28年3月 ~ 昭和32年3月  |
| 終 山 幸 逸     | 助 手  | 昭和28年4月 ~ 昭和28年11月 |
| 平 山 弘 大 郎   | 助 手  | 昭和28年7月 ~ 昭和32年1月  |
| 鶴 丸 耀 久     | 助 手  | 昭和29年3月 ~ 昭和31年3月  |
| 調 賢 哉       | 助 教授 | 昭和31年10月 ~ 昭和38年4月 |
| 吉 田 左 近     | 助 教授 | 昭和31年6月 ~ 昭和36年7月  |
| 久 木 田 民 三   | 助 教授 | 昭和31年11月 ~ 昭和35年7月 |

|       |    |    |          |   |          |
|-------|----|----|----------|---|----------|
| 村島義哲  | 講師 | 師手 | 昭和32年4月  | ～ | 昭和39年3月  |
| 木田敦   | 助  | 師手 | 昭和32年11月 | ～ | 昭和34年5月  |
| 窪田健磨  | 助  | 師手 | 昭和33年5月  | ～ | 昭和42年5月  |
| 上村達郎  | 助  | 師手 | 昭和33年5月  | ～ | 昭和37年1月  |
| 石川増男  | 講師 | 師手 | 昭和33年6月  | ～ | 昭和37年1月  |
| 山崎武次郎 | 助  | 師手 | 昭和33年11月 | ～ | 昭和34年12月 |
| 松村益美  | 助  | 師手 | 昭和35年8月  | ～ | 現在に至る    |
| 江川俊治  | 助  | 師手 | 昭和35年4月  | ～ | 昭和42年9月  |
| 木原喜民  | 助  | 手  | 昭和36年5月  | ～ | 昭和37年9月  |
| 曲田公光  | 助  | 手  | 昭和36年4月  | ～ | 現在に至る    |
| 中川和洋  | 助  | 手  | 昭和36年4月  | ～ | 昭和39年3月  |
| 梅津浄子  | 助  | 手  | 昭和38年1月  | ～ | 昭和38年10月 |
| 東襄    | 助  | 手  | 昭和38年4月  | ～ | 昭和39年3月  |
| 鹿島直子  | 助  | 手  | 昭和39年4月  | ～ | 現在に至る    |
| 大野政一  | 助  | 手  | 昭和41年4月  | ～ | 現在に至る    |
| 勝田兼司  | 助  | 手  | 昭和41年4月  | ～ | 現在に至る    |
| 上村良彦  | 助  | 手  | 昭和41年4月  | ～ | 現在に至る    |
| 高木茂   | 助  | 手  | 昭和42年4月  | ～ | 現在に至る    |

## 放射線医学教室

放射線医学教室の歴史を述べるに当っては、その前身である県立鹿児島病院放射線科の歴史にさかのぼって述べておきたい。

### 鹿児島最初のレントゲン装置

明治40年（1907）4月1日、鹿児島市立病院は県立に移管された。その時4月13日付の鹿児島新聞（県立図書館所蔵）を見ると、「X線の設備も遠からぬ中に装置せらるる筈なり」と記されている。

しかしながら、その後いつ実際にレントゲン装置が設置されたか、確実な資料が得られない。

この記事から10年を経た大正6年（1917）には、島津製作所の交流A号というレントゲン装置が設置されている。これは今までに得られた資料では鹿児島

県下で最初のものである。

交流A号は高電圧発生機として開磁路式交流高圧変圧器を使用したものであった。この時代にはクーリッジ管が発明され（大正2年、1913）やがてそれまでのガス管球にとって代ろうとする時期であった。

### レントゲン装置の発達

大正の終りごろになって、この交流A号は廃棄せられ、神戸市丸中電機株式会社製の機械的全波整流装置アポロ号が設置された。

アポロ号は最高管電圧120kVp、管電流100mAのもので、高圧部は管球電纜とともに空中に露出しており、レントゲン線の防護もほとんど無に等しいものであった。

この種の装置になって、はじめてレントゲン診断学が長足の進歩を遂げることになった。

昭和5、6年のころに、同じく丸中製のケノトロン4コ整流方式の深部治療用装置スペシャル、オリンパス号が設置された。これは最高管電圧180kVp、管電流2mA連続のものであった。これもまた露出型で防電撃防護線でないことは、アポロ号と同じであった。

### 放射線科の独立

これより先き、大正10年4月串木野市出身の宇都紋次郎が、陸軍衛生部を退官して、レントゲン技師として着任していた。宇都は優秀な技術をもって、当時の内科外科等の医員らと協力して、レントゲン診療の発展に尽した。宇都は永年忠実に勤務していたが、昭和13年6月4日狭心症の発作で死亡退職した。

大正15年1月金沢哲郎が副部長の資格でレントゲン部主任として任命された。金沢は昭和3年9月21日に退職しているが、その後任者はなかった。

昭和6年5月には、九大放射線治療学教室、中島教授門下の斉藤正雄がレントゲン部主任として着任した。

斉藤は前記丸中製スペシャル・オリンパス号を駆使して、産婦人科部長柳井昌憲と協力して、子宮癌に対するラジウム・レントゲン併用療法を行ない成果を挙げた。ラジウムは桿状容器に封入された臭化ラジウム50mgと15mgとの2コであった。子宮癌に対するラジウム・レントゲン併用療法は、県下においてはこれが最初であった。

時の病院長平安山長義はレントゲン部を独立の診療科にしようと努力した。昭和7年5月4日レントゲン部は物理療法科と改称され独立の診療科となり、斉藤が初代部長に昇任した。このことは全国の総合病院の中でも、極めて早く、

2, 3 番目のものであった。

斉藤は同月24日に辞職し、翌25日斉藤と同門の縄田千郎が第2代部長に就任した。

物理療法科は独立の診療科として、外来患者を直接に受け、また専用の病床を有していた。一方では病院の中央診療施設として、他科の患者の放射線診療を受持った。

物理療法科の名称は昭和12年10月1日放射線科と改称された。

縄田は胸部疾患特に肺結核の診断治療の研究に努め、その着任と同時に人工気胸療法と赤血球沈降速度検査を実施した。これは当時はまだ一般には行われていなかった。また、多数の胃腸レントゲン診断の症例を経験し、胃十二指腸潰瘍のレントゲン照射療法を行ない、良好な成績を挙げた。

また、縄田千郎および宇都紋次郎の指導の下に、レントゲン技術者の養成が行なわれた。昭和7年4月に相良文六、同9月には税所篤正が、次いで中島藤一郎、築地質文、湯窪一雄らが入門し、理論と技術を修得した。レントゲン技術者の養成は、その後診療エックス線技師法（昭和26年6月11日法律第226号）が制定されるまで、20余年の間継続し、その間に40余名の技術者が養成された。これらの人々は昭和27年以降に実施された特例国家試験を受けて、診療エックス線技師の資格を獲得し、現にそれぞれ第一線に活躍している。

縄田は昭和15年4月から満2カ年の内地留学を命ぜられ、九州帝国大学大学院に入学した。その間の部長として曾根重夫（現在大分県佐伯市開業）が任命された。

曾根の時代に島津製作所製診断用三相全波整流方式平安号（115kVp30mA、75kVp1000mA）およびグライナツヘル結線の博愛号（200kVp6mA）が設置された。これらは従前のものと異なり防電撃防エックス線装置で、後の昭和29年4月通産省令第13号エックス線発生装置の種別の第2種に該当するものであって、当時としては診断用として、また治療用として、性能型式ともに最新鋭機であった。

以上合計4台のレントゲン装置を揃えることができ、診断と治療の上に将来の進歩活躍が約束された。

昭和16年12月にはわが国は大平洋戦争に突入した。

#### 県立鹿児島医学専門学校時代

昭和18年4月1日鹿児島医学専門学校が設立され、県立鹿児島病院はそのまま同校付属医院となった。九大大学院より帰任した縄田は同校教授、付属医院

放射線科部長に就任した。医専は最初4年制として出発したが、後に5年制となり、第一回生は5年間の課程を了えて昭和23年3月に卒業した。

昭和20年6月17日病院はアメリカ軍の焼夷弾攻撃によって全焼し、そのすべての診療施設と機械とを失った。放射線科は全くその機能を停止した。

### 戦後復興

病院は戦後草牟田の県立盲聾学校等市内を転々と場所を変えて診療を行なったが、放射線科では、そのころ野戦用携帯用自己整流方式のレントゲン装置(60kVp, 20mA程度)一台が、軍より譲渡されて使用された。写真フィルム、現像薬品等も質、量ともに不十分で、放射線科としては、何ほどのこともできなかった。

昭和20年11月30日今重幸雄が復員して講師に任命され、翌21年11月30日には助教授に昇進した。放射線科が複数の医師を得たのは、この時が最初であった。県立病院の放射線科創設以来実に14年ぶりのことであった。続いて吉利正彦が入局し、23年には池田広の入局をみた。

レントゲン技術員は戦後、古川達海、鳥越敏正、宮城哲夫らがいたが、最後に税所篤正が満鉄撫順病院より引揚げて帰えることができ、昭和24年6月30日付で主任技術員として任命された。

日本のレントゲン工業界も戦争により壊滅的打撃を受けたが、ひとり島津製作所は工場の損害を受けなかったので、一番最初に立ち上ることができた。

戦後転々と場所を変えた病院は、昭和22年3月ようやく武徳殿焼跡(現在家庭裁判所の一角)にあった、堀立て小屋でトタン屋根、ベニヤ板壁という建物に落付くことができた。

この時診断用レントゲン装置島津製報国号(300mA)を据付けることができ、戦後初めてレントゲン装置らしい装置を入手することができた。実に2カ年余の空白であった。

次いで深部治療装置島津製博愛号(200kVp 6mA)、八瀬号(自己整流、間接用)さらに博愛号の第2号機と合計4台となった。

昭和22年より現在地に木造2階建て復興建築が始められたが、24年12月8日には放射線科の部分の建築ができたので、機械の引越をした。

昭和22年6月18日には県立鹿児島医科大学(旧制単科大学)の設立認可があった。

昭和23年3月には医専の第一回生が卒業し、翌年には飯田高明と久留克己とが、1カ年の実地修練を了え国家試験に合格して入局してきた。次いで池口五

郎、石原武、前田利麿、鮫島広海らが、また28・9年にはそれぞれ浜田真二、宮永家昌が入局した。

このころ蓄電器放電方式の装置が開発されてきたが、26年3月には島津製蓄放式清滝号が、同6月には大阪レントゲン製作所の可搬型多段型蓄放式シリウス号が購入され、鮮鋭な胸部写真が撮られるようになった。

多段型蓄放式というのは装置を軽量小型化するために、10コの蓄電器を並列に充電し、スイッチによって、これを直列に接続することにより、充電電圧の10倍の電圧を発生し、レントゲン管に印加するものである。この装置と、前記八瀬号とは、後に昭和27年の大火の時、持ち出されて残り、その後長く使用された。

この時代、戦後から26・7年ころの間は、肺結核の治療は、人工気胸療法が盛んに行なわれた。厚生省の音頭取りもあって、一般には、いささか盲目的乱用の弊がみられたが、当教室では、多年の経験により、その適応と手技に慎重を期したので、極めて優秀な成績を挙げることができた。

また肺結核症の放射線治療も実施され、教室および国立療養所霧島病院（指導縄田、担当者中目郁蔵）において顕著な成績を挙げた。

外来に多数の肺結核患者が訪れるようになったのは、このころから始まった。

このころまた、串木野市荒川鉦山、枕崎市春日鉦山等に出張し、集団検診をなし、珪肺症の研究が行なわれた。

### 再度全焼

昭和27年4月24日午前0時15分病院の北東隣接地の民家より出火し、風下にあった病院に延焼した。この時レントゲン装置は可搬型の八瀬号およびシリウス号は持出されたが、その他のレントゲン装置はすべて失われた。その他の機械器具および図書文献もすべてを失った。

顧みると学校と病院の創立建設時代に戦災を受け、戦後の長い長い苦難の道を進んで来て、ようやく大学としての体系が整ってきたという矢先きであったが、今ここに再び全焼の厄に遭い、結果として与えられたものは、全くむだな労苦のみであった。あまりにも大きな損失であった。

### 七転八起

昭和28年3月19日には現在の鉄筋コンクリート建の建築起工式が行なわれ、30年3月4日落成式が行なわれた。

この間に再びレントゲン装置を漸次に整備して行った。このころは鹿児島県

の財政事情が最も悪い時期であった。一方レントゲン装置は、その価格が高価であって、一台の代価で他科の全部の医療機器を購入できる状態であったから、どうしてもレントゲン装置の復興はあと廻しにされる。病院の中で一番の貧乏くじを引くのは、いつも放射線科であるということになった。

しかしながら、このころのレントゲン装置は、前回の時の終戦直後のものと異なり、日本の工業界も立ち直っており、朝鮮戦争の景気も加って、高度成長の上り坂にさしかかっている時期でもあったので、機械の性能は年々に進歩していった。

昭和29年2月には、新築のひと足早くでき上った機関棟の一部を臨時に借用して、島津製断層撮影装置を据え付けることができた。断層撮影は1935（昭和10年）GrossmanによってTomographieが完成されたことに始まり、わが国では昭和14・5年から一般に広く使用されるようになっていた。したがって、当放射線科は断層撮影では13・4年の遅れをとっていたことになる。

昭和30年3月の病院落成の時は診断用装置6台、深部治療装置2台（島津製信愛号200kVp 6 mAおよび20mA）であった。

昭和34年6月には島津製山城号およびオデルカカメラ装置、同8月には島津製二重回転型Co<sup>60</sup>遠隔照射治療装置RT-2000が設置され、高エネルギー放射線治療が可能になった。これらの装置は国立移管後であったが、いわば、国への嫁入り仕度としての県費支弁のものであった。

このころから高電圧撮影の有利点が問題とされるようになった。当科では昭和30年10月には東芝高圧撮影装置KXO-14が据え付けられたのを初めとして、その後は新設あるいは更新の際は、すべて150kVpの高圧撮影の装置が採用された。

### 国立移管

県立大学の国立移管は昭和30年7月に始まり、33年5月1日に完了した。放射線医学講座は最終年度の33年5月に眼科整形外科と共に移管された。その時の職員は教授縄田千郎、助教授今重幸雄、助手浜田真二、上川路陸博、楠元康久、病院所属講師飯田高明、助手倉内末男の合計7名であった。

中央レントゲン室は診療エックス線技師として文部技官税所篤正（主任）、鳥越敏正、当房勝雄、宮城哲夫、下野哲勇および技術員四元義隆、米倉誠耕の合計7名であった。

昭和36年4月篠原慎治は講師として着任し、37年2月1日今重の退職により助教授に昇進した。その後助手として在職した者は桐田豊一、川野通、後藤有

人、赤崎郁郎、伊東祐治、有川憲蔵、倉岡東一、牧野正典および曾根博文らである。

国立移管後は放射線医療機器の購入費が、県立時代に比して、非常に潤沢になってきた。この間に設置されたものは別表（１）の通りである。

別表（１） 昭和27年4月病院全焼後の放射線機器

| 機 器 名                      | 購入年月   | 価 格        | 備 考    |
|----------------------------|--------|------------|--------|
| 間接撮影装置八瀬号                  | 昭23.   | 千円<br>220. | 昭41.更新 |
| 可搬型蓄放多段型シリウス               | 26.    | 580.       |        |
| 診断用X線装置衣笠号                 | 27.    |            | 寄贈品    |
| 診断用 “ 桂号                   | 27.    | 1.018.     | 昭40.廃棄 |
| 治療用 信愛号200kVp 6 mA         | 27. 9. | 850.       |        |
| 診断用 “ 桂号                   | 28.    | 482.       | 昭39.廃棄 |
| 断層装置 島津, 横型                | 28.    | 640.       | 昭40.廃棄 |
| 診断用 清滝号                    | 28.    | 1.240.     |        |
| 立位立体撮影装置                   | 28.    | 502.       |        |
| 治療用 信愛号200kVp20mA          | 28. 4. | 1.100.     |        |
| 水平立体撮影装置                   | 29.    | 300.       |        |
| 高圧撮影装置KXO-14東芝             | 30.    | 1.035.     |        |
| 携帯用X線装置 愛国号                | 30.    | 140.       |        |
| 近接照射治療用 清和号                | 30. 6. | 750.       |        |
| 診断用山城号II B型オデルカカメラ         | 34. 5. | 3.900.     |        |
| 透視用X線装置 DR10/2S日立          | 34.12. | 946.       |        |
| 移動用 “ KCD-M東芝              | 34.12. | 414.4      |        |
| 透視用 “ DRH10/2S-II日立        | 37. 2. | 2.600.     |        |
| X線映画装置 BeIle Howell        | 37. 7. | 34.        |        |
| 手術用X線装置SX-708-2東芝          | 38. 8. | 2.740.     |        |
| エレマ・シェーナンデル フィルムチェン<br>ジャー | 38. 5. | 2.599.3    |        |
| パコ自動現像乾燥器                  | 38.11. | 6.090.     |        |
| Logetronographie装置         | 39. 3. | 1.070.     |        |

|                             |        |        |     |
|-----------------------------|--------|--------|-----|
| 蛍光増倍管フィリップス9インチ             | 39. 3. | 3.900. |     |
| 撮影用天井走行管球保持器付ID-150-L<br>島津 | 39. 9. | 2.700. |     |
| 撮影用ID-150LC高压リーダー付島津        | 39. 9. | 2.150. |     |
| 断面撮影装置HL-5 特島津              | 40.10. | 2.860. |     |
| 透視用X線装置DR-155A特日立           | 40.12. | 3.830. |     |
| 頭部精密撮影装置エレマ                 | 41. 2. | 3.700. |     |
| 泌尿器科用X線装置FD-100M島津          | 40.10. | 925.   |     |
| 手術用7インチII付X線装置シーメンス         | 41.    | 4.400. |     |
| 心臓カテーテル用ID150L-2 島津         | 41.10. |        | リース |
| 胃胸間接撮影装置シリウスAG-125          | 42. 2. | 5.640. | リース |
| シリウスSR-100M大阪レ日立            | 42.11. |        |     |
| 移動用ハイボルテックス合松2台<br>(RI関係)   | 42.11. | @950.  |     |
| RI走査診断装置                    | 40. 3. | 2.800. |     |
| サーベメーター                     | 40. 9. | 83.6.  |     |
| ”                           | 41. 2. | 128.2. |     |
| シンチレーションカウンター               | 41.11. | 1.000. |     |

### 研究業績

今までに発表されたものは。

原著 135篇

講演 285件

である。(他に戦災および27年の火災により不明となったものがある)

放射線医学の研究はその放射線機器によって、殆ど決定的に支配される。したがって、放射線機器が整備されて行くにともない、研究面でもそれだけ発展を示してきた。

串木野市荒川鉾山に続いて枕崎市春日鉾山の珪肺症に関する調査研究は、昭和24年に始まり、40年終ころまで、毎年継続して行なわれ、長期間の珪肺症推移の状況が明らかにされた。

昭和34年から42・3年まで、かつてソ連に抑留され、鉾山労働を強制されて復員した人々を探し出して調査研究したところ、その全員に高度の珪肺症が発見され、抑留中の残虐な非人道的処遇の実態が明らかとなった。

肺結核の診断治療は、当教室では、最初は放射線治療、人工気胸療法が行なわれたが、昭和25・6年ころから、その中心が漸次、抗結核剤療法・安静仰臥療法に移って行った。結核の治癒機転に関する当教室の独自の見解に立って、精密な解析診断法により、一段と高次の成績を挙げることができた。

昭和33年より40年まで、数次に亘り、県下各河川の流域地方において、肺吸虫症の調査研究を行ない、その浸淫度を窮め、また胸部レントゲン写真所見に新知見を加えた。

悪性腫瘍の診断については、末梢流血中の腫瘍細胞および肺癌の喀痰中の癌細胞について研究した。ことにメトラ氏気管枝ゾンデによる病巣擦過細胞診によって85.1%の陽性確診率を挙げることができた。

悪性腫瘍の放射線照射療法については、36年9月よりCo<sup>60</sup>遠隔照射装置を使用し、ひとつのエポックを画した。放射線照射による副作用軽減対策についても研究が行なわれた。今後はさらに、リニアアクセレーターおよびベータートロン等の超高エネルギー装置の早急の設置が待望されている。

胃腸疾患の診断については、古くから研究の重点がおかれてきた。最近では蛍光増倍管、X線テレビおよびビデオ、あるいはX線映画法等を使用し、また粘膜のレントゲン像と内視鏡像との比較研究を実施して、診断の精度を高めることに、研究の焦点がしばられ、顕著な成績を挙げている。

蛍光増倍管はフィリップス製9インチ型で、昭和39年3月より使用し、テレビはオルシコン方式（日立）で42年6月より、また映画装置（Belle Howell）は40年より使用され、ビデオは本年より使用されるようになった。

RIに関する診療研究は最も遅れていた。昭和34年3月よりRIセンターの設置が計画され、既設建物の改造工事がなされている。38年1月にようやくRIセンターの運営が始った。これより先、放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律（昭和32.6.10.法律第167号）が制定せられ、これがその後数次に亘り改正せられたので、その都度幾許かの予算を貰ってRIセンターの改造を加えた。38年9月には200万円の予算を得て、最終的改造をなし、科学技術庁の使用許可の認証を得た。しかしこの時はラジウムの他には、僅かにP<sup>32</sup>が小範囲に使用される程度にすぎなかった。

昭和40年3月にはRI走査診断装置、41年11月にはシンチレーションカウンター等を購入することができ、ようやく軌道に乗ってきた。

初期においては講師上川路陸博が担当したが、40年よりは助手有川憲蔵が主として、これを担当し現在に及んでいる。RIに関する研究診療は今後に期待さ

れる。

### 中央レントゲン室，コバルト室，RI室

中央レントゲン室における写真フィルムの撮影枚数は年々急速に増加してきている。

フィルムの現像処理の方法は最初はタンク現像をなし，これを電熱熱風乾燥器にかけて仕上げていたが，この方法では時間を要し不評を買った。

昭和38年11月には **Pako Corporation** 製 **Pakorol-x** 自動現像乾燥装置を購入することができたので，それ以来この問題は解決した。フィルムの年次消費枚数は別表（2）の通りである。

中央レントゲン室は最初から病院全体の中央診療施設として運営されてきたが，医員は専属のものがなく，放射線科の医員がこれを兼務し，診療エックス線技師および補助員はすべてこの中央レントゲン室に配属されてきた。しかし

別表 (2)

#### フ イ ル ム 消 費 量 一 覧

| 年 度   | 枚 数    | 年 度   | 数 枚    |
|-------|--------|-------|--------|
| 昭和 25 | 13,063 | 昭和 34 | 37,002 |
| 26    | 17,277 | 35    | 37,980 |
| 27    | 10,963 | 36    | 41,546 |
| 28    | 15,390 | 37    | 48,637 |
| 29    | 20,200 | 38    | 55,940 |
| 30    | 30,895 | 39    | 61,838 |
| 31    | 32,195 | 40    | 70,526 |
| 32    | 29,226 | 41    | 74,066 |
| 33    | 31,622 | 42    | 77,696 |

ながら、国立大学の方針としては、中央診療施設として中央放射線部を設け、専属の定員を配置する方針であるから、当院としても、ここ1・2年のうちにこれが実現するものと思われる。

#### 全国学会主催

昭和41年4月 当教室は全国学会を主催した。参加者は総数5000人といわれ、鹿児島全市が学会色一色に彩られた。

#### 第25回 日本医学放射線学会総会

会 長 縄田千郎

会 期 昭和41年4月8日～10日

講演会場 県医師会館

展示会場 第一生命ビル、日本ガスビル

一般講演 398

特別講演 1. 宿題報告 2. シンポジウム 1.

#### 第22回 日本放射線技術学会総会

会 長 税所篤正

会 期 昭和41年4月9日～11日

講演会場 市中央公民館

展示会場 県教育会館

一般講演 207

特別講演 1. 宿題報告 1. シンポジウム 1.

分科会、測定、防護、ファントーム各委員会

#### 日本医科電機工業会 合同大展示会

会 期 昭和41年4月8日～11日

会 場 県体育館

#### 放射線科専門医修練機関

日本医学放射線学会は放射線科専門医制度規程を制定し、昭和41年4月1日から実施している。この規程には専門医修練機関の認定基準および修練内容の基準が設けられている。

当教室は日本医学放射線学会に、修練機関としての認定を申請したところ、審査の結果認定基準に合格し、昭和43年2月15日付をもって、41年4月1日にさかのぼり、X線診断、放射線治療および核医学の放射線科全領域についての放射線科専門医修練機関認定証（第14号）の交付を受けた。

過去14年間の放射線科外来入院患者数一覧

外来は日曜休日を除いた年間の一日平均数

入院は一年365日の一日平均入院者数

| 昭和年度 | 外 来  |       | 入 院  |       |
|------|------|-------|------|-------|
|      | 総 数  | 内 新 患 | 総 数  | 内 結 核 |
| 29   | 38   |       | 13   |       |
| 30   | 38   |       | 38   |       |
| 31   | 38.9 |       | 36.7 |       |
| 32   | 29.8 | 8.9   | 31.4 | 29.5  |
| 33   | 31.6 | 7.8   | 29.8 | 25.6  |
| 34   | 39.7 | 8.5   | 37.5 | 23.6  |
| 35   | 40.0 | 7.6   | 34.8 | 22.4  |
| 36   | 41.5 | 6.1   | 31.9 | 22.1  |
| 37   | 38.3 | 5.2   | 32.5 | 20.2  |
| 38   | 36.3 | 4.4   | 32.2 | 19.8  |
| 39   | 40.2 | 4.8   | 34.2 | 21.0  |
| 40   | 43.4 | 5.5   | 26.4 | 16.1  |
| 41   | 41.9 | 5.2   | 27.8 | 15.1  |
| 42   | 35.2 | 5.0   | 28.3 | 13.9  |

現職員名

医学部所属

教 授 縄田 千郎 (昭和43年3月31日定年退職)

助 教 授 篠原 慎治

助 手 牧野 正興 曾根 博文

技能補佐員 松山 睦子 森田千恵子 町田美千代

附属病院所属

講 師 後藤 有人

助 手 赤崎 郁郎 伊東 祐治 有川 憲蔵

倉岡 東一

中央レントゲン室，コバルト室，RI室

|       |           |       |       |  |
|-------|-----------|-------|-------|--|
| 技 官   | 税所 篤正（主任） |       |       |  |
|       | 当房 勝雄     | 下野 哲勇 | 米倉 誠耕 |  |
|       | 池田 正隆     | 小川 臣人 | 中村 純雄 |  |
| 技 術 員 | 岡田 淳徳     | 石原 幸生 |       |  |
| 技 能 員 | 谷沢 洋子     | 上山 和子 |       |  |
| 技能補佐員 | 亀田 秀樹     | 大平喜久雄 |       |  |

昭和43年（1968）3月一記

### 産 婦 人 科 学 教 室

昭和18年4月鹿児島医学専門学校設立と共に，その前身である県立鹿児島病院産婦人科部長であった町野碩夫先生（現鹿児島大学名誉教授）が教授に着任され，現在の産婦人科教室の第一歩が踏みだされた。

鹿児島大学医学部の沿革史をひもとくと，明治2年3月に藩病院並びに附属医学校が設立され，当時西日本における医学の中心となったが，婦人科が正式に設置されたのは明治34年9月で，初代医長は秋本隆次郎先生となっている。昭和12年4月県立鹿児島病院産婦人科部長に町野先生が着任されるまでの医長と勤務期間は。

|                       |                 |
|-----------------------|-----------------|
| 秋元 隆次郎                | 明治34年9月～明治36年4月 |
| 緒方十右衛門                | 明治36年6月～明治38年6月 |
| 佐藤 良彦                 | 明治38年6月～明治40年6月 |
| 井岡 忠雄                 | 明治40年6月～明治42年3月 |
| 渡辺 辰雄                 | 明治42年3月～大正2年8月  |
| 若原 貞一                 | 大正2年8月～大正13年3月  |
| （大正8年5月より同9年11月迄東京留学） |                 |
| 中島 藤蔵                 | 大正7年9月～大正9年11月  |
| 緒方 英俊                 | 大正13年3月～昭和5年2月  |
| 柳井 昌憲                 | 昭和5年3月～昭和12年4月  |
| 町野 碩夫                 | 昭和12年4月～        |

となっている。

町野先生が教授に就任された昭和18年頃は，戦時中の物資不足の頃で医局員も少く，教授自ら診療研究に孤軍奮闘されていたそうであるが，その間の助教授は。

|       | 入局       | 退局       |
|-------|----------|----------|
| 田口 正門 | 昭和19年 7月 | 昭和20年12月 |
| 中垣 力  | 昭和21年 9月 | 昭和22年 3月 |
| 大保不二夫 | 昭和22年 3月 | 昭和23年 3月 |
| 鳥丸 眞考 | 昭和20年 9月 | 昭和26年 6月 |
| 堀添 善司 | 昭和12年 1月 | 昭和24年10月 |
| 益田 寿  | 昭和21年 7月 | 昭和27年 7月 |
| 森 一郎  | 昭和25年 2月 |          |

の諸先生で、またこの間の講師は、  
前嶋 良秀、中垣 務、堀添 善司、前田 末男、  
安田 義重、滝井 慶二の先生方であるが、ほとんどの方が現在開業医として活躍されている。

昭和20年 6月病院が空襲で全焼したあとは一高女、県庁別館、武徳殿跡と転々し、附属病院の復旧と共に移転した。ところが昭和27年 4月またもや類焼の災にあい、看護宿舎で診療が行なわれたが、昭和30年病院の竣工とともに現在に至った。

なおその間学校は、  
昭和22年医科大学予科開設  
昭和24年県立鹿児島大学認可  
医専、医大は同大学に統合

昭和33年 5月 国立移管となった。  
昭和33年 5月 国立移管当時の教室のスタッフをのべると。

|     |       |   |               |
|-----|-------|---|---------------|
| 教 授 | 町野 碩夫 | 現 | 鹿児島大学学長       |
| 助 授 | 森 一郎  | 現 | 教授            |
| 講 師 | 鳥居 重光 | 現 | 開業            |
|     | 松元 重雄 | 現 | 鹿児島通信病院産婦人科部長 |
|     | 保城 勉  | 現 | 大阪公道会病院       |
|     | 外西 寿彦 | 現 | 鹿児島市立病院産婦人科部長 |

であるがその後。

|       |                  |  |
|-------|------------------|--|
| 昭和34年 |                  |  |
| 保城 勉  | 宮崎県立日南病院産婦人科医長就任 |  |
| 鳥居 重光 | 屋久島粟生診療所に出張      |  |
| 外西 寿彦 | 医局長就任            |  |

|        |                   |
|--------|-------------------|
| 山下 大蔵  | 講師就任              |
| 昭和35年  |                   |
| 山下 大蔵  | 日赤鹿児島病院産婦人科部長就任   |
| 家村 邦重  | 講師就任              |
| 昭和36年  |                   |
| 前田正一郎  | 講師就任              |
| 昭和37年  |                   |
| 池田 千秋  | 講師就任              |
| 昭和38年  |                   |
| 町野 教授  | 宿題報告 産科婦人科学会      |
| 前田正一郎  | 国立都城病院産婦人科部長就任    |
| 昭和39年  |                   |
| 池田 千秋  | 鹿児島県立鹿屋病院産婦人科部長就任 |
| 昭和40年  |                   |
| 町野 教授  | 退官                |
| 森 一郎   | 教授就任              |
| 牧 美輝   | 講師就任              |
| 昭和41年  |                   |
| 桑波田景一郎 | 講師就任              |
|        | 県立鹿屋病院産婦人科部長就任    |
| 外西 寿彦  | 助教授昇任             |
| 斉藤 光昭  | 婦医局（県立大島病院）       |
|        | 講師就任              |
| 外西 寿彦  | 鹿児島市立病院産婦人科部長就任   |
| 竹中 静広  | 講師就任              |
| 昭和42年  |                   |
| 町野 碩夫  | 鹿児島通信病院院長就任       |
| 松元 重達  | 鹿児島通信病院産婦人科部長就任   |
| 斉藤 光昭  | 東京都高根台病院勤務        |
| 西村 明男  | 婦医局（えびの町立病院より）    |
| 牧 美輝   | 助教授就任             |
| 徳永 博美  | 婦医局（県立日南病院より）     |

となっている。

研究部門においては、町野教授は長年に亘る研究であった更年期障害症について、昭和38年大阪の日本産科婦人科学会にて宿題報告を行なわれたが、その他、産婦人科領域におけるフィラリア症の研究、トリコモナスの研究、Ascorbin 酸の研究、胎児骨の燐及カルシウム代謝、骨盤の解剖学的研究、Co<sup>60</sup>の子宮癌治療に関する研究、性ホルモンに関する研究、糖蛋白代謝の研究、皮膚温に関する研究、胎児心音に関する研究、電顕による性ホルモンと視床下部の研究と多方面に亘る分野を開拓された。

昭和40年、森教授就任後は、町野教授時代にひきつづき、更年期障害症、婦人自律神経失調症、体温に関する問題がとりあげられているほか、ステロイドホルモンの代謝、組織培養、酵素、免疫、トキソプラズマ、母子衛生など広汎な範囲にわたって研究が行なわれ、昭和41年度に、日本臨床産科婦人科学会で“更年期婦人における自律神経失調症の診断と治療”日本母子衛生学会で“避地における妊産婦死亡の対策”また本年度は日本内分泌学会で“エストロゲンの代謝と臨床的意義”などのシンポジウムを担当し活躍されている。

最後に教室の現況は。

|     |       |
|-----|-------|
| 教 授 | 森 一郎  |
| 助 授 | 牧 美輝  |
| 講 師 | 家村 邦重 |
|     | 竹中 静広 |
|     | 徳永 博美 |
|     | 池田富士雄 |

のスタッフのもとに、産科関係は M.E., 産科麻酔、免疫、トキソプラズマ、新生児の代謝、不妊、婦人科関係は糖蛋白代謝、電顕、酵素、自律神経症と、各分担のもとに研究が続けられている。また臨床の方も、癌クリニック、不妊クリニック、更年期クリニックと着々その成果をあげつつある。

なお教室の関係病院は。

鹿児島市立病院、国立鹿児島病院、済生会鹿児島病院、鹿児島日赤病院、屋久島栗生診療所、国立都城病院、鹿児島県立大島病院、済生会川内病院、宮崎県三股町立病院、県立鹿屋病院、宮崎県えびの町立病院、宮崎県立日南病院等で、教室出身の俊秀が活躍健闘している。

## 歯 科 口 腔 外 科 学 教 室

大正11年、県立鹿児島病院の改築工事完了に伴い、総合病院としての充実を

計るために歯科部が新設された。当時、病院長汲田元之丞外科部長が、友人の東洋歯科医専校長佐藤かずお（日大歯卒）先生に、歯科を新設したい旨を伝えたことに始まり、佐藤先生が東京歯医専保存学川上為次郎先生（当時附属病院長）と懇意にしておられた関係上、上記の意向をのべ歯科部長の推薦方を依頼されたという。そして、当時東京在住で福岡県若松市出身の柴田実氏（東歯医専大9年卒）が大正11年4月に歯科部長として来任された。治療椅子2台、電気エンジン1台で診療が開始された。しかし、大正11年4月より一カ年は、歯科部は外科に附属しており、大正12年4月より正式な歯科部として発足したのである。当時の定員は、部長1名医員1名（佐多達士氏）技工士1名、看護婦2名であった。

昭和2年6月柴田氏退職により、佐賀県出身三宅久夫氏（東歯医専、大14年卒）が後任として着任されたが、柴田氏の時は部長であったのに、どういうわけか、三宅氏は歯科主任（医員）として就任することになった。当時の新聞に、歯科は、以後部長制を廃止し、外科に隷属するという記事を読んで少なからず闘志を燃やしたのを覚えていると三宅氏は述べている。

昭和6年4月再び部長制となるや、治療椅子を4台に増加し、手術室、医局、技工室を増築し、医員も10年4月より2名（西原清平、肝付保の両氏）となった。

昭和11年4月、三宅部長は九州帝大に内地留学を命ぜられ、留守部長として、九大から内山有三氏（11.4～12.11）林善三郎氏（12.4～13.8）が来任、昭和13年11月、三宅氏帰任し、歯科口腔外科を標榜することになった。

昭和18年4月、あらかじめ懸案になっていた県立鹿児島医学専門学校が開設され、発足当時各部長はそのまま教授になったが、院長石田外科部長と三宅部長は、一身上の都合で県病院の単なる部長として残り、学校の方は講師として、第二年級より講義を担当され、昭和21年3月30日、三宅氏は医専の教授に任官された。

昭和20年4月、病院は、直撃弾および時限爆弾にやられ、病棟の大半を失ったが、残った診療室で尚、患者の診療を続けていった。空襲が烈しくなるにつれ、著しく危険を感じずに至り、また僅かになった患者も退院し、外来も数少なくなったので、治療椅子2セットと目ぼしい器具、薬品を稲荷町にあった鶴峯高女内に疎開せしめた。昭和20年6月17日、焼夷弾攻撃により病院は焼失し、外来診療所は現在草牟田の盲啞学校で代行された。この時疎開していた2セットの治療椅子らが大いに役立った。昭和21年9月18日、山下町県庁別館に移転、

昭和22年3月3日、山下町武徳殿跡に平家瓦葺一棟を建築し移転した。当時助手として中村勲、上脇武雄、石田浩、その他、米良卓郎、河野通彬、浜崎栄郎、米良富士弥、大迫勉各氏らが在局した。

昭和22年度、元県立病院跡に、病院竣工し総工費 4,559,790円で、歯科診療室〔平家木造 (118.25坪) 〕も竣工された。

昭和23年11月、三宅久夫教授が退職、12月11日九大より副島侃二氏（東歯医専昭和2年卒）が部長に就任され、第一声は“班状歯とフッ素の研究にきた”と言われ、退官までのライフワークとなった。

昭和24年3月31日、副島氏は教授任官、昭和35年5月、下原朝光氏（24年5月入局）が助教授に昇任、講師に上脇武雄氏（20年11月入局）が昇任、在局者は助手として、浜崎、牧角、長田、その他は小松、吉川各氏らであった。

昭和24年4月1日、鹿児島県立大学医学部となり、医学部附属病院となる。

昭和27年4月24日午前0時15分、病院東側民家より出火、病院全部類焼々失するも仮看護婦宿舎において外来診療が開始された。昭和28年5月15日、病院本建築起工式、昭和29年4月17日仮設外来診療所建設、昭和30年3月4日現在の鉄筋の病院が落成した。

昭和31年4月13日、第10回日本口腔科学会総会（名古屋市）で、副島教授が宿題報告、演題“慢性フッ素中毒症に関する研究”について講演された。また同会評議委員会で、33年度の会長に副島教授が指名され、以降20カ年医局全員（下原助教授、栄鶴講師、持山弥之助助手、長田一哉助手、酒匂陸夫助手、萩原兼志助手）および同門会の協力により着々と準備が進められたのである。その間、32年夏、フッ素委員会を鹿児島で開催し、桜島丸をチャーターして桜島を一周し、霧島の林田ホテルで大いに論議したのである。

昭和33年3月29日、30日、第12回日本口腔科学会総会（会長、副島侃二教授）を鹿児島（市中央公民館）で開催した。3月末、春を迎えようとする矢先に、雪に見舞われ、あたたかい南九州というキャッチフレーズで勧誘した会員を震いあがらせた学会であり、また山形屋（5階）で行なわれた会員の歓迎会、更にサツマ焼のみやげまで無料で配布するなど豪華な催しには会員全員をおどろかせ、今でも語り草となる程、会員諸氏を喜ばせたのも記憶に新しいところである。特別講演は鹿児島県立大学教授、宮崎淳弘先生が“フッ素の骨に及ぼす影響”について、宿題報告は岡山大学教授、渡辺義男先生が“口腔領域における剝離細胞学”について、また九州大学助教授、佐々木元賢先生が“口腔外科領域の麻酔、特に乳幼児の麻酔”について、講演された。

県立鹿児島大学は、昭和33年5月1日付で国立移管されることになったが、歯科口腔外科は、診療科として移管されることになり、講座がなくなり、下原助教は講師として、栄鶴仁、長田一哉、配匂睦夫、萩原兼志各氏らは助手として移管された。しかし副島教授は講座が認められるまで約1年間、ひとり県立医科大学教授として忍苦をなめられたのである。

昭和34年4月1日、歯科口腔外科学講座増設許可（昭和34年5月16日、文大第333号通知により）されるとともに副島教授は鹿大教授に任官された。その8月、鹿児島大学10年史が発刊されたが、当時医員は、長田一哉講師、宮田富良講師、萩原兼志、吉留幸雄、松村益美、篠原寿宏各助手であった。

同年5月、教室では上顎癌患者の上顎骨全摘出術に始めて気管内麻酔法を取り入れて以来、篠原が1外科白尾先生の指導のもとに麻酔を担当し、40年12月までの全麻を当教室単独で行ない、36年以降では院内でも1外科、2外科について第三の全麻件数を占めるようになったが、中央手術部設置とともに、そちらにゆだねるようになった。このように気管内麻酔とともに手術の侵襲も大きくなってきたので34年7月、医局長会議で、これまでの内科系、外科系各1名の宿直制を廃止し、8月1日より各科ともに宿直が配分されることになった。

35年3月は、旧制度による博士課程の最終年限でもあり、多くの専攻生が病院に日参し、研鑽を積まれたのも記憶の新しいところであるが、これらは昭和36年3月、県立鹿児島医科大学学位審査最終日まで教授会をにぎわしたのである。

昭和35年4月、初めての大学院生として吉元真澄氏が入学し、口腔外科学の大学院としての門が開かれたのである。同年5月、山下佐英、9月、松井澄夫、36年2月、野井倉武憲、4月、浜田義彦（大学院）松田典憲各氏らが入局した。

37年4月、福島務、川平淳、四元貢（大学院）増田敏雄各氏が入局し、同時に甑島の中甑村立診療所にムントができ、松田助手が先発し、その後1カ月交代で各医員が出張した。

昭和38年3月、松井助手が宮崎の個人病院に教授の命で派遣され、そのあとに副島公生氏が入局助手となる。39年3月宮田講師が退官され、大学院卒の吉元氏が助手一カ月後、坊に出張、横山恒子氏が入局助手となる。また4月久しく欠員であった助教授の座に山下講師が昇格し、その他医局員として、篠原講師、野井倉、吉元、川平、増田、副島各助手、大学院生として浜田（4）四元（3）野添良隆（1）氏らが在局していた。

昭和39年7月、夏期研修会最終日、講義の時間がなくなり、帰宅された教授

であったが翌日吐血され（3回目）1外科に入院されたが、約1週間後、8月2日当日台風一過とともに去るが如く急逝されたのであった。遠城寺教授の病理解剖により“肝硬変に由来する食道の静脈瘤よりの出血死”と診断され、10日学部葬が西本願寺で盛大かつしめやかに挙行された

その後、塩田教授のご赴任までの約1年と3カ月間、耳鼻咽喉科久保教授が担任教授となられ、山下助教授が教室の責務を遂行し、医局員も全員一致協力して学会など多くの演題を出すなど大いにハッスルし、退局するものもなかったが、後任教授決定はだいたい難行した感が強かった。40年4月1日、助手1名増員され、浜田氏助手となる。

昭和40年9月16日の医学部教授会において東大分院、助教授塩田重利博士（阪大医学部昭和26年卒、東医歯大昭和30年卒）が後任教授に推薦指名され、早速割愛願が提出され、東大分院より10月5日、医学部長宛、了解の返信が届いた。この報に接し、教室員は歓呼の声をあげたのも昨日のようである。そして昭和40年11月来鹿、一旦帰京され翌年1月16日、単身で赴任されたが奥様と二人の令嬢は数カ月遅れて着鹿、下伊敷の官舎に着着されたのである。

昭和40年2月26日、同門会による教授歓迎会を行なった。4月7日、日本政府派遣沖繩学童検診のため3カ月間、浜田君出張し42年度には、篠原、川平、野井倉、四元らが各1カ月出張した。

昭和41年12月5日吉元氏が、塩田教授主査のもとに、当教室大学院生初の学位記を受け、ついで42年1月23日浜田氏、四元氏が相次ぎ学位記を受けた。3月には山下氏が論文による学位記を取得されたが、9月阪大歯学部入学のため退官された。

塩田教授をしたって、41年5月市来英雄、岡山秀昭両君が入局したのをはじめ、42年度（5月）には平山甲滉（大学院）重久智、鶴丸高久各君が入局し、来年度は台湾より留学生1名計8名の入局希望者が予定されている。

42年4月より非常講師として、久留米大学教授、朱雀直道先生をお迎えして医学部学生の講義、ポリクリなど教育方向を充実せしめた。

昭和42年12月現在、塩田教授をはじめ、篠原講師、浜田、野井倉助手講師、松井、川平、増田、市来、鶴丸の各助手、大学院として野添（4）岡山（1）平山（1）の各氏、副島研究員らが在局し、悪性腫瘍、リンパ系、口腔奇形らのテーマについて、実験研究した診療に従事している。



## 第十章

### 父兄後援会、同窓会 自治会の歩み



# 鹿児島大学医学部父兄後援会

## 一、発 足

### 1. 発 起

昭和18年4月20日、鹿児島県立医学専門学校開校式並びに第1回入学式終了後父兄の話し合いが持たれ、物心両面で学校を後援するため父兄後援会結成が発議された。父兄側代表の世話役、竹内吉五郎・山下源之丞・鮫島宗雅の三氏は、学校側高安慎一校長にこの主旨を伝え承認を求めたが、専門学校に前例がないことと、色々複雑面倒な事情も予想せられるということで実現するに至らなかった。

### 2. 結 成

それから3年後の昭和21年3月に至り、学校側・生徒側からも父兄後援会結成の要望が起り、直ちに父兄後援会結成準備会（学校側3人：町野碩夫院長・大森浅吉教授・森田勝教授、父兄側11人：平島清彦・安藤佳久・荒武秀治・生野正一・上原信一・右田利隆・内村栄之助・辰元作徳・有川国盛・稲葉三次郎・鮫島宗雅）を開催し、役員を選出して

会 長（理 事 長）：三島実則（弁護士・市会議員・第2回入学生父兄）

副会長（常務理事）：鮫島宗雅（開業医・第1回入学生父兄）

庶務会計係：生野正一（官吏・第1回入学生父兄）

顧 問：平島清彦（歯科医・第3回入学生父兄）

を決定した。

### 3. 結成の主旨

- (1) 当時は世界第二次大戦敗戦の直後で財政状態は困難で不安の折柄、医学専門学校不用論・廃止論さえ主張される状態であり、
- (2) 開校後僅か3年で、まだ同窓会もできていない。
- (3) 強力な同窓会ができるまで、学校に何等かの力添えをしたい。

というのが結成した時の主旨であった。

### 4. 名 称

- (1) 昭和21年3月結成の時「鹿児島県立医学専門学校父兄後援会」と命名された。

- (2) 昭和22年6月18日一戦後の医制改革により県立鹿児島医科大学に昇格  
昭和27年2月20日一新制による鹿児島県立大学医学部を設置  
昭和30年7月1日一県立より国立へ移管し鹿児島大学医学部を新設  
等に伴ない、その都度名称は変更された。

## 二、目的・組織・役員・会費等（昭和43年6月8日会則改正）

1. 目的：会員相互並びに医学部当事者との連絡を密にして、医学医育の発展向上に資するとともに、学生の福利厚生に寄与することを目的とする。
2. 組織：正会員一学生の父兄または保証人，賛助会員一医学部並びに前身学校の卒業生の父兄および医学部職員その他の有志をもって組織する。
3. 役員：会長1人，副会長1人，理事若干人（内1人は会計担当理事）監事2人，評議員若干人
4. 会費：正会員は会費2万円とし，入学の際納入する。
5. 経費：正会員の会費・その他の寄付金をもってあてる。
6. 会議：総会，評議員会，理事会

## 三、後援の実績

本会は昭和21年3月発足以来，医学部の発展とともに歩み続け，医学教育の向上に側面から援助を与え続けて来た実績は大なるものがある。その主なものを列挙すれば，

### 1. 戦災焼失の附属病院・校舎の再建・復興への協力

戦災により鹿児島市は焼土と化し県財政は困難をきわめ，鹿児島県立医専の不用・廃止を唱える者もあって，戦後の附属病院・校舎の再建・復興，資金調達は並々ならぬものがあった。昭和21年3月5日附属病院復興委員会が発足し，同年6月10日鹿児島県立医専復興委員会が県庁仮庁舎において開催され，本会は学校当局・学生と一体となり力を合せて，県・文部省・厚生省への陳情・接衝，在京出身者への寄付依頼・地元医師会・県議会への働きかけ・敷地の交渉等々鹿児島県立医専の存廃をかけた必死の協力により，県議会における附属病院復興・医専存置の予算を通過させることができた。

### 2. 医専のA・B級格差問題・県立医科大学昇格への協力

終戦後医学校整備のためのA・B級両級工作が文部省によって行なわれ，B級にランクされると廃校になるおそれがあった。鹿児島県立医専は創立後日も浅く，戦災のため教材・機械器具・研究資料等不十分のため，B級になる懸念

は多分にあった。父兄・学校・生徒は校長を中心に結束し、駐留軍主脳部・関係官を通じて有利に導く工作・努力を続け、三島会長・平島顧問等も上京して郷土出身の財界人・政界人の助力を得て関係方面へ陳情するなど、その熱意が功を奏して、昭和22年3月29日A級医専に決定され、引続いて同年6月18日戦後の医制改革による県立医科大学へ昇格した。

### 3. 教授住宅建設

- (1) 「戦災のため戦後の鹿児島市は住宅事情が非常に困難であった」。「新たに赴任する教授の住宅もないのでは困る」・「優秀な教授を迎えるためにも住宅の準備が必要である」等の理由で、本会は高麗町・下荒田町に教授住宅2軒を建設し、住宅困難時の学校に協力した。
- (2) その後漸次住宅事情も好転し、国費による教官住宅3軒も医学部構内に建設されたので、本会所有の教授住宅にかえて学生の為の「学生ホーム」をとの観点からこの教授住宅を処分して学生ホーム（昭和41年5月20日完成）建設費にあてられることになった。

### 4. 学生ホーム建設

- (1) 建設の事由：鹿児島大学の学生会館の恩恵は、鹿児島大学全学部の学生が受けているが、ただ医学部だけが遠く離れているために医学部専門課程の学生はその恩恵から隔離されている。本会は、医学部専門課程学生の「憩いの場」としての学生ホームがどうしても必要であるということで、その建設を総会にはかり、満場一致で承認され、「折角建設するなら素晴らしい恒久的なものを」との会員の希望も認められた。しかし医学部移転計画の都合があった為、医学部移転迄の学生憩いの場として、木造平家155.1㎡（47坪）の学生ホームを医学部構内に建設することになった。
- (2) 着工・完成：昭和41年2月18日～5月20日（90日間）
- (3) 贈呈式：昭和41年5月24日、本会から鹿児島大学医学部への贈呈式が盛大に挙行された。

### 5. 初代校長高安慎一先生胸像建設

#### (1) 胸像設立委員会結成

高安先生の功績と本学部創立の伝統を永久に伝承するために、医学部同窓会・医学部父兄後援会・医学部三者協力して高安先生の胸像を医学部本館前庭に建設することを決定し、昭和41年3月2日「高安慎一先生胸像設立委員会」が結成された。

- (2) 寄付金募集：本会は総会にはかり、会員全員に趣意書を配布して呼びか

け、建設費の寄付金募集に奔走して、割り当てられた責任額を果たした。

(3) 除幕式：昭和41年9月11日高安先生・関係者多数出席のもとに举行された。

#### 6. 奄美大島巡回診療団援助

亜熱帯環境下の鹿児島県の離島・僻地は、フィラリヤ症・アメーバー赤痢・糞線虫・ハブ咬傷等の風土病をかかえ、医療施設貧困で無医地区が多い。昭和29年5月以来毎年「鹿児島大学医学部奄美大島巡回診療団」が派遣されており、本会はその費用の一部を援助している。

#### 7. 沖縄学術調査診療団・台湾省医学調査診療団への補助

##### (1) 沖縄学術調査診療団派遣

医療の恩恵に恵まれない地区・住民を対象として、昭和40年以降毎年派遣されており、本会はその費用を分担している。

##### (2) 台湾省医学調査診療団派遣

昭和42年11月2日～11月17日台湾省花蓮県に派遣し、原住民高砂族を中心とした診療ならびに医学的調査が行なわれた。本会はその経費捻出に協力し、一部を分担して側面的に援助した。

#### 8. 医学部学友会諸活動への援助

(1) 各サークルの道具・器具類の購入・修理、練習場整備

(2) 西日本医学部学生体育大会・九州医学部学生体育大会参加への補助

(3) 医学部学生運動会・医学展・医学部卒業生謝恩会歓送会等補助

#### 9. 鹿児島大学医学部25周年記念事業・鹿児島西洋医学開講百年祭への協力

昭和43年4月21日（日）に記念式典・祝賀会が盛大に举行されたが、本会はこの記念事業実施についても色々と参画し、割当てられた経費を分担した。

（昭和43年3月27日理事会を召集して負担額の支出を決定）

#### 10. 教授・学生懇談会、その他医学部諸行事への援助

(1) 助言教官制度（各教授は医学部学生14～15人宛を受け持って助言指導している）を活用し、教授と学生の話し合い・心の触れ合いを促進するために、各教授と受け持ち学生との懇談会の費用を援助している。

(2) その他医学部諸行事への援助・補助を行なっている。

### 四、歴代の会長・副会長等

会長 初代 三島 実則（弁護士）昭和21年3月～23年4月（2年）

二代 佐々木武男（市立病院長）〃 23年4月～25年4月（2年）

|        |    |    |           |   |                   |
|--------|----|----|-----------|---|-------------------|
|        | 三代 | 高岡 | 義（開業医）    | ” | 25年4月～42年5月（17年）  |
|        | 四代 | 牛飼 | 市助（元市会議長） | ” | 42年5月～現在          |
| 副会長    | 初代 | 鮫島 | 宗雅（開業医）   | ” | 21年3月～24年9月（3.5年） |
|        | 二代 | 倉内 | 弥輔（銀行監査役） | ” | 24年9月～42年5月（18年）  |
|        | 三代 | 島本 | 保（開業医）    | ” | 42年5月～現在          |
| 会計担当理事 |    | 内田 | 実（開業医）    | ” | 42年5月～現在          |

## 鹿 児 島 大 学 医 学 部 自 治 会

本学学生自治会は鹿児島医科大学学友会、鹿児島医科大学自治会を解消して、昭和27年3月1日鹿児島県立大学医学部自治会として組織され今日に至っているが、文化部、厚生部、体育部の三部に分れ、各部員一丸となって夫々の部門により活動し実績を挙げている。

なお、学生活動の一端として昭和28年10月鹿児島医科大学科学部を設置し、習得せる医学的知識を基礎とし、医学各分野における研究ならびに応用に努力している。現在この科学部は社会医学研究部として活躍している。

本学医学部の前身県立医学専門学校創設以来、変転きわまりない学制改革に伴って、前記自治会等も一時解消の已むなきに至ったが、昭和37年4月、学制と時代に即応して新しく「鹿児島大学医学部学友会」を組織し、総務部、文化部、社会部、体育部、出版部、図書部の6部を置き、新入生歓迎会、卒業生祝賀会、運動会の開催、医学展、医学講演会等の実施、無医村診療の実施、西日本医学生体育大会および九州医科学生ゼミナール、「鹿大医報」の出版等の自主的活動を続けている。

なお、鹿児島大学には全学的な、「鹿児島大学学友会」の組織があり、その方にも加盟しているので縦横の連繫を保ちつつ活動している。学部独自の学友会を持つのは、本医学部のみである。昭和37年4月制定された「鹿児島大学医学部学友会会則」は更に前進して昭和39年4月改正され、現行会則として施行されている。

学友会に於ける諸活動は、学生の課外活動、自主活動の育成に資するところ大であるといわなければならない。

本学友会は、会則に基づき総務会に次の部（係）及び事業委員会を置き、それぞれの事業を行なっている。

- 一、出版部 鹿大医報その他出版
- 二、体育部 体育に関する事項

(イ) 西日本医科学生総合体育大会鹿大準備委員会（九州山口医体準備委員会を兼ねる）

(ロ) 運動会実行委員会

### 三、文化部 文化活動に関する事項

(イ) 医学展実行委員会

(ロ) 無医村診療委員会

(ハ) ゼミナール委員会

### 四、庶務係，会計係，渉外係

全学学友会代議員，同窓会連絡係なお学生の自主サークルは，次のとおりである。

#### 一、体育サークル

Aブロック（準硬式野球部，サッカー部，バレーボール部）

Bブロック（柔道部，剣道部，弓道部）

Cブロック（軟式テニス部，硬式テニス部，バドミントン部，卓球部）

Dブロック（自動車部，ヨット部，山岳部）

#### 二、文化サークル

Aブロック（社会医学研究会，（心電図研究会）EKG，（英会話研究会）ESS）

Bブロック（茶道部，バラ部）

文化部においては，医学展，無医村診療を通じて，諸報告を出し，実効をあげていることは勿論であるが，体育部においても最近目ざましい躍進を遂げている。

昭和42年8月，第19回西日本医科学生総合体育大会が九州ブロック（代表校当医学部）主管の下に鹿児島市を中心として開催され，その準備運営に大活躍したのである。

出場校24校，競技種目19，参加人員 6,000名に及ぶ大規模な大会において，過去の実績は，総合得点順位は15位から19位に甘んじていたのであるが，一躍5位に躍進し，準硬式野球部は実にこの回で優勝の栄誉を勝ちとり，バドミントン部と軟式テニス部（女子）に準優勝したことは，特記すべき事項であろう。

## 鹿児島大学医学部同窓会（鶴陵会）の歩み

会長 鮫島耕一郎

同窓会の歴史を振り返ってみると、殆んど母校の辿った過去25年間の苦難、変遷の歴史と表裏一体をなしており、草創期の学生の活動は既にして世間一般の所謂、同窓会活動的性格を帯びていたようだ。

従って本稿も創立時代に遡って筆をおこしてみた。

### 医専開校の頃

県立鹿児島医学専門学校第1回入学式は昭和18年4月20日、照国神社前の仮校舎（現県立博物館）で挙行された。

北は樺太、北海道、満洲、南は台湾に至るまで、全国から3,331名の多数の志願者があり、120名の合格者の半数は県外出身者であったが、第1回生としての自負と自覚のもとに新しい学校の伝統を作るべき責任感と気概に燃えていた。

初代学校長高安慎一先生の御決意も並々ならぬものがあり、特に九大創立時代の例をひかれて、草創期の学生の責任は重且つ大なることをよく強調されていた。また医師の倫理についても「患者に心から信頼される医師になることが先ず第一」とよく話されていた。

常に温顔をもって学生に接し、抱擁力が大きく、学生の意見も虚心坦懐よく聞かれ、紳士として遇され、規則とか校則とかは集団生活には最低あればよい、三条で十分だといっておられた。半面、物のけじめをはっきりつけることには大変厳格で、学生大会などにお招きしても定刻に始まらない時はさっさと引きあげられた。

このような偉大な教育者としての先生の御人格は、当時の学生に無言の中にも可成りの感化を及ぼしていた。

発足当時の教官の方々も皆新しい学校作りに情熱を燃やしておられ、このような澆測とした空気の中でスタートした鹿児島医専は、前記仮校舎で、昭和19年12月からは唐湊に新築された校舎や純心高女跡などで基礎医学の教育が懸命に行なわれた。

当時の時局を反映して、いつ何時でも戦時医療勤務ができるようにとの県当局の強い指示により、「鹿鷹」という徽章をつけた戦闘帽が制帽と決定、学生、父兄の強い反対があったが叶わなかった。

然し医科系は徴兵延期されていたし、本土空襲もまだなかったので、夏にな

るとカンカン帽を略帽と決めて磯街道に大挙くりだしたりして、昭和19年末頃までは割合のんびりした学生生活の一面もあった。

### 戦災からの復興運動

そのうち、附属病院の方で臨床教育も初まったが、戦局日々に不利となり、教授、学生一緒になって防空壕にとびこむことも度々であった。遂には昭和20年6月17日夜の大空襲により附属病院も灰燼に帰し、石田病院長（外科）も戦災死された。後任の町野病院長は自ら慣れない自転車操縦を、焼土の中を超人的に東奔西走され、乏しい器材を集めて、草牟田町の盲啞学校に仮病院を設置し、診療と講義が続行された。重富の教員保養所にも一時分院が設置された。

間もなく終戦、国の運命が大きく変ると共に私共の学校にも、その浮沈興亡に関する難問題が次から次へと押し寄せてきた。

四散していた学生が帰学してくるにつれて、附属病院の方も県立一高女、県庁別館、更に武徳殿跡（現家庭裁判所）の仮診療所と転々とその仮住居を移しながら、一方では本格的復興、再建へのひたむきな努力がなされていた。

当時世間では戦災による県財政の困難、鹿児島市の焼土化もあって、莫大な経費を要する医専復興に殆んど関心はなく、むしろ医専不要論を唱えるものもあった。

ここにおいて世論を喚起し、一日でも早く附属病院を再建するため、「附属病院復興委員会」が昭和21年6月結成され、県、学校当局、父兄後援会、学生打って一丸となり、猛運動が展開された。これが後に大学昇格運動へと大きく発展していった。学生大会も度々開かれ、学生も手分けして県当局、県議会議員各位に対して陳情を繰り返した。

県議会に附属病院再建予算案が提案された当日は、開会前から学生も多数仮議場の廊下に勢揃いし、議事の進行に固唾をのんで見守り、無事予算案通過の報を聞いた時は涙と共に一同安堵の胸をなでおろした。

### A・B級問題——大学昇格運動

然し間もなく、一難去ってまた一難というが、突然GHQの指示により文部省から学制改革要綱が発表された。医専の伝統、設備などからみてB級に該当するものは廃校とし、A級はこれを存続、充実せしめて大学に昇格させるという抜本的改革であった。

創立后日なお浅く、更に戦災で大打撃をうけた当時の本校としては、將に絶対絶命の境地で、学校をあげて不安のどん底に陥ったことも已むを得ない事情

であった。

ここにおいて、学校当局、父兄、学生は渾然一体となって再び猛運動を展開、昭和22年2月には酷寒について、学生数名も米を一杯つめこんだリュックを背負い、学校長や父兄後援会長に随行して、満員すし詰め鈍行列車で上京、GHQ、文部省、鹿児島出身の政財界有力者を訪れ、鹿児島医専存続、大学昇格の急務を陳情して廻った。

地元鹿児島においても、これに呼応して誠に涙ぐましい程の運動がくり広げられた。

やがて22年3月「A級医専と決定」、6月「県立鹿児島医科大学設置認可」、7月「第1回予科生入学」、23年3月には「医専第1回の卒業式」がめでたく挙行された。(学制改革により、医専第1回生から卒業年限は5年に延長され、更にインターン、国家試験が加わるようになった。当時のインターン制反対運動も熾烈なものがあったが、ここには割愛する。)

23年12月には附属病院の木造復旧も完成した。

「A級決定祝賀会」は唐湊の生化学実験室で行なわれた。会場四方には形ばかりの景気づけに即製万国旗を張り廻らし、父兄有志の奔走で徹夜で調理されたささやかな料理を実験台の上に並べて、重成知事以下の来賓を迎えた。

まことに簡素ではあったが、感激と希望に満ち満ちた当日の情景を今日思い浮べる時、将に万感無量である。

祝賀会終了後は、名実共に大学としての体制を整えるため、先の病院復興委員会を「大学昇格期成同盟会」にきりかえた。

中央要路との連絡を益々密にし、また、資金募集にも全力をあげた。

学生は夏休みを利用して、本県はもとより九州各県、四国、中国、関西、関東などの地区に夫々責任者を決めて、教授、父兄と共に募金に当り、演劇に堪能なるものは学生演劇班を組織してトラックに揺られながら県下一円を巡回して、募金旁々昇格への一大キャンペーンを行なった。或はまた衛生班は、真夏の炎天下に市内各戸を虱潰しに廻って、便所、下水溝、台所などに DDT 撒布を行ない、得られた貴重な報酬を昇格資金に提供した。

その他、多くの方々が夫々の立場でつくされた努力の実例は枚挙に暇がない程である。

#### 附属病院再度全焼一復興運動

このような努力を積み重ねて漸く充実しつつあった附属病院も、昭和27年4月20日払曉、附近の民家から起った大火のため一瞬にして再び灰燼に帰してし

まった。

忘然自失の中にも 過去幾度びかの試練を 乗り越えてきた、 町野学長以下教授、父兄、同窓会、医学部学生代表は直ちに参集、「大学病院復興期成会」を結成、県当局に側面から援助し、のちに 430万円という当時としては多額の寄付金を集めることが出来た。

かくして30年2月には現在の鉄筋による附属病院完成、これを契機として30年7月には国立に移管され、その後順調な発展を遂げて今日の盛大な25周年記念式典を迎えるに至ったことは、誠に御同慶にたえない所である。

### 学生サークル活動

学校の復興、昇格運動に挺身する傍ら、各サークル活動も平和の時代を迎えて急速に活発となってきた。

終戦翌年には早くも運動会の話が持ち上り、なけなしの米を集めて握り飯を作り、赤や白や緑の布片を集めて旗を作り、羽織はかまをつけた応援団が出来、学校関係者は勿論、噂を聞いて市民が何千とつめかけた。

鴨池球場を借り切って行なわれた鹿児島医専の運動会はまさに大運動会であり、どん底にあえいでいた鹿児島市民に生きる力と活を入れた。学生諸君は情熱の限りを叩きこんだ。

これが後に昇格運動に走り廻り、医学にスポーツに演劇活動に走り出した学生の原動力となり、卒業してからのバックボーンにもなった。

以後暫く医専の運動会は名物となり、野球、サッカー、陸上、角力、柔道と西日本高専大会を牛耳り、オール九州演劇コンクールで優勝、演出、主演その他の各賞を全部さらい、文芸雑誌を発行し、詩誌をつくり出し、NHK合唱団、NHK放送劇団を生み出すなど、実に多彩なサークル活動がくり広げられた。  
(岩尾美義会員の原稿による)

### 同窓会の発足

昭和23年3月、卒業式の翌々日に、戦後の荒廃した鴨池遊園地の一隈を借りて、同窓会の結成式を挙行した。想えば小なりといえども雄々しい鶴陵会の産声であった。

医師免許なき卒業、そしてインターン、加うるに当時の暗澹たる世相下に、何かしら不安と焦躁を混えた複雑な心境にあったが、この混沌たる時代になんとしても一期生としてすべきこと、即ち同窓会の結成、発会式だけはと念願した。僅かの会費をもとに粗末なかまぼこの折詰と結成記念の湯呑を用意し、更に美術部考案の同窓会バッヂを胸につけて、母校と同窓会の将来の発展を深く

心に祈り、且つお互に誓い合って乾杯、夫々のインターン修練地へ向けて四散した。（西山幹男会員の原稿による）

### 同窓会その後の歩みと鶴陵会の命名

昭和24年秋、第1回総会が唐湊の校舎で開かれ、西山幹男君が初代会長、山下利博君が副会長に選出された。まだ会員も少なく、資金も乏しく、創立期の苦難が続いたが、毎年廻りくる新入会員の歓迎会、卒業式当日の歓迎幕の作成、同窓会バッヂの寄贈、名簿の作成（第1回は27年、第2回は29年）、附属病院復興期成会への参加（既述）など、幾多の困難と斗いながらも同窓会の火を燃やし続けていた。

昭和30年春の総会で、永山武章君が第2代会長に選出され、事業が継続された。

昭和34年春の総会で、倉内省三君が第3代会長、柿木成也君が副会長に選出された。

当時の基金は僅か2,000円位であったが、35年には1,200部の同窓会名簿作成を敢行され、これがその後の本会発展に裨益する所大なるものがあった。

また、呼び易く、なじみ易い同窓会略称を作ることになり、予科時代の松村二郎教授（現鹿大教養学部長）をお願いして、鶴丸城址、城山、紫原に因んだ「鶴陵会」という略称を決め、これを総会にて決定した。

昭和37年には下原朝光君が第4代会長、佐多正巳君（学外）、阿世知節夫君（学内）が夫々副会長に選出された。

この頃から旧制による学位授与問題も片づき、古い卒業生もほぼ安定した地位を築き、同窓会活動に対する会員の関心も急速に高まってきた。鹿大医報や医学部新聞との協力、医学部との座談会「これからの同窓会をどうすればよいか」、などがこれに拍車をかけ、更に39年11月鹿児島での九州医学会を機会に開かれた盛大なる総会、鶴陵会特集号の新聞発行、新名簿発行へと大発展していった。

### 同窓会の現況

この総会で鮫島耕一郎が第5代会長に選出され、前記の両副会長は留任した。（後に阿世知副会長の学外転出に伴い、42年3月尾辻義人君が後任に就任。）

現在まで行なった主なる会務は次の通りである。

#### 1. 財政の確立

会則を改正して年会費1,000円納入とした。

#### 2. 組織の確立

- 1) 本部と専従職員を医学部庶務係内においた。
  - 2) 幹事会（現幹事20名）の活動強化。
  - 3) 支部の設立促進及び強化。（現在まで関東，中・四国，福岡，熊本，大分，宮崎，沖縄，鹿児島市，県内南薩，指宿，伊佐富士各支部結成。）
3. 総会開催
- 1) 40年3月総会（鹿児島市）（町野先生停年退官謝恩会併催）。
  - 2) 40年11月総会（宮崎市）。
  - 3) 41年9月総会（鹿児島市）（高安先生胸像除幕祝賀会併催）。
  - 4) 42年11月総会（大分市）。
  - 5) 43年4月総会（鹿児島市）開学25周年祝賀会，佐藤，高安，縄田三先生停年退官謝恩会併催）。
4. 会員との連絡強化
- 1) 医学部新聞を年3～5回鶴陵会経費負担にて発行，全会員に無料送付。（新聞編集幹事をおき，鶴陵会のページ充実を計る。）
  - 2) 鹿大医報の購読促進。
5. 医学部及び学友会行事への協賛
- 1) 西日本医科体育大会，運動会，医学展，沖縄学術調査診療団，無医村診療団などへの協力。
  - 2) 新卒業生への記念品贈呈。
6. 物故会員敬弔
7. 高安慎一先生胸像建設（41年9月11日）
8. 鹿児島西洋医学開講100年祭及び鹿児島大学医学部開学25周年記念行事（43年4月21日）
9. 同上記念同窓会名簿発行

### むすび

本学は明治以来の長く培われた医学的土壌の上に芽生えた医学部であり，また，学校当局，学生，父兄，同窓会が一体となって，一つの理想の下，一つの大家族として，一致協力，総ゆる困難を克服して，成々発展してきた大学である。

同窓会も今や 1,261名の大世帯となったが，会員一同，この美しい全学一体の伝統と不撓不屈の精神をいつまでも保持して，お互いに励まし，助け合いながら前進していきたいものである。

第十一章 大島、沖繩、台湾診療記録



## 1. 巡回診療について

熱帯医学研究施設

福島英雄

本学は亜熱帯地域を近くにひかえ、また、多くの離島をひかえているため、多くの無医地区が本県には存在していたため、「県立医学専門学校設立に関する意見書～然るに内地に於てすら、3千有余の無医村を有し、我が県下に於ても、なお数十の無医村部落を現存す。……今日……医師の需要は殆んど無制限にして、之に対し、今日の医師不足の現状を以てしては、夫れ如何ともする能わざるものあり、……我が鹿児島県は……而して且又未だ医育機関なき鹿、宮、沖三県の中心地に位し、南方地方病の研究の好適地たと共に……茲に医師の養成機関を設立し、以て医術研究の道場たらしむることは將に最大急務中の急務にして……当局に於ては、県内外の実情に鑑み、速やかに茲に県立医学専門学校を設立し……昭和15年12月18日、鹿児島県議会議長坂口壮介」をみても明らかかなように、無医地区に対する巡回診療ならびに風土病研究は創立当初から使命づけられていたものと思われる。

本学における巡回診療はおそらく第1回は昭和22年に行なわれた南薩地方および佐多地方におけるものだろうと思う。

本学における巡回診療は本学部の学生の皆さんの離島同胞に対する純真な同情より出発しているが、その特色は県の後援のもとに他大学とことなり全医学部をあげて、協力一致して強力に推進されている点である。なおこの際、諸風土病に関する研究も併せ行なわれている。

現在までに行なわれた地区としては、初期は種子島、屋久島、獅子島（昭和28年）、ついで奄美群島の復帰に伴い、奄美群島を主な対象地域として昭和29年以来実施し、これは現在までひき続き行なわれ14回を数えているが、その後、三島村、十島村も33年から行なわれ、40年からは沖縄まで足をのばし、昨42年は中華民国台湾省花蓮県まで行き、日頃医療に恵まれない無医地区において診療を行ない、班員の人間愛に燃えた暖かい手をこれら同胞にさしのべると同時に、亜熱帯諸疾患の疫学的調査を行ない、併せて、今後の研究の足がかりをもとめたもので、この後、大きな研究業績が続々と現われ、学界で高く評価されている論文も多く、熱帯医学研究は本学の表看板の一つとなっており、本学では大きな意義を有すると同時に多数の実地修練生、医学部学生の参加をえて、これらの教育の場としても重要な意味があり、また、これら無医地区の実態を

学生にしらしめたことにも意味があるものと思う。

各報告書をもとにして診療場所，期日，参加者，受診者数などについては別に記したが，重複事項も多いので各年度の報告書のうちから1～2の事項について特長のあることをここに引用してみる。

### 種子島・屋久島・獅子島巡回診療

種子島診療に際して多かった疾病は十二指腸性貧血，消化器疾患，腰痛，脊痛，筋肉痛，坐骨神経痛，五十肩，関節変形症および皮膚科疾患～白癬症などで，これは非衛生的な生活環境ならびに労働過重，農村の貧困を原因と考え，生活環境全般の向上が望ましいと指摘している。検便では蛔虫，鉤虫の高寄生率，その他，糞線虫の検索の必要性を強調し，フィラリア検血により青少年中10～20%の高い仔虫陽性率と，多くの有症者がみとめられている。その他，長寿者率は全国平均より高いこと，栄養摂取はかたより改善すべき点が多いこと，寄生虫，蠅，蚊の駆除対策の指導，受胎調節の指導も行なっている。

屋久島においても消化器疾患がもっとも多く，ついで呼吸器疾患で，その他，農村腰痛症も多くみられているが，結核性疾患の発見にはとくに留意して診療を行なっている。フィラリア症は仔虫陽性率8%で，腸管寄生虫は案外低率であったが，糞線虫が高率に存し，腸管原虫症の徹底的検索を今後期待している。小児の発育不良を指摘し，離乳，産児制限の指導を行ない，死亡率の減少が著明でないこと，長寿者の少ないこと，医療に恵まれていない実態を指摘し，蚊族調査ではアカイエカ，トウゴウヤブカをみいだし，栄養調査の徹底，衛生知識の啓蒙，環境衛生の整備，結核，伝染病，フィラリア対策などの必要性を強調している。

つぎに県の最北端に位置している獅子島においては消化器疾患が第1位，ついで寄生虫性疾患，その他，神経痛，筋肉痛などの農夫症が多く，また小学生の白癬，口角糜爛などが多く，医療に恵まれないため放置されている慢性中耳炎の患者が多く，またトラコーマ，失明患者が多く，歯科では齲歯が多く，その他，歯槽膿漏，歯根膜炎などがみられ，これらに抜歯を行なっている。フィラリア症は約10%の高い仔虫陽性率であった。本島では麦類，甘藷を主食とし，野菜，水，獣肉は少なく，電灯がなく，衛生状態も悪く医療機関もなく，唯，助産婦が1人いるだけなので，早急に診療所を設立し，大学からでも医師を派遣すべきことを強調している。

## 奄美群島巡回診療

昭和28年12月25日、奄美群島が本土に復帰したが、翌29年早速、奄美群島の診療を企画し5月、25名という大勢の診療団員が2班にわかれて、全島に派遣された。残念なことにその時は報告書が都合により作成できなかったので入手できた1～2の資料からのべる。

第1班は大島本島を中心として行ない、愁訴をもって受診したもの2,665名で平均1日266名を診療している。内科系では消化器疾患31.6%,呼吸器疾患14%,神経ことに運動器疾患12.4%,フィラリア症12.7%であるが、胃炎、胃潰瘍、肺結核、気管支炎、喘息、神経痛、腰痛、貧血、フィラリア症、寄生虫症がめだち、蛔虫、鉤虫ともに多く、これらによる腹痛、貧血が多い。その他、糞線虫、赤痢アメーバなどもみとめられ、死因で目だつのは結核、下痢および腸炎、脳出血であった。肺結核が多く、その対策の必要性を強調し、また農夫症が多いのは高温多湿の環境下の労働と栄養の不均衡が原因と推察している。フィラリア仔虫陽性率は18.8%という本邦一の高率で、これらはすべてバンクロフト種で、またアカイエカの存在を指摘し、その集団治療と環境衛生の改善を訴えている。栄養状態も悪く、高血圧の多いことを指摘しているが、他方、長寿者率が高い。外科系疾患としては眼疾患、耳疾患が多く、婦人科疾患では労働過重によるものが多く、外科的疾患では特有なハブ咬傷とフィラリア症(象皮病、陰嚢水腫、睾丸炎、リンパ腺腫)が沢山みいだされ、これらに対する対策の必要性を強調し、奄美大島振興法案による特別措置により、産業、経済、文化の発展を念願している。

第2班においては、徳之島、沖永良部島、与論島の診療を行なったが、呼吸器疾患、消化器疾患が多く、結核性疾患も多かった。

翌30年は第1班は消化器、呼吸器系疾患が多く、肺結核対策の必要性を強調し、またロイマ、関節炎、農村腰痛症が多く、喜界島に蛔虫、鉤虫の多いことを指摘している。その他、大島本島のフィラリア症について詳細な報告をなしている。また、ハブ咬傷の治療面から医介補制度の撤廃を訴え、また抗血清の受給が一部町村にて不満足であったことを指摘し、併せて、予算の増額を訴えている。眼科ではトラコーマ、眼瞼炎、翼状贅片等の慢性疾患が多く、医療をうけることにより回復の見込みがあり乍ら放置されている者が存在していることを指摘している。産婦人科では分娩回数、出生児死亡率、妊産婦死亡率、流産が多く、産褥就床期間は短く、授乳期間は長く、腰痛を主訴とする子宮後傾

後屈症が多かったことをのべている。

第2班においては皮膚科疾患では、湿疹が多く、ついで白癬症、癬、丹毒、痒疹がみとめられ、経済状態の貧困さが推察され、腎結核をみとめ、結核対策の必要性を強調している。その他、先天性梅毒もみとめられている。婦人科では性周期について調査し、初経が県本土より少しおくれていることを指摘し、受胎調節の徹底化のため、さらに強力な県当局の施策を望んでおる。

昭和31年は今までの1部落1日滞在診療という方法をあらためて、診療および調査研究を徹底させようとしたが、巡回要望地区が多くて、この計画を変更せざるをえなかったことをのべているが、内科医1名が住用1村に診療期間中ずっと滞在して、鉤虫貧血の調査研究ならびに診療を行ない、また受胎調節指導を行なっている。なお巡回診療によってえた成績を基礎として、逐次本来の研究たとえばフィラリア症の病態生理などを行なうべき時期に来たことを強調し、その他、鉤虫性貧血の成因に関する考察をのべ、アメーバの研究、レプトスピラ病の免疫血清学的検査を開始したことをのべている。また大島本島南部、加計呂麻島、与路島、徳之島の血圧についても詳細に報告し、報告書も漸次学術論文としての性格を強めてきて、本来の目的に1歩1歩近づいている感が強い。

昭和32年は精神病の調査が行なわれ、当地方には精神病院がなく、監置の遺風がなお残っているので、精神病院の建設が一日も速かに実現されんことを希望し、その他、病理学的見地から *Microfilaria bancrofti* の組織学的検査成績が発表され、なお一層、研究面の観察が行なわれ充実して来ている。

昭和33年は医療機関の設置、環境衛生の改善、保健衛生の指導、栄養知識の啓蒙の必要性を強調し、また本年医学部の長年の懸案であった熱帯医学研究の施設として県立大島病院に設立された鹿児島大学医学部熱帯医学研究所の活動に期待して筆をとじている。

昭和34年は当医学部が今後如何にあるべきかということについてのべ、それにはもっともっと実際の仕事をする人が現地に進出して活動することであり、また、これらの人々が活動しやすいようにしてやることであると強調し、その結果、県当局の施政のための具体的拠り所を提供することが可能となるだろうとのべている。

昭和35年は、慢性疾患が大半をしめている点から、この診療ではその場しのぎしかできない情なさを感じ、無医村解消のためには、国家的な力による環境衛生医療面への対策が急務であることを強調している。

昭和36年は鉤虫症，貧血，フィラリア対策，ハブ咬傷に何らかの対策を講ずべきことを強調している。

昭和37年は過去の巡回診療を反省して今までは低所得，人口構成のアンバランスなど医療以前の問題が大島には余りにも多いのに手を拱いているばかりであったが，毎年の診療を水面に消える泡沫のように終らせてよいものだろうか。そろそろ大島医療に対する鹿児島大学の理論を出すべき時期ではなかろうかとのべている。

昭和38年は育児講演会を催し，今後もう少し研究中心的な班に衣がえをし，永続しえたなら一層現地の方々の幸福ともなりうらと思うとのべ，また班員同志裸になって人生を論じ，医学を語り，鹿大の発展等に気焰をあげたのも大学の庭でみられない意義を感じるとのべている。なお学童の体位が悪く，離乳が遅延していることを指摘している。この報告書には「無医地区をどうしたらいいか」という座談会の記事が記載され，夏期巡回診療は今まで通りでよいかということで種々論ぜられている。巡回診療を行なうという事には何れも意義をみとめ，そのやり方，意義づけについては種々意見がでて，巡回診療のあり方が曲り角にきて，反省が加えられている。

昭和39年は腸管寄生原虫について調査し，大腸アメーバ，赤痢アメーバチステ排泄者をみている。

昭和40年は進行性筋ジストロフィーの一家系を発見している。また，教育者としての立場から診療は続けるべきで，医療と民衆との連りを身をもって体験した学生諸君の胸のなかには大学のポリクリとは違ったある尊い感銘を宿し，これが何等かの形でみることを願っているとのべている。

昭和41年は今までと異り，外科，内科以外に耳鼻科，歯科，眼科，泌尿器科の専門医を加えて，専門的総合診療を行ない，現地の声を聞きたいと考えてアンケートをとり，また名瀬市の医師会において講演会が行なわれた点が特長と考えられる。また，地元の要望として大学らしい権威をもった診断をして貰いたいという地元の要望から，今後，単なる投薬のみでなく，エキスパートの派遣，処方箋発行を希望してある。細菌学的見地から，赤痢，結核症，不明熱について検索を行ない結核症に非定型抗酸菌症の含まれている可能性，また不明熱に対する今後本格的な検索を行なうべきであるとのべている。

昭和42年は始めて県医務課からの参加があり，計画がスムーズに処理されたと感謝している。13年ぶりに与論島で鹿大としては2回目の診療を行なったわけであるが，とくに各専門医による小，中，高校の検診も行なわれている。ア

ンケートにより住民の声を聞いているが、長期的な診療を、また年2～3回の派遣を島民は希望している。これから、巡回診療の意義を感じると同時に住民が僻地に医療をという言葉よりいかにかけ離れた位置に残されているかを知ることができたとのべ、また、我々の奉仕は衛生、医療に関する啓蒙、指導をする型であるべきだということをのべている。

### 十島村巡回診療

十島村に対しては33年と34年の2回行なわれている。

昭和33年は学童の体位が劣っており、栄養障害とくにビタミン欠乏（口角糜爛症）皮膚疾患が多く、成人においては筋肉痛、神経痛が多かったが、フィラリア症、鉤虫症は少なく、トラコーマが多かった。その対策として医療施設も急を要するが、それよりも医学的知識があり健康相談相手となれる保健婦、看護婦の駐在と救急薬品の配備がもっとも必要と結んでいる。

昭和34年はトラコーマ、結膜炎の減少、20才台の男子に高血圧が多いこと、恙虫の存在、飲料水の問題などについてふれ、また、村営の十島丸の各島での停泊時間を利用しての診療をその医療対策の一つとして提案している。

### 三島村巡回診療

昭和33年は神経系疾患とくに、筋痛、脚気様症状、腰痛、神経痛が多く、ついで消化器疾患として、慢性胃炎、胃十二指腸潰瘍、腸炎、慢性虫垂炎、移動盲腸、胆嚢疾患がみられ、呼吸器疾患としては気管支炎、扁桃炎が多く、その他、フィラリア症、鉤虫症、蛔虫症、鉤虫性貧血、湿疹、膿疱疹、トラコーマ、結膜炎、慢性中耳炎、副鼻腔炎、歯髄炎、流行性耳下腺炎、乳腺炎、更年期障碍、偏頭痛、帯下を訴える者が多かった。その他、成人男子の性機能を調査している。対策として医療機関設置以前の問題として、学校の訓導に特殊な医療教育をうけさせ、救急薬の補充、通信機関の設置などについてのべている。

昭和34年は肺結核患者、及び不疑似症があり、レントゲン撮影の必要性を痛感し、フィラリア対策として蚊の駆除を強調している。また、島民が医療を切実に求めていることを痛感し、無医村部落の解消を強く訴えている。

### 沖縄学術調査診療

昭和40年は内科系では消化器疾患、神経系、運動器疾患、循環器疾患が多

く、慢性胃炎が多く、その他、慢性肝炎、潰瘍性疾患、胃癌、Dübin-Jonson症候群、Gilbert氏病がみられ、気管支喘息、気管支炎、高血圧症が多く、その他、心弁膜症、農夫症、貧血症、糖尿病、慢性腎炎、ネフローゼなどがみられ、寄生虫関係としてはフィラリア症、蟯虫症について精査しているが、なお高率にみとめられている。外科的疾患としては、神経痛が多く、粉瘤、弾片遺残等の良性腫瘍、腫瘍がもっとも多く、皮膚および軟部組織の急性～亜急性炎症、痔核、ヘルニアなどをみたが、救急処置の対象となる疾患はなく、慢性重症化された中耳炎が多く、その他、胆石症、心疾患について詳細に報告している。産婦人科的には腰痛を訴えるものが多く、更年期障害に対する知識がうすく、性器脱、会陰裂創がめだった。初経は本土なみで、妊娠率は一般に高く、永久避妊術を希望する人が多く、離乳時期もおくれているとのべ、その他、手術を行なっている。眼科的には、老人性白内障がもっとも多く、ついで近視、トラコーマ、慢性結膜炎、老眼、翼状片、遠視、角膜白斑、緑内障、硝子体混濁などがみられた。また、視力障害者（視力4m指数以下）について調査し、児童、生徒間のトラコーマは少ないが、患児では感染源は家庭である。また、治療見込のある者が相当あるので、保険制度の速かな実施、また治療見込みのないものも予防によって防止できるとのべている。小児科では乳幼児の身体発育をしらべるために頭囲、胸囲、身長および体重計測を行なったところ、生後半年をすぎるところから、体重が標準より劣ってくる。これは離乳期の栄養指導の貧弱さと離乳遅延によると考えられるとのべ、神経炎体質、リンパ性体質、気道感染症、喘息、起立性循環障害、脳性小児麻痺などが多く、ツベルクリン反応は行なっても、B.C.Gをうけているものは殆んどなく、乳幼児の背部切開術という習慣は早くなくすべきであると強調している。皮膚泌尿器科では亜熱帯地域に特殊な疾病はなく、急性湿疹群、慢性湿疹群、膿皮症、白癬症、顔面秕糠疹、フィラリア性疾患が多かった。これらの診療以外、特記すべきこととして夜間は学術講演や研究会を数回行ない、沖縄医学会との交流を深めている点は非常に意義深いことである。

昭和41年はハブ咬傷について詳細な検討を加え、整形外科的には坐骨神経痛、腰痛症が多く、ついで筋痛症、頸肩腕症候群、変形性膝関節症があったが、ロイマ、骨折は少なく、その他、脳性小児麻痺、発育痛がみとめられている。精神科としては精神病（老人性痴呆、精神分裂症、抑鬱症、アルコール幻覚症）、神経症（心気症、不安神経症が多く、その他、強迫神経症、神経衰弱など）、てんかんとその辺縁疾患、精薄、動脈硬化症などがみられたが、沖縄

で第一に必要なのは精神障害者を治療しうる熱心な精神科医，看護婦やソーシャル，ワーカーの存在で，つぎに訓練されたスタッフをもつ精神科のクリニックやアフターケアの機関であって，沖縄への医療技術の援助も我々に課せられた使命であるとのべている。栄養面の実態調査では，栄養摂取量の不足と摂取食品のアンバランスで，野菜類，乳類，小魚類，総蛋白摂取量の不足で，豚肉は多すぎる。また食品の調理法も単純であることを指摘し，これらの改善についての積極性を望み，その他，栄養知識調査および診断調査，栄養相談も行なっている。さらに久高島においては鉤虫および蟯虫症について，詳細に観察し，フィラリア症調査（低率），学童の身長，体重，胸囲，座高の調査を行ない，その他，ABO式血液型調査を行ない  $A : O : B : AB = 2.5 : 2.5 : 2 : 1$ （本土では  $4 : 3 : 2 : 1$ ）となり，2A遺伝子がすくなく，B遺伝子が多く，隔離集団を形成しており，本土の人と全く同一の素因をもっているとはいえないとのべている。

# 大島、沖縄、台湾診療記録

## 2. 県下巡回診療班派遣について

鹿児島県は亜熱帯環境下にあり、かつ多くの医療にめぐまれない離島、避地をかかえ、フィラリア症、アメーバ赤痢、糞線虫症、ハブ咬傷など風土病の高淫浸地となつている。わが鹿児島大学医学部は昭和22年に行なわれた佐多、南薩地方における巡回診療を皮切りに、種子、屋久、獅子島、奄美大島などの無医村地区に巡回診療班を派遣し、島民に医療の恩恵を施し住民の多大の感謝をうけている一方、学術的に風土病の調査に多大の成果をも挙げている。以下各年度毎の診療団の構成、派遣地、診療人数等につき略記する。残念乍ら佐多、南薩地方診療に関する記録が見当たらないので割愛せざるを得なかった。

### 種子島無医部落巡回診療

診療場所：南種子村（茎永，平山，島間，上中，西之）  
西之表町（中割，立山，安城，古田）

期 日：昭和28年7月15日～27日

参加者：

団長 佐藤八郎教授（第二内科）

|       |           |        |          |
|-------|-----------|--------|----------|
| 公衆衛生  | 北原 経太 教授  | 第二内科   | 米沢 藤士 講師 |
| 整形外科  | 日高 保志 助教授 | 皮膚泌尿器科 | 下温湯 靖夫   |
| インターン | 池田 正雄     | インターン  | 八板 宗哉    |
| 学 生   | 湊 俊夫      | 学 生    | 西 一郎     |
| ”     | 徳 永定 様    | ”      | 上妻 昭夫    |

受診者総数：2929名

| 診療場所 | 内科  | 外科  | 皮泌科 | 計    | フィラリア<br>検血 | 検便  | 学童の<br>頭部白癬<br>身体検査 | 診療月日  |
|------|-----|-----|-----|------|-------------|-----|---------------------|-------|
| 荃 永  | 102 | 38  | 45  | 185  | 378         | 269 | 1052                | 7月16日 |
| 平 山  | 77  | 40  | 42  | 159  |             |     |                     | ” 17日 |
| 島 間  | 129 | 53  | 21  | 203  |             |     |                     | ” 18日 |
| 上 中  | 157 | 60  | 35  | 252  |             |     |                     | ” 19日 |
| 西 之  | 118 | 77  | 31  | 226  |             |     |                     | ” 20日 |
| 中 割  | 60  | 18  | 16  | 94   |             |     |                     | ” 23日 |
| 立 山  | 68  | 5   | 20  | 93   |             |     |                     | ” 24日 |
| 安 城  | 28  | 6   | 8   | 42   |             |     |                     | ” 25日 |
| 古 田  | 62  | 6   | 8   | 76   |             |     |                     | ” 26日 |
| 計    | 801 | 303 | 226 | 1330 |             |     |                     |       |

### 屋久島無医部落巡回診療

診療場所：上屋久村（永田，小瀬田，宮ノ浦）

下屋久村（小島，平内，湯泊，栗生，尾之間，麦生，安房，小杉谷）

期 日：昭和28年7月15日～29日

参加者：

団 長 榊屋富一教授（第一内科）

|       |             |         |            |
|-------|-------------|---------|------------|
| 衛 生 学 | 西 尾 一 男 助教授 | 産 婦 人 科 | 前 田 末 男 講師 |
| 一 内 科 | 鮫 島 実 俊     | 寄 生 虫 学 | 山 下 博      |
| 学 生   | 片 平 可 也     | 学 生     | 国 生 茂 典    |
| ”     | 榊 明 敏       | ”       | 浜 田 康 治    |
| ”     | 藤 林 繁       | ”       | 田 代 郷 太 郎  |

受診者総数：1881名

| 診療場所   | 受診者数 | 検血数 | 検便数 | 内科  | 外科 | 産婦人科 | 皮膚科 | 眼科 | 耳鼻科 | 歯科 | 精神科 |     | 診療月日  |               |
|--------|------|-----|-----|-----|----|------|-----|----|-----|----|-----|-----|-------|---------------|
| 上屋久村永田 | 187  | 371 | 73  |     |    |      |     |    |     |    |     |     | } 333 | 7月—<br>16~18日 |
| ” 小瀬田  | 114  | 149 | 103 |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | 7月<br>19~20日  |
| ” 宮之浦  | 32   | 21  | 4   |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | 7月21日         |
| 下屋久村小島 | 30   | 85  | 2   |     |    |      |     |    |     |    |     |     | } 347 | 7月22日         |
| ” 平内   | 75   | 58  | 8   |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | 7月23日         |
| ” 湯泊   | 74   | 245 | 77  |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | 7月<br>24日25日  |
| ” 栗生   | 78   | 1   |     |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | 7月25日         |
| ” 尾之間  | 5    |     |     |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | 7月26日         |
| ” 麦生   | 36   | 2   | 2   |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | ”             |
| ” 安房   | 4    |     |     |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | 7月27日         |
| ” 小杉谷  | 45   |     |     |     |    |      |     |    |     |    |     |     |       | ”             |
| 計      | 680  | 932 | 269 | 489 | 35 | 36   | 36  | 25 | 26  | 11 | 1   | 680 |       |               |

### 獅子島無医部落巡回診療

診療場所：東長島村（御所ノ浦，湯ノ口，幣串，片側）

期 日：昭和28年7月15日～21日

参加者：団長 高安晃教授（眼科）

|     |          |       |          |
|-----|----------|-------|----------|
| 皮膚科 | 岡元健一郎 教授 | 歯科    | 下原朝光 助教授 |
| 二内科 | 福島英雄     | 耳鼻咽喉科 | 中山展男     |
| 学生  | 鮫島達郎     | 学 生   | 要真一郎     |
| ”   | 奈良崎伝保    | ”     | 宮内礼一郎    |
| ”   | 市来昭彦     |       |          |

受診者総数：1334名

| 診療場所 | 受診者数 |     | 内科  | 外科<br>皮膚科 | 耳科  | 眼科  | 歯科  | フィラ<br>リア<br>採血 | 検便    | 診療月日  |
|------|------|-----|-----|-----------|-----|-----|-----|-----------------|-------|-------|
|      | 一般   | 小学生 |     |           |     |     |     |                 |       |       |
| 御所ノ浦 | 82   | 151 | 250 | 153       | 133 | 146 | 44  | 538             | 139   | 7月16日 |
| 湯ノ口  | 45   | 10  |     |           |     |     |     |                 |       | 〃 17日 |
| 幣串   | 103  | 69  |     |           |     |     |     |                 |       | 〃 18日 |
| 片側   | 120  | 77  |     |           |     |     |     |                 |       | 〃 19日 |
| 計    | 350  | 307 | 726 |           |     |     | 538 | 139             | 〃 20日 | 〃 21日 |

## 第1回奄美大島風土病調査研究並に巡回診療

### 第1班

診療場所：大島本島《名瀬市(市街地)，住用村(西仲間)大和村(名音，恩勝)宇検村(湯湾)，西方村(久慈)》，加計呂麻島《鎮西村(押角)》，与路島《鎮西村(与路)》，請島《鎮西村(池地)》

期日：昭和29年5月12日～5月25日

参加者：

班長 佐藤八郎教授(第二内科)

|       |            |        |        |
|-------|------------|--------|--------|
| 外科    | 今村 健二郎 助教授 | 寄生虫    | 山下 博   |
| 第二内科  | 植村 芳郎 講師   | 皮膚泌尿器科 | 下湯湯 靖夫 |
| 〃     | 福島 英雄      | インターン  | 要 真一郎  |
| インターン | 橋本 久       | 〃      | 小倉 広凡  |
| 学生    | 佐多 明       | 学 生    | 上 妻 昭  |
| 〃     | 高森 治生      | 〃      | 田代 正盛  |

受診者総数：6476名

各科別受診者数

| 内 科 系 | 外 科 系 | フィラリア検血 | 学 童 検 診 | 検 便  |
|-------|-------|---------|---------|------|
| 1993  | 672   | 1052    | 920     | 1839 |

第2班

診療場所：徳之島，沖永良部島，与論島

期 日：昭和29年5月12日～5月25日

参加者：

班 長 榎屋富一教授（第一内科）

|        |           |         |           |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 皮膚泌尿器科 | 岡元 健一郎 教授 | 外 科     | 前田 和博 講師  |
| 第一内科   | 鮫 島 実 俊   | 産 婦 人 科 | 安 田       |
| ”      | 津 崎 文 雄   | 学 生     | 池 袋 弘 範   |
| 学 生    | 柿 木 成 也   | ”       | 田 代 郷 太 郎 |
| インターン  | 3 名       |         |           |

受診者総数：

内科系 1582名

その他，皮膚泌尿器科系，外科系，産婦人科系，患者多数を診療した。

第2回奄美大島風土病調査研究並に巡回診療

第1班

診療場所：宇検村(湯湾)，大和村(恩勝)，笠利町(赤木名)竜郷村(瀬留)，  
実久村(瀬武)，西方村(久慈) 喜界町，早町村

期 日：昭和30年6月26日～7月11日

参加者：

班長 榎屋富一教授（第一内科）

|      |       |       |      |
|------|-------|-------|------|
| 外科   | 大迫英彦  | 外科    | 若松道範 |
| 婦人科  | 久米康一郎 | 眼科    | 川野博隆 |
| 第一内科 | 鯨島実俊  | 第一内科  | 津崎文雄 |
| 第一内科 | 中野一   | インターン | 板坂卓児 |
| 学生   | 木山保   | 学生    | 登政治  |
| 〃    | 山路武彦  | 〃     | 鬼塚寛尚 |
| 〃    | 丸山正治  | 〃     | 新村健  |
| 〃    | 水枝谷涉  |       |      |

受診者総数：3049名

| 診療場所   | 受診者数 | 科別受診者数 |     |      |     | 検便  | フィラリア<br>ア<br>検血 | 診療月日 |
|--------|------|--------|-----|------|-----|-----|------------------|------|
|        |      | 内科系    | 外科系 | 婦人科系 | 眼科系 |     |                  |      |
| 宇検村湯湾  | 564  | 376    | 75  | 27   | 86  |     | 6月<br>28～29日     |      |
| 大和村恩勝  | 350  | 208    | 81  | 26   | 35  |     | 6月30日<br>～7月1日   |      |
| 笠利町赤木名 | 357  | 245    | 47  | 23   | 42  |     | 7月3日             |      |
| 竜郷村瀬留  | 299  | 232    | 24  | 19   | 24  |     | 7月4日             |      |
| 実久村瀬武  | 264  | 213    | 51  |      |     |     | 7月6日             |      |
| 西方村久慈  | 271  | 229    | 42  |      |     |     | 7月7日             |      |
| 喜界町    | 299  |        |     |      |     | 253 | 6月27～<br>29日     |      |
| 早町村    | 279  |        |     |      |     |     | 6月30日<br>～7月1日   |      |
| 計      | 2683 |        |     |      |     | 253 | 113<br>113       |      |

## 第2班

診療場所：和泊町(和泊, 国頭), 知名町(知名)東天城村(花徳, 山), 天城村  
(平土野)

期 日：昭和30年6月26日～7月5日

参加者：

班長 森一郎助教授(婦人科)

|        |      |      |         |
|--------|------|------|---------|
| 皮膚泌尿器科 | 永野典哉 | 第二内科 | 植村芳郎 講師 |
| 第二内科   | 要真一郎 | 第二内科 | 中馬康男    |
| 学生     | 東達郎  | 学生   | 平林義郎    |
| 〃      | 浜崎正雄 | 〃    | 種子田哲郎   |
| 〃      | 永山三夫 | 〃    | 吉永正     |
| 〃      | 永井一成 |      |         |

受診者総数：1522名

| 診療場所   | 受診者数 | 各科別受診者数 |    |    |     |     |     |     |                | 診療月日 |
|--------|------|---------|----|----|-----|-----|-----|-----|----------------|------|
|        |      | 内科      | 外科 | 眼科 | 耳鼻科 | 皮膚科 | 泌尿科 | その他 |                |      |
| 和泊町和泊  | 373  | 289     | 33 | 14 | 9   | 20  | 4   | 4   | 6月28, 29日      |      |
| 〃 国頭   | 86   | 86      | —  | —  | —   | —   | —   | —   | 6月28日<br>6月29日 |      |
| 知名町知名  | 413  | 294     | 37 | 18 | 13  | 25  | 1   | 25  | 6月29日<br>6月30日 |      |
| 東天城村花徳 | 174  | 127     | 9  | 14 | 2   | 9   | 2   | 11  | 7月2日           |      |
| 〃 山    | 269  | 208     | 12 | 18 | 9   | 12  | 3   | 15  | 7月1日<br>7月2日   |      |

| 診療場所   | 受診者数  | 内科   | 外科  | 眼科 | 耳鼻科 | 皮膚科 | 泌尿科 | その他 | 診療月日 |
|--------|-------|------|-----|----|-----|-----|-----|-----|------|
| 天城村平土野 | 207   | 137  | 15  | 20 | 5   | 27  | 1   | 4   | 7月3日 |
| 計      | 1,522 | 1141 | 106 | 74 | 38  | 93  | 11  | 59  |      |

### 第3回奄美大島風土病調査研究並に巡回診療

#### 第1班

診療場所：住用村(西仲間，山間，市)，大和村(恩勝，大棚，名音)  
宇検村(湯湾)，名瀬市(小湊)

期 日：昭和31年5月30日～6月10日

参加者：班長 榎屋富一教授(第一内科)

|      |      |          |      |       |
|------|------|----------|------|-------|
| (A班) | 産婦人科 | 前田末男 講師  | 第一内科 | 福元 務  |
|      | 第一内科 | 中野 一     | 学生   | 新村 健  |
|      | 学生   | 広瀬 徳蔵    | 学生   | 渡辺 惇允 |
|      | ”    | 鶴留 栄徳    |      |       |
| (B班) | 精神科  | 佐藤 幹正 教授 | 第一内科 | 桶谷 厳  |
|      | 整形外科 | 幸泉 光爾    | 学生   | 猪鹿倉 武 |
|      | 学生   | 中江 光成    |      |       |

受診者総数：2182名

| 診療場所   | 受診者数  | 検便  | フィラリア検血 | 診療月日       |
|--------|-------|-----|---------|------------|
| 住用村西仲間 | } 688 |     |         | 6月1日・2日    |
| 山間     |       |     |         | 6月3日・4日    |
| 市      |       |     |         | 6月3日       |
| 大和村恩勝  | } 421 |     |         | 5月31日・6月1日 |
| 大棚     |       |     |         | 6月2日       |
| 名音     |       |     |         | 6月3日       |
| 宇検村湯湾  | 485   |     |         | 6月4日・5日・6日 |
| 名瀬市小湊  | 93    |     |         | 6月9日       |
| 計      | 1687  | 342 | 153     |            |

## 第2班

診療場所：鎮西村(与路，池地，押角)，実久村(瀬武，西阿室)

西方村(西古見，管鈍，久慈，篠川)，古仁屋町(蘇刈)

期 日：昭和31年5月30日～6月10日

参加者：班長 森一郎助教授(婦人科)

|      |       |        |         |
|------|-------|--------|---------|
| 第二内科 | 瀬口康郎  | 皮膚泌尿器科 | 内宮礼一郎   |
| 眼科   | 榊明敏   | 学生     | 市来 斉    |
| 学生   | 木佐貫 禎 | ”      | 与那嶺 和 男 |
| ”    | 緒方 貞夫 |        |         |

受診診者総数：1518名

| 診療場所   | 受診者  | 科別受診者数 |          |      | フィラリア採血 | 検便  |
|--------|------|--------|----------|------|---------|-----|
|        |      | 内科     | 外科・皮膚泌尿科 | 産婦人科 |         |     |
| 鎮西村 与路 | 77   | 62     | 15       |      |         |     |
| 池 地    | 145  | 84     | 61       |      |         |     |
| 押 角    | 139  | 98     | 41       |      |         |     |
| 実久村 瀬武 | 139  | 83     | 56       |      |         |     |
| 西阿室    | 138  | 87     | 51       |      |         |     |
| 西方村西古見 | 77   | 58     | 19       |      |         |     |
| 管 鈍    | 61   | 44     | 17       |      |         |     |
| 久 慈    | 86   | 63     | 23       |      |         |     |
| 篠 川    | 101  | 63     | 38       |      |         |     |
| 古仁屋町蘇刈 | 78   | 57     | 21       |      |         |     |
| 計      | 1041 | 699    | 342      | 180  | 160     | 137 |
|        |      |        | 1221     |      | 160     | 137 |

### 第3回奄美大島風土病調査研究並に巡回診療

#### 第3班

診療場所：伊仙村(犬田布，伊仙，面縄)，天城村(平土野)，東天城村(山)，  
亀津町(亀津)

期 日：昭和31年5月30日～6月10日

参加者：

班長 今村健二郎 助教授(外科)

|                 |                          |                 |                      |
|-----------------|--------------------------|-----------------|----------------------|
| 第二内科<br>学生<br>" | 米沢藤士 講師<br>小田代正之<br>上前琢磨 | 第二内科<br>学生<br>" | 福島英雄<br>内山一雄<br>宮之原学 |
|-----------------|--------------------------|-----------------|----------------------|

受診者総数：1113名

| 診療場所   | 受診者数 | フィラリア採血 | 診療月日    |
|--------|------|---------|---------|
| 伊仙村犬田市 | 158  | 39      | 6月1日    |
| 伊仙     | 183  | 27      | 6月2日    |
| 面縄     | 223  | 41      | 6月3日    |
| 天城村平土野 | 221  |         | 6月4日・5日 |
| 東天城村山  | 100  |         | 6月6日    |
| 亀津町亀津  | 121  |         | 6月7日    |
| 計      | 1006 | 107     |         |

#### 第4回奄美大島風土病調査研究並に巡回診療

##### 第1班

診療場所：瀬戸内町（諸鈍，阿室釜，篠川）

期 日：昭和32年5月30日～6月7日

参加者：班長 佐藤幹正教授（精神科）

|                              |                                           |                            |                                         |
|------------------------------|-------------------------------------------|----------------------------|-----------------------------------------|
| 第一内科<br>整形外科<br>学生<br>"<br>" | 福田正臣助教授<br>白坂健一郎<br>今村真敏<br>宮之原 啓<br>鈴木 卓 | 第一内科<br>病理<br>学生<br>"<br>" | 園田定己<br>橋口俊照 講師<br>新里邦夫<br>樺山資臣<br>江川俊治 |
|------------------------------|-------------------------------------------|----------------------------|-----------------------------------------|

受診者総数：867名

| 診療場所   | 内科  | 精神科 | 整形外科 | 診療月日    |
|--------|-----|-----|------|---------|
| 瀬戸内町諸鈍 | 366 | 90  |      | 6月1日～3日 |
| 阿室釜    |     | 55  |      |         |
| 篠川     | 312 |     |      | 6月4日～6日 |
| 計      | 678 | 145 | 44   |         |

#### 第4回奄美大島風土病調査研究並に巡回診療

##### 第2班

診療場所：知名村(田皆，住吉)，和泊村(国頭)

期 日：昭和32年5月30日～6月7日

参加者：

班長 岡元健一郎教授（皮膚泌尿科）

|      |         |      |       |
|------|---------|------|-------|
| 第二内科 | 米沢藤士 講師 | 第二内科 | 福島英雄  |
| 歯科   | 長田一哉    | 産婦人科 | 新牧一馬  |
| 学生   | 国吉真     | 学生   | 作正雄   |
| 〃    | 鶴留栄徳    | 〃    | 中村志郎  |
| 〃    | 西村明男    | 〃    | 壺岐又三郎 |

受診者総数：683名

| 診療場所   | 受診者数 | 診療月日    |
|--------|------|---------|
| 知名村 田皆 | 304  | 6月3日・4日 |
| 〃 住吉   | 92   | 6月2日    |
| 和泊村 国頭 | 287  | 6月5日・6日 |

## 第5回奄美大島風土病調査研究並に巡回診療

### 第1班

診療場所：竜郷村(瀬留)，笠利村(赤木名)，大和村(大棚)

期 日：昭和33年7月1日～7月9日

参加者：班長 縄田干郎教授（放射線科）

|      |       |      |       |
|------|-------|------|-------|
| 第一内科 | 川崎兼陽  | 第一内科 | 竹田絃一郎 |
| 眼科   | 岩下正晃  | 産婦人科 | 新牧一馬  |
| 学生   | 壺岐又三郎 | 学生   | 川上明之  |
| 〃    | 田中孝一郎 | 〃    | 吉川寛徳  |
| 〃    | 林良昭   | 〃    | 阿久根務  |

受診者総数：1031名

| 診療場所   | 受診者数 | 各科別受診者数 |     |      |    |       |     | 診療月日    |
|--------|------|---------|-----|------|----|-------|-----|---------|
|        |      | 内科      | 眼科  | 産婦人科 | 外科 | 耳鼻咽喉科 | 皮膚科 |         |
| 竜郷村 瀬留 | 477  | 201     | 184 | 44   | 25 | 11    | 12  | 7月2日～4日 |
| 笠利村赤木名 | 321  | 161     | 66  | 14   | 33 | 21    | 26  | 7月4・5日  |
| 大和村 大棚 | 233  | 106     | 49  | 22   | 14 | 30    | 12  | 7月7・8日  |
| 計      | 1031 | 468     | 299 | 80   | 72 | 62    | 50  |         |

### 第2班

診療場所：瀬戸内町（久慈，薩川，押角，池地，請阿室）

期 日：昭和33年7月1日～7月10日

参加者：

班長 岡元健一郎教授（皮膚泌尿器科）

|      |         |        |      |
|------|---------|--------|------|
| 放射線科 | 飯田高明 講師 | 外科     | 上山幹男 |
| 第二内科 | 茅野逸郎    | 皮膚泌尿器科 | 愛甲矩義 |
| 学生4年 | 江川俊治    | 学生4年   | 高山義則 |
| ”    | 川畑量平    | ”      | 武博邦  |
| ”    | 美坂幸治    | 学生3年   | 中園三宏 |

受診者総数：737名

| 診療場所 | 受診者数 | 各科別受診者数 |    |    |     |        |     |     | 診療月日   |
|------|------|---------|----|----|-----|--------|-----|-----|--------|
|      |      | 内科      | 外科 | 眼科 | 耳鼻科 | 皮膚泌尿器科 | 検便  | その他 |        |
| 瀬戸内町 |      |         |    |    |     |        |     |     |        |
| 久慈   | 167  | 84      | 15 | 9  | 10  | 20     | 10  | 2   | 7月3・4日 |
| 薩川   | 123  | 71      | 8  | 8  | 11  | 15     | 7   | 3   | 7月5日   |
| 押角   | 52   | 32      | 2  | 1  | 5   | 6      | 3   | 2   | 7月6日   |
| 池地   | 181  | 106     | 12 | 10 | 21  | 20     | 16  | 5   | 7月7・8日 |
| 請阿室  | 214  | 118     | 12 | 5  | 15  | 14     | 78  | 16  | 7月8・9日 |
| 計    | 737  | 411     | 49 | 33 | 62  | 75     | 114 | 28  |        |

## 第6回奄美大島風土病調査研究並に巡回診療

### 第1班

診療場所：大和村(今里，名音)，名瀬市(小湊)

期 日：昭和34年7月5日～7月12日

参加者：班長 秋田八年教授(第二外科)

|        |         |      |      |
|--------|---------|------|------|
| 第二内科   | 米沢藤士 講師 | 第二外科 | 三宅洋三 |
| 皮膚泌尿器科 | 松崎 統    | 学生   | 隈元拓夫 |
| 学 生    | 下川原宏    | 学 生  | 土持昭男 |
| ”      | 中園三宏    |      |      |

受診者総数：876名

| 診療場所  | 受診者数 | 各科別受診者数 |     |    |       |     |     |     | 診療月日          |
|-------|------|---------|-----|----|-------|-----|-----|-----|---------------|
|       |      | 内科      | 外科  | 眼科 | 耳鼻咽喉科 | 皮膚科 | 泌尿科 | その他 |               |
| 大和村今里 | 365  | 110     | 74  | 46 | 41    | 46  | 7   | 41  | 7月7日<br>～7月8日 |
| 〃 名音  | 238  | 113     | 48  | 12 | 13    | 15  | 6   | 31  | 7月8日<br>～7月9日 |
| 名瀬市小湊 | 273  | 87      | 75  | 7  | 19    | 44  | 14  | 27  | 7月10日         |
| 計     | 876  | 310     | 197 | 65 | 73    | 105 | 27  | 99  |               |

第2班

診療場所：瀬戸内町（与路，西阿室，伊子茂，古仁屋）

期 日：昭和34年7月5日～7月12日

参加者：

班長 高安晃教授（眼科）

|      |           |      |       |
|------|-----------|------|-------|
| 細菌   | 大友 信也 助教授 | 産婦人科 | 柿木 成也 |
| 第一内科 | 高岡 寛      | 学生4年 | 阿久根 務 |
| 学生4年 | 牛飼 俊博     | 〃    | 嘉川 博次 |
| 〃    | 鵜木 春海     |      |       |

受診者総数：1024名

| 診療場所   | 受診者  | 各科別受診者数 |     |              |     | 診療月日  |
|--------|------|---------|-----|--------------|-----|-------|
|        |      | 内科      | 婦人科 | 眼科           | その他 |       |
| 瀬戸内町与路 | 353  | 104     | 36  | (171)<br>213 |     | 7月7日  |
| 西阿室    | 237  | 80      | 26  | (91)<br>103  | 28  | 7月8日  |
| 伊子茂    | 345  | 102     | 10  | (213)<br>226 | 7   | 7月9日  |
| 古仁屋    | 89   | 39      | 14  | (0)<br>36    |     | 7月10日 |
| 計      | 1024 | 325     | 86  | (475)<br>578 | 35  |       |

( ) は生徒数

### 第7回奄美大島巡回診療

診療場所：宇検村（湯湾，久志，名柄，阿室），瀬戸内町（管鈍）

期 日：昭和35年7月5日～11日

参加者：班長 金久卓也教授（第一内科）

|       |      |      |      |
|-------|------|------|------|
| 第一内科  | 馬場弘志 | 第一内科 | 藤瀬隆幸 |
| 耳鼻咽喉科 | 江川俊治 | 第二外科 | 平 明  |
| 学生4年  | 隈元郁郎 | 学生4年 | 古賀正通 |
| 学生4年  | 赤崎郁郎 | 学生3年 | 坂元藤雄 |
| 学生3年  | 今村壮太 |      |      |

受診者総数：973名

| 診療場所   | 受診者数 | 診療科目別分類 |    |     |     |    |     |     |       | 診療月日 |
|--------|------|---------|----|-----|-----|----|-----|-----|-------|------|
|        |      | 内科      | 外科 | 耳鼻科 | 皮膚科 | 眼科 | 泌尿科 | その他 |       |      |
| 宇検村 湯湾 | 382  | 255     | 20 | 36  | 30  | 14 | 4   | 23  | 7月7日  |      |
| 久志     | 161  | 117     | 12 | 17  | 1   | 12 | 1   | 1   | 7月8日  |      |
| 名柄     | 115  | 73      | 7  | 17  | 14  | 0  | 2   | 2   | 7月8日  |      |
| 阿室     | 121  | 90      | 12 | 9   | 7   | 1  | 1   | 1   | 7月9日  |      |
| 瀬戸内町管鈍 | 194  | 133     | 18 | 16  | 20  | 2  | 1   | 4   | 7月10日 |      |
| 計      | 973  | 668     | 69 | 95  | 72  | 29 | 9   | 31  |       |      |

### 第8回奄美大島巡回診療

診療場所：大和村（恩勝，大棚，名音，戸円，今里）

期 日：昭和36年7月5日～12日

参加者：

班長 調 賢哉助教授（耳鼻咽喉科）

|      |        |      |        |
|------|--------|------|--------|
| 第二内科 | 尾辻 義人  | 第二内科 | 石塚 健太郎 |
| 第二内科 | 国東 孝   | 第一外科 | 中村 昭典  |
| 学生4年 | 坂元 藤雄  | 学生4年 | 時松 昭   |
| 学生4年 | 丸野 敏次郎 | 学生3年 | 中河原 孝  |
| 学生3年 | 前田 忠   |      |        |

受診者総数：589名

| 診療場所   | 受診者数 | 診療月日  |
|--------|------|-------|
| 大和村 恩勝 | 80   | 7月10日 |
| 大 棚    | 104  | 7月9日  |
| 名 音    | 77   | 7月8日  |
| 戸 円    | 111  | 7月8日  |
| 今 里    | 217  | 7月7日  |

### 第9回奄美大島無医村診療

診療場所：瀬戸内町(須子茂，西阿室，伊子茂，秋徳，諸鈍，与路)

期 日：昭和37年7月5日～13日

参加者：

班長 小島喜久男教授(薬理)

|      |          |      |          |      |      |
|------|----------|------|----------|------|------|
| 薬理   | 松崎吉彦 助教授 | 霧島分院 | 菅 正明 助教授 | 霧島分院 | 稲森幸治 |
| 第二外科 | 稲益良尚     | 齒科   | 川平 淳     | 学生4年 | 川野通夫 |
| 学生4年 | 武田元彦     | 口腔外科 | 前田 忠     | 学生3年 | 林 昭義 |
| 学生3年 | 福田保夫     | 九大   | 西村謙一     |      |      |
|      |          | 第一外科 |          |      |      |

受診者総数：1406名

| 診療場所    | 受診者数 | 診療科別受診数 |    |     |    |       |     |
|---------|------|---------|----|-----|----|-------|-----|
|         |      | 内・小児科   | 外科 | 耳鼻科 | 眼科 | 皮・泌尿科 | 歯科  |
| 瀬戸内町須子茂 | 63   |         |    |     |    |       |     |
| 西阿室     | 168  |         |    |     |    |       |     |
| 伊子茂     | 146  | 462     | 35 | 67  | 40 | 91    | 721 |
| 秋徳      | 60   |         |    |     |    |       |     |
| 諸鈍      | 114  |         |    |     |    |       |     |
| 与路      | 134  |         |    |     |    |       |     |
| 計       |      | 1406    |    |     |    |       |     |

### 第10回奄美大島巡回診療

診療場所：笠利町(屋仁，宇宿，喜瀬，笠利，佐仁，節田，赤木名)

期 日：昭和38年7月23日～8月1日

参加者：

班長 寺脇保教授（小児科）

|          |          |             |       |
|----------|----------|-------------|-------|
| 霧島分院第一内科 | 菅 正明 助教授 | 第 二 内 科     | 迫田 欽一 |
| 歯科口腔外科   | 増田 敏雄    | 小 児 科       | 鯨島 信一 |
| 学 生 4 年  | 益崎 恵文    | 学 生 4 年     | 大勝 洋祐 |
| 学 生 4 年  | 宮田晃一郎    | 学 生 4 年     | 福田 保夫 |
| 学 生 4 年  | 由布 潤一    | 学 生 3 年     | 天辰 健二 |
| 学 生 3 年  | 鶴 敬雄     | 学 生 3 年     | 野辺 貞典 |
| 学 生 3 年  | 友松 博美    | 九 大 第 一 外 科 | 西村 謙一 |

受診者総数：1473名

| 診場<br>療所 | 受診者<br>数 | 診 療 科 別 受 診 者 数 |     |     |     |     |     |     |    |    | 診料月日 |              |
|----------|----------|-----------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|------|--------------|
|          |          | 内 科             | 小児科 | 歯 科 | 皮膚科 | 耳鼻科 | 眼 科 | 泌尿科 | 産人 | 婦科 |      | 外 科          |
| 屋 仁      | 106      |                 |     |     |     |     |     |     |    |    |      | 7月25,<br>26日 |
| 宇 宿      | 276      |                 |     |     |     |     |     |     |    |    |      | "            |
| 喜 瀬      | 214      |                 |     |     |     |     |     |     |    |    |      | 7月27,<br>28日 |
| 笠 利      | 211      |                 |     |     |     |     |     |     |    |    |      | "            |
| 佐 仁      | 180      |                 |     |     |     |     |     |     |    |    |      | 7月29,<br>30日 |
| 節 田      | 222      |                 |     |     |     |     |     |     |    |    |      | "            |
| 赤木名      | 265      |                 |     |     |     |     |     |     |    |    |      | 7月27,<br>28日 |
| 計        | 1474     | 673             | 483 | 530 | 30  | 26  | 21  | 14  | 9  | 4  |      |              |

### 第11回奄美大島巡回診療

診療場所：瀬戸内町(須子茂，西阿室，与路，諸鈍，伊子茂)

期 日：昭和39年7月13日～7月21日

参加者：

班長 香月武人助教授（第二外科）

|      |         |            |       |              |       |
|------|---------|------------|-------|--------------|-------|
| 第二内科 | 尾辻義人 講師 | 第二外科       | 倉内 睦雄 | 県立大島<br>病院内科 | 国吉 至  |
| 第二外科 | 中島 泰広   | 皮膚泌尿<br>器科 | 牧角 格  | 第二内科         | 前田 忠  |
| 第二外科 | 上小鶴克弘   | 歯科<br>口腔外科 | 川平 淳  | 学生4年         | 上片平 卓 |
| 学生4年 | 加納 英実   | 学生4年       | 斉田 耕作 | "            | 国崎 忠彦 |
| "    | 鶴 敬雄    | "          | 中島 哲  | "            | 勝田 兼司 |
| "    | 松窪 尉雄   | 学生3年       | 伊集院一成 | 学生3年         | 牧野 建紀 |
| 学生3年 | 池田 正明   | "          | 野川 勉  | "            | 山口 秀俊 |

受診者総数：1969名

| 診 療 場 所 | 受 診 者 数 | 診 療 月 日    |
|---------|---------|------------|
| 須 子 茂   | 258     | 7月15日      |
| 西 阿 室   | 189     | 7月16日, 17日 |
| 与 路     | 310     | 7月18日      |
| 諸 鈍     | 587     | 7月15日, 16日 |
| 伊 子 茂   | 625     | 7月17日, 18日 |
| 計       | 1969    |            |

### 第12回奄美大島巡回診療

診療場所：住用村(和瀬, 城, 見里, 川内, 東仲間, 新村)

宇検村(石良, 名柄, 平田, 阿室, 屋鈍, 芦検, 宇検, 湯湾, 久志)

期 日：昭和40年7月10日～7月21日

参加者：

班長 上山幹夫助教授 (1外科)

|               |        |      |         |
|---------------|--------|------|---------|
| 第一内科          | 新村 健   | 学生4年 | 川畑 隆 駿  |
| ”             | 富永 功 一 | ”    | 原 晃     |
| 第一外科          | 相良 有 一 | ”    | 楊 国 雄   |
| ”             | 肝付 兼 達 | 学生3年 | 久保 隆 平  |
| 技 師           | 前田 寿 則 | ”    | 野村 紘一郎  |
| 学生4年          | 中村 紘一郎 | ”    | 中野 隆 雄  |
| ”             | 内村 隼 人 | ”    | 久木元 宏 哉 |
| ”             | 泊 忍    | ”    | 平瀬 吉 成  |
| 特別参加<br>群 馬 大 | 加藤 英 輔 | ”    | 小野 二六一  |

受診者総数：1205名

| 診療場所  | 受診者数 | 各科別受診者数 |    |    |     |        |       |     |     |       | 診療月日 |
|-------|------|---------|----|----|-----|--------|-------|-----|-----|-------|------|
|       |      | 内科      | 外科 | 眼科 | 婦人科 | 皮膚泌尿器科 | 耳鼻咽喉科 | 精神科 | その他 |       |      |
| 住用村和瀬 | 55   | 43      | 6  | 4  |     | 6      | 1     |     |     | 7月13日 |      |
| 城     | 84   | 65      | 9  | 4  |     | 3      | 3     |     |     | " 14日 |      |
| 見里    | 69   | 64      | 8  | 2  |     | 6      | 5     |     |     | " 15日 |      |
| 川内    | 81   | 77      | 7  | 2  |     | 3      | 3     |     |     | " 16日 |      |
| 東仲間   | 66   | 57      | 5  | 7  |     | 0      | 2     |     |     | " 17日 |      |

| 診療場所 | 受診者数 | 各科別受診者数 |    |    |     |        |       |     |     |       | 診療月日 |
|------|------|---------|----|----|-----|--------|-------|-----|-----|-------|------|
|      |      | 内科      | 外科 | 眼科 | 婦人科 | 皮膚泌尿器科 | 耳鼻咽喉科 | 精神科 | その他 |       |      |
| 新村良  | 40   | 45      | 1  | 2  |     | 3      | 2     |     |     | 7月13日 |      |
| 宇石   | 47   | 62      | 3  | 3  | 0   | 1      | 2     | 1   | 6   | " 14日 |      |
| 柄石   | 92   | 54      | 4  | 8  | 1   | 8      | 8     | 2   | 28  | " 15日 |      |
| 名平   | 123  | 92      | 8  | 5  | 2   | 16     | 18    | 4   | 20  | " 16日 |      |
| 阿室   | 151  | 70      | 3  | 14 | 0   | 8      | 7     | 4   | 12  | " 17日 |      |
| 屋鈍   | 68   | 41      | 2  | 5  | 1   | 13     | 6     | 3   | 1   | " 19日 |      |
| 芦検   | 83   | 71      | 0  | 1  | 2   | 6      | 3     | 1   | 2   | " 19日 |      |
| 宇検   | 109  | 78      | 6  | 4  | 7   | 6      | 3     | 4   | 8   | " "   |      |
| 湯湾   | 80   | 60      | 6  | 6  | 4   | 2      | 4     | 3   | 6   | " 18日 |      |
| 久志   | 57   | 62      | 2  | 3  |     | 6      | 4     |     |     | " 19日 |      |
|      | 1205 |         |    |    |     |        |       |     |     |       |      |

### 第13回奄美大島巡回診療

診療場所：瀬戸内町(薩川，諸鈍，古仁屋)

期 日：昭和41年7月19日～7月28日

参加者：

班長 皆見紀久男教授（皮膚科）

|        |         |      |       |
|--------|---------|------|-------|
| 第二内科   | 恒成政生    | 学生3年 | 土器屋卓志 |
| “      | 石走俊太郎   | “    | 野添新一  |
| 皮膚科    | 島田勝彦    | “    | 泊直十郎  |
| 眼科     | 上林正勝    | 学生4年 | 安田博行  |
| “      | 原田一道    | “    | 松村邦之  |
| 耳鼻咽喉科  | 大野政一    | “    | 安藤忠   |
| 歯科口腔外科 | 副島公生    | “    | 森下靖雄  |
| 細菌     | 南嶋洋一助教授 | “    | 園田仁志  |
| “      | 米倉康雄    | “    | 劉朋慶   |
| 第一外科   | 菊池二郎    | “    | 富村吉十郎 |
| 学生3年   | 荒田弘道    | “    | 吉井功   |

受診者総数:1026名

| 診療場所 | 受診者  | 各科別受診者数 |     |     |       |        |    |               | 診療月日 |
|------|------|---------|-----|-----|-------|--------|----|---------------|------|
|      |      | 内科      | 外科  | 眼科  | 耳鼻咽喉科 | 皮膚泌尿器科 | 歯科 |               |      |
| 薩川   | 166  | 98      |     | 38  |       | 31     |    | 7月21, 22日     |      |
| 諸鈍   | 181  | 124     |     | 21  |       | 30     |    | “             |      |
| 古仁屋  | 679  | 400     |     | 149 |       | 89     |    | 7月23, 24, 25日 |      |
| 計    | 1026 | 622     | 142 | 208 | 126   | 150    | 47 |               |      |

#### 第14回奄美大島巡回診療

診療場所：与論町(茶花，立長，朝戸，古里，叶，城，東，西，那間)

期 日：昭和42年6月30日～7月11日

参加者：

団長 塩田重利教授（歯科口腔外科）

|       |       |    |      |       |
|-------|-------|----|------|-------|
| 第一内科  | 新村健   | 講師 | 第一内科 | 益崎惠文  |
| 第一外科  | 永田政幸  |    | 産婦人科 | 佃篤彦   |
| 耳鼻咽喉科 | 高木茂   |    | 眼科   | 原田一   |
| 泌尿器科  | 児浦純生  |    | 齒科   | 松井澄夫  |
| 学生4年  | 野島政男  |    | 口腔外科 | 平安山英達 |
| "     | 井上泰彦  |    | "    | 入江康文  |
| "     | 迫口良美  |    | "    | 長末茂樹  |
| "     | 松井康信  |    | 学生4年 | 山下優毅  |
| 学生3年  | 西征二   |    | "    | 川平稔   |
| "     | 近藤英昭  |    | "    | 熊本俊則  |
| "     | 田之畑修朔 |    |      |       |

受診者総数:979名

| 診療場所 | 受診者数 | 各科別受診者数 |     |     |      |       |     |     |     |    | 検便 |      |
|------|------|---------|-----|-----|------|-------|-----|-----|-----|----|----|------|
|      |      | 内科      | 外科  | 産人科 | 婦科   | 耳鼻咽喉科 | 眼科  | 皮膚科 | 泌尿科 | 齒科 |    | 口腔外科 |
| 茶花   | 240  |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    | 69   |
| 立長   | 117  |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    |      |
| 朝戸   | 71   |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    |      |
| 古里   | 13   |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    |      |
| 叶    | 41   | 521     | 142 | 96  | 107  | 184   | 105 | 38  | 117 |    |    |      |
| 城    | 21   |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    |      |
| 東    | 125  |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    |      |
| 西    | 63   |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    |      |
| 那間   | 118  |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    |      |
| 不明   | 101  |         |     |     |      |       |     |     |     |    |    |      |
| 計    | 910  |         |     |     | 1310 |       |     |     |     |    | 69 |      |

診療月日:

|            |      |
|------------|------|
| 茶花小校区      | 7月3日 |
| 与論小校区      | " 4日 |
| 那間小校区      | " 5日 |
| 再来診療日・学童検診 | " 6日 |
| 学童検診       | " 7日 |
| "          | " 8日 |

学童・生徒健康診断受診者数：

|         |          |      |
|---------|----------|------|
| 7月6日(木) | 大島高校与論分校 | 108  |
| 7月7日(金) | 茶花小      | 449  |
| 7月8日(土) | 那間小      | 347  |
|         | 与論小      | 434  |
|         | 与論中      | 614  |
|         | 計        | 1952 |

### 第1回三島村風土病調査研究並に巡回診療

診療場所：竹島，黒島（大里，片泊部落）

期 日：昭和33年6月28日～7月3日

参加者：

班長 中馬康男講師（第二内科）

|        |       |      |      |
|--------|-------|------|------|
| 皮膚泌尿器科 | 齊藤宗吾  | 学生4年 | 和田浩三 |
| 学生4年   | 入部俊一郎 | 〃    | 米倉康雄 |
| 〃      | 野上鉄蔵  |      |      |

受診者総数：506名

| 診療場所          | 受診者数 | 各科別受診者数 |        |    |       |        |    |    |     | 異常なし |
|---------------|------|---------|--------|----|-------|--------|----|----|-----|------|
|               |      | 内科      | 皮膚泌尿器科 | 眼科 | 耳鼻咽喉科 | ファイリア検 | 血  | 便  | その他 |      |
| 竹島            | 165  | 62      | 3      | 1  | 0     | 3      | 19 | 3  | 4   |      |
| 黒島 { 大里<br>片泊 | 149  | 55      | 7      | 3  | 3     | 1      | 8  | 4  | 1   |      |
|               | 192  | 69      | 25     | 5  | 3     | 2      | 8  | 7  | 4   |      |
| 計             | 506  | 186     | 35     | 9  | 6     | 6      | 35 | 14 | 9   |      |

### 第2回三島村巡回診療

診療場所：黒島（片泊，大里）竹島

期 日：昭和34年7月21日～7月31日

参加者：

班長 千嶋寛二（神経科）

|        |         |        |         |
|--------|---------|--------|---------|
| 第二内科   | 浜田 己 則  | 学生 4 年 | 児 玉 公 彦 |
| 第一外科   | 長 野 幸五郎 | ”      | 尼 子 春 樹 |
| 学生 4 年 | 寺 師 慎 一 |        |         |

受診者総数：382名

| 診療場所  | 受診者数 | 各 科 別 受 診 者 数 |     |     |       |                |     |       |              |
|-------|------|---------------|-----|-----|-------|----------------|-----|-------|--------------|
|       |      | 内 科           | 外 科 | 眼 科 | 皮 膚 科 | 神 経 科<br>精 神 科 | 検 便 | 耳 鼻 科 | フィラリア<br>検 血 |
| 黒島 片泊 | 127  | 17            | 5   | 3   | 16    | 44             | 43  | 2     | 3            |
| ” 大里  | 130  | 14            | 8   | 0   | 11    | 35             | 77  | 0     | 3            |
| 竹 島   | 125  | 23            | 2   | 2   | 2     | 29             | 78  | 2     | 1            |
| 計     | 382  | 54            | 15  | 5   | 29    | 108            | 198 | 4     | 7            |

### 第 1 回十島村風土病調査研究並に巡回診療

診療場所：口ノ島，平島，悪石島，中ノ島

期 日：昭和33年 6 月29日～7 月 9 日

参加者：

班長 佐藤幹正教授（神経科）

|        |         |        |         |
|--------|---------|--------|---------|
| 第二内科   | 種子田 哲 郎 | 学生 4 年 | 平 明     |
| 学生 4 年 | 今 村 農夫男 | ”      | 柘 木 正 志 |

受診者総数：618名

| 診療場所 | 受診者数 | 内科  | 外科 | 婦人科 | 眼科 | 皮膚科 | 神経精神科 | 耳鼻科 | 歯科 | フリア | 検便  | 異常なし |
|------|------|-----|----|-----|----|-----|-------|-----|----|-----|-----|------|
| 口之島  | 265  | 57  | 2  | 0   | 26 | 61  | 28    | 19  | 7  | 5   | 17  | 68   |
| 平島   | 174  | 27  | 2  | 4   | 50 | 15  | 58    | 3   | 4  | 1   | 36  | 26   |
| 悪石   | 115  | 17  | 0  | 0   | 2  | 7   | 16    | 3   | 1  | 0   | 68  | 17   |
| 中之島  | 64   | 18  | 2  | 0   | 1  | 9   | 9     | 2   | 3  | 0   | 4   | 9    |
| 計    | 618  | 119 | 6  | 4   | 79 | 92  | 111   | 27  | 15 | 6   | 125 | 120  |

## 第2回十島村巡回診療

診療場所：宝島，悪石島，口之島，平島，臥蛇島

期 日：昭和34年7月21日～8月3日

参加者：

班長 北原経太教授（衛生学）

|      |         |      |      |
|------|---------|------|------|
| 放射線科 | 飯田高明 講師 | 学生4年 | 稲益良尚 |
| 産婦人科 | 満尾定彦    | 〃    | 大熊棋章 |
| 学生4年 | 赤崎郁郎    |      |      |

受診者総数：738名

| 診療場所 | 受診者数 | 内科  | 外科 | 眼科 | 皮膚泌尿器科 | 耳鼻咽喉科 | 婦人科 | 神経精神科 | 検便  | フリア<br>検血 | 所見  |
|------|------|-----|----|----|--------|-------|-----|-------|-----|-----------|-----|
| 宝島   | 290  | 79  | 6  | 20 | 41     | 16    |     | 44    | 103 |           | 61  |
| 悪石島  | 80   | 14  | 1  | 5  | 5      | 5     |     | 11    | 27  |           | 44  |
| 口之島  | 234  | 75  | 5  | 9  | 13     | 14    |     | 24    | 5   | 4         | 95  |
| 平島   | 128  | 42  | 3  | 6  | 5      | 8     | 1   | 25    | 6   | 1         | 41  |
| 臥蛇島  | 6    | 3   | 0  | 0  | 0      | 0     |     | 4     | 15  | 1         |     |
| 計    | 738  | 213 | 15 | 40 | 64     | 43    | 1   | 108   | 156 | 6         | 241 |

### 3. 鹿児島大学医学部沖縄学術調査診療団派遣

旧隣接県としての沖縄は、戦後施政権が日本の手から離れた今日と雖も鹿児島の人々にとってはなお親近感で結ばれている。鹿児島大学は従来医学、農林、畜産、生物、水産の各分野において琉球大学と協同学術調査を実施して多大の成果をおさめていたが、昭和40年8月はじめて医学部職員学生より成る大規模な学術調査診療団を派遣して、医学的調査を実施すると共に沖縄医学会と協力して学術講演会を開催して医学の交流と振興につとめ、且つ数千の同胞に対し新しい医療の恩恵を施したことは特筆に値することである。今後このような調査診療団はつづいて派遣されることになるであろうが、過去3回における調査診療団の活動状況を摘録する。

#### 第1回 派遣団員氏名

|    |         |     |    |
|----|---------|-----|----|
| 団長 | 医学部長    | 佐藤  | 八郎 |
| 団員 | 眼科教授    | 高安  | 晃  |
| 〃  | 泌尿器科助教授 | 阿世知 | 節夫 |
| 〃  | 第二外科助教授 | 香月  | 武人 |
| 〃  | 〃 講師    | 西村  | 基  |
| 〃  | 〃 〃     | 福田  | 明恒 |
| 〃  | 第二内科講師  | 中馬  | 康男 |
| 〃  | 〃 〃     | 尾辻  | 義人 |
| 〃  | 〃 医師    | 与那嶺 | 和男 |
| 〃  | 〃 〃     | 中原  | 信昭 |
| 〃  | 実地習練生   | 長嶺  | 隆徳 |
| 〃  | 学生      | 末永  | 豊邦 |
| 〃  | 〃       | 藤田  | 虎夫 |
| 〃  | 〃       | 坂元  | 忠夫 |
| 〃  | 〃       | 坂本  | 日朗 |
| 〃  | 〃       | 比嘉  | 賀雄 |
| 〃  | 〃       | 屋良  | 勲  |

#### 学術診療調査団日程

昭和40年8月10日（火）ひめゆり丸で鹿児島出航

11日（水）那覇港着

12日（木）挨拶廻り，診療所開設準備，鹿大沖縄親睦会

- 13日（金）診療開始，フィラリア採血  
 14日（土）診療  
 15日（日）沖縄内視鏡研究会，心疾患カンファランス  
 16日（月）フィラリア採血，沖縄歯科医師会参加C.P.C.  
 成人病講演会  
 17日（火）眼科懇談会  
 18日（水）医学講演会，観光，診療報告会  
 20（金）薬品，器材整理，胃検診，心疾患カンファランス  
 21日（土）新聞社レセプション，胃検診，心疾患カンファラ  
 ス  
 22日（日）挨拶廻り，琉球大学長レセプション，鹿大出身者送  
 別会  
 23日（月）ひめゆり丸にて那覇港出航  
 24日（火）鹿児島港着

受診者総数：7,238名

| I 一般診療 |      |                                             | II 検診         |        |                     |
|--------|------|---------------------------------------------|---------------|--------|---------------------|
| 診療科    |      | 備考                                          | 検査項目          |        |                     |
| 内科     | 821名 | 男女 277名<br>544                              | フィラリア検血       | 461名   | 中学生 405名<br>一般住民 56 |
| 小児科    | 370  | 男女 211<br>159                               | 蟻虫検査          | 821    | 米須部落民全員             |
| 眼科     | 368  |                                             | 児童科生徒<br>内科検診 | 1,443  | 三和地区校<br>小中学校       |
| 外科     | 252  | 男女 80<br>172                                | 児童科生徒<br>眼科検診 | 2,063  | 同上                  |
| 産婦人科   | 156  | 産科25<br>婦人科131                              |               |        |                     |
| 皮膚泌尿器科 | 309  | 皮膚科287<br>(男122,女165)<br>泌尿器科22<br>(男8,女14) | 総計            | 7,238名 |                     |

第2回派遣団員氏名

医学部長 佐藤八郎

|             |         |              |
|-------------|---------|--------------|
| 団長          | 放射線医学教授 | 繩田千郎         |
| 団員          | 衛生学教授   | 北原経太 (久高島班)  |
|             | 第二内科講師  | 柚木一雄         |
| 〃           | 〃       | 尾辻義人         |
| 〃           | 〃       | 高木茂男         |
| 〃           | 〃       | 大山治史         |
| 〃           | 医師      | 与儀昌夫 (久高島班)  |
|             | 第一外科講師  | 白尾哲哉         |
|             | 第一内科医師  | 川進浩 (久高島班)   |
|             | 産婦人科講師  | 斉藤光昭         |
|             | 整形外科講師  | 鮫島教彦         |
|             | 眼科医師    | 内田洋人         |
|             | 精神科医師   | 新里邦夫         |
|             | 泌尿器科講師  | 大井好忠         |
|             | 医学部学生   | 常松静也 (久高島班)  |
|             |         | 井上泰彦 (久高島班)  |
|             |         | 入江康文         |
|             |         | 野島政男 (久高島班)  |
|             |         | 平安山英達 (久高島班) |
|             |         | 上田博章 (久高島班)  |
|             |         | 佐賀庸男 (久高島班)  |
|             |         | 西征二 (久高島班)   |
|             |         | 山下優毅 (久高島班)  |
|             |         | 川平稔          |
|             | 保健婦学校学生 | 牛塚順子         |
|             | 〃       | 吉屋睦子         |
| 九州女子大学栄養科学生 |         | 室尾和子         |
| 〃           |         | 松尾京子         |

学術調査診療団日程

昭和41年7月18日(月) おとひめ丸にて鹿児島出航

19日(火) 那覇着, 挨拶廻り, 鹿大沖繩親睦会

- 20日（水）今帰仁村に診療所設営，医学講演  
 21日（木）診療開始  
 22日（金）診療，沖縄歯科医師会参加フィラリア検血  
 23日（土）診療，フィラリア検血，医学講演会（名護）  
 24日（日）診療  
 25日（月）診療，今帰仁村役場にて報告会，琉球新報社主催報告会  
 26日（火）観光（戦跡廻り）  
 27日（水）薬品，器材整理，挨拶廻り，医学講演，通俗講演  
 28日（木）本隊ひめゆり丸にて那覇出航  
     久高島班は久高島へ  
 29日（金）本隊鹿児島着  
     久高島班，腸管寄生虫，フィラリア検血，血液型等の調査  
 30日（土）久高島一般住民検診  
     腸管寄生虫，フィラリア，血液型調査  
 31日（日）前日に全じ  
 8月1日（月）鏡検，資料整理  
 2日（火）那覇へ帰着  
 3日（水）琉球衛生研究所見学  
 4日（木）屋我地島愛楽園見学  
 5日（金）器材整理  
 6日（土）久高島班おとひめ丸にて那覇出港  
 7日（日）久高島班鹿児島着

受診者総数：4081名

| 診療科     | 受診者数  | 備            | 考 |
|---------|-------|--------------|---|
| 内科・小児科  | 1,254 | 男 532・女 722  |   |
| 外科      | 292   | 男 137・女 155  |   |
| 整形外科    | 407   |              |   |
| 産婦人科    | 114   | 産科 20・婦人科 94 |   |
| 皮膚泌尿器科  | 346   | 男 128・女 218  |   |
| 眼科      | 362   |              |   |
| 精神科     | 83    |              |   |
| フィラリア検血 | 1,223 |              |   |
| 総計      | 4,081 |              |   |

第3回派遣団員氏名

|     |         |             |
|-----|---------|-------------|
| 団長  | 鹿大附属病院長 | 宮崎 淳 弘      |
| 副団長 | 泌尿器科教授  | 岡元 健一郎      |
| 団員  | 神経科教授   | 佐藤 幹 正      |
| 〃   | 病理学教授   | 川路 清 高      |
| 〃   | 熱研教授    | 福島 英 雄      |
| 〃   | 第二内科講師  | 尾辻 義 人      |
| 〃   | 第二内科講師  | 東 達 郎       |
| 〃   | 第二内科講師  | 恒成 政 生      |
| 〃   | 第二内科医師  | 前田 忠        |
| 〃   | 第二外科医師  | 大坪 睦 郎      |
|     | 整形外科医師  | 大原 忠 行      |
|     | 小児科助教授  | 早川 国 男      |
|     | 耳鼻咽喉科講師 | 松村 益 美      |
|     | 眼科医師    | 園田 康 治      |
|     | 産婦人科講師  | 竹中 静 広      |
|     | 医学部学生   | 佐賀 庸 男 (専3) |
|     |         | 上田 博 章 (〃)  |
|     |         | 山口 淳 正 (〃)  |
|     |         | 古庄 弘 典 (〃)  |
|     |         | 古賀 繁 喜 (〃)  |
|     |         | 日高 恒 彦 (〃)  |
|     |         | 久保 秀 徳 (〃)  |
|     | 医学部学生   | 橋本 賢 二 (専2) |
|     |         | 宮沢 修 三 (〃)  |
|     |         | 毛利 通 宏 (〃)  |
|     |         | 一安 弘 文 (〃)  |
|     |         | 平安山 英 義 (〃) |
|     | 保健婦学生   | 松田 フユ子      |
|     |         | 森田 ツユ子      |

黒島診療班

|    |                 |
|----|-----------------|
| 団長 | 尾辻 義 人 (第二内科講師) |
|    | 竹中 静 広 (産婦人科講師) |

前 田 忠 医学部学生 (専 3)  
佐 賀 庸 男 " ( " )  
上 田 繁 喜 " ( " )  
久 保 秀 徳 " ( " )  
橋 本 通 宏 " ( " )  
町 田 勇 一 (南日本新聞記者)

#### 先発隊

佐 藤 幹 正 (精神科教授)  
多 田 功 (医動物学助教授)  
長 野 耕 二 (医動物学教室)  
今 井 淳 一 (長崎大, 熱研)  
吉 村 健 清 (九大, 公衆衛生学教室)

#### 看護学校学生

##### 那覇看護学校

名 嘉 真克子  
宮 良 香代子  
氏 嘉 保 子  
当 山 絹 子  
玉 城 美智子  
屋嘉部 節 子  
与那嶺 洋 子

##### コザ看護学校

当 銘 佐代子  
下 地 克 子  
棚 原 美智子  
仲宗根 ミサ子  
佐久田 文 子  
下 里 照

#### 学術調査診療団日程

昭和42年 7 月22日 (土) おとひめ丸にて鹿児島出航  
23日 (日) 那覇着, 診療打合せ, 鹿大沖繩親睦会  
24日 (月) 挨拶廻り, 器材, 薬品の運搬

- 25日（火）診療地（大宣味村）へ出発，診療所設営
- 26日（水）診療開始，政府のレントゲン車来る
- 27日（木）診療，フィラリア検血
- 28日（金）診療，フィラリア検血，慰問物資，交換作品贈呈
- 29日（土）診療
- 30日（日）午前中診療，村民との報告会，那覇へ帰着
- 31日（月）南部戦跡観光，黒島行の準備，一心会への招待
- 8月1日（火）黒島班石垣島へ出発，石垣島着，挨拶廻り
- 2日（水）黒島班，黒島へ出発
- 3日（木）黒島班診療設営，診療，本隊おとひめ丸にて那覇発
- 4日（金）本隊鹿児島着，黒島班診療
- 5日（土）診療
- 6日（日）診療，慰問物資の贈呈
- 7日（月）午前中診療，器材および薬品整理
- 8日（火）黒島出発，石垣島着
- 9日（水）石垣島一周観光，石垣島発，那覇着
- 10日（木）薬品の整理，梱包
- 11日（金）琉球新報社内検診，衛検でMf検鏡
- 12日（土）学生は屋我地の愛楽園見学
- 13日（日）薬品，器材の梱包，沖縄出身医学生との懇話会
- 14日（月）おとひめ丸にて那覇発
- 15日（火）鹿児島着

#### 4. 政府派遣沖縄学童検診

本土に比べ医療に比較的恵まれない沖縄の諸島へわが医学部が学術調査ならびに診療団を派遣したことは前記のとおりであるが，沖縄の学童が専門医によって体格検査を受けることも困難な事情に鑑み政府は九州五大学に依嘱し沖縄学童検診団を派遣することとなりわが医学部でも過去2回にわたり下のような医師を派遣している。

第1回 昭和41年度

眼 科 川 畑 隼 夫  
耳鼻咽喉科 窪 田 健 磨

小 児 科 豊 元 実 助

歯 科 浜 田 義 秀

第2回 昭和42年度

眼 科 川 畑 隼 夫, 内 田 洋 人

耳鼻咽喉科 江 川 俊 治, 曲 田 公 光

小 児 科 平 山 清 武, 鮫 島 信 一

歯 科 篠 原 寿 宏, 野 井 倉 武 憲

川 平 淳, 四 元 貢

## 5. 鹿児島大学医学部中華民国台湾省医学調査診療団派遣

亜熱帯圏内に多くの住民のすむ土地に設立された鹿児島大学医学部ではつとに熱帯医学研究の重要性を認識し、先に熱帯医学研究施設が設立されたことは周知のとおりである。本学部においては県内住民は勿論、遠く沖縄へ団員を派遣し熱帯医学的なことを中心に学術調査、診療を行って来たが、中華民国台湾省、台湾医学会よりの招聘および同省花蓮県よりの依頼にもとづき、鹿児島大学医学部より学術調査団を派遣して山地住民を中心とした診療ならびに医学的調査を実施し多大の成果を得た。次に団員氏名および一行日程の概略を記す。

### 団員構成

団 長 佐 藤 八 郎 (医学部長, 第二内科教授)

副団長 北 原 経 太 (衛生学教授)

団 員 佐 藤 幹 正 (神経精神科教授)

平 野 清 寿 (細菌学教授)

森 一 郎 (産婦人科教授)

寺 脇 保 (小児科教授)

福 島 英 雄 (熱研教授)

尾 辻 義 人 (第二内科講師)

西 村 基 (第二外科講師)

種子田 哲 郎 (第二内科講師)

平 山 清 武 (小児科講師)

浜 田 義 彦 (歯科講師)

王 昭 懋 (産婦人科医師)

実地習練生 劉 朋 慶, 黄 步 寛

学生 佐賀庸男，毛利通宏，上田博章

調査診療団日程

昭和42年10月26日（木）先発隊鹿児島発，台北着（空路）

27日（金）荷物受取

28日（土）花蓮へ出発

29日（日）花蓮にて打合せ診療所設営

30日（月） ”

31日（火） ”

11月1日（水）台北へ旅行

2日（木）本隊鹿児島発，台北着（空路）

3日（金）挨拶廻り，打合せ

4日（土）花蓮へ出発

5日（日）花蓮にて診療

6日（月） ”

7日（火） ”

8日（水） ”

9日（木）診療終了

10日（金）台北へ出発

11日（土）台湾医学会出席

12日（日） ”

13日（月） ”

14～16日 台湾省内医学事情調査

17日（金）台北発，鹿児島着

受診者総数：2333名

内科，外科，小児科，神経科，婦人科，歯科 991名

学童検診（小児科，歯科） 1342名

# 第十二章 集談会、熱帯医学研究会



# 鹿児島医学集談会

## 第15回

1. 大腿骨上部遷延治癒骨折の一例  
河野外科 岩 倉 正 矩  
医専整形外科 川 原
2. 術後性上顎嚢腫の一例  
医専耳鼻科 伊 集 院 健
3. 強直関節に対する関節成形術に就て  
医専整形外科 若 松 大
4. 上肢下肢特発性脱疽に対する交感神経節前繊維切除例追加  
医専外科 竹 内 三 郎
5. 小麦藁中の駆虫有効成分に関する研究（第1報）  
医専医化学 大 保 不二夫、入 来 典
6. 薬物の吸収に就ての実験的研究（第1報）  
医専薬理 小 島 喜久男、肥 後 勇、松 崎 吉 彦
7. 昭和22年度吾教室に於ける胆嚢炎及び胆石症の手術成績  
医専外科 内 山 八 郎、永 田 豊 作
8. 高血圧患者の眼底種々相  
医専眼科 高 安 晃
9. 選択的胸廓成形術の二治験例  
医専外科 永 田 豊 作、永 井 利 男

## 第16回 昭和23年3月27日

- 1 「あめろぶらすとーむ」の一例 医専歯科 中村 勲
- 2 逐時尿道分泌物検査法によるペニシリン治効の検討  
医専皮膚科 永 吉 浩
- 3 急性淋巴腺白血病と虹波 国立病院内科 赤沢可賀士
- 4 蛔虫に因する腸閉塞症の四例 鹿児島市 今給黎 満 幸
- 5 「マフアゾール」注射後の黄疽死例 市立病院内科 三 宅 雅 人
- 6 胃潰瘍の出血持続中に発生せる胃穿孔の胃切除による一治験例  
鹿児島市 八反丸 哲 夫

- 7 先天性後鼻腔狭窄症を伴える鼻腔黒色癌腫症例  
医専耳鼻科 野坂保次, 浜崎直哉
- 8 糖尿病の温気治療に就て 医専内科 佐藤八郎  
特別講演「温泉治療の臨床経験」 医専校長 高安慎一

第17回 昭和23年5月22日(土)

1. 昭和23年度に於ける気管枝喘息に対する頸動脈球摘出術の成績 抄録  
医専外科 内山八郎, 小田原得二
2. 硫酸銅法に依る血液比重の測定について 抄録  
医専第二内科 橋本修治
3. 亜急性淋巴性白血病の一臨床例  
医専第一内科 甲斐信夫
4. 急性淋巴性白血病症例追加 医専第二内科 佐藤八郎
5. 複合性後腹膜皮様囊腫一治験例  
医専外科 内山八郎, 持松文彦
6. 昭和21・22年度に於ける整形外科的疾患の統計的観察  
医専整形外科 若松大
7. 腹腔内に発生せる「セミノーム」の一例並標本供覧 山下 憲
8. 血液凝固に関する研究 医専医化学 大保不二夫
9. 回虫の民間薬 国立病院 岡谷良武
10. PH 測定による定規液作法 医専生理 松本保久

第18回 昭和23年9月25日(土)

1. 尿反応による疲労の研究 医専薬理 田中藤一郎
2. 皮膚の電気抵抗とPH  
医専生理 松元保久, 下川辺舜一
3. 配給糖中のだに属について 医専衛生 北原経太
4. 半身不随側に於ける運動刺戟症状に就いて 鹿児島市 植村上
5. 肺結核患者の皮下脂肪じよく厚について  
医専解剖 長正雄
6. 特発性脱疽の療法 医専外科 滝井慶一
7. 肺臓の弾片摘出例 医専外科 種田秀二郎
8. 回虫迷入に依る肝膿瘍二例 医専外科 持松文彦

9. 興味ある経過をとれる肝硬変症の一例  
国立病院 今村 義秀
10. 今夏当院に収容せる日本脳炎に就いて  
国立病院 大久保 実義
11. 色素凝結保護能力示差に依る学童の疲労に就いて  
医専小児科 淵上 勝男
12. フィラリアの熱発作に対する薬物の影響  
医専皮膚科 永吉 浩
13. 鹿児島医専離島巡回診療報告 医専第二内科 佐藤 八郎

第19回 昭和23年10月23日(土)

1. 尿反応に依る疲労の研究(第2報) 医専薬理 田中 藤一郎
2. ロイマチス性関節炎に続発せる小舞蹈病治験例  
医専小児科 淵上 勝男
3. 淋肉芽腫の一例 医専第二内科 米沢 藤士
4. 健康人のマイクロフィラリアの検出に就いて 医専皮膚科 永吉 浩
5. レチオの治験 医専皮膚科 下稲葉 耕作
6. 某集団の栄養調査 医専第二内科 押領司 源一, 橋本 修治
7. 偽性脳腫瘍の症例 医専外科 持松 文彦
8. メッケル氏憩室炎症例 医専外科 窪田 勇
9. 椎弓固定術前後に於ける血中カルシウムの消長及血液比重の変動に就いて  
医専整形外科 若松 大君
10. 鞏皮症の一例 医専第一内科 泊 嘉乃夫
11. 膜様包くわの症例 市医師会 朝隈 潤二
12. 焦性葡萄糖定量による脚気診断及肝機能検査に就いて  
医専第二内科 佐藤 八郎、瀬分 満夫、有馬 俊典

第20回 昭和23年11月20日

1. 皮膚の電気抵抗とPHに就いて 医専生理 下河 辺舜一
2. 尿の緩衝能に就いて 医専生理 松元 保久
3. 進行性筋萎縮症の一例 国立病院 赤沢 賀士
4. 尿反応による疲労の研究(第3報) 医専薬理 田中 藤一郎
5. 「スルファミン」と硫黄剤特に硫苦との併用の可否に就いて  
医専薬理 小島 喜久男、月野 万里子

6. カラアザール病原体「レイミニマニア」の培養標本供覧  
医専第一内科医局
7. 肝属郡新城村に於ける「ミクロフィラリア」の調査  
医専予防医学 長 花 操、貴 島 亨、宮 田 典 男  
宮 下 秀 隆、中 監 一
8. 川辺郡笠知町に於ける「ミクロフィラリア」の調査  
医専予防医学 長 花 操、山 元 典 雄、橋 口 兼 英  
石 上 英 昭、簡 富 雄、児 玉 一 幸
9. 県下の「フィラリア」は減少しつつありや  
医専予防医学 長 花 操
10. 人体囊虫症の一例 医専第二内科 米 沢 藤 士
11. 瓦斯壊疽血清（腹膜炎血清）に就いて  
医専第二内科 柿 原 義 広
12. 胸廓成形術後の血沈体温体重の推移に就いて  
医専第一内科 松 元 壮 雄

第21回 昭和23年12月18日

1. 股関節体について 医専解剖 大 森 浅 吉、長 正 雄
2. アメーバ性赤痢の一例並びに赤痢アメーバ携帯者の一例  
医専予防医学 長 花 操
3. 「フェノチアゼン」の蛔虫に対する駆虫効果について  
医専第二内科 有 馬 俊 典
4. 鹿児島県下に於ける盲人検診成績について  
医専眼科 高 安 晃、松 元 俊 雄、柿 真 弥  
福 沢 英 子、井 後 吉 久
5. 離島学童の栄養について  
医専第二内科 佐 藤 八 郎、米 沢 藤 士、有 馬 俊 典

第22回 昭和24年1月23日

1. 「ヒロドヒノン」及「メトール」混合物に依る中毒症例に就て  
医大第二内科 瀬 分 満 夫
2. 胃癌胃潰瘍の胃曲線診断について 医大第二内科 植 村 芳 郎
3. 気温の赤血球沈降速度に及す影響に就て  
医専病院病理試験室 若 村 大、田 畑 ツマ子

4. 白血病性網膜炎を思わせる一例 眼科 柳 真 弥
5. ゆう贅の治療 皮膚科 丸 田 実 行, 阿世知 節 夫  
有 川 富 康
6. 一駆虫剤の効力に関する二, 三の因子に就いて  
薬理 肥 後 勇、松 崎 吉 彦
7. 興味ある卵管卵巣妊娠の一例について  
医専産婦人科 堀 添 善 可
8. 戦後マラリアの流行を来した鹿児島県南薩地方の其の後の状況  
医大第二内科 佐 藤 八 郎、橋 本 修 治、尾 辻 義 人
9. 撫順硫酸工場員の亜硫酸「ガス」に因る歯科領域の変化に就いて  
歯科 副 島 侃 二

第23回 昭和24年 2月26日(土)

1. 桜島に於ける班状歯に就ての研究 (第1報)
  - ① 班状歯の研究歴史 歯科 副 島 侃 二
  - ② 東桜島村持木町尻両部落に於ける班状歯に関する諸検索 (其の一)  
歯科 河 野 通 彬、浜 崎 栄 郎
  - ③ 東桜島村持木町尻両部落に於ける班状歯に関する諸検索 (其の二)  
歯科 上 脇 英 雄
2. 桜島学童の皮下脂肪厚に就て  
小児科 田 中 尚 義、淵 上 勝 男
3. 鼻腔黒色腫の一例 耳鼻咽喉科 花 牟 礼 八 十 一
4. 椎間軟骨「ヘルニア」及び黄靭帯肥厚による根性坐骨神経痛に就て  
医専整形外科 若 松 大
5. 術後消化性空腸潰瘍に対して行える広汎性胃腸切除術及迷走神経切断術による治験例 外科 内 山 八 郎、竹 内 三 郎
6. 最近に於けるサルモネラ菌属研究の進歩とこれが臨牀的領域に於ける応用  
広 木 彦 吉
7. 尿緩衝能による疲労の側定 薬理 田 中 藤 一 郎
8. 圧痛点の薬理学的研究 薬理 肥 後 勇、松 崎 吉 彦
9. 肝機能検査法としての昇汞反応の価値 (抄録)  
医大第二内科 佐 藤 八 郎、橋 本 修 治
10. 労働災害の種々相 市医師会 河 野 精 一

第24回 昭和24年3月26日(土)

1. 桜島に於ける班状歯の研究第二報 齒科 上 脇 英 雄  
濱 崎 栄 郎
2. 梅毒のマフアルゾール療法 皮泌科 岡 元 健一郎  
下稲葉 耕 作
3. 幽門狭窄症状を呈する蛔虫症例に就いて  
医専第二内科 押領司 源 一
4. 脊椎カリエスに対する脊椎癒着術前後に於ける血清中カルシウム含有量の  
消長及び血液比重の変動に就いて 整形外科 若 松 大
5. 簡易試視力計の試作に於いて 生理 松 元 保 久
6. 鹿児島市内蚊幼虫の越冬状況 公衆衛生 北 原 経 太
7. 肋膜癒着焼切術の合併症に就て 第一内科 松 元 壮 雄
8. 副鼻腔纖維血舌腫の一例 耳鼻科 田之上 政 豊
9. クプリフェロジアニド膠質溶液の沈降反応について  
医化学 大 保 不二夫、徳 永 益 美、亀 甲 大
10. 血漿ゲルに於けるリーゼガング氏現象に関する研究(第二報)主に血清分離  
の阻止について 医化学 大 保 不二夫、坂 本 春 成

第25回 昭和24年5月28日

1. 腎筋膜に就いて 解剖 石 田 弘
2. 「カラアザール」の一症例に就て  
医大第二内科 瀬 分 満 夫
3. 桜島に於ける班状歯の研究 飲料水中の弗素の検索方法に就いて  
齒科 上 脇 英 雄
4. インフルエンザ・ヴィールスに関する実験的研究, 特に動物接種試験の新  
知見 細菌 広 木 彦 吉

第26回 昭和24年6月25日

1. 虚弱児童の諸種検索(第四報) 血液像に就いて  
医大小児科 田中 尚義, 淵上 勝男
2. 喉頭結核患者の喉頭計測 医大耳鼻科 田之上 政 豊
3. モナフラシンの皮泌科領域に於ける応用  
医大皮膚科 尾 辻 清 彦, 阿世知 節 夫

4. 桜島に於ける班状歯研究 医大歯科 上 脇 英 雄, 浜 崎 栄 郎
5. メチレン青皮内反応の臨床的意義 医大整形外科 若 松 大
6. 家族性血性貧血の一例 医大第一内科 鍋 倉 正 義
7. チフス・パラチフス菌属(*Salmonella*)菌属の症候群 鼠チフス菌  
(*S. typhi nmusium*)の感染病像に就いて (第1報)  
医大細菌学教室 広 木 彦 吉
8. 最近の眼科治療方面 医大眼科 高 安 晃

第27回 昭和24年10月1日

1. 南西諸島回り 歯科 上 脇 英 雄
2. 「メチル, サイオユラシール」による「バセドウ」病の治験  
第二内科 柚 木 一 雄、福 島 英 雄
3. 乳糜尿診断補遺 皮泌科 永 吉 浩
4. 非特異性副睾丸について 皮泌科 岡 元 健一郎
5. 尿及唾液中の「ヨードカリ」定量 医化学 大 保 不二夫  
大 迫 六 郎
6. 皮膚のPH測定に関する研究 (第1報)  
皮膚(人体表面)の水素「イオン」濃度簡易測定法  
生理 田 中 藤一郎、下河辺 舜 一、松 元 保 久

第28回 昭和24年11月12日(土)

1. 救急療法としての動脈注射に就いて 小児科 淵 上 勝 男
2. 皮膚科領域に於けるレスタミンの治験 皮膚科 尾 辻 清 彦
3. 桜島に於ける班状歯の研究 (第5報) 歯科 上 脇 英 雄
4. 各種疾患に於ける血液循環時間に就いて 外科 若 松 大
5. 結核性疾患の血清昇汞反応と血漿蛋白に就いて  
第二内科 橋 本 修 治
6. 診断困難なりし慢性骨髓性非白血病に就て 第一内科 鍋 倉 正 義
7. 鍼術によって起った自然気胸の一例 第一内科 鍋 倉 正 義
8. 皮膚表面のPH (第2報) 生理 松 元 保 久、田 中 藤一郎
9. 鬱病の症状を呈し死後剖検により前頭部脳腫瘍と判った一例に就いて  
国立病院 岡 谷 良 武、馬 場 弘

第29回 昭和24年12月17日

1. 慢性一酸化炭素中毒症の一例について 第二内科 中村文重
2. 摘出養心臓灌流の「リングル氏液」 生理 松本保久
3. 発疹チフス及び発疹熱疾毒動物感染試験に関する新しい知見  
細菌 広木彦吉
4. 十島村に於ける「フィラリヤバンクロクチー」のクアカヤ調査成績  
皮膚科 永吉 浩
5. 赤血球の抵抗について 医化学 大保不二夫、山下郁也
6. 尿及び唾液中に於ける次亜硝酸について  
医化学 大保不二夫、三島実則
7. 尿及び唾液中の沃化物の定量及び排泄について  
医化学 大保不二夫、勝目己郎

第30回 昭和25年2月18日

1. 2, 3 癌反応について 医大第二内科 柚木一雄
2. 昭和42年秋硫黄島に流行した感冒様疾患について  
医大第二内科 植村芳郎, 片平勝郎
3. 十島村衛生状況調査報告  
医大公衆衛生 北原経太, 日高健郎
4. 黒島における恙虫の一種 医大公衆衛生 北原経太
5. 学童衣服調査 医大公衆衛生 北原経太, 日高健郎
6. 眼症状を呈したる上顎骨膜炎の一例 医大歯科 浜崎栄郎
7. 温泉飲用の利尿に及ぼす影響 医大温研 徳重敏夫
8. 澱粉吸着による沃度の一新定量附沃度加里排せつに関する研究 (補遺)  
医大医化学 大保不二夫, 勝日卓郎
9. 人工気胸と肋膜自然剝離  
国立病院 岡谷良武, 万年常夫(欠席)
10. バビンスキー (第3報) 鹿児島市 植村上

第31回 昭和25年6月10日

1. 癌キユルテン反応に対する一考察 医大第二内科 柚木一雄
2. 血清昇汞反応と血清蛋白との関係 医大第二内科 橋本修治
3. 脳下垂体性悪液質(?)の一例 医大第一内科 鮫島実俊

4. 血清高田氏反応と血清コバルト反応との比較  
医大第一内科 樋谷 巖
5. 鹿児島地方における赤痢菌属及び「サルモネラ」菌属伝染源に関する調査（第1報）鹿児島市内にて捕獲せる鼠族の保菌状況について  
医大細菌 土井, 大原, 益田, 若松, 西, 赤間, 藤井  
（第2報）鹿児島市において屠殺された牛及び豚の保菌状況について  
医大細菌 土井, 若松, 大原, 益田, 西, 赤間
6. 「サルモネラ」菌属抗原を保有する大腸菌属について  
医大細菌 西, 大原, 益田, 若松
7. 各種動物より検出せる大腸菌属の生物学的分類に関する知見（補遺）  
医大細菌 益田, 大原, 若松, 野浅
8. 淋菌を以てせる全血液内培養法について（予報）  
医大細菌 大原, 益田
9. 東亜で始めて検出された所謂 **Salmonellakanpa** の知見例  
医大細菌 広木, 野添

第32回 昭和25年12月9日

1. 弗素による齲蝕予防の基礎的研究
  - A. 斑状歯地域と非斑状地域学童の口腔液中有形成分の検討  
医大歯科 下原 朝光
  - B. 黒神部落に於ける弗素源の一検索 医大歯科 上脇 英雄
2. フィラリア病の生化学的血液所見について  
医大医化学 末広 泰祐
3. スパトニンによるフィラリア症の治療について  
医大第二内科 佐藤 八郎, 米沢 藤士  
福島 英雄, 尾辻 義人
4. S.c.c. 法に於ける抗結核剤及び疲労による血液内菌増殖阻止力の影響  
医大整形外科 日高 保志
5. 尿路結核におけるコンテーベンの治験  
医大泌尿科 下稲葉 耕作, 阿世知 節夫
6. Benzylimidalin の胃機能に及ぼす影響  
医大第二内科 植村 芳郎, 土持 絹, 市来 一彦
7. 外科領域に於ける必須アミノ酸（マリアミン）使用成績

医大外科 竹内 三郎

8. トラコーマの臨床的研究 医大眼科 高安, 榊, 大牟田

第33回 昭和26年1月29日

1. ロイマ皮内反応の試み 医大霧島温研 徳重 敏夫
2. 尿に関する物理化学的実験(1)  
医大生理 松元 保久, 肝付 兼顕
4. 脊髄性小児麻痺による上肢弛緩性痺麻の治験例  
医大整形外科 日高 保志
7. バスの体液中濃度定量法の一考案 医大 第二内科 有馬 俊典
8. Tebenの治癒効果 星塚敬愛園、大西 基四夫, 福田 実
9. プロミンによる癩の治療成績について 星塚敬愛園、塩沼 英之助  
松田 ナミ, 大西 基四夫, 永井 よし  
石原 武, 円田 俊二, 福田 実

第34回 昭和26年2月24日

1. 特発総輸胆管拡張症の二例 医大外科 鬼丸 高寿
2. 人工気胸滲出液の臨床的観察 医大第一内科 鍋倉 正義
3. 骨関節結核症と胸部レントゲン像所見との関係について  
医大整形外科 春田 虎三郎
4. 癌組織抽出物のマウス血液像, 血液, 肝臓及び脾臓カタラーゼに及ぼす影響  
医大第二内科 柚木 一雄
5. 引揚学童の身体発育について 医大小児科 田中 尚義
6. 肺結核に対する肺注射療法(肺注供覧)  
指宿療養所 桑原 光雄
7. 沃度法によるアミノ酸の新微量定量法について  
医大生化学 大保 不二夫, 坂本 春成, 若松 親憲

第35回 昭和26年4月28日

1. 尿素による血清分離の阻止作用について  
医大生化学 大保 不二夫, 坂本 春成
2. 健康成人血中及び尿中ビタミンB<sub>2</sub>含有量  
医大第二内科 中馬 康男
3. 胸部食道癌切除術に就いて 医大外科 竹内 三郎

4. 尿に関する物理化学的実験（第2報），発育とCreatinineとの関係
5. 猫いらず中毒「骨髄中毒症」を併発せる中毒性肝炎  
医大第一内科 榎屋 富一，鍋倉 正義，鮫島 実俊
6. 脳波の書き方見方とその臨床的応用について  
医大外科 河井 時義
7. 弗素に依る齶蝕予防の基礎的研究  
医大歯科 副島 侃二，下原 朝光  
上脇 英雄，浜崎 栄郎，野添 武二

第36回 昭和26年5月26日

1. 脳下垂体移植による高血糖性糖尿病の臨床例  
医大第二内科 有馬 俊典
2. トリコモナス腔炎の研究（第1報）モノフラシン療法  
医大産婦人科 森 一郎，松元 重達
3. 最近5年間の吾が教室外来骨折患者の統計的観察  
医大整形外科 久保田 仁志
4. 中毒性肝炎の臨床（第2報）疸毒症の治験例  
医大第一内科 榎屋 富一，九大第三内科 安藤 精弥
5. 肝膿瘍の4例 医大外科 小田原 得二
6. 吾が教室に於ける肺結核手術時の血しょうたん白肝機能検査及び血量測定  
成績 医大外科 竹内 三郎，鮫島 潤，池平 博  
綜説講演  
推計学に基づく実験と検査 医大公衆衛生 北原 経太

第37回 昭和26年6月30日

一般講演

1. 肩関節嚢第一周囲筋膜について 医大第一解剖 永山 武章
2. 円形脱毛症の統計的観察並に治療 医大皮泌科 遠矢 東洋
3. 先天性小腸膜様包囊の一例 医大第一解剖 西山 幹男

綜説講演

1. 第6改正日本薬局方について 医大薬理 小島 喜久男  
CPC（臨床と基礎の会）

第38回 昭和26年9月16日

一般講演

1. 発育期のクレアチンの排泄量について 医大生理 肝 付 兼 顕
  2. 重複腎盂兼重複輸尿管症の一例について  
医大第二内科 中 馬 康 男
  3. 7日間昏睡を呈せる胆毒症の治験  
医大第一内科 鍋 倉 正 義, 大 園 勝 美
  4. 妊娠診断の一新法 (Qテスト変法)  
医大産婦人科 森 一 郎, 辰 元 浩, 竹 内 昭 雄
  5. 昭和21年以降5ヶ年間に於ける日本脳炎の発生状況について (主として疫学的観察) 県衛生部予防課 村 山 力
- 第6回 C. P. C. 主 訴, 眩 暈

第39回 昭和26年12月22日

1. 周期性波動呼吸について  
医大薬理 山 下 利 博
2. 胃運動機能と自律神経, 特に自律神経遮断剤について  
医大第二内科 植 村 芳 郎

第40回 昭和27年1月26日

1. トラコーマ集団治療成績 医大眼科 榊 真 弥
2. 急性睡眠剤 (アドルム) 中毒に対するグルクロン酸の解毒効果  
医大第二内科 有 馬 俊 典

第41回 昭和27年2月23日

1. B-グルクロナダーゼに関する研究 (第1報)  
医大第一内科 喜屋武 朝 章, 福 山 昭 男
2. 放射後? 白血病3例 医大第一内科 鍋 倉 正 義  
放射線科 久 留 克 己

第42回 昭和27年3月22日

1. クレアチニン生成に関する研究 医大生化学 大 保 不二夫
2. 副腎粗大神経支配に関する解剖学的研究 (第1報)  
医大第一内科 鬼 丸 高 寿
3. 瘤尿中の毒性物質の証明

医大第二内科 柚木一雄, 瀬口康朗

4. 肝左葉摘出に成功せる原発性肝癌の一例 医大外科 持松文彦
5. 感光色素の生物学的作用本態に関する蛍光学的作用 (第1報)  
医大法医 間世田 秀之助
6. モノクローナル白血病の検討  
医大病理 福沢勝彦, 山之内力, 橋口俊照,  
中園喜八郎
7. ギランバレー氏症候群について  
医大小児科 永山徳郎、西 健一郎

第43回 昭和28年9月26日

1. 動脈瘤破裂3例並に瘤嚢摘出一治験例について  
医大外科 鮫島耕一郎, 若松道範, 尾辻達志
2. 甲状腺腫瘍の組織学的研究 医大病理 橋口俊照
3.  $\beta$ -グルクロニダーゼに関する研究 医大第一内科 喜屋武朝章  
医大第二内科 貴島 亭
4. コナダニ類摂取人体実験 医大公衆衛生 北原経太
5. 心内伏針の一例 医大外科 若松 大, 尾辻達志  
今村健二郎
6. フィラリア症の血液学的研究 (第1報)  
末梢血液像及び仔虫の骨髓内出現  
医大第一内科 榊屋富一, 鮫島実俊  
医大第二内科 尾辻義人
7. 脳下垂体移植102例について (特に網膜色素変性症治療成績の検討)  
医大眼科 高安, 松元, 伊佐敷, 榊, 井後, 川野, 福沢, 谷口,  
大牟田, 福島, 松田, 田ノ上, 山口, 大重
8. 遺伝性痙直性脊髄性麻痺と思われる一例  
市立病院 米倉秀雄
9. 種子島巡回診療の報告 医大第二内科 佐藤八郎  
医大公衆衛生 北原経太外, 医師 3名, インターン 2名,  
学生 4名

第44回 昭和29年6月26日

一般講演

1. 放射能雨による影響 医大生化学 友 広 嘉 久
  2. アイソトープ  $P_{32}$  に関する二、三の研究業績と放射能雨の動物試験報告  
医大衛生 西 尾 一 男
  3. 組織呼吸と酸化還元物質 医大生理 河 田 真 雄
- 綜説講演  
皮膚泌尿器系に於けるフィラリア糸状虫症 医大皮泌科 岡 元 健一郎

第45回 昭和30年1月29日

1. フィラリア症の末梢血リンパ球ミトコンドリアについて  
医大第一内科 津 崎 文 雄
2. 無胃性貧血の還元鉄レモン汁投与による一治験例  
医大第一内科 桶 谷 巖, 門 田 光二郎
3. アダムス, ストークス氏症状を呈せる洞房ブロックの一例  
医大第二内科 柚 木 一 雄
4. 鹿児島における沸素を含有する飲料水の分布調査 (第1報)  
医大歯科専攻生 酒 匂 睦 夫
5. 腎糸球体の数と大きさの測定について 医大第二解剖 佐 藤 堅
6. アロキサン糖尿病ラット肝中Pについて 医大第二内科 瀬 分 満 夫  
山之内 融
7. 内分泌相関について (各種内分泌臓器の正常組織呼吸(予報))

鹿児島大学医学部集談会

第1回 昭和39年3月14日

婦朝報告

世界一周 (第1報) 北米及びスペイン (映画) 衛生 北 原 経 太

特別講演

小児赤痢の研究から (就任演説) 小児科 寺 脇 保

一般講演

1. 肝性脳症とアンモニア代謝 第二内科 恒 成 政 生
  2. 小児科教室一年間の臨床から 小児科 寺 脇 保  
小児科 平 山 清 武
- ハブ毒に関するシンポジウム 第二内科 佐 藤 八 郎

1. ハブ咬傷後に発生せる病的関節遊離体の一例

整形外科 松元四郎, 植松忠雄, 大原中行  
池之上邦彦

2. ハブ毒の毒量測定について 熱研上床賀子
3. ハブ毒の電気泳動法的分離及び分離蛋白質の性質に関する検討  
第二内科 佐藤八郎, 高木茂男, 鷗木春海  
平川嘉久, 与儀昌夫
4. ハブ毒の致死量に及ぼす性ホルモンの影響について  
産婦人科 善平朝友
5. ハブ毒中に存在する細胞呼吸阻害物質について  
生化学 満留敏弘, 大保不二夫
6. ハブ毒トキソイドの薬理 (第1報)  
薬理 小島喜久男, 藤崎正, 中村佐吉
7. ハブ毒症の病理学的研究  
第一病理 川路清高, 橋口俊照, 藤瀬隆幸  
鷗木春海, 富永功一, 松浦俊介
8. 局所灌流法によるハブ咬傷治療の研究 (予報)  
第二外科 秋田八年, 尼子春樹, 劉昌慶  
福田明恒, 芝野康一, 平明

第2回 昭和39年4月18日

C. P. C.

1. 視力障害, 発熱, 黄疸

第3回 昭和40年2月20日

一般講演

1. 胸腺抽出物投与による重症筋無力症様症状の発現 (8 mm映画による)  
第一生理 河田真雄
2. Adams-Stokes 症候群の痙攣発作の発生機序に関する研究  
第一内科 新村健
3. 担癌動物における Porphyrin 代謝に関する研究  
第二内科 前田俊二
4. 人糞線虫症治療法の一新知見 医動物 田中寛
5. 宮崎肺吸虫の精子形成過程の電子顕微鏡的観察  
第二解剖 佐藤堅, 迫田欽一

留学研究報告

7, 12DMBA に関する病理 第一病理 福 西 亮

教授就任講演

南九州の肺癌, その病理と疫学 第二病理 遠城寺 宗 知

シナプス前抑制について 第二生理 橋 村 三 郎

#### 第 4 回 昭和40年 5 月22日

シンポジウム 胃癌, 最近の進歩

1. 日本に於ける胃癌の現状 第二内科 佐 藤 八 郎
  2. 正常胃底腺細胞およびヒト胃癌細胞の微細構造  
第二解剖 佐 藤 堅
  3. 実験的胃腫瘍 第一病理 福 西 亮
  4. X線映画による胃癌の動態観察 放射線科 篠 原 慎 治
  5. 胃癌の内視鏡像 第二内科 大 山 治 史
  6. 胃直視下生検について 第二内科, 第二病理 渋 江 正
  7. 胃生検に必要な胃癌の病理 第二病理 遠城寺 宗 知
  8. 胃癌胃液中の高分子性物質特に酵素像の変動 第二内科 柚 木 一 雄
  9. 教室における下部食道噴門癌, 胃癌の外科
    - 1) 制癌剤局所注入ブロック法について 第一外科 大 山 満
    - 2) 手術々式について 第一外科 加 治 佐 隆
- 追加 1. 二重造影法について 第二内科 政 信 太 郎
- 追加 2. 広範な転移と類白血病様反応を示した胃癌の 1 例  
第一内科 石 神 稔 郎, 林 茂 文  
第一病理 寺 師 恒 一、東 襄

#### 第 5 回 昭和40年10月16日

一般講演

1. 心的負荷のカテコール体代謝に及ぼす影響についての研究  
第一内科 小 川 卓 爾
2. 心的負荷の 2, 3 生体機能に及ぼす影響についての研究  
第一内科 竹 田 精 士
3. 離島隔離集団の研究 (映画)  
小児科 寺 脇 保, 平 山 清 武, 今 村 正 人

大 堂 床 三, 土 屋 高 夫

中央写真室 山 下 沢 夫

婦朝報告(映画供覧) 衛 生 北 原 経 太

助教授就任講演

1. 糞線虫の研究 医動物 田 中 寛
2. 「肺」 第一解剖 浜 田 良二郎
3. 最近の口腔外科臨床から 歯科 山 下 佐 英
  1. 顎, 顔面, 口腔領域における形成外科について
  2. 口腔癌とその転移について
4. 臨床検査のあり方について 中央検査部 尾 辻 省 悟

第 6 回 昭和40年12月 7 日

就任講演

1. 頸部胸管結紮の続発現象について  
耳鼻咽喉科 講師 松 村 益 美
2. 航空中耳炎に関する臨床的ならびに実験的研究  
耳鼻咽喉科 講師 江 川 俊 治
3. 早期胃癌の診断 第二内科 講師 種子田 哲 郎
4. 婦人における Testosterone の代謝  
産婦人科 教授 森 一 郎
5. 欧米視察談(映画およびスライド供覧) 第一生理 松 本 保 久

第 7 回 昭和41年 2 月23日

就任講演

1. Valsalva 洞動脈瘤破裂 第二外科 講師 西 村 基
2. 産科婦人科領域の体腔および体表温について  
産婦人科 講師 家 村 邦 重
3. 皮膚科と線溶系 皮膚科助教授 田 代 正 昭
4. 顎骨骨折について 歯科 教授 塩 田 重 利

第 8 回 昭和41年 6 月 1 日

就任講演

1. 前立腺亜鉛に関する研究 泌尿器科助教授 斉 藤 宗 吾

2. 全身麻酔による代謝異常 中央手術部助教授 吉 武 潤 一
3. 最近の梅毒の二、三の問題について 皮膚科教授 皆 見 紀久男

第9回 昭和41年10月27日

就任講演

1. リケッチア感染における Host-Parasite Relationship  
細菌助教授 南 嶋 洋 一
2. 発癌物質と核酸の相互作用 生化学助教授 森 沢 成 司  
婦朝報告(8mm映画供覧) 眼科教授 高 安 晃

第10回 昭和42年2月23日

一般講演

1. 低頻度連続刺激法 シナプス伝達に関する新しい解析法  
第二生理 前 野 巍
2. 動脈硬化症に対する血管外科の手術症例の検討  
第一外科 内 山 八 郎, 上 山 幹 夫, 立 和 田 亘,  
今 村 壯 太, 相 良 吉 勝, 竹 迫 堅之助,  
増 田 好 治, 小田代 憲 一, 肝 付 兼 達,  
相 良 有 一, 橋 口 良 紘, 永 田 政 幸
3. 家族性腎炎の一症例 小児科大学院 永 田 良 隆

就任講演

1. ウェルシュ菌ファージとウェルシュ菌の産生する bacteriocin 様物質について 細菌 講師 今 村 禎 祐
2. 情動性疾患の精神生理生化学的背景 第一内科講師 川 明
3. 「フィラリア症における皮内反応」 医動物助教授 多 田 功

# 熱帯医学研究会

昭和25年初め下記の様な案内状が配布され風土病研究会は呱呱の声をあげた。

## 鹿児島県風土病研究会案内状

拝啓 冬寒の砌御変わりもなく御過しの事と拝察致します。扱此の度本県風土病の撲滅を図る為同好の士相寄り「鹿児島県風土病研究会」を結成致すことになりました。

尚発会式並びに第1回講演会（演題別紙）を左記に依り開催致します。

### 記

日時 3月4日(土)午後1時

場所 大学病院講義室

右取急ぎ御願ひ旁々御案内申し上げます。

匆々

昭和25年2月25日

鹿児島県風土病研究会

発起人 町野碩夫

長野祐憲

長花操

副島侃二

佐藤八郎

## 鹿児島県風土病研究会演題

1. 西南諸島のフィラリア症の調査  
医大第二内科 植村芳郎、福島英雄、黒肱敏郎
2. フィラリア症の生化学的検索（第1報）  
医大第二内科 福島英雄
3. 教室に於けるフィラリア症の研究経過  
医大皮泌尿科 岡元健一郎、永吉浩
4. 鹿児島県のフィラリア症に就いて 医大第二内科 佐藤八郎
5. 県内諸地に於けるフィラリアの浸淫状況  
医大予防医学 長花操、山下博
6. 接種マラリア患者の末梢血並に骨髓穿刺標本 医大第二内科

7. マラリア研究の思い出 鹿児島市 有馬 巖
8. 大複殖門糸虫寄生の一例 鹿児島市 大磯 友明, 前田 実光
9. 薩摩地方に流行する所謂秋疫後の眼症状について  
薩摩郡入来町 増田 義哉
10. 桜島の斑状歯とこれが実際応用方面の諸問題  
医大歯科 副島 侃二
11. 鹿児島県人の体格とその發育について  
医大第一解剖学教室 大森 浅吉, 田中 尚義
12. 枯草病について 始良郡福山脳病院 松下 兼知
13. 小児科領域に於ける不明熱について 医大小児科 長野 祐憲
14. 笠沙町及び新城村に於けるフィラリアの伝播蚊の種類  
医大予防医学 長花 操
15. フィラリアの防遏 医大予防医学 長花 操

このようにして昭和25年3月4日に開かれました鹿児島県風土病研究会はその後、毎年春秋の2回開かれ本県の風土病研究発表の場として大いに研究推進上役立ち、昭和34年より鹿児島熱帯医学研究会（その後、鹿児島熱帯医学会）と改名され、今年2月第19回を数えるにいたっています。また昭和33年初め頃から佐藤教授を中心にして日本熱帯医学会創立の準備がすすめられ、昭和34年11月大阪で第1回日本熱帯医学研究会が行われ、翌35年9月鹿児島で佐藤教授を会長として第2回総会が盛大に開催され、この席上、日本熱帯医学会と改名の議が可決され、逐次本学会も盛大となり、昨年は第9回総会が開かれるまでにいたっています。日本熱帯医学会九州支部大会も昭和37年2月18日に第1回が鹿児島で佐藤教授、阿部教授らの世話のもとに開かれ、その後、毎年1回、寄生虫学会南日本支部大会と同時に開催されています。

ちなみに本年2月行われました第19回鹿児島熱帯医学会は一般演題17題（フィラリア関係7題、ハブ毒関係5題、有毒カニ関係2題、寄生蠕虫関係2題、乳幼児検診関係1題）で、第1回創立当時に比較して研究の中および深さがひろくなり、学会としても恥かしくないものへと成長していると考えられます。その演題は下記の通りです。

### 第19回鹿児島熱帯医学会

昭和43年2月

## 一般演題

1. 奄美大島及び沖縄産カニ類及び魚類の毒性について  
鹿大二生理 森 陽子, 安楽満男, 前野 巍  
橋村三郎  
鹿大生化学 大保不二夫, 瀬戸口 賀子  
鹿大医動物 多田 功
2. カニ毒成分の分離について  
鹿大第二生理 森 陽子, 安楽満男, 前野 巍  
橋村三郎  
鹿大生化学 大保不二夫, 瀬戸口 賀子  
鹿大医動物 多田 功
3. ハブ毒 **proteinase** 活性に対する **Glutathione** の阻害作用の機構について  
宮崎県立日南病院 善平朝友  
鹿大生化学 満留敏弘, 大保不二夫
4. ハブ毒 **proteinase** 活性に対するハブ血清の阻害作用の機構について  
鹿大熱研疫学部 八板宗哉  
鹿大生化学 満留敏弘, 大保不二夫
5. 組織培養によるハブ毒の研究 鹿大第二内科 与儀昌夫
6. 免疫電気泳動によるハブ毒の研究 鹿大第二内科 風間正美
7. 蛇毒毒作用と **plasmin** 活性について 鹿大第二内科 平川嘉久
8. 奄美群島某高校における過去10年間の腸管寄生蠕虫の変動  
鹿大熱研熱帯病部 福島英雄, 橋口 すす代  
平田涼子, 荒田多恵子
10. 沖縄八重山群島における寄生蠕虫相の概観  
鹿大医動物 多田 功
11. 南大東島の乳幼児検診成績 鹿大小児科 平山清武
12. 沖縄三和地区の糸状虫症について  
鹿大熱研熱帯病部 幸地昭二, 福島英雄  
若松順子, 橋口 すす代, 荒田多恵子
13. 乳糜尿中蛋白の一新定量法 鹿大熱研熱帯病部 荒神元巳
14. 乳糜尿中の蛋白について 鹿大熱研熱帯病部 荒神元巳
15. 乳糜尿中の脂質について 鹿大熱研熱帯病部 若松順子

16. 糸状虫の代謝 鹿大熱研熱帯病部 楠元節子、内山芳彬
17. 糸状虫の微細構造について 鹿大第二内科 尾辻義人  
与那嶺和男, 安東六石, 貞方洋子  
前田忠, 原田隆二, 中島哲

# 第十三章

鹿兒島大学医学部二十五周年記念  
西 洋 医 学 百 年 記 念

## 記事



## 鹿児島大学医学部開学25周年記念式典

昭和43年4月21日午前9時30分鹿児島県医師会館ホールにおいて、まず開学25周年記念式典が、盛大かつ厳粛に挙行された。当日は晴天に恵まれ、鹿児島大学福田得志学長、末吉利雄鹿児島市長、花牟礼淳二郎県医師会長等、多数の来賓及び本学卒業生、在学生並びに教職員一同参会の下に、別記の如き式次第に従って式典が運ばれた。即ち鮫島吉治医学部事務長が進行係をつとめ、川路清高教授が記念式典委員長として開式の辞を述べた。次で一同起立の上、国歌を斉唱し、更に本学関係の物故者の霊に対して黙祷を捧げた。

佐藤八郎医学部長は、その式辞において、開学の歴史から現在に至るまでの発展の経緯を述べるとともに、将来の発展に対する覚悟を披瀝された。

福田学長、末吉市長、花牟礼県医師会長からそれぞれ別記の如き内容の祝辞を賜わり、鮫島耕一郎同窓会長は、母校医学部に対する各界の支援に感謝するとともに、開学の精神ともいふべき不撓不屈の意気で将来に対処したいとの決意を表明された。最後に、在学生代表として学部3年次学生尾崎建君は先輩各位の偉業を称えるとともに、学生として光栄ある本学の将来を約束された。頼もしい限りであった。

川路式典委員長が閉式の辞を述べて、式典を無事終了した。時に午前10時30分である。

### 鹿児島大学医学部開学25周年記念式典

#### 式 次 第

- |            |              |     |
|------------|--------------|-----|
| 1. 開 式 の 辞 | 記念式典委員長      |     |
| 1. 国 歌 斉 唱 |              |     |
| 1. 黙 祷     |              |     |
| 1. 式 辞     | 鹿児島大学医学部長    |     |
| 1. 祝 辞     | 鹿児島大学長       |     |
| 1. 祝 辞     | 鹿児島市長        |     |
| 1. 祝 辞     | 鹿児島県医師会長     |     |
| 1. 祝 辞     | 鹿児島大学医学部同窓会長 |     |
| 1. 在学生のことば | 鹿児島大学医学部学生代表 |     |
| 1. 閉 式 の 辞 | 記念式典委員長      | 以 上 |

## 式 辞

鹿児島大学医学部長 佐 藤 八 郎

本日ここに来賓の方々をはじめ多数の本学関係各位のご出席を得まして鹿児島大学開学25周年記念式典を挙りますことはまことに欣びに堪えないところであります。

顧みますれば昭和18年4月県立鹿児島医学専門学校が鹿児島市山下町に呱呱の声をあげ4月20日に第一回入学式を行なってから満25年、まさに四分の一世紀を閲したのであります。

更に遡りますれば遠く明治2年12月英国人医師ウィリアム・ウィルスが西郷隆盛、大久保利通などの推挙に依って薩摩藩の医師として招聘され、鹿児島市浄光明寺跡に医学校を、小川町に赤倉病院を創設しましたが、これが鹿児島県西洋医学の黎明であり本学部の、そもその根元であります。

その時から実に100年の星霜を経ております。その間、西南戦争など幾多の変遷はありましたが、医学の源流は連綿と継承され一時は法令の改正に依って廃校の時期もありましたが、昭和18年県立鹿児島医学専門学校の創立に依って鹿児島の医学の歴史は輝かしく再現したのであります。

当時わが国としては医師の急速な養成を必要とする実情にあったのであります。わが鹿児島県では早くから医学校の必要性を痛感され世論を喚起し、卒先して医学専門学校の設立に着手されました。幸いにして関係各機関のご尽力と先輩各位の献身のご努力とに依って本学部創業の基礎が確立するに至ったのであります。爾来25年教職員学生一致協力、孜孜として学部の拡充充実に計るとともに、教授陣容の強化、教育、研究、診療の調和ある内容の充実に努力、時勢の進展に応じて発展を続けて来たのであります。即ち、昭和22年のA級医専決定、県立鹿児島医科大学の設置、23年の付属病院復旧完成、27年の鹿児島県立大学医学部の設置、30年の国立鹿児島大学への移管、34年の大学院医学研究科の設置、35年の付属熱帯医学研究施設の設置、42年の付属腫瘍研究施設の設置などその発展はまことにめざましいものであります。

他方、各講座の整備も年々着実に実施され、現在、基礎13講座、臨床14講座を数え、本年麻醉学講座が増設され合計28講座になる訳であります。それぞれ特色ある研究に励み、教育の充実に努力を重ねつつあります。

また付属学校は看護学校、助産婦学校、保健婦学校の三校を併せ持っており

ますが、これは全国にも類例の少ない調和のある形態でありまして、近い将来医療技術短期大学への昇格も具体化するものと楽しみにしているところであります。

昭和32年7月学位審査権が付与されて以来、学位の授与者は750余名の多きに達し、創立以来の本学部の卒業生の数は1,300名を数えるに至りました。これらの卒業生は全国各地に雄飛し、研究に病院に開業にと広く活躍し、その人格技術は世人の厚い信頼を受け、本学部の声誉を高めると共に医療の道を通じて社会福祉の発展に貢献していることは、まことにご同慶に堪えないところであります。

25年の歩みはまた草創期の波瀾に満ちた苦難の歴史でもありました。創立後の設備拡張の時代から戦中戦後の困窮克服、戦災に依る壊滅的打撃、加うるに昭和27年の類焼による大損害、これらの大災難からの復旧への努力のみならず日進月歩の医学の進歩に即応するための奮斗は、まことに心血を傾注した歴史とも言えるであります。

この間、日本国家、日本民族の浮沈にかかわる大激変もありましたが、この苦難にもよく耐え、いばらの路を切り拓き、時代の進展に即して生々発展、今日の大隆盛を見るに至りました。

これは偏えに高安慎一先生を初めとする歴代学長学部長の優秀なご指導のもとに教職員諸氏の誠実な任務の遂行と学生諸君の真摯な勉学と練磨が相俟ち相扶けた結果であり、同時に同窓会諸氏の熱烈なる母校愛と父兄後援会各位の深いご理解とご支援の賜であります。また県民の方々の絶えざるご協力も忘れてはならないのであります。この席を借りましてこれらの方々に対し深く感謝の意を表する次第であります。

本学部は本土の最南端に位置する医学部としまして、かねてから亜熱帯地域および熱帯地域の医学の諸問題に多大の関心を持って参りました。奄美大島にある熱帯医学研究施設を中心として日夜研究活動に励んでいるのであります。

昭和29年以来、14回に亘って奄美大島の無医村地区に診療団を派遣して参りました。教授、医師、学生が毎年暑い夏の盛りをものともせず、不自由を克服して多数の患者の診療に当り僻地の人々の厚い信頼と感謝を受けるとともに多大の研究上の成果をあげて参りました。今後も毎年続行する予定であります。また昭和40年からは更に一步を進めて沖縄学術調査診療団を沖縄の無医地区に派遣して参りました。今回で第4回目を迎えますが学術上の成果は勿論のこと、学童はじめ地域住民の大歓迎を受け、沖縄医師会の充分なご協力も得られまし

て沖縄と本土との一体感を強めるためにも多大な貢献を齎しているものと聊か自負している次第であります。

また大島診療団、沖縄学術調査診療団に加えて昨年は台湾省学術調査団を編成しまして約2週間に亘って花蓮県山地住民の診療および調査を行ない、併せて台湾医学会に出席し、台湾医学会、医師会との交流を行なって多大の成果を収めて参りました。私どもは益々視野を広くし国際的学術交流を図ると共に、医学を通じて東南アジア各国の福祉増進に寄与したいと念願しているものであります。

昨年は腫瘍研究施設が新たに設置されまして目下鋭意その内容充実に努力しているのであります。腫瘍の研究は現今我が国医学界は勿論、世界的規模において巾広い研究が強力に推進されつつあるのであります。私どももこの施設の部門を拡充発展させるとともに各講座との緊密な連携のもとに独自の研究に意欲的に取り組みユニークな成果を獲得できるように最大の努力を傾けたいと考えているのであります。

年々歳々発展の一途を辿って参りました本学部は遂にその環境から脱皮しなければならぬ時期が参りました。即ち年と共に既存の施設設備は益々狭少不備となり教育に研究に診療に多大の支障を来たし敷地の狭隘は頂点に達するに至ったのであります。ここにおいて去る昭和39年11月教授会は本学部の移転を決議し、文部省はじめ関係各方面のご賛同を得て市内南部の新天地に理想の医学部ならびに付属病院を建設すべく踏み切ったのであります。現在文部省に本学部建設準備委員会が設置され各方面の専門家に本学部教授も含めて理想的医学部ならびに付属病院の構想とその設計に慎重な検討が進められております一方、敷地は鹿児島市開発事業団に依って着々準備が進められ先般その一部分の管理換も行なわれました。

なにぶん東洋一の理想的機能を誇る教育診療の場を産み出そうとする作業でありますから完成までに数年を要することは已むを得ないところであります。

勿論私どもは本学部の移転が容易ならざる大事業であることを充分覚悟しております。衆知を集め展望を誤ることなく理想の達成に最善を尽くす所存でありますので関係各位の絶大なご協力ご支援を切望するものであります。

このように本学部は歳月と共にその発展はとどまるところを知りません。組織機構の拡充発展はご同慶に堪えないところであります。組織機構を管理し運営するものは人間であります。本学部の教育を、研究を向上発展させるものは私ども大学職員であり、学生一人一人が問題であります。機械文明、物質文明

の発達に伴ない世上ようやく人間疎外の風潮が濃厚となり物質万能の誤まれる考え方に墮し人間性を閑却した事例を数多く見聞するのはまことに歎げかわしいことであります。私どもは苟くも大学人として人間性の尊重に厳格なるは勿論のこと、医学の道に携わる者として医師の倫理についても深く考察するところがあるべきであると考えます。

私どもは斯界先達の残された輝かしい遺業と誇りある伝統を受け継ぐとともに本学部が一大飛躍の転機にたっていることに思いを致し大学の社会的使命を自覚し、尚一層の研鑽に努め国家社会の付託に応えなければならないと堅く心に誓うものであります。

本日ここに本学部開学25周年の記念すべき佳き日に当り本学部の尚一層の輝かしい発展を祈念するとともに将来への覚悟を新たにし、所感の一端を述べて式辞といたします。

昭和43年 4月21日

鹿児島大学医学部長

佐藤 八郎

## 祝 辞

鹿児島大学学長 福田 得志

鹿児島大学医学部は今日、開学25周年を祝して、各種の記念事業を計画されたのでありますが、又、本日、この盛大な記念式典を開催されることになりました。私は学長として、この席でお祝いの言葉を述べることをこの上もない喜びに存じております。

わが鹿児島大学は、昭和24年、戦後の新しい国立大学として文理、教育、農及び水産の四学部をもって設立されたのでありますが、同じ鹿児島市内に別に設立されていました鹿児島県立大学に属する医学部及び工学部を、国立大学に移管することは、これらの国立及び県立二大学及び鹿児島県、市民諸君の三者が一体としてだされた熱望でありました。その努力を続けたかいはありまして、ついに昭和30年度にいたって移管が達成されたのであります。それで本学は医学部及び工学部の二学部を加えて六学部の総合大学に成長いたしました。その後、文理学部の改組ができて法文学部及び理学部、それに一つの教養部が設置されたのであります。すなわち今日では七学部、一教養部で、大きな総合大学となり、現在では学生定員 5,000名を越えることになりました。その中であって、この医学部は大学院博士課程を持ち、熱帯医学研究及び腫瘍研究などの特別施設を有するなど、最も充実した学部であります。これは、歴代の学長をはじめ教官各位の、通算四半世紀にわたる教育と研究とに対する精進と熱意、苦心経営の結果によるものでありまして、心から敬意を表する次第であります。しかし、ここで特に注目したいことは創立以来千数百名に達するということ卒業生によって組織されている同窓会即ち、鶴陵会、並びに父兄後援会の活動であると思います。また鹿児島県、鹿児島市並びに県医師会等各位が我が医学部に対して示された好意に対しても深甚の謝意を表せなければならぬと思います。

我が医学部は目下、市内亀ヶ丘の丘陵地に約10万坪の校地をトして、学部及び附属病院の移転計画を進めつつあり、文部省施設部も又、画期的な医学部及び病院の移転計画に対して双手をあげて賛成し、数十億に達する予算を投入しようとしております。この大計画の実現に伴って医学部及び病院関係各位の一层の活躍を期待し、又、鹿児島県、市、医師会等の各位の温かい理解とご関心とが、いつまでも続けられるように、切にお祈りしたいと思います。これをもって簡単であります私の今日の祝辞にかえさせて頂きたいと思っております。

## 祝 辞

鹿児島市長 末 吉 利 雄

本日、鹿児島大学医学部の25周年をおむかえすることができましたことに心からおよび申し上げます。

今年は明治維新から 100年、私ども鹿児島県人にとりまして最もゆかりの深い年であります。そして当医学部創立の草わけてあります薩摩藩の医師として英国のウィリアム・ウィリス氏が招聘され、医学校及び病院を創設して 100年の年にも当り、今日の、この記念式典にとりまして、まことに意義深いものがあると思います。この間いろいろ困難な変遷とともに現在の総合大学医学部として内外ともに充実し、数多くの医学にたづさわられる方々を送り出して、おりますことは歴代の大学ご当局の先生方をはじめ関係者皆様方の深いご理解とご尽力によるものと深く敬意を表する次第であります。

今日の我が国は世界に誇る経済文化の繁栄をみることができました。そして私どもの日常生活も非常に便利で豊かな社会になってまいりました。しかしながら、ややもすると人間疎外の現象が年々拡大される傾向にありますことは否定し得ない事実であります。

このように、ますます幅輻する社会的条件の中で人間の生命と健康をあづかり数々の複雑な病源に対処されます皆様方の前途は、さらにきびしいものがあるものと思います。

今日のこの意義深い25周年に当り当医学部が医学界において果した偉業と、さらに今後の社会的使命を一段と自覚され、日進月歩の医学界に研鑽をつまれ大きく貢献されますことを祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

## 祝 辞

鹿児島県医師会長 花 牟 礼 淳 二 郎

本日茲に鹿児島大学医学部開学25周年記念式典が挙行されるに当り一言お祝いの詞を申し述べる機会を得ましたことは私の最も光栄とするところであります。そもそも当学部の生立ちを省みますと、初め鹿児島県立医学専門学校として昭和17年、大東亜戦争の最中に創立され、基礎医学部門は郡元町に、付属病院には県立病院をこれに当て、南方医学研究を旗印に華々しく発足したものでありますが第一回の卒業生を送り出す寸前に敗戦となり病院施設も又戦災により潰滅したのであります。

昭和20年6月17日の大空襲以来、たび重なる米機の襲来により鹿児島市の九割は灰燼に帰し、開業医は四散して医療の貧困は誠に目を覆うものがありました。このときにいち早く学校復興に着手され昭和25年には県立鹿児島大学医学部として陣容も新たに再建され、困憊の極にあった県民医療の推進と医師の養成に尽力され県民の負托に大いに応えるところがあったのであります。戦後の経済的不安と思想的動揺の激しい中に営々として施設、設備の改善充実に努めつつ医学研究の成果を挙げ昭和30年には遂に国立鹿児島大学に移管され、今日の隆盛を見ましたことは誠に同慶に堪えず、学校当局の精進と熱意に最大の敬意を表するとともに、この間における県当局の並々ならぬ配慮と県民の暖かい支援を忘れてはならないと思います。

国立移管後すでに10余年、この間講座の増設充実、規模の拡大、大学院の併設、各種研究施設の新設等、近代医学の推進に寄与するところ甚だ大きく、且つ又南日本医学の拠点としてその機能を遺憾なく發揮し医学水準の向上に少なからぬ貢献をされたのであります。しかしながら医学の進歩発展は須臾も留まるところを知らず、為めに診断治療用の機械器具等は精巧かつ巨大となりつつあり、研究施設もまた軌を一つにし、かてて加えて入院需要は愈々増大し、学生定員増のこともあって従来施設はもはやその機能の限界に達し教育、研究、診療等に支障を来すに至り、その前途がひそかに憂慮されていたのであります。学校当局の不退転の決意と努力は幾多の障害を排除して遂に市の南方に移転が決定し、すでに第一期工事が始まり、ゆくゆくは東洋一の設備を誇るに足る医学部が誕生することになりましたのは誠に欣快に堪えないところであります。時、あたかも明治 100年に際会し、開学25周年を迎え、一大飛躍の第一歩

を踏み出されましたことは、この式典が一段と意義深いものを感じられ、ただただ心から御祝い申し上げる次第であります。

最後に貴学部の輝かしい伝統と不滅の功績を讃え、併せて将来の限りないご発展を祈念致しまして私の祝辞といたします。

## 祝 辞

鹿児島大学医学部同窓会長 鮫 島 耕 一 郎

今日の佳き日に県内外から多数の来賓をお迎えしまして、このような盛大な開学記念式典が挙行されますことは誠に有難く衷心から感謝にたえない処でございます。顧みますと、本学の前身、県立鹿児島医学専門学校が呱呱の声をあげたのは丁度25年前の昭和18年4月20日でございます。

明治初年以來、長らく培われた医学的土壌と県民の与望の上に誕生した学校ではありましたが、戦災、終戦そして戦後の混乱と、国の運命が大きく変わると共に、私共の学校にもその興亡、浮沈に関する難問題が次から次へとふりかかって参りました。この難局に当り、関係ご当局の強いご支援のもとに当時の教職員、父兄、学生は渾然一体となって戦災からの復興、再建、大学昇格の目的達成のために夫々の立場で涙ぐましい程の最善の努力を尽くしました。やがて大学昇格も認可され、昭和22年7月14日めでたく県立鹿児島医科大学第一回の予科生が入学致しましたのであります。

当時の祝賀会には生化学実験室を使い、各自持ち寄った文字通りの粗酒、粗肴を実験台の上に並べ、県知事その他の来賓を迎えて行なわれました。極めて簡素な中にも感激と希望に満ちた当時の情景を今日思い浮かべます時、まことに感慨無量なものがございます。

爾来、今日まで県立大学医学部、次いで国立鹿児島大学医学部として粧いを変えて参りましたが、この間に育かれた1,200余の卒業生は北は北海道から南は東南アジア各国に至るまで、広く夫々の分野で活躍している現況であります。

翻って現今の時勢をみる時、私共の周囲には医学教育制度の改革、その他幾多の難問が山積していますが、私共は本学の歴史から学び得た不撓不屈の精神と高い理想と創造の精神を持ち続けて一步一步でも絶えざる努力を重ねていきたい所存でございます。

母校の開学25周年記念式典に当り、過去の歴史をふり返りつつ所懐の一端を申し述べましたが今後共、全学一体の美しい伝統に守られて益々充実発展し、以て大学の社会的使命と責任がよく果たされんことを心から念願しまして祝辞に代えさせて戴きます。

## 祝 辞

学生代表 尾 崎 建

ウィリアム・ウィリス先生によってこの鹿児島に西洋医学が芽生えて以来100年。また昭和18年県立医学専門学校が創立され、本日この25周年の晴れやかな記念式典を迎えるにあたり、我々学生も参加できましたことは一同、喜びに堪えません。

将来の発展を期して移転を目前にひかえるまでに至りました今日の鹿児島大学医学部の栄光を、目のあたりにしまして感激、新らたなるものを覚えます。我々学生が学問に打ち込んでいくに足る十分な設備と環境を備え、また我々が母校として誇り得る現在の医学部を育てあげるために辛苦をしのび、ひたすらに努力してこられた諸先生並びに多くの先輩に心から感謝の念を捧げるものであります。と同時に、真の医学者たる、すばらしい先輩を有していることを我々は誇りに思っています。科学の進歩に伴ない医学も進歩していくであります。しかし医学には究極はありません。人類の存在する限り永久に進歩を続ける学問であります。

我々医学を志す若き学徒は、先輩が過去に苦難を乗り越えて築きあげた業績と信念を受け継ぎ、医学の進歩のため努力を続ける覚悟でいます。

将来鹿児島に残る者もあれば、当地を去って行く者もありません。しかし何処の地にありましても我々鹿児島大学医学部で学ぶ学生は決して先輩の築きあげた伝統と、一生の学問である医学に対する真摯な態度を忘れることはないであります。

自己の一生を医学に捧げ社会に貢献するとともに恩師の教をえを守り、必らずや出藍の誉れ高き医師めざし、ひいてはこの鹿児島大学の将来をにない、なお一層の発展をもたらすべく我々一同努力をつくす覚悟でいます。

## 鹿児島西洋医学開講100年記念式典

昭和43年4月21日午前10時40分鹿児島県医師会館ホールにおいて鹿児島西洋医学開講100年記念式典が別記の如き式次第に従って挙行された。即ち、これに先立ち、鹿児島大学医学部開学25周年記念式典が、このホールにおいて挙行され、次で我が国医学界の恩人である英国医師ウィリアム・ウイリスを紹介するスライド上映があり、引続いて本学教育学部中村晋也助教授作成にかかるウィリアム・ウイリスのレリーフ除幕が孫の宇利丞示氏によって行なわれた。(レリーフは医学部本館と県医師会館とに夫々おかれている。)

本式典には、特にウイリスの孫に当る宇利丞示氏、同じく孫でその姉に当る河内麻利さん及び御両人の叔母に当る岩田文さんの3名の方の参列を得た。

まず佐藤八郎医学部長が、鹿児島における医学教育発祥の歴史より説き起こし、ウィリアム・ウイリス先生により西洋医学、特にイギリス医学が教えられるに至った経緯を述べ、我が鹿児島大学医学部の発展に連がるものであることを強調した。次で来賓祝辞として、第一に灘尾弘吉文部大臣の祝辞を福田学長が代読された。次で英国大使代理としてC.R.S. マンダース博士が別記原文の如き内容の祝辞を述べられたが、本学尾辻省悟助教授の周到なる名通訳により一同に深い感銘を与えられた。金丸三郎鹿児島県知事の別記の如き祝辞を浜口剛一衛生部長が代読された。武見日本医師会長は、その令夫人が、人も知る如く、大久保利通の曾孫に当る方であって、鹿児島に因縁もあり、心よく招待に応ぜられ、別記の如き祝辞を述べられた。

最後に、日本医史学会を代表して小川鼎三会長がウイリスを称えられるとともに本学開学25周年をも祝され、特色ある本学の発展を祈念された。

川路式典委員長によって祝電が披露された後、宮崎淳弘附属病院長の発声によって一同万才三唱を行ない、記念すべき式典を終了したが、引続いて同11時40分から鮫島近二博士によって「英医ウィリアム・ウイリスについて」なる記念講演が1時間に亘って行なわれた。因みに同医師会館内別室に於てウィリアム・ウイリス関係の資料展が催された。

以上で以て、鹿児島大学医学部開学25周年記念式典並びに鹿児島西洋医学開講100年記念式典は滞りなく終了したわけであるが、市内城山町鹿児島ホテル鶴鳴館において記念祝賀会が持たれることになり、来賓を始め関係者一同計118名が出席した。

即ち、同日午後1時より別記次第によって行なわれたが、席上、テーブルスピーチの最後において宇利丞示氏が、心からなる感謝のことばを述べられた。

なお、今回の記念式典に当り、佐藤八郎述「ウィリアム・ウイリス略伝」が上梓され、参会者一同に配布されて更に感銘を深めた。 (城 哲男記)

## 鹿児島西洋医学開講100年記念式典

### 式 次 第

1. 開式の辞 記念式典委員長
1. 式 辞 鹿児島大学医学部長
1. 祝 辞 文部大臣
1. 祝 辞 英国大使
1. 祝 辞 鹿児島県知事
1. 祝 辞 日本医師会長
1. 祝 辞 日本医史学会長
1. 祝電披露 記念式典委員長
1. 万才三唱 鹿児島大学医学部附属病院長
1. 閉式の辞 記念式典委員長

記念講演 医学博士 鮫島近二

「英医ウィリアム・ウイリスについて」

以 上

## 式 辞

鹿児島大学医学部長 佐藤 八郎

本日ここに「鹿児島西洋医学開講百年記念」の式典を迎えるに当り英国大使代理マンダース博士、ウイリス先生のご子孫を初め、多数の来賓のご出席を得まして盛大に挙行できますことを厚く御礼申し上げます。

さて鹿児島西洋医学開講百年の歴史は、そのままが鹿児島大学医学部の歴史であると申しても過言ではないと思います。そもそも当地鹿児島市では薩摩藩の時代から政策の一つとして医学教育の重要性がとりあげられておりました。

既に安永3年(1774)には時の25代藩主島津重豪によって医学院が設置されたのであります。これが鹿児島の医学教育機関の発端であります。この医学院は臨床設備を持った医学教育機関で公共のものとしてはわが国で最も古いものの一つに属するのでありまして、わが鹿児島には既にこの時代に医学教育の場ができていたわけであります。このような地盤の上に西洋医学特にイギリス医学を移し植えて近代医学の芽を出させたのがウィリアム・ウイリス先生でありました。

ウイリス先生についての詳しい歴史は先程お手許にさしあげました略伝によってご承知願うこととし、またこのあとで特別講演をお願いいたしております本県出身で長年ウイリス先生の研究をしておられます鮫島近二博士によってご紹介いただけたと思いますので、私は簡単にウイリス先生の医学史上の功績をふりかえってみたいと思います。

ウイリス先生が来日された文久元年(1861)と申しますと、わが国では徳川幕府が崩壊して明治の新政府へと大転換しようとする時期であります。当時は生麦事件、薩英戦争、鳥羽伏見の戦争に端を発した戊辰戦役など日本の運命を左右する大きな事件が次々に起こっておりますが、ウイリス先生はこれらの事件に遭遇して医師として人道的な立場から自らの生命を賭して負傷者の救済に当られました。戊辰戦役では日本政府の要請に応じて戦傷者の治療に挺身されたのであります。特に官軍の軍医を志願して従軍された際には敵味方の差別なく治療を行なうなど、わが国赤十字精神の始まりともみるべき献身的活躍をされましたことは、はっきり歴史にとどめられております。

当時の日本の医学と申しますものは大部分が漢方でありまして、ごく一部では西洋医学即ちオランダ医学が行なわれてはおりましたが、その技術は甚だ幼

稚なものでありました。こういう時代にウイリス先生は創傷の消毒には過酸化マンガン水を、骨折の治療には鉄のスプリント（副木）を使ったり、この他、四肢切断術、クロロホルム麻酔法などを紹介して日本の医家を指導して、すばらしい治療成績をあげ、イギリス医学の優秀なことを広く日本人に教えられ、わが国外科学の進歩発達に大いに貢献されたのであります。

戊辰戦争が終って明治と改元されてから9カ月間東京大学医学部の前身であります東京医学校兼病院長として医学教育に努力されていましたが、明治新政府の方針がイギリス医学からドイツ医学へと変更になりましたために英人であるウイリス先生の身柄が問題になったのであります。この時西郷隆盛、大久保利通らの尽力で西洋医学のため薩摩藩立の医学校と病院が創設されることになりましてウイリス先生はここ鹿児島に迎えられることになりました。そこで明治2年12月3日江戸を出発して鹿児島へ向っておられます。

この医学校は明治2年12月12日西洋医学校という名前がつけられまして旧浄光明寺跡に出来たと県史に記録されております。従ってこの明治2年12月12日が鹿児島医学校開学の記念すべき日ということになります。その後、医学校には附属病院を併設し、講義と臨床とを併せ行なうべきであるというウイリス先生の新しい医学教育方針に従って県庁そばの滑川沿いの小川町に赤煉瓦造りの洋式建築の病院ができました。一般から赤倉病院とよばれていたものであります。当時の医学校、病院の組織をみますと、形式は簡単なものでありますが大要は現在の大学医学部のものと、それ程大差がなく実に整然としたものであります。特に基礎学科である解剖の是非必要なことを当局に強く建言しているのも注目すべきことの一つであります。既に百年前ウイリス先生によって、このようにすばらしいイギリス医学の教育が行われておりましたことは誠に驚嘆すべきことであります。先生はまた臨床家としても手腕を振って市井の多くの患者の治療救済に当たっておられました。こうしてウイリス先生の名声と鹿児島医学校の名は天下に知れわたって、地元は勿論のこと遠く福島、静岡、和歌山などからも笈を負って集って来ております。一方ウイリス先生は医学生教育だけではなく鹿児島公衆衛生の啓蒙につとめたり予防医学の必要を説いたり或は栄養の問題、温泉治療の問題などについて指示を与えるなど公衆衛生、予防医学の優れた指導者でもありました。

ところでわが国に西洋医学が導入されたのは、これよりもっと前で長崎に於てシーボルト、ポンペ、ボードイン等によって指導されておりましたことは有名であります。然し、これはオランダ医学でありました。ウイリス先生が

この鹿児島で指導されましたのは純粹のイギリス医学でありまして長崎とは全く何の関連もなく、ウイリス先生自身の独特な構想のもとに始められたものであります。内容をみましてもかなり高度なもので僅か9カ月しか在職されなかった東京医学校よりも、むしろこの鹿児島医学校の方が充実していたのではないかと考えられるのであります。ただ、ここ鹿児島は日本の最南端で、中央との連絡がなかったことと藩の医学校であったことなどが原因となって、長崎ほどひろく認められていなかったのは残念なことでありました。この門下からは高木兼寛をはじめ当時の近代医学の先駆者が多数巣立っております。

ここで私はウイリス先生が日本でイギリス医学の基礎を鹿児島におかれたという立派な功績が、いま新しい意義をもって日本医学史にとどめられなければならないと思うのであります。

然し医学校がようやく軌道にのりかけた折、西南戦争が勃発してウイリス先生は日本を去られ、医学校も病院も中断を余儀なくされましたことは全く遺憾なことでありました。もしウイリス先生がもっと長く鹿児島にとどまられたならば、その業績は更に大きなものとなったであろうと考えられるのであります。

さて、その後、幾多の迂余曲折はありましたが病院は市立病院、県立病院へと発展いたしました。ところが一時復活しました医学校も明治20年地方税支弁による医学校禁止の勅令によって閉鎖されて以来、50年間廃校の運命にあったのであります。然しウイリス先生の精神は脈々として続き昭和18年県立医学専門学校が創設されて、それが国立鹿児島大学医学部へと発展して今日に至っております。本日鹿児島大学医学部開学25周年記念事業の一環として「鹿児島西洋医学開講百年記念」式典を挙げるに至りましたことは誠に感慨深いものがございます。今日までの歩みは決して平坦な道ではなくウイリス先生を始め創立当時の数多くの先賢の不撓不屈の精神力が連綿として後進に伝えられて、しかも時代の幾多の変転波瀾に耐えて今日に至っているわけでありました。私どもはこれら幾多の先人に限りなき敬愛の念を禁じ得ないのであります。われわれはこれら先人の学問的遺産をうけ継ぎ、これを発展せしめる義務があると思うのであります。

既に明治26年ウイリス先生の門下生たちによって頌徳記念碑が建てられました。現在は附属病院の玄関前に移されております。このたびウイリス先生のレリーフを本学助教授中村晋也氏にお願いして二つ作製いたしました。一つは医師会館、もう一つは医学部におきますが先刻、来賓各位ご臨席の下にウイリス先生の孫、宇利丞示氏の手によって除幕が行なわれました。

本日私どもは偉大なるウイリス先生を顕彰し、その学恩に報ゆると共にこの記念行事が機縁となって更に日本と英国との文化交流が盛んになることを希望するものであります。

終りに臨み鹿児島県並びに鹿児島県医師会から絶大なる御後援を賜りましたことに改めて厚く御礼申し上げます。また本日御来会を賜りました来賓各位、恩師、同窓生各位に対し重ねて深く謝意を表すると共に今後なお一層の御指導、御援助を賜りますよう切にお願いいたしまして私の式辞を終わります。

昭和43年4月21日

鹿児島大学医学部長 佐藤 八郎

## 祝 辞

文部大臣 灘 尾 弘 吉

本日ここに鹿児島西洋医学開講百年ならびに鹿児島大学医学部開設25周年の記念式典が盛大に挙行されますことはまことに慶賀に堪えません。

わが国近代の夜明けを告げる明治維新のころには幾多のすぐれた人材が諸藩から輩出して国事に奔走し、庶政刷新、文明開花を標榜して近代国家建設のために献身されたのでありますが、また一方、学識ある外国人も数多く、日本の近代化に貢献されたことを忘れてはならないと思います。

英国人ウィリアム・ウイリス先生はこれらの方々のおかげでもとくに鹿児島における西洋医学の創始とその発展のために著しい業績をあげられました。先生は明治初年、薩摩藩の医師として招へいされ、藩病院および附属医学校の長として医学教育ならびに医療活動に力を尽し、明治10年に帰国されました。しかし先生の残された事業が明治、大正、昭和の3代にわたり脈々として受け継がれて光輝ある伝統を形成しつつ、県立鹿児島医学専門学校から県立鹿児島医科大学へ、さらに国立大学医学部へと発展してまいりましたことはまことに感銘に堪えないところであります。

このたび明治百年を迎えるにあたり本学医学部において鹿児島県ならびに県医師会の協賛のもとにこの式典をあげ、わが国近代化の一翼をにないつつ発展してきた鹿児島西洋医学の歴史を顧み、先人の功績を顕彰するとともに、本学医学部の現在の繁栄をお祝いすることはまことに意義深いことであります。

今日、国民の生活活動の根源となる保健医療の進歩向上に対して各方面から大きな期待がよせられ、医学の振興と優秀な医師の養成をめざす国立大学の使命はいよいよ重大なものがあります。わたくしは本日の式典を心からお祝いいたしますとともに、御参集の皆様方の御協力により本学部が今後さらにその伝統と建学の理念にふさわしい充実した発展をとげ医学医療の進歩と地域社会の福祉向上のためにますます寄与されるよう念願してやみません。

終りに臨み関係各位の御尽力に対して深く敬意を表しますとともに本県のいっそうの繁栄を祈ってお祝いのことばといたします。

## CENTENARY CELEBRATIONS OF INTRODUCTION OF BRITISH MEDICINE INTO JAPAN

A heavy round of duties makes it impossible for T. E. the British Ambassador and Lady Pilcher to be here today. They have asked me to express to you their sincere regrets and to wish these meetings every success. My wife and I are very happy indeed to be able to represent Their Excellencies.

Today is an auspicious day, it is the true birthday of our Queen, Elizabeth II; the reputed birthday of Shakespeare our most noted poet and playwright, whilst the English community in Tokyo today celebrates St. George's Day, the day of the patron Saint of England.

### William Willis, the complete Britisher

I come from a country made up of four countries—England, Wales, Scotland and Northern Ireland—and its correct name is the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland. Our national flag combines four flags.

William Willis, whose services we celebrate today, was a complete Britisher. He was born in County Fermanagh of Northern Ireland in 1837. He obtained his doctorate (M. D. Edin.) from the University of Edinburgh in Scotland in 1859. Moving next to England he spent two years as House Physician at the well-known Middlesex Hospital in London and qualified as a Member of the Royal College of Physicians (M. R. C. P. Lond.). For three years after his period in Japan Willis joined his brother in practise in Wales. In commemoration of these facts may I present to the Medical School Library these books on Ireland, Scotland, England, London and Wales?

### Character

Quite close to where William Willis was born is the town of Enniskillen, a town that has given its name to two famous regiments of the British Army, the Royal Inniskilling Fusiliers and the Royal

Inniskilling Dragoons. It is also a fact that a disproportionate number of notable British military leaders have come from Northern Ireland. It was natural, therefore, that William Willis should have been bold and adventurous and it is not surprising that he should have come to Japan—no small undertaking 100 years ago!

### Further qualifications

Willis came to Edo in 1861 as Medical Officer to the British Legation, forerunner of the Embassy which I serve. His medical qualifications were, even then, particularly good. As a student at Edinburgh Willis was unusually fortunate. The three leading surgeons of the day, one of them possibly the greatest surgeon ever, were his teachers. James Syme was Professor of Surgery and Dean of Medicine, a pioneer in the use of anaesthetics. James Young Simpson was Professor of Midwifery and the first in Britain to see the advantages of ether which he introduced in 1845. A year later Simpson introduced chloroform as general anaesthetic. Joseph Lister was assistant to Syme and in 1857 produced his classic paper "The Early Stages of Inflammation". It was Lister who introduced catgut ligature for wounds, the new type dressing of medicated absorbent gauze, aseptic surgery and germ-free operating rooms. These latter were achieved by the liberal spraying of 5% phenol. Willis drew inspiration from the greatest medical men of his time and brought their medical technology to Japan.

A year after the return to England in 1882 Willis obtained the Fellowship of the Royal College of Surgeons (F.R.C.S.)—the qualification of a leading surgeon specialist. In 1893, the year before his death, he gained the Diploma in Public Health (D. P. H.), the qualification sought by preventive medicine specialists. William Willis was an excellent medical man adding to his knowledge, experience and qualifications throughout his career.

### The Period in Japan

In 1868, after six years' work at the British Legation Willis resigned his post and offered his services to the Japanese. At the time

I believe some surprise was expressed that Willis treated wounded of both Government and insurgent armies. I would merely comment that the Medical profession is degraded when it puts politics before human suffering. Willis never forgot the Hippocratic oath. When peace came he was put in charge of a newly-built large Government Hospital and was instrumental in setting up for the Government the Tokyo Medical School which has since become the Medical School of Tokyo University. In 1870 came the invitation from General Saigo for Willis to come to Kagoshima. In 1868 Willis was only 31 years of age but he was already possessed of experience far in excess of his years. It is much to the credit of the Japanese Government and of the authorities in Kagoshima that they supported this brilliant young man so strongly. Willis worked in Kagoshima for the twelve highly productive and, at times, greatly disturbed years that are in our minds today. He left Japan in 1882 never to return.

#### Why did he leave?

Now Willis had a wife and family in Kagoshima. His services had been warmly appreciated and, I am pleased to note, he had received a generous salary. The work had been most rewarding. Not a few early pupils had proved extremely competent and there was every reason to expect continued success. There must too have been a strong loyalty to the memory of Saigo Takamori and others. However Willis left in 1882 and I suppose every future biographer will find a different reason for his departure. I have been a professor and know that a stage comes when the sensible teacher steps back and lets the pupils take over, adding to the subject something of their personalities and something from their understanding of the national and local background conditions. By 1882 Willis undoubtedly saw that the time had come for him to step back.

#### Why did Willis stay so long?

You remember that in September 1862 there was an unfortunate incident near Yokohama in which two British were seriously wounded

and one life was lost. This was followed in August 1863 by the appearance of a British Naval Squadron of seven ships in Kagoshima Bay. These were fired upon and there was some bombardment of the city. Out of these unpromising incidents, however, has blossomed forth a firm friendship. Many will say, Kagoshima, city of Sakurajima—I say, Kagoshima, cradle of Anglo-Japanese friendship! Naturally William Willis was happy here.

It is with the greatest pleasure that I congratulate the grandchildren of William Willis, who are here today, upon their inspiring grandfather of whom Great Britain is justly proud. I am sure that having a famous British grandfather cannot always have been easy for you.

It is now a hundred years since William Willis introduced British medicine into Japan, teaching for a few months in Tokyo before proceeding to his main work in Kagoshima. I trust this happy association in the medical field between my country and Japan will continue and that the Medical School of Kagoshima University will find the next hundred years filled with excitement and success.

C. R. S. Manders,  
C. B. E., M. A., M. Sc., Ph. D., A. K. C.,  
F. Inst. P/Phys. Soc.

Counsellor (Scientific)  
British Embassy, Tokyo  
21 April, 1933

(同訳文)

### —英国医学開講百年記念にあたりて—

英国大使 **Pilcher** 御夫妻は公務御多忙のため御臨席できませんでした。御夫妻の遺憾の意と、この式典が盛大であります様にとの御夫妻の意志をお伝えします。私共夫妻は大使の代理としてここに臨席出来ました事を非常に光栄と存ずるものであります。

本日は私共の女王 **Elizabeth 2** 世及び、著名な詩人・劇作家である **Shakespeare** の誕生日にあたり、又英国をおまもり下された伝説的英雄として今日東京に住む英国人が祝福する聖 **George** の日にも当る、まことにめでたい日であります。

#### William Willisは 純粋の英国人であります

私は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの四つから出来ている国の出身であります。正確には大英連合王国と北アイルランドと申しまして、国旗はさきの四つの旗を組合せたものであります。今日ここにその功績をたたえる **William Willis** は純粋の英国人であります。彼は1837年、北アイルランドの **Fermanagh** 州で生まれ、1859年スコットランドのエジンバラ大学で博士号 (**M. D. Edin.**) を得ました。イングランドに移ってのち2年間ロンドンの有名な **Middlesex** 病院の医師として過し、イギリス内科学士会会員 (**M. R. C. P. Lond.**) となりました。日本から帰ってからの3年間はウェールズで兄弟と一緒に開業しています。これらを記念してアイルランド、スコットランド、イングランド、ロンドン、ウェールズに関する図書を医学部図書館に寄贈させていただきたいと存じます。

#### 人となり

**William Willis** の出生地のすぐ近くに、**Enniskillen** という町がありますが、英国陸軍の二つの有名な連隊にその名前がつけられております。即ち、英国 **Inniskilling Fusiliers** 連隊と英国 **Inniskilling Dragoons** 連隊であります。又、多数の著名な英国陸軍の将官が北アイルランド出身である事も事実であります。ですから **William Willis** が勇敢で大胆であった事は当然の事でありまして、100年も前に日本に参りました事は誠に壮挙といわざるをえません。

#### 医学人としてのその他の資格

**Willis** は1861年、私が今勤めております大使館の前身、英国公使館へ医務

官として江戸へやって参りました。彼の医学的手腕は特に素晴らしいものでありました。エジンバラ大学の学生としても彼はとても幸運で、当時の三人の秀れた外科医が彼の先生でありまして、そのうちの一人はこれまでの最高の外科医であったと申しても過言ではありません。

外科学教授で医学部長の James Syme は、麻酔使用の開拓者であり、産科学教授の James Young Simpson は1846年、エーテル麻酔を導入し、その効用をみとめた英国での最初の人であります。一年後、Simpsonは一般麻酔薬としてクロロホルムを導入しております。Syme の助手の Joseph Listerは1857年“炎症の初期について”という論文を発表しております。腸線による創傷の結紮、薬物使用ガーゼによる新しい型の包帯、無菌の外科、無菌手術室等を導入したのは実に Lister であります。これらは5%石炭酸溶液の撒布によるものであります。Willis は当時のこれらの偉大な医学者達から靈感を得、彼等の医学的技術を日本へもたらしたのであります。

1882年英国へ帰ってから1年後に一流の外科専門医としての資格である英国外科学士院会員 (F. R. C. S.) となりました。彼の死の前年、1893年には予防医学専門医たるべき公衆衛生学位 (D. P. H.) をえました。William Willis は彼の生涯を通じてその知識、経験、資格はもとよりすばらしい医学人であったのであります。

## 日本に於いて

英国公使館で6年間勤務後、1868年 Willis はその職を辞し、日本人のために尽しましたが Willis が官軍、賊軍の別なく治療したのは当時としては少なからぬ驚きでありまして、人間の受難に対する政治的観念は医学の尊さをくずすものである事を私は申し述べたいのであります。Willis はヒポクラテスの医師としての倫理教訓を決して忘れなかったのであります。

平和となって、彼は新築の大きな官立病院を管理し、東京大学医学部の前身の東京医学校の設立に当り一役をかっております。1870年 Willis は西郷隆盛より鹿児島への招へい状を受けとりました。1868年、当時 Willis は31才の若さでしたが、彼はその若さを遙かにこえる豊富な経験を持っておりました。日本政府と鹿児島有力者の信望によって、このすばらしい若者は強い支援をかけたのであります。Willis は今日尚、私共の心に残っている、とても積極的なそして時にはとても困難な12年間を鹿児島で過しました。1882年、日本を去り、そして遂に帰らなかったものであります。

### なぜ日本を去ったのでしょうか

Willis は妻や家族と鹿児島に住んでおり、彼の実績は高く評価され、そして高い給料を取っていたことを私はよろこばしく思います。彼の仕事はとてもみのり多いものでありました。その頃の多くの彼の生徒はすばらしく有能であり、将来の大成はもっともな事であったと申せましょう。又、西郷隆盛らに対して強く心酔していたにちがいありませんが、しかし、1882年 Willis は去りました。彼についての伝記をものにされる方々は、彼が去った事について色々の理由を見出されるでしょう。しかし、教授経験者の私からみますとき、賢明な先生が退き、生徒がそれに代る時期、その人格そしてその国家観、地方意識の何物かを悟られたに違いありません。1882年までには、Willis は引退すべき時が来たのをはっきり知っていたのです。

### Willis は何故長くとどまったのでしょうか

1862年の9月、横浜の近くで二人の英国人が頰死の重傷をおい、一人が死亡した不幸な事件がおきた事を覚えておられると思います。つづいて1863年8月、7隻からなる英国海軍の艦隊が鹿児島へやって来ました。

艦隊も町も砲撃を受けたのでしたが、しかし、これらのいやな事件から堅い両国の友情が花咲いてきたのであります。多くの人は、鹿児島を桜島のある町というでしょうが、私は鹿児島を日英友好の発祥地と申したいのであります。勿論、William Willis は御当地で幸せな日々を過したのであります。

本日ここにおいでになる William Willis のお孫さん達が、英国が真に誇りといたします尊敬すべき祖父をお持ちになった事を衷心よりおよろこび申し上げる次第です。かかる立派な英国人の祖父をお持ちになる方は世間にそう滅多にないものである事を確信するものであります。

William Willis が英国医学を日本へ導入し、東京で2、3カ月教鞭をとり、将又、鹿児島での業績を残して以来百年が経過しております。私は私共の国と日本の医学の友好が続き、又鹿児島大学医学部が来るべき100年に隆々発展されんことを衷心より祈念してやまない次第であります。

C. R. S. Manders,

C. B. E., M. A., M. Sc., Ph. D., A. K. C.,

F. Inst. P/Phys. Soc.

Counsellor (Scientific)

British Embassy Tokyo 21April, 1968

— (通訳：鹿児島大学病院検査部 助教授 尾 辻 省 悟) —

## 祝 辞

鹿児島県知事 金 丸 三 郎

本日ここに鹿児島西洋医学開講百年記念式典を挙行されるにあたり一言お祝いのことばを申し上げます。日本近代史の出発点となった明治維新から今年はいよいよ満百年をかぞえ、その記念式典がさる6日盛大に行なわれましたことは御承知のとおりであります。

これと時を同じく致しまして明治2年、西郷隆盛、大久保利通等の推挙によりまして英国人医師ウィリアム・ウイリスが薩摩藩の藩医として招かれ、市内小川町に医学校および病院を創設以来百年を経て歴史的にも意義深い本日の式典を迎えられましたことはまことに御同慶にたえません。

また、本日は鹿児島大学医学部開学25周年記念式典もあわせて行なわれましたが、その開学の根元となりましたのは、百年前のこの西洋医学開講を嚆矢とするわけであります。

その後、幾多の変遷を経ながらも、その精神は斯界の先人たちにうけつがれ、病院は市立病院、県立病院、現在の大学附属病院と発展してまいりました。

また、医学校も県立医学専門学校、県立医科大学、県立大学医学部となり、現在国立鹿児島大学医学部として発展してまいりました。

社会の進展とともに、医療の発展はまことに目ざましいものがあります。

本県医学界も南九州一円はもとより遙か沖縄に至るまで医療の中心として離島へき地医療、熱帯医学、風土病等その調査研究に大きな成果と重大な役割を果たしております。

本日のこの記念すべき日を迎えるにあたり、先人の偉大なる業績を顕彰するとともに、その発展のあとを顧みて、今後の本県医学界にあたえられました社会的使命の達成に邁進せられますよう、心から念願いたしましておよろこびのことばといたします。

## 祝 辞

日本医師会長 武 見 太 郎

日本医師会を代表いたしまして鹿児島大学医学部創立25周年をお祝い申し上げますと同時に、この機会にウィリアム・ウイリス先生の開講百年を祝するということは単に、鹿児島大学医学部あるいは鹿児島県だけの名誉でなく、これは日本の医学界にとって大変うれしいことであり、記念すべきことであると考えます。

おおよそ学術交流は国と国との関係を越えて個人の優れた学者によっておこなわれるということは、又、この二つの民族の英智を地球上で結合する偉大な役割をはたすということでもあります。この様な大きな実験を評価するということはおおよそ百年位の年間を費さなければ評価はできないと私は信じております。近頃はインスタント時代でございまして、時をかけてじっくり評価することは忘れられた様であります。文化の所産と申しますものは短期間には決定できないことが多いと思います。この様なことに注目されました鹿児島大学医学部の現在の指導者の方々の、この態度について私は大変心打たれるものがございします。

ウィリアム・ウイリス先生を招いた大久保利通は私の家内からいうと、曾祖父にあたる人ですが、私は鹿児島という所はこの様な学問が非常な大きな力で栄える素地を持っていたところであると思います。島津斉彬公の、いろんなお話を書いた文章をみますと、偉大なる科学政治家であったことはまちがいございません。単なる学者ではありません、勿論、殿様であります。しかし科学をとり入れて学問を振興し、そして民政の安定と地域の開発に寄与する点におきましては今日の政府の学ぶべきものが、はなはだ大いと思います。戦争中に岩波文庫の中に「島津斉彬言行録」が加えられました。中谷宇吉郎博士が解説を書いておられますが、つくづく感嘆いたしましたことは、本当に科学する心というものを実践したのは、日本においては島津斉彬一人であるということの中谷君は述懐しておりました。この本が岩波文庫に加えられたことによりまして戦争中の暗い生活の中で私共は一条の明るみを、戦後のために喜んだのであります。

今日ウィリアム・ウイリス先生を懐古いたしますことは新しい地球上での日本の医学が、どの方向にむかうかということについても一つの意義づけがなき

れると思います。昨年ロンドンにおきまして“世界人類の健康”というシンポジウムが **Ciba Foundation** で行なわれました。この記録を読みますと、もう一つの国の病気や健康の問題は、全人類の健康という問題から考えらるべき問題であるという考え方に世界がたっております。この機会に私共、医学を勉強いたしますものが国際協力をいたしますについての基本的な考え方が討議されておきまして、私は、新しい学術協力の体制ができる段階だと思います。この様な時に百年前に、これだけ偉大な業績を残されました人を懐古いたしますことは新しい世界が出発しようとする時だけに大きな意義があると考えます。

日本医師会を代表いたしましてこの機会に私は大きな希望と輝きとを日本医学と英国医学の上に期待できることを大変喜びとするものであります。簡単であります但しこれをもちましてお祝いの言葉にかえます。

## 祝 辞

日本医史学会長 小 川 鼎 三

百年前の今月今日、それは慶応4年4月21日、どういうことがあったかということをお昨日東京を去る前にちょっと調べてみました。4月21日は東征第一総督、有栖川宮熾仁親王が江戸城に入城したのでございます。勿論、薩摩の将兵を中心に官軍がそういう風に正式に江戸城に入った日であります。その10日前、4月11日に江戸城は開城しておりましたので、徳川方はその時は、すでに出ておったわけで無血入城でありました。日本の歴史に非常に大きな転機の日であったということが出来ます。さっき慶応4年と申しましたが、この年は9月8日改元されて明治元年となるわけでありまして。この年に日本の医学の歴史はイギリス人の医者ウィリアム・ウイリスの存在と活躍が非常に光ってうかびましたのであります。ウイリスはそれより7年程前、文久元年から日本にきておったわけでありまして。しかしこの慶応4年のはじめに英国公使パークスの推薦で京都に入りました。薩摩の軍隊の臨時病院において負傷者の治療をいたしました。それが彼の存在の非常に大きくなります最初のことであります。東征軍が江戸を占領しました後で横浜に軍人病院が作られましたがその時も院長はウイリスでございましたので、そのことは軍人病院のくわしい日記が現在東大に残っておりますので読むことが出来ます。軍人病院が東京に移されて下谷和泉橋通りの大病院、この大病院というのは固有名詞でございます。明治2年には、この名前がなくなりました。明治2年には医学校兼病院となりまして、これが今の東大病院の前身でございます。しかしそのウイリスはさらに東北の戦乱のために越後から会津の方に向かって進みまして従軍しまして大きな功績をたてたのでございます。かくして維新政府にウイリスのもつ勢力は非常に大きくございました。そのままの情勢で進みましてならば日本の医学は英国系となるのは必至であったわけでありまして。ところが明治2年のはじめに佐賀藩の相良知安、福井藩の岩佐純が医学取調御用掛になりまして、兩人、特に相良が強く主張致しまして、政府を動かしましてドイツ医学の採用が決定致しまして、ウイリスは西郷隆盛等のはからいで鹿児島に迎えられました。2年の末から、ここで医学校と病院を開いたわけでありまして。その後の日本ではドイツ一辺倒の医学が全国で行なわれますうちに鹿児島のみイギリス流の医学教育がウイリスのもとでなされたということは特記するにたるのであります。又ウイリスの

門下から日本の海軍軍医の主な人物が生まれました。又慈恵会医科大学の創始者が出たわけでもございます。今日鹿児島西洋医学百年の記念祭に列しまして右の歴史をかえりみて感慨無量であります。今日、鹿児島大学医学部は開学25年の記念式典をあげましたが、今後の発展でますます特色ある大学になって頂きたいと思うのであります。明治のはじまりの、その特色をそのまま生かすというわけでは勿論ございません。全国に46の医科大学が現在ございますが皆同じようなものであったら私はその意義が少ないと思います。鹿児島の歴史を考えましても特色のある大学になって頂きたいと切に願うのであります。これをもって日本医史学会の祝辞といたします。

## 外国よりの祝電

### CONGRATULATORY MESSAGES

The President, Fellows and Members of the Royal College of Physicians and Surgeons of Glasgow send warmest greetings on the occasion of the centenary celebrations at Kagoshima University of the introduction of British Medicine into Japan by Dr. William Willis.

5th April, 1968

J. H. Hutchison

President,

Royal College of Physicians & Surgeons of Glasgow,  
242 St. Vincent Street, Glasgow, C. 2.

---

University of Edinburgh and Faculty of Medicine extend to Kagoshima University their cordial greetings. Culture which originally came from the East to the Western World was fostered in centres of medical knowledge in Europe and disseminated throughout the world.

Edinburgh is proud that one of her graduates William Willis was privileged 100 years ago to introduce British medicine to Japan and is glad to send this message for the centenary.

M. M. Swann-Vice Chancellor

8th April, 1968

and K. W. Donald-Dean of Medicine  
University of Edinburgh

---

The President and Council of the Royal College of Surgeons in Ireland send greetings on behalf of the Fellows in Surgery, the Fellows of the Faculties of Anaesthetics, Radiologists and Dentistry and of the Licentiates of the College, practising throughout the world, to Kagoshima University now celebrating the centenary of the introduction of British Medicine into Japan. May these celebrations mark the further integration of the practitioners of medicine in the international brotherhood of science.

H. O' Flanagan

5th April, 1968

Registrar

Royal College of Surgeons in Ireland,  
St. Stephen's Green, Dublin, 2.

---

The President and Fellows of the Royal College of Physicians are delighted to hear of your celebrations of the centenary of the introduction of British Medicine into Japan and look forward to ever increasing association of our country with yours in all fields of Medicine.

9th April, 1968

Sir Max Rosenheim, K. B. E., M. D.,  
President,  
Royal College of Physicians,  
11 St. Andrew's Place,  
Regent's Park, London, N. W. 1.

---

On behalf of the Royal College of Surgeons of Edinburgh which received the Royal Assent in 1505, I write to send our cordial greetings and good wishes to the Kagoshima University at its celebrations on 21st April, 1968.

We recall that Dr. William Willis graduated M. D., in Edinburgh in 1859 and was honoured in Japan by the order of the Imperial Brocade. That the pioneer of modern medicine is honoured in Japan today gives our College in Edinburgh great pleasure.

2nd April, 1968

J. R. Cameron  
President,  
Royal College of Surgeons,  
Edinburgh, 8.

---

12th April, 1968.

A Message to the University of Kagoshima  
from the President of the Royal College of Physicians  
of Edinburgh.

On my return from a visit to the United States of America I have learned with great interest of the way in which Kagoshima University

is proposing to celebrate the centenary of the introduction by William Willis of British medicine into Japan.

In Edinburgh we take some pride in the fact that William Wills was a Doctor of Medicine of our University. He became a Medical Officer to the British Legation in Japan in 1861 and was, I believe, seconded to the services of the Japanese Government in 1868. It was whilst in the Government's service that he established a hospital and medical school at Kagoshima. In recognition of these services the Mikado greatly honoured William Willis by presenting him with the Imperial Brocades, and I am informed that Willis's old students erected a statue in his memory in the public park of Kagoshima.

It is to the Royal College of Physicians of Edinburgh a source of great satisfaction that one hundred years later the name of William Willis should again be honoured by the University of Kagoshima in their centenary celebrations. In the name of this College I send our sincere felicitations on this very happy event.

Christopher Clayson  
President

Professor Sir Hedley Atkins,  
K. B. E., D. M., M. Ch., P. R. C. S.

1st April, 1968

Your Excellency,

I have learned with great interest of the celebrations that are to be held by Kagoshima University on April 21st to commemorate the centenary of the introduction of British medicine into Japan by Dr. William Willis.

Both personally and on behalf of the Council of this College I shall be grateful if you will convey to our medical colleagues in Japan our greetings on this occasion and our hope that the friendly relations existing between us and the co-operation that exists on all medical matters will continue for many years to come.

Yours sincerely,

Hedly Atkins

President

His Excellency The Ambassador,  
British Embassy,  
Tokio, Japan.

---

The President and Fellows of the Royal College of Physicians of Ireland send felicitations and congratulations to the Kagoshima University on the occasion of their celebration of the Centenary of the introduction of British Medicine into Japan by Doctor William Willis.

9th April, 1968

Charles Dickson,  
M. D., F. R. C. P. I., Registrar  
The Royal College of Physicians of Ireland,  
6 Kildare Street, Dublin 2.

---

御発展めざましき貴医学部の25周年記念日を祝す」メディカル・センターとして大成を祈る。

高 安 慎 一 先 生  
他 19 通

式典来賓並に学内関係者

| Main |            | Guests        |              |
|------|------------|---------------|--------------|
|      | 黄          | 英国大使 代理       | Dr. Manders  |
|      | 大ビン<br>バラク | 同 夫人          | Mrs. Manders |
|      | 大ビン<br>バラク | ウイリス 子孫       | 河 内 麻 利 子    |
|      | 黄          | 同 上           | 宇 利 丞 示      |
|      | ビン<br>ク    | 同 上           | 岩 田 文 子      |
|      | 黄          | 日本医史学々長       | 小 川 鼎 三      |
|      | 黄          | 日本医師会々長       | 武 見 太 郎      |
|      | 黄          | 県医師会々長        | 花 牟 礼 淳 二 郎  |
|      | 黄          | 久留米大学々長       | 遠 城 寺 宗 徳    |
|      | 黄          | 久留米大医学部長      | 中 川 洋        |
|      | 黄          | 文部大臣 代理       | 福 田 得 志      |
|      | 白          | 後援会々長         | 牛 飼 市 助      |
|      | 白          | 同窓会々長         | 鮫 島 耕 一 郎    |
|      | 黄          | 九大医学部長        | 問 田 直 幹      |
|      |            | 九大名誉教授        | 小 野 寺 直 助    |
|      | 黄          | 慈恵会医科大学長      | 樋 口 一 成      |
|      | 黄          | ウイリアム・ウイリス研究家 | 鮫 島 近 二      |
|      | ビン<br>ク    |               | 同 夫 人        |
|      | 黄          | 県衛生部長         | 浜 口 剛 一      |
|      | 黄          | 鹿児島市長         | 末 吉 利 雄      |
|      | 白          | 鹿児島大学長        | 福 田 得 志      |
|      | 白          | 同 医学部長        | 佐 藤 八 郎      |
|      | 白          | 同 病院長         | 宮 崎 淳 弘      |

| 一 般 の 部 |  |             | サ      | 七<br>方<br>黄 | 佐藤幹正             |       |
|---------|--|-------------|--------|-------------|------------------|-------|
| ア       |  | 七<br>方<br>黄 | 精松良徳   | シ           | 〃                | 柴立芳文  |
| イ       |  | 〃           | 石原紫山   |             | 〃                | 島本保   |
|         |  | 〃           | 井元正流   | タ           | 〃                | 田口正門  |
| ウ       |  | 〃           | 宇野亮    |             | 〃                | 田平栄造  |
|         |  | 〃           | 羽野瑛    |             | 〃                | 高野三喜雄 |
|         |  | 〃           | 内田実    |             | 〃                | 高安晃   |
|         |  | 〃           | 内山達四郎  |             | 〃                | 高安慎一  |
|         |  | 〃           | 上床治    | チ           | 〃                | 中馬猪之吉 |
| オ       |  | 〃           | 尾辻達意   | ツ           | 〃                | 政直哉   |
|         |  | 〃           | 大村裕    | テ           | バ<br>ラ<br>黄<br>色 | 寺師三千夫 |
| カ       |  | 〃           | 柿木珍穂   |             |                  | 寺園勝志  |
|         |  | 〃           | 勝目清    | ト           |                  | 藤後惣兵衛 |
|         |  | 〃           | 鎌田政寛   |             |                  | 遠矢泰蔵  |
|         |  | 〃           | 河井時義   |             |                  | 時任寛雄  |
|         |  | 〃           | 河村聴    |             |                  | 富永龍象  |
|         |  | 〃           | 川村弘徳   |             |                  | 豊島文雄  |
|         |  | 〃           | 川村芳秋の孫 |             |                  | 鳥飼明   |
| キ       |  | 〃           | 貴島一郎   | ナ           | バ<br>ラ<br>黄<br>色 | 永田利之  |
| ク       |  | 〃           | 楠元康雄   |             |                  | 長花操   |
| コ       |  | 〃           | 後藤昌義   |             |                  | 中村清   |
|         |  | 〃           | 小吉章    |             |                  | 中村晋也  |
| サ       |  | 〃           | 酒瀬川洋   |             |                  | 永山徳郎  |
|         |  | 〃           | 桜井之一   |             |                  | 縄田千郎  |
|         |  | 〃           | 佐々木武男  | ニ           |                  | 西元英士  |
|         |  | 〃           | 佐多正己   | ノ           |                  | 野坂保次  |

|   |  |          |      |   |  |       |
|---|--|----------|------|---|--|-------|
| ノ |  | 黄色<br>バラ | 野添武二 | ミ |  | 満留正夫  |
| ハ |  |          | 羽牟応輔 |   |  | 水上長吉  |
|   |  |          | 橋口茂  |   |  | 三宅久夫  |
|   |  |          | 島中秀隆 |   |  | 宮田弘司  |
|   |  |          | 浜口剛一 |   |  | 宮之原正男 |
|   |  |          | 浜島寅夫 |   |  | 宮崎一郎  |
|   |  |          | 浜平勇吉 | ヤ |  | 矢野シマ  |
|   |  |          | 原田純隆 |   |  | 山口勝哉  |
| ヒ |  |          | 脇岡豊次 | ロ |  | 六反田藤吉 |
|   |  |          | 平島清彦 | ワ |  | 和田躬義  |
|   |  |          | 平瀬実武 |   |  | 脇田稔   |
|   |  |          | 広木彦吉 |   |  |       |
| ホ |  |          | 堀岡正義 |   |  |       |
| マ |  |          | 曲田益雄 |   |  |       |
|   |  |          | 牧田健志 |   |  |       |
|   |  |          | 榊屋富一 |   |  |       |
|   |  |          | 町野碩夫 |   |  |       |
|   |  |          | 松村吉之 |   |  |       |
|   |  |          | 松元壮雄 |   |  |       |
|   |  |          | 松元信衛 |   |  |       |
|   |  |          | 松山清  |   |  |       |
|   |  |          | 松山閑  |   |  |       |
|   |  |          | 前田耕志 |   |  |       |
|   |  |          | 前田末男 |   |  |       |
| ミ |  |          | 三上芳雄 |   |  |       |
|   |  |          | 三谷靖  |   |  |       |

| 学 内 の 部 |  |   | タ         |   | 丹 下 信 雄 |           |
|---------|--|---|-----------|---|---------|-----------|
| ア       |  | 白 | 秋 田 八 年   | ツ |         | 土 谷 久 雄   |
|         |  | 黄 | 有 村 一 男   | テ | 白       | 寺 脇 保     |
| イ       |  | 〃 | 石 神 重 男   | ナ |         | 中 村 純 夫   |
| ウ       |  | 〃 | 宇田川 畏 三   | ノ |         | 野 田 哲 徳   |
|         |  | 白 | 内 山 八 郎   | ハ | 白       | 橋 村 三 郎   |
|         |  |   | 内 山 政 江   | ヒ | 白       | 平 野 清 寿   |
| エ       |  | 白 | 遠城寺 宗 知   |   |         | 兵 藤 勇 一   |
| オ       |  | 白 | 大 保 不 二 夫 | フ | 白       | 福 島 英 雄   |
|         |  | 白 | 大 森 浅 吉   | マ |         | 松 村 二 郎   |
|         |  | 白 | 岡 元 健 一 郎 |   | 白       | 松 本 保 久   |
|         |  |   | 尾 辻 義 人   | ミ | 白       | 皆 見 紀 久 男 |
| カ       |  |   | 金 久 卓 也   |   |         | 宮 沢 正 夫   |
|         |  |   | 上国料 忍     | モ | 白       | 森 一 郎     |
|         |  | 白 | 川 路 清 高   | ヤ |         | 山 根 銀 五 郎 |
| キ       |  | 白 | 北 原 経 太   |   |         | 山 元 則 夫   |
|         |  |   | 木之下 正 雄   | ユ | 白       | 袖 木 一 雄   |
| ク       |  | 白 | 久 保 隆 一   | ワ | 白       | 脇 阪 一 郎   |
| コ       |  | 白 | 小 島 喜 久 男 |   |         | 渡 辺 一     |
| サ       |  | 白 | 佐 藤 堅     |   |         | 清 水 竜 夫   |
|         |  |   | 齐 藤 勝 郎   |   |         | 鮫 島 吉 治   |
|         |  |   | 笹 平 重 雄   |   |         | 池 田 芳 男   |
| シ       |  |   | 清 水 龍 夫   |   |         | 溝 口 達 雄   |
|         |  | 白 | 塩 田 重 利   |   |         | 福 永 辰 雄   |
|         |  | 白 | 城 哲 男     |   |         | 上 温 湯 国 男 |
| タ       |  |   | 田 代 滋 穂   |   |         | 米 沢 光 夫   |
|         |  |   | 田 中 剛     |   |         | 益 満 三 干 雄 |
|         |  |   | 田 辺 正 二   |   |         | 厚 地 芳 高   |

# 祝 賀 会 次 第

4月21日 午後1時—3時

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 1. 開 会 の 辞    | 尾 辻 省 悟         |
| 1. 挨拶         | 佐 藤 八 郎         |
| 1. 薩摩琵琶演奏「城山」 | 尾 辻 達 志         |
| 1. 乾 杯        | 桜 井 之 一         |
| 1. テーブルスピーチ   | 1. 樋 口 一 成      |
|               | 2. C.R.S. マンダース |
|               | 3. 遠城寺 宗 徳      |
|               | 4. 牛 飼 市 助      |
|               | 5. 宇 利 丞 示      |
| 1. 萬 才 三 唱    | 武 見 太 郎         |
| 1. 閉 会 の 辞    | 尾 辻 省 悟         |

付. 記念式当日関連記事

(W. Willis に関するもの)

(The Japan Times, April 22, 1968 P. 12)

Japanalia Past and Present

By Lewis Bush

Japan-British Medical Centenary (1)

On Sunday, April 21, there was a celebration at Kagoshima University's Faculty of Medicine, to commemorate the introduction of British medicine to Japan, the opening of the government hospital at Edo, and in tribute to Dr. William Willis by whose efforts the medical school at Kagoshima was developed to become a department of its university.

Born in 1837 at Enniskillen, Northern Ireland, Dr. Willis studied at the University of Edinburgh and, after receiving his degree of M. D., was for two years house physician at the famous Middlesex Hospital London, during which he became a member of the Royal College of Physicians.

In 1862 he arrived in Japan to take up his appointment as medical officer at the British Legation at Edo in which post and as vice consul he served until the early part of 1868, during which "he had many signal opportunities of rendering useful service to the foreign community and assisted his Government in maintaining friendly relations with the Japanese."

It was, therefore, because of his sterling qualities as a physician and surgeon as well as his ability to get along well with the Japanese that, on the advice of his minister, Sir Harry S. Parkes, who was intensively interested in medicine and public hygiene, Willis resigned his post and took service with the Japanese Government.

Shortly afterward the civil war between the Government force and those supporting restoration of Imperial rule broke out, when Willis' skill and humanity was soon recognized by both sides. For he demonstrated great skill in tending the wounded, especially in amputations,

introduced aseptic surgery for the first time in Japan, and the ligation of blood vessels to stanch loss of blood. Furthermore, he caused considerable surprise by tending the wounded of both sides in conformity with the Hippocratic oath under which he practiced as a doctor.

With the return of peace, Dr. Willis, in recognition of his service in the war, was given charge of a large new government hospital in Edo (Tokyo) where he made great contributions to the establishment of a Government medical school. With the dawn of Meiji Era the Japanese engaged French advisers for the Army, British for the navy, and for medicine invited the assistance of doctors and surgeons from Germany, a natural preference perhaps in view of the fact that practically all Japanese knowledge of Western medicine had stemmed from what they had learned from German medical works obtained through the Dutch during the long period of national isolation, and the teachings of such learned doctors as Kaempfer and von Siebold who had served in Japan with the Holland East India Company.

In these circumstances Dr. Willis found his position untenable, and it was at the invitation of Saigo Takamori and other leading figures in Satsuma, that he accepted their offer to open and direct a medical school at Kagoshima, and took up his post in the early part of 1870.

Japanalia Past and Present

(The Japan Times, April 24, 1968 P. 12.)

By Lewis Bush

Japan-British Medical Centenary (2)

Dr. William Willis spent 12 highly productive years at Kagoshima; he opened the Western Medical School, now part of the university, set up a hospital and became its director. A man of boundless energy, he spent his mornings in the medical school and the afternoons in the hospital and, imbued with the importance of preventive medicine, advised upon and became "actively involved in the layout and construction of water and sewerage system in the Kagoshima area."

Kagoshima's Western Medical School achieved great fame and flourished under Willis' teaching, the curriculum also included mathematics, English grammar and analysis, and among its many distinguished alumni of its early days was Kenkan Takagi, later baron, surgeon-admiral in the Imperial Navy, and founder of Jikeikai Medical College in Tokyo.

It was during this period that Willis married a Japanese lady by whom he had a son, Albert.

When Gen. Saigo was in trouble with the Government over its policy towards Korea and when the Seinan Insurrection broke out in 1877 which culminated in his death at Shiroyama, Kagoshima, Willis, out of loyalty and humanitarianism, offered to join Saigo's army as medical officer. But it was typical of the great Saigo not to involve the British doctor and he gratefully declined Willis' offer and recommended that he leave Japan.

Dr. Willis left Japan with his son Albert in 1882, and after two years' practice in Britain, during which he became a fellow of the Royal College of Surgeons, went to Bangkok as physician to Her Britannic Majesty's Embassy there where he served for seven years with much distinction. Returning to Britain in 1892 he practiced with his brother in Wales and a year before his death obtained the qualification D. P. H.,

as a specialist in preventive medicine.

For his services to Japan the Emperor Meiji presented Willis with the Imperial Brocade, the first to be conferred upon a European and a year before his death in 1893 a statue of him was erected in front of the medical school at Kagoshima subscribed for mainly by his former students.

Albert Willis went to Australia but, after some years returned to Japan where he met his mother who had remarried, became a teacher in Nara and was naturalized as a Japanese.

Dr. Willis' memory is treasured by many Japanese, and especially in Kagoshima, and on April 21 at Kagoshima University among those present to honor him and mark the introduction of British medicine were his three grandchildren, Dr. Teizo Ogawa, president of the Japan Medical Association, Dr. Higuchi, grand son of Baron Takagi, and president of Jikei Medical College, Dr. Chikaji Samejima; while Dr. C. R. S. Manders C. B. E., scientific counsellor of the British Embassy in Tokyo, represented the British ambassador and the British medical profession.

## あ と が き

鹿児島大学医学部25年誌の編集を委嘱されてから、いつのまにかずるずると1年近くなってしまいました。

編集にあたっては記録的歴年的な形態と、寝ころんで読める物語りの気楽さを兼ねたものと考えましたが、出来上ったものはどっちつかずになったようです。

記録の収集不足など御不満も多い事と存じますが御寛容の程を御願いたします。

多くの方々の御協力や御投稿に心から感謝いたします。

昭和43年12月26日

編集委員長 大 保 不二夫

編 集 委 員 北 原 経 太

久 保 隆 一

小 島 喜久男

佐 藤 堅

城 哲 男

昭和44年9月10日 発行

鹿 児 島 大 学 医 学 部 二 十 五 年 史

発 行 者 鹿 児 島 大 学 医 学 部  
鹿 児 島 市 城 山 町 7 番 8 2 号 (〒892)

印 刷 所 福 岡 市 渡 辺 通 り 2 丁 目 電 気 ビ ル  
凸 版 印 刷 株 式 会 社 西 日 本 事 業 部